

# 心を閉ざした少年と少女

お風呂場の蓋

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、ある少年は心を閉ざした。

そして別の世界では、ある少女が心を閉ざしていた。

そして少年は幻想郷に飛ばされてしまう。

そして心を閉ざした二人は幻想郷で巡り会う。

そんな似た者同士が幻想郷で暮らしていく物語です。

さあ、果たして2人にどんなことが起きるのでしょうか？

※作者は気まぐれで投稿しますが出来るだけ早めに投稿はしていこうと思います。初めて書くので誤字や脱字などもあると思いますが、暖かい目で見守って下さい。

こいし目線のアナザーストーリーはこちら

<https://syosetu.org/novel/251438/>

# 目次

## プロローグ

### プロローグ

## 第1章 幻想郷で巡り会う

### 第1話 ようこそ幻想郷へ

### 第2話 地底の世界へ

### 第3話 ようこそ地霊殿へ

### 第4話 地霊殿の皆の為に

### 第5話 さて仕事に行きますか

80

### 第6話 異変を止めに

### 第7話 姉妹の絆と新たな力

### 第8話 自分の力とは

1

5

12

27

48

111

138

165

## 第9話 地霊殿への帰還

## 第10話 依頼と思い

## 第11話 敗北からの思い そして、

## 言ってしまった言葉

## 第12話 必要なもの

## 第13話 開く心

## 第2章 幻想郷での自分

## 第14話 たまには休みでも

## 第15話 夜見は変わり者かも

378

## 第16話 トラウマと嘘

## 第17話 行方不明者

## 第18話 紅魔館のかくれんぼ

193

226

256

288

319

347

412

444

412

444

412

444

412

第26話	ライブにイベントは付き物	644	第35話	異変解決祝いの宴会	
第25話	ライブ前の人里		第3章	少し変わった日々	865
618			第34話	幻想郷に来た理由	842
第24話	誰とライブに行こう？	595	第33話	本当のちから	822
			第32話	副産物	798
第23話	3人の姉妹とライブの約束	574	第31話	幻想郷での自分の存在とは	775
第22話	異常な体質	548	第30話	刃が交わりし決着	750
い？			第29話	半人半霊の少女剣士	727
第21話	苦しい時には誰が1番苦し	472	第28話	未だに終わらぬ冬	700
524			第27話	寂しがり屋な妖怪	673
第20話	地霊殿に帰る筈なのに		第19話	人里にて	

	第 3 6 話	刀の扱い方は自分で	889
	第 3 7 話	剣術の達人と地霊殿の家計	915
	第 3 8 話	魔法の練習 ー基礎編ー	940
	第 3 9 話	魔法の練習 ー実践編ー	964
	と:		
	第 4 0 話	甘い物と2度目の宴会	988
	第 4 1 話	起きていたもう1つの異変	1039
	第 4 2 話	追跡と正体	1060
	第 4 3 話	GAME START	1080
	第 4 4 話	STAGE 2 START	1103
	第 4 5 話	LAST TIME	1126
	第 4 6 話	重罪の償いを	1149
	第 4 章	夜空に感じるもの	
	第 4 7 話	不思議と感じる懐かしさ	1176
	第 4 8 話	確かに言った	1197
	第 4 9 話	あの時と同じ気持ち	

か  
? 1228

第50話

奥底にあるもの

第51話

夜散歩

第52話

明けない夜は本当に無いの

1307 12831256





プロローグ

プロローグ

ある日の夕方、ある少年は高校から家に帰っていると携帯が鳴り出した。

? 「ん?なんだ?メールか?」

少年は制服から携帯を取り出すとメールが来ていた。

? 「誰からだ?ああ、あいつからか」

メールは少年の彼女からだった。

そしてメールを開くとこう書かれていた。

「別れて下さい」

? 「... は?いや、待て、なんだ?どう言うことだ?」

少年は急いで彼女に電話をかける。

p r r r p r r r ピッ

? 「あ、も、もしもし!」

? 「ん?何?どうしたの?」

? 「さっきのメール、どういうことだよ!」

? 「ん? どういうって、別れてってことだけど?」

? 「いや、別れてって何でだよ!」

理由を聞くが彼女は意外な返事した。

? 「ん? 別にいいじゃん」

? 「いや、おかしいだろ!?! ちゃんと説明してくれよ!」

もう1度理由を聞くところ返事をした。

? 「いや、そういうとこだよ」

? 「... は?」

? 「え? 何? 理解できないの? そういうしつこいのが嫌なんだって」

? 「は? 何言ってるんだよ? 別にしつこくしてないだろ!」

実際に少年は彼女にしつこい事はしていないが彼女はまた、こう返事をした。

? 「いや、私がしつこいって思ったんだからしつこいってことでしょ?」

? 「いや、そんなの屁理屈だろ!」

ブツ ツー ツー

? 「は? おい! もしもし!」

彼女は話を聞かずに一方的に電話を切った。

? 「... はあ? まじ... かよ...」

少年は彼女に振られた、それはとてもショックだったからか

バキッ ガチャン

? 「… ん？」

何か聞こえたが周りに他の人がいるわけでもなく、家から何か壊れた音がした様子でもなかった。

そして、少年は自分の異変に気付いた。

? 「… なんで … 悲しくないんだ? … あんなに好きだったのに?」

少年はなぜか悲しいという感情が沸かなかった。

むしろ、なにも感じなかった。

? 「… なんだろ 結局そんな悲しくならないもんなのか? 振られるのって」

そして少年は携帯をしまつて家に帰った。

ガチャッ

? 「… ただいま」

家に帰ったが誰も家にいなかった。

少年は幼い頃に両親を亡くし一人暮らしで、親戚からお金を仕送りしてもらって生活をしてきた。

? 「… やっぱり返事が返って来ないって悲し… あれ? なんでだろ?」

少年は家に帰っても一人だったからいつも悲しい思いをしていたが、今日はそんな思いをしなかった。

？「やつぱり、振られたのがショックだったのかなあ？

今日の晩御飯は……いいか、明日休みだし」

少年は疲れたのか着替えもせず、そのままベッドに入っていた。

？「はあ、明日は何しよう」

そして少年は静かに眠った。

少年はこれがこの世界での最後の思い出になるとも知らずに。

# 第1章 幻想郷で巡り会う 第1話 ようこそ幻想郷へ

少年はある音で目を覚ました。

それは風をきるような音だった。

? (ん? んんっ? なんだ?)

そして少年は不思議な感覚を感じた。

それは浮いてるような感覚だった。

少年は眠い目を開けると、ある光景が見えた。

それは青空だった。

? (ん? あれ? なんぞだ?)

少年の脳は少しずつ覚醒して今、何が起きているかを理解した。

自分は今、空から落ちていることに。

? 「え、えええええい?! い、いや、待て!?! な、何が起きてるんだあああああ!?!」

そして少年は自分がどこに落ちているかを確認するために器用に体を返して、地面の方を見てみると竹林が見えた。

? (いや、いや、これは夢か? でもこんなリアルな感覚あるのか?)

くそ! こんなこと考えてる場合じゃねえ! どうしろってんだよ!

そして少年はある考えを思い付いたが

? (いや、無理か? いや、この方法しかねえ!)

少年は体を傾け、出来るだけ前に進み始めた。

そして1本の竹が自分に近づいてくるが。

? (今!)

そして少年は竹を手で掴む。

竹はある程度曲がるので、それを利用して無事に降りようと考えたのだ。

? 「うおおおおお!!」

竹から離れないように手に力を込めるが

バキッ

? 「なっ、しまった!」

竹が折れてしまい少年はそのまま背中から地面に叩きつけられた。

ドオオオン!!

? 「がはっ!」

そして少年は意識が薄れていき、そのまま意識を手離なした。

? 「ん? んん?」

少年は目を覚ました。

しかし、空が見える訳ではなく、天井が見えた。

? (ここ、ここは?)

少年は上体を起こし周りを見てみるとそこは和室で襖やタンスがあった。

少年は和室の真ん中の布団で寝ていたようだ。

すると目の前の襖がガラツと開いた。

するとそこには女性が立っていた。

その女性は、白髪ロングヘアで服は赤と青が半分ずつ真ん中で別れていてロングスカートの方は赤と青の生地が逆になっていた。そして頭には赤い十字マークが入った青いカチューシャの様なものをつけていた。

? 「あら、もう目を覚ましたのね。待ってて、いま薬を持ってくるから」

そんなことを言つてその女性はどこかへ行つてしまった。

? (…なんだ? あの…にん…げん)

少年は急に目が光のないような目になり始めた。

そして少年は立ち上がると自分は病院の患者の様な格好をしていることに気付いた。  
? (…俺の…制服はどこだ?)

少年は自分の制服を探すために襖を開け廊下に出た。  
体に少し痛みを感じたが気にする程度ではなかった。

そしてしらみ潰しに襖を開けて自分の制服を探す。

? (ここは、ない ここも、違うか ここは、ん?あれか?)

少年は約10枚目の襖を開けたら自分の制服と黒い靴が机の上にあるのを見つけた。

その机の上にはなにやら理科の実験道具の様な道具が乱雑に置いてあり、机の近くに  
あった大きな白い棚には大量の液体が入った小瓶があった。

1つの小瓶を手にとるとラベルには鎮痛剤と書かれていた。

? (… 何個かあったほうが良さそうだな)

少年はすぐに制服に着替え、鎮痛剤と書かれていた小瓶を何個かポケットに入れ、黒  
い靴を手に取り、その場を後にした。

? (とりあえず、ここから出るか)

少年は来た道を戻り部屋から出た方向の反対の襖を開けると竹林が見えた。

そして少年は靴を履き、竹林を中へと入って行った。

しばらく歩いていると森の様な場所になり始めた。



そのまま歩いていけるとぼろぼろの服を着て口元に布を巻き、鉈の様なものを持った男が2人こつちへ歩いてきた。

男1「おい、そのガキ

自分の持つてるもんここに置いてけや」

?「…」

少年は男2人を無視して男2人の間を通ろうとしたが

男2「おい、聞いてんのか?」

ガシツと肩を掴まれた。

すると少年は素早く回りながら肩を掴んだ男の顔面に肘打ちを入れた。

メキツ

男2「がはっ」

肘打ちを入れた男はすぐに倒れそのまま気絶した。

男1「なっ、てめえ!」

もう1人の男は鉈を振り上げたが鉈を振り上げるとほぼ同時に少年は男の顎を蹴りあげた。

バキツ

男1「がっはあ」

もう一人の男もすぐに気絶してしまった。

？「..」

少年は男の持っていた鉈を手に持ってそのまま進んで行った。

すると、さっきの男達が昨日いた様子がある焚き火の跡を見つけた。その焚き火の跡の近くには1×0.4×0.5mほどの木製の綺麗な箱があった。

少年はその箱の蓋を開けようとしたが動かなかった。

すると少年は鉈を振り上げ箱に目掛けて一気に振り下ろした。

バキィツ

箱の蓋は粉々になり、箱の中には全長80cmほどの黒い刀と目の所だけに穴があいた黒いお面が入っていた。刀は持ち手が15cmほどあるため刃の部分は65cmほどしかなかった。

少年はその刀を持ち鞘から刀を出してみた。

持ち手や鞘はもちろん黒であったが刃の部分も真っ黒であった。

？「..」

少年は刀を鞘に戻し、鉈を捨て刀を腰のベルトに差し、仮面を被り、また、森の中を進んで行った。

だが、すぐに森から抜けてしまい、霧のかかった湖に出た。湖の奥にはなにやら赤い

大きな何かがあうつすらと見えた。

? (… あれは? … なんだ?)

もう一度よく見ようとするが霧が濃くて見えなくなってしまった。すると少年はまた、湖の周りの森へと入って行った。

しばらく歩いていると地面に直径3 mほどの大きな穴が空いていた。

? 「…」

すると少年は迷わずその穴へと入って行った。

だが、この選択がある少女と巡り会う結果になった。

… ある所では

? 「あれ? 無い、無い! 私の試作品の薬が無い! あと鎮痛剤もかなり無くなってる。男の子もいなくなってるし、まさかあの子が盗ってつたの!?!」

## 第2話 地底の世界へ

少年は暗い地下へどんどん進んでいく。

しかし、自分の体の痛みがだんだん増してきた。

? (… くそ、鎮痛剤を使うか)

少年はポケットから小瓶を取り出しそれを一気に飲み干す。だが、その薬はとてつもなく不味かった。

? (… 不味いな、これ)

少年は自分の持つている小瓶のラベルを見ると、こう書かれていた。

〔試作品〕

… どうやら、自分は鎮痛剤と間違えて試作品の薬を持っていたようだ。

だが特に体に異変は起こらなかつたため、特に気にせず、改めて鎮痛剤を飲んだ。鎮痛剤は少し苦い程度だった。

奥へ進んでいくと暗さが増し、周りが見えなくなっていく。そんなとき、ある異変に気付いた。

? (… ? ここ、蜘蛛が多いな)

そう、蜘蛛が大量にいたのだ。しかも見たこともないような模様をしていて、しかもかなり大きく70cmほどある為、余計な不気味差を出していた。

ベチャツ

ん？どうやら、足元に蜘蛛の巣があったらしいが、その大きさは明らかにおかしかった。その大きさは人を軽々くつ付けられるほど大きかった。

とりあえず足に糸がくっつくから先ほどの刀で斬ろうとすると声が聞こえた。

？「ここは地底、人間が踏み入る場所ではない

引き返せ」

声が反響して、声の主がどこにいるかわからないが少年はこう答えた。

？「・・・断る」

少年はそう答えると、さっきの声がもう一度聞こえた。

？「そうか、仕方がない、ならお前はここで死ぬ運命だ 恨むなら断った自分を恨め」すると、周りの蜘蛛が一齐に自分の方へ向かって来た。

だが、自分にはちように武器があった。

ザクツ

少年はまず1番前にいた蜘蛛に刀を刺した。すると蜘蛛は赤い血のような液体を出して死んだ。切れ味は申し分ないものだった。

すぐに他の蜘蛛も向かって来るが、

ザクツ ブシュツ ザクツ

少年は蜘蛛を刀で斬ったり刺したりして蜘蛛を倒していった。蜘蛛はかなり大きい為、刀が短くても十分に届いた。そして、しばらく倒していると蜘蛛はもうこつちへは向かつて来ないでどこかへ行つてしまった。

目が慣れてきたのか自分の周りには大量の蜘蛛の死骸があつた。そしてまた、あの声が聞こえてきた。

？「あんた、よくもこんなに殺したもんだなあ」

声が少年の後ろから声が聞こえた為、少年は足元の蜘蛛の糸を斬つて後ろを見ると、自分と同じ年ぐらいの少女がいた。

その少女は、金髪に黒いリボンを付けたポニーテールで黒い半袖の服の上に下がスカート形の形をしたオーバーオールのようなもの着ていた。

そしてその少女は少年に訪ねる。

？「あんた、なんでこんなに殺してまでこの先へ進みたいんだ？」

だが、少年は何も答えなかつた。

？「なんだい？質問に答えてくれたっていいじゃないか」

すると少年は

? 「… さっきの蜘蛛はお前が?」

と質問をした。

? 「私の質問には答えないのか、はあ

まあ、別にいいけど そうさ、さっきの蜘蛛は私が命令したんだよ、これでも私は土蜘蛛だからね」

そう少女は答えると少年はこう聞いた。

? 「… 土蜘蛛? … 何言ってるんだお前」

? 「ん? 何言ってるってそのままの意味さ

私は土蜘蛛の黒谷ヤマメくろたにっていうんだ」

すると、少年は静かに聞いた。

? 「… 人間じゃ、ないのか?」

ヤマメ 「そうだね、ぱっと見は人間だけどね」

? 「… そうなのか」

ヤマメ 「ところであんたの名前はなんて言うんだい?」

ヤマメは少年に名前を聞くが。

? 「… 別に… なんとでも」

少年は答えなかった。

ヤマメ「ふくん、何か答えたくない事情でも？」

ヤマメは事情でもあるのか聞いてみたが。

？「…」

ヤマメ「だんまりかい」

少年は黙ってしまった。

ヤマメ「まあいいさ、先に進みたければ進んでもいいよ」

少年は少し不思議そうに聞く。

？「… いいのか、こんなに殺したんだぞ」

ヤマメ「まあ、あんたならすぐには死ななそうだしね」

？「…」

そして少年はヤマメの横を通り、さらに地底の奥へ進んでいく。

ヤマメ「… 本当はすぐに死ななきやいいけど」

ヤマメの声が聞こえるはずもなく少年は橋が架けられた場所へたどり着いた。だが、そこには自分より1、2歳程度年下に見える少女がいた。

その少女は金髪のショートヘアで黒の服の上に茶色の半袖の服を着て、白いスカートの様なものを巻き、黒いスカートを履いていた。だが、少年が一番気になったのは少し尖った形をしている耳だった。



少女はこちらに気付くと質問をしてきた。

？「誰よ、あんた」

？「…」

少年は黙っていた。

？「何よ、無視するなんて妬ましい」

？「…」

？「なんで私の質問を無視できるのかしら、妬ましい」

そして、少年は少女の質問を無視して、あることを聞く。

？「… お前は人間じゃないのか？」

？「何よ、私の質問は無視かしら、妬ましい」

そうよ、私は人間じゃないわ、私は水橋みずはしパルスィ、橋姫はしひめよ、ああ妬ましい」

？「… 橋姫、なるほど」

そう答えるとパルスィは聞いてきた。

パルスィ「何がなるほどなのよ、妬ましい」

？「… お前が、妬む理由」

実は橋姫とはとても嫉妬深い妖怪であり、少年はその事を知っていた。

パルスィ「隠さず答えるなんて、妬ましい」

? 「…通つてもいいか?」

少年はここを通つていいか聞いてみると。

パルスィ「ええ、勝手にすれば、ああ妬ましい」

あつさり通してくれた。

? 「…」

少年はパルスィの横を通り橋を渡つてまた、地底の奥へと進んでいく。

パルスィ「自分の名前を言わないなんて、妬ましい」

少年はパルスィにまた妬まれていることも知らず、歩いていると少し風を切るような音が聞こえた。

ヒュウウウウ

少年は1歩後ろに下がると案の定、自分がさつきいた場所に何かがすごい勢いで落ちてきた。

ドオオンツ

それは桶にはいった緑色の髪を2カ所ツインテールより上の所を縛つた白い着物の様なものを着た女の子が落ちてきた。人間でいうと6、7歳くらいだった。しかし、こちらの顔を見るとふらふらと浮かんでどこかへ行ってしまった。

? 「…」

特に気にする事もなく少年は先へと進んでいく。

先に進み地底深くまで来たのにも関わらずなぜか周りが明るくなってきていた。少年が先に進んでいくと少し先は大きく開けていてそこには昔の日本の都の様な場所になつていた。

? (…ここは、一体?)

そしてその都には人ではない者が見え、なにやら魂の様なものが飛んでいるのが見えていた。

? (…このままの格好で行くには不味いな)

何かないかと思つて壁の近くにぼろぼろの大きな黒い布の様なものを見つけました。少年はそれを手にとつて見るとそれは人の顔が見えなくなるような大きなフード付きのマントだった。

少年はそのマントを被り身体をマントに包んで先へ進むことにした。

その都に足を踏み入れると人ではない者がどんな者かがわかつてきた。

? (…あいつら、鬼か?)

人ではない者達は何れも鬼を連想させる様な顔立ちをしていた。その鬼達の近くを通ると何やら不審な目でこちらを見てくるが少年は気にも止めずそのまま奥へと進んでいく。

すると、ある者に話かけられた。

？「おい、その黒い奴、ちよつといいか？」

少年は声が聞こえた方へ向くと金髪ロングヘアに白い服と青いロングスカートを着た手首と足首に鉄の枷のような物を身に付けた額に赤い角がある女性が立っていた。

？「ちよつと、こつちに来てくれないか？」

少年は少し警戒しながらその女性に近づくとその女性は笑顔を浮かべていたが。

ドツ

何故か、少し鈍い音が聞こえ、自分は腹を殴られていた。

？「がっ!？」

少年は5、6m位後ろへ転がった。

？「あんただろ？こころで見かけない黒い不審な奴って、さつき鬼達から聞いたんだ

よ 何なんだお前？」

女性はそんな質問をしてくるが少年はその質問に答える暇はない状態だった。

？「なんだい？軽く殴っただけだろう」

少年は女性の言ったことが信じられなかった。

？（これで・・・軽く？）

少年は腹の痛みを抑える為に鎮痛剤を飲む。

そして女性は少年に聞いてくる。

？「そんなマント身に纏ってたら顔も見えないだろ？さっさと顔でも見せたらどうだい？」

すると少年は、フードを後ろに下げ、身体に纏ったマントを自分の背中に持つていき頭と身体が見えるようにする。

だが、少年は仮面を被ったままだった

？「なんだい？その仮面は？それじゃあ顔が見えないだろ？」

少年は女性の言ったことを無視して静かに刀を引き抜き右手で刃先を女性に向ける。すると女性は少し嬉しそうな顔をした。

？「ほう、やるつてのかい？いいじゃないか、ちょうど暇だったんだよ」

と軽く女性も身構える。すると、周りの鬼達が足を止め、2人を囲むように集まってくる。

すると、周りから色んな声が聞こえてくる。

「なんだ、なんだ？」「喧嘩か？」「姐御が黒い不審な奴と闘うらしいぞ」「まじか、さっき聞いたあいつとか？」「姐御の闘う姿が見られるのか!？」

と周りは何故かどんどん盛り上がっていた。

？「ほら、かかってきなよ、どうしたんだい？」

女性は軽く挑発をするが少年はゆっくりと近づき刀を横に振り払う。

ヒュンッ

かなりの速さで振ったはずが女性は軽く避ける。立て続けに女性に刀を振るが全て避けられてしまう。

？「おいおい、なんだい？その攻撃は？一つも掠りやしないじゃないか」

女性はそんなことを呑気に言っていた。すると少年は刀を振るつた後に足払いをした。

だが、女性は軽々と避ける。

？「よつと、おお、刀だけで闘う訳じゃないんだね、いいじゃないか、すぐに終わらせようと思ったけどもう少し楽しませてもらおうか」

少年は刀を振り、途中で足でハイキックや空いてる左腕を使い、肘を女性に当てようとするが女性は全て避けてしまう。

？「ほらほら、そんなもんかい？あんたの力は？」

すると、少年は刀を右へ振りそのまま回り左腕の肘を裏拳の様に当てようとするが、避けてしまう。しかしそのまま回り、ハイキックを決め始めた。

すると、その連続攻撃が読めなかったのか女性は少年の足首を顔に当たる前に掴む。

？「おっと危ない、ふくん、なかなかやるねえ、あんた」

そして、少年は黙ったまま刀を振る。しかし、女性は足を掴んだまま、半身で避けてしまう。

? 「まあ、私にガードをさせたお礼に最後に1つだけ教えてやるよ 私の名前は星熊<sup>ほしくまゆうぎ</sup>勇儀っていうんだ 今さら言っても仕方ないがな」

すると、勇儀は少年をそのまま近くの壁に叩きつけた。

ドゴオオオン

? 「がっ!？」

すると、少年は血を吐きてズルズルと落ち、壁に背中を預けて座り込む形になってしまった。

? (く… そ、体がうご… かねえ)

すると、勇儀は少年に近づき拳を構えた。

勇儀 「じゃあね、少しだけ楽しめたよ」

勇儀は少年へ拳を叩き込む。

バアアアアアアアアアア

大きな音がし、誰もが決着がついたと思ったが勇儀は驚いていて、それは少年も同じだった。

なぜなら、勇儀の拳を赤い色をした謎の薄い壁が防いでいたからだ。そして勇儀は少

し後ろに下がるとその壁は液体となり地面へ落ちた。

勇儀「な、なんだ？それ？あんた、もしかして能力持ちかい？」

勇儀は少年に訪ねるてみるが少年はそんなことは一つも聞いていなかった。

？（さっきの壁……あれは確か……）

少年はあの壁の正体に少し気が付いていた。少年は殴られる寸前に少しだけ見えたのだ。

自分の吐いた血が壁になつた瞬間を

すると、少年は壁に手を当てふらふらになりながらも、立ち上がり鎮痛剤を飲もうとしたが勇儀はそれを止めた。

勇儀「いや、待て！あんた！それ、ただの鎮痛剤だろ？待ってろ！すぐになんか治療できる物を持って来るから」

そんなことを言つて勇儀はどこかへ走つて行つた。周りの鬼達はざわざわしていたが、そのうちどこかへ行つてしまい、少年はその場に座り込んだ。

しばらくすると、勇儀が救急箱を持って戻つてきて少年の手当てを始める。

勇儀「いや、本当にすまない、少し本気になつてしまつたよ」

勇儀は少年に治療をしながら謝つてきた。

？「……」



しかし、少年は黙っていた。

勇儀「ところで、あんたは名前なんて言うんだい？」

そして、勇儀は少年に名前を聞いてみた。

？「…」

だが、少年はやはり黙ったままだった。

勇儀「だんまりかい？まあ、別に言いたくなければそれでいいさ」

だが、勇儀は特に気にはしなかった。

？「…」

勇儀「待つてろ、もう少しで終わるから…よし、できたぞ」

勇儀は少年を丁寧の手当てをしてくれた。

勇儀「立てるか？あんた」

勇儀は少年に手を伸ばすが、少年はそのまま立ち上がった。

勇儀「そういうや、さっきの壁はなんだい？あんたの能力で作ったのかい？」

？「…」

少年は壁の正体に気付いてはいたが、黙っていた。

勇儀「まあ、いいか、それにしてもあんた、人間にしては強いじゃないか、私相手に

（こ）こまでやるだなんて驚いたよ

改めて、私は星熊勇儀 鬼さ、よろしくな」

勇儀は手を伸ばし握手を求めぬ。

そして、少年も手を伸ばしお互いに握手をした。

そして、少年は都のさらに奥へとまた進むもうとしたが勇儀が肩を掴み止め始める。

勇儀「お、おい、手当てをしたからといって怪我が治った訳じゃないんだぞ？ しばらく

くどこかで安静にしておいた方が良くないか？」

勇儀は少年にそんなことを言うが少年はこう返事をした。

？「・・・いや、いいさ」

少年はそう言つてフードを被り、マントで身体を包み、奥へと進んでしまった。勇儀

は歩いていつてしまった少年の姿を心配しながら見送つた。

勇儀「大丈夫だと・・・いいんだが

そういや、あいつは地底の一番奥には誰がいるのかわかつてるのか？」

そして少年は地底を進んでいたら一番奥らしき場所にたどり着いた。それはさつき  
の都とは不釣り合いの洋風の大きな屋敷の様な建物が建っており、窓は綺麗な模様をし  
たステンドグラスで出来ていた。

そして、少年はその屋敷の扉に手を伸ばしゆっくりと開けた。

そして、少年はここである少女と巡り会うこととなつた。

## 第3話 ようこそ地霊殿へ

少年は屋敷の中に入るとそこはエントランスの様になっており壁や床は真っ白だった。一階の左右の壁の中央は廊下になっていた。

正面の奥には大きな階段があり、階段は壁に付いた所から左右に別れていて廊下がコの字になっており一階と同様に左右の壁の中央は廊下になっていた。

そして少年は一階から探索を始めた。

まずは一階の左側の廊下に行くのと左右の壁に4個ずつ扉があり、廊下の突き当たりに扉があった。さらにそこからまた左右にも廊下があった。

2階も同じ構造となればかなり大きな屋敷となる。

少年はとりあえず廊下を進んでみたが特に扉の向こうから音などはなかった。突き当たりから左右を見ると壁の片側に扉が2つほどあった。

しらみ潰しをしたら、かなりの時間を使いそうだ。

少年は来た道に戻って階段を登り、次は2階の左側の廊下の探索を始めた。やはり2階も同じ構造になっているようだ。

さつきと同じく突き当たりまで進もうとしたが少年はある音に気が付いた。

カリカリツ　カリツ

？（…ん？）

一番手前の左側の扉から何かを書いている様な音が聞こえた。少年は音が聞こえた扉をゆつくりと開けた。

するとそこには椅子に座って何か書類の様な物を書いている少女がいた。

その少女はピンクのショートヘアで少し癖つ毛になっており、黄色のハートが付いた黒いカチューシャを付け、赤い眼鏡をかけていた。

服装は水色の服とピンク色のスカートを身につけ、服にはカチューシャと同じ黄色のハートが装飾してあった。

だが、少年はその少女の姿より最初に目に入ったものがあった。

それは少女から出ていた赤い目だった。

少年はフードを後ろに下げたが少女はこちらに気付いてないのか、書類とずっと向き合っていた。

すると少年は少女の近くにあった書類を自分なりにまとめ始めた。少女との距離は1mもないのに少女は一切少年に気付く様子はなかった。

？「ふう」

少女はため息をつく眼鏡を外し、腕を上げて身体を伸ばした。

? 「ん、さて、後は書類をまとめればって、あれ?」

そこで少女はやつと気付いた。そこに知らない少年が書類をまとめていたことに。すると少女は椅子から落ちる様に離れた。

ガタツ

? 「へ、え? え!? き、きゃー!!!」

そして、少女は悲鳴を上げた。だが、少年は書類をまとめ続けていた。

少年は少女をちらりと見たが再び書類をまとめ始めた。

? 「え!? え!? あ、あなた、誰!」

すると、少年は少女へ近づき始めた。少女は警戒していたが、少年は少女に近づいてあることをした。

少年はまとめていた書類を少女に差し出した。

? 「え?」

少女は少し固まっていたが、差し出した書類を見てすぐに書類を受け取る。少女は書類に通したが書類は全てちゃんとまとめられていた。

? 「え、えくと、あのお」

少女はなんて言おうか迷っている。少年はその部屋から出ようとし始めた。だが、少女はすぐさま少年に声をかけた。

？「ま、待って！」

声をかけると少年は少女の方を向く。そして、少女はある質問をした。

？「あなたは、一体誰なの？」

だが、少年は黙っていた。

？「・・・」

すると、少女は何か気付いた様に驚き始めた。

？「え？な、なんで!?!なんであなたの心が読めないの!?!」

そして、少年は少女の言葉に疑問を持った。

？「・・・心が読めない？」

すると、少女は動揺し始めた。

？「え、あ、あの、そ、それは！え、えっと、違って、えっと、その、な、何て言う

か、その・・・」

少女は動揺しているのは目に見えてわかった。

そして、少年はある質問をする。

？「お前・・・人の心を・・・読めるのか？」

少女に質問をしたら、少女は更に動揺し始めた。

？「い、いや、だから、違うの！わ、私、ひ、人の心を読めるだなんて、そ、そんなこと！全然」

少女はしばらく言い訳の様なことを言っていたが途中で諦めたのか少女はボソツと一言言った。

？「はい、私は心を読めます」

少女は少しだけ怯えている様に見えた。

そして、少女は少年にこう言った。

？「… 気持ち… 悪いですよね 人の心を読むだなんて」

少年は10秒ほど黙っていたが少年は少女に言った。

？「… いや、別に」

その返答に少女は驚いている様子だった。

そして、少女は少年の言ったことに対して早口に喋り始めた。

？「え、う、嘘です！本当は気持ち悪いとか近寄るなどか思ってるんでしょう！いや、そうです！そうに決まっています！！私がああなたの心が読めないからって平気で嘘を言うてるだけなんですよ！！」

少し少女は怒っている様子になり始めた。

だが、少年は少女にこう答えた。

？「… 気持ち悪いとか、思っていないが？」

少年はそう答えたが少女はまだ怒っている様子だったので少年は一言加えた。

？「それが、お前の個性なんだろう？」

そう言うとき少女は目を丸くしていた。

そして、少女は恐る恐る少年に尋ねた。

？「ほ、本当に気持ち悪いとか思っていないんですか？」

そして、少年はこう返した。

？「ああ、思っていないよ」

すると、少女は少し嬉しそうな顔をした。

そして、少女は何故か自己紹介をし始めた。

？「わ、私！古明地こめいじさとるといいます

えっと、私は心を読める、サトリと言われる妖怪なんです！えっと、あなたの名前は

？何て言うんですか？」

何故か少女はかなりテンションが上がっていた。

そして、少年は少し考え始めた。

？（… また、名前言わない様なことすると、疑われるか？）



少年はそう思い、少年は仮面を外しさとりにこう自己紹介をした。

？「……俺は黒夜夜見<sup>くろよるやみ</sup>」

さとり「黒夜夜見さんですか、素敵な名前ですな！」

少年が自己紹介をすると、少女は嬉しそうな様子で名前のことを褒めてくれた。

そして、少女はあることを尋ねる。

さとり「そういえば、黒夜さんは何故ここに来たんですか？」

すると、夜見は少女に逆に尋ねた。

夜見「……どこか、誰もいない所はあるか？」

さとり「え？誰もいない所ですか？ん？私の記憶が正しかったらこの地底には、そ

んな所は……ないはずですが、何故ですか？」

すると、夜見はこう答えた。

夜見「……誰もいない所で生きようと思ってな」

すると、少女はある提案をする。

さとり「なら、ここ、地霊殿に住みませんか？空いてる部屋もありますし」

さとりは夜見の思っていたこととほぼ逆の提案をし始めた。

しかし、夜見はその誘いを断ることにした。

夜見「いや、気持ちは嬉し」あつ、そうだ！ペットを紹介しますね！」お、おい」

夜見が喋つてゐる途中で急にさとりはペットを紹介すると言つて、どこか行つてしまつた。とりあえず夜見は面倒なことになるのは嫌だから少し待つことにした。

しばらくすると扉が開きさとりは3人連れて来た。

1人目は赤い髪のロングヘアーの少女で髪は2つの三つ編みでまとめ、三つ編みの最初と最後に黒いリボンをつけていた。服装は緑色のワンピースで、その少女は頭には動物のような黒い耳があり、ワンピースの後ろから黒いしっぽが2本見えていた。

2人目は黒い髪のロングヘアーで緑色のリボンを付けていた。服装は白い服に緑色のロングスカートを着ており、服の胸の辺りには赤い宝石の様なものが付いていた。そして背中から黒い翼が見えていた。

3人目は黄緑色の髪のショートヘアーで黄色のリボンが付いている黒い帽子を被っていた。服装は黄色の服に緑色のロングスカートを着ていた。そしてその少女からはさとりと同じような球体が出ていたが目は閉じており糸で縫い付けられていて、その少女の目は自分と同じ様に光が無いような目をしていた。

1人目と2人目は自分の前に横に並んでくれたが、3人目の少女は部屋の中のあちらこちらを歩いていた。

そして、さとりが喋り始めた。

さとり「この2人が私のペットです さあ自己紹介をしなさい」

すると、まず最初に1人目の少女が自己紹介を始めた。

? 「あたいは火焰猫燐かえんびょうりんっていつて、少し猫見たいな見た目だけど私は火車だよ、よろしく」

燐が自己紹介を終えると2人目が自己紹介を始めた。

? 「私は霊鳥路空れいじうつばだよ よろしく」

空は軽く自己紹介をしただけであつた。そして3人目の少女は自分の正面に立ち自己紹介をする。

? 「私は「以上が私の家族です」ってちよつと!お姉ちゃん!」

3人目が自己紹介をし始めた途端にさとりは自己紹介を急に終わらせてきた。そして夜見は最初に疑問に思ったことをさとりに聞く。

夜見「・・・なあ、さとりさん、1つ聞いていいか?」

さとり「はい、なんですか?」

夜見「なんで、2人なんだ?」

さとり「え?だつてここには私と黒夜さんとお燐とお空しかいませんよ?あ、ちなみに燐のことはお燐、空のことはお空と普段は呼んでいます」

夜見「いや、呼び方は別にいいがこいつは?」

夜見はそう言つて3人目の少女を指差すとさとりと燐は驚いていた。

さととり「え!? 黑夜さん、こいしのことが見えるんですか!」

夜見「ん? ああ、見えるが?」

燐「嘘、こいし様が見える人間なんて初めて見たよ」

空「ん? いや、見えるでしょ? 普通」

燐「違うよ、お空 普通、こいし様は人間には見えないはずなんだよ

能力を使つてれば余計にね てか、お空は何回説明すれば覚えるの?」

空「いや、初めて聞いたけど?」

燐「いや、前にも説明したでしょ」

2人は説明したしてないの話をし始めた。

とりあえず、夜見はさととりがこいしと呼んでいた少女に名前を聞いてみた。

夜見「名前はなんて言うんだ?」

?「ふふ、私は古明地こめいじこいし さとりお姉ちゃんと同じ妖怪だよ よろしく、お兄ちゃん」

夜見「ああ、俺は「黑夜夜見でしょ? お姉ちゃん、ペットと私に言つてたもん」... そ  
うか」

夜見はこいしの自己紹介を聞き終わつたら、今度はこいしが夜見にある質問をした。

こいし「ねえ、お兄ちゃんがここに住むつて本当?」

その質問に燐と空も反応し始めた。

燐「そういや、さとり様そんなこと言ってたね 黒夜さんを誘ったら、その誘いを受けたとかって」

空「えつと？そんなこと言ってたっけ？」

燐「お空、はあ、なんでいつも物事をすぐに忘れちゃうかなあ？」

どうやら、さとりはこの3人に夜見がここに住むことになったと説明していたらしい。

そして夜見は思った。

夜見（…こんな状況で断るのはまずいか？何よりさとりさんがまた怒るのも面倒だし…どうすれば…）

そんなことを思っていたらさとりはいつの間にか夜見の前に立っていて、さとりは夜見に小さな声で言った。

さとり「黒夜さん ほら、あなたも軽く自己紹介でもしないと」

どうやら誘いを断るのは諦めるしかないらしい。

夜見はため息をつき、皆に向かって軽い挨拶をした。

夜見「黒夜夜見だ、今日からここに住むことになった よろしく」

さとりは少し笑うと壁に架けてあった時計を見て、さとりは少し慌て始めた。

さとり「あ、もうこんな時間！ご飯作らないと」

そう言つて、さとりは部屋を出てどこかに言つてしまった。言葉から察するとキッチンに行つたのだろう。

すると、燐は夜見を呼んだ。

燐「黑夜さん、部屋、わからないでしょ？案内するからついておいでよ」

燐がどうやら夜見の部屋を案内するらしく、夜見は燐について行くことにした。

燐に案内された所は、2階の右側の廊下、左側の手前から4番目の部屋だった。

その部屋に入ると、右奥にはベッドがあり、そばの壁にはランタンが架けられていた。左側の壁には机と椅子が置いてあつた。

燐「ここが黑夜さんの部屋だよ、まあそんなこと言つても特になんかある訳じゃないけどね」

夜見「ああ、そうだな　燐さん、1つ聞きたいんだが皆の部屋の割り振りはどうなつてゐるんだ？」

燐「ああ、それなら黑夜さんの部屋の正面から右へこいし様、あたい、お空、さとり様の順だよ」

夜見「そうか、ありがとう」

燐「いやいや、いいつて別に　あ、そういや、ご飯を食べる時は部屋を出てすぐ左の

部屋だからね

さて、あたいは自分の部屋に戻っているから、なんか用があったら呼んでね」

燐はそう言って自分の部屋に戻って行った。夜見はランタンが架けられていて、所にランタンの上からマントをかけ、仮面は机の上に置いた。

そして、燐の言っていたすぐ左の部屋に入ってみる。ちなみに屋敷の右側の構造も左側と変わらないようだ。

部屋に入ると部屋の中央には長テーブルがおいてあり、右側と左側に椅子が3つずつ置いてあった。

左の壁には扉があり、そこから物音が聞こえていた。

おそらく、さとりが料理をしているのだろう。

夜見（ゆつくりしてるのも悪いし、手伝うか）

夜見は扉を開けるとそこは清潔感のあるキレイなキッチンがあった。さとりは包丁で食材を切っている所だったが、慣れていないのか指を切ってしまうような切り方をしていた。

夜見（おいおい、大丈夫かよ）

夜見はさとのりすぐ近くまで行くがさとりは、また気付いていない様子だった。おそらく、集中していると周りが見えなくなるのだろう。

そして、夜見は食材を見てみる。

夜見（じやがいも、玉ねぎ、ニンジン、牛肉、これを使うつてことは…肉じやがか？）

いや、でもしたらさとりさんの今切っているニンジンとは…何故千切りに？

夜見はさとりが何の料理を作ろうとしているか、さっぱりわからなかった。

そして夜見はさとりを声をかける。

夜見「なあ、さとりさん」

すると、さとりは今、隣に夜見がいるのに気が付いた。

さとり「え？き、きやあ！え？なんで黒夜さんがここに!？」

さとりは驚いていたが夜見は特に気にせず

夜見「ん？いや、手伝おうかと思つてな」

手伝いに来たことを伝えるがさとりは夜見に言った。

さとり「い、いや大丈夫ですよ 黒夜さんはゆつくりしてくださいます」

夜見「いや、ここに住むつてのに何もしないつても悪いだろ」

そう言つて夜見は近くの包丁を手にとってじやがいもの皮を切る。夜見の包丁さばきはなかなかのものだった。

さとり「え、わあ、上手ですね もしかして、料理が得意なんですか？」



夜見「まあ、大体の料理は作れるよ。そういや、これは何を作ってるんだ？」

さとり「えっと、肉じゃがです」

夜見の予測は当たっていたが重要なのはそこではなかった。重要なのはさとりがニンジンを千切りにしていたことだ。

夜見「え？じゃあ、なんでニンジンに千切りに？」

さとり「え？えっと、肉じゃがのニンジンって千切りじゃありませんでしたっけ…」

夜見はまさかと思つてさとりに聞いてみる。

夜見「作ったことか、作ってるの見たことある？」

さとり「い、いや、ありませんが」

なんと、さとりは肉じゃがを初めて作っていたらしい。いや、初めて作る料理をレシピも知らずに何故作ろうとしたのだろう。何故肉じゃがを作ろうとしたのか、夜見はさとり聞いてみた。

夜見「なんで、肉じゃがを作ろうとしたんだ？」

さとり「えっと、それは…その…」

夜見「まさかとは思うけど料理作ったことないのか？」

さとり「い、いや、そんなことは『ピンポン、せーいかい』って!?!こいし!?!」

夜見は後ろを見るとそこにはいつの間にかこいしがいた。というか正解ということ

はさとりは料理を作ったことがないことになる。

そして夜見はこいしに聞いてみる。

夜見「なあ、こいしさん、料理はいつも誰が作ってるんだ？」

さとり「ちよ、ちよつと！黒夜さん!？」

こいし「お燐がいつも作ってくれてるよ」

さとり「あ、こ、こいし！」

ガチャツ

扉が開くとそこには燐がいた。

燐「あの、さとり様 やっぱりあたいが料理作った方がって、あれ!?黒夜さん!？」

さとり「ちよつと!?!なんでそのままこつちに来るのよ、お燐!部屋で待つてと云つ

たでしょ!」

夜見「おい、ちよつと、皆落ち着け」

燐「いや、だつてさとり様、料理したことなかったじやないですか」

こいし「そうそう、なんで急に自分で作ろうとしたんだろ？」

さとり「ちよ、ちよつと私だつて料理位できるわよ！」

夜見「お、おい、だから落ち着けて」

夜見は3人を落ち着かせようとするが3人の言い合いはヒートアップしてきた。す

ると、夜見は足を少し上げて。

ダンッ!!

夜見は床を蹴ると3人はビクツとしてこちらを向き始める。

夜見「はあ、とりあえず落ち着け」

夜見は別に怒っている訳ではないのだが3人は少し怯えていた。そして、まずさとりに声をかける。

夜見「まず、さとりさん」

さとり「は、はい！」

夜見「まあ、今回はさとりさんが料理を作ってくれ」

さとり「え、は、はい？」

夜見「次に燐さん」

燐「は、はい」

夜見「さとりさんの料理のサポートを頼む」

燐「え、う、うん、わかったよ」

夜見「最後にこいしさん」

こいし「…」

夜見「まあ、悪意はないんだろうが、言葉には少し気を付けろ さとりさんと同じサ

トリなんだから相手がどう思ってるかわかるだろ？」

こいし「……ないよ」

夜見「ん？」

こいし「わかんないよ、人の思ってることなんて」

夜見「こいしさん？何を言ってるんだ？」

するとこいしはすぐにどこかへ行ってしまった。夜見はこいしの言っている意味がわからなかった。

夜見（わからない？サトリは相手の心を読むんじや？）

夜見は考え込んだがさとりに声をかけられる。

さとり「あの、黒夜さん」

夜見「ん？なんだ？」

さとり「あまり、詳しい事は言えませんが、こいしに心を読む話はありませんでくれませんか？」

夜見「……ああ、だが……」

さとり「大丈夫ですよ、こいしは怒ったりしてませんから」

夜見「……なんか、すまないな、初日なのにいるいろと」

さとり「いえ、大丈夫ですよ あと、こいしはすぐにいつもの様子に戻りますからあ

まり気にしないでください」

夜見「…… ああ、わかったよ」

そして夜見は自分の部屋に戻ってベッドの上で横になる。

夜見（こいしさんに何かあったのか？…… いやあまり気にしない方がいいか）  
しばらく横になっていると、扉が開き始めた。夜見は体を起こすとそこにはこいしがいた。

こいし「お兄ちゃん、ご飯出来たってよ」

こいしはさどりの言った通り、いつもの様子に戻っていた。そして夜見は返事をする。

夜見「ああ、わかったよ、すぐ行く」

夜見がベッドから立ち上がるとこいしは夜見に、近づいてきた。

夜見「ん？どうしたんだ？」

こいし「ふふ、早く行こっ」

するとこいしは夜見の手を掴んで皆が待っている部屋へと連れていく。

夜見「おわつと」

タツタツタ　ガチャ

こいし「呼んで来たよ」

部屋に入ると燐は一番手前の右側の席、空は燐の正面、さとりは燐の隣に座っていた。さとり「ありがとうね、こいし。： あら、どうしたんですか？手なんか繋いじやって」

夜見「いや、こいしさんが急に繋いできたんだよ」

燐「本当かな、本当は黑夜さんが手を繋ぎたいとか言ったんじやないの？」

燐はニヤニヤ笑いながら冷やかしてきた。夜見は腰の刀を抜こうとすると燐は慌てて謝り始めた。

燐「う、嘘だよ く、黑夜さん、冗談だつて」

夜見「冗談じゃなくしてもいいんだか？」

燐「わ、悪かったつて」

そんな会話をしているとさとりはふふ、と笑い出した。

空「さとり様、どうしたの？急に笑つて」

さとり「いえ、ただ、最初はあまり黑夜さんは喋ったりしなくて暗い人かと思っただけだすぐに打ち解けてくれて良かったなと思ひまして」

夜見「ん？そうか？こんなもんじやなかったか？」

燐「うん、確かに」

こいし「最初は暗かったよね」

さとり「無表情のままなのは変わりませんがね」

空「なんでいつも無表情なの？笑えばいいのに」

夜見「て言うか早く食べないと冷めるぞ」

さとり「そうね、早く食べましょうか」

こいし「わく、お腹減った」

そしてこいしはさとりの隣の席に座った。そしてさとりは夜見に言った。

さとり「さあ、私の正面が空いてますよ 早く一緒に食べましょう」

夜見「・・・ああ、そうだな」

夜見（なんでこんなことになったんだろうな、まあ、少しはいいかもな）  
こうして少年、夜見は地霊殿で暮らし始めることとなった。

## 第4話 地霊殿の皆の為に

夜見はさとりの正面の席に座ってテーブルに並べてある料理を見ると、そこにはさとりが作ったであろうニンジンが千切りになった肉じゃがと米の盛られた茶碗、箸が並べてあった。

さとり・こいし・燐・空「いただきます」

4人は食事を始めたが夜見はこの料理を見てこう思った。

夜見（えっと、これだけ？）

そう、明らかに食事にしてはかなり少ない量であった。

さとりは食事を始めない夜見を見て声をかけた。

さとり「黒夜さん？冷めてしまいますよ？」

夜見「なあ、さとりさん　もしかして今日のメニューってこれだけ？」

さとり「はい、そうですけど……」

まさかのメニューはこれだけであった。おかずがあるから食べれないことはなかったが恐る恐る夜見は質問をする。

夜見「えっと、おかわりとかは？」



さとり「ありませんよ、そんなもの」

まさかのおかわりすら無かった。これだけ食べたとしてもお腹はあまり膨れないはずだ。

夜見「この量じゃあ、お腹膨れないだろ」

さとり「ええ、そうですよ」

さとりは当たり前の様に答えた。

こいし「お兄ちゃん？ご飯いらなの？」

夜見「い、いや、食べるよ いただきます」

夜見は箸で肉じやがのじやがいもを口の中に入れてみた。ちゃんと味が付いている肉じやがではあるが明らかに量が少ない事について夜見はずっと疑問を持っていた。

ご飯の量が少ないため、食事はすぐに終わってしまった。

さとり・こいし・燐・空「ごちそうさまでした」

夜見「……ごちそうさま」

食事が終わるとこいし・燐・空は部屋から出ていき、さとりは食器をまとめ始めた。そして、さとりは夜見に味の感想を聞いてみた。

さとり「どうでした？味は」

夜見「ああ、美味しかったよ」

夜見は感想を言つて、ある質問をする。

夜見「いつもこの量なのか？」

さとり「ええ、そうですね。でも今日から黑夜さんの分のご飯もあるので1人辺りのご飯はいつもより少ないですよ」

なんと、さとり達はいつもあの量の料理しか作つてなかつたらしい。しかも自分がここに住むことによつてさらに少しさとり達の食べる分が減つてしまつたようだ。

夜見「・・・いや、あの量じゃ、つらくないか？」

夜見は正直お腹はあまり膨れていなかった。

さとり「もちろん、つらいですよ。でも、お金が・・・その、あまり・・・」

どうやら金銭的な問題があつたようだ。

夜見「ああ、すまない。聞いちやいけなかつたな」

さとり「・・・大丈夫ですよ、説明してなかつた私も悪いですよ」

さとりは笑顔でそんなことを言つていたが本当はつらいのだろう。こんな重い空気の中、扉が開いた。

そしたらそこには、こいしが立っていた。

こいしは夜見に駆け寄つてあることを聞いた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん。そういえば、ご飯の時に聞こうと思つてただけど、お

兄ちゃんって一体どこから来たの？」

こいしの質問にさとりも興味をもった。

さとり「そういえば、聞いていませんでしたね 黒夜さんがどこから来たか」

どこから来たのかと夜見は聞かれたが、夜見は答えに困っていた。

夜見「いや、実はわからないんだ 自分の家のベッドで寝たはずなんだが… いつの間にか空から落ちていたんだ」

さとり「空から落ちてきた… もしかして、黒夜さんは外の世界から来たんじゃない？」

さとりはそんなことを言うと夜見とこいしは疑問に思った。

こいし「外の世界？」

夜見「… どういうことだ？」

さとりは2人に説明をし始める。

さとり「まず、黒夜さん ここは幻想郷と呼ばれる世界で、黒夜さんのいた世界が外の世界なのです」

そして、外の世界が表の世界であり、幻想郷は裏の世界となっています

おそらく黒夜さんは外の世界で寝ている間に何かしらの出来事に巻き込まれて、幻想郷へ飛ばされたのだと思います」

夜見は話の内容を大体理解したがこいしはさっぱりわかっていない様子だった。

こいし「お兄ちゃん、わかった？」

夜見「簡単にまとめると表から裏に行ける穴が空いて、そこに俺が入ったってことか？」

さとり「そうです。：。 すいません、説明がわかりにくくて」

さとりは少ししよんぼりしていたところで、こいしは悪気はなかったがこんなことを言ってしまった。

こいし「なんだろ、お兄ちゃんの説明の方がわかりやすかったなあ」

さとりはこいしの言葉に若干傷ついた。

だが、夜見はフォローに入る。

夜見「こいしさん、俺の説明はさとりの説明があったからできたんだよ

それにさとりさんもできるだけわかるように頑張って説明してくれたんだから、あまりそんなことは言っちゃ駄目だよ」

こいし「：。 そっか、お姉ちゃん ごめんね、ひどい事言って」

こいしは夜見の話を聞いてさとりに謝りだした。

さとり「うん、大丈夫よ」

さとりはこいしのことをすぐに許してあげた。

すると、さとりはあることに気付いた。

さとり「ん？誰か玄関まで来ていますね。でも困りましたね。食器を洗わないと…。」  
さとりはどうやら誰か訪問してきたことに気付いたようだ。

そこで夜見は何故気付いたかを聞いてみた。

夜見「なんで誰か来たかなんてわかるんだ？」

さとり「玄関の方から誰かの心が読めたからですよ」

そして夜見はさらにさとりに質問をする。

夜見「さとりさん、心はどの位の範囲まで読めるんだ？」

さとり「そうですね、大体地霊殿の中心にいれば地霊殿内の心は読めますよ」

さとりの心を読む範囲はかなり広いらしい。

そして、夜見はある提案をする。

夜見「来てる奴、俺が出ようか？」

さとり「え？いや、いいですよ。私が出ます」

夜見「いや、ここに住ませてもらう分には何かをしないとな」

さとり「…じゃあ…頼みました。あ、あとこれを持って行って下さい」

さとりは何かを差し出し、それを夜見は受け取るとそれは何やら金属の薄い円形のものだった。

夜見「…これは？」

さとり「幻想郷でのお金ですよ　おそらく来たのは夕飯の材料を持ってきてくれたの  
でしょう」

夜見「そうか、わかった　じゃあ、行ってくる」

夜見は玄関に向かおうとするときいしは夜見に話しかけた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん　私も付いてっていい？」

夜見「ん？　いいぞ」

こいし「えへへ、やったあ」

夜見は付いて来るのを許可するときいしは喜んでいた。

夜見「じゃあ、行くか」

夜見ときいしは部屋を出て、夜見は1度自分の部屋から仮面を取って来て玄関へ向かう。  
う。

するとこいしは聞いてきた。

こいし「お兄ちゃん　どうして、仮面なんか被るの？」

仮面を被った夜見はこいしの質問に答えた。

夜見「顔が知られるのは色々と面倒になる気がしてな」

こいし「ふくん、そうなんだ」

そんな会話をしていたら玄関にたどり着き、扉を開ける。

ガチャツ

扉を開けるとそこには、勇儀がいた。

勇儀「夕飯の材料届けに来たぞって、あんたはさっきの」

夜見「… お前か、ほら」

夜見はお金を勇儀に渡すと勇儀は食材が入っているであろう小さな布の袋を渡してきた。

勇儀「ちようどだね、て言うかなんであんたが出てくるんだよ」

夜見は答えないうでいたが隣にいたこいしが勝手に答えた。

こいし「それはね、お兄ちゃんがここに住むことになったからだよ」

夜見「お、おい こいしさん」

勇儀「へえ、そうなのかい よくここに住もうだなんて決めたね」

夜見「はあ… ああ、そうだよ」

夜見は仕方ないように仮面を外す。すると勇儀は少し驚いた様子だった。

勇儀「おお、なかなかいい顔じゃないか」

こいし「そうだよね、お兄ちゃんかなり格好いいよね」

2人は何故か夜見のことを褒め始めていたが夜見は特に嬉しくもなかった。

勇儀「なんだい、少しは照れる様子でも見せたらどうだい？」

夜見「…別に なんとも？」

勇儀「ふくん、そういや、もう1度聞くけどあんた、名前は？」

夜見「… 黒夜夜見」

勇儀「そうか、改めてよろしくね黒夜」

夜見「ああ、よろしく」

2人は改めてあいさつをするとこいしは夜見の手を引つ張り始めて、こう言った。

こいし「ねえ、お兄ちゃん 早くお姉ちゃんの所に戻ろう？」

こいしはどうやら早く戻りたいようだった。

だが、夜見は少し違った。

夜見「こいしさん、先にこれを持って戻ってくれないか？」

夜見はそう言つてこいしに布の袋を差し出す。

こいし「なんで？」

こいしは何故か尋ねると夜見は答えた。

夜見「ちよつと勇儀さんに聞きたいことがあつてな」

勇儀「私にかい？」

こいし「… そう、なんだ… うん、わかった」

何故かこいしはしよんぼりしながら布の袋を受け取つて、さどりの元へ戻つて行つ



た。

勇儀「いいのかい？少し寂しそうだったよ？」

夜見「ああ、それは悪かったとは思っている。だが、少し聞きたいことがあつてな」

勇儀「言つたね、そんなこと。それで、なんだい？聞きたい事つて」

夜見「こちら辺に、働ける場所はないか？」

勇儀「働ける場所かい？んゝ、もしかしたら人里にだったらあるかもしれないね」

夜見「人里？」

勇儀は人里と呼ばれる場所なら仕事があるかもと提案をし始めた。

そして、夜見は尋ねた。

夜見「その人里つてのはどこにあるんだ？」

勇儀「確か地底から出てすぐ右に歩いて少しだったはずだよ」

夜見は人里と呼ばれる場所へとりあえず行くことに決めた。

夜見「そうか、すまないな色々聞いて」

勇儀「いや、いいさ。それじゃ、私は帰るよ」

そう言つて勇儀は帰つて行つた。

夜見は人里へ向かうために自分の部屋に戻り準備をする。といつてもマントを取りに来ただけである。

マントを身に着けて部屋を出るとそこには、さとりが立っていた。

夜見「ん？さとりさん？どうしたんだ？」

さとりはどこか寂しそうな様子だった。

さとり「黒夜さん：：どこかへ、出かけるんですか？」

夜見「ああ、夕飯までには帰るさ」

夜見はさとりの横を通ろうとすると、さとりに腕を捕まれた。

夜見「：：？さとりさん？」

さとり「行かないで：：くれますか？」

さとりは絞り出すような声で夜見を止めようとしていた。

夜見「さとりさん、どうしたんだ？」

さとり「行かないで：：ください」

夜見はよく見ると、さとりが少し震えていることに気付いた。

夜見「さとりさん、何で俺に出かけて欲しくないんだ？」

さとり「：：怖いんです」

夜見「怖い？」

さとり「怖いです、あなたが：：離れて行きそうで」

さとりは怖がっていて、夜見はその理由を聞いてあげようと思った。

夜見「……なあ、教えてくれないか？何で……怖いのか」

さとりはしばらく黙っていたが、さとりは口を開いた。

さとり「私が、人の心を読めるのはわかりますよね」

夜見「ああ、そうだな」

さとり「その能力のせいなんですよ、怖いのは」

夜見は黙ってさとりの説明を聞いた。

さとり「私のこの能力のせいで色んな人や妖怪などに嫌われてきました だから私達

はこの地底に隠れて過ごすことにしたんです

でも、黒夜さんは違った 黒夜さんはこんな能力を持つてる私を認めてくれた 私の

個性だと言ってくれて嬉しかったんです

でも、黒夜さんが地上に行って地上の方が良いと少しでも思ってしまったら、ここに

戻って来ないかもしれない

あなたが離れて行くのが怖いんです」

さとりは泣きそうな声で説明をしてくれた。

そして夜見はあることをが気になり、さとりにあることを聞いた。

夜見「まさか、こいしさんもその理由であの目を？心を閉じたのか？」

さとり「……気付いてたんですね」

夜見「いや、さとりさんの説明で理解したよ さとりさんは心を呼んで、誰かが来ているかとも判断出来ることも

だけどさとりさんはこいしさんが来ていた時には、気付いていない様子だった

料理を作ってて、燐さんが来た時に言ってたしな「なんでそのままこつちに来るのよ」って」

さとり「…すごいですね あれで理解できるなんて」

すると夜見はさとりと同じ目線の高さになるようにしゃがんで、さとりの頭を撫で始めた。

さとり「く、黒夜さん」

夜見「さとりさん、大丈夫だよ 俺がこの世界で帰る場所は、この地霊殿しかないよ 例え地上がいい所だろうと、俺はこの地霊殿が1番好きなんだ」

それを聞いたさとりは、安心したのか急に泣き始めてしまった。

さとり「う、うう く、くろ… よるさん」

夜見「大丈夫だ その代わり、美味しい夕飯でも作って待っててくれよ」

さとり「は、はい」

そして夜見は立ち上がり仮面を付け、フードを被り、地上へ向かうために地霊殿を出た。そして地底を進み夜見は地上へ出た。

ちなみに地底を進んでいる間にパルスィとヤマメに会った時には自分の名前だけは言っておいた。

そして夜見は森の中を進み人里へと向かって歩き出した。

しばらく歩いてしていると森を抜けて、木で出来ているゲートが見えてきた。おそらく、そこが人里なのだろうがゲートの横には黒い着物を着て槍を持った門番であろう男性が立っていた。

門に近づくとその男性は槍を両手に持ちこちらに向けてきた。

門番「おい、止まれ」

夜見「…悪いが、通してくれ」

門番「残念だが見慣れない奴を通す訳には行かないんだ」

夜見「…じゃあ、何をすれば？」

門番「あいにく、何をしても「邪魔だー!どけえ!」ん?なんだ?」

門番の後ろから怒鳴り声が聞こえて門番は後ろを振り向く。夜見も門番の後ろを見ると門番より体格の大きい緑色の着物を着た男性が走ってきた。走っていた男性は門番にタツクルをしてきた。

ドンッ

門番「なっ!?!」

すると門番は軽々と横にぶっ飛んでしまった。そしてその男性はそのままこちらに走ってきた。

男性「てめえも邪魔なんだよ！」

男性はタツクルを夜見に当てようとするが、夜見は少し横に避けて刀を鞘に入れたままベルトから引き抜き、手に持って男性の腹にフルスイングで当てる。

夜見「ふっ！」

ドッ

男性「がはっ！」

男性は足を止めて腹を押さえて前屈みになった。夜見はその隙を見逃さなかった。夜見はその男性の顔を蹴り上げる。

バキッ

男性「がふっ」

すると男性は後ろに倒れて気絶した。すると先ほど男性にぶっ飛ばされた門番が気絶した男性に近づいた。

門番「はあ、はあ　こいつ、確か食い逃げの常習犯だったな」

すると門番は夜見を見て、予想外のことを言った。

門番「今回の件に免じて、通してやる」

夜見「……いいのか？」

門番「なんだ？ 入りたいんじゃないやなかったのか？」

夜見「……いや、入らせてもらう」

門番が人里へ入る許可を出したので、夜見はゲートを通り、人里へ入った。人里の見目は江戸時代の城下町のような見た目であり、人里を歩いている人も江戸時代のように、着物を着ていた。もちろん、マントに身を包んでいる夜見は周りからは地底を通った時のように不審な目で見られていた。

夜見はしばらく歩いていると、ある掲示板が目に入った。その掲示板を見ると依頼状が貼ってあった。

〔依頼：荷物整理〕

場所：香霖堂

内容：荷物が大量にあるためその整理を手伝って欲しい

報酬：500文

夜見はその依頼状を剥がすと来た道に戻って再び門番の元へ向かった。門番の元へ向かうと先ほどの門番はおらず別の黒い着物を着た門番が立っていた。

門番はこちらに気付くと相手から話しかけてきた。

門番「ん？ なんだい？」

夜見は黙つたまま先ほどの依頼状を見せる。

門番「ああ、香霖堂か それなら確かあつちに向かえばあつたはずだね」

門番はそう言つて地底の入り口とは反対の方向を指差した。夜見は門番の指差した方向に歩いて行つた。

門番は後ろからいつてらつしやいと言つていたが夜見は特に気にしなかつた。

20分ほど道を歩いてみると軒、道の端に建物が建つており扉の上の看板には香霖堂と書いてあつた。香霖堂は瓦の屋根に白い壁で出来ていた。夜見は香霖堂の扉を開けると中は木材の床と壁で出来ていて、日用品が棚に並べてあつた。だが、肝心の依頼人は見えなかつた。

しかし、奥の扉が開くとそこには男性がいた。

？「ん？お客さんかい？いらつしやい」

その男性は白髪で眼鏡をかけており、青い着物を着ていた。夜見はその男性に依頼状を見せた。すると男性は依頼状について話し始めた。

？「ああ、依頼を受けてくれたのか ま、仕事は依頼状に書いてあるからわかるよね じゃあ、早速始めようか」

男性はそう言つて先ほどの扉の向こうに行つた。夜見もすぐに扉の向こうへ行くと、そこには箱が乱雑に何個も置かれていた。



？「いやあ、この量を1人で整理するのは大変だね　まあ、君は箱を向こうの壁の方に重ねて置いてくればいいよ」

男性はそう言うのと夜見はすぐに仕事に取りかかった。箱はかなり重かったが持てない程ではなかった。荷物は2人で行ったため、仕事は30分程度で終わった。

仕事が終わると男性は夜見に話しかけてきた。

？「いやあ、ありがとう　本当に助かったよ　あ、ほら、報酬の500文だよ」

そう言つて男性は夜見に小さな布の袋を夜見に差し出すと夜見はその袋を受け取つて店を出ようとした。だが、箱の中にあるものが入っていたのが目に入った。夜見はそれを手に取つて見るとそれは物騒な武器だった。

すると男性は夜見に話しかけてきた。

？「ん？もしかしてそれが欲しいのかい？それは確か名前はコルト・パイソンだったかな？どうやら遠距離武器らしいんだが、僕には使い方はわからないよ？」

そう、夜見が手に取つたのはコルト・パイソンと呼ばれる銃だった。夜見はその銃を手にとつて眺めていた。

夜見（コルト・パイソン、色はブラック、装填数は6発、弾は確か9mmだったはず）  
夜見はそんなことを思つて再び箱の中を見ると9mmと書いてある巾着袋を見つけた。その袋の中には9mm弾が60発分ほど入っていた。

すると男性はこう言い始めた。

？「まあ、それが欲しいならあげるよ 君なら使い方わかってそうだしね」

すると夜見はその箱の奥に銃のホルスターも見つけたためそれをベルトに付け、そこにコルト・パイソンを入れた。どうやらサイズはぴったりのようだ。袋の片方の紐をベルトに縛って店から出ようと扉に手をかけようとした瞬間に、その扉は急に開き始めた。

ガチャ

？「おおい、霖之助 ここか？」

扉が開くとそこには少女が立っていた。その少女は金髪のロングヘアで左側の髪は三つ編みをしていて、黒い帽子を被っていた。服装は黒の服に黒のスカートを着ており、腰には白い布を巻いて後ろでリボン結びをしておりスカートの前には白い布が垂れ下げてあった。

？「ん？誰だ？お前」

少女は夜見に聞いたが夜見はそのまま帰ろうとした。

？「おいおい、無視はひどいじゃないか」

少女は夜見の肩を掴んだ。夜見は立ち止まった。

？「あ、そうだな お前、私の暇潰しに付き合ってくれないか？」

しかし、夜見は黙ったままだった。

? 「なんだ? お前、喋れないのか?」

? 「魔理沙、急に暇潰しに付き合えだなんて彼に悪いだろう? そもそも彼は、僕の依頼を受けにきたんだ」

? 「そうか! じゃあ、私の依頼だ 私の暇潰しに付き合ってくれよ」

夜見「…報酬は?」

? 「うゝん、そうだなあ 700文でどうだ?」

夜見「…いいだろう」

? 「ちよつと、君!? 魔理沙の暇潰しに付き合うのはちよつと」

? 「なんだよ、私は依頼をしたんだぜ?」

夜見「それで? 内容は?」

? 「何言ってるんだ? 弾幕ごっこに決まってるだろ?」

夜見「弾幕ごっこ? なんだそれ?」

? 「なんだ? お前弾幕ごっこを知らないのか? はあ じゃあ、いいぜ 教えてやるよ」  
そう言つて少女は外に出たため、夜見も外に出た。男性はどうやら止めようとしていたけれど諦めたようだ。

外に出ると少女はまず自己紹介をし始めた。

？「そういや、まだ名前を言っていなかったな　私は霧雨魔理沙　普通の魔法使いだぜ」

夜見（さて、何て名乗るか）

夜見「俺は、黒月夜影だ」  
くろつきよかげ

夜見は偽名で名乗った。本来の名前を名乗って後で色々自分の情報が知られるのを防ぐためだった。

そして魔理沙は弾幕ごっこの説明を始めた。

魔理沙「まず、弾幕ごっこって言うのは幻想郷での決闘みたいなものだ　例えば幻想郷で異変と言われる現象が起きた場合によく使われたりするんだ　他の使い方は、まあ、暇潰しとかに私は使ってるぜ」

夜見「・・・ほう」

魔理沙「次に戦い方だな　ルールとしては弾幕を相手にぶつけて相手を戦闘不能にさせるか、自分のスペルカードが全て攻略されたら負けなんだ」

夜見「・・・弾幕を放つのは？」

魔理沙「うーん、それは説明が難しいなあ　まあ、見ればわかるぜ」

そう魔理沙は言うとき夜見に向けて腕を伸ばして手のひらから黄色の弾幕を放った。

ピュン

夜見はその弾幕を横に避けた。

夜見「・・・おい」

魔理沙「おお、初見で避けるとは、お前もしかしたらセンスあるかもしれないぜ?」

夜見「・・・あれが弾幕か」

魔理沙「そうだ、まあ弾幕の放ち方はとりあえずイメージするのがいいかもな 慣れればそのうちに自然と放てるぜ」

夜見（イメージか）

夜見は自分の腕を伸ばして手のひらから弾幕が出るのをイメージしたが、弾幕は出なかった。

魔理沙「うくん、そうだな あと、自分の中にある気を放つイメージもしたほうがいいかもな」

夜見（自分の気か）

夜見は自分の気を腕に集めるイメージをした。

ピュン

魔理沙「あだっ!」

すると夜見の手のひらから黒い弾幕が出て魔理沙の顔に直撃した。

魔理沙「いったあゝ いやあ夜影が初心者だからって油断したぜ」

夜見「・・・痛そうだな」

魔理沙「そりや痛いぜ 結局勝負のときにその弾幕で相手を戦闘不能にさせるんだから ちなみにさらに慣れると道具から出したりすることも出来るぜ まあ、私の場合は魔法陣を展開して放つたりするんだがな」

夜見「… そうか」

魔理沙「夜影なら、刀持つてるからそれを振って弾幕を放つたりすればいいんじゃないか？あと刃に弾幕を纏わせればそれで攻撃するのもありだぜ」

夜見「… っうか」

そう言つて夜見はコルト・パイソンを引き抜いて撃つた。

ダアン

すると銃口から弾幕が出て、魔理沙の眉間に直撃した。

魔理沙「だあ!？」

夜見「… できるもんだな」

魔理沙「いったく お、お前、慣れるの早すぎだぜ」

夜見「… まあ」

魔理沙「じゃあ、次にスペルカードの説明だな スペルカードは簡単にいうと必殺技みたいなもんだぜ まあ、見てな」

すると魔理沙は帽子の中から八角形の木材の様な物と一枚の紙を取り出した。魔理

沙はそれを手に持って少し上に向かって構えた。

魔理沙「恋符 マスターズパーク」

魔理沙はそう言った瞬間、八角形の物から巨大な虹色のビームが出た。

バアアアアアアアツ

夜見「……」

魔理沙「おっと、少し威力強すぎたぜ まあこんな感じだ ちなみにスペルカードを発動させるには宣言が必要なんだ ちなみにスペルカードを全て避けたら攻略という判定になるんだ」

夜見「……そうか」

魔理沙「あ、そうだな お前にこれを渡しとかないと駄目か」

そう言つて魔理沙は紙を50枚ほど渡してきた。夜見はそれを受け取つて魔理沙に質問をした。

夜見「……これは？」

魔理沙「スペルカードの素だぜ これに気を送り込めばスペルカードの完成だぜ まあ、スペルカードを作る時はどうすれば避けにくいかとかを良く考えるんだぜ？」

夜見「多くないか？」

夜見は少し多いため、後で念のため地霊殿の皆に渡そうと思つてありがたく受け取つ

た。そして、魔理沙の言葉が少し気になったため魔理沙に聞いてみた。

夜見「……その説明だと、回避出来ないのは駄目なのか」

魔理沙「当たり前だろ、それじゃあ勝負にならない」

夜見「……まあ、確かにな」

魔理沙「まあ、いいスベルカードを作るんだぜ？さて、少し暇潰し出来たし、またあいつの所まで行こうかな」

すると魔理沙は香霖堂に立てかけていた箒を手を取った。

夜見「……つまり終わりか？」

魔理沙「ん？何が？」

夜見「……依頼」

魔理沙「ああ、そうだった、忘れてたぜ ほら」

そう言つて魔理沙は袋を投げ渡してきた。袋を見ると先ほどの香霖堂の店主と思われる人が渡した袋と同じ位しか入っていないようすだった。

夜見「……少し少ないか？」

魔理沙「ん？当たり前だぜ だって私の依頼は暇潰しに弾幕ごっこに付き合えだぜ？そりゃ報酬も減るだろ」

夜見「……まあいい」



魔理沙「じゃあな、夜影 またどっかで会おうぜ」

魔理沙はそう言うのと箆に股がってどこかへ飛んでいった。そして夜見は地霊殿に戻ることにした。

しばらくして日が傾いた頃に森の中を通っていると、草むらが不自然な動きをした。  
ガサツ

夜見「……」

夜見は草むらの方を警戒していると、ある生物が1匹出てきた。

? 「グルルル」

それは狼のような生物だった。その生物は今にも襲ってきそうだった。だが夜見は落ち着いてコルト・パイソンを左手で抜いて弾を1発装填した。

カチャツ

そして夜見はコルト・パイソンをいつでも撃てるようにハンマーと呼ばれる銃の後方に付いたものを親指で下げた。

カチツ

狼「ガウ！」

狼が跳びかかってきた瞬間に夜見は狼に向けて引き金を引いた。

ダン

すると、弾は狼の眉間に当たった。しかし、狼はそのまま夜見の左腕に噛み付いてきた。

夜見「なっ!?!ぐああ!?!」

夜見は急いで右手で刀を抜いて狼の首を斬ろうとしたが狼はそれを軽く避けた。

ヒュン

夜見「なっ!?!」

どうやら、ただの狼ではないようだった。そして夜見の左腕からは血がダラダラと流れ出ていた。

夜見（まずいな　ただの狼じゃないとすれば、どうすれば）

そんなことを考えていたら、狼はまた襲いかかってきた。

狼「ガウ!」

夜見は刀を振るが狼はまた、軽々と避けてしまう。

ヒュン

夜見（刀は駄目か）

夜見は刀を鞘に戻してコルト・パイソンを右手に持ち変えて、弾を6発込めた。

すると狼は距離を少し離れたと思ったら、いきなりこちらに向かって走り出してきた。

夜見はコルト・パイソンを撃った。

ダアン ダアン

しかし狼は左右に跳んで銃弾を避けた。

夜見（な!? 嘘だろ!?）

そして狼は跳びかかってきた。

夜見（くそ!）

ダメ元だと思いつつも狼に向かってコルト・パイソンを撃った。

ダアン ダアン ダアン ダアン

すると銃弾は狼に命中して、こちらにもたれかかるように倒れた。

ドサツ

夜見（た、倒したか?）

狼はピクリとも動かなくなった。どうやら、倒せたようだ。だが、左腕の出血がかなり酷かった。

夜見（ヤバいな、早く地霊殿に戻って止血しねえと）

そして夜見は急いで地霊殿へ戻った。

地霊殿の玄関を開けるとそこにはこいしがいた。

こいし「あ、お兄ちゃんって、きやあ! お兄ちゃん! なにその怪我!？」

夜見「こ、こいしさん すまないが治療道具を持って来てくれ」  
こいし「う、うん わかった」

するとこいしは走って2階の右側の廊下の方へ向かって行った。しばらくするとこいしは救急箱を持ってきた。

こいし「お兄ちゃん、早く手を出して！」

夜見「ああ、頼む」

夜見は左腕を出すとこいしは丁寧に腕を治療し始めた。するとそこに燐が通りかかった。

燐「あれ？どうしたの？2人とも」

こいし「お燐！急いでお姉ちゃんを呼んで来て！急いで！」

燐「え、わ、わかったよこいし様」

こいしは燐にさとりを呼ぶように言うと燐は2階の右側の廊下の方へ走ってさとりを呼びに行った。

そしてさとりと燐がこちらに来る前に治療は終わった。

こいし「はい、出来たよお兄ちゃん」

夜見「あ、ああ、すまない ありがとうな」

こいし「じゃあ、お兄ちゃん 頭撫でて？」

夜見「ん？あ、ああ わかった」

こいしは帽子を取ったため、夜見は頭を撫でた。

こいし「ふへへ♪」

こいしはとても嬉しそうだった。するとそこで、さとりと燐が走ってこちらに来た。

さとり「どうしたのって黒夜さん!? 何ですか!? その腕の包帯は!？」

夜見「こいしさんが治療してくれたんだよ」

さとり「な、なんでこんなことになったんですか!？」

夜見「地上で少し狼みたいな奴と戦ってたな」

さとり「な、なんでそんな無茶をしたんですか!？」

さとりは少し怒っていたので、夜見はさとりに謝った。

夜見「ああ、本当に、すまない」

そしてさとりは夜見の腕を治療したこいしに、お礼を言った。

さとり「こいし、ありがとうね」

こいし「ううん、いいよ、お兄ちゃんのためだもん」

夜見「そうだ、さとりさん はい、これ」

夜見はさとりにお金が入った袋を渡す。さとりは袋の中身を見て、驚いた。

さとり「く、黒夜さん なんてお金を?」

夜見「地上で稼いで来たんだよ 正直、多いか少ないかはわからないけど」

さとり「まさか、地上に行つた理由って」

夜見「お金を稼ぐ為だよ」

すると、さとりは涙を流し始めた。

燐「さ、さとり様!?!」

こいし「お姉ちゃん? どうして泣いてるの?」

夜見「お、おい、さとりさん!?! どうしたんだ!?!」

さとり「い、いえ 妖怪である私達の為にお金を稼いでくれてくれたことが、嬉しくて」

夜見「何言ってるんだよさとりさん 妖怪なんて関係ないだろ?」

さとり「あ、ありがとう 黒夜さん」

夜見「ああ、どういたしまして」

さとり「そうだ、黒夜さん、もうご飯出来てますよ 早くみんなで食べましょう」

こいし「ほんと!?! ほらお兄ちゃん! 早く食べよ!」

こいしはそう言うのと夜見の手を握ってご飯を食べる部屋へ向かう。

夜見「わ! お、おい」

そしてエントランスに燐とさとりが残った。

燐「さとり様、黒夜さんはとても不思議ですね。なんで私達の為にあんなことをしてくれるんでしょう」

さとり「それは私もわからないけど、とても優しいことは確かです」

一方、夜見はとうとう思っていた。

夜見（良かったな、さとりさん。喜んでくれて。次も頑張らないとな）

夜道は地霊殿の皆の為にお金を稼いで少しでも楽をさせて幸せにしたい。夜見はそう決意した。

## 第5話 さて仕事に行きますか

夜見は自分の部屋にマントと仮面を置いてきて、こいしと一緒に夕食を食べる部屋へ向かった。部屋に入ると机には料理が並べてあって、空は自分の席に座っていた。

空「あれ？さとり様とお燐は？」

夜見「ああ、そろそろ来ると思うぞ」

夜見がそう言った直後、扉が開いてさとりと燐が部屋に入ってきた。

さとり「さあ、温かい内に食べましょう」

こいし「うん、そうだね」

そして空以外の4人は自分の席に座って、皆で食事を始める。ちなみに夕食のメニューはもやし炒めとお米だった。

夜見・さとり・こいし・燐・空「いただきます」

食事を食べていると、夜見はあることをふと思ひ出して、ポケットからある物をみんなに渡す。

夜見「あ、そうだ そういや、みんなにこれを配らないと」

さとり「ん？なんですか？」



こいし「えっと、それって…」

燐「ただの紙だよね」

空「なにそれ、紙がお土産？」

まあ、なにも説明せずに配ったらそんなりアクションをとるのも無理はなかった。そして夜見は紙について説明をする。

夜見「この紙はスペルカードと呼ばれる物の材料らしい」

さとり「スペルカード…聞いたことありませんね」

夜見「まあ、だろうな 今から説明するよ」

そして夜見は地上で魔理沙に教わった、弾幕ごっこについて説明をした。

さとり「なるほど… 地上ではそんなルールがあるんですね」

燐「うん、わかったけどさ…」

こいし「… うん」

空「使う事って無いよね」

さとり「ちよつと！お空!？」

夜見「まあ、空さんの言う通りだ」

こいし「お兄ちゃん!?!いいのそれで!？」

夜見「まあ、もしも何かあった時の為だと考えてくれればそれでいいさ」

燐「…黑夜さんがそれでいいんらしいけどさ」

夜見「さあ、早く食べないとせつかくの夕食が冷めるぞ」

そして5人は食事を終えた。

夜見・さとり・こいし・燐・空「ごちそうさまでした」

するとさとり、燐、空が部屋を出て行って、こいしが食器をまとめ始めた。

夜見「あれ？夕食のは、こいしさんが？」

こいし「ううん、1人ずつ交代で洗ってるの　お姉ちゃん、私、お燐、お空っていう

順番でね」

夜見「そうなのか　じゃあ、さっさと終わらせるか」

夜見はこいしを手伝おうとしたが、こいしはそれを止めた。

こいし「いや、お兄ちゃんはいいいよ　部屋でゆっくりしてて、腕直ってないでしょ？」

それを聞いて夜見は言葉に甘えることにした。

夜見「そうだな　じゃあ部屋でゆっくりしてるよ」

こいし「うん、それじゃ」

そして夜見は自分の部屋へ行き、こいしは隣の部屋へ食器を洗いに行った。

夜見は自分の部屋に入るとベッドの上で横になり始めた。

夜見（今日は死ぬかと思った　まさかあの狼、頭に銃弾くらっても死なないなんて）

そして夜見はすこし目を瞑った。

しばらくすると、声が聞こえた。

「………！………ん！」

夜見（ん？誰だ？）

さとり「黒夜さん！起きてください」

夜見は目を開けるとそこにはピンクのパジャマを着たさとりがいた。

夜見「えつと……さとりさん？」

さとり「はあ、やつと起きましたか 黒夜さんのお風呂の番なのに部屋に来たら寝てるだなんて」

夜見はどうやら、いつの間にかに眠ってしまったていたようだ。

夜見「いや、すまないな」

さとり「とりあえず、早く入ってきてください あと、入り終わって髪を乾かしたらお風呂の掃除を頼みます」

夜見「わかったよ でも、俺の今着てるの制服だし、そんな毎回洗わなくてもいいんだが まあ、さすがにYシャツとかは洗うけど」

さとり「でも、上の方は洗わないと、血が付いてますし……」

夜見「ああ、そうだったな」

すると夜見は立ち上がり、ベルトに差し込んでいた刀とコルト・パイソンの入った銃ホルスター、9 m 弾の入った袋を机の上に置いた。

さとり「お風呂は階段を降りて右に曲がった廊下の突き当たりの扉ですよ 着替えは私があとで置いときます」

夜見「わかつたよ、さとりさん ありがとう」

さとり「いえいえ」

そして夜見はお風呂へ向かった。さとりの言っていた扉を開けると、脱衣場があった。脱衣場には籠があり、奥の方に扉があった。おそらくこの先がお風呂だろう。

夜見は服を籠の中に入れて、扉を開ける。するとそこには湯船があった。壁には鏡が付いていてボディソープやシャンプー、小さな椅子などお風呂に必要なものが一式揃っていた。

夜見は身体と頭を洗った。ただ左腕だけが洗えなかったのは少し残念だった。そして夜見は湯船に浸かった。お湯の温度は丁度良かった。

しばらく湯船に浸かっていると脱衣場に誰かが入ってきた。おそらくさとりだろうと思っていると、声が聞こえてきた。

さとり「湯加減はどうですか？」

夜見「大丈夫だ 丁度良いよ」

さとり「それは良かったです。じゃあ着替え、置いときますよ。あと、服は洗いに行つてきます」

夜見「ああ、頼んだ」

夜見は湯船に浸かっていたが、何故かさとりが脱衣場から出る気配がなかった。夜見は脱衣場にいるさとりに声をかけてみた。

夜見「さとりさん？どうかしたのか？」

さとり「あ、いえ、何でもありませんよ？」

夜見「…なんかあるのか？」

さとり「…はい。少しお話がしたくて」

夜見「今、聞いてやれるが？」

さとり「いえ、お風呂から上がったあとでいいですよ」

さとりはそう言つて脱衣場から出ていった。すると、夜見はお風呂から出てきれいに畳まれたタオルで身体を拭いてドライヤーで頭を乾かした。そして置いてあつた紺色のパジャマを着た。

夜見（そういや、ドライヤーって使えたけど地底でどう発電してんだ？）

そんな事を気にしながら夜見はお風呂を掃除して、自分の部屋へ向かった。部屋でしばらくベッドに座っていると、扉の向こうから声が聞こえてきた。

さとり「あ、あの、さとりです 入ってもいいですか？」

夜見「ああ、いいぞ」

ガチャ

さとり「失礼します」

夜見「まあ、ここに座りなよ」

夜見は自分の左手でベッドを軽く叩いてここにさとりを座らせようとすると、さとりは夜見の左に座った。

夜見「それで、話ってなんだ？」

さとり「あ、はい 実はあの、本当はお礼を言いたかったんです」

夜見「お礼？」

さとり「はい、そうです … 黒夜さん、本当にありがとうございます、私の事を認めてくれて 私、本当に嬉しかったんですよ 今まで私は嫌われる存在で、私の事を認めてくれる人なんていないと思ってました けど黒夜さんは私の心を読む能力を私の個性だつて言ってくれて、実は泣きそうだったんですよ それに「なあ、さとりさん」… はい、なんですか？」

夜見「さとりさんは気付いてないだけだよ」

さとり「何に… ですか？」

夜見「さとりさんがどんなに苦しい思いをしたかは、俺にはわからない。でも、一つだけ、わかったことがあるんだ」

さとり「……何がわかったんですか？」

夜見「俺が来る前からすでにさとりさんは、こいしさん、燐さんと空さんに愛されていたんだよ。だから、自分が嫌われていただなんて言わないでくれ。さとりさんは自分を少し否定している。自分を否定するってことは自分の事を愛してくれなかった人も否定してるってことだ。だから、もう、嫌われているだなんて2度と言わないでくれ」

夜見がそう言うときとりは笑顔で夜見に言った。

さとり「わかりました。じゃあ、黒夜さんも自分を否定しないでくださいよ。皆、黒

夜さんのこと大好きですから」

夜見「ああ、絶対に否定しないよ」

さとり「ふふ、今日はありがとうございました。それじゃあ、また明日」

さとりはそう言つて自分の部屋へと戻つていった。

夜見「……絶対に否定なんてするかよ……2度と」

夜見はそう呟いてベッドに横になり、眠りについた。

夜見「……ん、ん？朝か？」

夜見は眠い目を開ける。すると机の上には自分の制服があつた。

夜見「ああ、さとりさんが持ってきたのか？」

制服を見ると制服の穴は綺麗に縫われており、血も綺麗に落とされていた。

早速、夜見は制服に着替え始めた。制服はちゃんと違和感なく着ることができた。すると扉からノックが聞こえた。

コンコン

夜見は扉を開けるとそこにはこいしが立っていた。

こいし「おはよう、お兄ちゃん」

こいしは何故か4人分のパジャマを持っていた。

夜見「ああ、おはよう　なんだ？もうご飯か？」

こいし「いや、違うよ　パジャマを取りに来たの」

夜見「パジャマか　はい」

夜見はこいしにパジャマを渡すとこいしは1階に降りて行った。

その直後さとりが部屋から出てきた。

さとり「おはようございます　黒夜さん」

夜見「おはよう　さとりさん　ずいぶん早い時間なのかな？多分」

さとり「ええ、おそらく朝の5時辺りでしょう」

夜見「そうか、じゃあ今から朝食作るのか？」



さとり「いえ、朝はパンとジャムだけなので」

どうやら朝は皆、パンのようだった。

夜見「じゃあ、用意しようか」

さとり「ええ、そろそろ皆集まるでしょうし」

夜見とさとりはキッチンへ行き、パンとジャムを用意してテーブルに並べる。しばらくすると皆集まって来て、全員揃って食事をする。

夜見・さとり・こいし・燐・空「いただきます」

食事を始めるとこいしは夜見に話しかけた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん 今日も地上に行くの？」

夜見「ああ、朝食を食べ終わったらな」

さとり「でしたら黑夜さん、いつ頃帰って来るのですか？」

夜見「また、夕食前には帰って来るよ」

夜見は朝から夕方まで地上でお金を稼ごうとしていた。そこで燐は夜見に質問をした。

燐「黑夜さん、昼飯はどうするんだい？」

夜見「ああ、地上でなんか食べようかなくて」

夜見はそう答えるとみんな、一斉に夜見のを見てきた。

夜見「え、な、何？」

夜見はみんな見てきたことに疑問を持っていると次々とさとり達は口を開いた。

さとり「ずるいですよ、黒夜さん」

こいし「1人で夕食しようだなんて」

燐「あたい達地上のご飯なんて食べられないのに」

空「うん、確かにこれはずるいね」

どうやらみんなは地上で夕食する事に納得いかないらしい。そこで夜見は提案する。

夜見「わ、わかった　じゃあ、こうしよう　俺は帰る途中で何かご飯をお土産として

買ってくるのはどうだ？」

すると、みんなは笑顔になり始めた。

さとり「まあ、それなら私はいいですけど」

こいし「うん、私もそれならいいよ」

燐「あたいもそれならかまわないよ」

空「お土産買ってくるの？なら私もそれでいいや」

どうやら夜見の提案にみんな納得してくれたようだった。

夜見（よ、良かった、でも、そしたら昨日よりお金稼がないと）

夜見はどうやらかなり自分が不利な提案をしてしまったようだ。だが、時間は流れて

いき、朝食も食べ終わってしまふ。

さとり・こいし・燐・空「ごちそうさまでした」

夜見「・・・ごちそうさま」

朝食を食べ終わると夜見は自分の部屋に戻って地上に出る準備をする。

夜見（自分で提案したからには・・・ちゃんと自分で責任とらないとな・・・）

そんなことを考えながら夜見は武器を装備し、マントと仮面を被る。そして夜見は地霊殿を出ようとしたら、こいしに呼び止められた。

こいし「お兄ちゃん」

夜見「ん？どうしたんだ？」

するとこいしは夜見に近づいて、急に夜見に抱きついてきた。こいしとは身長差が大きいいため、こいしは腰辺りに抱きついている様子だった。

夜見「こ、こいしさん!？」

こいし「ふふ、お兄ちゃん 頑張つてね」

どうやら、こいしなりに夜見を応援しているようだった。

夜見「ああ、わ、わかったよ 頑張つて来るよ」

夜見はそう言うときいしはすんなりと離れた。

そして夜見は地霊殿を出た。振り返るとこいしが手を振っていたので、こちらも手を

振り返した。そして夜見は地上へと出た。

地上へ出た夜見はまず始めに人里へ向かった。人里のゲートには昨日と同じ門番がいた。

門番はこちらに気付くと道を譲った。

門番「いいぞ、通って」

夜見「…すまないな」

門番「いや、いいんだ」

そして人里へと入った夜見は昨日と同じく掲示板の所へ向かうと、依頼状は2枚あった。

「依頼：キノコ狩りの手伝い」

場所：香霖堂の前に集合

内容：依頼の通り

報酬：キノコ狩りの結果による

「依頼：服作りの手伝い」

場所：魔法の森のアリス宅

依頼主：アリス・マーガトロイド

内容：人形の服を作るのを手伝って欲しい

2着ほどで構いません

報酬：2銭

夜見は2枚とも剥がす。片方はすぐく丁寧な字だったが、もう片方はとても適当な内容だった。

夜見（誰だよ、キノコ狩りの依頼状出した奴　こんな依頼俺じやなきや受けないぞでも、もう片方はずいぶん丁寧だな、自分の名前まで出して　アリスさんか、いい人そうだな）

夜見はそんなことを考えながらもまずはキノコ狩りの方へ向かう。何故なら魔法の森の場所をキノコ狩りの依頼主に聞くためだった。

夜見は人里から出て、香霖堂に來ると昨日見た人物がいた。それは魔理沙だった。そして魔理沙はこつちに気付くと大声で呼んできた。

魔理沙「おーい！夜影じゃないか　もしかして依頼受けてくれたのか？」

どうやら、キノコ狩りの依頼は魔理沙が出していたようだ。夜見は正直帰ろうかとも考えたが、このまま帰るとただじゃ済まなそうなので仕方なく依頼をこなすことにした。

魔理沙「いやあ、キノコ狩りって1人でやってると色んなキノコを見落としてる時もあるからさ、そこでお前の出番ってことになったんだぜ」

夜見「俺が依頼状を取ったばかりにな」

魔理沙「まあ、細かいことは気にしても仕方ないぜ」

夜見「・・・ ああ」

夜見は大人しく魔理沙についていくことにした。

しばらく歩いていると目の前に森が出てきた。すると、魔理沙は小瓶を夜見に差し出してきた。

魔理沙「ほら、これを飲むんだぜ」

その小瓶の中には何色とも表現出来ないような液体が入っていた。

夜見「・・・ これは？」

魔理沙「それは、森の瘴気の効果が無効化させる薬だぜ、普通の人間がこの森の瘴気をまともに吸ったら大変なことになるぜ？」

その説明を聞いた夜見は小瓶を開けて仮面を少しずらし、一気にその液体を飲み干した。ちなみに味は意外にも、ただの水と同じ感じがした。

魔理沙「よし飲んだな じゃあ、早速入ろうぜ」

夜見「・・・ お前は飲まなくていいのか？」

魔理沙「私はこの森に住んでるんだ、もう耐性が付いてるんだ」

魔理沙は魔法使いと言っていたが、結局は人間だ。なのにこの森の瘴気になんて耐性

が付くのかは夜見は少し疑問に思ったが、聞くと色々面倒になりそうだったので、やめておいた。

魔理沙「じゃあ、出発だぜ」

そう魔理沙は声を出していたが夜見は黙ったまま一緒に森の中に入っていった。すると、早速夜見はキノコが木の枝に生えているのを見つけた。

夜見「おい：： あれは？」

魔理沙「ん？ おお！ すごいな夜影 あの子ノコは結構レア物だぜ」

すると、魔理沙は箒で空を飛んで、木の枝に生えてあるキノコを取った。すると、そのキノコを夜見に渡してきた。

魔理沙「ほら、荷物持ちは男の役目だぜ」

夜見「：： はあ、わかったよ」

夜見はキノコを見つけたときに魔理沙に報告して、魔理沙はキノコを取って夜見に持たせた。途中から袋を渡してきたが、その袋の数も増えに増えた。

魔理沙「ふう、こんなもんだな よし、じゃあ私の家まで運んでくれ」

魔理沙は呑気にそんなことを言っていたが、夜見は両手に4つずつ袋を持っていた。しかも1つの袋の重さは2kgほどであった。しかも左腕は怪我をしてるためつかうた。

しばらく歩いてみると、黒の屋根に白い壁の家が見えてきた。その家には霧雨魔法店と書かれた看板があった。

「どうやら、ここがゴールのようだ。」

魔理沙「よし、そこに袋を置いていいぞ」

そう言われた夜見は袋をすぐに置いた。夜見は袋を3時間ほど持たされていたためとても疲れていた。

そして魔理沙は袋を漁ってキノコを分別し始めた。

夜見はその間、ずっと息を整えていた。

魔理沙「よし、こんなもんかな」

魔理沙がどうやらキノコを分別し終えたようだ。

すると、霧雨魔法店の扉が開き始めた。

扉の向こうには何冊か本を持った少女と浮いている人形がいた。

その少女は金髪のショートヘアで頭に赤いカチューシャを着けていた。服装は青い服に青いスカートを着ていた。ちなみに浮いている人形は金髪で赤い服とスカートを着ていた。

すると、魔理沙はその少女に魔理沙は話しかけ始めた。

魔理沙「あ！その本！私がまだ借りたばっかの本じゃないか！」



？「何よ、魔理沙 勝手にあなたが持つて帰っただけでしょ」

魔理沙「いや、私は勝手に持つてってない ちゃんと本を持つて借りるって言ったじゃないか」

？「私はいいだなんて一言も言っていないわよ」

何故か2人は本について色々言い合ってしまった。

夜見が近づくと魔理沙の肩を軽く叩いた。

魔理沙「なんだよ、今忙しいんだ」

夜見「…報酬は？」

魔理沙「ああ、そういや、そうだな んー、今回はレアなキノコが多かったから60

0文だな」

そう言つて、魔理沙は夜見にお金の入った袋を渡してきた。すると、少女は魔理沙にこう言つた。

？「へえ、魔理沙、あんたこの少年に依頼でも出したの？」

魔理沙「なんだよ、出しちゃいけないルールだなんてないだろ？」

？「まあ、どうせ無理矢理付き合わせたんでしょうけど」

魔理沙「はあ？何を言ってるんだ？こいつは人里の依頼状を見て受けたんだぜ」

魔理沙がそう言うのと少女は少し目を見開いた。

？「人里の依頼状？　ね、ねえ、あなたは、もしかしてもう一枚依頼状持ってない？」  
少女は夜見に詰め寄ってきた。そして夜見はもう一枚の依頼状を見せると少女は驚いた様子だった。

？「あ、あなた、私の依頼を受けてくれたの？」

少女の言葉を聞く限り、この少女がアリス・マーガトロイドらしい。

魔理沙「なんだ、アリスも依頼出してたんじゃないか」

アリス「そんな私の自由でしょ　あ、まずは自己紹介をしなきゃね　私の名前はアリス・マーガトロイド、魔法使いよ　魔法使いと言っても魔理沙とは違うけど」

夜見「・・・黒月夜影だ」

お互いに自己紹介をすると、アリスは夜見を自分の家に連れていこうと話しかけた。

アリス「ありがとうね、依頼を受けてくれて　私の家はあっちだから　さあ、行きましょう」

だが、魔理沙は止めに入った。

魔理沙「お、おい、アリス　話はまだ済んでないぞ！」

だが、アリスは無視して、夜見に話しかけながら、自分の家に向かっていった。

アリス「あ、ちなみにこの浮いている人形はシャンハイって名前なの」

夜見「・・・そうか、上手に出来るな」

魔理沙が後ろで何か叫んでいたが夜見は気にしないことにした。

しばらく歩いてみると、青い屋根と白い壁の家が建っていた。ここがアリスの家だろう。

アリス「さあ、中にどうぞ」

夜見「・・・お邪魔します」

夜見は家の中に入るとそこはとても丁寧に掃除されていて、とても気持ちのいい空間だった。

アリス「まあ、その丸テーブルの椅子に座って待っていてくれる？ちようどお昼だからご飯を食べましょ」

夜見はアリスの言っていた椅子に座っているとアリスはバスケットを持ってきた。中にはパンが入っていた。

アリス「ごめんなさい 今、これしかないんだけどいいかしら」

夜見「ああ、構わない」

アリス「そう じゃあ、早く食べましょ」

すると夜見はフードを後ろに下げて仮面を外してパンを食べ始めた。

アリス「そういえば、なんでそんな格好をしていたの？」

夜見「・・・素性はあまり晒したくないんだ」

そこでアリスは少し夜見に挑発気味に話しかけた。

アリス「へえ、そうなのでも、私には顔を見せるのね」

夜見「あんたは、あまり俺のことを広めないだろうしな」

アリス「あら、そうとは限らないかも知れないわよ？」

夜見「……あんたを信用しちや駄目なのか？」

アリス「あら、そんなこと言われたら広めにくいじゃない まあ、最初っから広める

気なんてなかったけどね」

夜見「だろうな」

夜見とアリスは喋りながらパンを食べていると、バスケットの中は空っぽになった。

アリス「あら、食べ終わっちゃったわね じゃあ、仕事を頼もうかしら」

そう言つてアリスはバスケットをどこかに持つて行つた。するとアリスは沢山の布と裁縫道具を持つてきた。そしてそれらをテーブルの上に乗せ、アリスは仕事の説明をし始めた。

アリス「あなたには私の切つた布を糸で縫い合わせて、人形の服を作ってもらいたいの まず、手本を見せるからしっかりと見てね」

するとアリスは見事な手捌きで布に糸を縫い合わせていった。夜見は真剣にその縫い方を見ていた。すると、アリスはあつという間に人形の服を作り上げた。

アリス「どう？ 大体わかったかしら」

夜見「ああ、大体わかった」

アリス「そう、じゃあ早速縫ってね 私は布を切ってるから」

こうして夜見とアリスは仕事を分担して服を作り始めた。夜見はアリスほどとはいかないが、服を丁寧縫い合わせていた。

アリス「あら、上手じゃない 普通、縫い方がわからなくなって手こずる筈なのに」

夜見「・・・そうか？」

アリス「ええ、かなり上手よ」

そんな会話をしながら服を4時間ほど作り上げていると、15着ほど出来ていた。

アリス「こんなに作れたならもう十分ね」

夜見「ん？ 仕事は終わりか？」

アリス「ええ、そうよ ほら、報酬の2銭よ」

アリスはそう言って夜見に2銭を渡した。そして夜見は魔理沙のくれた600文が入った袋に2銭を入れた。するとアリスは黒い布を縫って何かを作り始めた。

夜見「ん？ 何を？」

アリス「ちよつと待っててね すぐ出来るから」

そんなことを言ってアリスは黙々と布を縫っていた。夜見は少し知りたいことが

あつたので、アリスに質問をした。

夜見「なあ、1ついいか？」

アリス「ん？何？」

夜見「お金の単位ってどう計算するんだ？」

アリス「あなた、なんでそんなことを知らないの？常識よ、普通　まあ、いいわ　ま  
ずお金の単位は文、銭、円に別れているの　1000文は1銭、1000銭は1円に相  
当するの」

夜見「そうか、すまない　急に聞いて」

アリス「別にいいわ：．．よし、出来た」

アリスは黒い布を縫って黒い服とズボンを作った。服の前はボタンで留められるよ  
うになっていて、後ろの裾は真ん中から2つに別れて少し三角形の形で伸びていて、垂  
れている形になっていた。

その服とズボンを袋に入れると、夜見に渡してきた。

夜見「ん？何故？」

アリス「依頼状に書いてあつた数より多く服を縫つたお礼よ」

夜見「そうか、じゃあ　ありがたく頂くよ」

夜見は服の入った袋を受け取って、仮面を被りアリスの家を出た。

アリス「このままあつちに向かえば香霖堂に着くはずよ」

夜見「ああ、ありがとう」

そしてしばらく森の中を歩いていると、森を抜けて香霖堂の前に出た。そして夜見はそのまま人里へ向かった。

そして、夜見は人里に着き、そのまま中へ入っていった。さとり達にご飯を買ってくるといふ約束をしたからである。夜見は何を買おうか悩んでいると一軒のうどん屋があつた。夜見はそのうどん屋に入ってみることにした。

うどん屋の中にはテーブルが6つほどあり、厨房は客からも見える形になっていた。そして、3つのテーブルでうどんを食べている人達がいた。さほど人気でもなければ不人気でもないのだろう。夜見は厨房でうどんを作っている店員に話しかけた。

夜見「なあ、注文……いいか？」

店員「なんだ？ その仮面を被ったあんちゃん、何を頼むんだ？」

夜見「うどんの持ち帰りは可能か？」

店員「うどんの持ち帰りかい？ いくつ欲しいんだ？」

どうやら、うどんの持ち帰りは出来るらしい。そして夜見は指を5本立てた。すると店員は店の奥に入っていった。しばらくすると、店員は小さな箱を5つ持って来た。

店員「はい、持ち帰り用のうどんだ。麺自体に味が付いているから水でほぐして食べる

ようにな」

夜見「……いくらだ？」

店員「500文だ」

すると夜見は店員に500文を渡して、5つの箱を受け取って店を出る。そして夜見は地霊殿に帰るため、人里を出て、地底へと入っていった。

地底を進んで行き地霊殿の前にたどり着くと玄関にはこいしが立っていた。こいしは夜見に気付くと手を振り始めた。

こいし「お兄ちゃん！お帰り！」

夜見「ああ、ただいま」

こいしは夜見の持っていた箱を見るとこいしは夜見に聞いてきた。

こいし「あ、お土産！ちゃんと買ってきたんだね」

夜見「ああ、約束は守らないとな」

こいし「ふふ さあ早く夕食にしよ」

そして、夜見は仮面を外し、こいしと地霊殿に入った。そして夜見はそのままキッチンへ向かう。

そして夜見は持って帰った箱を開けると、中には麺が丸まって入っていた。

夜見（まあ、ちゃんと一人分はあるな）



そう思いながら夜見は水で麵をほぐして箱の中に盛り付けていった。そうしてるとさとりが入ってきた。

さとり「あら、うどんを買ってきたんですか？」

夜見「ああ、そうだよ 運ぶの手伝ってくれるか？」

さとり「はい、もちろん ところでその袋はなんですか？」

さとりが指を指した袋はアリスが作ってくれた服の入った袋だった。

夜見「ああ、これが これは仕事を頑張ったお礼だっかっていって依頼主が服を作ってくれたんだ」

さとり「へえ、なるほど つまり黒夜さんは誰かの依頼をこなしてお金を稼いでいたんですか」

夜見「まあ、そういうことだな ああ、そうだ はい、今回の稼ぎ」

そう言つて夜見今回稼いだお金をさとりに渡した。さとりはそれを受け取ると、とても嬉しそうだった。

さとり「ありがとうございます じゃあ、ご飯を運びましょうか」

そう言つて2人はうどんを隣の部屋に運んで席に着いた。こいし、燐、空はすでに席に座っていた。

夜見・さとり・こいし・燐・空「いただきます」

そう言つて皆うどんを食べ始める。うどんは汁が無くてもしつかり味が付いていて、とても食べやすかつた。

夜見「おお、結構うまいな」

さとり「そうですね しつかり味も付いていますし」

こいし「お兄ちゃん うどんを選んで正解だつたね」

燐「地上のうどんつてこんなに美味しいんだね」

空「私この味好きだなあ」

どうやら、うどんを選んで正解だつたようだ。そして、皆、あつという間にうどんを完食した。

夜見・さとり・こいし・燐・空「ごちそうさまでした」

そして、夜見は部屋に戻つてアリスから貰つた服を広げてみた。

夜見（結構いいな 明日はこれを着るか）

そんなことを思いながら服を袋に戻して、マントや武器を外した。

夜見（ふう、今日は疲れたし、少し寝るか）

そうして夜見はベッドに入って眠りに着いた。

しばらくすると頭になにか衝撃を受けた。

夜見「あだっ!？」

夜見が起きるとそこにはピンクのパジャマを着たさとりがいた。

さとり「黑夜さん？またですか」

夜見「え？ああ、お風呂か わかったよ、すぐに入るよ」

そう言つて夜見はお風呂に入つて、上がったら頭を乾かし、パジャマを着て、お風呂を掃除した。そうして、夜見は自分の部屋に戻つた。

夜見（：：）少し、暇だな 少し地上でも見てみるか）

すると夜見はマントを身につけて、地上へ出た。空を見上げるときれいな星が見えた。そして、夜見は近くにあつた石に腰をおろした。

夜見（きれいな星だ こんな、俺の住んでた世界では見れなかつたなあ）

そんなことを思っていると、背中になにかもたれかかる感覚があつた。すると後ろから声が聞こえた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん」

どうやらこいしが自分の背中に背中を預けていたようだ。こいしは黄色のパジャマを着ていた。

夜見「：：） どうした？」

こいし「お兄ちゃんは、私は正しいと思う？」

夜見「：：） なにをだ？」

こいし「私が、心を閉じたこと」

夜見「… そうだな」

少し夜見は考え込んで、こいしに話した。

夜見「別に俺は正しいとは思わないし、間違ってるとも思わない」

こいし「それは、どうして？」

夜見「じゃあ、逆にこいしさんはどう思う？」

こいし「… 私はわからないよ」

夜見「こいしさんが正しいと思うならそれでいいと思う でも、もし間違ってると思うなら今からでもいい、前には戻れないけど、またやり直せばいいじゃないか こいしさんの人生はこいしさんのものだ 誰かに委ねたりするものじゃないよ」

夜見はそう言ってマントをこいしにかけて地底へ戻っていった。こいしは夜見のマントをぎゅつと握っていた。

夜見（さて、そろそろ寝るかな）

そうして夜見は地霊殿に着き、自分の部屋に戻って眠りについた。

しばらくして、夜見は目覚めた。

夜見「ふわああ、そろそろ朝か？」

夜見は目覚めて机の上を見るとマントと制服が丁寧に畳まれて置いてあった。どう

やらこいしはちゃんとマントを返しに来ていたようだ。

すると夜見は昨日アリスから貰った服に着替えたが、ズボンが少し緩い気がしたので制服のベルトを着けた。そして、パジャマを畳んで机の上に置いた。

夜見（まだ朝じゃないのか？ 時計が無いからわからないな…よし、地上に出て確認するかな）

そんなことを思っていると、扉からノックが聞こえた。

扉を開けると昨日と同じようにこいしが4人分のパジャマを持って立っていた。

こいし「お兄ちゃん、パジャマの回収だよ」

夜見「ああ、ほら パジャマ」

夜見はそう言ってパジャマを渡して、キッチンに向かった。するとそこにはもうさとりがいた。

さとり「おはようございます 黒夜さん」

夜見「おはよう、さとりさん 朝食の準備手伝うよ」

さとり「じゃあ、お願いします」

さとりと夜見は朝食の準備をして隣の部屋の机に並べる。するとこいし、燐、空はすぐにやって来て食事をする。

夜見・さとり・こいし・燐・空「いただきます」

そして、皆は食事を済ませた。

夜見・さとり・こいし・燐・空「ごちそうさま」

そして、夜見は立ち上がって地上に出ようとする。

夜見「さて、今日も頑張るかな」

さとり「ふふ、黒夜さん、期待してますよ」

こいし「お兄ちゃん、頑張つてね」

燐「黒夜さん、あまり無茶しないでね」

空「お土産、いいの持ってきてね」

夜見「じゃあ、行ってきます」

さとり・こいし・燐・空「行ってらっしゃい」

そして夜見は自分の部屋で武器を装備してマントと仮面を被り、地上に出るために地

霊殿を出て、地底を進んでいった。

だが、夜見は今日は仕事が出来ない事になってしまう。

## 第6話 異変を止めに

夜見は地上に出るとあり得ない光景を目にした。

夜見「……なんだよ……これ」

夜見は地上に出るとそこはいつもの地上ではなく、空が紅い霧に覆われている地上だった。

そして夜見はある言葉を思い出した。

夜見（もしかして、これが異変ってやつなのか？）

夜見は魔理沙が弾幕ごっこの説明の時に言っていたことを思い出した。どうやらこれは誰かが起こした異変のようだった。

夜見（でも、一体誰がこんなことを？ 紅い霧…… 紅い、霧 ん？ 紅い霧？）

夜見はあることを思い出していた。それは幻想郷に初めて来た日のことだった。

夜見（そういうえば、あの湖でうつすら見えたあれって一体なんだったんだ？）

夜見は幻想郷に初めて来た日に湖で赤いなにかを見ていた。もし、あれが建物だったら誰が住んでいる可能性もある。

夜見（もしかしたら、湖で見えたあれかもしれないな）

夜見はそう思い、記憶を頼りに湖へ向かってみることにした。

夜見は森を歩いていると、先の方に湖が見えてきた。

夜見（お、こつちで合つてたみたいだな）

夜見は湖のところに出ると、初めて来た時よりは霧が薄くなっていた。そして夜見は回りを見渡して、あるものを見つけた。

夜見（あれは……屋敷？）

夜見が見たものは壁からなにもすべて赤色の大きな屋敷だった。

夜見（おそらくあの屋敷に異変を起こした張本人がいるんだな）

そうして夜見は赤い屋敷へ向かった。

赤い屋敷に近づくと、その屋敷はとても大きいことがわかった。

夜見（まじか、地霊殿より大きいんじゃないか？）

屋敷に近づいてわかったが屋敷の周りは3mほどの赤い塀で囲まれていた。

そして正面には門があったが、門の前には女性が腕を組んで立っていた。

その女性は赤い髪のロングヘアで頭には緑色の背の低い帽子のようなものを被っており、帽子に付いている黄色の星には龍と書かれていた。服装は緑色の裾の長いチャイナ服を着ていた。

夜見（ただでは通さないだろうな）



夜見は警戒しながらその女性に近づくと、その女性は夜見にハイキックを決めてきた。夜見はそれを右腕で防いだ。その一撃はとても重かった。

夜見（なんだこいつ、ただ者じゃねえぞ）

夜見は一旦5mほど距離を置くと女性は夜見に話しかけてきた。

？「人間が一体なんの用ですか？」

夜見は女性の言葉が少しおかしいことに気付き、こう返した。

夜見「…妖怪か？」

すると女性は少し目を見開いて驚いていた。

？「何故そんなことを聞くんですか？」

夜見「…いや、いいさ」

夜見はこの時点で女性が妖怪であることをがわかった。理由としては異常な力の強さ、女性が「人間が一体なんの用ですか？」と聞いてきたこと、夜見の質問に否定しなかったことである。

そして、夜見は無理だと思いが一応聞いてみる。

夜見「…通してくれないか？」

すると女性は予想通りの返事をした。

？「いえ、お断りします」

それを聞いた夜見はコルト・パイソンを左手で引き抜き、女性に銃口を向けた。そして夜見はこう言った。

夜見「……じゃあ、力づくだ」

すると女性は構えをとった。

？「私と勝負をするのですか、いいでしょう。では、紅美鈴ほんめいりんいきます」

そして、勝負が始まり夜見はコルト・パイソンから弾幕を撃つ。

ダアン　ダアン　ダアン

弾幕はかなりの速度で美鈴に向かっていくが、その弾幕をすべて回避しながらこちらに近づいて来た。すると夜見は右手で刀を引き抜き、美鈴に向かって縦に振るが美鈴は横に回避して、ハイキックをしてきた。

だが、夜見はしゃがんで回避すると同時に足払いを仕掛けるが、美鈴は容易く跳んで回避し、空中で夜見に回し蹴りを放つ。しかし夜見は後ろに跳んで避けた。

美鈴「中々やるじゃないですか」

夜見「……お前もな」

美鈴「では、少し本気でいきますよ」

すると美鈴は夜見に向かってもう一度ハイキックを放つ。それを夜見はしゃがんで避けるが、美鈴はそのまま回りながら後ろ蹴りをしてきた。

夜見「な!？」

だが、夜見は跳んで避けて、美鈴に向かって刀を振る。

ヒュン

それを美鈴は上体を少し後ろに傾けて避け、空中にいる夜見に向けて拳を繰り出す。  
メキツ

夜見「がつ!？」

美鈴の拳は夜見の腹に直撃して、夜見は10mほど飛ばされた。

美鈴「どうしたんですか、あなたの力はその程度なのですか？」

美鈴は挑発をしてくるが、夜見は挑発に乗らず美鈴をどう倒すかを考える。

夜見（くそ、おそらく接近戦では敵わない なら、遠距離戦に持ち込むしかないな  
だけど、あいつは弾幕を避けて接近してくる どうすれば）

そんなことを考えていると美鈴は1枚の紙のようなものを取り出した。

それはスペルカードだった。

美鈴「来ないならこっちからいきますよ 「光符 華光玉」」

そう言うのと美鈴の両手には光が集まって両手を前に構えるとその光は1mほどの玉  
となり、夜見に向かって飛ばしてきた。

夜見「くっ!？」

夜見は横に跳んで美鈴のスペルカードをギリギリで避けた。そして、夜見はある作戦を思い付く。

夜見（そうだ、スペルカードを使えばいいんだ　だが、どんなスペルカードを……よし、これだ！）

そして、夜見は白紙のスペルカードを取り出す。そして、そのスペルカードに気を送ってスペルカードを作った。

夜見「[降符　ブラックレイン]」

夜見がスペルカードを発動させると、美鈴の上から小さな黒い弾幕が2×2mの範囲に無数に降ってきた。

だが、美鈴はその弾幕をすべて避けていた。

美鈴「なんですか、こんなスペルカード誰でも避けられますよ」

すると、夜見は美鈴に向かってコルト・パイソンを構えて弾幕を撃った。

ダアン　ダアン　ダアン

美鈴「なっ?!　そういうことですか!？」

そこで美鈴は夜見の作戦に気付いた。夜見はスペルカードで美鈴の避ける方向を少しでも制限して、そこに自分で弾幕を放ってその弾幕を当てる作戦だった。

美鈴「考えましたね　しかしスペルカードの範囲から離ればこちらのもの!」

美鈴は弾幕を避けながら夜見に近づき、スペルカードの範囲から離れ始めた。

美鈴（よし、離れられた）

そう美鈴は思った。しかし、弾幕の雨はまだ美鈴の上から降注いでいた。

それに美鈴は驚きを隠せなかった。

美鈴「な、何故!？」

夜見（残念だったな、スペルカードの範囲は俺が操れるんだよ）

そう、このスペルカードは夜見の思った通りに範囲を動かせる効果があった。

そして、夜見は引き続き弾幕を美鈴に撃つ。

ダアン ダアン ダアン

その弾幕を美鈴は避けようとするが夜見のスペルカードのせいで、避けることが出来なかった。

美鈴「がっ!?!くっ!?!きやっ!?!」

そして、美鈴は夜見が弾幕をどこに狙って放っているか気付いた。

美鈴（あいつ、私の関節を狙って）

そう、夜見の弾幕はすべて腕や足の関節に当たっていた。そして、関節に弾幕を受け続けた美鈴は動きがぎこちなくなっていた。そこで夜見のスペルカードは時間切れで美鈴にスペルカードを攻略されてしまった。

夜見（時間切れか　だが、だいぶダメージはあつたはずだ）

美鈴（く、思い通りに体が動かない）

美鈴は思うように体が動かなくなっていた。

そして、夜見はそこに弾幕を撃つ。美鈴はその弾幕を避けようとするが足が思うように動かず転んでしまう。

美鈴「きゃっ!？」

転んだ美鈴に夜見はコルト・パイソンを構えて近づいていく。美鈴はすぐに立ち上がろうとするが、腕も思うように動かず、立ち上がることが出来なかった。

美鈴（私の負けか　お嬢様、申し訳ございません）

そして、美鈴は目を瞑ったが痛みはいつまで経っても襲つて来なかった。

カチャツ　キンツ

美鈴（あ、あれ？）

美鈴は目を開けた瞬間、武器をしまった夜見の肩に担がれた。

美鈴「なっ!？」

すると夜見は門のすぐ横の方に美鈴が壁にもたれかかれるように降ろした。

そして、美鈴は夜見に聞いた。

美鈴「な、何故？こんなことを？」

夜見「… お前、動けないだろ」

美鈴「私は妖怪ですよ。こんなダメージ、すぐに回復してあなたを倒すことだって出来るんですよ。なのに、何故？」

夜見「… お前、目を瞑った時に負けを認めただろ。それに俺は異変を解決しに来たんじゃないくて、異変を止めに来たんだ。お前をこれ以上傷付ける必要はない。だから出来るだけお前を動けないようにした」

そう夜見は言う。と美鈴は驚いた。夜見は異変を止める為に自分と戦い、出来るだけ怪我をさせないようにしていたのだ。

美鈴「あなたはととても不思議な人ですね。妖怪である私に、出来るだけ傷付けないように戦うなんて」

夜見「そもそも俺は争い事は嫌いだ。それに妖怪だろうが、女性を傷付けるのは気分は良くないしな」

すると、美鈴は微笑んだ。

美鈴「そうですか、では先に進んで構いませんよ」

夜見「ああ、すまないな」

そして夜見は門を開けようとしたら、夜見は美鈴に声をかけられた。

美鈴「そうだ、1つ聞いていいですか？」

夜見「……なんだ？」

美鈴「名前はなんですか？」

夜見はここで偽名を使うのはさすがに気が引けたので本来の名前を名乗った。

夜見「……黒夜夜見だ」

美鈴「黒夜さんですか　ふふ、すいません、呼び止めてしまつて」

夜見「別にいいさ」

そして夜見は門を開けた。すると前の方には白い道があり小さな噴水が途中にあつた。そしてその奥には、屋敷の玄関があつた。

その道に足を進めようとすると、夜見はまた声をかけられた。

魔理沙「おーい！夜影ー！」

後ろをを向くと魔理沙と一人の少女が空を飛んでこちらに向かつて来ていた。

片方の少女は黒髪ショートヘアで赤いリボンを頭に着けていた。服装は袖の無い赤い服に赤いスカートを着ており、白い布に腕を通していた。どうやら、少女は巫女のようなやつた。

美鈴「あれ？あの魔法使い、あなたのことを夜影つて」

夜見「訳あつて偽名を言つてあるんだ」

美鈴「そうなんですか　わかりました」



魔理沙と少女は地面に降りるところに歩いて来て、夜見に話しかけてきた。

魔理沙「よう、夜影 お前もここに来てたのか」

? 「ねえ、魔理沙 こいつがあんたがよく言ってた黒月夜影って奴?」

魔理沙「ああ、そうだぜ」

どうやら魔理沙はペラペラと自分のことを人に話していたようだ。やはり、偽名で名乗っておいで正解だった。

すると、少女は夜見に話しかけてきた。

? 「ねえ、あんた、顔が見えないじゃない そのフードを下げても仮面を取りなさい」  
少女は顔を見せろと言ってきたが自分の素性をそんな簡単に広められても困るので、拒否した。

夜見「断る」

すると、少女は少しイラついた口調で言い出した。

? 「はあ?何を言ってるの、あんた 顔ぐらい見せたって減るもんでも無いでしょ?」

少女がそう言うのと、魔理沙もその話に乗っかってきた。

魔理沙「そういうや、私も顔をまだ一度も見えてなかったな なあ、夜影、顔を見せてくれよ」

夜見「断る そもそもお前は誰なんだ?」

そう言つて夜見は少女に指を指した。

？「そういうや、名乗つてなかつたわね 私の名前は博麗はくれい霊夢れいむ 博麗神社の巫女よ」

夜見「黒月夜影だ」

そう言うとうと霊夢は門のすぐ横にいた美鈴に気付く。

霊夢「ねえ、あいつ妖怪よね？」

夜見「ああ、そうだが？」

霊夢「ふうん、そう」

霊夢はそう言うといきなり美鈴に向かってスペルカードを取り出した。すると夜見は美鈴の前に出て、霊夢にコルト・パイソンを向ける。

魔理沙「おい、夜影!？」

霊夢「… あんた、どういうつもり？」

夜見「… お前も何をしようとした？」

霊夢「そいつ、まだ意識があるからちやんと意識を無くしとかないと」

夜見「戦う意思も無く、動けないのにか？」

霊夢「あんた、何を言つてるの？どんな奴だろうと妖怪は退治しておかないと」

夜見「… あいにく、その考えには納得いかないな」

霊夢「私も、あんたがこの妖怪を守る考えに納得いかないわ」

この重い空気の中、魔理沙が2人を止めに入った。

魔理沙「お、おい、2人とも、やめようぜ お互いに異変について来たんだからここで争っても戦力が減るだけだぜ？」

魔理沙がそう言うのと霊夢はスペルカードをしまった。

霊夢「それもそうね」

夜見は霊夢がスペルカードをしまうのを見ると、コルト・パイソンをしまった。

魔理沙「じゃあ、早速、屋敷の中に入ろうぜ」

霊夢「そうね 早くこの異変を解決しないと」

そう言つて2人は中へ入つて行つた。

そのあとに続いて夜見も中に入り始める。

玄関に着いて魔理沙が扉を開けると、屋敷の中も真っ赤で、そこは広いエントランスのようになっていた。

魔理沙「いやあ、ここまで赤いと目に優しくくないな」

霊夢「さあ、さっさと行きましょう」

3人は先へ進もうとすると、突然目の前に少女が現れた。

その少女は白髪のショートヘアで、頭に白いメイドのカチューシャを着けていた。服装は青色のメイド服を着ていた。

？「あら、美鈴はやられたのね」

少女はそう言うと、霊夢が少女に話しかけた。

霊夢「誰よ、あなた？」

？「私はこの紅魔館のメイド長の十六夜咲夜いざよいさくやといひます」

咲夜は丁寧に自己紹介をしてくれた。

だが、それで終わるはずは無かった。

咲夜「私は侵入者は排除しろと命令を受けておりますので、あなた方をここで倒させていただきます」

霊夢「ふうん、あなた、面白いこと言うじゃない 2人とも、ここは私が戦うから2人は先に行つてなさい」

咲夜「あなたが私に勝てるだけでも？」

霊夢「思つちや駄目かしら」

2人は今にも戦いを始めようとしていた。

そして、魔理沙は夜見に言った。

魔理沙「よし、ここは霊夢に任せて先に行こうぜ」

夜見「… ああ」

そうして、夜見と魔理沙は先へ進んだ。するとその先には長い廊下があつて、壁には

扉が何個もあった。

魔理沙「うわあ、これはかなり広いぜ」

夜見「…… そうだな」

そして2人は長い廊下を進んでいた。すると1つだけ、鉄で出来ている扉があった。

魔理沙「お、なんだ？この扉？」

魔理沙はその扉を開けるとその先は薄暗く、地下へ続く階段があった。

すると夜見はその階段を下りて行つた。

魔理沙「お、おい、夜影!？」

夜見「…… 俺はここを、他を頼む」

魔理沙「あ、ああ、わかつたぜ」

夜見は先に進んでいると木の扉があり、その扉を開くと中には綿を散らした壊れたぬいぐるみが何個もあった。

そして、その部屋の中央に少女がいた。

その少女は金髪のショートヘアーのサイドテールで、頭に赤いリボンを付けた白いナイトキャップを被っていた。服装は赤い服に赤いスカートを着ており、背中からは枝の様なものが生えていて、7色のクリスタルの様なものがぶら下がっていた。

？「…… あなたは誰？」

少女は夜見に名前を聞いてきた為、夜見は名乗った。

夜見「… 黒夜夜見」

？「私はフランドール・スカレット ねえ、黒夜？私と一緒に遊びましょう？」

フランドールは夜見に、一緒に遊ぶことを提案してきた。

夜見「… 遊んでどうするんだ？」

フランドール「うくん じゃあ、私に勝ったら私が知ってることなんでも教えてあげる」

フランドールに勝ったら何か情報を聞き出せる為、夜見はその誘いを受けることにした。

夜見（勝てば異変の張本人の居場所がわかるかもしれないな）

夜見「ああ、いいだろう」

そう夜見は言うとならフランドールは夜見に向かって急に弾幕を飛ばしてきた。

夜見はその弾幕を間一髪で避ける。

夜見「おわっ!?!」

するとフランドールは背中に生えている枝の様なものを羽ばたかせ、宙に浮き始めた。

フランドール「さあ、遊びましょう、黒夜！ 簡単に壊れないでね？」

そう言ってフランドールは立て続けに夜見に向かって弾幕を飛ばしてくる。

だが夜見は素早くコルト・パイソンを左手で引き抜き、フランドールに向かって弾幕を撃つがフランドールは宙を優雅に飛んで避けてしまう。

フランドール「ほらほら、どうしたの？ そんなんじや私には一発も当たらないよ？」  
夜見「くっ!？」

夜見はフランドールの弾幕を間一髪で避けているが弾幕の密度がとても濃いため、フランドールに立て続けに弾幕を撃つことが出来なかった。

フランドール「あはは 黑夜、面白いね そんなに必死に避けて でも、私をもっと楽しませてよ」

そしてフランドールは弾幕の密度をさらに濃くしてきた。それを避けるにはフランドールの動きを止める必要がある為、夜見はスペルカードを発動させる。

夜見「降符 ブラックレイン」

夜見はスペルカードを発動させるとフランドールの上から無数の弾幕が降り注ぐが、フランドールは簡単に避けてしまう。

フランドール「あはは 全然当たらないよ、黑夜 早く私を楽しませてみてよ」

夜見（お望み通り楽しませてやるよ）

夜見は美鈴と戦った時と同じように弾幕を撃つ。するとフランドールはふらふらと

避け始める。

フランドール「わっ!?!おっとと きゃっ!?!」

夜見はフランドールの腕や足などの関節を狙って弾幕を撃っていたが狙いが外れて顔に弾幕が当たってしまった。

夜見（あ、しまった！顔に当たった！）

そんな心配を夜見はしていたが、フランドールは空中で体勢を直した。

フランドール「いてて、当たっちゃった じゃあ、次は私の番だよ 「禁忌 カゴメカゴメ」

フランドールはスペルカードを取り出し発動させると、夜見を囲むように何重にも弾幕が配置された。

そしてその弾幕は夜見へ、ばらばらに近づいていった。

夜見「くっ!?!危ねえ！」

夜見はなんとかギリギリで弾幕を避けていた。だが、そこにフランドールは弾幕を放って追い討ちをかける。

夜見「なっ!?!がふっ!?!がっ!?!」

すると夜見はフランドールの弾幕に何発か被弾してしまった。フランドールの1撃の威力はとても強かった。



夜見（なんで、あんな小さな子がこんな強力な弾幕を放てんだよ!?）

夜見「くそ、はあ はあ」

フランドール「あはは すごくすごい、まだ立っていられるんだ じゃあ、まだまだ私を楽しませてくれるよね♪」

フランドールは拍手をしながら笑顔でそんなことを言っていた。だが、夜見は冷静にどう動けばいいかを考えていた。

夜見（あいつの1撃はかなりの強さだ 例えどんな戦い方をして被弾するとしても、長期戦になれば負けるのは確実だ なら、さっさとけりを着けるしか方法は無え!）

そして夜見は白紙のスペルカードを取り出し、新たなスペルカードを作った。

夜見「爆符 宙へ舞え」

夜見はスペルカードを発動させるとその場でジャンプをして、自分の真下へ弾幕を撃った。するとその弾幕は爆発して、夜見は宙へ飛ばされフランドールへ向かって行く。

ドガアアアアア

フランドール「嘘!？」

夜見「おらあ!」

夜見は刀を右手で引き抜き、フランドールを刀で斬る。刃には弾幕を纏わせていた

為、服などは斬れなかった。

フランドール「きゃあ！」

夜見（まだだ！）

夜見はフランドールを斬って、壁に足を着くと壁を蹴ると同時に弾幕を壁に撃って爆発を起こし、フランドールへ向かって行く。

フランドール「がふっ!？」

夜見はフランドールを斬っては壁を蹴り、弾幕を爆発させて、刀で斬っていった。10回ほど斬った辺りでスペルカードの効果が切れた為、夜見は壁に刀を突き刺して刀にぶら下がった。

だが、フランドールはまだ宙を飛んでいた。

フランドール「いやあ、黒夜って面白い戦い方をするね　こんな事考えるのって黒夜だけなんじゃない？　でも、そんなに爆発を近くで起こしてて大丈夫なの？」

夜見（く、くそ、確かに近距離で爆発を受けたダメージはさすがにデカイな）

フランドールの言っていた通り、夜見はかなりのダメージを負っていた。「爆符　宙へ舞え」は夜見にとつて、宙へ飛ぶ唯一の手段だが、諸刃の剣であった。

フランドール「じゃあ、いくよ！　「禁弾　カタデオプトリック」

フランドールは刀にぶら下がっている夜見にスペルカードを発動させた。すると

様々な大きさの弾幕が、フランドールを中心に放たれた。

夜見（くそ、まずい！）

夜見は壁に突き刺した刀を抜き取り、地面に着地して弾幕を避けようとする。しかし先ほどのスペルカードでかなりのダメージを受けた為、思うように体が動かなかった。

夜見（くそ、こうなったら）

すると夜見はコルト・パイソンと刀を使って弾幕を斬り落としたり、弾幕を撃つて相殺を始めた。

フランドール「まだまだいくよー！」

そう言つてフランドールは夜見に向かつて、大量の弾幕を放ち始めた。スペルカードの弾幕を受けないようにするだけで精一杯の夜見には、フランドールの放った弾幕を避ける術は無かった。

夜見（くそ、無理だ！）

そして夜見はフランドールの大量の弾幕を受けてしまい、夜見のいたところには煙が立ち込めていた。

その煙が晴れるとその場に夜見が倒れていた。

フランドール「なーんだ、もう終わっちゃった」

するとフランドールは倒れている夜見の近くに降りて、夜見の首を持ってそのまま持

ち上げた。

フランドール「じゃあね、ちよつとは楽しかったよ」

そしてフランドールは一気に手に力を込めた。

ダアン

フランドール「がふっ!？」

夜見「……危ねえ」

なんと、夜見はまだ意識があつた。夜見はフランドールが油断したところを狙って腹に向かってコルト・パイソンで弾幕を撃つたのだ。そしてフランドールの手の力が緩んだところで夜見はフランドールを蹴り飛ばした。

ドッ

フランドール「きゃっ!？」

夜見が蹴り飛ばしたフランドールは地面へ仰向けに倒れた。そして夜見は全力でフ

ランドールに向かって走った。

夜見（少し手荒いがこれしかない！）

すると夜見はランドールの腹を全力で踏んだ。

ランドール「ごふっ!？」

そして夜見は白紙のスペルカードを取り出して新たにスペルカードを作った。

夜見「撃符 ファイブショット」

すると夜見のコルト・パイソンの銃口に光が集まり、5発の弾幕を撃った。

ダアン ダアン ダアン ダアン ダアン

その弾幕の威力はランドールの弾幕の威力を超えていた。

ランドール「きゃあああああ！」

そしてランドールは悲鳴を上げてパタリと気を失ってしまった。

そして夜見はふらふらになりながら壁にもたれかかるように座り込んだ。

夜見「はあ はあ な、なんとかギリギリ勝った」

そして、この弾幕ごっこは夜見が勝利した。ただ1つだけ誤算だったことはスペル

カードの威力が強すぎてランドールが気絶してしまったことだった。

夜見（こいつが起きるまで、少し待つか）

夜見はランドールが起きるまで、少し休憩することにした。

夜見が休憩して15分ほど経った。夜見はある程度は体の調子は直って来てはいたが、肝心のフランドールはまだ目を覚まさなかった。

夜見（くそ、情報が聞けるかと思つたのに、まだ目を覚まさないか）

夜見はそんなことを思いながら、フランドールが起きるまでもう少し待つことにした。

5分ほど経つとフランドールの手がピクリと動いた。

夜見（やっと起きたか？）

するとフランドールは起き上がつてその場で立ち上がつて俯いていた。そして夜見はフランドールに近づいて異変の張本人の居場所を聞いた。

夜見「勝負に勝つたんだ、約束は守ってもらふ。異変を起こした張本人はどこだ？」  
だが、フランドールは何も答えずに俯いていた。

夜見「おい、聞いて「ハハ」…ん？」

なにやら、フランドールの様子がおかしかった。少し心配した夜見はフランドールの肩を揺さぶつて聞いた。

夜見「おい、大丈夫か？」

すると、フランドールは急に笑い始めた。

フランドール「アハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

夜見「な、おい！どうしたんだ！」

明らかにフランドールの様子がおかしかった。

するとフランドールは急に夜見の腹を殴った。

夜見「なっ!？」

ドガアアアアアン

夜見は地面に足が着くことなく、壁まで殴り飛ばされた。

夜見「がはっ!？」

すると壁には亀裂が出来ていた。夜見は体が衝撃に耐えきれず血を吐いた。

フランドール「アハハ マダ、マダアソビタリナイヨ サア、ワタシヲモットタノシ

マセテヨ!!」

するとフランドールは夜見へと飛びかかり、腹をもう1度殴った。

バキッ

夜見「ごはっ!？」

フランドールに殴られた夜見はさらに血を吐いて、その血がフランドールの顔に付いた。

夜見（一体、何が、起きてるんだ？）

フランドール「ドウシタノ？ハヤクワタシトアソンデヨ ネエ!!!」

するとフランドールは思いっきり夜見を真上へ蹴り飛ばした。  
夜見「がはっ!？」

すると夜見は天井を何回も突き破って、屋上まで飛ばされた。

ドガアアアアアア

霊夢「きゃあ!何!？」

魔理沙「おわ!?!なんだ!?!これもお前の仕業か!？」

? 「知らないわよ! 一体何が?」

屋上を突き破って夜見は屋上から5mくらいの高さから、屋上に落ちた。

屋上には弾幕ごっこをしていたであろう霊夢と魔理沙と少女が宙に浮いていた。

少女は水色の髪の毛のショートヘアで頭にはフランと同じように赤いリボンが付いた白いナイトキャップを被っていた。服装は白い服に白いスカートを着ており、背中からはこうもりの蝙蝠の様な翼が生えていた。

霊夢「な、あいつって」

魔理沙「嘘だろ!夜影じゃないか!」

? 「なんで、人間なんかが?」

3人が疑問を持っていると、夜見が突き破った穴から1人の少女が飛び出してきた。それはフランドールだった。



フランドール「ア、オネエサマ」

? 「フラン、なんであなたが」

魔理沙「おい、しっかりしろ! 夜影! 何があった!」

霊夢「ちよつと、あんた! 一体何があったのよ!」

霊夢と魔理沙は夜見のそばに近寄ったが、夜見から返事は無かった。

## 第7話 姉妹の絆と新たな力

魔理沙「おい！起きろよ夜影！しっかりしろ！」

霊夢「ちよつと！何が起きたのよ！起きて早く説明しなさい！」

霊夢と魔理沙は夜見に声をかけていたが夜見は一向に目を覚ます様子は無かった。

魔理沙「くそ！もしかして、あの赤い服を着た奴がやったのか!？」

霊夢「ええ、おそらくそうでしょうね」

霊夢と魔理沙は宙に飛んでいるフランドールと少女を見た。すると、なにやら2人は何かを話していた。

？「フラン、なんであなたがここにいるの？」

フランドール「オネエサマコソ、イツタイナニヲシテルノ？」

？「… あなたには関係無いわ、早く部屋に戻りなさい」

少女はフランドールにそう言うと、フランドールは俯いた。よく見ると少し震えていた。

フランドール「… ソウダヨ」

？「どうしたの？早く戻りなさい」

フランドール「オネエサマハ、イツモソウダヨ!!!ナンデワタシヨイツモノケモノニスルノ!!!」

フランドールは急に叫び始めた。すると、夜見の指が少し動いた。

夜見「う、うん？ 一体何が？」

すると、夜見は意識がぼやけたまま目覚めた。

魔理沙「お、おい！ 起きたか！ 夜影！」

霊夢「やつと起きたの、早く何が起きたのか説明してくれない？」

だが、夜見は意識がぼやけてて2人が何を言っているかわからなかった。

夜見（何を、言ってるんだ？ そういえば俺は確か……）

すると、夜見はいきなり立ち上がった。

魔理沙「おい、いきなり立ち上がったって「あいつは!?!」……え？ あいつって？」

夜見は周りを見渡すと宙に飛んでいるフランドールを見つけた。

夜見「あいつ……」

魔理沙「あいつってあの赤い服を着た方の奴か？」

霊夢「まさか、あいつにやられたの？」

夜見「……ああ」

そしてフランドールと少女は口論をし始めた。

フランドール「ナन्दエ！ナन्दエオネエサマハイツモソウナノ！」  
？「うるさいわね！あんたには関係無いって言ってるじゃない！何回言ったらわかるの！」

フランドール「ウルサクナンカナイ！オネエサマガイツモワタシニソンナコトヲスルカラワルインダヨ！」

夜見「…あいつらは何を？」

魔理沙「わからないぜ、なんか赤い服の奴は「いつものけ者に」とかなんとか言ってたぜ」

夜見（のけ者？いつも？）

すると夜見は考え込んだ。

夜見（のけ者、いつも それにお姉様って、そもそもあいつらって一体？）

霊夢「ちなみにあの白い服の奴は吸血鬼って言ってたわね」

魔理沙「ああ、言ってたな そういえば」

夜見（吸血鬼？てことはつまり…）

そこで夜見はこの異変の全貌がわかった。そしてあの姉妹についても。

夜見「…なるほどな」

霊夢「何がるほどなのよ」

夜見「… すまないが、力を貸してくれないか？」

霊夢「はあ？なんで私が「私は構わないぜ」ちよつと！魔理沙!？」

魔理沙「大丈夫だ、夜影は何か策があるから言ってるんだろ？」

魔理沙がそう聞くと、夜見は頷いた。

夜見「… ああ」

夜見（今のところはすべて俺の予想に過ぎないが）

霊夢「… はあ、仕方ないわね わかったわあんたの策に乗ってあげるわ」

そして夜見は少女に指を指した。

夜見「すまない、じゃあ、あの白い方の相手を頼む それだけだ」

魔理沙「それだけなら楽勝だぜ おい、吸血鬼！勝負はまだ終わってないぜ！」

魔理沙がそう言うのと少女は反応した。

？「ええ、そうね 決着を着けないとね」

フランドール「マダハナシハ「おい、フランドール」…？」

夜見「もつと遊んでやるよ、こつちも楽しみたいくて仕方ないんだ」

そして夜見はフランドールを挑発して、こちらに意識を向けさせた。

フランドール「ヘエ ソツカ、アソンデクレルンダ？ジャア、チャントワタシヲタノ

シマセテヨネ！」

そして霊夢と魔理沙は少女の方へ飛んでいき、フランドールは夜見の方へ飛んでいった。夜見はフランドールが飛んでくる最中に鎮痛剤を飲んだ。

夜見（これでしばらくは戦える）

そして霊夢と魔理沙と少女は攻防一体の弾幕ごっこを始めた。すると同時にフランドールも夜見へ弾幕を放つ。

夜見「どうしたんだ？ 当たらないぞ？」

フランドールの弾幕は密度は変わらないものの、弾幕の動きは若干雑になっていた。

フランドール「ジャアコレナラドウ？ 「禁弾 スターボウブレイク」」

フランドールがスペルカードを発動させると色とりどりの弾幕が放たれた。

だが、夜見は両手で刀を持って斬り落としていった。

夜見「こんなもんか？ お前の力はよ」

フランドール「ヘエ、ソナヨユウ、マダアツタンダネ」

夜見「ああ、そうさ 「斬弾 弐斬撃」」

すると夜見は新たなスペルカードを作った。そして夜見は刀を1度鞘に戻してから抜刀をする。すると、斬撃の弾幕が放たれた。そして刀を両手に持って振り下ろし、2発目の斬撃の弾幕を放った。斬撃の弾幕はフランドールの弾幕を斬り裂いていった。

フランドール「ワア、トト、アブナイアブナイ」

夜見（まあ、避けるだろうな）

フランドールはヒラヒラと飛んで、夜見の弾幕を避けた。

フランドール「フフ、ヤスムジカンハナイヨ」「禁忌 レーヴアテイン」

フランドールは間髪入れずスペルカードを発動させると、フランドールの手には1.5 mを超える大きな炎の剣が現れた。

夜見（まじか、それは予想外だったわ）

すると夜見はコルト・パイソンを引き抜き、弾幕を撃った。

ダアン ダアン ダアン

だが、フランドールはその大きな剣を片手で振り、弾幕を弾いた。

キン キン キン

フランドール「… ツマンナイ」

フランドールはそう呟き、夜見をじろじろと見た。

夜見「… なんだよ？」

フランドール「ハア、シカタナイカラジメンデタタカツテアゲルヨ」

フランドールはため息をついて、屋上に降り立った。

夜見「… ずいぶんと親切じゃないか」

フランドール「ダメ、アナタトベナインダモン」

フランドールはやれやれといった感じに言った。すると夜見はこう返事した。

夜見「普通、飛べるのがおかしいと思うが？」

フランドール「アナタガメズラシイトオモウケドネ！」

そう言つてフランドールはいきなり走つて距離を詰めてきた。夜見は警戒したため弾幕をすぐに撃つことができた。

ダアン ダアン ダアン

キン キン キン

だが、フランドールは弾幕を弾いてしまう。まずいと思つた夜見はコルト・パイソンをしまい、刀を両手で持つてフランドールのレーヴァテインをガードしてつばぜり合いになる。

ガキーン

フランドール「ナカナカヤルジャン」

夜見「地面でもその速さとはな」

フランドール「ソナナコトイツテルヨユウハアルノカナ？」

するとフランドールはさらに力を込めてきた。そして夜見の顔にレーヴァテインがどンドン近づいてきた。

夜見「くっ！おらっ！」



すると夜見は刀を少し傾けてレーヴァティンを刃の上で滑らせてレーヴァティンの軌道をずらした。

そして夜見は素早く距離を取った。だが、フランドールは再び夜見との距離を詰めてレーヴァティンを振り回す。そして夜見はそのレーヴァティンを避けたりガードをして被弾しないようにしていた。

夜見「くっつ！はっつ！」

フランドール「ホラホラホラホラ！ワタシヲタノシマセテクレルンデシヨ？」「禁忌  
フオーオブアカインド」

レーヴァティンを振り回しながら、フランドールはさらにスペルカードを発動させた。するとレーヴァティンを持ったフランドールが3人増えて合計4人になった。

夜見「なっ!?増えるとかありかよ!？」

フランドール1「アンシンシテヨ」

フランドール2「フタリズツデ」

フランドール3「コウゲキシテ」

フランドール4「アゲルカラ！」

するとフランドール3・4は2人下がり、残りのフランドール1はそのままレーヴァティンを振り回し、フランドール2は少し後ろに下がって弾幕を放ち、援護を始めた。

フランドール1「アハハ、コンナニタノシイノハハジメテ！ダツテアナタ、ゼンゼンコワレナインダモン！」

夜見「あいにく、壊れたくは無いでね！」

夜見はレーヴァテインの速さに目が慣れてきて、フランドール1の一瞬の隙を狙って刀を当てようとした。

バンツ

夜見「くそっ！」

だが、援護の弾幕に被弾して、後ろに吹き飛ばされてしまう。そしてフランドール1は休む暇を与えず、夜見にレーヴァテインを振る。

夜見（援護が邪魔だな、なら！）

すると夜見は無意味に見える横移動をした後、そのまま後ろに下がりながらレーヴァテインを防いでいた。するとレーヴァテインを振り回すフランドール1はある異変に気付く。

フランドール1「ナニヲシテルノ！ナンデエンゴヲシナイノ!？」

そう、援護の弾幕が来なかつたのだ。そして、援護をしていたフランドール2は言った。

フランドール2「ダツテ、アナタガカブツテダンマクガアテラレナインダヨ！」

フランドール1「エ!？」

そう夜見はレーヴァティンを振るフランドール1を盾として、フランドール2の援護が当たらないようにしていた。横に移動したのはその為である。

そして夜見は動揺したフランドール1の隙を逃さず、刀で斬りつける。

夜見「ふっ!」

ズバツ

フランドール1「キヤツ!」

そして夜見は腹に蹴りを入れて追撃をする。

ドカツ

フランドール1「かふっ!」

フランドール1が前屈みになったところを、刀で頭から斬りつけた。すると、フランドール1は消えてしまった。

夜見「ふう、まず1人」

フランドール2「ヨクアノジョウキヨウデオモイツイタネ!エンゴタノンダヨ!」

フランドール3「ワカッテルヨ!」

すると次は、フランドール2がレーヴァティンを持って走ってきて、フランドール3が援護を始める。

フランドール2「イッテオクケド、オナジテハツウヨウシナイカラネ！」

夜見「そんな簡単だと思っっちゃいねえよ！」

すると夜見はコルト・パイソンを取り出し、援護をしているフランドール3に目掛けて弾幕を撃ちながらフランドール2の攻撃に対応していた。

フランドール2「コンドハソツチニネライヨツケタンダネ デモ、ワタシヲドウニカシナキヤハナシニナラナイヨ！」

フランドール3「コツチハダイジョウブダカラ、キニシナイデ！」

フランドール3は立ち位置をこまめに変えながら弾幕を放っていたため、先ほどの作戦はやはり通用しないようだ。

フランドール2「イツマテムイミナコトヲシテルノ？」

夜見は弾幕を撃ちながら、ひたすらフランドール2の攻撃を防いでいた。そして夜見はいきなり、フランドール2に回し蹴りをする。

フランドール「ワツ!? アブナイ！」

しかし、フランドール2は後ろに下がって避けてしまう。だが、夜見にとってはそれでよかった。

夜見「ああ、避けちゃ俺に行動の隙を与えちゃうよ? 「爆符 宙へ舞え」」

すると夜見はスペルカードを発動させて、自分の後ろに弾幕を撃つ。そして爆風で飛

ばされた夜見は援護をしていたフランドール3との距離を一気に詰めた。

ドガアアアアアア

フランドール3 「アハハ スキダラケダヨ」

しかし夜見は隙だらけで、フランドール3は容赦なく弾幕を放ってくる。

夜見 「誰がそのまま突っ込むかよ！」

すると夜見は自分の下に弾幕を撃ち、爆発で夜見は斜め上へ飛んだ。

ドガアアアアアア

フランドール3 「嘘!？」

夜見 「自分が飛ぶだけの弾幕じゃないぜ！」

そして夜見は弾幕を空中でフランドール3に向かって乱射した。

ダアン ダアン ダアン

もちろんその弾幕はフランドール3に当たらなくとも近くで爆発が起きる為フラン

ドール3は大きなダメージをくらう。

ドガアアアアアア 　ドガアアアアアア 　ドガアアアアアア

フランドール3は爆発に巻き込まれた。そして煙が晴れるとフランドール3は消え

ていた。どうやら倒せたようだ。

ドガアアアアアア

そして夜見は地面に弾幕を撃って、爆風で落下速度を落として、安全に着地する。

夜見「よつと さあ、もう2人も倒したぞ どうだ？楽しいか？」

フランドール2「アハハ！スゴイ！スゴイヨ、クロヨル！」

フランドール4「コンナニハヤク、ワタシヲフタリモタオスナンテ！」

夜見「さあ、ラストスパートだ 本気で来ないと、勝てねえぞ？」

フランドール2「イワレナクテモ」

フランドール4「ホンキデイクヨ！」

すると、フランドール2人はレーヴァティンを構えて夜見に走っていく。

そして夜見にレーヴァティンを振るが夜見は刀とコルト・パイソンを交差させてガ-

ドする。

ガキーン

フランドール2「ソノカタナ、ゼンゼンオレナイネ！」

夜見「さあな、自分でも不思議に思うぜ」

フランドール4「デモ、モウカタハウハムリミタイダヨ！」

夜見「くっ！」

夜見はコルト・パイソンを見るとバレルという銃弾が通る所が徐々に曲がっていた。

夜見（くそっ！なんとかこの状況を抜け出さねえと！）

夜見「くっ！無理だ！仕方ねえ！」

すると夜見はコルト・パイソンを捨てて、その場を離れた。捨てたコルト・パイソンはレーヴァテインに叩き付けられて、粉々になった。

夜見（くそ、武器が1つ減った このままじゃ不利だ！）

そんなことを考えていたが、フランドール2人は容赦なく攻撃してくる。

フランドール2「ヤスンデルヒマナンテ」

フランドール4「アタエナイヨ」

夜見「くっ！おわ!?」

夜見は2本のレーヴァテインを刀で防いだり、受け流したりして、なんとか避けていた。

夜見（何か、打開策はないか!?）

夜見はそう思っていると、声が聞こえてきた。

魔理沙「夜影！避けるー！」

魔理沙の声が聞こえ、魔理沙の方を見ると虹色のビームがこちらに向かってきた。

夜見（あのバカ！なにやってんだー!!!）

そんなことを夜見は考えていた。フランドール2人もビームに気付き、その場を離れようとしていた。

そして、夜見はある作戦を思い付いた。

すると夜見はこの場を離れようとしていたフランドール2の襟元を掴む。

フランドール2 「クツ ナニヲ!？」

夜見 「おらあ！」

夜見は片手でフランドールを持ち上げて背負い投げをした。

フランドール2 「ガフツ!？」

そして夜見は急いでその場を離れた。するとフランドール2はビームに巻き込まれた。

バアアアアアアン

夜見 「おわああ！」

ビームが地面に当たると爆発して、夜見は爆風に飛ばされた。そして夜見は15mほど飛ばされた。

夜見 (あ、危ねえ、死ぬかと思った)

起き上がるとフランドール2は消えていて、残ったフランドールが魔理沙のことを睨んでいた。

フランドール 「アノマホウツカイメ!!!」

するとフランドールはこちらに走ってきた。そして夜見の襟元を掴む。



夜見「なっ!?!」

フランドール「クラエー!!!」

そしてフランドールは夜見を魔理沙に向かって投げ飛ばした。

夜見（なっ!?!嘘だろ!?!）

すると、狙いが逸れたのか魔理沙の近くにいた霊夢に当たった。

ドカッ

霊夢「きゃあ!?!」

すると夜見はその場で落ち始めたが、霊夢は飛ばされ、魔理沙に直撃した。

ドカッ

魔理沙「どわっ!?!」

その直後、少女はスペルカードを発動させた。

? 「神槍 スピア・ザ・グングニル」

スペルカードを発動させると、紅い槍が手元に現れて2人に向かって投げつけた。も

ちろん、2人は避けられる筈なかった。

霊夢「きゃあ!?!」

魔理沙「だあ!?!」

2人を槍は貫いたが2人の身体には穴など空いていなかったが、2人はその場から落

ちてしまった。

夜見「よっ！危ねえ！」

落ちた夜見は地面をタイミング良く転がって衝撃を逃がすことができたが、霊夢と魔理沙はそのまま落ちてしまった。

ドサア ドサア

夜見「おい、2人とも！」

フランドール「ナニヨソミシテルノ」

夜見「なっ!？」

夜見は振り向くとフランドールがレーヴァティンを振り上げていた。

夜見（仕方ない、本来の策とは違うが！）

すると夜見はフランドールの足をおもいつきり踏んだ。

フランドール「グッ!？」

するとフランドールは少し動きを止めた。夜見は続けてハイキックをして、フランドールの持っていたレーヴァティンの持ち手を蹴ってレーヴァティンを弾き飛ばした。

フランドール「ナッ!？」

カラン

レーヴァティンはフランドールから5mほど遠くへ飛ばされてしまった。そして夜

見は刀を振り上げて、フランドールに目掛けて一気に振り下ろした。

フランドール（避けられない！）

そして、フランドールは目を瞑った。

ガキーン

すると何がぶつかり合う音がして、痛みはいつまでもこなかった。

目を開けると少女が紅い槍で夜見の刀を防いでいた。

夜見（やつぱりな）

夜見「どういうつもりだ？」

？「あなた、ふざけてるの？」

夜見は少女から離れて、刀をしまう。すると少女はフランドールのそばに寄った。

だが、フランドールは少女を睨んでいた。

フランドール「・・・ナンデ、ナンデ、ワタシヲモツタノ!? アンナジヨウキヨウ、ワ

タシデナントカデキタノニ！」

？「・・・何言ってるの、フラン 目を瞑って諦めてたくせに」

フランドール「ウルサイ！ オネエサマニタスケラレナクタツテ「ぎゅっ」・・・ オネ

エ・・・サマ？」

すると少女はフランドールを抱き締めていた。すると少女は涙を流した。

？「ごめんなさい、フラン あなたをあんな所に閉じ込めて」

フランドール「オネエサマ、ナンデナイてるの？」

？「あなたが斬られそうになった時、私はあなたを失いそうになってとても怖かった  
もう会えなくなるのが怖かった でも、無事で良かった」

フランドール「じゃあ、なんであそこに？」

？「あなたが狂気に完全に吞まれて、あなたが嫌われる存在になるのが怖かったの  
でも、それももう終わり もう何も心配いらないわ」

すると、フランドールも涙を流し始めた。

フランドール「… お姉様、ごめんなさい 私、お姉様が私のことずっと嫌いなんだ

と思ってた 本当にごめんなさい」

？「いいのよ、フラン 謝らなくて」

すると少女の後ろから拍手が聞こえた。それはもちろん、夜見だった。

夜見「良かった、仲直りできて でも、まだ終わりにする訳にはいかねえ」

すると少女はフランドールから離れて振り向き、夜見に聞いてきた。

？「あなた、一体誰よ？」

夜見「黒夜夜見、あんたは？」

？「私は誇り高き吸血鬼 レミリア・スカーレットよ」

自己紹介が終わると、夜見は刀を抜いた。

夜見「俺はこの異変を止めに来た。出来れば平和に終わらせたい」  
するとレミリアはクスリと笑った。

レミリア「残念だけど、それは無理よ。私達吸血鬼にとって、日光は邪魔な存在なのだから、この異変を終わらせる訳にはいかないのよ」

夜見「はあ、仕方ない。じゃあ、けり着けるしかねえな」

レミリア「私達吸血鬼に勝てると思ってるのかしら？」

夜見「勝たなきゃいけないんだよ、こつちにも事情がある」

夜見（特にお金稼ぎにいい迷惑なんだよ）

レミリア「じゃあ、しょうがないわね。いきましよう、フラン」

するとフランドールは笑顔で返事をした。

フランドール「うん、お姉様！」

すると、レミリアとフランドールは空中へ飛び、夜見へ弾幕を放つ。銃がない夜見は左手から弾幕を放ちながら、刀で弾幕を斬り落としていく。

フランドール「どうしたの、黑夜？そんな弾幕当たらないよ？」

夜見（くそ、銃があればなんとか出来るかもしれないのに）

レミリア「いくわよ！」「冥符 紅色の冥界」

フランドール「じゃあ、私も「禁忌 カゴメカゴメ」

すると、レミリアとフランドールは同時にスペルカードを発動させた。フランドールのスペルカードが逃げ場を狭め、レミリアのスペルカードがそこに小さな弾幕を無数に放ってきた。

夜見「くっ?!」

だが夜見は弾幕を放って弾幕を相殺し、刀で弾幕を斬り落としてなんとか逃げ場を作り出し、なんとかスペルカードをやり過ぎた。

夜見（くそ、さすがに2人分のスペルカードはきついぞ）  
すると、レミリアは拍手をした。

レミリア「スゴいわね、ただの人間があこのスペルカードをやり過ぎせるなんて」

フランドール「しかも、ちよこまかと逃げてて面白かった 服装も全部黒色だし、まるでゴキブ「やめなさい フラン」.: はーい」

夜見「くっ!」 「降符 ブラックレイン」

すると、こんどは夜見がスペルカードを発動させて、レミリアの上から無数の弾幕を降らせた。だが、レミリアは上も見ずに弾幕を避ける。

レミリア「あら、この程度かしら?」

夜見「まだだ!」 「斬弾 弐斬撃」

夜見はさらにスペルカードを発動して刀を鞘に戻し、抜刀、さらにもう一度刀を振ってレミリアに斬撃の弾幕を飛ばした。だが、フランドールが弾幕の前に出て手をかざし、握った。

フランドール「えい♪」

すると、弾幕は碎けて空中に消えていった。それに夜見は驚きを隠せなかった。

夜見「なっ?!嘘だろ!?!」

フランドール「ふふん、スゴイでしょ?これが私の「ありとあらゆるものを破壊する」能力だよ♪」

夜見（む、無茶苦茶じゃねえか）

すると、レミリアは弾幕を避けながらスペルカードを取り出した。

レミリア「さあ、まだまだ終わらないわよ「紅符 スカーレットマイスタ」」

すると、フランドールもスペルカードを取り出した。

フランドール「じゃあ私は「禁忌 クランベリートラップ」」

また2人はスペルカードを同時に発動させた。レミリアは様々な大きさの弾幕を放ち、フランドールは小さな弾幕を無数に飛ばしてきた。

夜見は大きい弾幕を避けるがその裏にフランドールの弾幕が隠れていて、被弾してしまう。

夜見「がっ!？」

すると、怯んだ夜見に立て続けに弾幕が当たる。スペルカードが終わる頃には夜見は身体が思うように動かなくなっていた。

夜見「はあ、はあ」

レミリア「… まだ立ってるなんて あなた、よほど異変を解決したいようね」

夜見「こつちにも事情があんだよ」

フランドール「どうしようか？お姉様？」

レミリア「… そうね、そろそろ終わりにしましょうか 「神槍 スピア・ザ・グングニル」

フランドール「よーし「禁忌 レーヴァテイン」

するとレミリアは手に紅い槍を持ち、フランドールは炎の剣を持った。

レミリア「いくわよ、フラン」

フランドール「うん、お姉様」

すると2人は夜見に向かって来た。夜見はポケットから鎮痛剤を取り出して飲み、無理やり身体を動くようにした。

そして、フランドールがレーヴァテインで斬りかかって来るのを夜見は刀で防ぐ。だが、その隙にレミリアがスピア・ザ・グングニルで攻撃を仕掛ける。



夜見「くっ！こうなったら 「爆符 宙へ舞え」

夜見はスペルカードを発動させて、自分の真下に弾幕を放つ。だが、何故か手から弾幕が出た瞬間に弾幕が爆発した。

バアアアアアア

フランドール「きゃあ!？」

夜見「おわっ!？」

フランドールは後ろに飛んだが、空中で羽を動かし、体勢を立て直した。一方、夜見は真上へ10mほど飛んだ。そして、真下を見たがあることに気付いた。

夜見（なっ!?!レミアアはどこだ!?!）

そう、レミアアの姿が見えなかった。すると、夜見を上から声が聞こえた。

レミアア「誰をお探しかしら？」

夜見（しまっ・・・）

バアアアアア

夜見はレミアアに先回りされており、レミアアは夜見へ頭からかかと踵落としをしたのだ。そして夜見は地面へ叩きつけられたのだ。

夜見「ごほっ がはっ ぶはっ」

夜見は口から大量の血を吐いていた。そして、その血は仮面の隙間から流れ出て、地

面に広がっていった。

夜見（や… べえ… これ… は… し… ぬ…）

夜見は意識が遠退いてしまっていた。すると、レミリアは地面へ降り立った。

レミリア「… 呆気なかったわね」

フランドール「ビックリしたあ お姉様！大丈夫!? 怪我とか無い!?」

レミリア「ええ、大丈夫よ それにしてもなんかあつさり倒せたわね」

フランドール「ふふ、きつと私とお姉様の2人なら誰にも負けないよ」

レミリア「ふふ、そうかもしれないわね」

すると、フランドールはある疑問を持った。

フランドール「そういえば、この人間はどこから来たんだろう?」

レミリア「… それもそうね この人間は一体どこから?」

そして、フランドールがある答えを言った。

フランドール「あ!もしかして、地底人とか?」

レミリア「フラン、そんなのがいたとしてもただの人間と大差ない訳無いじゃない」

フランドール「うーん、そっかあ いい線いってると思っただけど…」

そしてレミリアは思い出した様に言った。

レミリア「そういえば、どこかに地底へ行ける穴があるって聞いたことあるわね」

フランドール「え？ そうなの？ 私、行ってみたいな」

レミリア「やめときなさい、フラン 確か地底には心を読む妖怪がいるって話らしいわ そんな妖怪なんか会いたく無いわ、気持ち悪い そんな妖怪に家族がいるとしたら消えて欲しいわ」

フランドール「うくん、そうだね 確かに心を読むなんて気持ち悪いし、やめとこう」  
そして、夜見はそんな会話のある言葉が聞こえた。

夜見（心を…読む妖怪…？ 気持ち悪い…消えろだと？）

その瞬間、夜見の意識がはつきりした。

夜見（お前らが、お前らが！ さとりを！ みんなを！）

そして、夜見は立ち上がった。

レミリア「…あなた！ まだ生き…て…」

フランドール「な、何!? あの姿!？」

2人が見たのは赤黒い翼を持っていた夜見だった。

夜見「おい、お前ら」

レミリア「ひっ!？」

フランドール「うっ!？」

夜見「お前らがさとりを、みんなを否定する権利なんぞねえ!!!お前らが人をどう思おうが構わねえ、だが、その相手の存在はちゃんと認めてやらなくちゃならねえんだ!お前らがその相手を否定するってんなら、それはそいつを殺しているのと同じなんだよ!」

すると夜見は新たなスペルカードを作り出した。

夜見「賭符 J A C K P O T」

スペルカードを発動すると、夜見の翼がバラバラと崩れ、赤黒い塊は夜見の背後に大量の様々な銃の形を作り出した。

夜見「合計777丁 つまり、J A C K P O Tだ」

夜見はレミリアとフランドールに向けて手を伸ばすと、夜見の背後の777丁の銃から一斉に弾幕が放たれる。

レミリアとフランドールは腰が抜けていて、動く事が出来ず、弾幕の餌食となった。  
ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

レミリアとフランドールは悲鳴を上げたが、その悲鳴は銃の発砲音ですべて消されてしまった。

777丁の銃は弾幕を撃ち切るとその銃は赤黒い液体となり、その場に落ちた。

それと同時に夜見も倒れてしまった。

## 第8話 自分の力とは

夜見「う、うん？ここは？」

夜見が目覚めるとそこは、赤い天井が見えた。

夜見（俺は確か……レミリアさんにやられて、その後は……駄目だ……思い出せないな）

夜見は上体を起こすと、そこは壁、床も真っ赤な部屋だった。夜見はどうやら、その部屋のベッドで寝かされていたようだ。しかも、仮面とマント、刀は枕元に置かれていた。

すると、その部屋の扉が開いた。

ガチャ

咲夜「あら、もう目覚めたのですか？」

そこにはメイド長の咲夜がいた。

夜見は急いでベッドから立ち上がろうとするが、咲夜は一瞬で夜見のそばに来て、夜見の肩を掴んだ。

咲夜「駄目ですよ、まだ怪我が治っていませんから」

夜見（：：こいつ、一瞬でここに　　そういや、初めて見た時も確か急に：：）  
夜見は大人しく横になった。

咲夜「ふふ、横になっていてください　今から朝食を持ってきますので」  
咲夜はそう言つて一瞬で消えてしまった。

夜見（：：あいつ、一体？）

夜見が寝ようとした次の瞬間。

咲夜「朝食を持ってきました」

咲夜が朝食を持ってきた。ちなみに朝食はパンとサラダだった。

咲夜「随分と寝ていましたので軽いものにしたのですが、大丈夫ですか？」  
だが、夜見は質問をした。

夜見「：：何故お前がここに？」

咲夜「この従者がここにいてはいけませんか？」

夜見「：：つまり、ここは」

咲夜「ええ、あなたが異変で来た館、紅魔館の部屋です」

そう、ここはレミリアとフランドールと戦った紅魔館のある一室だった。

夜見「何故？俺をここに？」

咲夜「お嬢様の命令です　それでは、私はこれで」

そう言って朝食を置いて、咲夜は消えてしまった。

夜見「… 何なんだよ、まったく」

そして夜見は朝食を食べた。

夜見が朝食を食べ終わった後、夜見はベッドから外を眺めていた。外には青空が広がっていた。

夜見（霧が無い… つまり、異変は止められたのか）

そんなことを思っていると、扉が開いた。そこにはレミリアがいた。

レミリア「あら、随分元気そうで何よりだわ」

夜見「… 何の用だ？」

レミリア「少しお話でもしようと思つてね」

そしてレミリアは、夜見のいるベッドに座った。

レミリア「さて、何から話しましょうか？」

夜見「… 異変は終わったのか？」

レミリア「ええ、見ての通りよ。あなたは異変を止めに来たのだから、異変をやめる

のは当然のことでしょう？」

夜見「… ああ、そうだな」

そしてレミリアは少し暗い顔になった。

レミリア「ああ、そういうえば、あなたに謝らないといけないわね」

夜見「…？」

レミリア「本当に申し訳なかったわ、あなたの気に触れることを言ってしまった」

レミリアはそう言ったが、夜見には思い当たることがなかった。

夜見「なんの話だ？」

レミリア「え？あなた、もしかして覚えてないの？」

夜見「ああ、まったく」

レミリアは少し考え込んだ。

レミリア（あの時、黒夜は暴走していたってこと？いや、でもあれは自分の為じゃない、  
くて地底にいるっていう妖怪のことを思ってたはず）

難しい顔をして考え込んでいるレミリアに夜見は声をかけた。

夜見「…おい」

レミリア「…」

夜見「はあ…おい！」

レミリア「え？何かしら？」

夜見「なんか…思い当たること、あんだろ？」

レミリアは確かに思い当たるとはあったが夜見に隠すことにした。



レミリア「いえ、まったく無いわ 少しフランのことを考えていたのよ」

夜見はレミリアの顔をずっと見ていた。

レミリア「何よ、私が嘘をついてるとでも言いたいのか？」

夜見「…… ああ、その通りだ」

レミリアは顔色一つ変えていなかった筈なのに、夜見は嘘だと見破っていた。

レミリア「何か根拠でもあるのか？」

夜見「目線の動かし方、話す速度が違ったんだよ」

なんと、夜見はレミリアの些細な動きだけで嘘を見破っていた。

レミリア「…… はあ、仕方ないわね いいわ、教えてあげるわよ まあ、少しも思い

当たらないだろうけど」

そしてレミリアは夜見にあの時、何があったのかを全て話した。

夜見（そうだ、確かに俺はあの時…… でも、あの方は夢中で……）

レミリア「どうかしら？ 何か思い出したことはあったかしら？」

夜見「ああ、全部思い出したよ」

夜見はあの時に何が起きたのかを全て思い出した。そしてレミリアは夜見に質問をした。

レミリア「あら、思い出したのか？ それは良かったわね じゃあ、一つ聞いていいかし

ら?」

夜見「…なんだよ?」

レミリア「あなた、何か地底の妖怪と関係しているでしょう?」

レミリアは自分と地底の関係を聞いて来たが、夜見は答えなかった。

夜見「…あいにく、それは教えられないな」

レミリア「あら、何か言えない事情でもあるのかしら?」

夜見「…」

レミリア「まあ、いいわ あなたは全て思い出したようだし、そろそろ失礼するわ  
そうだ、今日は泊まっていきなさい、まだ怪我也も治っていないんだから」

レミリアはそう言つて部屋を出ていった。

夜見（…つまり、出歩くのは問題ないってことか）

すると夜見は立ち上がつて部屋を出た。

夜見（さて、どこに行こうか）

そう思っていると目の前から1人の羽の生えた青い髪で青いメイド服を着たメイド  
が歩いて来た。夜見はそのメイドに道を聞くことにした。

夜見「おい、そのメイド」

メイド「え?な、何でしょう?」

夜見「仕事中すまない、ちよつと門に行く道を聞きたいんだが……」

メイド「あ、いえ、仕事中ではないので、良かったら案内しましょうか？」

夜見「ああ、頼む」

そして夜見はメイドに案内してもらい、玄関から外に出た。

夜見「すまないな」

メイド「いえ、では私はこれで」

そう言つてメイドは紅魔館に戻つた。そして、門を出るとそこには美鈴がいた。

美鈴「あ、えつと、ど、どちら様でしょうか？」

夜見「俺だよ」

美鈴「え、あ！黒夜さんでしたか」

夜見「顔は見せてないからな」

そして夜見は門のすぐ横に座つた。

美鈴「黒夜さん、どうしてここに来たのですか？」

夜見「ただ、暇なだけだ」

美鈴「そうなんですか そういえば、今日も泊まるんですか？」

美鈴の言葉に夜見は気付いた。

夜見「……今日も？」

美鈴「あれ？もしかして聞いていないんですか？」

夜見「どういうことだ？」

美鈴「実は黑夜さん、1週間も寝ていたんですよ？」

夜見はその言葉を聞いて、動揺した。

夜見「な?!1週間も寝ていたのか!？」

夜見は立ち上がって美鈴に詰め寄った。

美鈴「ほ、本当ですよ。ちよつと！怖いですつて！」

夜見「あ、ああ、すまない。動揺して、お前は悪くないのに」

美鈴「いえ、大丈夫ですよ。誰でもそんなことを聞いたら驚きますよ」

そして夜見は再び座った。すると、美鈴が夜見に聞いてきた。

美鈴「そういうえば、黑夜さんは何か能力は持っていないのですか？」

夜見「…能力？」

美鈴「はい、お嬢様を倒したと言うのなら何かすごい能力を持っているのでしょ？」

夜見は美鈴がなんの話をしているのかさっぱりわからなかった。

夜見「能力ってなんの話だ？」

美鈴「黑夜さん、まさか能力のこと知らないのですか!？」

夜見「ああ、知らないな」

美鈴「じゃあ、説明してあげましょう」

そして美鈴の説明が始まった。

美鈴「まず、能力というのは普通の人には備わらない不思議な力のことで、例えば

咲夜さんは時間を操ったりすることが出来ますね」

夜見は咲夜が急に出てきたり消えたりする理由に納得した。

夜見「ああ、急に現れたり消えるのは時間を止めているからってことか？」

美鈴「はい、そうです。ちなみに私は「気を操る」ことが出来ます」

夜見「気を操る？」

美鈴「まあ、簡単に言えば気を身体のだどこかに集中させて強化させたり出来ます」

そこで夜見はさとりの能力を思い出した。

夜見（さとりの心が読めるのも能力ってことか）

美鈴「それで、夜見さんは一体どんな能力を？」

だが、夜見は能力に心当たりが無かった。

夜見「いや、それがまったくわからないんだ」

美鈴「そうなんですか」

少し美鈴は考えると、ある提案をしてきた。

美鈴「もしかしたら、パチュリー様に聞けば何かわかるかもしれません」

夜見「誰だ？そいつ？」

美鈴「パチュリー様は、紅魔館の図書館にいる魔法使いです。もしかしたらパチュリー様なら色々知っているのだから、困りましたね。私は持ち場を離れる訳にはいきませんし。」

すると、夜見は立ち上がって美鈴にこう言った。

夜見「そこのメイドに道聞くから、大丈夫だ」

咲夜「大丈夫です、私をご案内します」

すると、いきなり咲夜が夜見と美鈴の前に現れた。

美鈴「わ!?さ、咲夜さん!」

咲夜「黑夜さん、1ついいですか？」

咲夜は何か夜見に質問があるようだった。ちなみに美鈴は何故かびくびくしていた。

夜見「なんだ？」

咲夜「この中国、寝たりしていませんでしたか？」

咲夜は夜見に意味不明なことを言ってきた。

夜見（何言ってるんだ？中国ってのは美鈴さんのことだろうし、しかも寝てるって？）

夜見はよくわからないが咲夜にこう返した。

夜見「いや、普通に起きてたが？」

咲夜「そうですね。なら、いいのですが」

すると、美鈴はほっとした様子だった。

夜見「それより、咲夜さんが案内してくれるのか？」

咲夜「ああ、そうでしたね。それでは行きましょうか」

そして夜見と咲夜は紅魔館へと戻っていった。

そのパチュリーがいるという図書館に向かっている最中に夜見は咲夜に質問をした。

夜見「いくつか聞いてもいいか？」

咲夜「はい、なんでしょうか？」

夜見「美鈴さんから聞いたんだが、時間を操るつてのは本当なのか？」

美鈴から聞いたことを咲夜に質問すると、咲夜はこう返事した。

咲夜「ええ、あなたが間違ってはいけません」

すると、夜見はあることに気付いた。

夜見「つまり、正確には違うということか？」

そう夜見は言うとき咲夜は少し笑っていた。

夜見「なんだ？違うのか？」

咲夜「いえ、そうではなく、お嬢様の言っていた通り、見抜く力がすごいんだなと思  
います」

夜見「ああ、そつちか まあ、昔からの癖みたいなもんだ 人の言葉に違和感を持つたりするのは」

咲夜「そうなんですか ああ、あとちなみに私の能力は正確に言えば「空間を操る能力」です」

夜見「便利そうだな 随分」

咲夜「まあ、色々短時間で出来ますしね さて、そんなことを話してる間にもう着きましたよ」

夜見の目の前には少し大きな扉があった。この先に図書館があるのだろうか。

咲夜「では、私はこれで」

咲夜はそう言っただどこかに消えてしまった。そして夜見はその扉を開けた。

扉の向こうにはとても広く、床が木で出来ている図書館があった。棚は高さ4mほどあり、それが何個も並んでいた。棚には何冊もの本が並べてあり、数にしたら相当な物になると一目でわかった。

夜見（この奥にパチユリーさんがいるのか）

そして夜見は図書館の奥へ向かった。

しばらく歩いていると少し広い空間があり、その中央には椅子に座って本を読んでいる少女がいた。おそらく彼女がパチユリーだろう。



少女は紫色のロングヘアで眼鏡をかけており、頭には薄紫色のナイトキャップを被っており、ナイトキャップには金色の月の飾りが付いていた。服装は白い服とスカートを着ており、その上から薄紫色の裾の長い上着を着ていた。

すると、その少女はこちらに気付いた。

？「・・・あなたは？」

夜見「黒夜夜見だ 美鈴さんにあんたに聞けば自分の能力がわかるんじゃないかと聞いてきたんだが」

？「ああ、レミイが言っていた人ね 私はパチュリー・ノーレッジよ」

自己紹介が終わり、夜見は本題の話をした。

夜見「ああ、パチュリーさんだな それで、能力がわかるつてのは本当なのか？」

パチュリー「ええ、ただちよつと時間をくれるかしら？」

夜見「ああ、構わない」

パチュリー「小悪魔ー！ちよつと来てー！」

パチュリーは誰かを呼び始めた。聞く限りおそらく小悪魔という人だろう。すると後ろから返事が聞こえた。

？「はーい！」

パチュリーが後ろを向くと返事をした少女が現れた。

その少女は赤い髪のショートヘアで頭からは小さい悪魔の羽の様なものが生えていた。服装は女性用の黒いスーツとスカートの様なものを着ており、背中からは頭に生えているものと同じ形の羽が生えていた。

「パチュリー様、どうしましたか？」

パチュリー「確か能力を調べる魔道書があつたわよね、それを持ってきてちょうだい」  
「はい、わかりました」

すると少女は本を探しに図書館の奥へ行ってしまった。

パチュリー「あの子が本を持つてくるからもう少し待つてちょうだい」  
すると夜見はパチュリーに聞いた。

夜見「なんで自分で取りに行かないんだ？」

パチュリー「私は体が弱くて喘息を持っているのよ」

夜見「そうか すまない、変なことを聞いて」

パチュリー「いいわよ、別に」

夜見はパチュリーに少し悪いことをしたなと思った。だが、パチュリーは素っ気なく許したからもしかしたら怒っているのかも思った。

夜見はこの空気を変えようと、パチュリーに質問をした。

夜見「そういや、パチュリーさんはこの図書館にどんな本があるのかとか覚えてるの

か？」

パチュリー「ええ、全部覚えてるわよ 長い間いたら嫌でも覚えるわよ あと、私からもーつかしいかしら？」

すると今度はパチュリーから聞きたいことがあるようだ。

夜見「ん？なんだ？」

パチュリー「あなたって外の世界の人間よね？」

夜見「ああ、そうだが、それがどうしたんだ？」

パチュリー「いえ、少し気になっただけよ」

夜見はパチュリーが何故そんなことを聞いてきたか疑問に思っていたが、ちょうど本を取りに行った少女が帰ってきた。

？「パチュリー様、持ってきましたよ」

パチュリー「ありがとう じゃあ、早速始めましょうか」

そしてパチュリーは立ち上がって、夜見に近づいた。だが、その前に少女が口を開いた。

？「そういえば、あなたはなんて名前なんですか？」

夜見「黒夜夜見だ」

？「黒夜さんですか 私は小悪魔こあくまといいます」

パチュリー「さあ、さっさと始めましょう」

するとパチュリーは魔道書を開いて、何かぶつぶつ言い始めた。おそらく魔法の詠唱をしているのだろう。

しばらく詠唱をしていると夜見の足元に赤い魔方陣が出てきた。

夜見（へえ、これが魔法か）

しばらく夜見はそのまま待つていたが、いきなり魔方陣が輝きだした。

パリン

そして魔方陣が割れて消えてしまった。夜見は調べ終わったと思ったが、何故かパチュリーは驚いた様子だった。

パチュリー「な、なんで？」

小悪魔「パチュリー様？どうしたんですか？」

夜見「ん？調べ終わったんだらう？」

パチュリー「いえ、違うわ 何故か魔法が急に効果を無くしたのよ」

どうやら、なんらかの理由で魔法が解かれてしまったようだった。

夜見「じゃあ、能力はわからなかったってことか？」

パチュリー「いえ、少しだけわかったわ あなたはどうやら、血を操れるそうよ」

夜見「血を？」

すると夜見はあることを思い出した。それは地底に初めて入った時のことだった。

夜見(そういえば、勇儀さんが殴る時に俺の血が壁になったけど、あれは俺の能力だったってことか)

「どうやら、夜見の能力は「血を操る能力」のようだった。

夜見「血を、ねえ あんまり使えなさそうだな」

小悪魔「そうですね、自分の血を操って戦うだなんて諸刃の剣ですしね」

パチュリー「まあ、能力がわかったんだからいいじゃない じゃあ、私は読書を続けるから小悪魔は仕事に戻りなさい」

小悪魔「はい、わかりました」

そうパチュリーに言われると小悪魔は図書館の奥へ行つてしまい、パチュリーは椅子に座つて本を夜見始めた。

そして夜見はパチュリーにあることを聞いた。

夜見「なあ、少しこの本を見てていいか？」

パチュリー「ええ、別に構わないわよ」

夜見はパチュリーから許可をもらつて、近くにあつた本を適当に取り出して中身を見始めた。

夜見(へえ、魔法には前提として魔力が必要と あと詠唱が正確かどうかも関係する

のか あと、道具が何個かあれば魔力が無くても1部の魔法は使えるのか)

夜見は魔道書に興味を持ち始めて、魔道書を読み進めていった。そして2冊目を読んでいる途中で後ろから声が聞こえた。

咲夜「黒夜さん、まだここにいたんですか お昼ご飯が出来ましたよ」

夜見「ん？もうそんな時間か じゃあ、部屋に戻ってるよ」

咲夜「いえ、お昼ご飯は食堂で食べますので、ご案内します」

どうやら、昼飯は食堂で食べるようだった。そして夜見は咲夜に案内されて食堂に入るとそこには中央に長テーブルがあり、椅子が左右に3つずつ、奥に1つ置かれていた。奥の椅子にレミリア、手前から2番目の左の椅子に美鈴、その正面にフランドールが座っていた。

レミリア「待つてたわよ、黒夜 さあ座りなさい」

夜見「ああ」

そして夜見は美鈴の隣、咲夜は夜見の正面に座った。机の上を見ると食事はパン、サラダ、ビーフシチューと洋食のものであった。

レミリア・フランドール・美鈴・咲夜「いただきます」

夜見「ああ、いただきます」

そしてみんなで食事を始めた。するとレミリアは夜見に、話しかけてきた。

レミリア「そういえば、黑夜はパチエのところに行つて、能力を調べてもらったそう  
ね」

夜見（パチエ？ああ、パチユリーさんのことか）

夜見「ああ、そうだ。ちなみに能力は血を操る能力だったな」

美鈴「へえ、血を操る能力ですか」

フランドール「なんか吸血鬼みたいだね♪」

咲夜「そうですね、お嬢様と妹様にも似合いそうな能力です」

レミリア「へえ、具体的にはどんなことが出来るのかしら？」

夜見「ええつと、そうだな。誰か刃物持つてきてくれないか？」

すると咲夜が夜見の近くに移動してきて、ナイフを差し出した。

咲夜「これでいいですか？」

夜見「ああ、ありがとう、咲夜さん」

すると夜見はナイフで手のひらを切った。もちろん、手のひらから血が流れた。

夜見（そうだな……よし、こうするか）

すると、夜見の手のひらの血があり得ない動きをし始めてある形になった。

それは咲夜の渡したナイフと同じ形をしたナイフだった。

夜見（おお、案外出来るもんだな）

レミリア「へえ、なかなかいい能力じゃない」

フランドール「わあ、面白い能力だね！他にも何か出来るの？」

夜見（他の形か：）

すると夜見の手のひらから更に血が出てきて、ナイフの形が崩れた。そして今度は1mほどの刀を作った。

夜見「こんな感じかな？」

美鈴「すごいじゃないですか、それで色んなものが作れるなんて便利じゃないですか」  
咲夜「確かにそうかも知れないけど、その能力ってかなり危険ですね」

夜見「ああ、そうだよ 確かに色んなものを作れるけど結局は俺の血だし、大きなものを作れば俺は出血多量で死ぬ」

レミリア「使い方を間違えれば死ぬ、諸刃の剣の能力ね」

夜見「そうだな、ごもつともだ」

そんなことをしながら、みんなは食事を終えた。

夜見・レミリア・フランドール・美鈴・咲夜「ごちそうさまでした」

そして美鈴とフランドールは部屋を出て、咲夜は消えたと思ったら食器も消えていた。どうやら、食器を片付けたのだろう。

そして夜見も部屋を出ようとするとレミリアに呼び止められた。



レミリア「黑夜、ちよつといいかしら？」

夜見「ん？なんだ？」

レミリア「まあ、そこに座りなさい」

夜見はレミリアに言われて先ほどの椅子に座った。

そしてレミリアは夜見にある提案をしてきた。

レミリア「ねえ、黑夜 紅魔館の執事になる気はないかしら？」

夜見「…は？」

その提案は、夜見にはとても無理な提案だった。

夜見「残念ながら、それは無理だな」

レミリア「それは何故かしら？悪い話ではないと思うのだけど？」

すると夜見は、レミリアが何を聞きたいのかが予想できた。

夜見「今、俺が住んでる場所を知りたいのか」

レミリア「あら、ばれてしまったわね そうよ、私はあなたが今、住んでる場所を知

りたかったのよ」

どうやら夜見の予想は当たっていたようだ。

そして夜見はレミリアに、はつきり言った。

夜見「俺がどこに住もうが、俺の勝手だ」

レミリア「まあ、それもそうね 用はそれだけよ」

夜見「ああ、そうか」

そして夜見は自分が泊まる部屋に戻った。

レミリア「なるほどね、やっぱりあそこに住んでいるようね」

レミリアが確信していたことも知らずに。

夜見は部屋に戻るとベッドに横になり始めた。

ちなみに手のひらの血は能力を使って体内に戻して、切り口は血を硬めて塞いでおいた。

夜見（暇だな、何もする事が無い）

夜見はそう思って、再び図書館にでも行こうかと思っていた。だが、夜見は外が少し騒がしいことに気付いた。

夜見（ん？門の方か？）

窓から門が見える為、門が騒がしいことに気付いた。夜見は念のため仮面を被ってマントを身につけ、刀をベルトに差して門へ向かった。

門を開けて敷地から出ると、美鈴が見たことのある生物と戦っていた。

それは狼だった。美鈴は狼を相手に拳やキックを放っていたが、狼はどの攻撃も避けていた。

夜見「美鈴さん!? どうしたんだ!」

美鈴「黑夜さん? いえ、実はいきなり襲いかかってきたんですよ」

夜見「それにしても、美鈴さんの攻撃をすべて避けるってことは」

美鈴「おそらく、妖怪の類いでしょうね」

すると、狼は今度は夜見に襲いかかってきた。

夜見「おら!」

夜見は刀を振るが狼はバックステップをして避けてしまう。

夜見（確か、前に倒した時は…）

すると、夜見はあることを思い付いた。

夜見「おいおい、びびってんのか? 早くかかってこいよ」

美鈴「え? く、黑夜さん?」

夜見はわざとらしく狼を挑発すると、狼は再び夜見に襲いかかってきた。

すると夜見は狼に向かって弾幕を放った。そして狼はジャンプをして避けながらこ

ちらに向かってきた。

そこを夜見は見逃さなかった。

夜見「そこっ!」

ズバツ

狼「がふっ」

夜見はジャンプした狼に一気に詰め寄って空中にいる狼を一閃した。そして夜見は刀をしまった。

チャキンツ

夜見（やつぱり、空中だと避けられないんだな）

狼は夜見の目の前で息絶えていた。

美鈴「黑夜さん、大丈夫ですか？」

美鈴が心配して駆け寄ってきたが、夜見が平気なのを見ると安心した様子だった。

美鈴「大丈夫そうですね、良かったです」

夜見「ああ、なんともないさ」

美鈴「いや、狼を挑発したときは一体どうしたのかと」

夜見「ああ、わざとらしくやらないと来ないんじゃないかと思ってるな」

そんな会話をしていると、奥の方から狼が10匹以上現れた。

夜見「…ええ？」

美鈴「また、来ましたね」

すると狼の群れは一気にこちらに走ってきた。

美鈴「来ましたよ、どうします!？」

夜見（うわ、まじかよ）

夜見は少し焦っていたが、狼の死体を見てあることを思い付いた。

夜見（あれ、もしかして…）

狼の群れがあと1mまで来たその時、狼の首が一気に何かに斬られた。

美鈴「え？な、何が？」

夜見「おお、すげえな」

美鈴「黒夜さん、それは一体？」

美鈴が見たものは夜見の近くで浮いていた、赤い丸い液体だった。

夜見「ああ、これ？狼の血だよ」

美鈴「あ！まさか能力で!？」

夜見「そう、どうやら俺は血ならなんでも操れるらしい」

夜見はどうやら狼の血でこちらに向かつてきた狼の首を一瞬で斬ったようだった。

そして夜見は血ならどんな血でも操れるようだ。

だが、例外もあった。

夜見「いや、最初は狼の体内の血を操ろうとしたんだけど、何故か操れなかったんだ

よね」

美鈴「へえ、それってつまり」

夜見「操れる血は自分自身の血と生きていない生物の血だけらしいな」

そう、夜見の操れる血は自分の血と死んだ生物の血だけを操れるようだった。ちなみに、血を出した生物がまだ生きていたら身体から離れた血は操れないらしい。

夜見「いや、能力つて考え方で色んな使い方が出来るんだな」

すると狼の死体から血が出てきて、血の球体に取り込まれた。そして血の球体はかなり大きくなった。

美鈴「確かにそうかもしれませんが、その血はどうするんですか？」

夜見「ん？ そうだな… よし」

すると夜見は狼の血に手をかざすと狼の血は分散し始めて、血はどこかに消えてしまった。

美鈴「あ、捨てるんですか？ 少しでも残しといた方が良くないですか？」

夜見「いや、目に見えない程度まで細かく分解したんだよ。そして今、俺の周りに浮かせている」

美鈴「おお！ それはいい考えですね」

夜見「じゃ、俺は用が済んだし部屋に戻るよ」

美鈴「はい、助けてくれてありがとうございます」

夜見「いやいや、いいよ、気にしなくて。そんじゃ、またな」

そして、門を開けて敷地に入ると声が聞こえてきた。

レミリア「あら、もう能力を使いこなしたのかしら？」

声は上から聞こえてきたので夜見は上を見た。するとレミリアは、ベランダで優雅に紅茶を飲んでいた。

夜見は血を操り、背中に赤い鮮やかな鳥のような翼を作った。そして、その翼を羽ばたかせて夜見はベランダまで飛んだ。

夜見「なんだ、見てたのか？」

レミリア「ええ、とても面白かったわ」

夜見「主人は高見の見物ってか」

レミリア「家族を信用しているって言ってほしいわね」

夜見「ま、そうとも言えるな」

そして夜見はレミリアにあることを言った。

夜見「なあ、1ついいか？」

レミリア「あら、何かしら？」

夜見「俺、そろそろ帰るわ」

夜見はもう地底に帰ることにした。



## 第9話 地霊殿への帰還

夜見はレミリアに帰ることを言うと、レミリアは夜見に聞いた。

レミリア「今日は泊まるように言ったはずよ、なんで帰ろうとするのかしら?」

夜見「いや、俺がここにいる理由は無いだろう?それに怪我はほとんど治ってるしな」  
そう、夜見はすでに怪我はほとんど治っていた。

だが、レミリアは言った。

レミリア「もう一度だけ言うわ、今日は泊まりなさい」

すると、夜見はレミリアに言った。

夜見「じゃあ、俺に勝ってみるか?」

夜見がそう言うと、レミリアは考え始めた。

レミリア(…) 能力を初めて意識的に使い始めたけれど、実力は確かに私以上のはず  
ここは手を引くべきね)

レミリアはため息をついた。

レミリア「わかったわよ、勝手にしなさい」

夜見「ああ、そうさせてもらう」

すると夜見は翼を羽ばたかせて湖の方へ向かった。

レミリア「はあ、まったく…」

咲夜「どうかしましたか？お嬢様？」

すると、レミリアのそばに咲夜が現れた。

レミリア「いえ、なんでもないわ」

咲夜「そうですか…。なら、いいのですが」

夜見は空を飛んで湖に着くと、霧は異変と同じくらい濃さだった。すると、突然何かが下から飛んで来た。

夜見「ん？なっ!?冷た！」

夜見はそれを掴んだが、それは15cmほどの氷だった。

夜見（なんでこんなもんが？）

夜見はその氷を捨てると下の方から声が聞こえた。

？「な!?!よくもあたいの氷を防いだな！」

夜見「あ？なんだ？」

夜見は下に降りてみると、湖の上に氷が浮いていた。そしてその氷の上に少女が立っていた。

その少女は青い髪の毛のショートヘアで頭に青いリボンを着けていた。服装は白い

シャツの上に青いワンピースを着ており、襟に赤いリボンを着けていた。さらに背中には細い氷が6つ浮いていた。

夜見「なんだ？お前？」

？「その怪しい奴！よくもあたいの縄張りに入ったな！」

夜見（ああ、面倒なタイプだ さっさと引くか）

夜見は関わりと時間がかかりそうなので、身を引くことにした。

夜見「ああ、わかったわかつ「くらえー！」。：はあ」

その少女は弾幕を放ってきたが、夜見は血の翼で弾幕を防いだ。

夜見「はあ、俺は黒夜夜見だ お前の名前は？」

？「あたいの名前はチルノだ くらえー！」

そしてチルノは弾幕を放って来たが、夜見は翼を分解して、歩いて弾幕を避けた。

夜見（ずいぶん単純な弾幕だな こんなん誰でも避けれるだろ）

チルノ「くそー！なんで当たらないんだ！」

チルノは弾幕を放ち続けるが、夜見はひたすら避けていた。

夜見「おいおい、ちゃんと当てるように弾幕を放てよ」

チルノ「うるさい！お前が避けるのが悪いんだ！」

夜見（いや、それはないだろ はあ、わざと当たるか）

すると夜見は足を止めて、チルノの弾幕にわざと当たった。

夜見「どわ！」

チルノ「よし！どうだ！あたいの実力は！」

夜見「はあ、参ったよ　じゃあ「せつかくだからあたいの子分にしてやる」…ええ？」  
チルノは急に夜見を子分にすると行ってきた。夜見はこのままじゃ帰れないことは目に見えてわかっていた。

夜見（…仕方ないか）

すると夜見は回れ右をして、森へ全力で走った。

チルノ「な!?ちよつと待てー！」

するとチルノは飛んで追いかけてきた。

だが、夜見との距離はどんどん離れていった。

夜見（ここは右　次は左でいいか）

夜見は真つ直ぐに走るのではなく、時々曲がってチルノの追跡を振り切ろうとしていた。

10分ほど走っていると、後ろにチルノの姿は無かった。どうやら振り切れたようだ。

だが、新たな問題が出てきた。

夜見（ここ、どこだ？）

夜見はチルノを振り切ろうと走っていたら、いつの間にか知らない場所にいた。すると後ろから視線を感じ、視界が少し揺らいだ。夜見は振り向くが誰もいなかった。

夜見（…気のせいかな？）

そして夜見はしばらく歩くと、また後ろから視線を感じた。

夜見「…」

すると夜見は立ち止まって、目を瞑った。そして、空気中の血を操作し始める。

夜見（後ろに3人 おそらく妖精だな）

夜見は空気中の血を広範囲に拡げ、後ろに妖精がいることを察知した。

そして夜見は目を開いて後ろを振り向いて、その妖精達に話しかけた。

夜見「おい、なんのつもりだ？」

夜見はそう言ったが返事は返って来なかった。そして夜見はため息をついた。

夜見「はあ、人数は3人 そして妖精だろ？」

そう呼びかけると、その妖精達は姿を現した。

1人目はオレンジ色の髪の毛のショートヘアで、髪型はツーサイドアップ（髪を頭頂付近で束ねた髪型）で、頭には白いヘッドドレス（メイドのカチューシャのようなもの）と

束ねた髪の毛の所は赤いリボンを着けていた。服装は白い服に赤いロングスカートを着ており、背中には羽が4枚生えていた。

2人目は黒い髪の毛のロングヘアで頭に青いリボンを着けていた。服装は青い服とロングスカートを着ており、背中には1人目と同様に羽が4枚生えていた。

3人目は金髪の毛のショートヘアで横の髪は縦ロールにしており、頭には白い帽子を被っていた。服装は白い服とロングスカートを着ており、背中には三日月の形をした羽が4枚生えていた。

そして妖精達はなにやら話していた。

？「ちよつと！なんでおぼれたの！？ルナが音を消して無かったからでしょ！」

？「違うわよ！そういうサニーが姿をちゃんと隠して無かったんでしょ！」

？「ちよつと、2人とも落ち着いて」

なにやら1人目と3人目が喧嘩を始めていた。だが、夜見は構わず話しかけた。

夜見「喧嘩中悪いが、お前らは誰だ？」

すると1人目が自己紹介を始めた。

？「私はサニーミルク　妖精よ　あなたに悪戯してたんだけど、まあ、誰かさんのせいでばれちゃったんだよね」

すると3人目が自己紹介を始めた。

？「私はルナチャイルド 同じく妖精よ 悪戯は誰かさんのせいで台無しになっちゃったけどねえ」

するとサニーミルクとルナチャイルドが睨み合いを始めた。だが、2人目もちやんと自己紹介を始めた。

？「私はスターサファイアです あ、あの悪戯はすいません」

スターサファイアは自己紹介をし、ちゃんと謝ってくれた。そしてサニーミルクとルナチャイルドはまだ喧嘩をしていたが、夜見も一応自己紹介をした。

夜見「俺は黒夜夜見だ」

そして夜見はスターサファイアに質問をした。

夜見「さっきのは、能力でやったのか？」

スター「ええ、そうです」

すると夜見は、少し大きな声でいい始めた。

夜見「へえ、すごいな 姿もちやんと隠して、音も聞こえないようにするなんて」すると、サニーミルクとルナチャイルドは夜見の言葉に反応した。

サニー「え、なんで？」

ルナ「どういうこと？」

夜見「ああ、まあ、なんだ 俺の能力みたいなもんだよ」

すると、サニーミルクとルナチャイルドは互いに謝り始めた。

サニー「そ、その、ごめんなさいね ルナのことひどく言って」

ルナ「い、いや、私もごめんなさい 私もひどく言って」

どうやら2人は仲直りができたようだ。そしてスターサファイアは小声で夜見に話しかけた。

スター「すみません、仲直りさせてもらって」

夜見「ああ、いいよ 喧嘩してたら気まずいだろ」

そして夜見は3人にあることを聞いてみた。

夜見「あ、1つ聞いてもいいか？」

サニー「答えられる範囲ならいいわよ」

夜見「ここに大きな穴はなかったか？」

すると、ルナチャイルドが反応した。

ルナ「あ、もしかしてあれかも」

サニー「あれって？」

ルナ「ほら、さつき入るのはやめておこうってスターが言ってたやつ」

サニー「ああ、あれね」

どうやら3人は地底への穴を見たことがあるようだった。



夜見「多分それだな。それで、その穴はどこにあるかわかるか？」

サニー「えっと、どっちだったっけ？」

ルナ「えっと、確か……あっち？」

スター「いや、あっちだったよ」

ルナチャイルドとスターサファイアは別の方向を指差していたが、夜見は一番自信がありそうなスターサファイアが指していた方向に進むことにした。

夜見「そうか、まあ、一応色んなところ歩いてみるよ。それじゃ」

夜見はそう言つて、スターサファイアの指差した方向へ進んでいった。

サニー「えっと、本当にあっちだったっけ？」

スター「え、うん、多分ね」

本当はスターサファイアも自信はなかったが。

しばらく夜見は歩いていっていると見慣れた穴があった。地底への入り口である。どうやらスターサファイアの記憶は間違っていないなかったようだ。

そして夜見は地底を歩いていると、地霊殿が見えてきたところで声をかけられた。

勇儀「おお、黒夜じゃないか！」

勇儀に後ろから声をかけられて、夜見は後ろを向いた。

夜見「ああ、勇儀さん」

勇儀「いやあ、久しぶりだなあ。1週間ぶりじゃないか？どこに行ってたんだよ？」

夜見「ああ、そうか。ここに帰るのは1週間ぶりなんだっけ」

夜見は1週間紅魔館で寝ていたことを思い出した。

夜見「いや、ちよつといろいろあつたんだ」

勇儀「へえ、そうかい。なあ、ちよつと暇潰しに付き合ってくれないか？」

暇潰しと聞いた夜見は少し嫌な予感がした。

すると勇儀はいきなり殴りかかってきた。

ダン

しかし夜見は血を集合させて、血の壁で拳を止めていた。

夜見「いきなりかよ、危ねえ」

勇儀「やつぱり、これが黒夜の能力かい？」

夜見「ああ、そうだ。俺は血を操る能力だ」

勇儀「へえ、そうかい。それはまた面白い能力だね」

そう言つて勇儀は夜見と距離をとった。すると血の壁は崩れて、球体となつて夜見の横に浮き始めた。

夜見「まあ、能力は使い始めたばかりだし、練習でもするか」

夜見がそう言うのと、血の球体は夜見の両手に纏わり始めた。

勇儀「私の暇潰しが練習になるといいけどね！」

そう言つて勇儀は夜見と距離を詰めて、ハイキックをした。だが、夜見はそれを右手で防いだ。

ダン

すると夜見は後ろに飛ばされた。しかし夜見は血の翼を作り出した。そして翼を羽ばたかせて体勢を整え、なにごともしなかつたように地面に立った。

夜見「相変わらずの威力だな　これが鬼の力か」

勇儀「そういえば黒夜には言つてなかつたね　私は「怪力乱神かいりよくらんしんを持つ能力」なんだ」

夜見「へえ、怪力乱神か　どうりで強い訳だ」

勇儀「それにしても、その手に纏つてる血　かなり硬いね　かなり強めに蹴った筈なんだけどね」

夜見「まあ、俺が操る血は構造次第でどんな硬さにもなるからね」

勇儀「じゃあ、相手にとつて不足は無いつてことだ！」

すると勇儀は右ストレートをしてきたが、夜見は右手で勇儀の腕を軽く押して軌道をずらした。夜見はその隙を狙つてハイキックをするが、勇儀はバックステップで避けながら夜見の横腹に回し蹴りをする。だが、夜見の横腹は血の壁で守られていた。

勇儀「なるほど、その血をどうにかすればいいんだな」

夜見「さて、血をどうするんだ？先に言っておくが、無駄に使ったりはしないぞ」

勇儀「だよなあ う〜ん」

勇儀は血をどうしようか悩んでいると、夜見は血を空气中に分解した。

勇儀「：：： どういうことだい？」

夜見「ん？いや、能力ばかり頼っていると体が訛りそうだから極力使わないようにしよう」と

勇儀「手加減するってことかい？」

夜見「体が訛るのは嫌なんだって」

すると勇儀は笑い始めた。

勇儀「あつはつは いやあ、参ったよ 私の負けだ」

勇儀は急に参ったと言いだめた。夜見はまったく意味がわからなかった。

夜見「何言ってるんだ？参ったって？」

勇儀「いやあ、実は能力を使えるようになり始めたら、その能力に頼りつきりになると思つて試したんだよ でも、心配はいらないようだね」

夜見はため息をついた。

夜見「つまりは全部俺を試す為に嘘を付いていたと」

勇儀「ああ、そうだよ 鬼は嘘が嫌いだけど、あんたの為の嘘だ それならあんたも

嫌じゃないだろ？」

夜見「まあ、そうだな」

勇儀「ほら、さっさと帰らないと さとり達が心配してるんじゃないか？」

夜見「ああ、そうさせてもらう」

そして夜見は再び地霊殿へと向かった。

夜見は地霊殿の玄関に立って仮面を外して、玄関を開けた。するとそこには燐が立っていた。

燐「やあ、おかえり」

燐は笑っていたが、目がまったく笑っていないかった。すると燐は夜見に詰め寄った。

パァン！

すると、詰め寄った燐は夜見に向かってビンタをした。

燐「ふざけるな！どんだけ心配したと思ってるんだ！」

燐は夜見に向かって怒鳴ったが、夜見は黙っていた。

夜見「…」

燐「あんた、1週間もどこに行ってたんだ！さとり様とこいし様はあんたのことが心配で部屋に引きこもっちゃったんだよ！」

すると夜見は不思議に思った。

夜見（は？さとりさんが心配してそんなことになるのはわかるけど、こいしさんも？）  
すると夜見は膝を付いて燐に土下座をした。

夜見「本当に申し訳ない。だが、どうしても見過ごせない事情があったんだ」

燐「ふん、言い訳なんか聞きたくないよ」

燐はそう言つて自分の部屋に戻つてしまった。

すると夜見は立ち上がつて、さとりの部屋に向かった。そして、さとりの部屋の前に着くと夜見はノックした。

コンコン

すると扉の向こうから声が聞こえた。

さとり「いいですよ。入つて」

そして夜見はさとりの部屋に入った。

さとりはベッドの上で背中をこちらに向けて、座っていた。

さとり「こいしかしら、なんのようなの？私ちよつと疲れてるから、そつとしといてくれない？」

さとりは夜見のことをよほど心配していたのがわかった。そして夜見はさとりのベッドに座つて言った。

夜見「すまない。帰りが遅くなつて」

するとさとりは振り向いた。

さとり「え？ 嘘？ 黒夜、さん？」

さとりはとても驚いた様子だった。

そして夜見は言った。

夜見「ただいま さとりさん」

するとさとりは急に泣き出し始めた。

さとり「うぐ、ひっぐ、良かった、黒夜、さんが、ぐす、帰ってきて」

夜見「ああ、心配しただろ ごめんな、さとりさん」

さとり「ぐす、いいんです、ひっぐ、帰ってきてくれただけで、嬉しいです」

すると夜見はさとりの頭を、撫で始めた。

夜見「泣かないでくれ、さとりさん また隣さんに怒られちゃう」

さとり「で、でも、うぐ、う、嬉しくて嬉しくて、涙が、ひっぐ、止まらないんです」

すると夜見はさとりの涙を指で拭った。

夜見「大丈夫だ、さとりさん 俺はここにいる ちゃんと帰ってきて、さとりさんの

目の前にいる」

するとさとりは落ち着き始めた。

さとり「す、すいません 急に泣いてしまって あと、お帰りなさい 黒夜さん」

夜見「ああ、ただいま さとりさん」

さとり「心配、したんですから 一体どこに行ってたんですか？」

さとりはどこに行ってたかを夜見に聞いた為、夜見はさとりにも正直に答えた。

夜見「少し、異変を止めに行ってたんだ」

するとさとりは驚いていた。

さとり「え!? 異変があつたんですか!? それで、怪我は!?」

すると、夜見は少し腕の裾を捲った。すると、腕は包帯で巻かれていた。

夜見「まあ、大したことはないから、気にしないでくれ」

さとり「え!? でも、こんな怪我をしていたら!?」

夜見「もう、ある程度治っているよ 1週間寝ていたらいいから」

さとり「寝ていたらいいって、どういうことですか？」

夜見は異変の犯人の館に泊めてもらっていたことをさとりにも言おうかどうか迷っていたが結局言うことにした。

夜見「えつと、まあ、異変の犯人を倒したら気に入ったらしく、泊めてくれたんだよ」

さとり「大丈夫なんですか? 何か変なことはさせていませんか?」

夜見「大丈夫だったよ さて、こいしさんの様子も見に行かないと」

そして夜見は立ち上がるが、さとりが手を掴んだ。



夜見「さとりさん？ どうした？」

さとり「あ、いえ、その頬はどうしたんですか？ 赤くなっていますか？」

さとりが言っていたのは、夜見が先ほど隣に叩かれた所だった。

夜見「ああ、まあ、心配させた罰を受けただけだよ」

さとり「え？ どういうことですか？ もしかしてお隣が？」

夜見「ああ、でも、仕方ないさ 心配させた罰を受けるのは当然だ」

さとり「黒夜さんがいいんなら、私は気にしませんが」

夜見「ああ、気にしないでいい ところでいつまで掴んでるんだ？」

さとりは夜見の手を掴んでる手を慌てて放した。

さとり「ああ！ すいません 急に手を繋いでしまつて」

夜見「大丈夫だ、別に手を繋ぐくらい じゃあ、こいしさんの様子を見に行つてくる

よ」

さとり「ええ、わかりました」

そして夜見はさとりの部屋を出て、こいしの部屋の扉をノックした。だが、返事は返つてこなかった。

夜見（ん？ 寝てるのか？）

夜見は扉を開けると、こいしはベッドの上にいた。

こいし「ふえ？お兄ちゃん？なんで？」

夜見「ああ、ただい「お兄ちゃん！」だあ!？」

ドカッ

こいしは急に夜見の首辺りに抱きついてきて、夜見は後ろの扉に激突した。そして、夜見は尻餅をついた。

夜見「い、いつてえ」

こいし「お兄ちゃん！帰って来てくれたんだ！良かった！」

するとこいしはさらに腕に力を入れた。自分よりも小さな少女と言っても、こいしは妖怪である。もちろん、妖怪が力を入れたら当然。

夜見「こ、こいしさん？痛いから少し力抜いてくれ」

こいし「えへへ、お兄ちゃん♪」

夜見（ああ、駄目だ 聞いてない）

こいしは夜見の言葉をまったく聞かずにずっと抱きついていた。

夜見「こいしさん、ちよつと一回離れて」

こいし「嫌だ、えへへ」

どうやらこいしは一切離す気は無いようで、夜見は諦めた。

夜見「ああ、まあいいか ただいま、こいしさん」

こいし「お兄ちゃん、なんで1週間も帰ってこなかったの？もしかして、地霊殿が飽きたの？」

こいしは急に縁起でもないことを言い出した。そして夜見はすぐに違うことを伝えた。

夜見「いや、そんなことない。ただ異変にちよつと巻き込まれたんだ」

こいし「異変なんかあつたんだ。怪我とかは？」

夜見「だいぶ治つてるから大丈夫だ」

こいし「そっか。なら良かった♪」

そして、夜見はこいしに聞いてみた。

夜見「あと、こいしさん。いつまで抱きしめてるんだ？」

こいし「えーとねえ、私が満足するまで」

どうやらまだこのままでいる気だったので、さとりを少し話題に出してみた。

夜見「いや、でもさとりさんとか見たらまずいんじゃないか？」

こいし「大丈夫だよ。お姉ちゃんならお兄ちゃんのこと信用してるし」

残念ながらこの状態を切り抜けるには、我慢するしかないようだった。

するとこいしが話しかけてきた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんは地霊殿で誰が1番好き？」

こいしは急に回答に困るような質問をしてきた。だが、夜見はすぐに答え始めた。

夜見「誰が1番好きってのは無いな　みんなにはみんなの個性とか、いい所とかあるからな　誰が1番なんて決められない」

こいし「ふーん、そっか　じゃあ、私のことは好き？」

こいしはそんなことを聞いてきたが、別に嫌いではないので好きと答えることにした。

夜見「ああ、好きだが？」

するとこいしは夜見にこう言った。

こいし「じゃあ、お兄ちゃんもぎゅーってして」

夜見（え？　つまりは俺からも抱きしめろと？　いや、それはさすがにまずいんじゃない）

さらにこいしは、夜見からも早く抱きしめるように言った。

こいし「ねえ、お兄ちゃん　早くぎゅーってして」

夜見（仕方ない　早く満足してもらって、早く離してもらおう）

そして夜見はこいしの背中に腕を回して軽く抱きしめた。

こいし「ふへへ、ポカポカする♪」

どうやら、こいしはかなり満足しているようだった。これなら早く満足してくれそうだった。

だが、問題が発生した。

コンコン

さとり「黑夜さん？こいし？夕飯が出来ましたよ」

どうやら夕飯が出来たらしく、さとりが呼びに来てしまった。

そして、扉のノブがガチャガチャと動いた。

さとり「あれ、開かない？黑夜さん！こいしー！いるんでしょー！夕飯早く食べましょー！」

扉はちょうど部屋の中の方へ押すタイプだった為、この光景を見られずに済んだ。

そして夜見はこいしに小声で話しかけた。

夜見「こいしさん、夕飯だから早く離れてくれ」

だが、こいしは返事をしなかった。よく見るとこいしは眠っていた。

夜見（嘘でしょ！？仕方ない、急いでベッドに寝かせるか）

そして夜見は立ち上がってベッドに寝かせようとしたが、こいしはちゃんと夜見に抱きついていた。

そしてさとりが扉を開けた。

さとり「あれ？開いたって、黑夜さん？何故こんな状況に？」

夜見はさとりにバツチり見られてしまった。

だが、すぐに心配はなくなった。

さとり「ああ、こいしつたら、黑夜さんに甘えてきたんですね 黑夜さん、すいません、すぐにこいしを起こしますね」

夜見（よ、良かった でも、さとりさんの言う通り、こいしさんが甘えてきたから間違いないではないのか）

するとさとりは、こいしの肩を軽く叩いて起こそうとしていた。

さとり「ほら、こいし 早く起きなさい」

こいし「ううん？ふえ？お姉ちゃん？どうしたの？」

すると、こいしは起きた。そしてさとりは、こいしに夕飯だと伝える。

さとり「夕飯よ、こいし 早く部屋に行きなさい」

こいし「うん、わかった」

そしてこいしは夜見から離れて、夕飯のある部屋へと向かった。

夜見「ありがとう 助かったよ」

さとり「いえいえ、それでは行きましょう」

そして夜見とさとりも夕飯を食べるために部屋へ向かった。部屋に入るとこいし、燐、空が椅子に座って待っていた。

こいし「早く食べよう、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

夜見「ああ、わかってる」

さとり「ええ、そうね」

そして夜見とさとりは椅子に座った。

夜見・さとり・こいし・燐・空「いただきます」

皆は食事をしていたが、燐は夜見の顔すら見ようとしていなかった。

夜見（まあ、俺が心配させたのが悪いしな）

そして皆は食事を終えた。

夜見・さとり・こいし・燐・空「ごちそうさま」

そして夜見は自分の部屋に戻った。そしてマントと仮面を机に置き、ベッドに横になった。そこで夜見はため息をついた。

夜見（燐さんかなり怒ってたな 謝るにも言い訳は聞かないって言ってたし、そもそも顔すら見ようとしてもしてくれないしな）

夜見は悩んでいたが、扉の向こうから声がした。

さとり「黒夜さん、少しいいですか？」

夜見（さとりさん？えっと、食器の片付けは確か… 1週間経ったから… あれ？さとりさんのはずじゃ？）

夜見は起き上がって扉を開けた。するとさとりの後ろに燐がいた。

夜見「えっと、どうしたんだ？」

さとり「じゃあ、私はこれで」

さとりはそう言つてキッチンに行つてしまった。

そして夜見は燐をとりあえず部屋に入れる。

夜見「ああ、まあ、部屋に入るか？」

燐「あ、ああ」

そして夜見と燐はベッドに座つたが、空気がとても気まづかつた。

そして夜見は燐にどう話しかけようか迷つてしていると、燐の方から夜見に話しかけてきた。

燐「あ、あのさ、黑夜さん」

夜見「え、えっと、なんだ？」

燐「その、さとり様から聞いたんだ 異変を止めに行つてたつて そのごめんなさい」

そして燐は頭を下げてきた。だが、余計に気まづくなるので、夜見はすぐに止めるように言つた。

夜見「え!?!ちよつと燐さん 頭を上げて」

燐「理由も聞かずに叩いたりしてごめんなさい」

夜見「ああ、とりあえず、1回頭を上げて」



燐「…許してくれるのかい？」

そして燐は頭を上げたが、夜見はこう言い出した。

夜見「とりあえず、今回の件は実際俺が異変に首を突っ込んだのが原因だ。だから悪いのは俺だし、燐さんは何も悪くない。わかったか？」

燐「え？でも、叩いたのは…」

夜見「もう気にするな。頭に来てやったことはもういいから。過ぎたことを気にしても仕方ないだろ」

燐「え、うん。わかったよ、ありがとう」

夜見「どういたしましたして。とりあえず、今回の件はもう終わりつてことでいいか？」

燐「うん、そうだね。あのままだと、嫌だもんね。ありがとうね、それじゃ」

そして燐は自分の部屋へと戻っていった。

夜見（とりあえず、仲直り出来て良かった）

そして夜見はベッド横になったが、そこで気付いた。何故かこいしが部屋の隅の方にいることに。

夜見「えつと…こいしさん？一体何を？」

こいし「えへへ、お兄ちゃんだとやっぱりばれちゃうね」

するとこいしはベッドに座り始めた。

そして夜見は横になったままこいしに聞いた。

夜見「俺だとばれるって、どういうことだ？」

こいし「じゃあ問題です 私 の能力は一体なんでしょう？」

夜見（こいしさんの能力？）

そして夜見は今までのことを思い出して、1つの答えが出た。

夜見「無意識かな」

こいし「正解！ 正確には「無意識を操る能力」だけどね♪」

どうやら、夜見の考えは当たっていたようだ。

こいし「でも、お兄ちゃん、なんでわかったの？」

夜見「さとりさんは、俺とこいしさんの心が読めないからな 多分そうだと思ったん

だよ」

すると、こいしは夜見に聞いてきた。

こいし「じゃあ、お兄ちゃんも無意識なの？」

そして夜見は答える。

夜見「いや、そんなことはないはずなんだけどな」

こいし「じゃあ、なんでなんだろう？ 能力とか？」

夜見「いや、それはないはずだ まったく関係の無い能力だしな」

すると、こいしは不思議そうに聞いてきた。

こいし「え？お兄ちゃんって能力あるの？」

夜見「… あれ？言ってなかったっけ？」

こいし「うん、知らない」

そういうえば、さとりに達しに能力の話をするのを忘れていた。そして夜見はこいしに自分の能力を明かした。

夜見「俺の能力は血を操る能力なんだ」

こいし「へえ、そうなんだ どんなんことが出来るの？」

夜見「えつと、そうだな」

すると夜見は空気中の血を集合させて、空中に手のひらサイズの球体を作った。

夜見「こんな感じに、血を操っているんな形を作ることができる」

こいし「へえ、そうなんだ 変わった能力だね」

夜見「変わった能力なのか？幅広く見れば変わった能力あるんじゃないか？」

そんなことを思っていたら、扉が開いた。そこにパジャマを着たさとりが立っていた。

さとり「こいし、部屋にいないと思ったら、黒夜さんの部屋にいたの」

こいし「えー、もうお風呂なの？」

「どうやらさとりは、こいしのお風呂の順番が来たから呼びにきたらしい。」

さとり「いいから早く行って来なさい」

こいし「むー、わかったよ」

こいしは少し不機嫌そうに、部屋を出て行った。

そしてさとりが話しかけてきた。

さとり「黑夜さん、何故こいしが黑夜さんの部屋に？」

夜見「いつ入ったかは知らないけど、いつの間にかいたんだよ。少しびっくりしたけど」

さとり「そうですか。ところで、その丸いのはなんですか？」

さとりはそう言って先ほど作った血の球体を指差した。

夜見「ああ、これが俺の能力で作ったものだよ」

さとり「黑夜さん、能力があつたんですか。なんで黙っていたのですか？」

夜見「それが、忘れてて」

するとさとりは、大きなため息をついた。

さとり「まあ、いいですよ。それで、能力は一体なんですか？」

夜見「血を操る能力だ。まあ、血を操っているんな形を作ったりとか出来るよ」

さとり「え？じゃ、じゃあ。その血は一体、誰のを？」

するとさとりは少し震えていた。そして夜見は説明をした。

夜見「ああ、心配しなくていいよ。そこらで襲ってきた妖怪の血だから」

さとり「え？そ、そうなんですか。良かった」

夜見「ん？なんか言ったか？」

さとり「いえ、なんでもありませんよ。あと、こいしの次は黒夜さんの番ですからね」

そう言つてさとりは部屋を出た。次の番というのはお風呂のことだろう。

少し待つているとパジャマを着たこいしが入つてきた。

こいし「お兄ちゃん、お風呂空いたよ」

だが、こいしの髪はまだ濡れていた。

夜見「こいしさん、髪ちゃんと乾かした？」

こいし「乾かしたよ？」

そこで夜見は思った。

夜見（：． いや、面倒だからさつとで済ませたな）

夜見「ちよつとこいしさん、一緒に来て」

こいし「ふえ？なんで？」

夜見「まあ、いいから」

こいし「うん、わかった」

そして夜見とこいしは一緒に脱衣場に入った。

そこでこいしは夜見に言った。

こいし「お兄ちゃん？私もうお風呂入ったよ？」

すると夜見はドライヤーを持って、こいしの髪を乾かし始めた。

こいし「わ!?お兄ちゃん!？」

夜見「ほら、じつとしてろ」

こいし「う、うん」

しばらく乾かしているとこいしは鼻歌を歌い始めた。どんな歌だかは、まったくわからなかったが。

夜見「どうしたんだ、こいしさん？」

こいし「えへへ、気持ちいい♪」

夜見はおそらく髪に触れている手の動かしかたが気持ちいいのだろうと思った。そしてしばらくすると、こいしの髪は乾かし終わった。

夜見「ほら、終わったぞ」

こいし「ありがとう、お兄ちゃん」

夜見「ああ、どういたしまして」

そう言ってこいしは、脱衣場を出て行った。そして夜見はお風呂に入ってパジャマを

着た後、お風呂を洗ってから自分の部屋に戻った。

夜見（お風呂に入れるってのはやっぱりいいな）

そんなことを思つて自分の部屋に入ると、何故かこいしがベッドに座っていた。

夜見「……こいしさん？」

こいし「なあに、お兄ちゃん？」

夜見「何故、俺の部屋にいるんだ？」

こいし「えへへ、なんでだと思ふ？」

夜見（……はあ、少し地上に出るか）

夜見はマントを身に付けて地上へ向かおうとした。だが、何故かこいしも付いてくる。  
る。

夜見「こいしさん、なんで付いてくるんだ？」

こいし「え？ 駄目なの？」

夜見「……はあ、勝手にしな」

こいし「じゃあ、付いていく♪」

そして夜見とこいしは地上に出た。地上では綺麗な星と月が見えていた。

夜見（やっぱり綺麗な星空だな）

そして夜見はちらりとこいしを見ると、こいしは月をずっと眺めていた。

夜見「……こいしさん、どうしたんだ？月をずっと眺めて？」

こいし「……お兄ちゃん」

こいしは自分を呼んだ為、返事をしてみる。

夜見「ん？どうした？」

すると、こいしは不思議そうな顔でこちらを見た。

こいし「え、どうしたの？お兄ちゃん？」

夜見「え？さっき俺のこと呼んだだろ」

こいし「え？呼んでないよ」

夜見「……そうか、きつと空耳だな」

こいし「そっか ねえ少し寒いから、そろそろ戻ろう」

夜見「ああ、そうだな」

そして夜見とこいしは地霊殿に戻った。

そして夜見が部屋に入ろうとした時、こいしに呼び止められた。

こいし「お兄ちゃん」

夜見「ん？なんだ？」

こいし「あ、いや、なんでもない おやすみ」

こいしはそう言って自分の部屋に入っていった。



夜見（なんだったんだ？）

夜見は自分の部屋に入り、机にマントを置いた。そして夜見はベッドに入ってそのまま眠りについた。

こいし（∴∴ なんなんだろう、この気持ち）

## 第10話 依頼と思ひ

夜見「ふわあ、そろそろ朝か？」

夜見はいつもと同じように目を開けた。だが夜見は目を疑う光景を目にした。

夜見「ん？あ、ああ!!」

そこはとても暗い場所で、目の前ではこいしが歩いていた。だが、こいしは崖に向かつて歩いていた。

夜見「ま、待て！」

夜見は起き上がって叫ぶがこいしはそのまま歩き、奈落へ落ちていった。

夜見「うわああ!!はあ、はあ、ゆ、夢？」

夜見は目が覚めると、そこは自分の部屋だった。どうやら悪い夢を見ていたようだった。

夜見（なんだったんだ、あの夢は）

そして夜見は起き上がって、制服に着替え始めた。

夜見（そろそろ、何着か服増やしたほうがいいかな？2着だけだときついし　：　駄目だ、あの夢が頭から離れねえ）

夜見は別のことを考えて、先ほど見た夢を忘れようとしていた。だが、どうしても頭から離れなかった。

すると、扉が開いてこいしが部屋に入ってきた。

こいし「お兄ちゃん、パジャマ取りに来たよ」

夜見「あ、ああ、はい」

こいし「……どうしたの？ 具合でも悪いの？」

夜見「え、なんだ、急に？」

こいし「だって、すごい汗だよ？」

夜見は顔に触れてみると、確かに汗をすごくかいていた。おそらく先ほどの夢のせいだろう。

そして夜見は心配をかけないように、大丈夫と答えるようにした。

夜見「ああ、大丈夫だよ」

こいし「なら、いいんだけど」

そしてこいしは部屋から出て行った。

夜見は朝食の準備をする為に、キッチンへ向かった。だが、誰もいなかった為、一人でパンとジャムを用意する。

すると、さとりがキッチンに入ってきた。

さとり「ああ、もう準備してくれてたんですか」

夜見「ああ、さとりさん 朝食運ぶの手伝ってくれないか？」

さとり「ええ、もちろん」

そして夜見とさとりは隣の部屋に朝食を運んだ。そして席に座って待っていると、みんながどんどん集まってきた。

夜見・さとり・こいし・燐・空・「いただきます」

朝食を食べていると、こいしが夜見に話しかけてきた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん 今日の仕事付いてつてもいい？」

すると夜見ではなく、さとりが口を開いた。

さとり「こいし、何言ってるの 黒夜さんを困らせないで」

こいし「えー、いいじゃん 邪魔しないよ？」

さとり「そういう問題じゃありません ねえ、黒夜さん」

夜見（…あの夢は、なんだったんだ？ 予知夢とかか？）

さとり「黒夜さん？」

夜見は先ほどの夢のことばかりを考えていて、さとりの声が聞こえていなかった。そしてさとりは大きな声で夜見を呼んだ。

さとり「黒夜さん！」

すると夜見は、さとりに呼ばれたことに気付いた。

夜見「ん、どうした？さとりさん」

さとり「どうしたんですか？何か悩んでるんですか？」

夜見はさとりに先ほどの夢のことを話すと、こいしのことを必要以上に心配しそうなので黙っておくことにした。

夜見「いや、なんでもない 大丈夫」

さとり「そうですか？そんなことより、こいしが仕事に付いていきたいって言ってるんです 黒夜さんも何か言ってください」

さとりの言ったことを聞いて、夜見はこう答えた。

夜見「ああ、別にいいんじゃない？」

さとり「ほら、黒夜さんもって、え？黒夜さん？」

こいし「えへへ、やったあ」

さとりは夜見が許可したことに啞然としていた。

そして夜見は言った。

夜見「別にこいしさんは、他の人間からは見えないんだろ？能力を使えばなおさらだし、邪魔しなければ特に問題ないよ」

燐「ちよつと、黒夜さん？さすがにそれは…」

さとり「そうですよ、こいしが何をするかわかりませんよ？」

そして夜見はそれを聞いて、ある提案をする。

夜見「じゃあ、ちゃんとこいしさんの様子は見てるよ。それで問題ないだろ？」

するとさとりは少し悩んだが夜見を信じることにした。

さとり「黒夜さんが言うなら……じゃあ、いいですよ」

燐「え!?さとり様まで何を言ってるんですか!？」

さとり「黒夜さんなら信用できますし、おそらく大丈夫でしょう」

空「お燐は心配しすぎなんじゃない？」

燐「そりゃ心配はするでしょ!」

そして夜見はみんなに確認をとる。

夜見「じゃあ、こいしさんは今日俺の仕事に付いていくってことでいいか？」

さとり「私はいいですよ」

空「私もいいよー」

燐「うーん……はあ、私もいいかな」

こいし「わーい、やったあ」

燐は最後まで悩んでいたが、とりあえずこいし以外のみんなから許可を得ることができた。こいしはとても嬉しそうな様子だった。

夜見「じゃあ、さっさと朝食食べるか」

そして皆、朝食を食べ終えた。

夜見・さとり・こいし・燐・空「ごちそうさま」

夜見「さて、じゃあ準備するか」

すると夜見は自分の部屋に戻った。そしてマントと仮面を身に付け、刀をベルトに差して地上に出る準備を終えた。

そして部屋を出ると、目の前にこいしがいた。

こいし「じゃあ、行こう お兄ちゃん」

夜見「ああ、そうだな」

そして夜見とこいしは、地上へと向かった。

夜見とこいしは地上に出たが、天気はあいにく曇りだった。

夜見「天気あんまり良くないな」

夜見は雨が降るかもしれないと思っていると、こいしは夜見の手を掴んだ。

夜見「ん？どうした？」

こいし「えへへ、早く行こうよ」

夜見「ああ、そうだな」

そして2人は手を繋ぎながら、人里へと向かった。

人里に2人は入ると、やはり周りの人は自分のことを不審そうに見てきていた。だが、こいしのはことはまったく見えていない様子だった。

夜見（本当に見えてないんだな）

夜見は人里の掲示板に着くと、2枚の依頼状が貼ってあった。

〔依頼：図書館の整理〕

場所：紅魔館の図書館（できれば午前中）

依頼主：パチュリー・ノーレッジ

内容：本の整理

報酬：10 銭

〔依頼：暇潰し〕

場所：おそらく博麗神社（午後ぐらいに）

内容：依頼の通り

報酬：500 ～ 700 文

夜見（片方は前に見たことある字だな　それに、この内容の書き方、絶対あの白黒金髪魔法使いじゃねえか）

片方の依頼は明らかに魔理沙であることに夜見は気付いていた。

だが、夜見は2枚の依頼状を剥がし取った。



こいし「お兄ちゃん、それが仕事？」

夜見「・・・ ああ」

こいし「じゃあ、最初はその紅魔館ってところだね」

夜見「そうだな」

そして2人は人里を出て少し歩いたところで、空を飛んで紅魔館に向かった。

そして夜見は空を飛びながらこいしに話しかけた。

夜見「こいしさんって、飛べたんだな」

こいし「お姉ちゃんとペットも飛べるよ？なんで今、初めて知ったような反応なの？」

夜見「いや、空さんなら翼あるから飛べるのはわかるけど、こいしさんとかはどう飛

んでるんだらうって」

こいし「私達妖怪は、だいたい妖力を使って飛んでるんだよ」

夜見「そうか、それなら納得だな お、見えてきた」

夜見とこいしは紅魔館の門の前に降りると、こいしはまた夜見の手を掴んだ。

そして門の前には美鈴がいて、夜見に話しかけてきた。

美鈴「あ、黒夜さん どうしたんですか？お嬢様に何か用事ですか？」

夜見（美鈴さんも確か妖怪だったけど、こいしさんは見えてないんだな）

夜見「いや、依頼を受けてきた」

そして夜見は依頼状を美鈴に見せると、美鈴は苦笑いをした。そして美鈴は門を開けた。

美鈴「あ、ああ、依頼ですね どうぞ入ってください」

だが、苦笑いを見た夜見は、美鈴に聞いた。

夜見「おい、なんださっきの苦笑いは」

美鈴「い、いえ、行けばわかりますよ どうぞ」

夜見「…まあ、いいか」

そして夜見とこいしは門を通り、紅魔館に入ってしまった。

エントランスに着くと、咲夜が急に現れた。

こいし「わあ!?!きゅ、急に人が!?!」

咲夜「あら、黒夜様 今日はどうされたのですか?」

夜見「依頼を受けたから図書館に行く 通つてもいいよな?」

咲夜「ええ、どうぞ」

すると咲夜は道を譲ったので、夜見とこいしは図書館へと向かった。そして、こいしは夜見に質問をした。

こいし「ねえ、お兄ちゃん さっきの人、どうやって急に現れたの?」

夜見「ああ、あれは自分以外の時間を止めて出てきたんだよ」

こいし「へえ、便利な能力だね」

夜見「そうか？まあ、短時間でいろんなことが出来るのは魅力的かもしれないけど、結局自分がやることは減らないしな」

するとこいしはこう言った。

こいし「そつかあ でも、もし私が使えたらお兄ちゃんと一緒にいる時間が増えていいな」

そしてその話に夜見は軽く返事をした。

夜見「そうか つと、もう着いたぞ」

夜見は目の前の扉を開けると、そこは前と変わらない図書館があつた。何度見ても、この本の数には驚かされる。

こいし「わあ、いっぱい本があるね」

夜見「ああ、そうだな とりあえず、パチュリーさんのいるところに向かおう」

そして夜見とこいしはパチュリーのいる場所へと進んでいった。

しばらくして、パチュリーのいる場所にたどり着くと、パチュリーは夜見に聞いてきた。

パチュリー「あら？2人で入ってこなかった？」

何故かパチュリーはこいしの存在に気付いていた。そして、こいしは夜見に話しかけ

てきた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん　なんでばれたんだろう?」

だが夜見は返事をせず、パチュリーに言った。

夜見「さあな、気のせいじゃないか?」

パチュリー「いえ、それはないはず　結界の反応は確かに2人だったはず」

夜見（なんでそんな魔法使つてんだよ）

夜見はそんなことを思っていた。そしてこいしは少し怒った様子で、夜見にまた話しかけた。

こいし「お兄ちゃん、なんで無視するの?」

しかし夜見はまた、こいしを無視してパチュリーに依頼について聞いてみた。

夜見「そんなことより依頼を受けてきた　どこの本を整理をすればいい?」

パチュリー「そういえば依頼の件だけど、実はそれは本当の依頼じゃないの」

夜見はパチュリーの言っていることを聞いて、夜見は本当の依頼の話を聞くことにした。

夜見「じゃあ一体何を?」

パチュリー「はい、これ」

するとパチュリーは1冊の本を夜見に差し出した。それを夜見は受け取ると、パチュ

リーに本について聞いた。

夜見「なんだ？見たところ魔道書だが」

パチュリー「実は最近、泥棒が来るようになってね その魔道書を取りに来るはずだから、それを守りながら泥棒を追い払ってほしいの」

そして夜見は、気になることを一つ聞いてみた。

夜見「おい、もしも他の人がこの依頼を受けてたらどうするつもりだった」

パチュリー「紅魔館の依頼なんか受ける物好きなんて、あなたぐらいよ」

夜見（そんな不確かな理由かよ）

依頼を出した理由がいまいち納得いかなかったが、別にもう自分が受けてしまったので、もういいかと思った。

夜見「まあいい 泥棒はだいたい、いつ頃来る？」

パチュリー「さあ？そろそろじゃない？」

夜見「じゃあ、そこら辺の本を適当に見てもいいか？」

パチュリー「ええ、別にいいわよ」

そして夜見はこいしの手を引っ張って図書館の奥へ行つた。そして誰の目にも付かないところで、夜見はこいしと同じ目線になるようにしゃがんで本を置き、そして話しかけた。

夜見「こいしさん、さつきはごめん あの時こいしさんに話しかけたら、パチュリーさんに不審がられると思って」

しかしこいしは怒っているのか、うつむいて黙ったままだった。

こいし「…」

すると夜見はこいしの帽子を取って、頭を撫で始めた。

そしてこいしに再度話し始めた。

夜見「本当にごめん、こいしさん 別にこいしさんが嫌いって訳じゃない、本当だ」

夜見がそう言うと、こいしは両腕を横に広げてこう言った。

こいし「…ぎゅーってして」

夜見「ああ」

そして夜見はこいしを軽く抱き締めた。するとこいしは夜見を力いっぱい夜見を抱き締めた。

夜見（痛い… けど、我慢しないと）

夜見はこいしに力いっぱい抱き締められている為、骨が折れそうなほど痛かった。しかし夜見は耐えていた。

そして、こいしは夜見に話しかけた。

こいし「お兄ちゃん」

夜見「ん?どうした?」

こいし「お兄ちゃんの心臓、ドクドクしてる」

こいしはどうやら、夜見の心臓が動いているのを感じているようだった。夜見は目を瞑ると、こいしの心臓の動きを感じた。

夜見「こいしさんの心臓もドクドクしてるよ」

こいし「うん... ねえ、お兄ちゃん?」

夜見「どうした?」

こいし「私のこと、どう思ってる?」

夜見（こいしさんのことを?... どうだろう）

夜見は少し悩んだが、夜見はこいしにこう言った。

夜見「大切な存在だよ」

こいし「... 本当?」

夜見「ああ、本当だ」

こいし「... ん」

するとこいしは抱き締めるのをやめた。夜見も腕を放すと、こいしは少し後ろに下がった。そして夜見はこいしに帽子を被せてこいしに聞いてみた。

夜見「もう、大丈夫か?」

こいし「うん、ありがとう」

夜見「そっか、満足したなら良かった」

すると夜見は立ち上がり、血の紐を作った。そして、本を血の紐でベルトと繋げた瞬間。

ドオオオオオオン

大きな爆発音と共に、揺れが起きた。そして夜見とこいしはバランスを崩した。

夜見「おわっ!?なんだ!」

こいし「わ!?きやあ!」

夜見「こいしさん!大丈夫か!」

すると夜見はこいしを抱き寄せて、揺れが止むまでこいしを抱き締めていた。そして夜見は揺れが止むと、こいしを放した。

夜見「こいしさん、大丈夫か?怪我とかは?」

こいし「大丈夫だよ、ありがとう」

夜見「ああ、どういたしまして。それより、なんだ?さっきの爆発は?確かあつちからだな」

そして夜見は爆発が起きたであろう場所へと進み始めた。すると、こいしは夜見の手を掴んだ。



夜見「ん、こいしさん」

こいし「……手、繋いでいい？」

夜見「……ああ、いいぞ」

そして夜見とこいしは手を繋いで、爆発の起きた場所まで向かった。

爆発が起きた場所に着くと壁に穴が空いており、1人の少女が宙に浮いていた。

そしてその少女は夜見に気付くと、夜見に話しかけた。

魔理沙「おお、夜影じゃないか！どうしたんだ、なんでここにいるんだ？」

そこにいたのは、魔理沙だった。そして夜見は魔理沙に何故いるかを聞く。

夜見「逆になんで「あー！その本！」……あ？これか？」

だが、夜見の話を魔理沙が遮った。そして魔理沙は、夜見のベルトにぶら下がっている本を指差してこう言った。

魔理沙「それは私の探してた本じゃないか！お前、まさか私のために見つけてくれたのか！」

夜見「……えっと、つまり」

夜見の持っている本が目当てということとは、どうやら泥棒というのは魔理沙のようだった。

夜見「泥棒ってのは白黒金髪魔法使いだったのか」

魔理沙「はあ!?!何を言ってるんだ!人を急に泥棒扱いして!て言うかなんだその呼び方は!」

夜見「呼び方なんていいだろ別に」

魔理沙「別にで済む話じゃないだろ!」

魔理沙はかなり怒っている様子だったので、夜見は魔理沙を普通に呼ぶことにした。そして夜見は気になることを魔理沙に聞いた。

夜見「わかったよ魔理沙さん、ところで1ついいか?」

魔理沙「ん?なんだ?」

夜見「この本、盗んでないか?」

魔理沙「はあ?何を言ってるんだ、私は借りてるだけだぜ」

夜見(え?じゃあ泥棒ってのは誰なんだ?)

魔理沙が本を借りているとなると、泥棒は魔理沙ではないことになる。夜見は誰が泥棒なんだと考えていたが、魔理沙の次の言葉で誰が泥棒か確信した。

魔理沙「死ぬまで借りてるだけだ」

夜見「...は?」

夜見は唾然としてしまった。なぜなら、そんな屁理屈が通るはずもないのに自信満々に魔理沙がそんなことを言ったからである。

そして夜見は小声でこいしに話しかけた。

夜見「こいしさん、1ついいか？」

こいし「ん？どうしたの？お兄ちゃん」

夜見「今からこの本を投げるから、この本を持って隠れてくれ」

こいし「うん、いいけど、でも、お兄ちゃんは？」

夜見「俺は大丈夫、終わったら呼ぶから」

こいし「…うん、わかった」

魔理沙「おい、どうしたんだ？急にぶつぶつ言つて、なんか悩み事でもあるのか？」  
すると夜見は魔理沙に背を向けて、本を血の紐から外した。そして夜見は、全力で本を投げた。するとこいしは、その本を拾いに行つた。

本を投げたのを見て、魔理沙は叫んだ。

魔理沙「あー!!!お前、なんで投げんだよ!!!」

夜見「お前に盗られない為だ」

魔理沙「ふざけんな！探しに行く羽目になったじゃないか！」

そして魔理沙は本を探しに行こうとしたが、夜見は魔理沙に向けて弾幕を放つた。

魔理沙「おわ!?なんで邪魔をするんだ!?!」

だが魔理沙は、弾幕を軽々避けてしまった。そして夜見は言った。

夜見「悪いがこちらも仕事なんだ」

すると魔理沙は理解した様子だった。

魔理沙「なるほど　つまり依頼を受けたって訳か」

夜見「ああ、そうだ」

すると魔理沙は夜見に手を向けて、こう言った。

魔理沙「なら、弾幕ごっこで勝負だぜ！」

そう言つて魔理沙は夜見に弾幕を放つたが、夜見は刀を引き抜き弾幕を斬り落としていく。

魔理沙「どうしたんだ？防ぐ一方じゃ私に勝てないぜ？」

夜見「ああ、わかつてる」

すると夜見はそのまま後ろに下がり、本棚に隠れた。

魔理沙「待て！」

魔理沙は急いで追いかけるが、夜見の姿は無かった。

魔理沙「な!?!どこだ!?!」

すると魔理沙の上から声が聞こえた。

夜見「ここだが？」

魔理沙「くっ！上か！」

魔理沙は上を見ると夜見は本棚の上から跳んで、刀で斬りかかってきた。だが魔理沙は、後ろに下がって避けた。

夜見「惜しいな」

魔理沙「この！」

魔理沙は弾幕を放つが、夜見は刀で弾幕を斬り落とす。

魔理沙「これじゃ罅が開かない、こうなったら」

そして魔理沙は一枚の紙を出した。そう、それはスペルカードだった。そして魔理沙は帽子から八角形の道具を取り出してスペルカードを発動させた。

魔理沙「恋符 マスターズパーク」

夜見（あ、まづいな）

すると魔理沙の持っている八角形の道具から虹色のビームが出て夜見を呑み込み、爆発した。

ドオオオオオオン

魔理沙「あっはっは 残念だったな夜影、さすがに私には勝てないぜ」

そして魔理沙は本を探しに行こうとしたら、煙の中から声が聞こえた。

夜見「はあ、さすがに使わないと勝てないか」

魔理沙「な、嘘だろ!？」

すると煙が吹き飛ばされて、中から赤い翼の付いた夜見が出てきた。

夜見（極力、能力を使用は避けたいんだがな　今回は無理かな）

夜見はそんなことを考えていたが、魔理沙は驚いた様子で夜見に聞いた。

魔理沙「な、なんなんだ!? その翼!? まさかお前、能力持ちだったのか!？」

だが、夜見は答えなかった。

夜見「喋る暇はあるのか？」

すると夜見は魔理沙に向かって飛んでいき、刀で斬りかかる。しかし魔理沙はそれを

間一髪で避けた。

魔理沙「危な！」

夜見「まだまだ終わらないぞ」

そして夜見は魔理沙に向かって、何回も刀を振るった。だが、魔理沙はそれをギリギリで避ける。

夜見「どうした? 避ける一方じゃ、勝てないぞ?」

魔理沙「くっ!?! 言い返しにか!?!」

夜見「さあな」

夜見は刀を振るっても埒が開かない為、距離を取って刀を仕舞った。

夜見（さて、能力で作れるだろ）

すると夜見の左手に赤い何かが握られた。それは、血で作ったコルト・パイソンだった。そして夜見はスペルカードを取り出す。

夜見「じゃあ、次はこっちの番だ「降符 ブラックレイン」」

夜見がスペルカードを発動させると、魔理沙の上から無数の小さな黒い弾幕が降ってきた。

その弾幕を魔理沙は避けるが、夜見はそこに弾幕を撃ち込む。

ダアン ダアン ダアン

魔理沙「くそ、避けにくいぜ あだ!？」

魔理沙に弾幕が1発当たると、夜見は続けて弾幕を撃ち込んだ。だが魔理沙は、その弾幕を間一髪で避けた。

魔理沙「よつと くそお、なかなかやるな夜影」

夜見（へえ、あれを避けるか）

そして魔理沙は、次のスペルカードを取り出した。

魔理沙「お返しだけ「魔符 ミルキーウェイ」」

魔理沙がスペルカードを発動させると、星の形をした弾幕が飛んできた。

だが夜見は、その弾幕をコルト・パイソンで撃ち落としていく。

ダダダダダアン

魔理沙「な!?嘘だろ!」

夜見「こんなもんか?」

魔理沙「こうなったらこれだ!」星符 サテライトイリユージョン」

魔理沙がスペルカードを発動させると、魔理沙の周りに6個の赤、橙、黄、緑、青、紫の色をした玉が現れた。

すると、その玉から弾幕が放たれた。だが、夜見は軽々と避ける。

夜見「どうした?威力があっても、当たらないと意味がないぞ?」

魔理沙「そうしてられるのも今の内だぜ!これが本命だ!」恋心 ダブルスパーク」  
すると魔理沙は8角形の道具から虹色のビームを放ち、さらに別の方向からも虹色のビームを放った。

夜見(避けるのは無理だな)

すると夜見は、またビームに呑み込まれた。

魔理沙「さすがにこれは防げないだろ」

ビームが過ぎ去ると、夜見は無傷のまま飛んでいた。その光景を見て、魔理沙は驚いた。

魔理沙「な!?これも効かないのか!」

夜見(いやあ、危なかった もう少して壁が壊れる所だった)



実は夜見はビームに呑み込まれる寸前に血の壁を作ったのだが、ビームが過ぎ去る寸前に全体にひびが入っており、崩れる一歩手前だったのだ。

そして再び魔理沙はスペルカードを取り出す。

魔理沙「こうなったらやけだ!」  
「彗星 ブレイジングスター」

魔理沙がスペルカードを発動させると、魔理沙は8角形の道具を後ろに向けた。そしてその道具から青いビームが放たれて、夜見に向かってすごいスピードで突っ込んできた。

夜見「はあ、そろそろ終わりにするか」  
「斬弾 弐斬撃」

夜見はスペルカードを発動させて、刀を抜刀して斬撃を飛ばした。そしてそのまま魔理沙は、その斬撃の弾幕に突っ込んでいった。

しかし、斬撃の弾幕は碎けてしまった。

夜見「な!?!まじか!?!」

夜見は続けて2発目の斬撃の弾幕を飛ばそうとするが、魔理沙はすぐ目の前に来ていた。そして夜見は避けようとしたが、箒の先端が夜見の腹に直撃して吹っ飛ばされてしまった。

夜見「ごは!?!」

夜見はそのまま後ろに飛ばされ、図書館の奥の壁に叩きつけられた。

ダアアアアン

夜見は壁に叩きつけられた後、そのまま重力に従って床に落ちた。

ドサア

魔理沙「ふう、なんとか倒せたぜ てか、最初からこのスペルカードを使えば良かったぜ さてと、夜影にも本を探すのを手伝わせるか」

そう言つて魔理沙は夜見の飛ばされた場所まで行き、夜見の近くに降りた。そして夜見を揺すつて起こそうとしていた。

魔理沙「おーい、起きろ 私が勝負に勝つたんだ、本を探すのを手伝わってもらうぜ」

夜見「へえ、誰が勝つたつて？」

魔理沙「え？」

すると夜見は急に立ち上がつてスペルカードを発動させた。

夜見「[撃符 ファイブショット]」

すると夜見はコルト・パイソンの銃口を魔理沙の額に付けて、5発の弾幕を撃つた。

ダアン ダアン ダアン ダアン ダアン

そして魔理沙は悲鳴を上げる間も無く、気絶してしまった。このスペルは吸血鬼のフランドールすら気絶させたスペルカードの為、気絶するのは当たり前だった。

夜見（ふう、ルールのにはありだよな 相手が戦闘不能になったら勝ちって話だしな）

そう、弾幕ごつこの勝つ条件は相手を戦闘不能にさせたら勝ちとなる。だが夜見は戦闘が出来る状態だったが、魔理沙を油断させる為にわざと倒れていたのだ。よつて弾幕ごつこに勝つたのは夜見だった。

そして夜見は血を空中に分解させて、こいしを呼んだ。

夜見「おーい、こいしさん！出てきていいぞ！」

夜見がそう言うのと、本棚の陰からこいしが顔を出した。

夜見「そんなとこにいたのか」

夜見はこいしに近づくと、こいしは急に抱きついてきた。

夜見「お、おい こいしさん？」

するとこいしはこう言った。

こいし「良かった、お兄ちゃんが勝つて」

夜見「こいしさん、急にどうした 心配だったのか？」

夜見はそう聞くとこいしはそのまま頷いた。すると夜見はこいしにこう言った。

夜見「そうか でも、大切な人の前で負ける訳にはいかないだろ？」

こいし「ねえ、お兄ちゃん ちよつと耳貸して」

夜見「ん？わかった」

するとこいしは離れて、夜見はしやがんで耳をこいしに向けた。そしてこいしは顔を

夜見に近づけた。

チュツ?

夜見「?!?!?!?こいしさん!?!」

こいしは急に、夜見の頬にキスをした。そして夜見はそれに驚いていた。そしてこいしはそのまま抱きついてきた。

こいし「……ねえ、お兄ちゃん?」

夜見「え? 本当にどうした? こいしさん?」

こいし「なんで私、こんなことしたんだろ?」

その言葉聞いて、夜見は啞然とした。

夜見「……え?」

そしてこいしは、話を続けた。

こいし「: わかんないの、自分の気持ちも でも、お兄ちゃんに会ってこうしたいって思っただけ」

すると、その話を聞いた夜見は軽くこいしを抱きしめた。そして夜見はこいしに話す。

夜見「:… そうか だけど、それは俺にもわからないよ 俺はこいしさんの心を読める訳じゃ無いし、さとりさんも読めない でも、答えを急いで探す必要は無いんじゃないかな」

いか？」

こいし「…でも」

夜見「いいんだ、ゆっくりで 誰だつてわからないことはある。そしてその答えを、誰もがすぐわかることはない。だから、こいしさんのペースで答えを探したらどうだ？」

夜見はそう言うのと、こいしはこう返事をした。

こいし「うん、わかった。ありがとう、お兄ちゃん」

夜見「どういたしまして」

そしてこいしと夜見は離れて、夜見はこいしから本を受け取った。

夜見「さて、依頼は終わった。パチュリーさんのところへ向かうか」

こいし「うん、そうだね」

そして2人は手を繋いで、パチュリーのところへ向かった。

パチュリーのところに着くと、パチュリーは夜見に話しかけた。

パチュリー「あら、もう終わったの？」

夜見「ああ、そうだ ほら」

そして夜見は本をパチュリーに返した。そして夜見は気になることがあったので、パ

チュリーに聞いた。

夜見「そういえば、穴の空いた壁と魔理沙さんはどうするんだ？」

するとパチュリーはこう答えた。

パチュリー「ああ、それなら咲夜に全て任せろわ」

夜見「へえ、そうか」

咲夜の能力は時間を止めると言っても、本来は空間を操る能力である。その為、穴の修復などすぐに終わるのだろう。

そして夜見は本題の話をする。

夜見「依頼はこなした、報酬は？」

パチュリー「ああ、報酬ね 咲夜、いるかしら？」

咲夜「どうしましたか？パチュリー様」

すると、パチュリーの横に咲夜が現れた。そしてパチュリーは咲夜に頼んだ。

パチュリー「悪いけど、報酬を持って来てくれないかしら？」

すると咲夜は一瞬で手元に、袋を持った。

咲夜「これを黒夜様に渡せばいいのですか？」

パチュリー「ええ、そうよ」

すると咲夜は少し心配そうな声でパチュリーに言った。

咲夜「ですが、こんなに渡していいのでしょうか？」

するとパチュリーは咲夜にこう言った。

パチュリー「大丈夫よ この依頼の話をレミイにしたら、レミイが提案してきたから」  
咲夜「そうなんですか なら、安心ですね はい、どうぞ」

すると咲夜は夜見に袋を渡してきた。中にはちやんと、10銭入っていた。

夜見「ああ、確かに受け取った それじゃあ、俺は次の依頼があるから」

そう言つて夜見は、こいしと一緒に図書館を出ていった。そして夜見とこいしは紅魔館から出ると、門を開けた。

そして美鈴が夜見に話しかけた。

美鈴「あ、もう終わったのですか？」

夜見「ああ、終わった ところでなんで門で魔理沙さんを止めなかつた？」

夜見がそう聞くと、美鈴は苦笑いをしながら言つた。

美鈴「実は私、空中の敵への対処法が無いんですよ」

夜見（そういえば、美鈴さんつて接近戦が得意なんだっけ）

夜見は異変と時に、美鈴と戦つた時のことを思い出した。

夜見「ああ、そうだったな すまない、嫌なことを聞いて」

美鈴「いや、大丈夫ですよ では、また来てくださいね」

夜見「ああ、その内な」

夜見はそう言つて、血の翼を作つてこいしと一緒に人里へ向かつて飛んで行つた。

# 第11話 敗北からの思い そして、言ってしまった言葉

夜見とこいしは空を飛んでいると、こいしが何かを見つけた。そして、夜見に話しかける。

こいし「お兄ちゃん、あれなんだろう？」

夜見「ん？どれだ？」

こいし「ほら、奥のあれ」

こいしが指を指した方向を見ると、なにやら開けた場所に黄色い何かが広がっていた。

そして夜見は、こいしに言った。

夜見「昼飯食うにはまだ早いし、行ってみるか？」

こいし「うん、行ってみよ」

すると夜見とこいしは飛ぶ方向を変え、こいしの見つけた場所へと向かう。

そして夜見とこいしは近づくと、黄色いものの正体がわかった。それは大量の向日葵だった。その向日葵はどれも2m以上の高さがある、大きなものだった。



そして夜見とこいしはその向日葵畑の道に降りた。

夜見「おお、向日葵がこんなにあるなんてすごいな」

こいし「わあ、すごく綺麗だね、お兄ちゃん」

夜見「ああ、そうだな」

そしてこいしは夜見の手を掴み、手を繋ぎながら向日葵畑を進んでいく。

進んでいると夜見はある疑問を口に出した。

夜見「それにしても、一体誰がここを管理してるんだ？」

すると、こいしが反応した。

こいし「え？誰かここにいるの？」

夜見「だって、こんなに綺麗に道があるってことは、誰かが通ったりするってことだ

あと向日葵は基本、育てる植物だしな」

こいし「そっか、じゃあ、誰が育ててるんだらうね？」

そんな会話をしていると、後ろから声をかけられた。

？「あら、あなた達は？」

夜見とこいしは振り返ると、そこには白い日傘を指した女性が立っていた。

その女性は、緑色の髪のショートカットだった。そして服装は、白いカッターシャツの上にチェック柄の赤いベストとベストとおなじ柄のロングスカートを着ていて、首も

とには黄色のリボンをしていた。

そして夜見はその女性に聞いた。

夜見「・・・誰だ？」

すると女性は笑顔で答えた。

？「私は風見幽香 かざみゆうか。ここの向日葵畑に住んでいるの。あなた達の名前は？」

そして夜見は幽香の言葉を聞いて、あることに気付いた。

夜見「・・・こいしさんが見えるのか？」

幽香「へえ、その子はこいしちゃんっていうのね。よろしくね」

すると幽香はこいしに近づいて、手を差し出した。やっぱり幽香はこいしが見えるよ

うだ。しかし、こいしは夜見の後ろに隠れた。

幽香「あら、こいしちゃんはシャイなのかしら」

幽香は少し笑っていた。そして夜見に向いて、幽香は夜見に名前を聞いた。

幽香「じゃあ、あなたの名前はなんていうのかしら？」

夜見「・・・黒夜夜見」

幽香「そう、よろしくね」

そして幽香は手を差し出した為、夜見はその手を握って握手をした。

そして幽香は少し笑って、夜見に話しかけた。

幽香「ふふ、あなたはちゃんと握手をするのね」

夜見「…別にいいだろ」

幽香「まあ、私から手を差し出したからね ところであなた達は、何故ここにいるのかしら？」

幽香は夜見に質問してきた為、夜見は答えた。

夜見「遠くから見えて、気になったんだ 嫌なら出ていくが？」

すると幽香は首を横に振って、夜見とこいしに言った。

幽香「いえ、別に構わないわ それよりそろそろお昼だけれど、良かったら一緒にご飯でも食べないかしら？」

幽香は突然、夜見とこいしと一緒に昼飯を食べないかと誘ってきた。

そして夜見はその言葉に甘えることにした。

夜見「… ああ」

すると、こいしは夜見の服を引っ張ってきた。夜見はこいしの方を向くと、こいしは首を横に振っていた。

夜見「どうした？こいしさん」

こいし「お兄ちゃん、早く出て行こう お願い、早く」

何故かこいしはとても嫌がっていた。そして夜見は嫌がる理由をこいしに聞いた。

夜見「どうして嫌なんだ？」

こいし「だってあの人が、私が見えるんだよ？ 私が何の妖怪か、ばれたら…。」

すると幽香はその話を聞いて、こう言った。

幽香「あら、やっぱりあなたも妖怪なのね」

そして夜見は幽香の言葉を聞いて、あることに気が付いた。

夜見「あなたもってことは、幽香さんも妖怪なのか？」

すると、こいしはきよんとしていた。そして幽香は夜見の質問に答える。

幽香「ええ、そうよ 私は妖怪 そしてあなたは覚り妖怪かしら 別に嫌ったりしな

いから安心してちょうだい」

するとこいしは夜見から離れて、幽香に聞いた。

こいし「本当に、嫌わない？」

そして幽香はこいしの質問に、笑顔で答える。

幽香「ええ、もちろん」

そしてこいしは安心してのように、呟いた。

こいし「…良かった」

するとこいしは後ろに倒れかけたので、夜見は急いでこいしを支えた。

そして夜見はこいしに呼びかけた。

夜見「こいしさん？大丈夫か？」

そしてこいしは眩くように、返事をした。

こいし「うん、大丈夫 良かった、お兄ちゃん」

するとこいしは夜見に抱き付いていた。そして夜見は軽くこいしを抱きしめて、そのまま抱き抱えた。

夜見「そうか、良かったな」

こいし「うん」

幽香「あらあら、ずいぶんとラブラブなのね」

幽香はその光景を見て、楽しそうに笑っていた。

するとこいしは少し力を込めてきたが、痛くなるほどではなかった。

そして幽香は手招きをして、こう言った。

幽香「さあ、こつちよ 付いてきて」

そして夜見は幽香の方へ振り向いた。

夜見「ああ、わかった」

そして夜見とこいしは、幽香の後に付いていった。

しばらく歩いていると、屋根や壁が全て白い家が見えてきた。そして家の周りには、色とりどりの花が咲いていた。

幽香が立ち止まると、幽香は夜見とこいしの方に振り返った。

幽香「ここが私の家よ さあ、遠慮はいらないわ」

そして幽香は家の玄関を開けた。

夜見とこいしは遠慮はいらないと言われたので、遠慮なく家の中に入った。家の中はとても綺麗で、窓からは向日葵畑が見えていた。

そして幽香は長テーブルの方を指差して、こう言った。

幽香「あそこの席に、自由に座っててちょうだい 私は準備をしてくるから」

そう言って幽香は日傘を玄関のそばに立て掛け、家の奥の方へ行ってしまった。そして夜見とこいしは幽香の指差したテーブルの方へ行き、抱き抱えたこいしを椅子に座らせ、夜見はこいしの隣の席に座った。

夜見（すぐ綺麗な家だな アリスさんの家も、こんな風に綺麗だったな）

夜見がそんなことを思っていると、こいしは夜見の手を握ってきた。そしてこいしは、夜見に話しかける。

こいし「お兄ちゃん、なんであの人は、私が見えるんだろう？」

夜見はそれを聞いて、夜見も疑問に思った。しかし、夜見はそこまで深く考えなかった。

夜見「ああ、そうだな でも、こいしさんのことは嫌がったりしてないからいいんじゃない

ないか？」

そう言うのと、こいしは笑顔で言った。

こいし「うん、そうだね」

すると、家の奥から幽香が籠を持ってきた。そしてその籠をテーブルの上に置いた。ちなみに籠の中には、パンとビンに入ったジャムが入っていた。

幽香「今、これぐらいいしか家になかったんだけど、これで大丈夫かしら？」

幽香は少し心配していたが、夜見は言った。

夜見「いや、問題ない」

幽香「そう？こいしちゃんも大丈夫？」

幽香がこいしにも聞くと、こいしは答えた。

こいし「うん、大丈夫だよ」

幽香「そう、ならよかったわ じゃあ、早速食べましょう」

そして幽香は椅子に座った。そして3人で食事を始める。

夜見・こいし・幽香「いただきます」

そして夜見は仮面を外して、パンを食べ始める。すると、幽香は夜見の顔を見て言った。

幽香「あら、顔はかなりかつこいいじゃない」

夜見「ん、そうか？あまり気にしたことはないが」

こいし「うん、お兄ちゃんはかつこいしよ それにとつても優しいし」

すると幽香は、何故こいしと仲がいいのか理解した。

幽香「ふふ、なるほどね だからあなたはこいしちゃんに好かれてるのね」

夜見「まあ、別に妖怪だろうが嫌いになる理由は無いしな」

そう夜見が答えると、幽香は夜見に聞いてきた。

幽香「なら、私のことも嫌わないのかしら？」

そして夜見は当たり前のように答える。

夜見「ああ、嫌わないが？逆に嫌う理由があるのか？」

夜見は逆に幽香に聞いてみると、幽香はこう答えた。

幽香「まあ、妖怪って基本、怖がられたりするものよ それに、私は妖怪の中では強

い方なのよ」

夜見（強いつて普通、自分で言うか？それとも自信があるだけ？）

夜見は幽香の実力がどのくらいあるのか気になり、幽香に質問を試みた。

夜見「妖怪の中では強い方って言うけど、具体的にはどのくらいなんだ？」

すると幽香はその質問に、こう答えた。

幽香「そうね、だいたい白黒の魔法使いと五分五分つてところかしら？」



夜見「へえ、魔理沙さんと五分五分… あ、しまった」

幽香「あら、どうかしたのかしら？」

夜見は、急にあることを思い出した。

夜見「いや、魔理沙さんから依頼受けたのに、弾幕ごっこで倒しちまった」

そう言うのと、幽香は夜見にこう言った。

幽香「へえ、魔理沙に勝つほどの実力があるのね 1度戦ってみたいものね」

そう言つて幽香は笑顔を向けてきた。そして夜見は言う。

夜見「やめてくれないか？ 争い事は出来るだけ避けたいんだ まあ、勝負したいって

ことなら話は別だけど」

幽香「ふふ、冗談よ 戦つてどうするの」

夜見「まあ、それもそうか」

そんなことを話している内に、夜見とこいしはお腹がいつぱいになっていた。

夜見「ごちそうさま、俺はもういい」

こいし「私も、もうお腹いっぱい」

すると幽香も、パンを食べる手を止めた。

幽香「ふふ、ありがとう ご飯に付き合つてくれて」

夜見「ごつちも、ごちそうをしてくれてすまない 今度来るときには、何か手土産を

持つてくる」

幽香「いいのよ、気軽に来てくれればいいから」

すると夜見は、仮面を被った。そして夜見とこいしは立ち上がった。

夜見「さて、そろそろ失礼する。邪魔したな、幽香さん」

こいし「じゃあね、幽香さん」

こいしが手を振ると、幽香も手を振り返した。

幽香「ふふ、またね」

そして夜見とこいしは玄関から出ようとしたが、夜見は止まった。

夜見は聞き忘れたことがあったので、幽香に質問をする。

夜見「そうだ、1ついいか？」

そして幽香は返事をする。

幽香「何かしら？」

夜見「博麗神社ってどこにあるんだ？」

夜見が聞くと、幽香は前に指を指して言った。

幽香「ああ、あの巫女の神社ね。確か、そのまま真っ直ぐ行けばいいわ」

夜見「そうか、それじゃ」

そして夜見とこいしは外に出て、2人は空を飛んで博麗神社へ向かった。

しばらく空を飛んでいると、森の中に神社と赤い鳥居が見えた。おそらくあれが博麗神社だろう。

そして夜見とこいしは、神社の手前の石の階段のところへ降りた。

夜見「よつと うわあ、結構ボロボロだな ちゃんと整備してんのか？」

こいし「うん、結構壊れてるね」

石の階段を見ると、所々がボロボロになっていた。そして夜見はこいしに話しかける。

夜見「そうだ、こいしさん もしかしたらこいしさんはここで待ってたほうがいいと思う」

すると、こいしは首を傾げた。

こいし「え、なんで？ 一緒に行こうよ いいでしょ？」

すると夜見はこいしの肩に手を置いて、説明をした。

夜見「実は、この神社の巫女に1回会ったことがあるんだ その巫女は容赦なく妖怪を退治しようとするんだ もしかしたら、こいしさんが見えたらつても考えてただから、ここで待っててくれるか？」

するとこいしは俯いていたが、急に小指を出してきた。

こいし「……約束して、ちゃんと迎えに来るって」

夜見「ああ、約束する」

そして夜見も小指を出して、小指を絡めた。するとこいしは歌い始めた。

こいし「ゆゝびきりげんまゝん うつそついたらはくりせんぼんのくます」

夜見・こいし「ゆゝびきった」

そう言つて2人は小指を離して、夜見は階段を上がつていく。後ろを振り返るとこいしが手を振つていた為、こちらも手を振つた。

そして階段を上りきり、鳥居をくぐるとそこには神社があつた。その神社は綺麗に掃除されていて、境内では霊夢が箒を掃いていた。

そして、霊夢はこちらに気付いた。

霊夢「ん？あんたは確か黒月、よ、夜影？だつたかしら？」

夜見「ああ、そうだ」

すると霊夢は何か気付いて、手に札を持つてこちらに投げてきた。だが、夜見は軽くその札を掴んだ。

だが、特に何かが起こる気配は無かつた。

夜見「…何のつもりだ？」

霊夢「あれ？おかしいわね 確かに妖力を感じただけけど…」

夜見（妖力？もしかして、血のことか？）

夜見は試しに空気中の血を集めて、球体を作った。すると霊夢はその球体を指差した。

霊夢「そう、それよ！その妖力！何？もしかして妖力でも操れるの？」

霊夢は球体を血だとは思っておらず、夜見は説明するのも素性をばらす原因になると思つて、そういうことにしておいた。

夜見「まあ、そんな感じだ」

霊夢「へえ、随分と変わった能力ね　ところで、何か用かしら？妖怪退治なら報酬はちゃんともらうわよ？」

そして夜見は霊夢にこの神社に來た理由を説明する為に、依頼状を見せた。

夜見「魔理沙さんの依頼でな」

霊夢「へえ、そう」

霊夢はそう言うのと、夜見から依頼状を奪い取った。すると霊夢はその依頼状を破り始めた。

霊夢「なんであいつは、いつつこんな面倒なことをするのかしら　まったく」

霊夢はかなり機嫌を損ねているようだった。すると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

魔理沙「おーい、霊夢ー！邪魔するぜー！って、おわ!?なんで夜影がここに!？」

魔理沙は何故か驚いている様子だった。すると、霊夢が魔理沙に言い始めた。

霊夢「あんたがここを集場所にしたからでしょ？ふざけないでよ、まったく」

魔理沙「おいおい、霊夢 私はいたって真面目だぜ そんなことより！夜影、リベンジマッチだ！次は負けないぜ！」

魔理沙はそう言って、いきなり弾幕を放ってきた。そして夜見は刀の抜刀で弾幕を切った。

ちなみに霊夢は呆れて神社の中に入って行ってしまった。

夜見「また、同じ手か 芸が無いな」

魔理沙「うるせえやい！最初から全力でやらせてもらうぜ！」「彗星 ブレイジングスター」

すると魔理沙は、図書館で夜見を吹き飛ばしたスペルカードで突っ込んできた。しかし夜見はそれを刀で防ぐ。

ガキンツ

魔理沙「おいおい、耐えきれぬのか？」

ズズズズ

よく見ると、夜見は少しずつ後ろに下がり始めていた。すると夜見は、横に無理やり跳んで避けた。

魔理沙「うお!? なら、次の手だ!」[魔砲 ファイナルスパーク]

すると魔理沙は帽子から、8角形の道具を取り出した。そしてそれを夜見に構えると、「恋符 マスタースパーク」よりも太いビームが出た。

しかし夜見は目の前に血の壁を作り出した。

ピシッ パキッ

夜見(駄目か 威力が強すぎる)

だが、血の壁にはどんどんひびが入ってきた。すると夜見は血の翼を作り出し、空へ逃げる。

魔理沙「やっぱりに空に逃げるよな、そりゃ!」

すると魔理沙は夜見に向かって、ピンを投げつけてきた。

夜見はそれを刀で斬ると、突然緑色の煙が出てきた。夜見はすぐにその場から離れるが、体が痺れ始めてきた。

魔理沙「かかったな! それは私特製の体を痺れさせる煙だぜ!」

夜見(… まずいな 手の感覚が抜けていく)

すると夜見の手から刀が滑り落ちて、地面に刀が刺さった。

魔理沙「くらえ! 私のとっておきのスペルカードって、おわ!? なんだ!? どつから弾幕が!」

魔理沙はスペルカードを発動させようとすると、どこからか青い弾幕が飛んできた。夜見は弾幕の飛んできた方向を見ると、こいしが鳥居の陰から弾幕を放っていた。

夜見（こいしさん!?!なにしてんだ!?!）

夜見はすぐにこいしのそばへ向かおうとするが、夜見は体がうまく動かせず、その場に落ちてしまう。

夜見（ヤバイ 体が動かねえ）

すると夜見は自分の落ちる地点に翼の血を使って、クツシヨンを作った。そして刀が近くにあった為、刀を手に取った。そして刀を杖のようにして、フラフラになりながらも立ち上がった。

夜見「はあ、はあ」

夜見は魔理沙の方を見ると、魔理沙はまだ弾幕を避けていた。そして夜見はこいしの方を見ると、こいしはビクツとして弾幕を放つのをやめた。

魔理沙「お?なんだ?弾幕が止んだぜ」

夜見（こいしさん、あそこで待ってるように言ったのに 何故?）

夜見はそんなことを考えていた。しかし魔理沙は容赦なく、夜見に向かって弾幕を放ち始めた。

魔理沙「隙だらけだぜ?夜影!」



魔理沙は弾幕を放つが、夜見は刀で弾幕を斬り落とし始めた。すると魔理沙は驚いていた。

魔理沙「な!?なんで動けるんだ!?まだ効果は切れてないはずなのに!」

夜見（駄目だな、少し動きが遅くなるか）

実は夜見は体の至るところに血を付けて、能力によって無理やり体を動かしていた。しかし、実際に体を動かす時よりは、若干動きは遅かった。

しかし魔理沙は夜見に情けをかけるはずもなかった。

魔理沙「やっぱりこれでとどめにしてやるぜ」「魔砲 ファイナルマスタースパーク」  
魔理沙がスペルカードを発動させると、8角形の道具から虹色のビームが放たれる。

夜見は急いで血の壁を作る。

ピシッ バキッ

しかし、夜見の血の壁は魔理沙のスペルカードの威力には、耐えきれなかった。

バリン

夜見「しまっ…」

そして夜見は、ビームにそのまま呑み込まれてしまった。ビームが過ぎ去ると、夜見はその場で倒れていた。

魔理沙「やったぜ、さすがにこのスペルカードには耐えきれなかったな」

しかし、夜見の指が微かに動いた。だが、魔理沙はそれを見逃さず、そして魔理沙は夜見に言った。

魔理沙「おいおい、もう戦えないだろ？ 潔く負けを認めるんだぜ　まあ、依頼は達成できたんだからいいだろ」

すると夜見は、刀を杖代わりにしてフラフラになりながら立ち上がる。

夜見「はあ　はあ　ああ、そう…　だな　別に…　勝ちにこだわる必要…　は無い」

そして夜見は魔理沙に近づこうとしたが、まともに動けるはずもない。

ドサア

そして、夜見は倒れてしまう。

夜見「はあ　はあ」

魔理沙「まあ、無理はしない方がいいぜ？　しばらくそこで休んでな」

そして魔理沙は夜見の元にお金を置いて、神社の中に入っていった。

すると、こいしが夜見の元へ近づいてきた。

こいし「お、お兄ちゃん？　大丈夫？」

夜見「ああ、こいしさん　はは、情けないところを見せたな」

するとこいしは夜見の手を両手で掴んで、首を横に振った。

こいし「そんなことないよ、お兄ちゃんは頑張って戦ってたよ」

夜見「そうか？はあ、まさか負けるとはな…。」

そして夜見は上体を起こし、自分の近くのお金をしまった。そして、こいしにあるお願いをした。

夜見「ちよつと、肩を貸してくれないか？」

こいし「うん、いいよ」

そして夜見はこいしの肩を貸してもらって、立ち上がる。ちなみにこいしとは身長差がある為、こいしは浮いて肩を貸していた。

そして夜見はこいしに聞いた。

夜見「じゃあ、帰るか？」

こいし「うん、早く帰って休もう？」

夜見「そうだな、さすがにこの体で仕事は無理だ」

そして夜見とこいしは、地底に向かって歩いた。

しばらく歩いていると、夜見は木に手をついた。そして、こいしは心配そうに声をかけた。

こいし「お兄ちゃん、やっぱり休む？」

夜見「いや、大丈夫 体が動くようになってきたから、もういい」

こいし「… 本当に大丈夫？」

夜見「ああ、大丈夫だ」

そして夜見は自力で歩き始め、こいしは夜見の横で一緒に歩いた。

少し歩いていると、地底への穴があった。そして夜見とこいしは地霊殿へ向かった。

地霊殿に着いて玄関を開けると、夜見とこいしはそれぞれ、自分の部屋へ向かった。そして夜見はベッドに横になった。

夜見（… 負けた 負けたんだ、俺は）

そんなことを思っていると、急に扉が開いた。そこにはさとりがいて、こちらに近づいてきた。そしてさとりは声をかけた。

さとり「帰ってきてたんですか」

夜見「ああ、ただいま」

するとさとりは少し心配そうに言った。

さとり「… 少し元気が無さそうに見えますけど、何かあったんですか？」

夜見「仮面被ってんのに、なんでわかるんだよ」

そう言つて夜見は上体を起こして、仮面を外す。

さとり「それで、何があったんですか？」

すると夜見は、少し俯いて答えた。

夜見「… いや、俺って非力だなつてさ」

そう言うときとりは、少し驚いた顔をした。

さとり「いや、そんなことありませんよ！黒夜さんは、私達の為にお金を稼いだりしてるじゃないですか！」

すると夜見は、さとりに向けて言った。

夜見「・・・そうか、ありがとう 元氣が出てきたよ」

さとり「そうですか、なら良かったです」

そして夜見は、さとりにお金を渡した。そしてさとりは中身を見ると、何故か震えていた。そして夜見は声をかける。

夜見「さとりさん？どうかしたか？」

すると、さとりは声を震えさせながら夜見に聞いてきた。

さとり「く、黒夜さん？い、一体どんな仕事したら、1日でじゅ、10銭も？」

しかし夜見はまったく今の現状が理解できなかった。

夜見「えーと？多いのか、そんなに？」

さとり「お、多いですよ！10銭なんて！」

そして夜見は、お金の単位の計算を頭の中でした。

夜見（えつと、10000文で1銭だよな つまり10銭は、10000文 外の世界で言うとう10000円辺り？・・・そりや多いな）

夜見はさとりを見ると、さとりは慌てていた。

さとり「えつと、ど、どうしましょう　こんな大金」

そして夜見はある提案をする。

夜見「じゃあ、今日は外食なんてどうだ？」

さとり「え？外食ですか？」

夜見「ああ、地底にも飲食店ぐらいはあるだろ？」

さとり「確かに、旧地獄街道にあることにはありますけど……」

さとりがそう言った直後、夜見は質問をした。

夜見「……え？さとりさん　今、なんて言った？」

さとり「え？いや、飲食店はありますけど」

夜見「違う、その少し前」

さとり「え？……旧地獄街道？」

夜見「旧地獄つて、どういうことだ？」

そしてさとりは、思い出したように話始めた。

さとり「あ、そう言えば黒夜さんに言っただけですわね　ここは昔、地獄の一部だったんですよ　まあ、今は地獄とは機能はしていませんが」

すると夜見は、納得した様子だった。

夜見「そうなのか、地獄だなんて言うから少し驚いた」

さとり「すいません、説明不足でしたね」

夜見「いや、いいんだ」

そしてさとりは、話を夕食に戻した。

さとり「でも、本当に夕食にしますか？」

夜見「ん？いや、ここで食べたいうて言うなら別にいいんだけどさ」

すると、さとりは夜見に聞いた。

さとり「黒夜さんは、どっちがいいですか？」

夜見「え？そうだな・・・俺はここで食べたいが？」

夜見がそう答えると、さとりは笑顔で言った。

さとり「そうですか、別に無理に夕食にしなくてもいいですしね」

夜見「ああ、そうだな」

さとり「じゃあ、私は夕飯の準備をしてきますね」

そう言ってさとりは夜見の部屋を出ていった。そして夜見は仮面を枕元に置いて、地  
霊殿を出た。そしてそのまま、地上へと出た。

そして夜見は、1本の木の前に立つ。すると夜見は急に叫んだ。

夜見「くっすがああああああ!!!」

ダアアアアン

すると夜見は、木をおもいつきり右手で殴った。そして夜見は叫びながら、木を何度も右手で殴り続ける。

夜見「何が！何が力があるだ！俺は！俺は非力だ！あんなやつに負ける非力なんだよ！！！」

そして夜見の右手は、血まみれになっていた。そして夜見は膝を着き、そして呟いた。

夜見「俺は非力だ　こんなんじや、誰も守れやしねえ」

こいし「・・・そんなこと、ないよ」

夜見は後ろを向くと、そこにはこいしがいた。だが、夜見は光の無い目でこいしを見ていた。そして夜見はこいしに言った。

夜見「・・・なんだよ？」

するとこいしは、少しずつ近づきながら言った。

こいし「お兄ちゃんは、非力なんかじゃないよ」  
すると夜見は、こいしに聞く。

夜見「・・・お前に、何がわかるんだよ？」

こいし「そ、それは、わからない、けど・・・」

こいしが答えに戸惑っていると、夜見は急に叫んだ。



夜見「知ったようなこと言ってるんじゃないぞ!!」

するとこいしはビクツツとして、立ち止まってしまふ。そして夜見は立ち上がって、森の奥へと進んでいった。

こいし「ま、待って！お兄ちゃん！」

こいしは手を伸ばすが、足がまったく動かなかつた。そして夜見は森の奥へと消えた。

そして夜見は森を歩きながら、昔のことを思い出し出していた。

夜見（こんなんじゃない、こんな力じゃ 誰も守れねえ、また同じ事の繰り返しだ）

そして夜見は、さとりとこいしの言っていた言葉を思い出す。

さとり（「そんなことありませんよー」）

こいし（「そんなこと、ないよ」）

夜見（何がそんなことねえんだよ 俺は非力だ）

しばらく歩いてみると、前方に少女がいた。

その少女は緑色の髪の毛のサイドテールで、髪を黄色のリボンで結んでいた。服装は白いシャツの上に青いワンピースを着ており、背中には綺麗な羽が2枚生えていた。

そしてその少女は、夜见到話しかけてきた。

？「あ、あのお、すいません」

夜見「… あ？」

夜見は不機嫌そうに返事をしたが、その少女は夜見に聞いてきた。

？「あの、こちら辺で、チルノちゃんを見ませんでしたか？」

どうやら、チルノの知り合いのようだった。そして夜見はその少女に言った。

夜見「知らねえ」

？「そうですか、すみません」

そう言つて少女は頭を下げてきた。夜見は頭を下げた少女に聞いてみた。

夜見「なあ、１ついいか？」

？「え、なんですか？」

夜見「俺は非力だと思うか？」

？「え、えつと、そうですね」

少し少女は戸惑っていたが、夜見にこう言った。

？「詳しい事情はわからないですけど、力があるだけではどうしようもないと思ひます」

夜見「… はあ？」

夜見はその答えに納得がいかなかった。そして、少女は続けた。

？「力だけを身に付けても、人への想いがないと駄目だと思います。その、うまく言

えませんが、想いつていうのも大事だと思います」

するとその言葉を聞いた夜見は、涙を流していた。

？「え!?!ど、どうしたんですか!?!」

夜見「：．．．そうか、そうだよな 忘れちゃいけないのに、わかってたのに」

夜見はそう言つて、来た道をそのまま引き返した。だが、少女は夜見に付いてきた。

？「え、えつと、大丈夫ですか?」

夜見「ああ、大丈夫だ ありがとう」

そう言つて夜見は、涙を拭つた。

？「えつと、あの、私は大妖精だいやうせいつていいいます あなたの名前は?」

少女は自己紹介をした為、夜見も自己紹介をした。

夜見「黑夜夜見だ」

大妖精「えつと、黑夜さんは何故こんなところに?」

大妖精がそう聞くと、夜見はこう答えた。

夜見「少し、昔のことを考えていた」

大妖精「昔のこと、ですか?」

大妖精は不思議そうにしていた。そして夜見はそのまま続けて話した。

夜見「昔に自分がやったことを、思い出していた」

大妖精「そうですか でも、昔ばかり振り返ってはいけませんよ？」

大妖精はそう言うが、夜見はこう返した。

夜見「俺は昔も今も未来も、受け入れるつもりだ 昔やったことも、今やっていることも、未来にやることも、全部受け入れないと、俺は進めないと思う」

そう言うのと、大妖精は納得している様子だった。

大妖精「黒夜さんは、強いんですね 嫌な思い出なんか、普通ならいらぬのに」

夜見「嫌なことでも、受け入れないといけないんだ どんなにづらいことだったとしても、必ずな」

そう言うっていると、地底へ続く穴の前まで来た。そして夜見は大妖精に言った。

夜見「俺はここで帰るが、大妖精さんはどうするんだ？」

大妖精「え、えっと、私はもう少しチルノちゃんを探そうと思います それでは」

そう言うって大妖精はどこかへ飛んで行った。そして夜見は地霊殿へと戻っていった。

大妖精（黒夜さんは、なんで手が血まみれだったんだろう？ 一応聞かなかったけど、やっぱりに気になるな あ！あれって、もしかしてチルノちゃん!!）

夜見は地霊殿の玄関を開けると、そこにはさとりが立っていた。そしてさとりは夜見に話しかけてきた。

さとり「黒夜さん、1つ聞いてもいいですか？」

夜見「……なんだよ？」

さとり「何があつたら、黒夜さん呼びに行つたこいしが、部屋に引きこもるんです？」

夜見「……さあ？」

さとり「黒夜さんが何か言つたのでしょうか？心が読めなくても、それくらいはわかります」

夜見「……」

夜見が黙ると、さとりは怒鳴つた。

さとり「何があつたんですか！ちゃんと説明してください！」

夜見「……わかつたよ、謝つて来るよ」

そして夜見はさとの横を通ろうとしたが、さとりは夜見の前に立つた。

夜見「……なんだよ？謝りにいくんだが？」

さとり「まず、ちゃんと私に説明してください」

夜見「何故、さとりさんに説明する必要があるんだ？」

さとり「なんでもです 早く説明してください」

夜見「今は俺とこいしさんが仲直りすればいいって話だろ？なのになんで、さとりさんに説明しなきゃいけないんだよ？」

さとり「……」

すると、さとりは夜見に近づいて来た。そしてさとりは夜見の前で少し浮くと、手をおもいつきり振りかぶった。

パァンツ

そしてさとりは夜見にビンタをした。そしてさとりは夜見に怒鳴る。

さとり「何故、私に説明できないんですか!? ふざけないでください! 黒夜さんが、そんな人だなんて思いませんでした!」

夜見「……結局、何が言いたいんだよ?」

夜見がそう聞くと、さとりはとんでもないことを口に出した。

さとり「黒夜さんにはがっかりです! 出ていってください!」

さとりは少し落ち着くと、自分がとんでもないことを言ったことに気付いた。そして夜見は俯いてこう言った。

夜見「そうか、この主は、さとりさんだしな わかった、出ていくよ」

夜見はそう言つて地霊殿を出ていこうとする。だが、さとりは夜見の手を掴む。

さとり「ち、違うんです! さっきのは、怒りで頭がいっぱいで!」

夜見「……もう、迷惑をかける訳にもいかないよ」

さとり「ち、違う、違います! 迷惑だなんて、そんなことはありません!」

夜見「離してください」

そう言って夜見はさとりの手を振りほどく。そして夜見は地霊殿の玄関を開けて、こ  
う言った。

夜見「古明地さん、お世話になりました さようなら」  
そう言って夜見は地霊殿を出ていった。

## 第12話 必要なもの

夜見は地上に出ると、日はもう落ちていて、辺りは真っ暗だった。

夜見（もう夜か　まあ、さつき出た時は夕方だったしな）

そして夜見はそんなことを思いながら、適当に歩き始める。

しばらく歩いていると、夜見は湖に出た。そして夜見は湖の近くで座り込んだ。

夜見（はあ、どうするかな）

そんなことを思いながら右手を能力で止血していると、夜見は後ろから声をかけられた。

フランドール「あれ、黑夜？何をしてるの、こんなところで？」

後ろを振り向くと、そこにはフランドールが立っていた。そして夜見はフランドールに言った。

夜見「なんだ、フランドールさんか　子供は家に帰っておきな」

するとフランドールは少しむっとして、夜見に言う。

フランドール「私そんな年じゃないよ　そもそも吸血鬼だから、夜に活動するのが普通じゃない？」



夜見「さあな、吸血鬼の普通なんかわからねえよ」

フランドール「まあ、黑夜は人間だもんね。で、黑夜はなんでこんなところにいるの？」

すると夜見は黙り込んだ。

フランドール「……もしかして、聞いちゃいけないかったかな？」

夜見「……いや、別に。そう言うフランドールさんも、なんでここにいるんだ？」

フランドール「お姉様が、夜なら湖まで行っていいって言ってたから」

夜見「へえ、レミリアさんが」

するとフランドールは、夜見の隣に座った。そしてフランドールは夜見に言った。

フランドール「ねえ、何かお話を聞かせてよ」

夜見「はあ？お話？」

そう言うのと、フランドールは頷いた。

フランドール「そう、私が知らないようなお話」

夜見「お話ねえ……じゃあ、俺が昔聞いた事のある話でいいか？」

フランドール「うん、いいよ」

そして夜見は、お話をフランドールに聞かせる。

夜見「まあ、今より少し前の話だ」

ある男の子は、とても優しい心を持っていた

その男の子は、困っている人がいたらすぐに助けようとする」

フランドール「へえ、それで？」

夜見「その男の子はある日、困っている男性を見かけた

そして男の子は声をかけた どうしたの？ ってな

そして男性は答えた 実は子供に手伝ってほしいことがあつてねつと

そして男の子はその男性を助けることにしたんだ」

フランドール「見ず知らずの男性を？」

夜見「ああ、そうだ

そして男の子は、男性にある施設に連れて行かれた

そして男の子はそこで実験に利用された」

フランドール「実験？」

夜見「ああ その実験ってのは、普通の人が、ここで言う能力を人に、無理矢理付与

させる実験だったんだ

だが、男の子はその実験に耐えたんだ 男性の為を思つてな

そして月日は流れて、男の子が10歳辺りになったときだ

男の子はある日、その施設の人の会話を聞いた

そして男の子は、ある言葉を耳にしたんだ。「神の創造計画」ってのをな」  
フランドール「神の創造計画？なにそれ？」

夜見「神の創造計画ってのは、人に無理矢理、神ほどの力を手に入れさせるっていう計画だったんだ

その男の子は、男性に聞いたんだ。計画ってなんだ、どういうことだって  
そして男性は答えた。それはこの国の為だ。お前は俺達に従ってればいいってな  
だが男性達は、ある誤算に気付かなかった」

フランドール「ある誤算？」

夜見「それは、男の子がすでに力の使い方を知っていたことだ

男の子は7種類の力が使えた。火、水、氷、風、雷、闇、光がな」

フランドール「へえ、そんなに。まるでパチクリみたい」

夜見「そして男の子は、その施設の人を信用しなくなり、力を使ったんだ  
だが男の子は、力の加減を間違えて、施設の周りの町もろとも壊したんだ  
そして男の子は友達も、両親も、大切なものをすべて壊してしまった

それで男の子は身を隠す生活をした。この力を2度と使わない為に

そして月日は流れて、男の子は普通の生活に戻った。ただ、その男の子はどこかへ姿  
を消した

その男の子はきつと、別の世界へ幸せを探しにとまあ、こんな話だ どうだった？」

そして夜見はフランドールに感想を聞くと、フランドールは少し悲しそうな顔をしていた。

フランドール「なんだか、とても悲しいお話だね」

夜見「まあ、こんな話しか知らないしな さてと」

そう言つて夜見は立ち上がった。するとフランドールは、夜見に聞いた。

フランドール「どこに行くの？」

夜見「どこか泊まれる場所を探しに行く じゃあな」

夜見はその場を立ち去ろうとしたが、フランドールはある提案をする。

フランドール「じゃあ、紅魔館に泊まってく？お姉様もきつと歓迎するよ」

夜見（紅魔館か 確かに歓迎はしてくれるだろうが……）

そして夜見は、フランドールに言った。

夜見「じゃあ、そうするかな」

すると、フランドールは嬉しそうな顔をした。

フランドール「本当!?!じゃあ、お姉様に言つてくる!」

そう言つてフランドールは、紅魔館へ飛んでいった。そして夜見は、歩いて紅魔館へ

向かった。

紅魔館の門に着くと、そこにいた美鈴に声をかけられた。

美鈴「あ、黑夜さん お嬢様から話は聞いています どうぞ」

そう言つて美鈴は門を開け、道を譲つた。そして夜見は美鈴に言う。

夜見「ああ、世話になる」

だが美鈴は、こう言つた。

美鈴「大丈夫ですよ お嬢様も歓迎してるようでしたし」

夜見「そうか すまないな」

そう言つて夜見は門をくぐり、紅魔館へ入る。エントランスには咲夜がいた。そして

咲夜は夜見に言つた。

咲夜「お嬢様がお呼びです ご案内しますので、付いてきてください」

夜見「レミリアさんが？」

咲夜「ええ、なんでもお話があるとか」

夜見「そうか、わかつた」

そして夜見は咲夜の後を付いていき、咲夜は扉の前で立ち止まつた。そして咲夜は夜

見に言つた。

咲夜「ここがお嬢様の部屋です では、中へどうぞ」

すると夜見は部屋の前に立ち、扉をノックした。

コンコン

レミリア「良いわよ、入って」

レミリアの許可を得られたので、夜見はレミリアの部屋に入る。

ガチャ

扉の向こうでは、中央の紅い椅子にレミリアは座っていた。そして奥の壁には、ベランダへ出られるガラスの扉があり、横の壁側にはとても大きいベッドがあった。

そしてレミリアは夜見に言った。

レミリア「ようこそ、紅魔館へ」

歓迎された夜見は、レミリアに呼ばれた理由を聞いた。

夜見「よお、レミリアさん 一体なんのようだ？」

すると、レミリアは立ち上がってベランダに出た。ベランダには白いテーブルと2つの椅子があった。そしてレミリアは椅子に座り、夜見に言った。

レミリア「さあ、こっちに来なさい ここで話しましょう」

そして夜見もベランダに出て、椅子に座った。そしてレミリアが質問をした。

レミリア「まず最初に聞くけど、なんで貴方は湖の辺りにいたの？」

その質問に夜見はこう答えた。

夜見「フランドールさんから聞いただろ？泊まれる場所を探してるってするとレミリアはこう言う。」

レミリア「じゃあ、貴方はいままでどこで寝泊まりしてたのかしら？」

そう言われた夜見は黙ってしまふ。そしてレミリアはこう言った。

レミリア「まあ、だいたいどこで寝泊まりしてたかは検討がついてるわ。ただわからないのは、何故、貴方が泊まれる場所を探してるってことよ」

すると夜見は口を開いた。

夜見「あいにく、主に出てけと言われたんだ」

その答えにレミリアは、こう言った。

レミリア「あら、それはお気の毒に」

すると夜見はレミリアを睨みながら言った。

夜見「なんだ？馬鹿にしてんのか？」

レミリア「いえ、そんなことはないわ。ただ、理由が聞きたかっただけよ」

夜見はそう言われ、レミリアを睨むのをやめた。

夜見「…そうか」

レミリア「それで貴方は紅魔館に泊まるって話だけど、貴方はそれで本当にいいのかしら？」

すると夜見は少し間を空けて、返事をした。

夜見「ああ、そうだ」

そして夜見はこう付け足した。

夜見「戻るまではな」

レミリア「あら、結局は戻る気でのいるのね」

夜見「まあ、本人も本気で言った訳じゃないことは、わかっているしな」

レミリア「そう、貴方は随分優しいのね」

夜見「優しい、ねえ」

すると夜見は空を見上げ、レミリアに言った。

夜見「優しいだけじゃ、守れるもんも守れねえがな」

それを聞いたレミリアは、夜見に言った。

レミリア「じゃあ、美鈴と手合わせでもしてきたら？」

夜見「……何を言ってるんだ、美鈴さんは仕事中心だろ？」

レミリア「大丈夫、どうせ誰か来ても2人で撃退すればいいんだから」

そう言われた夜見は立ち上がった。そしてベランダで血の翼を作り、門まで飛び降りた。

門に降り立つと、美鈴はとても驚いていた。



美鈴「わあ!?!な、なんだ、黑夜さんじゃないですか 一体どうしたんですか?」  
すると夜見は美鈴に向かってこう言った。

夜見「美鈴さん、手合わせしてくれないか?レミリアさんの許可はある」

しかし美鈴は首を横に振った。

美鈴「い、いや、無理ですよ だって黑夜さんはお嬢様に勝てる実力を持つてるんですよ?」

すると夜見はこう言った。

夜見「いや、俺は手合わせ中に能力は使わない それなら美鈴さんには勝機はあるだろ?」

美鈴「…確かにそれなら勝機はありますね ……わかりました、相手になりましたよ! 異変の時のリベンジマッチです!」

そして夜見が血を空中に分解した瞬間、美鈴は夜見にハイキックをしてくる。しかし夜見は、それを上半身を少し後ろに反らして避ける。そこにカウンターで夜見は回り蹴りをするが、美鈴にガードされる。

美鈴「やっぱり能力無しでも強いですね」

夜見「能力があれば楽なんだがな」

すると美鈴は拳を何度も繰り出してきた。それを夜見は捌き始めた。しかし夜見は

捌き切れずに、拳を腹に食らってしまふ。

夜見「がふっ!？」

すると夜見はバックステップをして距離を取るが、美鈴は間髪入れずに夜見に向かつてくる。

そして美鈴は再び拳を繰り出してくる。すると夜見はその拳を全て捌き始めた。

美鈴「何ですか？さつきは手加減を？」

夜見「…」

すると夜見は一瞬の間隙を突いて美鈴に拳を繰り出すが、美鈴はその拳を捌いた。

美鈴「なかなかやりますね そろそろ本気でいきますよ！」

すると美鈴はハイキックをする。それを夜見は再び上半身を反らして避けたが、美鈴は流れるように回り蹴りを繰り出してきた。それを夜見はモロに食らう。

夜見「ぐっ!？」

そして夜見は2 mほど後ろに飛ばされ、倒れてしまふ。そこで美鈴は高く跳躍して、踵落としをしてきた。それを夜見は転がって避ける。

そして美鈴が踵落としをした場所は、50 cmほどへこんでいた。

美鈴「うゝん、やっぱりただでは決めさせてくれませんか」

夜見「…」

そして夜見は立ち上がると、美鈴に向かって回り蹴りをした。しかし美鈴はそれを軽く避ける。

美鈴「おっと、そう簡単にはやられませんよ」

夜見「…」

すると夜見は流れるように、回り蹴りを連続で繰り出してきた。それを美鈴は手で全て捌いた。

美鈴「さつきよりは良い動きです。だけど、技のバリエーションが足りませんよ?」  
そう言つて美鈴は夜見の足を掴むと、夜見の腹に蹴りを繰り出した。それを夜見は食らつてしまう。

夜見「がはっ!?!」

そして夜見は後ろに倒れてしまう。すると美鈴は夜見に言った。

美鈴「黑夜さん、あの時は弾幕を使つていたから勝てたんですよ?人間が妖怪の身体能力に勝つことはまず不可能です」

だが、夜見は立ち上がつて、美鈴に向かって蹴りを繰り出す。しかし美鈴はそれを軽々捌いた。

美鈴「黑夜さん?聞いてます?」

すると夜見は美鈴にパンチとキックを混ぜたコンボを繰り出してきた。それを美鈴

は捌くが、そのコンボに驚いていた。

美鈴（なっ?! さっきよりも確実に、捌きの一瞬の隙を狙って攻撃を!?)

すると美鈴はバックステップで距離を取った。そして美鈴は夜見に聞いた。

美鈴「黑夜さん、まだ手加減をしてたのですか？」

すると夜見はこう答えた。

夜見「美鈴さんの動きから動きを学んだんだよ」

美鈴「先ほどの動きを、一度見ただけでですか？」

夜見「ああ、そうだ」

すると美鈴は驚いた。人の動きを1回見ただけで、その動きからそれを自分のものにするのは、まず不可能。しかも美鈴は妖怪である為、人間が動きを真似することはまず無理な話である。しかし夜見はそれをやってのけたのだ。

美鈴「黑夜さん、あなたは本当に人間なのですか？」

夜見「ああ、そうだ。ただの、な」

そう言つて夜見は再び美鈴に向かって走り、拳を繰り出す。それを美鈴は掴もうとするが、夜見はその拳を引き、拳を繰り出す勢いを使ってハイキックに切り替えた。だが、美鈴はそれを右腕で受け止める。

美鈴「くっ?! 危ないですね」

夜見（やっぱり妖怪の身体能力には追い付けないか）

そして夜見はパンチとキックのコンボを再び繰り出す、美鈴に全て捌かれてしま  
う。

美鈴「どうしました？まだまだいけるでしょう！」

夜見「くっ！」

すると夜見は少し後ろに下がり、拳を繰り出した。それに合わせて美鈴も拳を繰り出  
す。だが、

ぱしっ

レミリア「もう良いわ、今日はこの辺りで止めておきなさい」

レミリアが2人の間に入って、拳を両手で受け止めた。

夜見「レミリアさん？」

美鈴「お、お嬢様!？」

するとレミリアは、2人の拳を放し、そして2人に言った。

レミリア「さあ、もう夕食が出来ているわ 2人とも、早く来なさい」

そう言ってレミリアは紅魔館へと入っていった。そして夜見と美鈴も紅魔館へと  
入っていく。

夜見と美鈴は食堂に着くと、席には夜見と美鈴、パチュリーと小悪魔以外の全員が

座っていた。そして夜見と美鈴は席に座って、夕食を皆で食べ始める。

夜見・レミリア・フランドール・咲夜・美鈴「いただきます」

そして皆で食事をしていると、レミリアは夜見に質問をした。

レミリア「そういえば、黒夜は一体いつまでここに泊まるつもりなの？」

夜見「ん？ああ、そうだな　とりあえず、いざこざが済んだら出ていく」

するとフランドールが夜見に聞いてきた。

フランドール「黒夜、いざこざって何があったの？」

夜見「いや、俺の事情だ　フランドールさんは気にしなくていい」

フランドール「ふくん、そう　そういえば、あのお話って黒夜はどこで聞いたの？」

フランドールがそう言うと、みんなが一斉にこちらを向いた。

レミリア「お話って何かしら？」

レミリアは夜見に聞いてきたので、夜見は答えた。

夜見「ああ、俺が前に聞いたことのある昔話だよ　いつ聞いたかは記憶には無いな」

するとレミリアは夜見に言った。

レミリア「その話、聞かせてくれるかしら？」

夜見「ん？ああ、別にいいぞ」

そして夜見は、フランドールに聞かせた話を話した。そして聞き終わったみんなは、

夜見にこう言った。

レミリア「へえ、外の世界にはそんな話があるのね」

咲夜「それにしても、他の世界とは一体どこなんですか？」

美鈴「確かに、それは気になりますね」

だが、夜見はこう答えた。

夜見「他の世界つてのは俺にもわからない　まあ、元の世界よりはまともな世界なん  
だろ」

フランドール「でも、もしかしたらもつとひどい世界かもしれないよ？」

そう言われた夜見は、こう返した。

夜見「まあ、その後はそいつ次第だろ」

レミリア「まあ、それもそうね　運命は自分でも変えられるものだし」

皆はそんな話をしながら食事を済ませた。

夜見・レミリア・フランドール・咲夜・美鈴「ごちそうさま」

レミリア「黒夜、貴方はここに残りなさい」

夜見「ん？わかった」

そして2人以外が部屋から出ると、レミリアは夜見に話しかけた。

レミリア「どうだった？美鈴との手合わせは」

夜見「まあ、そうだな　もう少し力を付けたいな」

レミリア「それにしても貴方、随分と目がいいのね」

レミリアがそう聞くと夜見は不思議そうに返事をした。

夜見「そうか？別に普通だと思うが？」

レミリア「わかっているの？美鈴は妖怪、その動きを全て見切るなんて人間には無理なのよ？」

レミリアにそう言われた夜見は、ある人物を上げた。

夜見「そんなこと言ったら、霊夢さんとか、魔理沙さんはどうなんだよ？」

レミリア「あいつらは、また別でしょ？貴方はもともと外の間人、外の間人はまず無理なのよ」

夜見「そんなこと言われても、出来るもんは出来るんだよ」

そう言うと、レミリアは立ち上がった。そしてレミリアは夜见到こう言った。

レミリア「なら、付いてきなさい　ちよつと試したいから」

夜見「ああ、わかった」

そしてレミリアに付いていくと紅魔館から出て、紅魔館の裏へ回った。

夜見「へえ、ずいぶん広い庭だな」

紅魔館の庭は芝生が生えており、ちゃんと手入れされていた。そしてレミリアはそこ



で夜見に言った。

レミリア「さあ、黑夜 私と弾幕ごっこをしましょう」

夜見「弾幕ごっこ？なんだ？リベンジか？」

レミリア「言ったでしょう、試したいことがあるって」

夜見「ああ、言ったな」

そしてレミリアは、夜見に言った。

レミリア「貴方は弾幕をひたすら避けなさい 能力の使用は無しよ」

するとレミリアは急に弾幕を放ってきた。

夜見「よつと」

だが夜見はそれを軽々と避ける。

するとレミリアは空を飛び、夜見に弾幕を放ってくる。しかし夜見はそれをひたすら

避けていた。

夜見（まあ、この程度なら…）

夜見がそう思っているとレミリアは弾幕の密度を高くした。

夜見「くっ?!危な!?!」

だが夜見はその弾幕を間一髪で避けていた。しかし夜見はしばらく避けていると、少し余裕を持って避けられるようになった。

夜見（よし、慣れてきたぞ）

するとレミリアはあるものを取り出した。

レミリア「神槍 スピア・ザ・グングニル」

レミリアはスペルカードを取り出し、発動させた。そしてレミリアは紅い槍を持って夜見に急接近した。

夜見「なっ!？」

そしてレミリアは槍を振ったが、夜見は間一髪で横に避けた。そして再びレミリアが接近してきた。

夜見「このやろお！」

ガキーン

すると夜見は刀を抜いてレミリアの槍を防いだ。そしてレミリアは夜見に向かって言った。

レミリア「貴方、こんな力じゃどうしようもないわよ？」

するとレミリアは槍をもう一回振った。そしてそれを夜見は刀で防ぐが、刀は呆気なく飛ばされてしまう。

夜見（駄目だ・・・勝てねえ）

夜見がそう思った時、レミリアは槍を夜見に当たる寸前で止めた。そしてレミリアは

夜見に言った。

レミリア「これが貴方の実力 弾幕を避けるのは普通レベル、力はせめてさっきのを受け止められるようにはなりなさい」

そう言つてレミリアは槍を消して、紅魔館へと戻つていった。そして夜見はそこで思つた。

夜見（これが、俺の実力……駄目だな、こんなんじや）

そう思いながら刀を拾うと、後ろから声をかけられた。

フランドール「黑夜？何をしてるの？」

後ろを振り向くと、そこにはフランドールがいた。そして夜見はフランドールに一つ頼み事を言った。

夜見「フランドールさん、すまないが練習相手になつてくれないか？」

フランドール「え？別にいいよ それで、私は何をすればいいの？」

そして夜見はこう言った。

夜見「レーヴァテインで、俺に斬りかかってくれ」

するとフランドールはスペルカードを取り出した。

フランドール「うん、わかった じゃあ、いくよ！」「禁忌 レーヴァテイン」

するとフランドールは炎の剣を取り出し、夜見に斬りかかってきた。それを夜見は刀

で防ぐ。

ガキイン

フランドール「むー、このお！」

そしてフランドールは何度もレーヴァアティンで斬りかかってくるが、夜見はひたすら刀で防いだ。そして夜見はフランドールに言った。

夜見「フランドールさん、もつと強く斬りかかってくてくれ」

フランドール「防ぎきれなくても知らないからね！」

そう言ってフランドールは思いつきりレーヴァアティンを横に振るった。それを夜見は刀の峰に片手を添えて防いだ。

ガキイン

夜見（駄目だ、もつと強い力を防げないと）

そして夜見はフランドールに言った。

夜見「フランドールさん、もつと強くだ」

フランドール「え？で、でも、これ以上強くしたら…。」

夜見「いいんだ、気にするな」

フランドール「… 本当に知らないからね！」

するとフランドールはさらに力強くレーヴァアティンを振るってきた。すると、夜見は

防いでいるものの、手の限界がきてしまう。

キインツ

夜見「くっ!？」

フランドールのレーヴァテインが夜見の刀にぶつかると、夜見の刀は軽々と飛ばされてしまった。

そしてフランドールは、レーヴァテインを夜見に当たる寸前で止めた。

フランドール「おっと、危ない」

夜見「…」

フランドール「ふう、疲れた」

するとフランドールはレーヴァテインのスペルカードを解除した。そして夜見は、飛ばされた刀を見ていた。

フランドール「どうしたの？ 黒夜」

フランドールが夜見に声をかけるが、夜見は黙ったまま刀を拾った。そして夜見は呟いた。

夜見「まだだ、もっと力を付けないと」

レミリア「いえ、その必要はないわ」

するとレミリアが夜見の前に舞い降りた。そして夜見はレミリアに聞いた。

夜見「… ということだ？」

レミリア「そのままの意味よ 貴方の力は十分にあるって言っているのよ」

夜見「しかし、俺は…」

レミリア「じゃあ聞くけど、貴方は人間が妖怪の力にかなうと思っっているの？」

そこで夜見はレミリアの考えに気付いた。

夜見「まさか、俺の戦う実力を調べるために？」

レミリア「そうよ、貴方は戦うには十分な力があるわ ただ足りないのは経験、それ

だけよ」

夜見はレミリアに言われると急に笑い出した。

夜見「く、ははははははは そうか、そうだよな、妖怪にかなうはずねえよ だって俺

は人間なんだから」

レミリア「そう、貴方は人間 妖怪の力にはどうやっても届かない存在 でも、貴方

は妖怪に対応する知恵と力がある それを自覚しなさい」

夜見「ああ、すまないな やつと気づけたよ、俺は人間だ 誰が、なんと言おうとな」

するとレミリアは夜見に聞いてきた。

レミリア「それで？ 今日はどうするの？ やつぱり帰るのかしら？」

するとフランドールは残念そうに言った。

フランドール「えー 黒夜、もう帰っちゃうの？」

夜見「いや、今日は泊まる 明日には帰っても大丈夫だろ」

するとフランドールはとても喜んでる様子だった。

フランドール「わーい、やったあ ねえ、黒夜、弾幕ごっこしようよ」

夜見「ん？ああ、かまわないぞ」

夜見とフランドールは弾幕ごっこを始めようとしたが、レミリアは2人と止めに入  
た。

レミリア「今日は止めときなさい、フランは早くお風呂に入って来なさい」

フランドール「むー、せっかく遊べると思ったのに」

レミリア「今日じゃなくてもいいでしょ、また別の機会にしなさい」

夜見「まあ、そうだな フランドールさん、また遊びに来てやる」

夜見がそう言うのと、フランドールは納得した様子だった。

フランドール「わかった 約束だからね、黒夜」

夜見「ああ、わかったよ」

するとフランドールは紅魔館へと戻っていった。そして夜見はレミリアにお礼を言  
い始めた。

夜見「今日はありがとう、レミリアさん」

するとレミリアは素っ気なく返事をした。

レミリア「お礼なんていいわよ。ただ貴方が、勝ちにこだわりすぎてることを気付かせただけよ」

夜見「そんなこと言うけど、フランドールさんと手合わせしてたとき見てたんだろ？」  
夜見はフランドールと手合わせをしているときに、レミリアがこっさり様子を見ていたことに気付いていた。

するとレミリアはため息をついた。

レミリア「はあ、これだから勘のいい奴とかは嫌いなものよ」

そう言つてレミリアは、紅魔館へ戻つていった。そして夜見も紅魔館へ入つていった。

そして夜見はエントランスにいた咲夜に声をかけられた。

咲夜「黑夜様、少しいいでしょうか？」

夜見「ん？なんだ？」

咲夜「お部屋の方なんですけど、前回と同じ部屋でよろしいでしょうか？」

夜見「ああ、別にかまわない。ありがとう」

咲夜「いえ、それでは」

そして咲夜は夜見の目の前で姿を消し、夜見は前に泊まっていた部屋へ向かった。



夜見は部屋に入ると、ベッドに横になった。

夜見（十分な力はある、か）

夜見はレミリアに言われた言葉を思い出していた。

夜見（あとは経験だけか さて、どうしたものか）  
すると夜見は少し目を瞑った。

夜見「・・・はあ」

そして夜見は目を開けると、そこは見覚えのある場所だった。

夜見（ここは・・・確か、前に見た夢？）

そう、夜見は夢で見た真つ暗な場所にいた。そして夜見は周りを見渡した。

夜見（そうだ、この後！こいしさんは!?!）

そして夜見は前にこいしがいるのを見つけ、夜見は急いで駆け寄った。

夜見「こいしさん!?!大丈夫か!?!」

夜見はこいしに駆け寄ると、ある違和感を感じた。

夜見（なんだ、この違和感？何も、おかしいこと・・・は・・・）

すると夜見は気付いた。こいしの第3の目、サードアイが開いていることに。そして、その目はとても濁っていた。

夜見「なっ?!?!こいしさん！な、なんでその目が!?!」

夜見はこいしに呼びかけるが、こいしは何も返事をしなかった。

夜見「こいしさん!? 一体何が!？」

こいし「…」

何度も夜見はこいしに声をかけるが、こいしは一向に返事をする様子ではなかった。

夜見「こいし…さん？」

こいし「…」

するとそこで夜見は目を覚ました。夜見が目にしたのは紅魔館の1室の天井だった。

夜見（…さっきのは、夢？ ああ、いつの間にか寝てたのか）

そう思っていると、部屋の扉が開いた。扉の向こうには咲夜が立っていた。

咲夜「黑夜様、お風呂の準備が出来たのですが…」

夜見「ん？ ああ、わかった」

咲夜「では、ご案内します」

すると夜見は部屋に刀を置いて、咲夜に付いていった。そして咲夜はある部屋の扉の前で止まった。そして咲夜は夜見に言った。

咲夜「ここが脱衣場です 浴室へは、部屋の奥の扉から行けます」

夜見「わかった 案内、ありがとう」

咲夜「では、私はこれで」

そう言つて咲夜は、どこかへ行つてしまった。そして夜見は部屋に入った。脱衣場は地霊殿よりも広く、とても綺麗だった。そして夜見は服を脱いで、浴室へと向かった。

夜見（おお、広いな）

浴室も地霊殿より広く、浴槽は10人は余裕で入れるほど広かった。そして夜見はまず体と頭を洗い、浴槽に浸かった。

夜見（ふう、やっぱり風呂はいいな。∴ それにしてもあの夢、何か関係あるのか？）

夜見は浴槽に浸かりながら、先ほど見た夢について考えていた。

夜見（予知夢？ いや、あんな状況にするなつてことか？ ∴ なんか、嫌な予感がする）

そして夜見は浴槽から出て、脱衣場で体を拭き、頭を乾かした。そして服は何故か置いてあつた執事服に着替えた。

そして夜見は脱衣場から出ると、そこには白いパジャマを着たレミリアが立っていた。

レミリア「あら？ 結構似合つてるじゃない」

夜見「レミリアさんか、この服を選んだのは」

レミリア「ええ、そうよ。まあ、他に服がなかったつてこともあつただけだね」

そう言つてレミリアはどこかへ行つてしまった。そして夜見は刀を取りに、部屋へ

戻った。

そして夜見は刀を取ると、レミリアの部屋に向かった。

そして夜見はレミリアの部屋の前に着くと、扉をノックした。

コンコン

レミリア「いいわよ、入って」

中からレミリアの声が聞こえたので、夜見は扉を開けた。するとレミリアは、ベランダで夜空を見ていた。

レミリア「あら、黑夜じゃない どうしたのかしら？」

すると夜見はレミリアに向かって言った。

夜見「レミリアさん、すまないが、今日泊まるのは無理そうだ」

レミリア「・・・ どういうことかしら？」

レミリアが理由を聞くと、夜見はこう答えた。

夜見「なんか胸騒ぎがする なんか、急いで戻らないといけない気がするんだ」

レミリア「でも、フランに今日は泊まるって言っちゃったわよ？」

夜見「それについては後で謝る だから、今日は帰ってもいいか？」

するとレミリアはある質問をした。

レミリア「そうね・・・ 今の時間は一体何時かしら？」

咲夜「今は0時26分です」

すると、咲夜が夜見の後ろに急に現れ、咲夜がレミリアの質問に答えた。するとレミリアは夜見に言った。

レミリア「もう日付は変わっているわ だから、もう帰って構わないわ」

夜見「：： 本当にすまない ありがとう、レミリアさん」

レミリア「さっさと帰ってあげなさい 心配なんでしよう？」

夜見「ああ、本当にありがとう」

そう言つて夜見はベランダから飛び降り、血で翼を作つて空を舞つた。

夜見「服は後で返しに戻る！」

そう言つて夜見は地霊殿を指し、地底への穴へと向かつた。

レミリア「：： それにしても咲夜、よく嘘をついたわね」

咲夜「やつぱり、ばれていましたか」

咲夜は手に持つている懐中時計を見ると、時間は23時15分を指していた。

咲夜「それにしても、本当に帰らせて良かったのですか？」

レミリア「まあ、黒夜にとつては大切な家族よ それを引き止める訳にはいかないわ」

そしてレミリアはそつと呟いた。

レミリア「今何が必要か、わかつたようだしね」

夜見（俺には今、必要なものは無い  
けど、地霊殿のみんなには  
きっと、俺が必  
要なのかもしれない）

## 第13話 開く心

夜見は湖まで飛んだ辺りで地面に降りた。地底への穴は森の中にあり、空からは見え  
ないからである。

夜見（急がないとな）

そして夜見は、森の奥へ走って行った。

そしてしばらく走っていると、周りがだんだん暗くなっていった。

夜見（さすがに奥まで行くと、暗くなってくるな）

そして夜見が奥まで進むと、ある異変に気付いた。

夜見（… おかしい、さすがにここまで暗くなるか？）

夜見は立ち止まって周りを見渡すと、辺りは真っ暗でなにも見えなくなっていた。

すると夜見は空気中の血を広げて、周りに何があるかを調べた。

そして夜見は、あることに気付いた。

夜見（… 誰かいるな 妖精… ではないな）

すると夜見は、声をかけられた。

？「ねえ、あなたは人間？」

そして夜見は、警戒しながら返事をした。

夜見「…… ああ、そうだ」

すると、夜見はとんでもないことを言われた。

？「じゃあ、食べてもいい？」

夜見（は？今なんて？）

すると夜見は横に倒れるように、移動した。

？「むー、避けるなー」

そう、夜見は噛み付かれそうになつたのでそれを避けたのだ。夜見は周りが見えないが、血を操れるおかげで、相手の動きを把握できた。

そして夜見は相手をしてる暇は無いと思い、周りの木などにぶつからないように走り始めた。

？「逃げるなー」

しかし、相手も夜見を追いかけてきた。だが、  
ゴンツ

夜見（え？）

？「いったーい」

夜見（……もしかして、見えてない？）



夜見は振り返えると、周りが少し明るくなった。そしてそこには、木の近くで少女が頭を抱えてしゃがんでいた。

その少女は金髪のショートヘアで、頭には赤いリボンを着けていた。服装は黒い服とロングスカートを着ていた。

そして夜見はその少女に話しかけた。

夜見「…誰だ？」

？「うー、いたーい」

夜見「…はあ」

すると夜見はその少女の手をどかして、その少女の頭を見た。

夜見（怪我は無いな… てか、なんで俺に噛み付こうとした相手にこんなことを）

そんなことを思っていると、少女は再び噛み付こうとしてきた。しかし夜見は、その少女の肩を両手で押さえて防いだ。

夜見「…懲りないな」

？「むー、お腹減ったー」

夜見（いや、そう言われても…）

そして夜見は再度名前を聞いてみた。

夜見「…名前は？」

？「私の名前？私はルーミア あなたは？」

夜見「…… 黒夜夜見」

ルーミア「黒夜、食べさせるー」

ルーミアはそう言つて夜見に噛み付こうとするが、夜見は肩を押さえて防いだまま、夜見はルーミアに聞いてみた。

夜見「…… お前は、妖怪か？」

ルーミア「うん、そう 私は人喰い妖怪、だから食べさせるー」

夜見「…… いい加減にしろ」

ルーミア「…… はあ、お腹、減った」

夜見「…… はあ、仕方ない」

すると夜見は刀で自分の手を浅く斬つて、血を出した。そしてその血を能力で飴玉ほどの大きさに丸めた。

夜見（人喰い妖怪だけど、食うか？）

そんなことを思いながら夜見は、ルーミアにその血の玉を差し出した。

夜見「…… 血だけど、食うか？」

ルーミア「わあ、いただきます」

するとルーミアはその血の玉を受け取つて、口の中に入れた。するとルーミアは多少

満足している様子だった。

ルーミア「おいしー」

夜見「そうか、じゃあ」

そう言つて夜見は急いで地底への穴へと向おうとしたが、ルーミアに服を掴んだ。そして夜見はルーミアに聞いた。

夜見「…なんだよ？」

ルーミア「ねえ、もつと無いのかー？」

すると夜見は再び血を操り、今度は5個の血の玉を作つた。そしてそれを、ルーミアに渡した。

夜見「ほら、これで終わりだ」

ルーミア「わあ、ありがとー」

するとルーミアは服を離したので、その隙に夜見は地底への穴へ向かつた。

しばらく走っていると、夜見は地底への穴を見つけた。そして夜見はその穴へ急いで入つた。

しばらく進んでいると、そこにヤマメがいた。

ヤマメ「やあ、黒夜 久しぶり」

夜見「ヤマメさん、久しぶりだな すまないが、急いでるんだ 話をするなら、また

今度にしてくれ」

ヤマメ「いやいや、そうじゃないんだよ」

夜見「え？じゃあ、どうしたんだ？」

するとヤマメはこちらを睨みながら、こう言った。

ヤマメ「あんたは地底を出ていったのに、なんでこのこと地底に来れるの？」

夜見「…は？」

夜見は確かにさとりに出ていけと言われて出ていったものの、夜見は地霊殿から出ただけで、決して地底から出ていったつもりはなかった。そもそも夜見は、最初から少ししてから帰ろうとしていた。

夜見「いや、違う 多分それは誤解だ」

夜見はヤマメが勘違いしていると思つて、誤解を解こうとしたが、ヤマメはこう言った。

ヤマメ「じゃあ、こんな噂は知ってる？」

するとヤマメは、その噂というものを言った。

ヤマメ「地底に来た人間は、私達を蔑む為さげすにここに来たつて話」

それを聞いて、夜見は驚いた。夜見は人だろうと妖怪だろうと別に差別はせず、一人の存在として認識をしていた。

しかし、何故か夜見が地底の妖怪達を蔑んでいるという噂が流れていた。

そして夜見はその噂を否定した。

夜見「その噂は嘘だ 別にお前達を蔑むなんてことはしてない」

ヤマメ「おかしいと思ったんだよ、なんで人間が普通に地底に住んでるんだらうってまさかあんたが、ずっと嘘をついてただなんて」

しかしヤマメは、夜見の言葉を全く信用していなかった。

夜見（なんでそんな噂が広まったんだ？まさか、さとりさんが？いや、それは無いはず…）

夜見はそんなことを考えていたが、ヤマメは夜見に考える暇など、与えなかった。

ヤマメはいきなり夜見に向かって、弾幕を放ったのだ。

夜見「くっ!!」

しかし夜見はそれを間一髪で、バックステップをして避けた。そして夜見はヤマメに訴えかけた。

夜見「待て！ヤマメさん その噂は誤解だ！」

ヤマメ「うるさい！人間！ あんたなんて誰が信じるか！」

そしてヤマメは再び弾幕を放ってきた。それを夜見は真っ向から受けた。

夜見「ぐっ!!」

するとヤマメは夜見を睨みながら、質問をした。

ヤマメ「……あんた、なんで避けなかったんだ？」

夜見「……うるせえ、もう終わりか？」

夜見がそう言うのと、夜見は再び弾幕を真つ向から全て受けた。その結果、夜見はボロボロになっていた。

そしてヤマメは聞いた。

ヤマメ「……どういうつもり？」

すると夜見はその質問にこう答えた。

夜見「うるせえ、気が済むまで俺を攻撃しろよ。それでヤマメさんが満足するならそれでもいい」

するとヤマメは夜見に、弾幕を放つのを止めた。そしてヤマメは言った。

ヤマメ「……どうやら、誤解だったみたいだね」

夜見「信じて、くれるのか？」

するとヤマメは笑顔で言った。

ヤマメ「だって、嘘をついた人間が、抵抗もしないでやられようとするなんておかしいからね。あと、疑ってごめんね」

夜見「いや、謝るのはこっちの方だ。誤解を招くような行動をして、本当にすまなかつた」

ヤマメ「でも、なんで地底から出たんだい？」

夜見「ああ、それは……」

そして夜見は、何故地底から出たのかをヤマメに話した。するとヤマメは夜見にこう言ってきた。

ヤマメ「そうか、それは災難だったね」

夜見「あの時は感情が不安定だった。こいしさんに当たったことは本当に悪かったと思ってる」

ヤマメ「でも、あんただったらすぐ仲直り出来るでしょ？」

夜見「ああ、多分な。ところで1つ聞きたいんだが、噂はどこまで広まつてる？」

するとヤマメは少し不安そうな顔をした。

ヤマメ「……恐らく、地底全体に広がってるよ」

夜見「なら不味いな。誤解を全体に解くなんて無理だぞ」

ヤマメ「そうだね、あんたを見つけたら、地底の全員が襲ってくるだろうね」

すると夜見は、ある策が思い浮かんだ。

夜見「……なあ、ヤマメさん。1つ頼みたいことがある」

ヤマメ「ん？どうしたんだい？」

すると夜見は、ヤマメにある考えを教えた。するとヤマメは、その考えに賛成した。

ヤマメ「わかった　ちよつと待つてて」

するとヤマメは、地底の奥へと進んでいった。しばらく待つていると、ヤマメはあるものを持つてきた。それは白い大きなフード付きマントだった。

ヤマメ「こんなもんだけど、どう？」

そして夜見はそれを受け取ると、早速被つてみた。

夜見「大丈夫だ　しかし、良く出来てるな」

ヤマメ「わかつてるだろうけど、それ、蜘蛛の糸で出来てるんだよ？　気持ち悪いとか無いの？」

実は夜見の被つているマントは、蜘蛛の糸で出来ているマントだった。夜見は蜘蛛の糸でマントを作るように、ヤマメに頼んだのだ。

夜見「まったく無い、ありがとう　じゃあ、行つてくる」

ヤマメ「気を付けてね」

そう言つて夜見はフードを深く被り、地底の奥へと進んでいった。

しばらく進んでいくと、旧地獄街道が見えてきた。

夜見（ここを進めれば、問題ない）

そして夜見は旧地獄街道を進んだ。周りからは不審な目で見られていたが、夜見だと勘づかれていないようだった。すると後ろから声をかけられた。



勇儀「おお、黒夜じゃないか」

それは勇儀だった。すると周りの目線が一気にこちらに集まり、ざわめき始めた。そして勇儀はお構い無しに話し始めた。

勇儀「どうしたんだ？黒夜、こんなところで？」

夜見「・・・人違いじゃないか？」

勇儀「何を言ってるんだ？黒夜を見間違うはずないだろ」

すると周りの鬼の1人が夜見に叫んだ。

鬼「お、お前か！蔑みに来た人間は!？」

すると勇儀はその声に反応した。

勇儀「は？黒夜、どういうことだ？」

そして夜見は、勇儀に噂が流れていることを話した。

夜見「ある噂が流れてるんだ。俺が地底に住んでる奴らを蔑んでるって」

すると勇儀は、急に不機嫌な様子になった。

勇儀「・・・へえ、そうかい」

すると勇儀は先ほど叫んだ鬼に近づき、その鬼の頭を鷲掴みした。そしてその鬼は、とても震えていた。

鬼「ひい!?あ、姉御!？」

すると勇儀は満面の笑みで、鬼に聞いた。

勇儀「なあ、どういうことだ？ 黒夜が私達を蔑んでるって？」

鬼「お、俺は知らねえよ！ そういう話を聞いたんだ」

勇儀「へえ、誰に？」

鬼「居酒屋の奴らが、そうしゃべってたのを聞いただけだ！ 本当だ！」

勇儀「そうかい、わかった」

すると勇儀は鬼の頭を離れた。そして勇儀は夜見にこう言った。

勇儀「じゃあ、私はちよつと居酒屋に行つてくるよ」

すると夜見は、勇儀を呼び止めた。

夜見「おい、勇儀さん 俺を疑わないのか？」

すると勇儀は笑いながら、こう返した。

勇儀「何を言ってるんだ？ 黒夜がそんなこと言う奴じゃないってことはわかってるよ

それじゃ」

そう言つて勇儀は、地霊殿とは反対の方向へ行つてしまった。

夜見（すまないな、勇儀さん）

そして夜見は走つて地霊殿へと向かつた。

そして夜見は地霊殿に着くと、飛び込むように地霊殿に入り、フードを下げた。地霊

殿内は明かりが付いておらず、真つ暗だった。

夜見（：：みんな、寝てる時間か　ひとまず、さとりさんの部屋まで行くか）

すると夜見は、さとりの部屋の前まで行った。そして夜見はさとりの部屋に入ろうとする。

夜見（：：なんだ？この胸騒ぎ：：何か、何かが違うような：：）

すると夜見は何故か、こいしの部屋の前まで来た。そして夜見はこいしの部屋に入り、小声でこいしを呼んだ。

夜見「こいしさん、いるか？」

しかし、こいしの姿はどこにもなかった。こいしのベッドを見るが、寝ている訳でもなかった。

夜見（：：一体どこに？）

こいし「お兄ちゃん？」

夜見は後ろを振り向くと、そこにはこいしがいた。だが、夜見は違和感を感じた。

夜見（：：この感じ、どこかで：：）

すると夜見は、夢での違和感と同じだということに気付いた。そして、こいしのサードアイを見てみるとなんとサードアイは開いており、夢で見たようにとても濁った瞳だった。

夜見「な!?こ、こいしさん!」

こいし「えへへ、お兄ちゃん」

そしてこいしは夜見に、ゆっくり歩み寄った。しかし夜見は、それと同時に後ろに下がってしまう。

夜見（な、なんで開いて!?まさか、俺が原因で!）

するとこいしは、夜見を押し倒した。そして夜見は、こいしのベッドに倒れてしまう。そしてこいしは夜見の胸の上に乗る、こう言った。

こいし「お兄ちゃん、ごめんね でも、もう大丈夫だよ」

そしてサードアイが、夜見の目の前まできた。だが、特に何も起こらなかった。

夜見（…なんだ、一体?…ん?これは、水?）

すると夜見は顔に、水が落ちてきていたことに気付いた。そしてこいしを見ると、こいしが泣いていた。

こいし「なんで?なんでお兄ちゃんの心が読めないの!」

夜見「こ、こいしさん?」

夜見は困惑していたが、こいしは一人で勝手にしゃべり続けた。

こいし「私が心を読めないせいで、お兄ちゃんが出ていったのに！なんで！なんで！心が読めないの！ お兄ちゃんの心を、私が読めなかったばかりに！お兄ちゃんの為に、心を開いたのに！どうして！ なんで！なんでなの！ お兄ちゃんがやり直せばいいって、言ってくれたから！私は心を開けたのに！なんでお兄ちゃんの心が読めないの！ 待ってて、お兄ちゃん！今、心を読んであげるから！」

しかし、こいしが夜見の心を読めている様子は無かった。するとこいしは震え始めた。

こいし「お、お兄ちゃん お願い、出ていかないで 嫌だ、嫌だ、もう、あんな悲しい思いはしたくないの もう、嫌われて、1人ボツチになるのは、嫌だ、嫌だよ」

すると夜見は、こいしのことを急に抱き締めた。

こいし「お、お兄ちゃん？」

するとこいしは、あることに気付いた。

こいし「… お兄ちゃん？なんでお兄ちゃんが、泣いてるの？」

そう、何故か夜見が涙を流していて、その涙がこいしの頬に触れたのだ。しかし夜見は何故自分が泣いているか、さっぱりわからなかった。

夜見（なんで？なんで俺は、泣いてるんだ？）

すると夜見は、自分が泣いている理由に気付いた。

夜見（：・ ああ、そうか 一緒だ、一緒だったんだ こいしさんの思いは、嫌ってほどわかるのに）

すると夜見は、こいしに謝り始めた。

夜見「ごめん、こいしさん、あの時、こいしさんに当たって 寂しい思いをさせて、本当にごめん こいしさんの思いは、嫌ってほどわかるのに、俺は、本当に、本当に」  
するとこいしは、夜見の言葉を否定した。

こいし「違う、違うよ、お兄ちゃん 私が、心を読めないせいで、お兄ちゃんが」

夜見「いや、こいしさんは何も悪くないよ 全部俺のせいだ こいしさんは、心が読めなくたっていいんだ だって、それがこいしさんなんだから」

そして夜見は、こいしのサードアイにそつと触れた。するとこいしは、夜見に聞いてきた。

こいし「え？お兄ちゃん、今、悲しいの？」

何故かこいしは、夜見を気持ちを読み始めた。そして夜見はこう返した。

夜見「悲しいよ、だって、こいしさんを悲しませたんだから」

するとこいしは、そつと夜見を抱き締めた。

こいし「ううん、もう、悲しくない お兄ちゃんが、帰って来てくれたから 私のそばにいてくれるから 私は、もう悲しくない」

夜見「… そうか」

こいし「ねえ、お兄ちゃん」

夜見「ん？ どうした？」

こいし「え、えつと、そ、その、私、お兄ちゃんのこと…」

こいしが何かを言いかけた時、扉が開いた。

ガチャ

するとそこには、さとりがいた。

さとり「こいし！ さつき、一瞬誰かの心の声が… え？ く、黑夜… さん？」

夜見「… さとりさん」

するとさとりは、膝から崩れ落ちる様に座り込んだ。

さとり「黑夜さん、帰って来てくれたんですね」

そしてさとりは目に涙を浮かべた。

さとり「良かった、本当に、良かった」

そして夜見は起き上がり、こいしをベッドに座らせて、さとりの元へ近づいた。

夜見「さとりさん、ごめん 急に出ていたりして」

夜見がそう言うときさとりは、夜見に抱き付いた。

さとり「ごめんなさい！ 出ていってと言ってしまったて！」

そして夜見は、さとりの頭を撫でながら言った。

夜見「大丈夫、さとりさん さとりさんが本当に出て行って欲しいって思ってたことが、わかつてたよ」

さとり「じゃあ、なんで、なんで出ていったんですか？」

さとりの質問に、夜見はこう答えた。

夜見「……ごめん、その理由は言えない」

さとり「な、なんでですか!? や、やっぱり、私が出ていってと「でも、これだけは言える」

すると夜見は、さとりの言葉を遮って言った。

夜見「さとりさん、ごめん そして、ただいま」

さとり「…… はい、お帰りなさい 黒夜さん」

するとさとりは、笑顔を夜見に向けた。そしてこいしが夜見の服を引っ張った。するとさとりは夜見から離れ、夜見が振り向くと、こいしも言った。

こいし「お帰り、お兄ちゃん」

夜見「ああ、ただいま」

すると、こいしのサードアイが閉じ始めた。そしてサードアイが完全に閉じると、こいしは夜見に抱き付いてきた。そして夜見もこいしを、軽く抱き締めた。



こいし「お兄ちゃん、大好き♪」

夜見「そうか、ありがとう」

すると、さとりの後ろから、燐と空も現れた。

燐「さとり様？こんな夜更けに何を騒いで… え？黒夜さん？」

空「ん？黒夜さん？帰り遅かったね」

すると燐は夜見に近づいて、怒鳴り始めた。

燐「また！またか！黒夜！」

さとり「やめなさい！お燐！」

するとさとりが燐にやめる様に言った。そして燐はさとりに言った。

燐「え？で、でも、黒夜が出て行って…」

さとり「その件は私のせいですが、黒夜さんは何も悪くありません！」

すると夜見はさとりに言った。

夜見「いや待ってくれ、さとりさん 出ていったのは俺のせいだ」

するとさとりは、夜見の言っている意味が理解できていない様子だった。

さとり「え、黒夜さん？何を言ってる？」

夜見「さあ、燐さん 殴りたいなら気が済むまで殴れ、それが俺の償い方だ」

さとり「な、黒夜さん!?何を言ってるんですか!?!」

こいし「お兄ちゃん？急にどうしたの？」

夜見はこいしを下ろすと、燐に向かって言った。

夜見「さあ、俺を殴れ 罰を受けるのは当然の報いだ」

さとり「黑夜さん!?なんで黑夜さんが罰なんか受けなきゃならないんですか!?!」

こいし「そうだよ、お兄ちゃん お兄ちゃんは、何も悪くないんだよ?」

しかし、夜見は言った。

夜見「言っただろ？俺が悪いんだ、だから俺が罰を受ける 何がおかしいんだ?」

燐「…本当に、いいの?」

さとり「お燐!?何を言ってる!?!」

すると燐は、夜見の顔を思いつき殴った。そして夜見は後ろに倒れた。

するとさとりは、燐に怒鳴った。

さとり「お燐!何をしてるの!」

燐「さとり様、気付いてあげてください」

さとり「はあ!?!何を言ってる」「黑夜さんの覚悟なんですよ、これが」…え?」

すると夜見は、殴られた頬を擦りながら起き上がった。

夜見「いつってえ、でも、さとりさんや、こいしさんの痛みはこんなもんじゃない わ

かってんののに、これ以上に痛みは受けられねえんだよな」

さと「黑夜さん、何を言ってるんですか！」

夜見「・・・ さとりさん」

するとさとりは、夜見に近づいて怒鳴った。

さとり「ふざけないでください！」

そしてさとりは、夜見に言った。

さとり「悪いと思うんなら、私達と一緒にいてください！なんでそんなこともわからないんですか!？」

しかし夜見は俯きながら言った。

夜見「・・・ でも、俺は罪の償い方をこれしか知らねえんだよ」

夜見は拳を握った。するとさとりは言った。

さとり「だったら、私達が教えてあげます！今の罪の償い方を！黑夜さんは今、私達と一緒にいてくれることが、罪の償い方です！」

すると夜見は呟いた。

夜見「・・・ いいのか？俺がいて こんな俺が、ここにいていいのか？」

するとさとりは、笑顔で言った。

さとり「当たり前じゃないですか、黑夜さんは家族なんですから」

すると夜見はこの幻想郷に来て、初めて笑顔になり、そしてさとりに言った。

夜見「ありがとう、こんな俺を、家族って呼んでくれて」

さとり「ふふ、これからも、よろしくお願ひしますね」

こいし「お兄ちゃん、これからもよろしく♪」

燐「黒夜さん、これからもよろしくね」

空「黒夜さん、これからもよろしく」

夜見「ああ、みんな、いろいろ迷惑かけると思うが、よろしく」

そして夜見は、再び地霊殿に戻ることができ、これから家族として過ごすことになった。

さとり「さあ、もう深夜ですし、そろそろ寝ましょう」

さとりがそう言うと、さとり、燐、空はみんなにおやすみの言葉を交わした。

さとり「おやすみ、黒夜さん、こいし、お燐、お空」

燐「おやすみなさい、黒夜さん、さとり様、こいし様、お空」

空「みんなおやすみ、じゃあねえ」

そう言つて夜見とこいし以外は自分の部屋に戻つて行つた。そして夜見もこいしにおやすみと言つた。

夜見「こいしさん、おやすみ　じゃあ、また明日」

そして夜見は部屋を出ようとしたが、こいしは夜見の服を掴んだ。

夜見「ん？どうした、こいしさん？」

夜見は振り向いてこいしに聞くと、こいしは言った。

こいし「……ねえ、お兄ちゃん もう一度、心、覗いてもいい？」

夜見「ああ、いいぞ」

すると、こいしのサードアイが開き始めた。やはり、こいしのサードアイは濁った瞳をしていた。

しかし、こいしは心が読めていない様子だった。

こいし「あれ？なんで？」

夜見「ん？どうした？」

そして夜見がこいしのサードアイに触れた瞬間、こいしは笑顔になった。

こいし「あ、読めた♪お兄ちゃん、幸せなんだ」

夜見「読めたか？良かったな」

そして夜見はこいしの頭を撫でると、こいしは喜んでいる様子だった。

こいし「えへへ、ねえ、お兄ちゃん」

夜見「どうした？こいしさん」

こいし「今日は、私が寝るまで一緒にいて」

こいしがそう言うと、夜見は笑顔で答えた。

夜見「ああ、いいぞ」

するとこいしは、自分のベッドに入った。そして夜見は、こいしのベッドの近くで座った。

そしてこいしは、夜见到こんなことを言った。

こいし「ねえ、お兄ちゃん 何かお話してよ」

夜見「話？話ねえ じゃあ、俺が昔聞いた話でいいか？」

夜見は、フランドールに話したお話を聞かせようとした。そしてこいしは、笑顔で頷いた。

こいし「うん、いいよ」

夜見「そうか、じゃあ話すぞ」

そして夜見は、こいしに自分が昔に聞いたという話をした。

こいしはそのお話を聞いていると、次第に眠そうになっていた。話の途中だったが、夜見はこいしに聞いた。

夜見「こいしさん、眠いか？話は後で聞くか？」

するとこいしは、首を横に振った。

こいし「ん？ううん、お兄ちゃんのお話、聞く」

夜見「そうか？じゃあ、続けるぞ？」

夜見は話を続けたが、こいしは眠気に負けてしまい、そのまま寝てしまった。すると夜見は立ち上がって、こいしに呟いた。

夜見「おやすみ、こいしさん」

そして夜見は部屋を出ようとしたが、こいしの机の上のあるものに目に留まった。それは、夜見の仮面だった。

そして夜見はその仮面を手にとった。

夜見「なんで？俺の仮面が？ん？これは？」

仮面を取ると、一冊の本があった。夜見はその本を手にとって中身を見ると、どうやら日記のようだった。

それは、ある日付から始まっていた。

9月15日

今日はお兄ちゃんが地霊殿にきた。

お兄ちゃん不思議な人で、なんでかいつも無表情だった。なんで無表情なんだろう？いつか聞いてみようかな？

そういうえば、今日お兄ちゃんが怪我をしたんだ。早く治るといいな。

9月16日

今日はお兄ちゃんが朝から仕事に行った。お土産はうどん、皆で夕飯として食べ

た。とても美味しかったから、また食べたいな。

お兄ちゃん、やつぱり今日も無表情だったな。なんでなんだろう？明日帰って来たら、聞いてみようつと。

9月17日

今日はお兄ちゃんが帰って来なかった。どこに行つたんだろう。早く帰って来ないかな。

9月24日

今日はお兄ちゃんが帰ってきた。お兄ちゃんは異変を止めてたらしい。でも、帰って来たから良かった。

そういえば、今日はお兄ちゃんといると、なんでか楽しい気がした。これが嬉しいって気持ちなのかな？よくわかんないや。

夜見（…こいしさん、日記なんて書いてたのか てか、人の日記見るのはさすがに駄目か 明日、謝ろう）

そして夜見は日記を閉じて、自分の部屋に戻って行った。

すると夜見は、仮面を机の上に仮面と刀を置き、マントを椅子に被せた。そして夜見はベッドに入った。

夜見（無表情、か でも、今日は久しぶりに笑ったな いつぶりだろうな、確か… 1



0? いや、12年ぶりだな)

そして夜見はそんなことを考えながら、眠りについた。しばらくして夜見は、体の異変を感じて目を覚ました。すると、目の前にはこいしがいた。しかし、

夜見「こいしさん? ちょっと、顔が近いけど?」

こいしは何故か、夜見の上から被さっていた。そして夜見とこいしの顔の距離は、2cmほどしかなかった。すると、こいしの顔が急に赤くなった。そしてこいしは顔を遠ざけ、慌て始めた。

こいし「ち、違うの、これは、あの、そう! 寝ぼけて、寝ぼけてて、お兄ちゃんの部屋に入っちゃったの!」

夜見(こいしさん、顔が赤いけど…まさか?)

すると夜見は、こいしの額に手を当てた。するとこいしの顔がさらに赤くなった。

夜見(少し熱いかな、やっぱり風邪かもしれない)

すると夜見は起き上がって、こいしに言った。

夜見「こいしさん、あのさ」

その声をかけると、こいしは顔を赤くしたまま、慌てていた。

こいし「え!? な、何!?!」

夜見「もしかしたら、風邪かも　ちやんと寝ないと」

こいし「…ふえ？」

するとこいしは、少し呆然としていた。そして夜見はこいしに言った。

夜見「ほら、ちやんと寝よう？部屋まで一緒に行こうか」

そして夜見は起き上がると、こいしの手を掴んで、こいしの部屋へと連れて行った。

部屋に入ると、こいしは素早くベッドに入った。

そして夜見はこいしに言った。

夜見「こいしさん、ちやんと寝てね？咳とか出てないし、すぐに良くなるから」

こいし「…うん、わかった」

そして夜見はこいしの部屋を出ていった。

こいし（ばれて、ない、よね？もしも、このことに気付いたら、ばれたら、お兄ちゃん  
んは一体、どうなんだろう？）

## 第2章 幻想郷での自分

### 第14話 たまには休みでも

夜見「ふわあ、そろそろ朝か？」

夜見は目を覚まし、執事服から黒い服に着替え始めた。

夜見（そういえば制服、返して貰わないと いや、そもそも執事服を洗って返さない  
と）

そんなことを考えて着替え終わると、扉が開いた。

そこには、サードアイが開いたこいしが立っていた。

こいし「お兄ちゃん、パジャマ… じゃなかった、服を回収しに来たよ♪」

夜見「ああ、いつもありがとう」

そう言つて執事服を渡すと、こいしは嬉しそうな顔をしていた。

こいし「えへへ、どういたしまして」

そして夜見は思い出す様に言った。

夜見「ああ、そういえば、こいしさん」

こいし「ん？ どうしたの？」

そして夜見は、夜中の時のことについて聞いた。

夜見「風邪は大丈夫か？ 咳とかは出てないか？」

すると、こいしは顔を赤くした。

そしてこいしは少し俯いた。

こいし「だ、大丈夫、だよ」

夜見「本当に？ 少し顔、赤いけど？」

夜見の手が、こいしの額に触れると、こいしは更に顔を赤くした。

夜見「やっぱり少し熱いな、寝てた方が「だ、大丈夫！ 大丈夫だから！」

そう言つてこいしは、どこかへ走つて行つた。

夜見（風邪…… じゃないのか？）

そんなことを思っていると、さとりが部屋から出てきた。

さとり「黑夜さん、おはようございます」

夜見「ああ、さとりさん、おはよう」

そしてさとりは、夜見に質問をした。

さとり「…… さつき、こいしが走つて行きましたよね？」

夜見「ああ、なんか急にな」

そこで夜見は、あることに気付く。

夜見「そういえば、こいしさんの心の声って、さとりに聞こえるのか？」  
するとさとりは、こう返した。

さとり「ええ、こいしが心を開いてる時は聞こえますか？それがどうかしたのですか？」

夜見「じゃあ、こいしさんはさつき、どう感じていたかわかるか？」

するとさとりは、少し悩んだ表情で言った。

さとり「…それは、ちよつと」

夜見「ああ、言いにくいならいいんだ、別に」

さとり「ええ、すいません」

夜見「いいよ、別に今すぐに聞きたいわけでもないしさ。さて、朝食の準備をしよう」

さとり「ええ、そうですね」

そして夜見とさとりは、キッチンで朝食の準備をし、隣の部屋へ運んだ。

しばらく待つっていると、皆が集まってきた。そして皆で食事を始める。

夜見・さとり・こいし・隣・空「いただきます」

そして食事を始めると、さとりが夜見に話しかけた。

さとり「そういえば黒夜さん、1つお願いがあるんですが」

夜見「ん？なんだ、おつかいか？」

するとさとりはこう言った。

さとり「いえ、その逆です 今日はお仕事を休んでください」

夜見「・・・え？」

夜見は、さとりの言ったことを理解できなかつた。

そして夜見は、さとりに聞いた。

夜見「えつと・・・なんでだ？さとりさん」

すると、さとりは言った。

さとり「黑夜さん、仕事をしてくれるのは嬉しいですけど、たまには休みをとって散歩でもしてください そうじゃないと、体がもたないですよ？」

それを聞いた夜見は、納得した。

夜見「まあ、確かに体は大事にしないと な じゃあ、今日は休むか」

するとこいしが、さとりに聞いた。

こいし「ねえ、お姉ちゃん 私、お兄ちゃんと散歩に行きたい」

さとり「だそうですが、黑夜さん 大丈夫ですか？」

するとさとりは、夜見に話を振った。そして夜見はこいしに言った。

夜見「まあ、別にいいよ 1人で散歩するのもあれだしな」

こいし「えへへ、やった」

そして夜見はこいしと散歩することが決まり、食事を終えた。

夜見・さとり・こいし・燐・空「ごちそうさま」

そしてこいしと燐と空は、部屋を出ていった。さとりは食器を片付け始めたが、夜見も手伝った。

さとり「え？いいですよ、黑夜さんは」

夜見「いいんだ、今日は休みだから」

さとり「そうですか、ありがとうございます」

そして夜見とさとりはキッチンに食器を持っていき、夜見が食器を洗い始めた。するとさとりは、夜見に聞いてきた。

さとり「ところで、黑夜さん」

夜見「ん？どうした？」

するとさとりは、夜中のことについて聞いてきた。

さとり「夜中帰ってきた時に、一瞬だけですが、黑夜さんの心の声が聞こえたんです」  
「よ」

夜見「ああ、言ってたな それで？」

さとり「その、今は心が読めないんですよ」

夜見「そうか、つまり俺の心が一瞬開いたってことか？」

さとり「はい、そう言うことですね」  
すると夜見は、考え始めた。

夜見（つまり俺は、心を閉ざしてることか？　でも、なんでだ？　別に心を読まれても困ることはないんだけどな）

そう思っている、キツチンの扉が開いた。そこには、こいしがいた。

そしてこいしは、夜見に近付いてきた。

夜見「こいしさん？　どうかしたか？」

ちやうど夜見は食器を洗い終わったので、夜見は手を洗って、手を手元にあつた布で拭くと、こいしは抱きついてきた。

こいし「.:」

夜見「なんだよ、どうしたんだ？」

そして夜見は、こいしの頭を撫でた。すると、さとりは驚いたように言った。

さとり「え？　黒夜さんの心が読める？」

夜見「ん？　本当か？」

さとり「え、ええ」

どうやら、さとりは今なら夜見の心を読めるようだった。そしてこいしは、上目遣いで夜見に言った。



こいし「……お兄ちゃん、早くお散歩に行こう？」

夜見「そっか、じゃあ行こうか さとりさん、行ってくるよ」

そう言つて夜見とこいしは、キッチンを出ようとした。しかし、さとり呼び止められた。

さとり「あ、黑夜さん 一応お金を渡しておきますね」

さとりはそう言つて、夜見に小さな袋を渡してきた。それを夜見は受け取ると、さとりにこう言つた。

夜見「ありがとう 夕食には帰るよ」

そして夜見とこいしはキッチンから出た。夜見は自分の部屋で仮面と白いマントを身に付けていると、こいしは後ろから服を引っ張つてくる。

こいし「お兄ちゃん、早く」

夜見「わかつてるよ ほら、行こうか」

そして夜見とこいしは手を繋いで、地霊殿を出た。

2人は旧地獄街道を歩いていると、周りはひそひそと話をしていた。

夜見（まあ、噂はそうそう消えないか）

そして夜見はこいしの方を見ると、こいしはこちらを見て、首を傾げた。

こいし「どうしたの？お兄ちゃん」

夜見「いや、なんでもないよ」

こいし「そう？でも、なんかお兄ちゃんを見てひそひそしてるね」

どうやらこいしも、周りがひそひそ話していることに気付いていたようだ。

そして夜見は、うつすらとこんな声が聞こえた。

？「おい、見ろよ 人間と妖怪がよ」

？「ああ、本当だ まったく気味が悪い」

どうやら周りは、夜見とこいしが2人で歩いていることが不思議なのだろう。そして

夜見とこいしは、そのまま地上へと出た。

地上は快晴で、森の中でも日が眩しかった。

夜見「うっ、日が眩しい」

こいし「ほら、早く早く♪」

夜見「うわっ、待ってくれ」

そして夜見はこいしに手を引かれながら、森の中を進んでいった。しばらく進んでいくと、少し開けた場所に出た。

そこは、ほぼ円形に木が生えておらず、上からは日が射していた。

夜見「お、おい、待ってってくれって」

こいし「ふふ、お兄ちゃんが遅いからいけないんだよ♪」

夜見「はあ、悪かったよ」

こいし「ふふ、わかればよろしい」

そう言うのと、こいしはやつと止まった。夜見は別に疲れているわけではないが、一旦座り込んで仮面を外し、フードを後ろに下げて休憩をした。

夜見「ふう、ここは日が当たって気持ちいいな」

こいし「そうだね」

こいしはそう言つて、夜見の隣に座り込んだ。そしてこいしは、夜見に寄りかかり、サードアイはこちらに向いてきた。

こいし「んん♪」

夜見「どうした？こいしさん」

こいし「ふふ、お兄ちゃんといるとね、幸せな気持ちになれるの」

夜見「・・・そうか、嬉しいな」

そう言つて夜見は、こいしの帽子を取つて頭を撫でる。するとこいしは少し照れている様子だった。

こいし「えへへ、嬉しいな ねえ、ぎゅーつてして」

夜見「はいはい、わかったよ」

そして夜見はこいしを抱き締めると、こいしも夜見を抱き締めた。そしてこいしは、

夜見に聞いてみた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん お兄ちゃんから見れば、どんな人？」

夜見（どんな人？うーん、そうだなあ）

夜見は悩んだ挙げ句、こんな答えを出した。

夜見「甘えん坊な妹、かな？」

そう言うと、こいしは嬉しそうだった。

こいし「ふふ、じゃあ、お兄ちゃんは私のお兄ちゃんってことだね♪」

夜見（ん？ああ、こいしさんの兄って話ね）

そんなことをしていると、背後の草むららがガサリと音を立てた。

こいし「…ね、ねえ、今さっき」

夜見「わかつてる、大丈夫だよ」

そして夜見は仮面を被った瞬間、音を立てた正体が出てきた。

チルノ「ほら、遅いよ！大ちゃん！」

大妖精「待つてよ、チルノちゃん」

ルーミア「早くするのさー」

大妖精「ルーミアちゃんまでー」

妖精2人と妖怪が1人現れた。するとチルノ達はこちらに気付いた。

チルノ「ん？あ、あいつ！」

大妖精「え、だ、誰？」

ルーミア「んー？誰だー」

夜見「…なんだ、お前達か」

そう言つて夜見は、こいしを離して立ち上がり、仮面を外した。そしてこいしは、夜見の後ろに隠れた。

すると大妖精とルーミアは、自分が誰だかわかった様子だった。

大妖精「あ、黒夜さんだったんですね」

ルーミア「おー、黒夜だー」

チルノ「ん？誰だ！そいつ！」

チルノがこいしを指差すと、こいしはビクツとした。そして大妖精がチルノを落ち着かせ始めた。

大妖精「ちよつと、チルノちゃん落ち着いて 怖がつてるよ」

チルノ「ふふん、あたいの恐ろしさがわかってるようだな」

しかしチルノを落ち着かせるのは、どうやら無理そうだった。そして夜見はチルノ達に聞いた。

夜見「なあ、何故お前達はここに来たんだ？」

その質問には、大妖精が答えた。

大妖精「えっと、私達、いつもここで遊んでるんです」

チルノ「今日はかくれんぼだ！」

ルーミア「かくれんぼなのだー」

夜見（ふーん、なるほど そうだ、いい機会だし）

そして夜見はこいしの方を向いて、しやがんでこいしに言った。

夜見「ほら、こいしさん 一緒に遊んでって言つてきな」

こいし「え？で、でも、私」

夜見「大丈夫、ほら、頑張つて」

笑顔でそう言うと、こいしは元気よく返事をした。

こいし「う、うん！」

するとこいしは、チルノ達の前に出た。そしてこいしは、チルノ達にこう言った。

こいし「わ、私、古明地こいし、その、一緒にあ、遊ぼう？」

するとチルノが、こう言った。

チルノ「じゃあ、4人でかくれんぼだー！」

するとこいしは、少し嬉しそうな様子だった。それを見た夜見は、安心した。

夜見（さて、俺は少し様子でも見てるか）

そして夜見は、近くの木にもたれ掛かって4人の様子を見ていた。しばらく何かを話している、こいしがそばに寄ってきた。

夜見「どうした？こいしさん」

こいし「お兄ちゃんも入れて遊ぼうって」

すると夜見は、手を横に振った。

夜見「いや、俺はいいよ 4人で遊んできな」

しかしこいしは、首を横に振った。

こいし「やだ、お兄ちゃんも一緒に遊ぶの」

夜見はこの時点で、遊ぶと言うまでこいしは引かない気がした。そして夜見はため息をついて言った。

夜見「・・・ はあ、わかったよ 一緒に遊ぶか」

こいし「えへへ、じゃあお兄ちゃんが鬼だよ」

すると4人は、一斉に周りの森へ入っていった。しかし遠くに行くと危ない為、夜見は空気中の血をドーム状にばらまいた。

夜見（まあ、これで大丈夫だろ さて、数えるか）

そして夜見は、その場で目を瞑って10数えた。数え終わると、夜見は大きな声で言った。

夜見「もういいかい？」

しかし周りから、返事は無かった。

夜見（いいってことでいいのか？あまり遠くには行つてないから、まあ大丈夫だろ）

そして夜見は、隠れた4人を探しに行った。といつても、夜見は血をばらまいた時点で大体の4人の位置はわかつていた。

だから夜見はあえて、誰もいない方向へ向かった。

夜見（さて、しばらくここでうろうろするか）

そして夜見は、わざと誰もいないところで4人を探した。そして夜見は、だんだんと違う方向へ向かった。

夜見（さて、こちら辺に1人いるはずといつても、どこにいるかな）

そして夜見は草むらを探すと、スカートの裾が少し見えた。

夜見（あ、いた）

そして夜見は、草むらに隠れた人物を持ち上げた。

夜見「ほら、こいしさん 見つけた」

こいし「わっ！えへへ、見つかったやつた」

こいしは1番に見つかったのに、何故か嬉しそうだった。そしてこいしを下ろすと、

こいしは手を繋いだ。



こいし「じゃあ、残りの人を探さないとね♪」

そして夜見は、こいしに手を引かれながら森の中を歩いた。

しばらく歩いてみると、夜見は木の陰に誰か隠れたのが見えた。しかし、こいしは気付いていない様子だった。

こいし「んん、どこだろう?」

夜見「さあな、木の後ろとかも確認した方がいいんじゃないか?」

夜見がそう言うのと、こいしは木の陰を探し始めた。

こいし「そうだね、ここは? いないかあ」

そしてこいしは、木の陰を次々と探すと、1人見つけたようだった。

こいし「いた! 大妖精ちゃん見つけた!」

大妖精「きやつ! 見つかっちゃった」

夜見(楽しそうでよかった、さてと)

すると夜見はこいし達にばれないように、森の奥へと入っていった。そして夜見は、ある人物に呼び掛けた。

夜見「なんだ? 心配で見に来たのか?」

すると、木の陰からある人物が出てきた。

燐「いや、さとり様が心配してたから仕事ついでに寄っただけ」

その人物は、黒い猫車（手押し車）を押ししていた燐だった。

夜見「まったく、さとりさんも心配性だな」

燐「でも、自分の妹を心配しちゃうのは仕方ないでしょ？」

夜見「ま、それもそうか」

そして夜見は、木に背中からもたれ掛かった。

そして燐は聞いてきた。

燐「それで、どうだい？こいし様の様子は？」

夜見「楽しく遊んでる、心配はいらねえよ」

燐「そうかい？まあ、黒夜さんがいるから心配いらぬかい　じゃあね、仕事に戻るよ」

夜見「そうか、それじゃあ」

そして燐はどこかへ飛んでいき、夜見はこいし達の元へ戻った。

こいし達の元へ戻ると、いつの間にか1人増えていた。それはルーミアだった。おそらく、見つかったのだろう。

そしてこいしはこちらに気付いた。

こいし「あ、お兄ちゃん！もう、どこに行ってたの!？」

しかしこいしは、少し怒っている様子だった。

夜見「いや、あつちに誰かいると思ったんだけどな　気のせいだったよ」

こいし「心配したんだから！まったく」

夜見「悪かったよ、ごめんな」

そして夜見は、こいしの頭を撫でると、こいしは機嫌を直した。

こいし「次は、許さないから」

夜見「わかったよ、それにしても、ルーミアさんが見つかったのか」

夜見がそう言うのと、大妖精が説明をした。

大妖精「さつき、あそこの草むらで見つけたんです」

ルーミア「うー、見つからないと思っただのに」

こいし「私が見つけたんだよ！お兄ちゃん」

夜見「そうか、じゃあ、あとは1人だな」

そして夜見達はチルノを探す為に、森の中を歩き回った。しかし、なかなかチルノの姿を見つけることが出来なかった。

こいし「うーん、いないなあ」

ルーミア「どこだー？チルノはー」

大妖精「なかなか見つかりませんね」

夜見（まあ、森の中にいたら見つからないのは当たり前前だな）

しかし夜見は、チルノがいる場所については大体わかっていた。

夜見（あいつだけ森の上で飛んでるんだ　さて、どうやってこいしさん達に伝えるかな？）

すると夜見は、あることに気が付いた。

夜見（なつ、あいつ、遠くに行きやがった！）

すると夜見は、空気中の血を集めて血の翼を作った。

そしてこいし達は、その様子に驚いていた。

こいし「お、お兄ちゃん!? どうしたの!？」

大妖精「く、黒夜さん!？」

ルミア「どうしたのだー?」

そして夜見は、こいし達に言った。

夜見「ちよつと、探してくる　みんなは最初の場所に戻っていてくれ」

夜見はそう言い残して、空へ羽ばたいた。

夜見（あいつは、あつちか）

夜見はチルノが遠くに行った瞬間に、血の一部をチルノに付けた為、どこにいるかはすぐにわかった。

しばらく飛んでいると、チルノの姿が見えた。

夜見「おい！チルノさん！止まれ！」

チルノ「わあっ!?ば、ばれた!」

そしてチルノは何故か、更に加速して飛んでいく。夜見も負けじと飛ぶ速度を上げるが、なかなか追い付けなかった。

夜見（くそっ! やっぱりもともと飛べる妖精には歯が立たない!）

すると夜見は血を操り、長いロープのような物を作り出した。そして夜見はそのロープの端を、チルノに向かって投げた。

するとそのロープは、チルノの体に巻き付いた。

チルノ「な、なんだこれ!? 離せー!」

夜見（ふう、ギリギリ届いた）

チルノ「このー! はーなーせー!」

そして夜見は、じたばた暴れるチルノを引いて、こいし達のところへ戻った。

そして夜見は、こいし達のところへたどり着くと、チルノに巻き付いていたロープを分解した。

こいし「お兄ちゃん、見つけたんだ」

夜見「ああ、なんとかな」

チルノ「くそー、もう一度だ! もう一度かくれんぼだ!」

そしてチルノは、もう一度かくれんぼをしたいと言い出した。夜見は、今度こそ見て

るだけでいようと思ったが。

こいし「じゃあ、最初に見つかった私が鬼だね　お兄ちゃん、絶対に見つけるから♪」  
どうやら、諦めるしかないようだった。

そしてこいしは、木に腕を置いて目を伏せた。

こいし「いくち、にく、さくらん」

こいしが数え始めると、チルノ達は一斉に森の中へ入っていった。そして夜見は再び血をドーム状にばらまいた。

夜見（今度こそは、遠くにいかないでくれ　困るから）

夜見はそんなことを思いながら、ある場所へと隠れた。

そしてこいしは、10数え終わった。

こいし「もーいいーかーい」

そしてこいしは返事が返って来なかったが、隠れたみんなを探しに森へと入っていった。

夜見（頑張れ、こいしさん）

夜見はそんなことを思いながら、仮面を顔の上に乗せて少し目を瞑った。

しばらくすると、夜見はある音に気付いた。

ガサッ

夜見「……」

一瞬だけ音がしたのを、夜見は聞き逃さなかった。そして夜見は仮面を取り、ゆつくりと辺りを見渡した。

夜見（……音は前から 血で探すにも、集めるのは危ないしなあ）

すると、夜見の背後から声が聞こえたと同時に、目を手で覆われた。

？「だーれだ？」

夜見（……あれ？この声は確か）

そして夜見は、その声の主の名前を言った。

夜見「サニーミルクさん、だったかな？」

サニー「正解」

そう言つてサニーミルクは、手を外して夜見の正面に座つた。

サニー「何してるの？こんな木の上で」

夜見「そう言うサニーミルクさんこそ、何をしてるんだ？」

そう、夜見はこいしが目を伏せた木の上の太い枝で横になつていたので。

そしてサニーミルクは夜见到こう言った。

サニー「私は暇だから散歩をしてるの。ちなみに残りの2人はまだ寝てると思うよ」

夜見「そうか、俺はかくれんぼの最中だ」

サニー「へえ、かくれんぼか　もしかして、さっき見た黒い帽子を被った妖怪が鬼？」  
夜見「ああ、そうだ」

すると、サニーミルクは夜見にこう言った。

サニー「でも、あの妖怪って……覚妖怪だよね？」

その言葉に夜見は顔色ひとつ変えなかったが、少し動揺していた。

夜見（な、なんでわかったんだ!?)

そして夜見は、サニーミルクに聞いた。

夜見「なんで、そう思ったんだ？」

サニー「ん？だって、3つの目とか覚妖怪ぐらいしか思い付かないもん」

夜見（なるほどな　確かに、根拠としてはありだな）

そして夜見はこう言った。

夜見「……そうか　ああ、そうだ、覚妖怪だ」

サニー「やつぱり　でも、一緒に遊んでる妖精と妖怪は気付いてない様子だったね」

夜見「……ああ、そうだな」

サニー「……なんで、黒夜が覚妖怪と遊んでるの？」

夜見「……」

サニー「まあ、いいや　言いたく無いようだし　それじゃ」



そう言つてサニーミルクは、どこかへ飛んでいった。そして夜見は、こいしのことについて考える。

夜見（：。もし、こいしさんが覚妖怪つて気付かれたら、こいしさんはまた、嫌われ：。いや、させない 絶対にそんなことはさせない）

そう思つてしていると、下の方から声が聞こえた。

こいし「うゝん、お兄ちゃんどこだ？」

大妖精「見当たりませんね」

チルノ「くそー、黒夜め 一体どこだ？」

ルーミア「どこだー？黒夜ー」

どうやら、自分以外はこいしに見つかったようだった。そして夜見は、こいしを見た。夜見（こいしさんが覚妖怪だつてばれないようにするには、一体どうすれば？。：。

くそつ、何も思い付かねえ）

するとこいしは、上を見上げた。そして、枝の上に夜見がいるのに気が付いた。

こいし「あ！お兄ちゃん、見つけた！」

夜見（：。すまない、こいしさん こうするしか、方法は無い）

そして夜見は、こいしの近くに着地した。

こいし「お兄ちゃん、やっと見つけたよ なんだっけ、灯台もと暗しつてやつ？」

こいしは呑気にそんなことを言っていたが、夜見は真面目な顔をしていた。

夜見「…なあ、みんな、1つ聞いてくれ」

こいし「…どうしたの？」

すると、夜見はこう言った。

夜見「こいしさんは実は、覺妖怪っていう心を読む妖怪なんだ」

すると、こいしは絶望したような目で夜見を見た。

こいし「…え、お兄…ちゃん なんで？」

夜見「でも、こいしさんは「や、やめて！お兄ちゃん！」

すると、こいしは急に叫んだ。

夜見「…こいしさん」

こいし「なんで？なんでよ？せっかく私に友達が出来たのに、なんでお兄ちゃんはみんなに私のことばらしちゃうの！ なんで!?!お兄ちゃんは、私のことが嫌いなもの!?! 答えよ！ねえ！ 私は、私は、お兄ちゃんのこと、お兄ちゃんのこと… こと…」

すると、チルノが言った。

チルノ「…よくわかんないけど、だから… 何？」

すると、こいしは目を丸くした。

こいし「…え？」

大妖精「こいしちゃんか覚妖怪っていうのは驚きましたけど、こいしちゃんはもう友達です。妖怪だろうとなんだだろうと、別に良いじゃないですか」

ルーミア「そうだぞー、私達は友達だー」

こいし「み、みんな」

すると、こいしは泣き出してしまった。

こいし「ぐすつ、あ、ありがとう、私を、友達って、呼んでくれて、ひぐつ」

チルノ「覚妖怪とかよく知らないけど、私達は友達だ！」

大妖精「そうですよ、こいしちゃん 私達はいつまでも友達です」

ルーミア「友達なのだー」

すると夜見は、こいしの正面でしゃがみ込んで、こいしに言った。

夜見「こいしさん、友達ってのは認めてくれるもんだ」

すると、こいしは夜見に抱き付いてきた。そして夜見はしりもちをつく。

こいし「うう、よかった、よかったよお、お兄ちゃん」

夜見「… ああ、そうだな こいしさん」

そして夜見は、こいしを抱き締め、頭を優しく撫でた。

すると、こいしは腕に力を入れてきた。そうなるともちろん。

夜見「痛い痛い こいしさん、痛いって」

こいし「ぐすつ、お兄ちゃん」

夜見「ああ、だよな　まーた聞いてないや」

そしてしばらくすると、こいしは落ち着いてきた。

こいし「……ん、もう大丈夫　お兄ちゃん」

夜見「そうか？別にまだこうしてもいいぞ？」

こいし「大丈夫　つて言うか、その」

するとこいしは、少し顔を赤くした。夜見は不思議に思っていると、こいしはこう言い出した。

こいし「と、友達の前だと、恥ずかしいよ」

そう言われた夜見は、チルノ達を見た。

チルノとルーミアは普通にこちらを見ていたが、大妖精は、あきらかに視線を逸らしていた。

夜見「え、ああ、そうか」

そして夜見はこいしを離すと、こいしは離れた。

こいし「ありがとう、お兄ちゃん」

夜見「ん？いや、お礼なら俺じゃないだろ？」

こいし「ううん、そうじゃない」

不思議に思っていると、こいしはこう言った。

こいし「私の友達を信じてたんでしょ？ありがとう、お兄ちゃん」

夜見「……まあ、正直に言うのと賭けではあつたんだがな」

そう言つて夜見は立ち上がると、チルノがこう言い出した。

チルノ「遊んだらお腹減つたな そうだ！黑夜のお金で人里にご飯食べに行こうよ！」

チルノがそう言うと、ルーミアがこう言った。

ルーミア「そーだなー、賛成だー」

しかし、大妖精はかなり遠慮していたようだった。

大妖精「そ、そんな急に決めても、黑夜さん困つちゃうよ」

そしてこいしは、夜見に向かつて言った。

こいし「ねえ、お兄ちゃん みんなでご飯食べようよ」

夜見「うくん、ちよつと待つてな」

そう言つて夜見は、ポケットからさとりからもらつた袋を取り出した。その袋の中には、1銭と500文入っていた。

夜見（5人だから、1人300文まで食べれるな 前にうどん買った時は、1つ100文だったし大丈夫だろ）

そして夜見は袋をしまうと、みんなに言った。

夜見「よし、じゃあ人里に行つてご飯を食べに行くか」

大妖精「え!?だ、大丈夫なんですか?」

夜見「大丈夫、遠慮しなくていい」

チルノ「やったー!」

ルーミア「やったぞー」

こいし「みんなでご飯だー! イエーイ♪」

そして大妖精以外は、とても盛り上がっていた。

夜見「じゃあ、人里へ向かおう」

夜見がそう言つて、夜見達は人里へと向かつて行つた。

ちなみに夜見は、途中で仮面を被つた。

しばらく歩いて人里の前まで着くと、夜見はこいしに自分のマントを被せた。

こいし「きやつ!?お、お兄ちゃん?」

夜見「それ、被つておけ 目を閉じると、見えなくなっちゃうしな」

こいし「う、うん」

そして夜見達は人里の門に向かうが、門の横にいた若い門番に止められた。

若い門番「おいおい、待つてくれ 明らかに怪しい奴を人里に入れる訳にはいかない

よ

夜見「まあ、人里って言うぐらいだしな。あの門番がいてくれればなあ」

そんなことを夜見は思いながら、人里に入るときに会った素っ気ない門番の顔を思い出している、聞いたことのある声が聞こえた。

門番「おい、交代の時間だ」

若い門番「あ、先輩！ありがとうございます！」

門番「ん？お前は」

するとそこには、あの素っ気ない門番がいた。そして夜見はその門番に声をかけた。

夜見「お、いいタイミングで来てくれたな」

門番「またお前か。なんだ？」

夜見「いや、こいつらと人里に入りたいんだけど……」

すると門番は、1人ずつしつかりと見た。

門番「妖精に、妖怪か？あと、その白い布にくるまってる奴は？」

夜見「ああ、妖怪だ。といっても別に害を与えようって訳じゃない」

そう説明すると、門番は道を譲った。

門番「ならいい」

若い門番「え？ちよつと、先輩!？」

門番「…なんだ？」

すると若い門番は、納得がいつていなかったようだった。

若い門番「こんな怪しい奴を、入れていいんですか!?!それに、妖怪なんて危ないに決まってるよ!?!」

すると門番は、若い門番に聞いた。

門番「…新人、知らないのか？」

若い門番「え?何を?」

若い門番が疑問に思っていると、門番はこう答えた。

門番「危害を与えないという条件なら、人里の出入りは基本自由だぞ?」

若い門番「は?そんなの聞いてませんよ!?!」

門番「…新人、この前の説明で言ったはずだぞ 人の話聞いてなかったな?」

そう言うと、若い門番は視線を逸らした。

若い門番「い、いや、そんなことは…」

門番「すまない、通つていいぞ それと、新人、お前は仕事が終わったら話がある」

そう言うと、若い門番は顔が青くなっていた。そして夜見達は、遠慮なく人里へと入つていった。

人里に入ると、夜見はこいし達に聞いた。



夜見「そういえば、みんな何が食べたいんだ？」

そう聞くと、それぞれこう答えた。

チルノ「美味しい物！」

ルーミア「美味しい物ならなんでもいいぞー」

大妖精「私は、麺類がいいです」

こいし「私はうどん お兄ちゃんがこの前行ったお店がいい」

それぞれの話を聞いた夜見は、行くお店を決めた。

夜見「じゃあ、うどんがいいか あのうどん屋は、もうちよつと先だったな」

そして夜見達は、ご飯を食べにうどん屋へ向かっていった。

## 第15話 夜見は変わり者かも

夜見達は人里を進んでいくと、目的の場所に着いた。

夜見「ここだ 入るぞ」

そして夜見達は入るとお昼頃なのか、客はかなりの数がいた。

そして椅子がすべて空いているテーブルは、1つしかなかった。

こいし「お兄ちゃん、空いてるの1つしかないよ？」

夜見「……仕方ない、相席を頼むしかないな」

そして夜見は、誰かに相席を頼もうとした。すると、見覚えのある人物がいた。

それは、アリス・マーガトロイドだった。

夜見「あ、アリスさん」

アリス「あら、黒月じゃないの どうしたの？」

すると夜見は説明をした。

夜見「実は、5人でうどんを食べに来たんだが、あいにく席が空いてないから相席を

頼もうとしてたんだ」

アリス「そうなの なら、相席していいわよ」

夜見「そうか、すまないな」

そして夜見はアリスの正面に座ると、こいしが横に座ってきた。チルノ達は、隣が空いているテーブルなので、そこに座った。

そして夜見はお品書きを手に取ると、こいしが覗き込んでくるため、こいしと一緒に  
お品書きを見ていた。

お品書きを見てみると店員が来て、水の入ったコップを置いてきた。

そして、アリスが夜見に質問をした。

アリス「ねえ、1つ聞いていいかしら？ 妖精2人と妖怪1人はわかるんだけど、その白い布を被ったのは一体誰？」

その質問に夜見はこう答えた。

夜見「ああ、妖怪だよ 別に害を与えるわけでもないし、構わないだろう？」

アリス「ええ 別に構わないけど、あなたは人間以外にそんなに好かれるのかしら？」

夜見「いや、妖精だろうと妖怪だろうと、別に俺は構わないが？ 否定する理由なんて無いだろう？」

アリス「…あなた、随分変わった考えをしてるのね」

夜見「ん？ そうか？」

そんな会話をしながらお品書きを見ていると、ある料理が目に残った。

「激辛うどん」

時間無制限

食べきったら賞金1000銭

ギブアップの際には罰金があります

夜見（・・・なんだこりや）

こいし「・・・お兄ちゃん？これ食べるの？」

こいしが料理に指を指すと、アリスが止めに入った。

アリス「それ、やめておいた方がいいわよ」

夜見「そうなのか？」

アリス「ええ、成功者0人って話よ さつきそれを頼んだ人がいたから、見てみれば？」

すると男の店員が、ある男性に例のうどんを持っていった。

男性「本当にこれを食いきったら1000銭なんだな？」

店員「はい、そうです」

男性「後悔しても知らねえからな？」

店員「大丈夫です どうぞ」

男性「よっしゃ！いただきます！」

そして、男性は勢いよく麵をすすった。すると男性は汗を滝のような勢いで流し始めた。

男性「がつ!?ごほっごほっ!!」

すると男性は一口食べたところで咳き込み、箸を置いた。

男性「な、こんな無理だろ!ごほっごほっ!!」

そして夜見はアリスの方を向くと、アリスはこう言った。

アリス「ね?ご覧の有り様 あと、ちなみにギブアップなんかすると…」

すると男性は店員に叫んだ。

男性「む、無理だ!食えない!」

店員「はあ?ギブアップでしょうか?」

男性「ああ、そうだ!ギブアップだ!」

すると店員は、とんでもないことを言い出した。

店員「そうなりますと、罰金として1銭になります…」

男性「なっ!?!そんな額払うわけ無いだろ!」

店員「いや、お客様 払ってもらわないと困りますよ」

店員は男性を、ニヤニヤした顔で見始めた。そして夜見は大体この料理がどんなものか理解した。

夜見（なるほど、要は賞金で釣って金を巻き上げると　まあ、店側は一応罰金とも記載はしてるから訴えるにも無理と）

アリス「ね？だからやめておいた方がいいわよ？」

すると夜見はこう言った。

夜見「じゃ、俺食べてみるわ」

するとアリスは、驚いて言った。

アリス「はあ!? 話聞いてたの!？」

夜見「聞いてたよ　まあ、食えなかったら素直に払うし」

夜見がそんなことを言うと、隣のこいしが、服を引っ張ってきた。

こいし「お兄ちゃん？ 本当に食べるの？」

夜見「ん？ ああ　まあ、無理そうだったら食べるのやめるから」

こいし「… うん、わかった」

アリス「ちよつと！ やめておいたほうが…」

夜見「そういえば、こいしさんは決まった？」

こいし「あ、うん　普通のうどん」

すると夜見は立ち上がって、チルノ達の方へ向かった。

そして夜見はチルノ達に頼むものを決めたか、聞いてみた。

夜見「なあ、食べるの決まったか？」

チルノ「決めた！うどん！」

ルーミア「んく、私も普通のうどんでもいいぞー」

大妖精「あ、私も同じです」

夜見「そうか、わかった」

そして夜見は、厨房の方へ向かった。すると店員が夜見に話しかけてきた。

店員「ん？注文かい？」

夜見「ああ、うどん4つと、あの辛いうどんを頼む」

すると、店員がニヤニヤしながら言ってきた。

店員「はくい、今作りますんで」

夜見（…なんだよ）

そんなことを思いながら席に戻ると、アリスが言ってきた。

アリス「ねえ、黒月、店員のあの態度見たでしょ？今からでもやめておいた方がいいわ

よっ。」

すると夜見は不思議そうに聞いた。

夜見「え？確かに接客の態度は少し悪い気はしたけど、別に料理を食べないことには繋がらないだろ？」

そう言うと、アリスはポカンとしていた。

アリス「……え？」

夜見「……え？」

するとアリスは、こいしの方に顔を向けた。

アリス「ねえ、ちよつと1つ聞いていい？ その妖怪さん」

こいし「え？ な、何？」

アリス「もしかして、この人って天然？」

こいし「お兄ちゃんか？ ううん、そんなことないよ？」

アリス「そ、そう」

そんな会話をしていると、女の店員がうどん2つを両手に持ってきた。

店員「えつと、うどんと、天ぷらうどんですね」

アリス「あ、天ぷらうどんは私、うどんはその子よ」

店員「あ、はい どうぞ」

そして、アリスとこいしの前にうどんが置かれた。ちなみにアリスのうどんには、  
茄子なすの天ぷらが乗っていた。

こいし「わあ、美味しそう」

夜見「ほら、こいしさん、箸」



そして夜見がこいしに箸を渡すと、こいしは美味しそうにうどんを食べ始めた。するとアリスが再び話しかけてきた。

アリス「ねえ、1ついいかしら？」

夜見「ん？なんだよ？」

アリス「あなたって、天然って言われたことある？」

夜見「……いや？そんなことはない」

アリス「そ、そう ごめんなさいね、この子にも聞いたのに」

夜見「別に」

すると隣のテーブルにも、女の店員がうどんを持ってきていた。そしてチルノ達もうどんを美味しそうに食べていた。

そして夜見は、厨房の方を少し見た。すると店員2人が何か話していた。

夜見「……まだかな、俺のうどん」

夜見がポツリと呟くと、こいしが言った。

こいし「お兄ちゃん、お腹そんなに減ってる？私のうどん、少し食べていいよ？」

するとこいしは、うどんを夜見の方へ寄せたが、夜見は首を横に振った。

夜見「ううん、いいよ 待ってればそのうち来るから」

こいし「そう？大丈夫？お兄ちゃん」

夜見「大丈夫大丈夫、気にしないで」

こいし「うん、わかった」

そしてしばらくすると、男の店員がこちらにうどんを持ってきた。別にそれは構わなかったのだが、問題があった。

夜見（…え？でかくね？）

店員の持つてきたうどんのサイズは、大盛サイズのうどんだった。先ほど食べていた男性より大きいサイズなのは明らかだった。しかも、スープが赤いのは構わないのだが、麺自体も赤くなっていた。

するとアリスが急に立ち上がって、店員に言った。

アリス「ちよつと！何よこれ!?明らかにさっきの客より大きいじゃない!？」

店員「いやいや、そんなことはありませんよ?」

アリス「明らかに卑怯じゃない!恥ずかしくないの!？」

夜見「おいおい、アリスさん 落ち着いて」

アリス「黒月もおかしいと思わないの!？」

夜見「アリスさん、俺を心配するのはいいけど、周りを見て」

そしてアリスは夜見に言われて周りを見ると、全員の客がアリスに注目していた。するとアリスは顔を赤くして、大人しく座った。

そして店員はニヤニヤしながら夜見に言ってきた。

店員「えつとく、言つときますけど、ギブアップすると罰金ですからね？」

夜見「わかつてる、いただきます」

すると夜見は仮面をテーブルに置き、箸を手に取った。そして夜見は、うどんをすすった。すると夜見は店員に言った。

夜見「ああ、やっぱり辛いですね」

店員「…は？」

すると店員はポカンとしていた。それを見て夜見は、不思議そうに聞いた。

夜見「えつと、何か？」

店員「え、い、いやいや どうぞ？」

夜見「…ま、いいか」

そして夜見は平気な顔をして、うどんを食べ進めていった。するとアリスは、心配そうに聞いてきた。

アリス「ちよつと？大丈夫なの？」

夜見「ん？ちよつと辛いけど、別に食えないほどではないよ」

すると店員は、厨房へ走って行ってしまった。

夜見（…なんなんだ？まったく）

こいし「ぷはー、お腹いっぱい」

するとこいしがちようど、うどんを食べ終えた。そしてこいしは、夜見に聞いてきた。こいし「お兄ちゃん、そのうどん美味しいの？」

夜見「ん？まあ、美味しいのかな」

こいし「そっか、良かったね♪いっぱい食べれて」

夜見「ああ、そうだな」

そして夜見は、うどんをどんどん食べ進めていく。すると、周りの客がざわざわしてきた。

アリス「ちよ、ちよつと黒月？」

夜見「ん？どうした？」

アリス「あなた、やっぱりおかしいわよ」

夜見「どこが？」

アリス「どこがって：．．はあ やっぱりなんでもない」

そして夜見は、スープまで全て食べきった。

夜見「ふう、ごちそうさま」

すると、周りの客が夜見に向かって拍手を送った。そして夜見はチルノ達の方を見ると、チルノ達もうどんを食べ終えていた。

夜見「さて、そろそろ出るか」

そして夜見は、仮面を被ってこいし達と一緒に会計に向かうと店員はこう言い出した。

店員「えっと、合計1銭と400文ですね」

夜見「…はい？」

夜見は、店員の言っていることが理解できなかった。そして店員は夜見にこう言った。

店員「いやいや、お客さん インチキは駄目ですよ」

夜見「…」

すると夜見は、400文だけ出した。

店員「いやいや、お客さん あと1銭足りませんよ？」

すると夜見は、急に声を低くして言った。

夜見「…じゃあ聞か、どんなインチキしたってんだ？」

店員「いやいや、そんなの知りま

ダアンツ

すると夜見は、いきなり壁を殴った。そして夜見は再び店員に聞いた。

夜見「どんなインチキしたって？」

店員「……うるさいですね 知らないって言うてるじゃないですか」

すると、テーブルに座っていた客達がこちらに向かつてきた。そして客達は、店員にいろいろな文句をいい始めた。

言うてる内容は大体「インチキはそつちの方だろ!」「インチキだつて言うんなら証拠を出せ!」といった内容だった。

すると、厨房にいた男の店員も来て、言い争いはさらにヒートアップした。もはや、夜見の入る隙間すら無かった。

するとこいしが、夜見に言った。

こいし「お兄ちゃん、どうする?」

夜見「……出るか」

そして夜見達は店を出ていった。後ろから店員が呼び止めていた気がしたが、夜見は特に気にしなかった。

すると、チルノがこう言い始めた。

チルノ「あく楽しかった 今日解散!じゃあね〜」

そう言うてチルノはどこかへ飛んでいってしまった。するとルーミアもチルノと一緒にどこかへ飛んでいった。

そして大妖精は、夜見とこいしにこう言った。

大妖精「今日はありがとうございます それじゃあ、またどこか  
こいしちゃん、またね」

こいし「うん、またね」

そして大妖精もどこかへ飛んでいき、こいしは手を振っていた。  
すると、店から女の店員が出てきて夜見に急に頭を下げてきた。

店員「も、申し訳ございませんでした！」

夜見「…いや、いいよ もう来ないから」

すると店員は頭を上げたが、今にも泣きそうになっていた。

店員「そ、そうですよね すいません」

そして店員が店に戻ろうとしたが、夜見は肩を掴んで止めた。

店員「え？なんですか？」

夜見「…一応、話だけでも聞こう」

すると店員は事情を説明し始めた。

店員「実は、父がここで店長として働いていたんですが、急に辞めてしまっ  
たんですよ。それで、新しい店長が決まってからずっとあの状態なんです  
よ。すると夜見は、前に来たときのことを思い出した。」

夜見（そういえば、前に来たときの人はいなかったな）

すると夜見は、店員にこう言った。

夜見「悪いことは言わない、今すぐここを辞めた方がいい　潰れたとしても、責任のとばつちりが来るのも時間の問題だしな」

店員「・・・ですよね　今日限りで辞めます」

夜見「まあ、次に働く場所が良いとこだといいな　じゃあ」

すると夜見はこいしの手を繋いで、店を離れていった。

そして夜見はこいしに聞いた。

夜見「こいしさん、そろそろ帰るか？」

するとこいしは首を横に振った。

こいし「やだ、まだお兄ちゃんとお散歩するの」

夜見「・・・そうか　じゃあ、もう少し散歩するか」

そして夜見とこいしは、人里を歩いていると一軒のお店を見つけた。

夜見「・・・花屋か」

そう、それは花屋だった。店先には色んな種類の花があり、とても華やかだった。

そしてこいしは夜見に聞いた。

こいし「ん？お兄ちゃん、お花好きなの？」

夜見「・・・まあ、嫌いではない・・・かな」



こいし「そうなんだ ちよつと見てみよう♪」

そして夜見は、こいしに手を引かれて花屋に向かった。

すると、花屋にはある人物がいた。その人物は、白い日傘を指している風見幽香だった。

こいし「あ、幽香さんだ！こんにちは」

こいしが声をかけると、幽香はこちらを向いて微笑んだ。

幽香「あら、こいしちゃんと夜見じゃない ごきげんよう」

そして夜見も幽香に気軽に声をかけた。

夜見「幽香さん、人里に来てたのか」

幽香「ええ、何かお花でも買おうと思つてね あなた達は何故ここに？」

そして夜見は幽香の質問に答えた。

夜見「ただの散歩だ そして花屋があつたから少し寄ろうとしたんだ」

幽香「へえ、そうなの てつきり私はデートでもしてるのかと思つたわ」

すると、こいしが顔を赤くした。それを見て幽香はこう言った。

幽香「ふふ、こいしちゃんは可愛いわね、こんなに顔を赤くしちゃつてもしかして、こいしちゃんはデートのつもりだったのかしら？」

するとこいしは俯き、夜見を手を強く握つた。

ギョツ

夜見「・・・こいしさん？」

こいし「・・・」

幽香「あら、ごめんなさい ちよつとからかっただけなのに・・・」

幽香が謝ると、夜見はこう返した。

夜見「ああ、気にしなくていい 最近、こいしさんはこうなんだよ」

そして夜見はしやがみこんで、こいしの頭を撫で始めた。

幽香（・・・もしかして、気付いてないの？かなり・・・鈍感なのね まあ、私は見守るだけにしましょう）

そして幽香は、夜見にある質問をした。

幽香「ところで夜見、あなたは好きな花はあるのかしら？」

夜見「え？そうだなあ、花なら基本なんでも」

すると幽香は少し驚いた。

幽香「へえ、意外ね てつきり無いって言うのかと思ってたわ」

夜見「まあ、強いて言えば綺麗な花、かな？」

すると、幽香は夜見にこう言った。

幽香「そうなの そういえば、夜見は秋の花はどんなのがあるか知ってる？」

すると夜見は少し悩んで答えた。

夜見「確か、菊とか秋桜コスモスがあつたな」

幽香「そうね、じゃあ、花言葉はわかるかしら？」

夜見「菊が高貴、秋桜が謙虚じゃなかったか？」

幽香「そうよ、まさか花言葉まで知つてるとはね」

夜見「まあ、ある程度のことならわかるしな、さて、こいしさん、大丈夫か？」

そして夜見はこいしを撫でるのをやめると、こいしは言った。

こいし「あ、うん、大丈夫だよ」

しかしこいしは、少し悲しげな顔をしていた。すると夜見はこいしにこう言った。

夜見「……もうちよつと、撫でるか？」

こいし「ううん、大丈夫」

夜見「……そつか、わかつた」

そして夜見は立ち上がつて、花屋の花を眺めた。

夜見（ガザニア、桔梗ききょう、彼岸花ひがんぼなねえ、他にも色々あるな）

その様子を見ていた幽香は、夜見に言った。

幽香「夜見は少し面白いわね」

すると夜見は、幽香の方を向いた。

夜見「ん？どういうことだ？」

夜見がそう聞くと、幽香は答えた。

幽香「男性であるあなたが、花を眺めてるのが珍しいと思ったのよ」

夜見「そうか？花は綺麗だし、何より意味があるつてのは俺は好きだな」

幽香「へえ？その言い方だと、花言葉を全部把握してみたいな言い方じゃない？」

夜見「まあ、大体は」

そう答えると、幽香はある提案をした。

幽香「じゃあ、ここで1つ勝負をしてみない？」

夜見「勝負？」

幽香「私は花言葉に関する問題を出す あなたはそれに答える とても簡単でしょう

？」

すると夜見は、幽香に向かって言った。

夜見「……勝負をしたってんなら受けてたつ」

夜見がそう言うのと、幽香は少し笑った。

幽香「ふふ、じゃあ1問目は簡単なのからいきましよう 薔薇の花言葉は？」

そして夜見は軽々と答える。

夜見「愛だろ？」

幽香「さすがにわかるわね　じゃあ2問目　向日葵の花言葉は？」

夜見「……すうはい崇拝」

幽香「正解　3問目　織細は何の花の花言葉？」

すると夜見は、少し悩んでから答えた。

夜見「……鈴蘭か？」

幽香「正解よ　さすがに難しいかしら？」

すると夜見はため息をついた。

夜見「はあ、さすがに全部は把握はしてないからな」

幽香「じゃあ、最後まであと2問にしましょう　4問目　短気の花の花言葉？」

夜見「……えっと、確か……ホウセンカだった気がする」

幽香「合ってるわ　すごいわね」

夜見「合ってたか　じゃあ、最後の問題だな」

そして幽香は、最後の問題を出した。

幽香「最後の問題　黒い薔薇の花言葉は？」

夜見「……」

幽香「あら？　どうかしたかしら？」

急に夜見が黙ったので幽香は声をかけたが、夜見は返事をしなかった。

そしてこいしが、夜見の服を引っ張った。

こいし「お兄ちゃん? どうしたの?」

すると夜見は、我に帰った様な反応をした。

夜見「ん? あ、ああ、なんだっけ? 黒い薔薇の花言葉だっけか」

するとこいしは、夜見を心配そうな目で見た。

こいし「... お兄ちゃん、大丈夫?」

そして夜見は返事をした。

夜見「大丈夫、少し考えてただけだ」

そして夜見は、幽香に向かって答えを言った。

夜見「花言葉は、憎しみと恨み... だろ?」

幽香「そう、正解 さすがね、夜見」

こいし「お兄ちゃん、すごい! 全部正解しちゃった!」

しかし夜見は、何も反応しなかった。

すると夜見はいきなり右手を強く握りこんだ。そして夜見の手から、血が流れた。

こいし「お兄ちゃん!?! どうしたの!?!」

幽香「ちよつと!?! 夜見!?!」

こいしと幽香に声をかけられると、夜見は不思議な様子で2人を見た。

夜見「……どうしたんだ？」

まるで夜見は自分の手から、血が流れていることに気付いていないようだった。

そしてこいしは、夜見に言った。

こいし「お兄ちゃん！手から血が出てるよ！」

夜見「ん？血が？」

夜見は右手を見ると、手に爪が食い込んで血が出ていた。それを見た夜見は、能力で血を止めた。

そして夜見は、こいしと幽香に言った。

夜見「ああ、すまないな あることを思い出しちまったんだ、気にしないでくれ」

幽香「……本当に、大丈夫なの？」

こいし「お兄ちゃん？」

夜見「ああ、大丈夫だ さて、勝負には勝ったが？」

夜見がそう言うのと幽香は、思い出した様に言った。

幽香「そういえば、そうだったわね じゃあ、全問正解した代わりとして、何か好き

なお花を買ってあげるわ」

すると夜見は、少し遠慮をした。

夜見「いや、いいよ 別に自分で買えない訳じゃないし」

幽香「いいのよ 私を楽しませてくれたお礼として受け取って？」

夜見「・・・じゃあ、ありがたく」

幽香「ほら、こいしちゃんも選んでいいわよ？」

幽香がそう言うのと、こいしは喜んだ様子で幽香に言った。

こいし「え!? 本当によいの？」

幽香「ええ、もちろん」

幽香が微笑むと、こいしは夜見の手を引つ張った。

こいし「お兄ちゃん！一緒に選ぼう？」

夜見「ああ、わかったよ」

そして夜見とこいしは、花を選び始めた。

こいし「うくん、お兄ちゃんはどれがいいと思う？」

そう言われると夜見は、サルビアという赤い花を指差した。

夜見「そうだな こいしさんには、あれなんてどうだ？」

こいし「お兄ちゃん、なんでそのお花なの？」

こいしがそう言うと、夜見は答えた。

夜見「ああ 花言葉が、家族愛なんだよ こいしさんは家族に愛されてるからね」

こいし「そっか じゃあ、あのお花の花言葉はわかる？」



するとこいしは、あるピンク色の花を指差した。

夜見「ああ、あのピンク色の花か あれは皇帝ダリア 確か花言葉は乙女の真心だったかな？」

こいし「じゃあ、あのお花は？」

次にこいしは、皇帝ダリアとは違うピンク色の花を指差した。

夜見「あれは秋海棠しゅうかいどう でも、こいしさんがあの花を選んでもなあ」

夜見はそう言ったが、こいしは目を輝かせて言った。

こいし「お兄ちゃん、あのお花がいい！小さくて、可愛い！」

夜見「そうか？じゃあ俺はこの花にするか」

そして夜見は、オレンジ色の花を選んだ。

こいし「お兄ちゃん、なんでそのお花なの？」

こいしの疑問に、夜見は答えた。

夜見「この花はナスタチウム 花言葉は、勝利と困難に打ち克つ どんな困難にも打ち克ちたいからな」

幽香「選り終わったかしら？」

すると幽香が後ろから声をかけてきた。

夜見「ああ、こいしさんが秋海棠、俺はナスタチウムだ」

幽香「そう、わかったわ」

すると幽香は、2人の選んだ花を5本ずつ手に取った。そして幽香は花屋の奥へ入っていった。

しばらくすると、幽香が2つ白い紙で軽く包まれた花束を持ってきた。

幽香「はい、どうぞ」

そして夜見は2つの花束を受け取り、秋海棠の花束をこいしに渡した。

そして夜見は、幽香にお礼を言った。

夜見「ありがとう、幽香さん」

幽香「いいのよ、私はやりたいと思ったことをしただけよ 何より、こいしちゃんはとても嬉しそうにしてるしね」

そして夜見はこいしを見ると、こいしは輝いた目で秋海棠を見ていた。

夜見「ああ、そうだな」

こいし「お兄ちゃん！早く帰って、飾ろうよ」

夜見「そうか、わかった じゃあ、俺達は帰るよ じゃあな」

こいし「幽香さん、またね」

幽香「ふふ、さようなら」

そして夜見はこいしと手を繋いで幽香と別れ、2人は地底へと戻っていった。

そして夜見とこいしは、地霊殿へと帰ってきた。

夜見・こいし「ただいま」

そしてこいしは地霊殿に入ると、1階の右側の廊下へと走っていった。

しばらくするとこいしは、2つのあるものを持ってきた。

こいし「はい、お兄ちゃんの分の花瓶」

それは、ガラスの花瓶だった。そして夜見は花瓶を1つ受け取った。

夜見「ありがとう、こいしさん」

こいし「えへへ、どういたしまして」

そして夜見とこいしは、キッチンへと向かった。すると、そこで2人は花瓶に水を入れた。

夜見（まあ、こんなもんかな？）

夜見がそう思っていると、いつの間にかこいしがいなくなっていた。おそらく、自分の部屋に飾りにいったのだろう。

そして夜見は、自分の部屋へ向かった。

夜見は自分の部屋に入ると、花束についている白い紙を取って、花束を花瓶に入れた。

そして夜見は、仮面を取ってナスタチウムをよく眺めた。

夜見（綺麗な花だな 花言葉の通りに、どんな困難にも打ち克つていかないとな）

そう思つて机の上に花瓶を置くと、部屋の扉が開いた。そこには、さとりが立つていた。

さとり「おかえりなさい 黒夜さん」

夜見「ああ ただいま、さとりさん」

するとさとりは、机の上にある花に気付いた。そしてさとりは夜見に花について聞いた。

さとり「その花は？」

夜見「ああ、人里に行つたら知り合いに出会つて、貰つたんだよ」

さとり「そうだったんですか こいしも花を貰つたんですか？」

夜見「ああ、こいしは秋海棠 ちなみに俺のはナスタチウムっていう花だ」

するとさとりは、夜見にある質問をした。

さとり「花言葉とかはわかりますか？」

夜見「ああ、ナスタチウムは、勝利と困難に打ち克つ 秋海棠は、片思いと恋の悩み

だったかな？」

するとさとりは笑顔で言った。

さとり「そうなんですか とてもびったりじやないですか」

そしてさとりは、もう一つ質問をした。

さとり「そういえば、人里ではこいしはどうしたんですか？」

夜見「マントを被らせて、周りから目を見えないようにしてたから大丈夫だ」

さとり「そうだったんですか やっぱり、お隣の言つてた通り、安心でした」

夜見「はは、さとりさんは心配しすぎだよ」

そして夜見がベッドに座ると、さとりは夜見の隣に座った。

そしてさとりはある質問をした。

さとり「ところで黒夜さん お隣から聞いたんですが、こいしに友達が出来たと言っ

てたんですけど、本当ですか？」

その質問に夜見は笑顔で答えた。

夜見「ああ、本当だよ とても楽しそうに遊んでたし、いい友達だと思うぞ」

さとり「そう、ですか」

するとさとりは何故か俯いてしまった。そして夜見は心配して問いかけた。

夜見「さとりさん、どうしたんだ？」

さとり「… その、黒夜さんに、助けられてばかりだなと、思ってしまった」

夜見「… いや、そんなことない」

すると夜見は、さとりの頭を撫でた。

夜見「さとりさんだって、いつも地底の管理を頑張ってるだろ」

するとさとりはあることに気付いた。

さとり「はい：． あれ？黒夜さんに、私の仕事の話ってしてないですよね？」

夜見「ん？だって、最初に見たからな　あの書類」

するとさとりは、初めて夜見と会ったことを思い出した。

さとり「ああ、あの時に　よく覚えてますね」

夜見「まあ、さとりさんに初めて会った時のことは、印象が強かったからな」

さとり「そうですか　あと、そ：．そろそろ、やめてくれませんか？頭撫でるの」

そう言つてさとりは、少し顔を赤くした。しかし夜見は、さとりの髪で三つ編みをはじめた。

さとり「な、何してるんですか!？」

夜見「うくん　さとりさんの髪、結構癖毛だから編みにくいな」

さとり「人の髪で遊ばないでください！」

夜見「はは、わかったよ」

そして夜見がさとりの髪から手を離すと、さとりは少し怒っていた。

さとり「まったく　黒夜さんは、私をなんだと思つてるんですか」

夜見「え？大切な家族だけど？」

そう言うときとりは、顔を真っ赤にして夜見に言った。

さとり「ま、真顔でそんなこと言わないでください！」

夜見「だって、本当にそう思ってるぞ？」

さとり「もう、黑夜さんは……私をからかったから、私の仕事を1つしてください」  
するとさとりは、からかったから仕事をしてほしいと夜見にお願いをした。

夜見「ん？そうか、何をすればいいんだ？」

さとり「お空の様子を少し見に行ってください 地霊殿の後ろに回って、道なりに行けば会えますから」

さとりは仕事の内容を伝えると、夜見は素直に仕事を受けた。

夜見「わかったよ じゃあ、行ってくる」

そして夜見は立ち上がって、地霊殿を出て裏に回った。

壁には穴が空いており、奥へ進めるようになっていた。

夜見（さてと、さとりさんを少しからかいすぎたな あとでちゃんと謝っておくか）  
そして夜見は奥へ進んでいくと、ある場所へ出た。

夜見（暑いな、なんだここは？）

そこは、円柱の形をした空間だった。壁際は地面がなく、5mほど下にマグマが流れており、天井は無かった。

その空間の中央に空が飛んでいた。

夜見「おくい、空さーん」

夜見が呼びかけると、空は振り返って不思議そうな顔をしていた。

空「あれ、黒夜さん？どうしたの？」

夜見「実は、さとりにさんに空さんの様子を見てきてつて頼まれたんだ けど、一体ここで何をしてるんだ？」

空「ああ、ここの温度調整だよ」

すると夜見は、不思議に思った。

夜見「温度調整？」

空「そう、でも私にもよくわかんないんだ なんでここの温度調整をするか」

夜見「へえ、そうか それで、温度は大丈夫なのか？」

空「うん、大丈夫だよ」

夜見「そうか、わかったよ」

そして夜見は、地霊殿へ戻っていった。夜見が地霊殿に入ると、そこでこいしが待っていた。

こいし「お兄ちゃーん♪」

こいしはこちらに気付くと、こいしはおもいつきり抱き付いてきた。

夜見「おわっ！な、なんだ びっくりした」



こいし「えへへ、お兄ちゃん♪」

夜見「まったく よしよし、こいしさんはいい子だな」

そして夜見が頭を撫でると、こいしは嬉しそうだつた。

こいし「えへへ♪なでなで♪」

夜見「よしよし、こいしさんはいい子だからな さとりさんがどこにいるか教えてくれないかな？」

こいし「お姉ちゃんはねえ、今は仕事部屋にいるよ」

夜見「それは最初にさとりさんと会った場所かな？」

こいし「うん、そうだよ」

夜見「そっか、じゃあ一緒に行こうか」

そして夜見はこいしと手を繋いで、さどりのいる部屋へ向かった。そしてその部屋に入ると、さどりは椅子に座って書類をまとめていた。

夜見「さとりさん、空さんの様子見てきたぞ」

さとり「あ、黒夜さん ありがとうございます」

夜見「ああ、いいんだ別に そうだ、お金返すの忘れてたな」

さとり「あ、そうでしたね」

すると夜見はさどりに近付いて、お金の入った袋を返した。そしてさどりは袋の中身

を確認した。

さとり「400文だけ使ったんですか 一体お昼に何を食べたんですか？」

さとのりの質問に夜見は答えた。

夜見「ああ、うごんだよ こいしさんの友達を3人連れてな」

するとさとりは夜見にこう言った。

さとり「そうすると、1人100文辺りですが？」

夜見「それは、あれだ 俺が激辛うどんっていうのを食べたからだよ」

さとり「そうだったんですか 食べきったら無料とかなんですか？」

夜見「まあ、そんな感じかな」

こいし「でも、お兄ちゃん以外の人も頼んでたけど、その人はすごく咳き込んでたよね」

するとさとりは、こいしの話を聞いて夜見に質問をした。

さとり「え？そんなうどんを食べたんですか？」

夜見「うん まあ、確かに辛かったな」

さとり「黒夜さんは咳き込んだりしなかつたんですか？」

夜見「ああ、そうだな」

するとさとりは、夜見にこう言った。

さとり「∴ 黒夜さんって変わってるんですね」

夜見「え、そ、そうか？」

さとり「ええ、とても変わっていますよ」

夜見「そ、そっか」

夜見は顔には出ていなかったが、少しショックだった。

## 第16話 トラウマと嘘

夜見は自分の部屋のベッドの上で、パジャマを着て横になっていた。

夜見（変わってる……ねえ）

そして夜見は暇潰しに手のひらで空気中の血で、適当な形を作っていた。

夜見（まあ 確かにあっちの世界でも、相当な変わり者だよな）

そして夜見は前にいた、外の世界のことを思い出していた。

夜見（あつちじゃ学校行って、家に帰って寝て、朝起きたら学校行って、大人になれば仕事をして……つまんねえ生活が続くと思ってたんだけどな）

そんなことを思っていると、部屋の扉が開いた。そこにはパジャマを着たさとりがいた。

夜見「さとりさん、どうかしたのか？」

そう言つて夜見は起き上がった。

さとり「実は、少しお話がありまして……」

夜見「まあ、とりあえず座つて」

そしてさとりは、夜見の横に座つた。

そして夜見はさとりに話しかけた。

夜見「それで、話ってなんだ？」

さとり「あ、はい 実は、黒夜さんの心の件なんですけど…。」

夜見「俺の、心？」

さとり「はい、そうです 黒夜さんの心がたまに読める時があるじゃないですか」

そう言われた夜見は、地霊殿に帰った時と朝のことを思い出した。

夜見「ああ、なんかそんなこと言ってたな」

さとり「それで、黒夜さんの心が開いてる時には、ある共通点があるんですよ」

そして夜見は、さとりの言葉に疑問を持った。

夜見「ある共通点？」

さとり「そうです それは、こいしなんですよ」

夜見「え？こいしさん？」

夜見は話の内容があまり理解出来ていなかった。そしてさとりは、話を続けた。

さとり「黒夜さんは、こいしと一緒にいるときに心を開いているんです」

そこで夜見は、あることに気が付いた。

夜見「…へえ、そうなのか でも、だとしたら…。」

さとり「なんでこいしがいるときに心が開くのか、ですよね？」

夜見「… ああ、そうだな」

そして夜見は考え込み始めた。

夜見（こいしさんがいるときにだけ、心を開いてるってことは、こいしさんには心を許しているのか でも、なんでこいしさんだけ？）

さとり「そこで、私は1つ思っただんですよ」

そう言っただとりは、人差し指を立てて言った。

さとり「黑夜さんの心を無理やり覗くことは出来ないかなと」

夜見「え？」

その考えに夜見は、唾然としてしまった。しかしさとりは、続けて話してきた。

さとり「黑夜さんの心を無理やり覗くことが出来れば、もしかしたら黑夜さんの心は開くかもしれない「ちよつと、ちよつと待って」… なんですか？」

すると夜見は、さとりの言葉を遮って聞いた。

夜見「え？それってつまり、俺の心が最悪の場合壊れたりする可能性があるよね？」

さとり「ええ、もちろん」

夜見「しかも、おそらく1回もやったことないよね？」

さとり「はい、初めてです」

夜見「…」

さとり「…」

しばらく沈黙が続いたら、

バツ

夜見「に、逃げろー！！！！」

さとり「え!?!ちよつと、黒夜さん!?!」

夜見は勢い良く部屋から飛び出して、廊下を全力で走った。

夜見（いやいや、あの考えは間違ってるって!）

さとり「ちよつと!待ってください!」

夜見は走りながら後ろを見ると、さとりが走って追いかけてきていた。しかも、その

速さは

夜見「な!?!速いのかよ!?!」

10mは離れていた夜見との距離を、あつという間に縮めていった。さすがは妖怪と言ったところだろう。

さとり「待ってください!捕まえ、た!」

夜見「どわあ!?!」

すると距離を縮めたさとりは、夜見の足を掴んだ。そしたら当然、夜見はあつさり転んだ。

ドサア

夜見「い、いってえ」

さとり「ほらほら、大丈夫ですよ 怖くありませんよ?」

するとさとりが倒れた夜見の背中に乗って、夜見の手を押さえつけた。

夜見「いや、待って! 待ってください、さとりさん! 他の方法を考えようって!」

さとり「いや、さっきの方法が手取り早いじゃないですか」

夜見「いやいや、チャレンジ精神はいいけど! やって良いことと悪いことを考えて!」

さとり「むう、おとなしくしてください」

そんなことをしていると、後ろの方から声が聞こえた。

こいし「何してるの? 2人とも」

そこには眠そうに目をこすっているサードアイを閉じたこいしがいた。すると夜見

はこいしに言った。

夜見「こいしさん、助けてくれ! さとりさんが俺の心を無理やり覗こうとするんだ!」

こいし「お姉ちゃんが?」

さとり「いいから、おとなしくしなさい!」

するとこいしは2人に言った。

こいし「お兄ちゃんの心なんか、普通に覗けばいいじゃん」



夜見・さとり「え？」

こいし「ん、ちよつと待っててね」

するとこいしは夜見の前に座って、サードアイを開いた。そして、こいしのサードアイが夜見の額に着くと……

こいし「ほら、読めるじゃん」

こいしは夜見の心を読んでいた。

さとり「え、こいし!?! どうやって!?!」

こいし「え? 普通に読めない?」

さとり「よ、読めないわよ!?!」

夜見「と、とりあえず、一旦落ち着こう だからさとりさん、ちよつと降りてくれ」

さとり「え、ええ そうですね」

そしてさとりは夜見の上からどいて、夜見は立ち上がった。

夜見「えつと とりあえず、話を整理しよう こいしさんもわからない部分もあるから」

さとり「そうですね じゃあ、とりあえず目的から話しましょう」

するとこいしは、夜見に向かって言った。

こいし「目的? それって多分、お姉ちゃんがお兄ちゃんの心を読むことだよね?」

夜見「そう、その通り。そして、次にさとりさんが俺の心を読む時の話。さとりさんが俺の心を読む時に共通していたことは、いつもそこにこいしさんがいるってことだ」

こいし「私が？」

こいしはそう言つて不思議そうにしていた。

さとり「そう。こいしが黒夜さんという時に、私は黒夜さんの心が読めたのよ」

夜見「この段階で考えられるのは、俺はこいしさんという時に心を開くってことだ」

こいし「・・・でも、今は読めないんでしょ？」

夜見「そう、それがわからないんだ」

するとさとりは、ある提案をした。

さとり「そうだ、再現ですよ！」

夜見「再現？」

するとさとりは説明をした。

さとり「そうです、私が心を読めたときを再現すればいいんですよ」

夜見「なるほどな。て言うことは・・・」

そして夜見はこいしの方を見ると、こいしは嬉しそうな顔をしていた。そしてこいしは夜見の方を向いた。

夜見（あ、まさか）

こいし「お・に・い・ちやーん！」

夜見「どわあ！」

こいしはおもいつきり夜見に向かって飛び付いてきた。もちろん、急に飛び付かれてきたら転ぶのは当たり前だった。

ガンツ

夜見「あだっ!？」

そして夜見は倒れると同時に、後頭部を壁にぶつけた。

さとり「あ！ く、黒夜さん、大丈夫ですか!？」

そして夜見は後頭部を押さえながら言った。

夜見「な、なんとか：：」

さとり「そうですか、大丈夫ならいいんですが：：」

こいし「えへへ、お兄ちやーん♪」

夜見「ああ、よしよし」

そして夜見がこいしの頭を撫でた。するとこいしはとても嬉しそうな様子だった。

こいし「ん、もつとなでなでして？」

夜見「はいはい それで、さとりさん どうだ？」

夜見はさとりに心が読めたかどうか聞くと、さとりは困った様子だった。

さとり「…… おかしいですね 何故か、読めません」

夜見「え？な、なんでだ？」

こいし「お姉ちゃん？お兄ちゃんの心読めないの？」

すると、こいしのサードアイから伸びている管のようなものが夜見に巻き付いてきた。

こいし「お兄ちゃん、とっても嬉しいって思ってるよ？」

さとり「…… あと、こいし 1ついい？」

こいし「ん？なあに？」

さとり「なんで、その目を開いているのに私の心とかは読めないの？」

すると、その話に夜見が反応した。

夜見「さとりさん、一体どういうことだ？」

さとり「そういえば、言っただけですわね 実は、こいしは何故か相手の心が読めないですよ」

そして夜見は質問をした。

夜見「…… 前に同じようなことはあったか？」

さとり「前に同じようなことは、なかったんですけど……」

すると夜見はポツリと呟いた。

夜見「劣化？」

その言葉に、さとりとこいしは反応した。

さとり「黒夜さん、どういうことですか？」

こいし「ん？どういうこと？お兄ちゃん」

すると夜見は言った。

夜見「これは、俺の予想なんだが、もしかしてこいしさんは目を閉じてる間に能力に劣化が起きて、能力の範囲が小さくなったんじゃないか？」

そう説明すると、さとりは少し納得していた。

さとり「なるほど、確かにそれなら説明が付きませんが、だったらなんでこいしに黒夜さんの心が読めて、私は心が読めないのですか？」

夜見「それは多分、劣化と同時に能力自体に変化があつたんだと思う」

さとり「変化？」

さとりは疑問に思ったが、夜見は話を続けた。

夜見「ああ、おそらく、こいしさんの今の能力は、「閉じた心を読む」ことが出来るようになったんじゃないか？」

さとり「閉じた心を読む？そうだとしても、何故こいしがそんな能力を持っているの

ですか？」

そして夜見はゆつくりと言った。

夜見「それは多分、こいしさん自身が心を閉じていたから、読めるんだと思う」

さとり「……確かに、それなら説明が付きますね」

さとりは納得していると、こいしが夜見に話しかけた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん」

夜見「ん？ どうしたんだ？ こいしさん」

こいし「今日は、何かお話を聞かせてよ」

夜見「ああ、別にいいぞ」

するとさとりは眠いのか、あくびをした。

さとり「ふわあ 私は眠いので、そろそろ寝ますね 黒夜さん、こいしを夜更かしさ

せないでくださいよ？」

夜見「ああ、わかってるよ」

すると夜見は、こいしを抱き抱えたまま立ち上がり、夜見はこいしの部屋に入った。

そして夜見は、こいしをベッドに寝かせようとしたが1つ問題があった。

夜見「こいしさん、これ取ってくれないと」

それは、こいしのサードアイの管のようなものだった。その管のようなのは、今も

夜見の体に巻き付いていた。

するとこいしは夜見に、こんなことを言い出した。

こいし「じゃあ、ベッドと一緒に寝ようよ」

しかし夜見は、普通に答えた。

夜見「何言ってるんだ、こいしさん ほら、早く取ってくれ」

こいし「むう、嫌だ」

夜見「いや、嫌だって言われても…」

こいし「お兄ちゃんが一緒に寝るまで取らないもん」

するとこいしは、そっぽ向いてしまった。おそらく怒っているのだろう。

すると夜見は、こいしに言った。

夜見「お願いだから、取ってくれよ」

こいし「…」

夜見「…はあ、仕方ないか」

すると夜見はこいしを抱き抱えたまま机に向かい、椅子に座った。すると夜見は、こいしの日記のページを開いた。

夜見「ほら、こいしさん 今日ほんなことがあった？」

こいし「…」

夜見「今日は、お友達が出来たし、それと人里で幽香さんにも会ったね」  
すると夜見は近くにあったペンを取り、日記をこいし目線で書き始めた。

夜見「ほら、他には？ 何も無いかな？」

こいし「..」

そして夜見が日記を閉じようとした時、日記から何かが落ちた。

夜見「ん？なんか落ちた？」

その落ちた物は、ヒラヒラと夜見の足元に落ちた。

夜見（紙切れ？）

すると、急にこいしが離れて落ちた何かを拾った。そしてこいしは、こつちを向いて言った。

こいし「み、見た？」

夜見「ん？何を？」

すると夜見は、昨日こいしの日記を勝手に見たことを思い出した。夜見はその事を聞いてきたのかと思った。

夜見「ああ そういえば、見たな」

こいし「い、いつ!？」

夜見「えっと、昨日かな？」



こいし「う、嘘……」

夜見「あ、いや、勝手に見たのは悪かったよ？それはごめん」  
するとこいしは、怯えるように夜見に質問した。

こいし「お、お兄ちゃんは、どう思った？」

夜見「ん？いろんな気持ちを感じながら過ごしてるんだなって」

すると、こいしはすごく焦っている様子で言い始めた。

こいし「ち、違うの！その、そんな意味で書いた訳じゃなくて！そ、その……」  
すると夜見は、何かこいしが勘違いしていることに気付いた。

夜見「……俺が言ってるのは、日記の話だぞ？」

こいし「……え？」

するとこいしはキョトンとした。

こいし「日記？日記の話？」

夜見「ああ、だから勝手に日記を見たのは、本当に悪かったよ」  
するとこいしは、胸を撫で下ろした。

こいし「よ、良かったー！」

夜見「……え？」

こいし「なんだ、日記のことだったのかあ てつきりこれのことかと……」

夜見「ん？これって？」

夜見がそう聞くと、こいしは慌てて拾った物を後ろに隠した。

こいし「あ、な、なんでもないよ！なんでもない」

こいしは笑っていたが、その笑顔は嘘だとすぐにわかった。しかし、夜見はその事を聞くのはやめた。

夜見（まあ、話したくないなら無理矢理聞く必要もないか）

そして夜見はこいしを抱き抱えた。

夜見「ほら、こいしさん　ちゃんと寝ようね」

するとこいしは上目遣いで聞いてきた。

こいし「…　ねえ、お兄ちゃんも一緒に寝ようよ　お願い」

夜見「何言ってるんだ　寝るまではそばにいてあげるから、それで勘弁してくれ」

こいし「…　うん、わかった」

そして夜見はこいしをベッドに寝かせた。

夜見「ほら、ちゃんと布団をかけて」

そう言つて夜見は、こいしに布団をかける。

こいし「ありがとう、お兄ちゃん」

するとこいしは夜見の手を掴んだ。そしてこいしは夜見に聞いてきた。

こいし「ねえ 寝るまで手、繋いでいい？」

夜見「ああ、いいぞ」

こいし「うん、ありがとう」

そしてこいしは嬉しそうな顔をしていると、夜見にあることを言った。

こいし「ねえ、お兄ちゃん 前のお話、聞かせて」

夜見「ん？ああ、確か途中で寝ちやつたんだっけ」

こいし「うん だから、最初から聞かせて？」

夜見「はいはい、わかったよ」

そして夜見はこいしにお話を最初から聞かせた。しかし、こいしはやはり途中から眠そうになっていた。

だが、夜見はこいしに最後までお話を聞かせた。

夜見「まあ、こんな話だ どうだった？」

こいし「ん？悲しいお話だねえ」

少しこいしは寝ぼけているのか、口調が少し変わっていた。そして夜見はこいしの頭を撫でた。

夜見「さあ、早く寝ようね」

こいし「うん、わかったあ」

こいしが目を瞑ると、すぐにこいしは眠った。

ちやんと寝ていることを確認した夜見はこいしの手を離して、自分の部屋に戻っていき、ベッドに入った。

そして夜見はゆつくりと眠りについた。

そして夜見は、目を覚ました。

夜見（ん？もう朝かな？さてと、仕事に行かないと）

そして夜見は起き上がると、執事服が机の上にあることに気付いた。

夜見（ああ そういえば、執事服を返さないとな）

夜見はそんなことを思いながら、今日は紅魔館へ行こうと考えていた。そして夜見が黒い服に着替え終わると、扉が開いた。

そこには、パジャマを着たさとりがいた。

さとり「あれ？もう起きたんですか」

夜見「ん、あれ？さとりさん？なんでまだパジャマ着てるの？」

さとり「いや、だつてまだ4時頃ですよ？」

夜見「え、そうなの？早く起きちゃったな」

夜見はどうしようか迷っていると、さとりはある質問をしてきた。

さとり「そういえば、こいしは昨日ちやんと寝ましたか？」

夜見「こいしさん？ちゃんと寝たよ」

するとさとりは少し夜見を睨んで言った。

さとり「本当に、ちゃんと寝たんですか？」

夜見「いや、ちゃんと寝たって そんな睨まないでくれ」

するとさとりは、ゆっくりと話し始めた。

さとり「……実はですね 私、今日の1時頃に1回起きたんですよ そして物音がすると思つて廊下を見たら、こいしが黒夜さんの部屋に入っていったんですよ」

夜見「……1時頃？俺はその時にはまだ寝てたぞ？」

さとり「本当ですか？」

夜見「本当だよ だったらこいしさんの心を読めば分かるんじゃないか？」

さとり「……まあ、嘘ではなさそうですね」

そしてさとりは夜見を睨むのをやめた。そして夜見はさとりはその時のことについて聞いてみた。

夜見「そういえば、廊下でこいしさんの心を読んだんなら、こいしさんが何をしようかわかったんじゃないか？」

さとり「いえ、あの時はこいしは心を閉じていたので読めませんでした それに、心は読めたとしても考えを読めるわけではないので……」

夜見「そうか……じゃあ、こいしさんに直接聞くしかないか」

そして夜見は、こいしが起きたらその事について聞こうと思った。

そしてさとりは夜見にあるお願いをした。

さとり「そうだ 黑夜さん、ちよつと手伝ってほしいことがあるんですけど、いいですか？」

夜見「ん？別に構わないが？」

さとり「実は昨日、書類を書いていたのはいいんですが、まとめるのをやっていない……」

夜見「ああ、わかったよ まとめてくる」

さとり「ええ、お願いしますね」

そして夜見は、さとりの仕事部屋に入った。机の上には積み重なった書類があったが、夜見は1つずつ書類の内容を見て、まとめ始めた。

そして15分が経った頃には、書類をすべてまとめていた。

夜見（よし、こんなもんだろ）

そして夜見は仕事部屋から出ようと扉に手をかけた。

ガチャガチャ

夜見（ん？あれ？）

しかし、何故か扉が開かなかつた。そして夜見はさらに力を込める。  
ガチャガチャ

夜見（あれ？開かない 鍵とかあつたっけ？）

そして夜見はドアノブの所を見ると、普通に鍵のつまみがあつた。

夜見（あ、なんだ 開けられるじゃん）

そして夜見はそのつまみを回して鍵を外した。しかし、夜見の後ろから誰かの手がつまみを回して鍵をかけた。

夜見「…なんだ、こいしさんの仕業か」

こいし「えへへ、ばれちやつた」

夜見は後ろを振り返ると、そこにはこいしがいた。そしてこいしは夜見に両腕を伸ばしてこう言った。

こいし「お兄ちゃん、ぎゅーってして」

夜見「わかつたよ、ほら」

すると夜見はしゃがんで、こいしのことを抱き締めた。そしてこいしも夜見のことを抱き締めて、服を握った。

すると次の瞬間。

こいし「…ぐすっ」

夜見「……こいしさん？」

こいしが何故か急に泣き出し始めた。そしてこいしは夜見のことを強く抱き締めて聞いてきた。

こいし「ひぐつ　ねえ、お兄ちゃん　ぐすつ　お兄ちゃんは、いなくならないよね？」  
夜見「こいしさん、どうしたんだよ？」

訳のわからない夜見は、こいしに泣いている理由を聞くと、こいしはゆつくりと話し始めた。

こいし「うっ　昨日の夢でね　ぐすつ　お兄ちゃんが、死んじゃって　それで　ひぐつ　不安に、なって」

夜見「……そつか　ごめんな、不安にさせて　でも、大丈夫　俺はいなくならないよ、絶対に」

こいし「ぐすつ　本当に？」

夜見「ああ、本当だ」

するとこいしは夜見にこう言った。

こいし「じゃあ、お願い　私のこと、ずっとずっと愛して」

夜見「……わかったよ　ずっと愛してやる、どんなときでも」

すると夜見も、こいしのことを強く抱き締めた。そして扉の向こうには、ある人物が



いた。

さとり（：： まったく、こいしはいつも黒夜さんに甘えて まあ、黒夜さんも嫌がってはいないようですし）

するとさとりは、あることに気が付いた。

さとり（：： あれ？ 黒夜さんの心が読める？）

そう、何故かさとりは夜見の心が読めていたのだ。そしてさとりはあることをしようとした。

さとり（今なら：： いや、でも、そんなことをしたら：：）

さとりは悩んでいたが、さとりは覚悟を決めた。

さとり（きっと大丈夫 黒夜さんのことを知るためにも、黒夜さんを守ってあげるために）

そしてさとりはあることを始めた。次の瞬間、夜見にあることが起きた。

夜見（：： これは？）

夜見の脳内にある光景が一瞬、フラッシュバックした。そして、それと同時に廊下ではあることが起きた。

さとり「うっ!?!おえっ!げほっげほ」

なんと、さとりが嘔吐してしまったのだ。そしてその音が聞こえた夜見は、こいしに

言った。

夜見「さつきのは!? こいしさん、ごめん! ちよつと離れてくれ!」

こいし「う、うん、わかった 私も聞こえたから」

そしてこいしが離れると夜見は、急いで扉の鍵を外して扉を開けた。するとそこには、手で口を押さえているさとりの姿があつた。

さとり「うっ お、おえっ!」

だが、さとりの嘔吐は止まらず、手の間から小間物が流れていた。

そして夜見は、さとりに急いで駆け寄つた。

夜見「おい! 大丈夫か、さとりさん!」

そして夜見はさとりの背中を優しく擦ると、さとりの嘔吐は止まり、少し震えていた。そして夜見はこいしにあるお願いをした。

夜見「こいしさん、さとりさんを連れて手をキッチンで洗つて、ベッドに寝かせてあげてくれ」

こいし「う、うん、わかった」

するとこいしはさとりの背中を擦りながら、キッチンへと向かつた。そして夜見は能力を使って空気中の血を集めて、さとりが嘔吐した小間物を血で包んだ。

夜見（一体どうしたんだ、さとりさんは!?!）

そして夜見は急いでキッチンへ入ると、さとりが流し台で手を洗っていて、こいしはさとりの背中を擦っていた。

こいし「お姉ちゃん、大丈夫？」

さとり「だ、大丈夫よ、こいし 気にしないで」

夜見「おい、さとりさん!? 何があつたんだ!?!」

そして夜見は心配して、さとりのそばに近付いた。

さとり「い、いえ、大丈夫ですよ、黒夜さん ちよつと気分が悪いだけですから」

夜見「何言つてんだ! ほつとけるわけないだろ! こいしさん、後は俺が面倒見るから大丈夫だ」

こいし「え、うん わかった」

そして夜見はさとりの背中を擦りながら、さとりの部屋に向かった。夜見とさとりが部屋に入ると、夜見はさとりをベッドに寝かせた。

夜見「おい、さとりさん 気分が悪かつたつて、まさか起きた時からだったのか?」

すると夜見は、さとりを心配して気分が悪かつたのは何時からなのかを聞いた。そしてさとりはこう答えた。

さとり「い、いえ 実は、違うんです 気分が悪くなつたのは、黒夜さんのトラウマを呼び起こした時なんです」

そう、実はあの時にさとりは夜見のトラウマを呼び起こしたのだ。そして夜見はさとり確認をした。

夜見「……トラウマを、呼び起こした？まさか、あの時に？」

さとり「ええ、そうです。私は能力で黑夜さんのトラウマを呼び起こしたんです。でも、トラウマの中の黑夜さんの心の声を聞いたら、気分が悪くなってしまうって……」

すると、夜見は少し怒った様子でさとりに質問をした。

夜見「……まさか、あの場面を見たのか？」

さとり「いい、いえ、一瞬だったので、何がなんだか……でも、トラウマの中の黑夜さんの心の声は悲鳴とは言い表せないようなものでした」

すると夜見は震えて拳を握り、さとりに聞いた。

夜見「……なんで、なんでそんなことをしたんだよ」

さとり「少しでも、黑夜さんのことを知りたかったんです」

夜見「……なに、言ってるんだよ」

さとり「だって、黑夜さんの「ふざけんじゃねえ!!!」

すると夜見は、さとりの言葉を遮って怒鳴った。

夜見「何を言ってるんだよ、さとりさん！俺のことを家族だって言ってくれたじゃねえか！なのに、なんで俺の過去を覗き見るようなことをするんだよ！俺の過去なんざ全

部……ぜん、ぶ……」

すると夜見は、少しずつ声が小さくなっていた。そしてさとりは夜見の言葉を聞いて、謝り始めた。

さとり「……そうですよね 黒夜さんは家族なのに、過去を覗くようなことをしてしまつて、ごめんなさい」

すると夜見は落ち着いたのか、いつもの様子になっていた。

夜見「……いや、いい 俺も少し言いすぎた それに、怒鳴つて、ごめん」

さとり「いえ、黒夜さんは何も悪くありませんよ 私が黒夜さんに直接聞けばよかつたんです だから、気にしないでください」

すると夜見は、さとりにこう言った。

夜見「いや、全部俺が悪いんだ 俺があんなことをしたから……」

さとり「……あんなこと？」

夜見の言葉に疑問をもつたさとりは夜見に聞いてみたが、夜見は答えなかつた。

夜見「……悪いが、それは答えられない でも、もし話せる時がきたら、その時に話すよ」

さとり「……わかりました 待つてますよ、私は、いつまでも」

夜見「ああ、ありがとう」

さとり「あと、もう一つ、いいですか？」

夜見「なんだ？」

するとさとりは夜見のトラウマについて、あることを聞いた。

さとり「トラウマを呼び起こした時、黒夜さんにトラウマがフラッシュバックした筈です。なのに、なんで黒夜さんは平気なんですか？」

すると夜見は、ゆっくりと答えた。

夜見「それは、あれは俺じゃないからだ」

さとり「どういう、ことですか？」

すると夜見は、首を横に振った。

夜見「いや、なんでもない、忘れてくれ。そうだな……俺はあの時を認めたんだけ」

さとり「あの時を認めた？」

夜見「ああ、俺はあの時を認めた。だから俺は、決めたんだけ。これからのことも、過去のことも、全部認めるってな」

するとさとりは、夜见到笑顔でこう言った。

さとり「そうですね、強いんですね、黒夜さんは」

夜見「……さあ、な。それはどうかな？」

まるで、何か意味があるような言い方にさとりは疑問を持った。

さとり「… 黒夜さん？」

夜見「じゃあな、さとりさん しばらく休んでな」

夜見はそう言つて、さとりの部屋から出た。すると目の前にはこいしがいて、こいしは夜見に心配そうに聞いた。

こいし「お兄ちゃん、お姉ちゃんは大丈夫？」

すると夜見はこいしの頭を撫でて、こいしを落ち着かせるように言つた。

夜見「ああ、大丈夫だ 何も心配はいらないよ さとりさんは少し気分が悪いらしいから、しばらく安静にさせてあげてくれ」

こいし「うん、わかつた」

夜見「よしよし、こいしさんは偉いな」

するとこいしはあることを言い出した。

こいし「じゃあ、今日は私がお姉ちゃんの代わりをする！」

すると夜見は、こいしに聞いた。

夜見「そうか？でも、さとりさんがいつも何をしてるのかわかつてるのか？」

するとこいしは胸を張つて言つた。

こいし「大丈夫！だって、私はお姉ちゃんの妹だもん！」

夜見（いや、理由にはなつてない でも、こいしさんにはいい機会かもしれない）

すると夜見は、こいしに向かつて言った。

夜見「じゃあ、今日はこいしさんに地霊殿を任せるよ」

こいし「うん、任せて！まずは、朝食の用意をしないと」

するとこいしは、キッチンへと走っていった。

そして夜見は、ある部屋の前で扉をノックした。

夜見「おい、起きてるか？」

燐「うん？どうしたの？」

すると扉から、まだ眠そうにしている燐が出てきた。そして夜見は燐にこう言った。

夜見「実は、さとりさんは少し気分が悪いらしい。それで、こいしさんがさとりさん

の代わりをするらしいから、サポートをしてほしいんだ」

燐「え!?!さとり様は、大丈夫なの!?!」

夜見「ああ、大丈夫だよ。でも、時間を空けて様子は見てやってくれ」

燐「う、うん、わかったよ。じゃあ、あたいはみんなのパジャマを集めてくるよ」

夜見「ああ、わかった」

そして夜見はキッチンへ向かうと、キッチンではこいしが皿にパンを乗せていたの  
で、夜見はパンを運ぶのを手伝うことにした。

夜見「こいしさん、手伝うよ」



こいし「お兄ちゃん、ありがとう」

夜見「ああ、どういたしまして」

そして夜見はパンにあらかじめジャムを塗って、さとりのところへ持つていくことにした。

そして夜見はさとりの部屋の前に立ってノックをした。

コンコン

さとり「入っていいですよ」

さとりから許可をもらった夜見は扉を開けると、さとりはベッドで体を起こしていた。

夜見「さとりさん、朝食だけど食べられるか？」

さとり「ええ、大丈夫です 気分も少し良くなったので」

夜見「そうか、なら良かった あまり無理はするなよ？」

さとり「わかっていますよ」

すると夜見はさとりにパンを渡して、さとりの部屋を出た。そして夜見は朝食を食べるために、こいし達がいる部屋に向かった。

部屋に入ると、さとり以外のみんなが座っていた。そして夜見も自分の席についた。

夜見・こいし・燐・空「いただきます」

そして食事をしていると、燐が夜見に話しかけてきた。

燐「ねえ、黒夜さん、1つ聞いていいかい？」

夜見「ん？どうした？」

燐「さとり様は、どうして気分が悪いんだい？」

すると夜見はその質問に、こう答えた。

夜見「ああ、さとりさんは朝起きたら、気分が悪かったらしい　まあ、疲れから来たんじゃないか？」

そう答えるとこいしはこちらを見てきたが、目が合うとこいしは夜見に合わせ始めた。

こいし「いつもお姉ちゃんばかりに、迷惑かけちゃってるからね　たまにはお姉ちゃんへの代わりに、いろいろやってあげないと」

燐「・・・　そうですね、こいし様　今日は頑張りましょう」

そんな会話をしながら、夜見達は食事を終えた。

夜見・こいし・燐・空「ごちそうさま」

そして夜見は自分の部屋に行き、マントと仮面を被り、刀と執事服を手を持って地霊殿を出た。

そして夜見は旧地獄街道を通過して地上へと出た。

夜見「…はあ」

地上に出た夜見は地面に刀を置いた。そして近くの木に近づいて、血を手を纏わせ

た。  
ダアンツ

すると夜見は急に木を殴り、夜見の手に纏わせた血が砕けた。そして夜見は刀を手にとり、紅魔館へと歩いていった。

夜見（すまない、さとりさん、嘘をついて 俺の過去を教えることは絶対に出来ない  
たとえ、どんな理由があつたとしても）

## 第17話 行方不明者

夜見はしばらく森の中を歩いていると、霧が薄くかかった湖に出た。そして夜見は湖に沿って歩いていると、足元にあつた何かを蹴った。

夜見（ん？なんだこれ？）

夜見の足元にあつたのは蛙だった。いや、正確に言えば氷の中に蛙が入っていた。

夜見（なんで蛙が氷に：。ああ、あいつの仕業か）

そして夜見は足元の蛙が入った氷を拾うと、それを上に軽く投げた。すると夜見は、血で手元にハンマーを作り、そのハンマーを横に振るつた。

パリン

すると蛙が入った氷がちょうどあたって、氷が砕けた。そして夜見は氷が砕けた瞬間に血のハンマーを分解した為、蛙は無傷でその場に落ちた。しかし蛙は、一向に動く気配はなかった。

夜見（あれ？まさか、手遅れか）

そして夜見はその蛙を拾い上げると、微かに動いていることがわかった。

夜見（ああ、良かった。てか、この蛙デカイな 10cmはあるだろ：。）

そして夜見は蛙をしばらく持つていると、体温で蛙が暖まったのか蛙の後ろ足が急に激しく動いた。

夜見「うわっ!?急に動くなよ」

そして夜見はその蛙を地面に下ろすと、その蛙は湖へ入っていった。そしてその蛙は湖の中央辺りまで泳ぐと、湖の中へ垂直に潜り始めた。

夜見（…え？蛙って潜る…いや、幻想郷じゃ不自然じゃないか）

そして夜見は紅魔館へ歩こうとした瞬間、後ろから声をかけられた。

チルノ「おい！その、黒…白？まあなんでもいい！」

すると夜見はため息をついて振り返った。

夜見「俺は黒夜夜見だ 人の名前ぐらいはちゃんと覚えろ」

チルノ「だって、白いのを被ってるじゃないか！」

夜見「格好で名前が変わる訳ないだろ」

チルノ「ええい！とにかく、よくもあたいの作った氷を壊したな！」

夜見「…は？」

夜見は、チルノの言っていることにまったく心当たりがなかった。せめて、壊したと聞いたらあの蛙が入った氷ぐらい…

夜見（ああ、あれのことを言ってるのか）

そして夜見はチルノに言った。

夜見「あのなあ、蛙をいじめんなよ 可哀想だろ？」

チルノ「うるさい！なんでもいいから覚悟！」

そしてチルノが弾幕を放ってきた。しかし夜見がその弾幕を避けた瞬間、あることが起きた。

ザパアアアアア

夜見「…え？」

音を立てた正体は、湖の中からやって来た。その正体は、5mは越えているであろう大きな蛙だった。

そしてその蛙の鼻先に、10cmほどの蛙が乗っていた。

夜見（ああ、さっきの蛙か？恩返し的なとかいらねえよ？）

そう思った次の瞬間、大きな蛙が口を開けて舌を伸ばした。そしてその舌で捕らえたのはチルノだった。

夜見「あ」

チルノ「うえっ!?!ちよつと待っ

すると大きな蛙は、チルノを口の中に入れてしまった。おそらく、蛙なりの恩返しのもりだろうが夜見は少し可哀想な気がした。

夜見「ああ：： おーい！すまないが、出してやってくれないか？」

夜見がそう蛙に言うのと、蛙はチルノを吐き出した。そしてチルノは頭からつま先まで濡れていた。

チルノ「うええ、気持ち悪い」

すると蛙は、湖の中に潜っていった。それを夜見は見送ってチルノの方を見ると、チルノは手で服に付いた液体を落としていた。

チルノ「うわあ、全然とれない」

夜見「自業自得だ、そんなことをするからだろ？」

チルノ「うう：：」

夜見「：： はあ、仕方ない」

すると夜見は被っていたマントをとって、そのマントでチルノを拭き始めた。

チルノ「うわあ!?!なんだよ！」

夜見「おい、動くなよ」

そして夜見は暴れるチルノをある程度拭き終わると、チルノに付いていた液体はほとんど取れていた。

夜見「ほら、拭き終わったぞ」

チルノ「うう、あ、ありがとう」

夜見「どういたしました じゃあな」

そう言つて夜見はマントを血で宙に浮かせながら、紅魔館へと向かつた。

紅魔館に着くと門には、美鈴がいた。そして美鈴はこちらに気付くと、声をかけてきた。

美鈴「あ、黑夜さん おはようございます」

夜見「美鈴さん、おはよう 今日服を返しに来たんだが」

美鈴「ええ、それは構わないんですけど それ、どういうことですか？」

すると美鈴は、宙に浮かせていたマントを指差した。その質問に対して夜見はこう答えた。

夜見「蛙の唾液 まあ、気にしないでいい」

美鈴「：。一体何をしたら、そんなことになるんですか？」

夜見「まあ、なんだ 蛙の怒りを買った妖精を助けたらこうなつた」

美鈴「そ、そうですか でも、早く洗わないと大変なことになりますよ？」

夜見「そう言つても、服を返し終わらないと話にならないんだが？」

美鈴「あ、そうでしたね！今すぐ開けますから！」

そして美鈴が門を開けようとした瞬間に、夜見はこう言つた。

夜見「ああ、やつぱりいいや」



美鈴「いや、何を言つて……あれ？」

美鈴は夜見の方を見ると、いつの間にか持つていた執事服が制服一式と黒いマントに変わつていた。

すると美鈴の背後から声が聞こえた。

咲夜「お客様が来た時は、まずは用事を済ませてから世間話をしてくださいねかしら？」

美鈴「さ、咲夜さん!？」

すると美鈴は急に後ろにいた咲夜に驚いた。そして夜見は咲夜にお礼を言つた。

夜見「ありがとう、咲夜さん 服を取つてきてくれて」

咲夜「いえ、時間がかかりそうだったので……それは？」

すると咲夜も美鈴と同様に、血で浮かせているマントに疑問を持つた。

夜見「ああ、これ？蛙の唾液でこうなつてるんだよ まあ、そんなに気にしないでいい」

咲夜「そうですか もし良かったら、こちらで洗いまししょうか？」

夜見「え？いいのか？」

咲夜「ええ、既に掃除などは全て、終わらせてしまったので そのマントなら夕飯前には洗い終わります」

夜見「そうか じゃあ、頼もつかない」

夜見がそう言った瞬間、浮いていたマントと咲夜が消えてしまった。そして夜見はベルトを着け、刀を差してマントを被り、制服は血の紐で小さくしてベルトと繋げた。

夜見「じゃあな、美鈴さん　また夕飯前ぐらいに来るよ」

美鈴「ええ、気をつけて」

そう言つて夜見は、次に人里へ向かった。

そして夜見は森を抜け、人里に入ると、掲示板のところへ向かった。そして掲示板には、1枚の依頼状があつた。

「依頼：人捜し」

内容：行方不明者の特定

報酬：1人につき10銭

夜見（行方不明者？　どういうことだ？）

夜見はその依頼状を剥がすと、その依頼状の裏にも何か書いてあることがわかつた。

夜見（これは：：　行方不明者のリストか？　ぎつと50人以上はいるぞ：：）

依頼状の裏には、行方不明者と思われる人の名前が隙間無く書かれていた。そして夜見は何か嫌な予感がした。

夜見（なんだ？　この違和感、普通じゃないって言うか：：）

そんなことを思いながら夜見は人里を出て、人里の外へ行方不明者を捜し始めた。

そして夜見はしばらく歩いてみると、再び紅魔館の前に戻ってきてしまった。

美鈴「あれ？黒夜さん、どうしたんですか？」

夜見「ああ、少し依頼でな 行方不明者を捜してるんだ」

美鈴「行方不明者？… ちよつと待っててくれますか？」

すると美鈴は門を開けて、紅魔館の中へ行ってしまった。しばらく待っていると、美鈴は着物を着た黒髪のロングヘアの幼い女の子を1人連れて戻ってきた。

美鈴「もしかして、この子じやありませんか？」

美鈴の言葉に、夜見は疑問を持った。

夜見「どういうことだ？」

美鈴「実はお嬢様が、散歩中に偶然見つけたようです 危ないから紅魔館で保護をしておくと、言っていましたか？」

すると夜見は少し考え込んで、美鈴に言った。

夜見「… すまないが、レミリアさんと話しをさせてくれないか？」

美鈴「ええ、いいですよ どうぞ」

すると美鈴は夜見に道を譲ったので、夜見は遠慮無く紅魔館へと入っていった。そして夜見はレミリアの部屋の前に着くと、夜見は軽くノックをした。

コンコン

レミリア「いいわよ」

そして夜見は部屋の中へ入ると、レミリアは中央の紅い椅子で頬杖をついていた。するとレミリアはこちらを見て、笑顔で聞いてきた。

レミリア「あら？ 黒夜じゃない どうしたのかしら？」

すると夜見はレミリアに向けてこう言った。

夜見「行方不明者って言ったらわかるか？」

するとレミリアの顔から笑顔が消えた。そしてレミリアは夜見に質問をした。

レミリア「何が聞きたいのかしら？」

夜見「今知っている行方不明者の情報を聞きに来た」

するとレミリアは少し考え込んで、夜見に言った。

レミリア「∴ そうね 今の所知っているのは、人里で行方不明者がいきなり増えた

ことぐらいよ」

夜見「じゃあ、さっきの女の子はなんなんだ？」

夜見がそう聞くと、レミリアは大きくため息をついた。

レミリア「はあ、美鈴から聞いてないのかしら？ 散歩中に見つけた、そして保護をし

た ただそれだけよ」

夜見「へえ、そうか じゃあ、なんでここで保護をする必要があつたんだ？」

するとレミリアは夜見にこう返した。

レミリア「それは、あの子供をそのまま人里に戻すと、死ぬ運命を辿ることになるからよ」

すると夜見は、レミリアにどういふことか質問をした。

夜見「死ぬ運命？ 一体どういうことだ？」

レミリア「そのままの意味よ。あの子供から、人里に戻すと何者かに殺されるという運命が見えたの。それを阻止して何がいけないのかしら？」

夜見「・・・レミリアさんは、運命を見れる能力でも持つてるのか？」

レミリア「半分正解。正確には、「運命を操る」能力よ」

夜見「じゃあ、その能力を使えば解決しただろ」

レミリア「まあ、その方法もあるけど、私はそんなことはしないわ」

夜見「何故？」

するとレミリアは夜見をまっすぐ見て、こう言った。

レミリア「むやみにそんなことをしたら、この幻想郷の法則が乱れることと同じなのよ」

その言葉を聞いた夜見は、レミリアの行動に納得していた。

夜見「なるほどな。じゃあ女の子は、いつ頃帰らせることが出来る？」

レミリア「まだそこまでの運命は見えない、今は時が過ぎるのを待つしかないわ」  
するとノックもせずに誰かが部屋に入ってきた。夜見は振り返るとそこには、先ほどの女の子がいた。

すると女の子はレミリアに近付いていった。

レミリア「どうしたのかしら？」

レミリアは女の子の頭を撫でながら聞くと、女の子は言った。

女の子「お腹減った おやつちょうだい」

レミリア「朝からお菓子なんて駄目よ 我慢しなさい」

すると女の子はレミリアのスカートを掴んで、駄々をこね始めた。

女の子「やだやだ、お腹減ったの」

レミリア「駄目よ、我慢しなさい ちよつと、咲夜？」

レミリアが咲夜を呼ぶと、夜見の隣に咲夜が現れた。

咲夜「はい、どうしましたか？お嬢様」

すると女の子は咲夜に近付いていって、駄々をこね始めた。

女の子「お腹減った、おやつ食べたい」

咲夜「駄目です 朝からお菓子を食べるなんて」

女の子「むー、お腹減ったのー」

すると夜見はレミリアに近付いて、小さな声であることを聞いた。

夜見「なあ、朝食は食べさせたか？」

レミリア「ええ、そうなんだけど、量が少なかつたかしら」

夜見「どうするんだ？ なかなか言うこと聞かなそうだが」

レミリア「そうね」

するとレミリアはふと気になったことを夜見に聞いた。

レミリア「そう言えば、黒夜は一体どこで行方不明者のことを知ったのかしら？」

夜見「それは、えっと確か……」

すると夜見は依頼状をポケットから取り出し、その依頼状をレミリアに渡した。

そしてレミリアはその依頼状をゆっくりと見ていると、あることに気付いた。

レミリア（なんでこんな依頼状が？ 一体誰が、なんの目的で……）

夜見「……どうかしたか？」

するとレミリアは夜見に依頼状について聞いた。

レミリア「黒夜、この依頼状おかしいと思わない？」

夜見「ん？ ああ、確かに何か違和感を感じたが？」

するとレミリアが感じた違和感を話し始めた。

レミリア「まず、人里が行方不明者の搜索を依頼するにしても、何故依頼状にしたの

かしら それに、報酬にしても額が全然情報と労力が釣り合っていないわ。そして何より、報酬は一体誰が渡すのかしら」

夜見「ああ、そうだな。この依頼状、まるで行方不明者を出したから捜してくれって言ってるみたいだな」

レミリア「一体、誰がなんの目的でこんなものを」

2人は依頼状に疑問を感じていると、夜見は女の子がすぐそばに来ていて、咲夜がいなくなっていることに気付いた。

そして夜見は女の子に優しく声をかける。

夜見「ん？どうかしたか？」

声をかけられた女の子は不思議そうに聞いた。

女の子「ねえ、おじさんだあれ？レミリアお姉ちゃんのお友達？」

すると夜見はため息をついて、仮面を外した。

夜見「俺はおじさんって言うほどの歳じやない。俺はまだ16だ。それと、レミリアさんと友達ってのは間違っつてはいないかな」

女の子「わあ、かつこいいね。お兄さん」

夜見「そうか、そりやありがとう」

そして夜見は女の子の頭を撫でると、女の子は嬉しそうだった。



すると女の子は自己紹介をした。

女の子「私、咲希さきっていうの お兄さんは？」

夜見「俺は黑夜夜見だ」

そして咲希は夜見に向かってこんなことを言った。

咲希「ねえ、黑夜！私と遊ばない？」

咲希がそう言うと、レミリアは夜見に言った。

レミリア「遊んであげたら？この子、暇だから」

夜見「いや、俺は仕事をしないと 一応行方不明者を捜せば、この異変の犯人がわかるかも知れない」

するとレミリアはこう言い出した。

レミリア「そんなの今日中に見つかるとは言えないわ そもそも情報がないじゃない それに、この子と遊んであげたら報酬もあるわよ？」

すると夜見は少し考え込んでから、レミリアに言った。

夜見「要するに、犯人がまだわからないんだから、この子と遊んであげなつてことか？」

レミリア「まあ、そういうことね」

すると夜見は諦めたようにため息をついた。

夜見「まあ、仕方ないか よし、じゃあ咲希さん、何して遊ぼうか？」

咲希「んくとねえ、鬼ごっこがしたいな」

夜見「そうか じゃあ、俺が最初に鬼をやろう」

咲希「わかった じゃあ、ちゃんと10数えてね」

すると咲希は部屋から出ずに、ベランダへ向かった。

夜見（ん？何してんだ？）

夜見が不思議に思っていると、咲希はベランダの手すりをよじ登って、そのままベランダから飛び降りた。

夜見「な!？」

夜見は急いで咲希の方へ向かおうとしたが、レミリアに腕を掴まれて止められた。

夜見「何するんだ！レミリアさん！」

レミリア「落ち着きなさい黑夜、よく見てみなさい」

夜見「何を言っ…」

すると夜見はあり得ない光景を目にした。それは咲希が宙に浮かんでいる様子だった。

そして夜見はレミリアに質問をした。

夜見「お、おい なんで人里の人間が空を飛べるんだ？」

レミリア「不思議でしょう？人里の人間は普通、空を飛べることはない。しかもその子はまだ幼すぎる。そんな子供が人里であんなことをしたら、何が起こるかは想像がつかわ」

夜見「まさか、あれが本当の理由か？」

レミリア「いえ、本当の理由はさっき話した事。あの力についてはあくまでも別だわ」と夜見はレミリアが咲希を保護している理由について、あることに気付いた。

夜見「なあ、1ついいか？」

レミリア「どうしたのかしら？」

夜見「レミリアさん、フランドールさんと重ねただろ」

レミリア「あら？一体どういうこと？」

すると夜見は少し口調を強くして言った。

夜見「とぼけるな、フランドールさんの狂気とあの子の特別な力、重ねて見たんだろ？」

するとレミリアはいきなり怒った様子で立ち上がり、夜見の首を掴んでこう言った。

レミリア「これ以上言うと、首をへし折るわよ？」

レミリアは夜見を脅すが、夜見は顔色を変えずに言った。

夜見「何を言ってるんだ？まさか、またビビってるのか？」

するとレミリアは、手に少し力を込めた。  
ギリツ

レミリア「言つた筈よ、これ以上言うと、殺すつて」

夜見「はつ、何言つてんだ？俺を殺したつてどうにもならねえ、わかつてるだろ」

レミリア「黙れ！お前に何がわかる！」

夜見「へえ、それじゃまるでレミリアさんはあの子がどう苦しむかを知つてるみたい  
な言い方じゃねえか」

レミリア「五月蠅い！黙れ！」

すると夜見は首を掴んでいるレミリアの手に自分の手を添えてこう言つた。

夜見「…いい加減にしろよ？」

ゾクツ

その瞬間、レミリアは一瞬寒気を感じた。するとレミリアの手が緩んだ隙に夜見は、  
レミリアの手から抜けた。

レミリア（な、何?!さっきの寒気は!?!異変の時と、同じ寒気:…）

そしてレミリアはその場で腰を抜かしてしまった。

夜見「なんなんだ？さつきからよ、あの子が嫌われるのが怖い？じゃあ、聞くけど

よお、お前はフランドールさんが狂気に吞まれない為に、お前はフランドールさんに寄

り添ったのか？」

するとレミリアは震えた声で答えた。

レミリア「う、五月蠅い！貴方には関係ないでしょ！」

夜見「今回もお前は同じ事をしてんだよ。あの子が嫌われないように紅魔館に置いておく。フランドールさんを閉じ込めた時と何も変わんねえじゃねえか」

レミリア「じゃあ何!?! 貴方ならあの子を嫌われないように出来るって言うの!?!」  
すると夜見は不思議に思っている様子で言った。

夜見「何を言ってるんだ？お前は？」

レミリア「はあ!?! 貴方が言ったんでしょ!?!」

そして夜見はため息をつく。

夜見「はあ、まだわかんねえのか」

すると夜見はベランダに出て、レミリアに言った。

夜見「幻想はどれだけ見ても言ってもいいけどよ、叶えるために努力をしろよ。何もしねえで幻想を見ても、何にも変わんねえだろ」

すると、その言葉を聞いたレミリアはゆっくりとしゃべり始めた。

レミリア「…そうよね、私は確かにこうなればいいってばかり思っていた」

そしてレミリアはゆっくりと立ち上がった。

レミリア「でも、もうそうするのも終わり　ありがとう、黑夜　おかげで目が覚めたわ　私は、私の方法でみんなとしっかりと向き合うわ」

すると夜見は笑顔でレミリアに言った。

夜見「なんだよ　さつきはビビってたくせによ」

レミリア「うるさいわね　もうあの子は苦しませないわ」

夜見「へえ　一応聞いておくが、どうするつもりだ？」

するとレミリアはクスリと笑った。

レミリア「決まってるじゃない、あの子は紅魔館で雇うわ」

夜見「まあ、どうせそんなことだろうと思った」

そう言うのと夜見は血の翼を作り、空へ飛ばたいていった。

するとレミリアの後ろに咲夜が現れた。そしてレミリアは咲夜に話しかけた。

レミリア「咲夜、盗み聞きなんて良くないわよ」

咲夜「申し訳ありません、お嬢様　黑夜様が何か大事なお話をしていると、待つ

ていただけなのですが」

レミリア「……まあ、いいわ　今日は気分がいいから見逃してあげるわ　次は気を付

けなさい」

咲夜「はい、お嬢様」

一方、夜見は屋上で辺りを見渡していた。しかしなかなか咲希が見当たらなかった。夜見（レミアアさんと話してて、少し時間がかかったからな 遠くに行つたつてことは無いだろうけど…）

すると夜見の背後から声が聞こえた。

咲希「おそーい、お兄さん 時間かかりすぎだよ？」

夜見が振り返ると、そこには咲希が宙に浮いていた。そして夜見は咲希に話しかけた。

夜見「ああ、悪かった お詫びとして、一瞬で捕まえてやろうか？」

咲希「へえ じゃあ、やってみてよ」

夜見「ああ、後悔するなよ？」

そして夜見は咲希に向かって全力で飛んだ。しかし咲希との距離があと2mほどになつた瞬間、咲希の姿が消えた。

夜見「なっ!?!どこだ!?!」

夜見は辺りを見渡すと、咲希は夜見の後ろにいた。

咲希「あれれ?どうしたの?あはは」

夜見（…まさか、咲夜さんと同じ様に時を操つたのか?とりあえず、あの瞬間移動は空間に関する能力の筈だ）

そして夜見は再び咲希に向かって飛ぶが、捕まえる1歩手前で咲希は背後に移動してしまう。すると咲希はそんな様子の夜見を少し馬鹿にし始めた。

咲希「さつき一瞬で捕まえるとか言ってたのに、全然捕まえないじゃん ほら、私  
はここだよー？」

夜見（……瞬間移動 いや、どこを通って移動をしたんだ？）

すると夜見は違和感を感じ、翼の一部を空気中に分解した。そして夜見は少し小さくなった翼を羽ばたかせて咲希へ近付いた。しかし、やはり咲希は捕まえる前に一瞬で夜見の背後に回ってしまう。

そして夜見は急いで振り返ると、あることを確信した。すると夜見は咲希に話しかけた。

夜見「1ついいか？咲希さん」

咲希「どうしたの？もしかして、降参？」

夜見「どうして、俺の真後ろに回らないんだ？」

咲希「ん？なんのことかな？」

咲希は首をかしげていたが、すぐに嘘だと見抜いた。

夜見「知らないふりをしたって駄目だ 咲希さんの能力がどんなものかはわかった」  
すると咲希は少し間を開けて話した。



咲希「へえ、わかったんだ。でも、わかった所で私を捕まえるのは無理じゃないかな？」

夜見「ああ、わかってる。だから、こつちも能力を使わせてもらった」

咲希「ん？何を言ってる…。あれれ？体が動かない？」

すると咲希の体についての間にか赤い糸のようなのが絡まっていた。そして咲希は夜見に話しかけた。

咲希「何これ？お兄さんの能力？」

夜見「ああ、そうだ」

咲希「へえ。でも、無駄だよ？」

すると咲希は体に絡まっていた糸を、手でさらっと取ってしまった。そして夜見はゆつくりと咲希に近付いた。

咲希「ゆつくり近付いても、変わらないよ？」

そして咲希が消えた。すると夜見の横で声が聞こえた。

咲希「あだっ!？」

そして夜見は横にいた咲希の肩に手を置いた。そして夜見は咲希に言った。

夜見「やっと捕まえた。随分と待たせたな」

咲希「いったーい。なんで壁が？ああ、これもお兄さんの能力かあ」

すると咲希の前には、赤い壁が浮かんでいた。それはもちろん、夜見が能力で作った血の壁だった。

そして夜見は咲希に話しかけた。

夜見「咲希さんは俺の背後に移動しなかったんじゃないかって、俺の背後に移動出来なかったんじゃないか？」

咲希「なーんだ、もうばれちゃった。メイドさんとレミリアお姉ちゃんには、ばれるまでもう少し時間かかったんだけどなあ。お兄さん、随分目がいいんだね」

夜見「ああ、一瞬だが、咲希さんが俺の真後ろにいなかったのが見えた。それで確信したよ」

すると咲希は夜見に問題を出した。

咲希「じゃあ、私の能力は一体なんでしょうか？」

そして夜見は答えた。

夜見「おそらく、近付ける能力だろ？」

咲希「まあ、大体正解。ちゃんとと言うと「縮める」能力。私は物も距離も時間も縮めることができるの」

そして夜見は咲希がどうやって移動していたかを理解した。

夜見「つまり咲希さんは縮地を使って、まさに瞬間移動をしたように見せたってわけ

だな」

咲希「そうだよ だけど、まさか途中で壁が出てくるとは思わなかったよ よく反応出来たね」

夜見「まあ、反応出来なくても結局柔らかい壁にぶつかることになってた筈だ 近付くと同時に、血を集めてたからな」

咲希「失敗しないようにそんなことまで考えてたんだ て言うか、血？お兄さんは血を操る能力なの？」

夜見「ああ、そうだ」

すると咲希はこんなことをいい始めた。

咲希「へえ、じゃあ弾幕ごっこに負けないじゃん 血を操って、相手の動きを止めちゃえばいいんだもん」

咲希はそう言いながら屋上に座った為、夜見も屋上に座り、血の翼を空气中に分解した。

夜見「さすがにそんなことはしない そんなことしたら、さすがに反則と変わらない」

咲希「そういう所も、ちゃんと考えてるんだ」

夜見「平等に戦わないと、弾幕ごっこの意味がないだろ」

咲希「そっか、確かにそうだね お兄さんは随分とこだわってるんだね、そういうの」

夜見「ルールは守って平等に決める 当たり前のことだ」

咲希「そっか」

そして咲希は夜見の考えに納得していた。すると咲希は夜見に質問をした。

咲希「ところでお兄さんって彼女とか気になる人っているの？」

夜見「おいおい、そういうのは聞くもんじゃないぞ」

すると咲希は夜見を見ながらニヤニヤし始めた。

咲希「そっかあ、恥ずかしいんだ？」

夜見「そんなじゃねえよ」

咲希「恥ずかしく無いなら、言えるよね？」

夜見「……はあ いないよ、気になる人も彼女も」

咲希「えく？つままないの だったら、レミリアお姉ちゃんにお兄さんが好きだって

言ってたって言ってあげようか？」

夜見「やめとけ 怒られるぞ」

すると咲希は夜見の話を聞かずに、ベランダから紅魔館へ入っていった。するとレミ

リアの怒鳴り声が聞こえてきた。

夜見（あーあ、だからやめとけって言ったのに）

そしてしばらくすると咲希がベランダから湖の方向へ飛んでいってしまった。する

とレミリアが夜見に向かって飛んできた。

そしてレミリアは顔を真っ赤にしながら夜見に話しかけてきた。

レミリア「あ、貴方！何を急に變なことをあの子に言わせてるのよ！」

夜見「いや、本気にすんなよ」

レミリア「わ、私なんか貴方と釣り合う訳無いでしょ！自分の身分をわかってるのよ！」

夜見「はいはい、わかってるよ。とりあえず、これでも指しとけ」

すると夜見は血で作ったあるものをレミリアに投げた。それをレミリアはキャッチすると、不思議そうに夜見に聞いた。

レミリア「黒夜、なんで傘なんか渡すのよ？」

夜見「ん？吸血鬼は確か、日が弱点なんじゃなかったか？」

するとレミリアは、日傘を急いで開いた。そしてレミリアは夜見に向かって言った。

レミリア「は、早く言いなさい！そういう大事なことは！」

夜見「いや、自分で気付けよ」

レミリア「とりあえず、あの子と引き続き遊んであげなさい。出来ればフランともね」

そう言つてレミリアは、自分の部屋へ戻つていった。そして夜見はレミリアが部屋に入ったであろうタイミングで日傘を分解して、血を自分のところまで戻した。

夜見（さてと、とりあえず咲希さんを連れ戻さないとな）  
すると夜見は血で翼を作り、湖まで飛んでいった。

夜見は湖に着くと、湖の近くで座っている咲希の近くに降りた。

夜見「おい、咲希さん 戻るぞ」

咲希「どうだった？レミリアお姉ちゃんの反応は？」

夜見「ああ、なんか怒られた」

すると咲希はその場で寝転び始めた。

咲希「なーんだ 貴方がそのつもりなら、いいわよ みたいな期待してたのになあ」

夜見「あんまり恩人で遊ぶな 咲希さんを助けてくれたんだから」

咲希「いやー、だって面白いんだもん さてと、戻ろうっと」

すると咲希は立ち上がり、紅魔館へと飛んでいった。そして夜見も紅魔館へと飛んで

戻っていった。

そして紅魔館の屋上に咲希と夜見は降りた。そして咲希は夜見に向かってこう言った。

咲希「さてと、今度はかくれんぼ もちろん、お兄さんが鬼だよ？」

夜見「ああ、わかったよ ただし、隠れる場所を距離を縮めて移動とかは無しだ」

咲希「えー 絶対見つからないと思ったのに」

夜見「さすがに駄目だろ 半永久的に終わらなくなる」

すると夜見の後ろから、誰かが着地する音が聞こえた。振り返るとそこには日傘を指したフランドールがいた。

フランドール「何してるの？ 黒夜と咲希は？」

咲希「あ！フランお姉ちゃん！」

夜見「ああ、フランドールさんか 今、咲希さんとかくれんぼをする事になったんだ  
夜見がそう言うのと、フランドールは目を輝かせてこう言った。

フランドール「私も遊びたい！いいでしょ？」

夜見「そうだな、人数は多い方が楽しいしな」

咲希「じゃあ、フランお姉ちゃん 早く紅魔館の中に隠れよ！」

フランドール「黒夜 絶対に見つからないからね！」

フランドールと咲希はそう言って屋上から降りて、紅魔館の玄関から中に入っていった。そして夜見はその場で10数えた。

夜見（：・ 9 10 さとと、数えたし さっさと探すか）

そして夜見は、紅魔館の屋上から降りて紅魔館の玄関から中に入っていった。

そして夜見は隠れたフランドールと咲希を探しに向かった。

## 第18話 紅魔館のかくれんぼ

紅魔館に入った夜見は廊下を歩きながら咲希とフランドールをどう探すかを悩んでいた。

夜見（紅魔館は広いから、隠れる範囲を決めればよかった。能力を使うのはさすがに反則だしな）

そんなことを考えて歩いていると、前から来ていた妖精メイドに気付かずに、そのまま当たってしまった。するとその妖精メイドはしりもちをついてしまった。

妖精メイド「きやつ」

夜見「あ！すまない。怪我は無いか？」

妖精メイド「え、ええ。大丈夫です」

夜見「ほら、手を掴め」

すると夜見は手を差し出した。その手を妖精メイドが掴むと夜見は妖精メイドを引っぱり、起き上がらせた。すると妖精メイドは頭を下げてきた。

妖精メイド「すいません、私の不注意で当たってしまった」

夜見「いや、さっきのは俺が悪かった。考え事をしながら歩いてたからな」



妖精メイド「考え事ですか？」

夜見「ああ そう言っても、ただ咲希さんとフランドールさんをどう探すかっただけなんだが」

すると妖精メイドはあることを言った。

妖精メイド「そういえばフランドールお嬢様なら、さつき自分の部屋に入っただけだよ まあ、その後すぐに出てきました」

夜見「ああ、そうか この手があつた」

すると夜見はあることを思い付いた。それは、妖精メイド達から情報を聞くことだった。そうすれば、かくれんぼの鬼にも勝機はあるからだ。

そして夜見は妖精メイドにお礼を言っただけでその場を後にした。

夜見「ありがとう じゃあな」

妖精メイド「え？ど、どういたしまして」

そして夜見はしばらく歩いていると、見覚えのある妖精メイドが窓を拭いていた。それは異変が終わった後に門まで道案内してくれた、青い髪の妖精メイドだった。

そして夜見はその妖精メイドに声をかけた。

夜見「よお、メイドさん 久しぶり」

メイド「あ、えつと確か…… 黒夜さんでいいんですよね？」

夜見「ああ、そうだ 覚えてくれてたのか」

メイド「ええ 黒夜さんはよく紅魔館に来るので、名前ぐらいは覚えていた方がいい  
と思つて」

夜見「そうか ところで1ついいか？」

メイド「はい、なんでしようか？」

そして夜見は咲希とフランドールを見たか質問をした。

夜見「どこかで、咲希さんかフランドールさんを見てないか？」

すると妖精メイドはすぐに答えた。

メイド「え、えつと確か、フランドールお嬢様がキッチンに入ったのを見ましたね  
一体何をしてるんですか？」

夜見「ああ、ちよつとかくれんぼをしてな」

メイド「そうだったんですか あ、ちなみにキッチンはこのまま真つ直ぐ進んで5番  
目の右の扉です」

メイドが丁寧にキッチンの場所まで説明すると、夜見はお礼を言った。

夜見「そうか、ありがとう じゃあな」

メイド「いえいえ、それでは」

そして夜見はキッチンの扉まで進むと、夜見はキッチンの中に入った。するとキッチ

ンには咲夜がいて、なにやら食材を冷蔵庫の中から出していた。

そして咲夜は夜見に気付くと、声をかけてきた。

咲夜「黑夜様？何故ここにいるのですか？」

夜見「ああ、すまない。実は咲希さんとフランドールさんとかくれんぼをしてな  
フランドールさんがキッチンに入ったのを妖精メイドに聞いたんだ」

咲夜「そうですね。なら、ご自由にお探しください」

夜見「本当にすまない。迷惑をかけて」

咲夜「いえ、咲希様と妹様の遊び相手をしてくれているのに、迷惑なんてありません  
よ」

夜見「そうか。ありがとう」

咲夜「どういたしまして」

すると夜見はキッチンの中を探し始めた。夜見はキッチンの棚の陰、棚の中なども見  
てみたがフランドールはおらず、見つかる気がしなかった。

すると咲夜がクスクスと笑っていた。

咲夜「見つかりませんね。もしかしたら、私がある前にどこかに行ったのかもしれないま  
せんね」

夜見「ああ、そうかもな。でも、まだ一応調べてない場所が1つある」

咲夜「そんな場所ありますか？キッチンの中はすべて調べたはずじゃないですか」

夜見「まあ、まさかとは思うんだけどな」

そう言つて夜見は冷蔵庫の扉に手をかけて、冷蔵庫の扉を開けた。すると冷蔵庫の中には震えているフランドールがいた。その光景を見た夜見はため息をついた。

夜見「おい、フランドールさん 危ないだろ」

フランドール「さ、さすがに、ば、ばれないと思つたんだけど」

咲夜「ああ、見つかつてしまいましたね、妹様」

フランドール「そ、そうだね じゃ、じゃあ後4人だね」

夜見「え？4人？」

夜見は不思議に思つた。夜見とかくれんぼをしているのは咲希とフランドールだけのはずなので後は咲希だけなのだ。すると夜見はまさかと思つてフランドールに聞いてみた。

夜見「フランドールさん、まさかとは思うが、スペルカードか？」

フランドール「だ、大正解 そ、そうだよ」

すると冷蔵庫の中にいたフランドールが消えた。そう、実はフランドールは隠れる場所を探しているときにスペルカード「禁忌 フォーオブアカインド」を使って人数を増やしていたのだ。よつて、後は咲希とフランドール3人の合計4人を探さなければなら

なかった。

夜見「スペルカードか その手があった」

すると咲夜は、夜見に声をかけた。

咲夜「随分と大変そうですね」

すると夜見は振り返って咲夜に言った。

夜見「いや、別に苦ではないから大丈夫だ」

咲夜「そうですか では引き続きよろしくお願いします」

夜見「ああ ちなみに咲夜さんはどこかで、咲希さんかフランドールさんを見てないか？」

咲夜「それなら、妹様が図書館に入っていくのを見ましたよ」

夜見「そうか ありがとう」

そして夜見はキッチンを出て、図書館へと向かっていった。夜見は図書館の前まで来ると、ゆっくりと図書館の扉を開けた。

すると夜見は最初にパチュリーのいる場所へ向かった。

しばらくして夜見はパチュリーのいる場所に着くと、パチュリーは椅子に座り、眼鏡をかけて魔道書を読んでいた。そして夜見はパチュリーに声をかけた。

夜見「よお、パチュリーさん」

パチユリー「ん？ 黒夜じゃない 何か用かしら？」

夜見「実はフランドールさんを探しているんだ それでフランドールさんが、図書館に行つた話を聞いたんだ」

パチユリー「そう、でも私は見てないわ 探すなら、せめて騒がないでちょうだい」

夜見「ああ、わかった じゃあな」

そして夜見は図書館の中を歩き回つた。しかし、フランドールは一向に見つからなかった。

そして夜見は図書館にフランドールはいない可能性を考え始めていた時、前方に魔道書を本棚にしまっている小悪魔を見つけた。すると夜見は小悪魔に、フランドールを見たかを聞くことにした。

夜見「小悪魔さん、仕事すまないが少し聞きたい事がある いいか？」

小悪魔「え？ あ、黒夜さんですか どうしたんですか？」

夜見「この図書館の中で、フランドールさんを見なかつたか？」

小悪魔「あ！ 確か見ましたよ」

夜見「そうか それで、どこにいたんだ？」

小悪魔「確か、図書館から出ていった所を見ましたよ」

どうやら夜見の考えていた可能性が、当たつていたしまったようだった。そして夜見

は小悪魔にお礼を言つて、その場を後にした。

夜見「そうか ありがとう、小悪魔さん」

小悪魔「どういたしまして、黑夜さん」

そして夜見は図書館から出るために、扉に手をかけようとした瞬間に扉が開いた。するとそこにはフランドールがいた。

フランドール「あ」

するとフランドールは固まった様子だったので、夜見はフランドールにこう言った。

夜見「……まあ、なんだ 運が悪かったな」

フランドール「うわー やっぱり図書館にいた方がいいと思つたのに」

夜見「なんか、悪かったな」

フランドール「うー 負けちゃった」

そう言うのとフランドールは消えてしまった。そして残りは、咲希とフランドール2人となつた。

そして夜見は少し悪い気がしたまま咲希とフランドール2人を探しにいった。しばらく紅魔館の中を歩いていると、夜見はある部屋の前にたどり着いた。

夜見（ここは確か、食堂だったよな 一応探してみるか）

そして夜見は食堂の中を覗いてみたが、誰も隠れている様子は無かつた。

夜見（いないか 仕方ない、情報を集めるか）

そして夜見は食堂の扉を閉めた瞬間、後ろから声をかけられた。

？「あ、あの、すみません」

声をかけられた夜見は振り返ると、そこには一人のメイドがいた。そしてメイドは夜見にこう言った。

メイド「すみません 私、今から食堂の掃除をするので退いてくれませんか？」

夜見「ああ、すまない すぐに退く」

そして夜見はその場から退くと、そのメイドはそのまま食堂へと入った。すると夜見は少し違和感を感じた。

夜見（なんだ？何か違和感が…）

すると夜見は違和感の正体に気付き、急いで食堂の扉を開けた。すると食堂の窓が一つ開いていた。

夜見（しまった さっきのメイド、咲希さんだったのか 変装とか、随分手の込んだ方法を）

そして夜見は食堂の窓から顔を出して周りを見回したが、咲希はどこにも見当たらなかった。

夜見（なんであの時に気付かなかったんだ 仕方ない、紅魔館の中をまた探してみる



か)

そして夜見は食堂を出ると、廊下にレミリアがいた。すると夜見に気付いたレミリアは声をかけた。

レミリア「あら、黒夜じゃない どう？仲良く遊んでるかしら？」

すると夜見はレミリアに対してこう答えた。

夜見「ああ、随分と楽しいもんだ まさかメイドに変装して堂々と俺の前に出てくるとは思わなかった」

レミリア「ふふ、咲希ね あの子、随分面白いことを考えるの かくれんぼで咲希を見つけるのは、相当難しいわよ？」

すると夜見はあることに気が付いた。

夜見「ん？レミリアさん なんで俺達がかくれんぼをしてるって知ってるんだ？」

するとレミリアはクスリと笑って、こう答えた。

レミリア「さっきフランから聞いたのよ フランも楽しそうにしてたから、貴方には感謝しているわ」

夜見「そりやどうも ところで、フランドールさんとはどこで会ったんだ？」

レミリア「私の部屋よ まあ、すぐに出ていったけれど」

夜見「そうか まったく、どこにいるんだ」

するとレミリアは夜見にあることを言い出した。

レミリア「そんなに苦戦しているのなら、私も手伝ってあげようかしら？」

すると夜見は、レミリアがそんなことを言い出すとは思っていなかった為、とても驚いた。しかし夜見はその気持ちだけ受け取っておくことにした。

夜見「いや、いい 俺一人で探せる」

レミリア「あら、そう？でも、暇だから手伝ってあげるわ」

しかしレミリアは今度は自分からかくれんぼに参加することを言い出した。そして夜見はため息をついてこう言った。

夜見「……結局、自分が遊びたいだけだろ？」

レミリア「そんなことないわ たまにはフランにも構ってあげないとって思っただけよ」

夜見「そうか 随分と妹思いな姉だな」

レミリア「あら？妹のことを想う姉が不自然かしら？」

夜見（まあ、確かにそうかもな さとりさんも、よくこいしさんのことを心配してるしな）

夜見「まあ、そうかもな 兄弟とか姉妹は血が繋がってるからな」

レミリア「そういうことよ さてと」

するとレミリアは指をパチンツと鳴らした。するとレミリアの前に咲夜が現れた。

咲夜「どうかしましたか？お嬢様」

レミリア「咲希とフランに、私もかくれんぼに参加すると伝えなさい」

咲夜「わかりました」

レミリアが咲夜に命令すると、咲夜は了承してその場から消えてしまった。咲夜はレミリアの命令通りに、咲希とフランドールにレミリアがかくれんぼに参加することを伝えにいったのだろう。

そしてレミリアは夜見に言った。

レミリア「さあ、探しにいきましょう」

夜見「ああ、そうだな」

そして夜見とレミリアは一緒に咲希とフランドールを探しにいった。そしてレミリアは廊下から窓の外を見て、外に咲希かフランドールがいないかを探していた。

夜見は会話が無いのも少し寂しい感じがしたので、夜見はレミリアに話しかけた。

夜見「そういえばレミリアさん 1つ聞いてもいいか？」

レミリア「いいわよ 何かしら？」

そして夜見はレミリアにある質問をした。

夜見「レミリアさん自身は料理とかしたりするもんなのか？」

レミリア「なんで、そんなことを聞くのかしら？」

夜見「いや、お嬢様ってよく料理はメイドに作らせてるけど、自分は料理出来るのか疑問に思ってた」

夜見（まあ実際は、さとりさんと同じように料理したこと無いのかと思ったただけなだけだな）

するとレミリアは、夜見にこう答えた。

レミリア「まあ、料理は自分ではそんなにしないけど、出来ないことは無いわ 一通りの家事は自分で出来るもの」

夜見「へえ、意外だな レミリアさんが料理出来るだなんて あんまり想像出来ないな」

レミリア「紅魔館の主だからといって、全部メイド達にやらせて自分は何も出来なくていいというわけでは無いわ 生きる上で必要な知識は学ぶのが当たり前じゃないかしら？」

そして夜見はそのレミリアの話には、とても共感していた。

夜見「まあ、確かにな 俺もあっちでは一人暮らしだったし、生活に必要な知識が重  
要なのはよくわかる」

するとレミリアは少し驚いた様子で夜見に言った。

レミリア「あら、貴方は一人暮らしだったのね そっちの方が意外だったわ」

夜見「そうか？別に普通じゃないか」

レミリア「パチエから聞いた話だと、外の世界では大体仕事に就いて資金が出来てから一人暮らしをするって聞いたわ なのに、なんで貴方は一人暮らしをしてたのかしら？」

そして夜見は思い詰めることも無く、普通に答えた。

夜見「なんでって、俺は小さい頃に両親を亡くしたんだ」

するとレミリアは、急に夜見の方を見て言い出した。

レミリア「あ、そ、そうなのね 悪かったわね、変なことを聞いて」

夜見「別にいい、もう昔のことだ」

レミリア「そ、そう」

そして夜見とレミリアは廊下を歩き続けていたが、レミリアは少し気まずそうにしていた。すると夜見はレミリアにこう声をかけた。

夜見「レミリアさん、別に気にしなくていい 昔のことは変わらないんだから」

レミリア「え？：．． 確かに、私が気を使ったら、貴方まで気を使っちゃうものね」

夜見「まあ、どうでもいいという訳じゃないが、別にレミリアさんが気にすることでもないしな」

レミリア「そうね 貴方の事情を私が気にしすぎても仕方ないわよね」

夜見「まあ、とりあえず さっさと咲夜さんもフランドールさんを探さないとな」

レミリア「そうね あの子達を待たせちゃ悪いものね」

そして夜見とレミリアは再び咲夜とフランドールを探して廊下を歩いていたが、一向に見つかる気配がなかった。

するとレミリアが夜见到こう言った。

レミリア「……とは言っても、なかなか見つからないものね」

夜見「まあ、紅魔館つて随分広いからな 隠れられる場所もたくさんあるだろうし、仕方無い」

レミリア「そうね 咲夜の能力のおかげでこうやって、広い紅魔館になっているものね」

すると夜見は少し疑問に思った。

夜見「咲夜さんの能力？ どういうことだ？」

レミリア「ああ、そういうえば言っただけだったわね 紅魔館の部屋や廊下は、咲夜の能力で少し広くしているのよ おかげで広々とした館になってるわ」

すると、夜見はレミリアの言っていることに納得した。

夜見「ああ、咲夜さんの空間操作の能力か」

レミリア「今思つても、立派な従者だわ おかげで快適に暮らせているわ」

夜見「それは随分と幸せな生活だな」

レミリア「そうね、私にはちゃんと家族がいる 嬉しいものよ」

夜見「そうか まあ、俺にも家族つて言つてくれる優しい家族がいる 嬉しいもんだ」  
レミリア「そう 良かったわね… あ、いたわ 噴水の裏に隠れているわね」

そしてレミリアは窓から外を指したので、夜見は窓の外を見てみた。すると外では、噴水の門側の方に白い日傘が見えた。日傘の陰から綺麗な色をした羽が飛び出て見えるので、フランドールに間違いなかった。

すると夜見は窓を開けて、血で羽を作つてフランドールの所まで飛んでいった。

夜見「フランドールさん、上からじゃ普通に見えたぞ」

夜見がそう言うと、フランドールは顔を上げて夜見に言った。

フランドール「え？ちよつと黑夜、上の階から見つけるのはずるいよお」

夜見「いや、実際見つけたのはレミリアさんだ」

フランドール「え？お姉様が？」

夜見がそう言うのとフランドールは立ち上がつて、夜見が外に出た窓を見た。すると廊下ではレミリアがこちらに手を振っていた。

フランドール「もー！お姉様、少しは手加減してよー！」

レミリア「あら？そんなところに隠れてたフランが悪いんじゃない？もつと頭を使いなさい」

フランドール「もー！お姉様の意地悪！」

フランドールはそう言うと、その場から消えてしまった。そして夜見は日傘を拾って先ほどの窓から紅魔館の中に入って血を分解し、レミリアに言った。

夜見「レミリアさん、フランドールさん少し怒ってたぞ 良いのか？」

するとレミリアはこう言った。

レミリア「かくれんぼと言っても、頭を使わなければすぐにばれてしまう フランにはまず、考えることをさせないといけなのよ」

すると夜見はレミリアの言ったことに納得した。

夜見（なんだ、結局フランドールさんの為か どこまで妹想いなんだか）

そして再び夜見とレミリアは廊下を歩いていると、レミリアは夜見にこう言い出した。

レミリア「このままじゃ罅が空かないわね どうしましょう」

夜見「それなら、片っ端から妖精メイドから誰か見たか聞き込むか？」

レミリア「それも罅が空かないじゃない」

するとレミリアは夜見にある提案をした。



レミリア「そうね、貴方は外を探してくれないかしら？ 私は紅魔館の中を探すわ」  
しかし夜見はその提案に疑問を抱いた。

夜見「俺が外を？ まあ、別に構わないが、目星は付いてるのか？」

するとレミリアは笑顔でこう返した。

レミリア「大丈夫よ フランの考えそうなことは大体わかってるつもりよ」

夜見「そうか、わかった じゃあ外を探してくる」

すると夜見は再び血で翼を作り出し、窓を開けて飛び始めた。

そして夜見は紅魔館の屋上まで飛ぶと、辺りを見渡し始めた。しかし、外に誰かがいる様子はなかった。

夜見「いないな やっぱり紅魔館の中なのか？」

夜見はそんなことを考えていたが、とりあえず紅魔館の外をもう少し見ておくことにした。

しばらく経った後、白い日傘を指したレミリアが屋上に飛んできて、夜見に話しかけてきた。

レミリア「どうかしら？ 誰かいたかしら？」

夜見「いや、まったくだ そっちはどうだった？」

するとレミリアは微笑んで、夜見に言った。

レミリア「ふふ、フランを見つけたわよ 私の部屋に隠れていたわ」

夜見「へえ、そうか じゃあ後は咲希さんだけだな」

レミリア「そうね さてと、私はフランの話し相手をしなさいといけないから、後は任せたわよ」

夜見「わかったよ」

そして夜見とレミリアはベランダに降り、レミリアの部屋から紅魔館の中へと戻った。するとレミリアの部屋にはフランドルがいた。

フランドル「あ、黑夜 私、見つかったよ」

夜見「ああ、レミリアさんから聞いたよ さすがに姉には勝てなかったな、フランドルさん」

フランドル「もー お姉様の力を借りるなんてずるいよ、黑夜」

レミリア「あら？でも私が参加しちやいけないなんてルールは無いはずよ、フラン」とするとフランドルはそっぽ向いてしまった。

フランドル「お姉様の意地悪 お姉様は私の考えることは、ほとんどわかるじゃん」レミリア「そうよ だから参加したのよ」

するとフランドルはレミリアの部屋を出て、廊下でこう言った。

フランドル「お姉様が意地悪するなら、お姉様のプリン食べてやる！」

そしてフランドールはどこかへ飛んでいってしまった。するとレミリアは怒った様子で部屋を急いで出た。

レミリア「待ちなさい、フラン！貴女、昨日食べたでしょ！」

そしてレミリアも同じように廊下を飛んでどこかへいってしまった。そしてその場に残った夜見はそつと呟いた。

夜見「随分と仲いいな ああの姉妹は」

そして夜見も部屋を出ると、廊下にちようど妖精メイドがいたので夜見は、咲希の居場所を知っているか聞いてみることにした。

夜見「ちよつといいか？メイドさん」

妖精メイド「はい？一体なんですか？」

夜見「咲希さんをどこかで見なかったか？かくれんぼをしてるんだ」

すると妖精メイドは視線を逸らして明らかに動揺していた。

妖精メイド「え、い、いや、知らないですよ？」

夜見「…なんだ、咲希さんに口止めでもされたか」

すると妖精メイドはしよんぼりした様子で言った。

妖精メイド「…はい、そうです 「絶対に捕まらない！」と意気込んでいたので」

夜見（まあ、仕方がないか 最後は情報無しで探してみるか）

そして夜見は咲希だけは情報を集めないで探すことにした。

夜見「じゃあ、仕方ないな　頑張って探してみる」

妖精メイド「そ、そうですか　頑張ってください」

そして夜見は再び紅魔館の中を探し回って見たが、少しも咲希を見つけられる気がしなかった。最終的には紅魔館の中を一通り見て回ったが、咲希を見つけられることが出来なかった。

夜見（一通り見たけど、一体どこに行つたんだ？　まだ見てない場所なんてあつたか？）

そして夜見は紅魔館の中である場所があつたことを思い出した。

夜見（もしかして、あそこか？　いや、あそこしかないな）

すると夜見は1階に行き、ある扉の前に着いた。そして夜見はその扉を開けると、その先には地下へ続く階段があつた。

夜見（フランドールさんが前にいた部屋、もうここしかないな）

そして夜見は地下に向かって、ひとつひとつ階段を下りていった。そして階段が終わると、目の前にある扉をゆっくりと開けた。するとその部屋には大量の箱が置かれていて、物置状態になっていた。

夜見（もう使っていないから、物置にしたのか　さてと咲希さんはどこかな？）

そして夜見は1つずつ箱をどかし始めると、奥の方に頭が見えた。おそらく咲希の頭

だろうと思ひ、夜見はどんどん箱をどかしていくと、急に奥にいた人物が立ち上がった。

咲希「待つて！無理だよ、降参！」

すると夜見は持つていた箱を床に置いて、ため息をついた。

夜見「やっぱり咲希さんだったか よし、これで全員だな」

すると咲希は夜見の目の前まで飛んできたが、咲希は少し怒った様子だった。

咲希「もー、少しは手加減してよ 大人気ない」

夜見「大人気ないって、ただが遊びに大人気ないも何も無いだろ？」

咲希「小さい子には手加減してって言ってるの！」

夜見「わかったよ、次からそうする」

咲希「じゃあ、私は先にフランお姉ちゃんの所に戻ってるからね」

そう言つて咲希は部屋を出ていき、夜見は部屋の箱を元の位置に戻してから部屋を出た。

そして夜見が廊下に出ると、そこには咲夜がいた。すると咲夜が夜見に話しかけてきた。

咲夜「黑夜様、お嬢様をお呼びです」

夜見「ん？そうか、ありがとう それで、レミアさんはどこにいるんだ？」

咲夜「お嬢様は今、自室にいます」

夜見「そうか、わかった　すぐに行く」

そして夜見はレミリアの部屋の前まで来ると、扉をノックする。すると中からレミリアの声があった。

レミリア「いいわよ、入って」

そして夜見は扉を開けると、レミリアは中央にある椅子に座っていた。そしてレミリアは夜見に話しかけてきた。

レミリア「咲希を見つけたそうね、ご苦労様」

夜見「ああ、さすがに小さい子の相手は疲れるな」

レミリア「そうね、咲希は元気だから時々顔を出してくれると、こっちも助かるわ」

夜見「ああ　つまり、たまに相手をしてやってくれと」

するとレミリアは笑顔で言ってきた。

レミリア「話が早いわね、そういうことよ」

夜見「はあ　まあ、仕事が無い時には顔を出すよ」

レミリア「そうしてもらうと、助かるわ」

そして夜見は、ふと気になったことをレミリアに聞いてみた。

夜見「そういえばフランドールさんは結局、レミリアさんのプリンを食べたのか？」

レミリア「いえ、咲夜が止めてくれたわ」

夜見「そうか、それは良かったな。さてと、そろそろ俺は帰るかな」

そして夜見は部屋を出ようとすると、レミリアがひき止めた。

レミリア「待ちなさい、実はまだ仕事をしてほしいのよ」

すると夜見は立ち止まって振り返った。

夜見「おいしい、俺は便利屋じゃないんだが？　なんだよ一体」

レミリア「そんなことを言っても、仕事の内容は聞くのね」

夜見「まあ、異変が終わった後に1週間も世話になったからな。それで、仕事は一体

なんだ？」

するとレミリアは指をパチンツと鳴らすと、咲夜が手提げ袋を持って現れた。そして

レミリアが仕事の内容を説明し始めた。

レミリア「まあ、ただ単純なことよ。その袋の中にメモとお金が入ってるから、人里

でお使いをしてほしいの」

夜見「…いや、お使いなら咲夜さんに任せればいいだろ。なんで俺が？」

レミリア「咲夜にはいつも働いてもらってるから、少しは休んでほしいのよ」

すると咲夜がレミリアに話しかけ始めた。

咲夜「あの、お嬢様。何も黒夜様にお使いをさせなくても、私が行くので大丈夫です

よ。」

レミリア「何を言ってるの、咲夜 私は貴女の負担を減らすために言ってるのよ？」  
咲夜「いえ、私は「あーもう、わかったよ お使い行ってくるよ」え、黒夜様？」  
すると夜見は半ば強引に咲夜から手提げ袋を取って、お使いに出掛け始めた。  
夜見（咲夜さんを休ませたい気持ちはわかるけど、さすがに心配しすぎだろ）  
そして夜見はレミリアの少し不器用な優しさに呆れながら、紅魔館を出て人里へ向  
かった。



## 第19話 人里にて

レミリアにお使いを頼まれた夜見は仮面を被り、人里でメモの内容を見ながら歩いていた。

夜見（えーと、買うものは野菜に肉、後は魚か　まずは野菜でも買うかな）  
そして夜見はまずは野菜を買うために、八百屋へ向かうことにした。

しばらく歩いていると夜見は、1件の八百屋を発見した。その八百屋では、男の店員が元気良く呼び掛けをしていた。そして夜見が八百屋に近づくと、店員が声をかけてきた。

店員「いらつしやい！その仮面のおんちゃん、何か買っていないか？」

夜見「・・・キャベツ1玉、人参2本、葱ねぎ1本」

店員「へい！毎度あり！ちよつと待つてな！」

すると店員は店の表にある野菜を取って、夜見に渡してきた。そして夜見は野菜を受け取って、手提げ袋の中に入れた。

店員「合計で500文になるぜ！おんちゃん！」

夜見（・・・元気いいな　えつと、500文か）

そして夜見は店員に500文を手渡した。すると店員は夜見に質問をしてきた。

店員「そういうやあんちゃん、ここらで見かけないな 一体どこに住んでるんだ？」

夜見「……別にどこだっていいだろ じゃあ」

店員「おう！また寄ってくれよ！」

そして夜見が八百屋を立ち去ると、店員は元気良く手を振った。

しばらく夜見が歩いていると、男の子達が道の中央で蹴鞠をしているのが見えた。そして道を歩いている人たちは、そこ男の子達から離れて歩いていった。

夜見（邪魔になつてるのに気付かないのか？親は何をしてるんだよ、まったく）

そして夜見は男の子達から離れて、そこを過ぎ去ろうとすると、後ろから声が聞こえた。

男の子「その黒い人！避けて！」

夜見（なんだよ、一体）

そして夜見は振り返ると、蹴鞠の玉が顔に目掛けて飛んできた。すると夜見はその玉をヘディングし、頭の上でリフティングをし始めた。

その光景を見て、男の子達は目を輝かせて夜見を見ていた。

夜見（サッカーボールと違って、ちよつと軽いな）

そして夜見は蹴鞠の玉を使って、色々なリフティングの技をし始めた。すると周りの

人達は立ち止まって、夜見のリフティングの技を見るようになっていた。

しかし夜見はその事にまったく気付かず、次々とリフティングの技を決めていった。

夜見（そーいや、サッカー部の人達に入部して欲しいと言われたっけ まあ、部活入るかは自由だったから入らなかつたけど）

そして夜見がバク宙して、蹴鞠の玉を両足に挟んで着地をしようと、周りから歓声が上がった。そこでようやく夜見は自分が注目を浴びていたことに気付いた。

夜見（しまった、技に集中しすぎた！）

そして夜見はフードを深く被ると、急いでその場を立ち去った。しばらく歩くと、周りはいつもの光景になっていた。

夜見（はあ、調子に乗りすぎだな ちゃんと周りを見ないとな）

すると夜見の後ろから、聞いたことのある声が聞こえた。

魔理沙「おーい、夜影！ さっきはすごかったな！」

それは、箒を手に持った魔理沙だった。すると魔理沙は夜見の横に並んで歩き、夜見に話しかけてきた。

魔理沙「なんだよさっきの、玉を足で何度も蹴り上げるのは 夜影って蹴鞠得意だったんだな」

夜見「あの場にいたのか、魔理沙さん」

魔理沙「あんな人だからが出来たら、誰だって気になるぜ それにしても、お前つて結構運動神経いいんだな」

すると、夜見は魔理沙にこう言った。

夜見「運動がちよつと出来るだけだ 結構いろんなことは経験したからな」

魔理沙「へえ、他にはどんなことができるんだ？ 剣道とかは出来るのか？」

すると夜見は、外の世界でやってきた習い事を1つずつ思い出し始めた。

夜見「サッカー、バスケ、野球、卓球、テニス、剣道、水泳、そろばん、ピアノとかならやったな」

すると魔理沙は、夜見の言った習い事をまったく理解できていない様子だった。

魔理沙「え、えつと、さつカー？ すいえい？ 聞いたこと無いぜ？」

夜見「ん？ 幻想郷には無いのか？」

夜見が魔理沙に問いかけると、魔理沙は頷いた。

魔理沙「剣道とそろばんしか聞き覚えが無いぜ なんなんだ、そのさつカーとかすい

えいつてのは？」

夜見「……まあ、なんだ いろいろやってたつて解釈してくれ」

夜見は説明すると長くなりそうなので、そう言うのと魔理沙はとりあえず納得した様子

だった。

魔理沙「そうか、わかったぜ そんなことより、夜影は一体人里に何しに来たんだ？  
見る限りだと、買い物か？」

すると夜見は、魔理沙の質問に普通に答えた。

夜見「紅魔館からお使いを頼まれたんだ それで買い物してる」

魔理沙「へえ、そんな依頼も受けたのか 夜影は何でもやるんだな」

すると夜見は魔理沙にこう返した。

夜見「依頼じゃなくて頼まれたんだ 気まぐれみたいなものだ」

魔理沙「つまり、タダ働きってことか？ 夜影はお人好しだな」

夜見「一応報酬は出すとは言われたが、あまり期待は出来ないな」

魔理沙「確かに、あの吸血鬼がお使い程度でお金を渡すかどうかも怪しいぜ」

夜見「まあ、今さら何を言っても仕方ない えっと、次は肉を買うか」

すると魔理沙は夜見の腕を掴んだ。そして魔理沙はこう言った。

魔理沙「肉が売ってるのはあっちだぜ 行くぞ、夜影！」

夜見「お、おい！」

そして魔理沙は夜見の腕を掴みながら、肉屋へと走っていった。しばらく走っている  
と、魔理沙は1件の肉屋の前で急に止まって、夜見から手を離れた。

魔理沙「よし 着いたぜ、夜影 ここは安いし質もいいんだぜ」

夜見「いや、案内するなら引つ張るな えっと、確か買うものは……」

そして夜見がメモを広げると、魔理沙はそのメモを夜見から奪い取った。

魔理沙「えっと、豚肉と牛肉だな 買ってくるぜ！」

すると魔理沙は肉屋に行つて、豚肉と牛肉を買った。そして魔理沙はその肉を夜見に

渡してきた。その肉を夜見が受けとると、魔理沙は夜見にこう言った。

魔理沙「ほら、ちゃんと買つてきてやつたぜ 感謝するんだな」

夜見「人からメモを奪つておいて何を言つてるんだ メモを返せ」

魔理沙「なんだよ、せっかく買つてきてやつたのに」

すると魔理沙は夜見にメモを返した。そして夜見メモをしまうと、お金を手提げ袋か

ら取り出して魔理沙に聞いた。

夜見「合計いくらだったんだ？」

魔理沙「え？ いいんだぜ お金なんか返さなくなつて」

すると魔理沙は何故か拒んだが、夜見は再び聞いた。

夜見「いいから、いくらだったんだ？」

魔理沙「確か、1 銭だったかな」

夜見「ほら」

すると夜見は、魔理沙に1銭を手渡した。そして魔理沙はその1銭をしまうと同時に  
呟いた。

魔理沙「ちえ、作戦が台無しだぜ いや、でも…」

夜見「なんか言ったか？」

魔理沙「い、いや、なんでもないぜ えっと、次は魚屋じゃなかったか？次いこうぜ」

夜見（… まあ、気にしなくていいか）

そして夜見は魔理沙についていくと、魔理沙が急にある店を指を指してこう言った。

魔理沙「夜影、あそのこの団子屋 結構美味しいんだぜ」

そして夜見は魔理沙が指を指した方向を見ると、そこには1件の団子屋があった。店の表には赤い布がかけられた椅子があり、まるで江戸時代を思わせるような雰囲気をしていた。

夜見「… 買わないぞ」

魔理沙「わかってるって お前は今、仕事なんだからな」

夜見「それで、魚屋はまだか？」

魔理沙「もうすぐだぜ ほら、あそこだ」

そして、魔理沙の指を指した方向に魚屋があった。そして夜見は魚屋に近づくと、男の店員が夜見に話しかけてきた。

店員「へい、らっしやい！あんちゃん、何を探してるんだい？」

夜見「…アユとイワナを5尾ずつ」

店員「へい、毎度あり！」

そして店員はアユとイワナの尾びれを紐で縛っている間に、夜見は魚を見ていた。すると、あることに気が付いた。

夜見（あれ？この魚って全部…）

すると店員が夜見に向けて魚を差し出してきた。

店員「ほらよ！合わせて700文だ」

夜見「…」

そして夜見は店員に700文を渡して、魚を受け取った。そして夜見は手元のお金を見てみた。

夜見（…なんで1銭余るんだよ）

そして夜見はメモの裏を見てみると、右下の方にあることが小さく書かれていた。

「お金を多く渡しておくから、お昼は余ったお金で何か食べなさい」

夜見（…そういうことか　ありがとう、レミリアさん）

そして夜見は魔理沙の方に戻ると、魔理沙は夜見に聞いてきた。

魔理沙「お使いはこれで終わりだな　紅魔館に帰るんだろ？」



すると夜見は首を横に振った。

夜見「いや、お昼に何か食べていく」

魔理沙「おお！じゃあ、さっきの団子屋で食べようぜ！」

夜見「ああ、そうだな」

そして夜見と魔理沙は先ほどの団子屋へ向かった。

そして夜見と魔理沙は団子屋に着いて、椅子に座ると店の奥から女性の店員が出てきた。そして店員は注文を聞いてきた。

店員「あ、いらっしやいませ 何本お召し上がりになりますか？」

魔理沙「こいつと私で5本ずつ頼むぜ」

店員「はい、かしこまりました」

そして店員が店の中に戻っていくと、魔理沙は夜見の肩に手を置いてこう言った。

魔理沙「じゃあ、支払いは頼んだぜ」

夜見「はあ？何を言ってるんだ 魔理沙さんも、ちゃんと払え」

すると魔理沙は夜見に、こう返してきた。

魔理沙「何を言ってるんだ、お使いの手伝いをしただろ？そのお礼としてだよ」

そして夜見は、魔理沙の目的に気付いた。

夜見（俺が何か食べるのを狙って話しかけてきたのか 団子屋の話もその為 はあ、

面倒だな)

そして夜見は諦めて魔理沙に言った。

夜見「わかったよ、払えばいいんだろ」

魔理沙「さっすが、話が早くて助かるぜ」

そして夜見は団子が来るまでの間に、魔理沙に魚屋で気になったことを聞いてみた。

夜見「そういうえば、魔理沙さん 1つ気になったんだが、海ってどこにあるんだ？」

魔理沙「海？ああ、幻想郷に海は無いぜ、なんでそんなことを聞くんだ？」

すると今度は魔理沙が質問してきた為、夜見は答えた。

夜見「……いや、魚屋に売っていた魚が全部、川の魚だったから気になったんだ。そ

うか、幻想郷には海は無いのか……」

魔理沙「別に幻想郷に海が無くても、なんの問題もないだろう？」

夜見「ああ、そうだな」

そんな話をしていると、店の中から店員が団子を皿に乗せて出てきた。そして店員は、夜見と魔理沙の間に団子の乗った皿を置いた。

すると魔理沙はさっそく団子を食べ始めた。

魔理沙「いや、やつぱりここの団子は美味しいぜ、ほら、夜影も食べろよ」

夜見「……いただきます」

そして夜見はフードは下げずに仮面を外して団子を食べ始めた。すると魔理沙の言った通り、団子の味はとても美味しいものだった。

夜見（おお、美味しいな お土産として、地霊殿に持って帰ろうかな）

すると魔理沙は、夜見の顔を覗き込んでニヤニヤしていた。そして夜見は魔理沙に聞いた。

夜見「…なんだよ」

魔理沙「いや、お前って、そんな顔をしていたんだな」

夜見「なっ!？」

この時、夜見は完全に油断していた為、魔理沙の前で仮面を外してしまったのだ。その事に気付いた夜見は素早く仮面を被ろうとしたが、魔理沙がその手を掴んだ。

夜見「くっ!?! 離せ!」

魔理沙「なんだよ、減るもんじやないし見せろって へえ、割と格好いい顔してんだな」

夜見（しまった! よりによつて魔理沙さんに見られた! 広められたらまずい!）

すると夜見は能力を使って、血で仮面を作つて顔に着けた。すると魔理沙は夜見の手をあっさりと離した。

魔理沙「ちえ、なんだよ せっかくお前の顔を見れたのに、もう終わりかよ」

夜見「はあ はあ 魔理沙さん、絶対に俺の顔を広めるなよ」  
すると魔理沙は、へらへらしながら言った。

魔理沙「え、別にいいだろ？何か困るのか？」

そんな態度の魔理沙に、夜見は真剣な声で言った。

夜見「困るから言ってるんだ！いいか、絶対に広めるなよ 広めたなら、魔理沙さんの家を燃やしに行くぞ？」

実際、夜見は少し冗談を言ったのだが、魔理沙は夜見が本気で言ってると思い、少し怯えて言った。

魔理沙「お、おいおい、物騒なこと言うなよ わかったから」

夜見「…… 本当にわかったのか？」

魔理沙「わかったって！狙ったのは悪かったぜ」

夜見「…… まあ 俺の不注意もあつたから、おあいこつてことにするか」

魔理沙「そうしてもらうと助かるぜ」

そう言つてると再び店員が現れて、今度は水が入った竹のコップを持ってきた。すると店員は魔理沙に話しかけた。

店員「とても、仲がよろしいんですね 彼氏さんですか？」

すると魔理沙は首を横に振った。

魔理沙「いや、違う。ただの友達だぜ」

店員「あ、そうだったんですか。失礼いたしました」

魔理沙「全然大丈夫だぜ、気にすることなんか無いぜ」

店員「あ、ありがとうございます。では、ごゆっくり」

そして店員が店に入ると、夜見は血の仮面を分解して団子を食べ始めた。すると夜見は魔理沙にあることを言った。

夜見「なあ、魔理沙さん。いつから俺と魔理沙さんは、友達なんて関係になったんだよ」

魔理沙「え？いつからって、出会った時からだぜ？」

夜見「いや、俺は知り合いのつもりでいたんだが」

すると魔理沙はショックを受けた様子で、夜見に言った。

魔理沙「ひ、ひどいぜ！弾幕ごっこことかしたし、異変の時は協力したじゃないか！そこまでしたならもう友達だろ!!」

夜見「・・・そんなもんか？」

魔理沙「そんなもんだぜ！」

夜見「・・・まあ、そういうことにしとく」

すると、魔理沙が顔を近づけて言ってきた。

魔理沙「本当か!? これからは友達だぜ!」

夜見「わかった、わかったから団子を口に入れたまま話すな」

そして夜見は魔理沙を手で押して、顔を遠ざけた。すると魔理沙は、夜見に向かってあることを聞いた。

魔理沙「それにしても、夜影 お前はなんで顔とか姿を見せないようにしたりしてるんだ? 何か事情でもあるのか?」

すると夜見は黙ったまま、団子を食べ続けていた。そして魔理沙は夜見に声をかけた。

魔理沙「おーい、聞いてるか? 夜影?」

夜見「… ああ、聞いている」

魔理沙「じゃあ、なんで私の質問に答えないんだ?」

夜見「…」

魔理沙「なんだよ? 何か話せない訳でもあるのか?」

しばらく夜見は黙っていたが、夜見はゆっくりと話し始めた。

夜見「訳はあることにはあるが、残念だがその訳は話せない」

魔理沙「ふーん、そうか まあ、知られたくないことは誰にでもあるもんだし、仕方無いな」

そして魔理沙は団子をすべて食べ終わると、水を一気に飲み干した。夜見も団子をすべて食べ終え、水を飲み干して仮面を被ると、店から店員が出てきた。

店員「あ、食べ終わつたんですか。では、代金は500文になります」  
すると夜見は、店員にあることを聞いた。

夜見「ああ、すまないが、団子の持ち帰りは出来るか？」

店員「ええ、出来ますよ。何本お持ち帰りになりますか？」

どうやら、団子は持ち帰りが出来るようだった。そして夜見は地霊殿のみんなの為に2本ずつ買うことにした。

夜見「8本頼む」

店員「それでしたら、400文足されまして、代金は合計900文になります」

夜見「そうか。じゃあ、1銭から頼む」

そして夜見は1銭を店員に渡すと、店員は皿の上に竹のコップを乗せて、店の中へ入っていった。しばらくすると、店員が笹の葉の包みを持って戻ってきた。

店員「あ、こちらがお持ち帰りの団子になります。あと、こちらがお釣りの100文です」

すると店員は笹の葉の包みと100文を、夜見に手渡した。そして夜見は笹の葉の包みと100文を手提げ袋に入れた。

そして夜見と魔理沙が立ち去ると、店員は「ありがとうございます」と言っていた。そして夜見は紅魔館へ帰るために歩いていると、魔理沙が何故か付いてきた。

夜見「……なんで付いてくるんだ？」

魔理沙「ん？いや、夜影と一緒にいたら面白いことがあるかな〜と思ったただけだぜ？」

夜見「あいにく、そんなことに巻き込まれる予定は無い」

夜見と魔理沙が会話をしていると、少し前の方の建物から小さい子供達が建物から出てきた。すると建物から女性が出てきて、小さな子供達を見送っていた。

その女性は、腰まで届く少し青みがかつた銀髪のロングヘヤーで、頭には頂に赤いリボンが付いた青い帽子を乗せていた。服装は上下が繋がっている服を着ており、下はスカートになっていた。服の胸元は開いており、赤いリボンを着けていた。

そしてその女性は魔理沙に気付くと、声をかけた。

？「やあ、魔理沙じゃないか どうして人里に？」

魔理沙「よお、慧音先生 いやあ、暇だからただ寄っただけだぜ」  
するとその女性は夜見に気付く、魔理沙に聞いた。

？「ん？そいつは一体誰だ？」

魔理沙「ああ、私の友達だ 自己紹介しておくか？」

魔理沙がそう言うと、夜見は女性の前に立って自己紹介をした。



夜見「……黒月夜影だ」

？「私の名前は上白沢かみしらさわ慧音けいねという よろしくな、黒月」

すると魔理沙は夜見に、慧音について説明をしてくれた。

魔理沙「慧音先生は人里の寺子屋で、教師をしているんだ ああ、ちなみに慧音先生は人間じゃないぜ」

慧音「お、おい、魔理沙 黒月が怖がるじゃないか」

すると、夜見は慧音に向かってこう言った。

夜見「……別に、人間じゃなくても慧音さんは慧音さんだ 別に気にしないが？」

慧音「そ、そうか？ならいいんだが」

すると慧音は、夜見にある質問をした。

慧音「そうだ、黒月 黒月はそろばんは使えるかな？」

夜見「ん？まあ、習っていたから使えるが？」

そして慧音は、夜見にあるお願いをした。

慧音「実は、私の教え子にそろばんをうまく使えない子がいるんだ もしよかったら、その子にそろばんの使い方を教えてあげてくれないか？」

すると何故か、魔理沙が反応した。

魔理沙「そろばんか、懐かしいな 私も慧音先生に教えてもらったな 夜影、せつ

かくだし教えてあげようぜ？」

夜見「……残念だが、俺は教え方とかは知らないぞ？」

そして魔理沙はこう言い出した。

魔理沙「大丈夫だぜ 私も手伝ってやるからよ」

夜見「……そうか なら、いいが……」

そして夜見は慧音のお願いを承諾することにした。

慧音「そうか！じゃあ、よろしく頼むぞ その子は今、教室にいるから案内しよう」

そして慧音は寺子屋に入ってしまったので、夜見と魔理沙も寺子屋の中へと入ってしまった。寺子屋の中は木造で出来ており、襖が何枚も付けられていた。

そして慧音にしばらく着いていくと、慧音は襖を開けてある部屋に入ってしまった。おそらく、その部屋が教室なのだろう。そして夜見と魔理沙もその教室へ入った。

その教室は3人分ほどの長い机が横に3つ、縦に4つ並べてあった。そして机の高さは低く、座布団が敷かれていた。そして教室の前の方に、教壇となる机も置かれていた。そして1番前の真ん中の机の真ん中に、1人の女の子が座っていた。おそらく、その子がそろばんがうまく使えない子なのだろう。

すると慧音は、前の方にある机の所に座った。そして魔理沙は女の子の左側に座ったので夜見は、女の子の右側に座って、怖がらせないために仮面を外した。

すると魔理沙は女の子に話しかけた。

魔理沙「やあ、慧音先生のお友達なんだ よろしくな」

女の子「え、う、うん よろしく、お姉さん」

魔理沙「ああ、あとその男の人は少し怖い雰囲気だけど、優しい奴だから心配しなくていいぞ」

夜見「… よろしく」

女の子「よ、よろしく 格好いいね、お兄さん」

夜見「どうも」

すると慧音は女の子に言った。

慧音「じゃあ、私が数字を言っつていくからその数を全部足していくんだ わかったな？」

女の子「はい、わかりました」

慧音「じゃあ、ゆっくりいくぞ」

そして慧音はゆっくり数字を言い始めた。すると魔理沙は、丁寧にそろばんの使い方  
を女の子に説明し始めた。そして夜見は、そろばんの珠を動かすのを手伝ってあげて  
いた。

すると慧音は数字を言うのをやめて、女の子に質問をした。

慧音「さて、答えはいくつになったかな？」

女の子「えっと、58です」

慧音「そう、正解だ　じゃあ少し早くするぞ」

そして慧音は次々と数字を言っていたが、女の子はもたもたとそろばんの珠を動かしていた。そして女の子が珠を動かし終わる前に、慧音が数字を言い終わってしまった。

慧音「さて、答えはいくつになった？」

女の子「え、えくと、2の後は、えっと…」

女の子が戸惑っていると、夜見が口を開いた。

夜見「2、5、8、4、1、7だ」

女の子「え？あ、ありがとう」

そして女の子がそろばんの珠を動かしていると、魔理沙が夜見に話しかけてきた。

魔理沙「夜影、よく覚えてたな　数字の順番なんて」

夜見「別に、ただ覚えてただけだ」

魔理沙「そ、そうか？」

そして女の子がそろばんの珠を動かし終わると、答えを言った。

女の子「68です」

慧音「正解だ　じゃあ次は、魔理沙と黒月の力を借りないでやってみようか」

女の子「はい」

そして慧音は先ほどと同じ位のスピードで数字を言っていたが、女の子はそろばんの珠をしつかりと動かさせていた。

そしてその様子を見ていた魔理沙が、女の子を褒め始めた。

魔理沙「おお、上手じゃないか」

女の子「えへへ、ありがとう」

慧音「さてと、答えはいくつになったかな？」

女の子「えっと、92です」

慧音「おお、正解だ 良くできたな ありがとうな、魔理沙、黒月、おかげで助かったよ」

すると、女の子も魔理沙と夜見にお礼を言った。

女の子「ありがとう、お姉さん、お兄さん」

すると魔理沙は、女の子に言った。

魔理沙「またなにか困ったことがあったら、私かこの黒い奴に言うんだぜ？」

女の子「うん！わかった」

夜見（…なんで俺を巻き込むんだよ）

すると女の子は立ち上がって襖を開けて廊下に出ると、別れの挨拶をした。

女の子「さようなら、慧音先生、お姉さん、お兄さん」

慧音「ああ、さようなら」

魔理沙「ああ、またな」

そして女の子が襖を閉じると、魔理沙は両腕を上に入れて背伸びをした。

魔理沙「ふー、疲れたぜ」

慧音「ああ、お疲れ、2人とも　そうだ、魔理沙　よかつたら久々にそろばんを使っ

てみるか？」

すると魔理沙は、何故か慧音の誘いに乗った。

魔理沙「お、慧音先生の授業か？　だつたら久々に受けてやるぜ！」

慧音「よし、じゃあいくぞ」

すると慧音は3桁以上の数字を中心に言い始めた。すると魔理沙は忙しそうに、そろばんの珠を動かしていた。その間、夜見は座ったまま慧音の言っていた数字をずっと聞いていた。

そして慧音は1分ほど数字を言った後に、魔理沙に答えを聞いてきた。

慧音「さあ、答えはいくつだ？　魔理沙」

魔理沙「いや、わからないぜ！　早すぎだろ、慧音先生！」

すると慧音は笑いながらこう言った。

慧音「はは、そうか まあ、言つてた私も答えはわからないんだがな」

魔理沙「おい！それじゃ意味が無いぜ！」

すると夜見は、そつと口を開いた。

夜見「答えは584, 536, 178, 965だ」

すると魔理沙と慧音は夜見の方を見て、ぽかんとしていた。そして夜見はその様子を見て、こう言つた。

夜見「ん、なんだ？ 答えを言つただけだぞ」

魔理沙「…え、夜影 お前ずつと数えてたのか？」

夜見「ああ、そうだが？」

慧音「い、いや、冗談だろう？」

すると夜見はため息をついて、こう言つた。

夜見「…はあ じゃあ、最初から数字言うか？」

すると魔理沙と慧音は驚いた様子だった。そして魔理沙は夜見に問いかけた。

魔理沙「嘘だろ!? 慧音先生が言つた数字まで覚えてるのか!？」

夜見「ああ、まあ」

慧音「な、なんで覚えられるんだ？」

すると夜見はその質問に対して、こう返した。

夜見「ただ、記憶力が少し良いだけだ」

魔理沙「い、いや、化けもんだろ 夜影」

すると夜見は、何故か怒った様子で魔理沙を睨み付けた。

夜見「あ？」

魔理沙「お、おい、そんな怖い顔で睨むなよ 怖いぜ」

すると夜見はとっさに仮面を被って、魔理沙に謝った。

夜見「す、すまない 睨んでいたか？」

魔理沙「い、いや、そんな気にしてないぜ」

夜見「そ、そうか ならいいんだが……」

夜見（……くそ、昔の癖が こっちの世界で少し表情が緩んできたか？あまり顔は出

さないようにしないとな）

すると慧音は、夜見と魔理沙にこう言った。

慧音「ま、まあ、とりあえず、とても助かった、2人とも もう帰っていいぞ」

慧音がそう言うと、魔理沙と夜見は立ち上がった。

魔理沙「そうだな、そろそろ帰るか まだ魔法の研究が残ってたぜ」

夜見「俺もそろそろ帰らないとな 邪魔したな、慧音さん」

慧音「いいんだ もし良かったら、また寄ってきてくれ」



魔理沙「そうするぜ、じゃあな 慧音先生」

そして夜見と魔理沙は寺子屋を出た。すると魔理沙は外に出ると、箒にまたがってどこかへ飛んでいってしまった。そして夜見はお使いが終わっているの、紅魔館へ戻ることにした。

しばらくして、夜見は紅魔館の前に着いた。すると門にいた、美鈴が夜见到声をかけた。

美鈴「あ、お帰りなさい、黒夜さん 少し遅かったですね、何かトラブルでもありませんか？」

夜見「いや、そんなことはない 少し人助けみたいなことをしたただけだ」

美鈴「そうですか、黒夜さんは優しいんですね あ、どうぞ入ってください」

そう言つて美鈴は門を開けてくれたので、夜見は遠慮なく門を通つた。

夜見「ありがとう、美鈴さん」

美鈴「いえいえ、お嬢様が待っているの、早く行ってあげてください」

そして夜見は紅魔館の中へと入っていった。そして夜見はレミリアの部屋の前に着くと、扉を軽くノックした。

すると中から返事が帰ってきた。

レミリア「いいわよ」

そして夜見は扉を開けると、レミリアは中央の椅子に座っていた。すると、レミリアは指をパチンツと鳴らして咲夜を呼んだ。その瞬間、夜見の持っていた手提げ袋が無くなり、笹の草で包まれた団子だけが足元に残っていた。

そして夜見はそれを拾うと、レミリアは美鈴と同じ質問をしてきた。

レミリア「遅かったわね、一体どこで道草をくつたのかしら？」

夜見「ああ、少し人助けをな　後は何もしてない」

レミリア「あら、そう？ならいいのだけど　ところで黒夜はもう帰るのかしら？」

夜見「まあ、そうだな　そろそろ帰るとするかな」

レミリア「それなら、ほら　受け取りなさい」

するとレミリアは立ち上がって、夜見に袋を差し出してきた。その袋を夜見は受け取って中身を見てみると、袋の中には2銭と500文入っていた。

すると夜見はレミリアに問いかけた。

夜見「いいのか、こんなに貰って？俺は遊び相手とお使いをしたただけだが？」

レミリア「いいのよ　咲希とフランの遊び相手は少ないから、助かったのよ」

夜見「そうか？まあ、依頼が無い日には紅魔館に顔を出す　それじゃあ」

レミリア「ええ、よろしく頼むわ、黒夜」

そして夜見は紅魔館から出た。そして門を通ると、美鈴に声をかけられた。

美鈴「あ、もうお帰りになるんですか？」

夜見「ああ、そうだ また来るよ」

美鈴「そうですか、いつでも来てください」

そして夜見は地霊殿へと帰っていった。

## 第20話 地霊殿に帰る筈なのに

夜見は地霊殿に戻る為に、旧地獄街道を歩いていった。

筈だったのだが…

今、夜見は旧地獄街道にある1件の建物に空いた、大きな壁の穴に木の板を釘で打ちつけて、修理をしていた。

夜見（なんで俺がこんなことをしなきゃいけないんだよ）

すると、夜見以外にその建物を修理している人物が話しかけてきた。

勇儀「あつはつは いやあ、すまないね 手伝ってくれて」

夜見「勇儀さんは少し、力の強さを考えろ」

勇儀「いやいや、やっぱり鬼と言えば、力の強さだろう？」

夜見「いや、その力の強さのせいで今、こんなことになってるんだろ はあ、早く帰れた筈なのに」

勇儀「まあ、たまにはこんなこともいいだろ？」

夜見「いや、出来れば無しにしてくれ」

勇儀「ははは … やっぱり？」

こんなことになった理由は、数時間前に遡る。

夜見は数時間前、旧地獄街道を歩いていると、ある一人の人物に話しかけられた。

勇儀「よお、夜見じゃないか！ どうしたんだ？ こんな時間にいるだなんて珍しいじゃないか」

そして話しかけられた夜見は、後ろに振り返った。

夜見「なんだ、勇儀さんか どうしたんだ？ 俺は今、地霊殿に帰るところなんだが」とすると勇儀は、夜見にこんなことを言った。

勇儀「じゃあ、つまり時間があるってことだな？ ちょっと付き合ってくれよ 少しでもいいから、な？」

夜見「… まあ、少しだけならな」

勇儀「よし！ じゃあ、ちよつと来てくれ！」

そして夜見は勇儀に着いていくと、ある一件の居酒屋に着いた。そして勇儀は、その居酒屋に入っていくので夜見も続けて入った。その店内には、倒れていたり、上機嫌な鬼がたくさんいた。どうやら、みんな酔っているようだった。

そして勇儀は椅子に座ったので、夜見は勇儀の正面に座った。すると勇儀は机の上に

あつた大きな赤い盃を持ち、机に置いてあつた酒を注いだ。

夜見「付き合えて、酒にか あいにく俺は飲めないぞ？」

すると勇儀は、少し残念そうに言った。

勇儀「なんだ？夜見はまだ16歳じゃないのか？」

そして夜見は、不思議に思いながら勇儀に確認した。

夜見「いや、16歳だけど酒は飲めないだろ？」

勇儀「え？」

夜見「・・・は？」

そして夜見は、あることを思い出した。ここは幻想郷であり、自分のいた世界とは違うことを。

そして夜見は勇儀にあることを確認した。

夜見「勇儀さん、もしかして酒って16歳から飲めるのか？」

勇儀「何を当たり前のことを言ってるんだ？」

夜見「・・・ああ、なるほど だから話が噛み合わない訳だ」

勇儀「ん？どういうことだい？」

勇儀が夜見に問いかけると、夜見は説明を始めた。

夜見「ああ、勇儀さんには説明してなかったな 俺は外の世界の人間なんだ」

夜見は、自分が外の世界の人間であることを勇儀に言ったが、勇儀は特に驚くような様子もなかった。

勇儀「へえ、そうだったのかい それで？酒が飲めない話と、なんの関係があるんだい？」

夜見「実は、外の世界では20歳にならないと酒は飲んじやいけないんだ」

すると勇儀は酒を一口飲んで言った。

勇儀「へえ、外の世界は結構面倒なんだね」

夜見「いや、特にそんなことは思ったことはないな」

勇儀「ふうん、そういうもんかい まあ、でも夜見がいるのは幻想郷だし、気にせず  
に飲みな」

勇儀はそう言って夜見の方に酒瓶を渡してきたが、夜見は断った。

夜見「いや、確かにそうだが、酒に関しては外の世界の規制に従う そもそも、昼間から酒を飲むのもな」

すると勇儀は少し残念そうな様子だった。

勇儀「なんだ、飲んでくれないのかい じゃあ、私の話し相手になってくれないか？」

夜見「まあ、その位なら」

勇儀「ならよかった 実はなあ、夜見……」

そして夜見は、勇儀の最近の話や、過去の仲間の鬼の話、愚痴などをいやになりそうなほど聞かされた。しかし夜見は嫌な顔は一つもせずに、全て聞いていた。

そして勇儀が話し始めて一時間ほど話した頃になると、勇儀の顔は赤みを帯びて、かなり酔っている様子だった。

すると夜見は少し勇儀を心配し始めた。

夜見「なあ、勇儀さん 流石に飲み過ぎじゃないか？ 一体どれだけ飲む気にいるんだよ」

勇儀「何を言ってるんだ？ まだ全然飲んでないぞ！」

勇儀はそう言っていたが、勇儀の座っている椅子の周りを見ると、空の酒瓶が山積みになって転がっていた。

すると夜見はコップに水を入れて、勇儀に差し出した。

夜見「ほら、一旦水でも飲めって 二日酔いするぞ？」

勇儀「なんだい？ いつもはこの倍以上飲んでるんだぞ？」

夜見「いや、酒を飲むのは構わないけど、飲み過ぎると体に悪いから」

勇儀「いや、私はまだまだ飲むぞ！」

すると夜見は諦めて、ため息をついた。

夜見「はあ、勝手にしてくれ 俺はどうなっても知らないからな？」



そして夜見が水を飲んでいると、勇儀はあることを言い出した。

勇儀「さて、愚痴も言つてスッキリしたし、最近の事も言い尽くしたしなあ そうだ、さとり達がここに来た時の話でも聞くか？」

夜見「さとりさん達の話か」

確かに言われてみれば夜見は少し地霊殿のみんなの過去は興味はあつたものの、止めておくことにした。

夜見「…いや、止めておく 別に、さとりさん達に直接聞けば聞けるだろうしな」

勇儀「そうかい？意外にさとりは、過去の話はしたげらなそうだけどねえ」

夜見「なら、なおさらだ 知られたくないような過去かもしれないからな」

そして勇儀は盃に酒を注ぎながら、夜見に聞いてきた。

勇儀「それにしても、どうだい？地霊殿のみんなは？」

夜見「ああ、それなら心配ない みんな元気だ」

勇儀「いやいや、違うよ そうじゃない」

すると勇儀は立ち上がって、肩を組んできた。そして勇儀は、夜見だけに聞こえるようにささやき声で聞いてきた。

勇儀「地霊殿の中では、誰が一番タイプかって聞いているんだよ」

夜見「…はあ？」

勇儀「いやいや、結構な間、一緒に1つ屋根の下で暮らしてたんだろ？まさか、なんとも思わないのかい？」

夜見「タイプって言われてもなあ 特に、これと言ったのは無いし……」

勇儀「いやあ 夜見、よく考えてみな 男1人に対して、女が4人だぞ？」

夜見「……別に、普通だが？」

勇儀「なんだい、普通って!?!じゃあ、今のところ1番好きなのは誰だ？1番好きなのは」

夜見「まあ、それなら「ちなみに、みんなは無しだぞ」……ええ」

夜見はみんなと言うつもりだったが、勇儀がみんなは無しと言ったため、夜見は地霊殿で1番好きな人を選ばなければいけない状況になってしまった。そして夜見は、とりあえず腕を早く離してもらいたかったので、1人の名前を言った。

夜見「こいしさん、かな？」

勇儀「へえ、こいしかあ ちなみに、なんでこいしなんだ？」

そして夜見は、とりあえず思い付いたことを口にした。

夜見「ん〜、まあ、普通に可愛い女の子だと思うし、思ったより、しつかり者だからな」

勇儀「へえ、そうかいそうかい 夜見はこいしが好きなのかあ、なるほどなあ〜」

そう言つて勇儀は何故か、夜見を見てニヤニヤしてきた。どうやら勇儀は酔つぱらうと、かなり面倒になるようだった。

少し夜見はうんざりしていると、勇儀は夜見にあることを聞いてきた。

勇儀「そういうえば、夜見つて確か地上で仕事をしてたんだよな？」

夜見「ああ、そうだ　勇儀さんの言う通り、人里に行つたら、思いのほか仕事があつた」

勇儀「へえ、それは良かったね　ところで、夜見は人里のどこで働いているんだ？」

夜見「ああ、実は人里で働いているんじゃないかと、俺は依頼を受けてるんだ」

夜見がそう言うと、勇儀は聞いてきた。

勇儀「依頼？例えば、どんな仕事があるんだい？」

そう聞かれた夜見は、ポケットから今朝に取つた依頼状を勇儀に見せた。そして勇儀は、その依頼状を手にとって依頼の内容を見ていた。

勇儀「ふくん、行方不明者ねえ？そんなのどうやって探せばいいんだい」

夜見「確かに、そうなんだよな　それに、報酬に関しても、どう受けとればいいのかわからないしな」

そして勇儀は依頼状を夜見に返して、再び酒を飲み始めた。

勇儀「言われればそうだね　まあ、もし地底に行方不明者が出た場合には、真つ先に

夜見に教えてあげるよ」

夜見「そうか、それはありがたいな ついでに、この腕も外してくれるとありがたいんだが？」

勇儀「ええ？別にいいじゃないか夜見、肩を組むぐらいさあ もしかして、照れてるのかい？」

そう言つて勇儀は、夜見から腕を全然外す気はなかった。そして夜見はため息をつくと、勇儀に向かつてこう言つた。

夜見「まあ、酔つてるからだろうが、少し馴れ馴れし過ぎる だから離れてくれ」  
そう夜見が言つと、勇儀は少し態度が変わつた。

勇儀「へえ？私が肩を組んでくること、そんなに嫌かい？」

どうやら、勇儀の気に触れてしまったようだった。すると勇儀は夜見を軽く突き飛ばして、夜見に向かつて言つた。

勇儀「少し暴れたい気分だ 付き合ってくれよ、夜見」

勇儀の言葉と様子から考えると、勇儀は完全に怒つて見えるように見えた。そして夜見は立ち上がると、勇儀に手招きをして、こう言つた。

夜見「店内じゃ迷惑になる 外でやろう」

夜見がそう言つと、勇儀は笑みを浮かべた。

勇儀「そうだね、店内だと暴れにくいからね」

夜見「ほら、さっさ出るぞ」

そして夜見と勇儀は、居酒屋を出た。しばらく道を進んで大通りに出ると、夜見はそこで立ち止まった。

夜見「こちら辺でいいだろう さてと、もういいか？」

勇儀「そうだね、こっちは暴れたくてもうずうずしてるんだよ」

すると夜見は、勇儀が居酒屋ですつと持っていた盃を指さして勇儀に言った。

夜見「それ、邪魔だろ？早くどっかに置いてこいよ」

そう言った夜見に対して、勇儀はこう言った。

勇儀「あんたじゃ私に敵わないだろ？だからハンデとして、私はこれを持ったまま戦うよ」

すると夜見は身構えて勇儀に言った。

夜見「ハンデを付けたことを後悔するなよ？」

そして勇儀も身構え始めた。

勇儀「むしろハンデが足りないくらいだよ さあ、行くよ！」

すると勇儀は夜見に向かって跳んで、跳び蹴りを放ってきた。そして夜見はそれに合わせて足に血を纏わせ、ローリングソバットを放った。

しかし、鬼の力に敵うはずもなく、足に纏わせた血は砕け、夜見は後ろに飛ばされてしまった。

バサッ

だが夜見は血の翼を作り出し、空中で体勢を直すと、夜見はゆつくりと地上に降りた。

夜見「ほら、どうした？ 暴れたいんだろ？」

勇儀「これは、存分に暴れられそうだね！」

夜見は軽く挑発すると、勇儀は真つ直ぐに夜見に突っ込んできた。そして勇儀が右スレートを放つが、夜見はそれを左手で軽くいなした。続いて勇儀は顎を蹴り上げようとするものの、夜見はバク転して避けた。しかし、勇儀の蹴り上げは夜見の顎を軽く掠めた。

夜見（やっぱり、美鈴さんとは違ってスピードも力もレベルが違う このままじゃ駄目だな）

勇儀「どうしたんだい？ 来ないなら、こっちから行くよ！」

すると勇儀は拳を上突き上げた。夜見は不思議に思っていると、勇儀は拳を振り下ろして地面を砕いた。そして地面のヒビは、10 m以上も伸びていった。

夜見「なっ!? 危ねえ！」

すると、バランスを崩した夜見は翼を羽ばたかせ宙へ飛ぶと、勇儀は地面から5 m程

の岩を取り出した。そして勇儀はその岩を容赦なく、夜見に向かって投げつけた。

すると、夜見はその場で刀を掴み、居合いのフォームをとった。そして次の瞬間、岩は左右に綺麗に割れ、夜見に当たること無く遠くの壁に激突して砕けた。夜見は抜刀の一閃で、岩を斬ったのである。

勇儀「へえ、なかなかやるねえ それくらいやつてもらわないと、こつちも暴れがないからね！」

すると夜見は、刀の刃先を勇儀に向けた。

夜見「ほら、岩はまだまだあるだろ？ 投げてこいよ」

勇儀「宙に飛んでるからって、遠距離攻撃だけが打開策って訳じゃないんだよ！」

そう言つて勇儀は少し膝を曲げると、ドンツと音がして夜見に突っ込んできた。そして勇儀は夜見の頭を掴んで、そのまま地面に向かって叩きつけた。

ドオオオオン

そして勇儀は続けて夜見の顔面に拳を放つが、放たれた拳を夜見は右にいなした。すると勇儀の拳は夜見の仮面を少し掠り、地面に突き刺さった。

地面に突き刺さった勇儀の拳を見て夜見は、完全に殺すレベルで勇儀は戦ってきていることを理解した。そして夜見は左に転がり、勇儀と距離を取って立ち上がった。

勇儀「あくあ、惜しかったなあ もう少しで私の勝ちだったのに」

夜見「勇儀さん、完全に俺を殺しにかかってるな？」

勇儀「当たり前だよ 私ほどんな戦いも、手は抜かないんだ」

夜見「それは鬼としてのプライドか？それとも、それが自分の生き方か？」

勇儀「さあね、そう言う夜見はどうなんだい？なんで地上じゃなく、地底に住むことにしたんだい？」

すると夜見はゆつくりと刀を閉まって、こう言った。

夜見「俺は、目的の為に地底に住んでる」

勇儀「目的？一体、どんな目的なんだい？」

夜見「あいにく、それを答えることは出来ないな」

勇儀「へえ じゃあ、勝負に勝ったら、答えてもらおうかな」

夜見「別に構わないが、どう勝つつもりだ？」

勇儀「こうやってだよ！」

そして勇儀は、夜見に向かって走り出した筈だったが、勇儀の片足が動かなかつた。そして勇儀は足元を見ると、地面から赤い糸が飛び出して勇儀の足に絡まっていた。

そう、夜見は勇儀と話している最中に能力を使っていたのだ。もちろん、血は一番硬い構造で作られている為、道具を使っても切れない。

しかし、もちろん例外というものもある。



勇儀「なんだい？こんなので私の動きが止められると思ってるのかい？」

すると勇儀は無理矢理足を上げて、地面ごと足を上げた。そして勇儀は勢いよく足を下ろすと、足に付いていた地面は粉々に碎け散り、砂ぼこりが舞った。

夜見が警戒していると、勇儀は砂ぼこりの中からゆっくりと歩いてきた。

勇儀「どうだい？これが鬼の力だ 私の動きを止めるだなんて夜見にはとうてい無理な話だよ」

夜見「ああ、そうらしいな」

勇儀「つまり、あんたに勝ち目なんて元からないんだよ！」

すると勇儀は夜見に突っ込み、右ストレートを放った。そして夜見はそれを半身を反らして避けたが、勇儀は流れるように回し蹴りを放つ。そして勇儀の回し蹴りは夜見の左の脇腹に見事に入り、脇腹から嫌な音がした。

バキッ

夜見「ぐっ!?がはっ!？」

そして夜見は右に10m以上蹴り飛ばされ、うつ伏せに倒れた。さらに、勇儀に蹴りを入れられた時にあばら骨は折れ、内臓にも衝撃が響いた。そしてせいで夜見は、その場で口から血を吐いていた。

夜見「ごほっごほっ げほっ」

勇儀「やつぱり、人間の体は脆いねえ。あばらの2、3本は折れたね」

そして勇儀は倒れている夜見に近付いてしやがみ込み、勇儀は盃に残っていた酒を飲み干した。

勇儀「あつはつは、相手にならないね。でも、人間にしては結構粘った方なんじゃないかな？」

しかし夜見は手に力を込めて、なんとか立ち上がろうとするものの…

ダンッ

夜見「がっ!？」

勇儀「ほらほら どうしたんだい、夜見?早く立ち上がってくれないと こっちはまだ暴れ足りないんだよ」

勇儀は夜見の背中を踏んで、立ち上がれないようにしていた。すると夜見はその場で、ある物を取り出した。そして夜見はこう言った。

夜見「爆符 宙へ舞え」

すると夜見は地面に手を付けて、ゼロ距離で弾幕を放った。そして夜見の弾幕は爆発し、夜見は勇儀もろとも巻き込んだ。

そして爆発に巻き込まれた勇儀は後ろに20 m程飛ばされ、夜見は宙へ舞い上がった。そして夜見は血の翼を羽ばたかせて、地面に降りた。

勇儀「うう まったく、なんだい？」

そして勇儀は服は少しボロボロになっていているものの、まるで攻撃が効いていないかのようになり上がった。

勇儀「いやあ、驚いた まさか自分ごと爆発に巻き込まれたなんて」

夜見「はあ、はあ ぐっ！痛え」

そして夜見は急に左の脇腹を押さえ始めた。するとその様子を見た勇儀がへらへらと笑いだした。

勇儀「あつはつは なんだい、その様は？勝負を受けといて全然私に攻撃を当ててないじゃないか このままだと、一方的にやられるだけだよ？」

夜見「ちつ、馬鹿にしゃがって 女性相手に、攻撃なんか当てたら気分が悪くなるつてのに、まだ酔いは覚めねえのかよ」

そんなことを夜見は考えていると、後ろから声をかけられた。

パルスィ「ものすごい物音がすると思ったら、何をしているのよ、黑夜」

それはパルスィだった。そして夜見は振り向くと、パルスィは周りの状況を見ていて、何があつたかある程度察したようだった。

パルスィ「ああ、なるほど 勇儀が酔って、暴れたのね 勇儀は酔うと、いつも暴れるからよく迷惑になるのよね 周りの建物とか普通に壊しちゃうし」

どうやらパルスイは話した内容から、勇儀が酔うとどうなるかを知っているらしい。そして夜見はパルスイにあることを聞いた。

夜見「なあ、パルスイさん　勇儀さんはいつ頃に酔いは覚めるんだ？」

パルスイ「……暴れてスツキリしたって言って酔い潰れた後に寝て、起きた時には酔いは覚めてるわよ」

夜見「……いつも酔い潰れるまで飲んでるのか？」

パルスイ「私が見た時はよ？　別にいつも一緒に飲んでるわけじゃないし」

パルスイからあまり有力な情報は得られなかったが、とりあえず勇儀は酔っぱらうと、よく暴れることがわかった。なので勇儀は怒っている訳ではなく、この戦いはただ暇潰しであることがわかった。

夜見「そうか、わかった　巻き込まれると危ないから、離れてた方がいいぞ？」

夜見がパルスイに注意をすると、パルスイはムツとした様子で言った。

パルスイ「何よ、ボロボロのくせに人の心配なんて　まったく、妬ましいわね」  
そう言つてパルスイは、どこかへ行つてしまった。

そして夜見は振り返り、勝算は無いに等しいにも関わらず夜見は身構えた。すると勇儀は笑顔を浮かべた。

勇儀「いいねえ、夜見　こんなに立ち向かつて来る人間はなかないよ　その根

性に答えて、特別にハンデを外して本気で戦ってあげるよ！」

そして勇儀は持っていた盃を地面に置き、地面を蹴って上に跳んだ。そして勇儀は夜見に向かって踵落としを放つ。それに対して夜見は血の翼で正面から受け止めたものの、ぶつかつた衝撃で夜見の足首が壊れそうになった。

そして夜見は血の翼を分解すると同時に後ろに跳ぶと、勇儀の踵落としは威力を落とすことなく地面に突き刺さつた。すると地面は砕け、クレーターのようにならなくなった。

勇儀「くっ！惜しいなあ」

夜見（足首が痛え あのまま受け止め続けたら、絶対足首が壊れてたな）

そして夜見が着地すると同時に、勇儀は驚異的な速さで夜見の目の前まで迫ってきた。夜見の目の前まで来た勇儀は拳を握り、アッパーを繰り出した。そのアッパーを夜見は上半身を後ろに反らして避け、勢いを付けて勇儀に殴りかかろうとするが、勇儀は夜見の腕を軽々と掴んだ。

勇儀「威力も無いし、スピードも全然 一体何がしたいのか……な！」

すると勇儀は振りかぶって、宙に夜見を放り投げた。そして夜見は宙で血の翼を作っている。勇儀が夜見の上まで跳んできて、腕を大きく引いて左ストレートを放つた。夜見はとっさに血を腕に纏ってクロスさせて防いだ。しかし、その拳は今までの攻撃よりも最も重く、夜見は地面に向かって真っ直ぐ飛んでいった。

しかし夜見は血を操って地面にクッションを作った為、無傷で地面に着くことが出来た。

夜見（さっきの攻撃、少しでも反応が遅れてたら完全に骨折で済む話じゃ無かった）  
そして勇儀が地面に降り立つと、勇儀は夜見に向かってこう言った。

勇儀「あらら、結局ふりだしに戻っちゃった まあ、夜見をさっさと倒して、飲み直すか」

勇儀の言っている意味を確認するために夜見は周りをチラリと見ると、そこは勇儀と来た居酒屋の前だった。すると、一瞬の隙の間に勇儀は夜見の目の前に来ており、夜見の襟元を掴んだ。そして勇儀は大きく振りかぶって、夜見を居酒屋の方に投げ飛ばした。夜見は背中から居酒屋の壁を突き破って、鬼達が飲んでいた机の上落ちた。

ガシヤアン

鬼「うおっ!?!なんだ!?!に、人間?」

鬼達は戸惑っていると、勇儀が居酒屋に空いた穴から店内に入ってきた。

勇儀「いやあ、暴れた暴れた♪さてと、そろそろ飲み直すかな」

すると酒を飲んでいた鬼の1人が、勇儀に向かってこう言った。

鬼「あ、姉御! またやっちゃったんですか!?!」

勇儀「ん? 一体なんの話をしてるんだい?」

鬼「姉御！前に来たときに、店のオヤジに言われたこと忘れたんですか！」

勇儀「ん？えくと、確か前に来たときにはいつも通り暴れてそれで……あ」

すると勇儀の顔が真っ青になって、酔いを覚ました。夜見は立ち上がると、勇儀が夜見の肩を掴んで揺らしてきた。

勇儀「や、やばいよ、夜見！一体どうしよう!!」

夜見「な、なんだよ？まあ、それより、酔いは覚めてるようだな 良かった」

勇儀「こんなことしちやつたら、嫌でも酔いが覚めるさ！ああ、どうしよう どうすればいいと思う、夜見!!」

夜見「と、とりあえず、何に対して勇儀さんが焦ってるか教えてくれないか？」

勇儀「そ、そんなこと言ってる場合じゃないんだよ！」

すると店の奥の方から、1人の店員らしき鬼が走ってやって来た。そして、壁の穴を見た店員は急に叫び始めた。

店員「あー！！！！また、また壁がぶつ壊れてやがる！」

夜見（また？て言うことは、勇儀さんが焦ってる理由って……）

そして夜見は勇儀をチラリと見ると、勇儀は出入口から外へこつそりと出ようとしていた。すると夜見は、店員の肩を叩いた。

店員「あ?!んだよお前！」

夜見（いや、店壊されて怒るのはわかるけど、キレたまま話すなよ）

そして夜見は、出入口からこっさり出ようとしていた勇儀を指差した。すると店員は、勇儀に向かつて怒鳴った。

店員「勇儀さん！また、あんたか！」

すると勇儀はビクツツとして、ゆっくりと振り返った。そして勇儀は言い訳を始めた。

勇儀「え？な、なんのことかなあ？私にはさっぱり」

夜見「いや、勇儀さんが俺を投げて店の壁を壊したんだろ」

勇儀「お、おい、夜見！なんで言っちゃうんだよ！」

店員「言っちゃう？て言うことは、やっぱり勇儀さんの仕業じゃねえかよ！」

勇儀「なっ!?夜見、図つたな!？」

夜見（いや、勝手に自分から言っただけだろ）

すると店員は、ずけずけと勇儀に向かつて歩み寄って言った。

店員「勇儀さん 前に言ったこと、ちゃんと覚えてるよな？」

勇儀「ま、待ってくれよ！店の出禁だけは止めてくれて！他の所はほとんど出禁を

食らってるんだよ！」

店員「いや、これで5回目だ これ以上店を壊されてたまるかよ！」

勇儀「そ、そんなあ」



すると勇儀はこの世の終わりみたいな顔で絶望していた。酒が飲めないだけでそんなになるか？と夜見は思ったが、自分にも非があると思つたので、勇儀を助けることにした。

夜見「まあ、店員さん 店の壁を直させて、今回は見逃してくれないか？」

勇儀「夜、夜見！お前……」

店員「はあ？何言つてんだあんた？これ以上壊されたらこつちはたまらないんだよ！」

すると夜見はポソツと言葉を漏らした。

夜見「そうか、鬼は心が狭いんだな」

そう言うのと店員は、夜見の言葉に反応した。

店員「あ!?!お前、もう1回言つてみる！」

夜見「鬼は心が狭いんだな」

店員「はあ!?!ふざけんじやねえぞ、お前！鬼はどんなことをされようがな、そんなの許してやる心を持つてるんだよ！」

すると夜見はかかったと思ひ、店員に言った。

夜見「そうか、どんなことをされても鬼は許すのか じゃあ、今回の件も許すのか」

夜見の言つたことに店員は一瞬理解が出来なかつたが、夜見の言葉に誘導されたこと

に店員は気付いた。

店員「お、お前！わざと言ったな！」

夜見「まあ、でも、鬼は嘘が嫌いつて勇儀さんから聞いたことがあるぞ？それに、店員さんの言葉を聞いたのは何人もいる」

そう店員は言われると納得は出来ていかなかったが言い返すことが出来ず、しぶしぶ諦めた。

店員「今回だけだ、次はないからな勇儀さん」

勇儀「や、やった！ありがとう、夜見 おかげで助かったよ」

そう言つて勇儀は喜んでいたが、夜見は店に空いた穴を指差して言った。

夜見「でも、責任は取らないとな？勇儀さん」

勇儀「え？… わ、わかったよ、でも、夜見にも付き合ってもらおうぞ！」

夜見「いや、なんで俺が手伝うんだ？」

夜見が勇儀に問いかけると、勇儀はこう答えた。

勇儀「私が暴れたのは、夜見が私の誘いに乗つたのが悪いんだ、夜見があそこで私を止めていれば、こんなことにならなかつたんだ！」

夜見は若干屁理屈が混ざつた言い訳をされたが、確かにあそこで止めていればこんな事態はならなかつた。なので夜見も壁の修理をしぶしぶ手伝うことにした。

夜見「はあ、わかったよ」

勇儀「じゃあ、決まりだな」

そう言つて勇儀は満々の笑みを浮かべた。

そして時間は、今へと移る。

夜見「ふう やつと終わつた」

夜見と勇儀は居酒屋の壁の修理を済ますと、居酒屋の壁は新居のような綺麗な壁になつていた。ちなみに壁を修理するのにぎつと2時間はかかった。

勇儀「いやあ、夜見が手伝ってくれたおかげで早めに終わつた ありがとう、夜見」

夜見「それはどうも 次からは、酒はほどほどにしとけよ？俺はさつさと地霊殿に帰らないといけないからな」

勇儀「うっ！わ、わかつてるよ て言うか夜見、あばら骨を折っちゃったけど大丈夫なのかい？」

夜見「ああ 痛みはだいぶ引いたし、大丈夫だ じゃあな」

勇儀「じゃあな、夜見」

そう言つて夜見は居酒屋を出ていき、地霊殿へと帰つていった。

## 第21話 苦しい時には誰が1番苦しい？

夜見は旧地獄街道を通り抜けると、地霊殿が目の前に見えてきた。

夜見（やっと帰ってこられた）

夜見は居酒屋の壁を修理していたため、思っていた時間より大幅に遅れて地霊殿に着いた。そして夜見は地霊殿に入り、仮面を外して自分の部屋へと向かった。

夜見（さてと、まだ4時あたりだし、どうするかな）

そして夜見が廊下に差し掛かると、ある部屋の扉が開いた。その部屋からは、さとりが出てきた。するとさとりは夜見に気付いて、声をかけた。

さとり「あ、黑夜さん お帰りなさい」

夜見「さとりさん、もう大丈夫なのか？」

さとり「ええ、大丈夫です すいません、心配をかけてしまつて」

夜見「いや、気にしなくていい そもそも、俺があんなことを経験したのが原因なんだからな」

するとさとりは首を横に振った。

さとり「そんなことはありませんよ、誰にだつて間違いや失敗はあります それを悔や

むのでは無く、その経験はどう活かすのかが大切なんですから」

すると夜見は少し暗い雰囲気と言った。

夜見「……それが、最初から駄目だったことを知っててもか？」

そう夜見が言うときとりは言葉を一瞬詰まらせたが、すぐにさとりは答えた。

さとり「黒夜さんがどんなことを経験したかは知りませんが、何かそうしなければいけないことがあったのでしょうか？」

夜見「……さあな、あの時の俺にはわからない」

するとさとりは夜見に問いかけた。

さとり「……そんなに、悔やむようなことなんですか？」

夜見「ああ、悔やんでも悔やみきれない 呪縛みたいなものだ」

さとり「そう……ですか……」

そんな会話をしていると、さとりと夜見の間に嫌な空気が流れた。すると夜見がその空気を断ち切るようにさとりは質問をした。

夜見「そういえばさとりさんは心を読む能力なのに、人の過去が見れるのか？」

さとり「え？ええ、そうですねよ。トラウマというのは心的外傷のことなので、心に刻まれているものなんです。だから、見ることができます」

夜見「ああ、どうりで見れるわけだ」

さとり「それはそうと、黒夜さん　またお土産を持って帰って来てくれたんですか？」  
さとりもこの嫌な空気を変えたいのか、夜見の持っている団子が入っている笹の葉の包みに話を逸らした。

夜見「ああ、これか　人里で美味しい団子屋を見つけてな、せっかくだからお土産に持って帰って来たんだ」

さとり「ああ、そうなんですか　そんなに美味しいんですか？」  
すると夜見は包みを開けて、団子を2本取り出した。

夜見「食べるか？一応、みんなの為に8本買ってきたんだが」  
するとさとりは手を振って答えた。

さとり「いえ、後で食べますからキッチンに置いていてください」

夜見「そうか、わかった」

そして夜見はキッチンに向かうと、さとりも一緒に付いてきた。夜見はキッチンに団子を置くと、さとりは夜見に今日のことについて問いかけた。

さとり「今日は、一体どんな仕事をしたんですか？人助け？それとも、妖怪退治ですか？」

夜見「ああ、一応依頼は受けたには受けたんだがな…」

すると夜見は依頼状を取り出して、さとりに見せた。そしてさとりはその依頼状の内

容を見ると、その依頼状を不思議に思った。

さとり「行方不明者、ですか…… 確かに人間からすれば探して欲しい筈ですが、何

故依頼状として出したのでしょうか？」

夜見「やつぱり、さとりさんもそう思ったか」

さとり「私も、ということとは…… やつぱり、黒夜さんも？」

さとりがそう聞くと、夜見は首を横に振った。

夜見「いや、俺だけじゃない 前に言った異変の犯人にも見せてみると、そいつもさ

とりさんと同じようなことを言ってたよ」

するとさとりは依頼状とは全く関係の無い、別の質問をした。

さとり「黒夜さん、前から気になっていたんですけど、その異変の犯人って一体どん

な人なんですか？」

急にさとりが話の方向を変えた為、夜見は少し戸惑ったがすぐに答えた。

夜見「人というか、吸血鬼だな 名前はレミリア・スカーレットさん、紅魔館ってい

う屋敷の主だ」

さとり「吸血鬼なんですか 屋敷ということは、他にもいろんな方が住んでるんです

ね？」

夜見「そうだな レミリアさんの妹、フランドール・スカーレットさん レミリアさ

んの従者、十六夜咲夜さん 紅魔館の門番、紅美鈴さん 図書館の本を管理している、パチユリー・ノーレッジさん その図書館の管理を手伝っている。パチユリーさんの使い魔、小悪魔さん 後は、妖精のメイドがたくさんいたな」

夜見が紅魔館にいる人物をあげると、さとりはとても驚いた様子だった。

さとり「へえ、すごいですね そんなにたくさんの方が住んでるんですか それに妹がいるだなんて私と同じじゃないですか」

夜見「ああ、そうだな 話してみると、意外に話が合うかもな」

夜見がそう言うと、さとりは少し暗い雰囲気と言った。

さとり「確かにそうかもしれないませんが、覚妖怪の私に会っても嫌わなideくれるでしょうが?」

すると夜見は異変の時に言っていた、レミリアの言葉を思い出した。

「確か地底には心を読む妖怪がいるって話らしいわ そんな妖怪なんか会いたく無いわ、気持ち悪い そんな妖怪に家族がいるとしたら消えて欲しいわ」

すると夜見は笑顔でさとりに言った。

夜見「きつと大丈夫だ むしろレミリアさんは珍しがって、色々な話をしてくれるかも知れないぞ?」

さとり「そう……ですか それなら、いつか話してみたいです」



そう言つてさとりは笑顔を夜見に向けた。しかし、夜見の心は少し痛みを感じていた。

夜見（ごめん、さとりさん 地霊殿のみんなは、どんな些細なことであつても傷つけないんだ…）

そう夜見が思つていると、さとりが夜見に声をかけた。

さとり「… どうしたんですか？ 黒夜さん そんな深刻そうな顔をして？」

声をかけられた夜見は、ハツとしてさとりに言つた。

夜見「ああ、なんでもない 少し考え事をな」

さとり「そうですか？ 言いにくいことじゃないければ、私が相談に乗りますよ？」

夜見「いや、大丈夫だ 大したことじゃないから、さとりさんは気にしないでいいよ」

さとり「なら、いいんですが… でも、1人でなにもかも抱え込まないでください

よ？ 家族なんですから」

夜見「ああ、ありがとう さとりさん」

夜見とさとりが会話をしていると、キツチンの扉がガチャリと開いた。

燐「ん？ 黒夜さん、帰つてたんだ って！ さとり様!? もう大丈夫なんですか!？」

すると燐はすぐにさとりへ駆け寄つたが、さとりは平気であることを答えた。

さとり「大丈夫よ、お燐 ありがとうね」

燐「い、いえ、あたいはただ黑夜さんの指示に従っただけで、あたいは何も…」  
すると夜見が燐にこう言った。

夜見「燐さん　こういう時は、素直にどういたしましてって言うもんだ」

燐「え？　じゃ、じゃあ、どういたしまして…」

燐がそう言うのと、さとりは笑顔を向けた。

すると燐は、置いてある笹の葉の包みに気付いた。

燐「ん？　黑夜さん、その包みってお土産？　中身は食べ物か何か？」

夜見「よくわかつたな、中身は団子だ　人里で美味しい団子屋を見つけたからな」

すると燐は夜見に確認をとった。

燐「それって、今食べたりにしてもいいのかい？」

夜見「ああ、出来れば今日中に」

夜見がそう言うのと、燐は嬉しそうに言った。

燐「ちようど良かった！　実は、こいし様がお腹空いたって言ってたんだ　それで、1

人何本だい？」

夜見「1人につき2本　計8本買ってきた」

すると燐はその包みを開けて団子を4本持つと、燐はキッチンを出てどこかに行ってしまった。

夜見（… 燐さんもお腹減ってたのか？）

さとり「さてと、もう調子は良くなりましたし、そろそろ仕事に戻らないと」

そう言つてさとりはキッチンを出ようとしたが、夜見はさとりの腕を掴んで止めた。

さとり「黒夜さん？」

夜見「なあ、さとりさん 今日ほゆっくりしていきいれ 自分で言つてただらろ？たま

には休まないとい、体がもたないつて」

するとさとりは夜見にこう返した。

さとり「それは、黒夜さんが人間だからですよ 私は妖怪なんですよ？妖怪の体は、人間よりも遥かに丈夫です だから、大丈夫です」

しかし夜見は、さとりにこう言つた。

夜見「でも、それは体が丈夫つてだけだ 精神的なことだつたら、さすがにかなわな  
いだろ？だから、今日は休んでくれ」

夜見がそう言つと、さとりは納得した様子で頷いた。

さとり「そうですね 私が急に倒れたりでもしたら、みんなが困つてしまいますもん  
ね」

夜見「ああ、だから今日はゆっくりしておいてくれ」

そして夜見はキッチンを出ると、さとりの仕事部屋に向かつた。仕事部屋に入ると、

そこには椅子に座っているサードアイが閉じたこいしと、机を挟んで正面に立っている燐がいた。

こいしは首を傾けて夜見を見ると、椅子から降りて夜见到近付いてきた。

こいし「お兄ちゃん、おかえり！お団子美味しかったよ」

夜見「ああ、ただいま　ちゃんと仕事してたか？」

こいし「うん！ちゃんと出来たよ」

夜見「そうか　えらいな、こいしさん」

こいし「えへへ♪お兄ちゃん、なでなでして？」

夜見「ああ、わかったよ」

そしてこいしが帽子を取ると、夜見はこいしの頭を優しく撫でた。するとこいしは、夜见到抱きついてきた。

こいし「んん♪大好き、お兄ちゃん」

夜見「そうか　ありがとうな、こいしさん」

すると燐は書類を見ながら、こいしに向かつて言った。

燐「こいし様、書類は全部記入し終わったので後はまとめるだけです　早く終わらせ  
ちやいましょう」

こいし「ええ、もう疲れたよ　後はお燐がやつといて」

燐「え!? こいし様!？」

しかしこいしは書類を全くまとめる気は無かった。おそらく、慣れないことをしていったせいで、さとり以上に疲れたのだろう。

すると夜見はこいしを抱き上げて、先ほどこいしが座っていた席に座った。そして夜見は書類をまとめ始めた。

燐「え? 黒夜さん、これはこいし様の仕事だよ?」

夜見「まあ、慣れないことをしてたからな 疲れるのも仕方ないだろ」

燐「で、でも…」

夜見「よし、終わった」

燐「え!? う、嘘!？」

夜見は燐とほんの少しだけ会話をしているうちに、書類をすべてまとめ終わった。燐がパラパラとまとめた書類を見ると、驚いた様子だった。

燐「ほ、本当に全部まとめ終わってる」

夜見「終わったというより、最初っからほとんどまとめてあっただけだ ま、どうせこいしさんが無意識に書類をまとめながら書類を書いてたんだろ」

夜見がそう言うのと燐はそのことが本当かどうか、こいしに問いかけた。

燐「そ、そうなんですか? こいし様」

そしてこいしは燐の方を向くと、首を傾げて答えた。

こいし「え？わかんない、私はただ書類を書いてただけだよ？」

夜見「まあ、無意識だから自分で気付けないのは仕方ないな　ところで燐さん、他にも何か仕事はあるのか？」

燐「え、確か何も無いはずだよ　さとり様は基本、仕事はすぐに済ませるからね」  
すると、何故かこいしが異常に反応した。

こいし「本当!?!お燐！」

燐「は、はい　そのはずですよ、こいし様」

するとこいしはとても喜び始めた。

こいし「やった！これでお兄ちゃんと一緒にいられる！」

夜見（え？仕事が終わったのが嬉しいんじゃないのか…）

夜見がそんなことを思っていると、燐は部屋の扉を開けた。

燐「じゃあ、あたいは部屋に戻ってるね　それじゃ」

そう言つて燐は自分の部屋に戻っていった。するとこいしは夜見に向かって今日の  
ことを聞いてきた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん　今日はどんなお仕事をしたの？また紅魔館つて所でお仕事したの？」

夜見「うーん、まあ、そう言えばそうなるのかな?」

こいし「ん? どういうこと?」

夜見「ああ、実はな..」

そして夜見はこいしに今日取った依頼状の内容、紅魔館で咲希とフランドールと遊んだことを話した。するとこいしは、少し拗ねている様子だった。

こいし「ずるいよ、お兄ちゃん 私は地霊殿で頑張ってお仕事してたのに、お兄ちゃんは遊んでたなんて」

夜見「いや、俺は遊びたくて遊んだ訳じゃ無いぞ? あくまでも紅魔館の主から仕事を受けただけだ」

こいし「もう、お兄ちゃんなんて知らないもん」

そう言っつてこいしは夜見のことを本気で抱き締め始めた。すると夜見の体から嫌な音が聞こえてきた。

夜見「ちよっ!? こいしさん! 骨が折れるから!」

こいし「知りませーん 私は抱き締めてるだけでーす」

すると夜見の脇腹に激しい痛みが走った。その瞬間、夜見は口を手で押さえて咳き込むと、夜見の手には血が付いていた。

夜見が旧地獄街道で勇儀と戦った時の傷は、まだ癒えていなかったのだ。すると夜見

は、能力を使って血を空中に分解し始めた。

夜見「こ、こいしさん、本当に痛いから 俺が悪かったから」

こいし「んー？何も聞こえない」

すると夜見は再び口を押さえて咳き込んだ。そして血を予想以上に吐いてしまったのか、血が指の間から垂れてきた。

するとこいしは夜見の血を見たまま固まり、体が震え始めた。

こいし「お、お兄ちゃん？なんで血が：：」

夜見「だ、大丈夫：：ごほつごほつ」

こいし「あ、ああ、嫌、嫌だよ、お兄ちゃん」

夜見「こ、こいしさん大丈夫「嫌ー！！」

するとこいしは急に叫んだ。そして廊下の方からドタドタと足音が聞こえてくると、部屋の扉が勢いよく開けられた。するとそこには、部屋にいるはずのさとりがいた。

さとり「こいし!?急に叫んでどうしたの!？」

するとこいしは夜見から離れて、転がるようにさとりの方に近付いていった。

こいし「お、お姉ちゃん、わ、私のせいで、お兄ちゃんが：： お兄ちゃんが：：」

さとり「黑夜さんがどうし：： きゃあ!?く、黑夜さん!?どうしたんですか!？」

夜見は先ほどより血を吐いていて、血が指の間から机にポタポタと滴っていた。しか



し夜見は滴った血をすぐに空中へ分解し続けていた。そしてさとりが夜見に近付いたが、夜見は手を横に振った。

夜見「だ、大丈夫だ 気にしなくていい」

さとり「な、何を言ってるんですか! とりあえず一旦部屋に戻って、じゃなくてキツチンで血を、いや、まずは安静にした方が」

さとりはパニックになっているのか、まず最初に何をしたらいいのかわからない状況になっていた。そしてこいしは、その場でへたれこんでずっと泣いていた。

そんなことをしていると、燐が騒ぎを聞いて部屋にやって来た。

燐「何を騒いでるんですか? さとり様」

さとり「お燐! 黒夜さんを部屋のベッドに寝かせてきて、早く!」

燐「え?なんで黒夜さんをつて!?だ、大丈夫かい!」

すると燐は夜見に近付いたが、どうしたら良いかわからず夜見の背中を優しく擦った。そして燐は夜見とゆっくり仕事部屋を出て、夜見の部屋に入った。

燐「大丈夫かい? 黒夜さん まだ血は止まらないのかい?」

夜見「い、いや、もう大丈夫だ 1人で歩ける」

燐「そ、そうかい?」

そう言つて燐は夜見から手を離すと、夜見はゆっくりとベッドに座った。すると部屋

の扉が開き、さとりが部屋に入ってきた。

さとり「黑夜さん！大丈夫ですか！」

夜見「ああ、大丈夫だ それより、こいしさんは？」

さとり「お燐、ちよつとこいしの様子を見てきてちょうだい」

燐「わかつた、ちよつと見てくるよ」

そう言つて燐は夜見の部屋を出て、こいしのもとへ向かつた。そしてさとりは夜見に近付き、ベッドに横にさせた。

さとり「大丈夫ですか？もしかして、持病か何かあつたんですか？」

夜見「いや、そうじゃない 少し怪我に響いただけだ」

するとさとりは夜見に向かつて怒鳴つた。

さとり「け、怪我つて、なんで言つてくれないんですか！」

夜見「・・・いや、怪我は痛みがひいてたから、大丈夫だと思つたんだが・・・ すまな

い」

さとり「怪我をしたのなら、すぐに言つてくださいよ！ 別に気を使う必要なんて無

いんですから！」

夜見「・・・そうか、ありがとう さとりさん」

さとり「でも、黑夜さんが大丈夫そうで良かったです ところで怪我つて、どこを怪

我したんですか? 一見どこも怪我をしたようには見えませんが」

そしてさとりは夜見のことをじろじろ見始めた。すると夜見は上体を起こしてさとりに言った。

夜見「実は、少し訳があつて 勇儀さんにあばらを2、3本折られたんだ」

さとり「こ、骨折してるんですか!?! て言うか、なんで骨折して平気でいられるんですか!?!」

夜見「いや、平気なのは俺もよくわからない まあ、痛みはもうほとんど無いし、大丈夫だろ」

さとり「そ、そんな適当な...」

さとりは夜見の適当な様子に呆れると、夜見にあることを言った。

さとり「黒夜さん、とりあえず骨折が治るまでは、外には出歩くのは禁止します」

すると夜見は不思議そうな様子で、さとりに質問した。

夜見「え? そうしたら、俺が仕事できないぞ?」

さとり「仕事もしばらく禁止します 黒夜さんは少し、自分のことを大切にすること覚えてください わかりましたか?」

夜見はそう言われると少し考えたが、さとりがこちらを凝視してくるので従うことにした。

夜見「… わかったよ でも、治ったらすぐに復帰するぞ？」

さとり「ちゃんと完全に治ってからですよ？じやないと、仕事をするのは認めませんから」

夜見「ああ、わかってる」

そして夜見は怪我が治るまでの間、外出することを禁止された。すると夜見は、さとりに少し気になったことを聞いた。

夜見「それより、燐さん遅くないか？何をしてるんだ？」

さとり「いえ、そろそろ戻って来ますよ」

さとりがそう言った瞬間、燐が部屋に戻って来た。そして燐はこいしの様子を報告した。

燐「さとり様、こいし様の様子を見てきたんですが、少し様子がおかしいんです」

さとり「一体、何があったの？」

燐「それが、ずっと「私のせいだ」ってぶつぶつ言ってるんですよ」

夜見「… どういうことだ？」

燐「さあ？あたいには、何かなんだか…」

さとり「とりあえず、私も様子を見に行きます 一応、黑夜さんも付いてきてくださ

い あと、お燐はもう部屋に戻ってていいわよ」

夜見「ああ、わかった」

燐「じゃあ、あたいはこれで…」

そして夜見はベッドから立ち上がって、さとりと一緒に仕事部屋に向かい、燐は自分の部屋へと戻った。仕事部屋では、こいしがさつきと同じ位置でへたれこんで泣いていた。

そしてさとりは、ゆっくりとこいしに声をかけた。

さとり「…こいし? どうしたの?」

こいし「ぐすつ お、お姉ちゃん…」

そしてこいしが振り返ると、こいしはビクツとしてさとりの後ろに隠れた。

さとり「こ、こいし? どうしたの一体」

こいし「わ、私のせいで、お、お兄ちゃんが はあ、はあ」

するとこいしは急に過呼吸になり始めた。そして夜見は心配してこいしに声をかけた。

夜見「こいしさん?大丈夫か?」

こいし「ひっ」

そしてこいしは、怯えた声を口から漏らした。どうやらこいしは何故か夜見に対して何か怯えている様子だった。しかし、その理由は夜見にもさとりにもさっぱりわからな

かった。

さとり「こいし、どうしたの？何を怖がってるの？」

こいし「はあ、はあ、私のせいで、私のせいでお兄ちゃんが　はあ、はあ」

さとり「こいし、黒夜さんは何も怒ったりしてないわよ？」

こいし「ち、違つ　はあ、はあ」

さとり「… すいませんが、黒夜さんは少し部屋に戻っててください　私がこいしにゆつくり聞いてみます」

夜見「… そうか、わかった」

さとりに部屋に戻るように言われた夜見は、仕事部屋を出て自分の部屋に戻った。そして夜見はベッドに横になって、こいしの怯えている理由を考えた。

夜見（こいしさんは何を怯えているんだ？「私のせい」って別にこいしさんは何もしてないし…　吐血したのを自分のせいだと勘違いしたのか？）

どんな理由があらうと、夜見が今の状態のこいしに会うのはとても難しい話であった。そしてしばらく考えていると、さとりが部屋に入ってきたので夜見は上体を起こした。

夜見「さとりさん、何かわかったか？」

さとり「それが…　ずっと同じことを言っただけで、何も話してくれないんです」

夜見「そうか：： 一体何が原因なんだ？」

しばらく夜見とさとりは原因を考えたが、さとりは夜見にその時の様子を聞いた。

さとり「そういえば、こいしがあんな様子になった時って一体どんな状況だったんですか？」

夜見「ん？あの時は確か：： 仕事の話をしたらこいしさんが拗ねて、俺のことを全力で抱き締めてきて、それで吐血をしたんだ」

さとり「やつぱり、黒夜さんが吐血したのが原因なんでしょうか？」

夜見「でも、吐血だけであんな様子になるのか？」

さとり「そうですね：： 本当になんなんでしょう？」

夜見（吐血がやつぱり原因なのか？だとしても、なんで吐血で？）

夜見はしばらく考えていると、ふとあることを思い出した。

夜見（そういえば、あの時こいしさんは確か：： あれがそうだとしたら、つじつまは合うけど本当にこれで良いのか？でも、あそこまでになるってことは：：）

そして夜見は立ち上がって部屋を出ようとした。しかし、それをさとりに腕を掴まれて止められた。

さとり「どこに行くつもりですか？黒夜さん」

夜見「こいしさんのところだ 大体的見当はついた」

するとさとりは夜見にあることを聞いた。

さとり「何を言ってるんですか？まさか、こいしの今の状態を理解してないとか言いませんよね？」

夜見「十分にわかってる その上で行くんだよ」

さとり「……なんでわかってて、こいしを苦しませるようなまねを？」

さとりがそう言うと、夜見は少し黙った。しかし夜見はさとりにこう言った。

夜見「……もう、苦しませたくないから行くんだよ」

さとり「……何か、考えはあるんですか？」

夜見「ああ、だからお願いだ 手を離してくれないか？」

夜見がそう言うと、さとりはあっさりと手を離れた。そしてさとりは夜見に言った。

さとり「もし、駄目だったら 恨みますよ？」

夜見「ああ、好きなだけ恨め もう恨まれることなんか、とつくに慣れてるんだからよ」

そして夜見は部屋を出てこいし部屋に入ると、こいしはベッドの上で布団を被っていた。するとこいしは夜見の姿を見るとビクツとして、怯えているような様子で震え始めた。

こいし「あ、ああ、嫌 嫌、来ないで」



そして夜見はこいしの言葉に反して、ゆっくりと近付いた。

こいし「こ、来ないで！来ないでよ！お兄ちゃん！」

そしてこいしはベッドの上で後ずさるが、夜見はどんどんこいしとの距離を詰めていった。

こいし「うう、来ないで！お兄ちゃん！来ちゃ駄目！」

すると、後ずさりしていたこいしの背中は壁に着いて、こいしは部屋の角でガタガタと震えていた。そして夜見はベッドの上を上り、こいしにゆっくりと近付いた。

こいし「なんで来るの!?もう来ないでよ！」

そして夜見はこいしの目の前まで来ると、その場でこいしのことをじっと見つめた。するとこいしは祈るように目を瞑った。

こいし（やめて、もう嫌なの だから、お願い！）

夜見「…なあ、こいしさん」

すると夜見はこいしに優しく話しかけたが、こいしは返事をしなかった。しかし夜見は気にすることなく話を進めた。

夜見「本当はそばにいてほしいんだろ？」

するとこいしは叫んだ。

こいし「そ、そばになんかいてほしくない！」

夜見「… こいしさんは俺に怪我をさせたくないから、そう嘘をつくんだろ？」

こいし「嘘なんかじゃない！本当の気持ちだもん！」

夜見「… じゃあ、本当にそうなら ほら」

すると夜見は刀をこいしの前に置き、こう言った。

夜見「この刀で俺を殺せ そばにいてほしくないんだろ？」

こいし「… え？」

夜見「もちろん、俺は抵抗は一切しない さあ、殺せ」

するとこいしは震える手でゆつくりと刀を引き抜いて立ち上がった。そしてこいしは震えている両手でカチャカチャと音を鳴らしながら刀を構えると、過呼吸になり始めた。

こいし「はあ、はあ、はあ、はあ」

夜見「… ほら、早く」

こいし「… よ」

夜見「どうした？ほら、そばにいてほしくないんだろ？」

こいし「出来ない… 嫌だよ 死なないでよ、死んでほしくないよ！お兄ちゃん！」

するとこいしは刀を構えたまま、夜見にしゃべり始めた。

こいし「嫌だよ！さっきのは全部嘘！本当は、ずっとそばにいてほしい！一緒にいて

ほしいけど、私はお兄ちゃんを傷つけちゃう！もしかしたら、いつかお兄ちゃんをあんな風に殺しちゃうかもしれない！」

夜見「……」

こいし「だから私は、お兄ちゃんを苦しませたくないから！私はもうお兄ちゃんと関わっちゃいけないの！」

こいしの考えを聞いた夜見は、ため息をついたあとにこう言った。

夜見「……何言ってるんだよ、こいしさん」

こいし「わ、私は、お兄ちゃんを「苦しませたくない？何言ってるんだよ」

すると夜見はこいしの言葉を遮ってこう言った。

夜見「誰かを苦しませたくない？だから関わらないようにする？そう言って離れて、1人ぼっちになろうとしてるこいしさんが1番苦しんでるだろ」

すると夜見はこいし持っている刀を優しく取って鞘に戻した。そしてベッドの上に立っているこいしを抱き寄せた。

夜見「怖かったんだろ？俺が吐血で死ぬ夢が、正夢になるのが、しかも、原因が自分だとしたらって」

こいし「……うん、怖かった、怖かったよお！お兄ちゃん！」

そう言ったこいしは、夜見に抱き締められながら泣き始めてしまった。そして夜見は

こいしを泣き止ませようと頭を撫でた。

夜見「お、おい：：泣くなよ、こいしさん」

こいし「ぐすつ お兄ちゃん！好き！大好き！だからお願い！ずっと、そばにいて！」  
夜見「：：わかった ずっとそばにいて、愛してやるよ」

そう言うときいしは泣き止むどころか、むしろ更に泣き始めた。そして夜見は頑張つて泣き止ませようと色々と話すが、むしろさらに泣いてしまい、夜見は困惑していた。

こいし「お兄ちゃん！好き！好き！好き!!!大好き!!!」

夜見「な、泣き止んでくれて、こいしさん」

そしてその部屋の外では、扉に寄りかかって安心している人物が一人いた。それはさとりだった。

さとり（また、黒夜さんに助けてもらっちゃいましたね ありがとうございます、黒夜さん）

さとりは心の中で感謝をしていると同時に、不思議に感じていることもあった。

さとり（黒夜さんのあの時の言葉：：）

そしてさとりは夜見の言った言葉を思い出していた。それは夜見がこいしの部屋に行くために、自分の部屋を出る直前に言った言葉だった。

「もう恨まれることなんか、とつくに慣れてるんだからよ」

さとり（：： 黒夜さんのトラウマ、あの言葉 黒夜さんの過去には一体何が：： 何が  
あつたの？）

## 第22話 異常な体質

夜見が外出・仕事を禁止された日から何カ月かが過ぎ、幻想郷には冬が訪れていた。地上は辺り一面真っ白な世界に変わっており、雪が降っていた。

そして前々から夜見は、さとりからは仕事復帰の許可も得ており、たまに仕事を休むに日はこいしと一緒に散歩などもしていた。

そしてある日夜見は人里に依頼が無かった為、紅魔館のレミリアの部屋でレミリアと一緒にチェスをしながら行方不明者の話をしていた。

夜見「それで、最近の人里の行方不明者の情報は何かあるか？」

コトツ

レミリア「そうね、これと言った情報は無いわね　でも、ここ最近は行方不明者は減ってるって話らしいわ」

夜見「そうか、それはお使いをした咲夜さんの情報からか？」

レミリア「ええ、そうよ？まさか、この私が嘘の情報を言っているとも？」

コトツ

夜見「いや、そういうわけじゃ無いんだがな」

コトツ

レミリア「そう、それならいいのだけれど」

するとレミリアは、チェス盤をじっくり眺めながら夜見に話かけた。

レミリア「：： それにしても、黑夜 貴方ってちゃんと考えて駒を動かしてるのかしら？ 貴方はすぐに駒を動かすし、駒も残り8個よ？ それに対して、私の駒は12個 勝つ気があるのかしら？」

夜見「まあ、戦略は練っているから大丈夫だ ほら、レミリアさんの番だが？」

レミリア「今考えているのよ、急かさないでちようだい」

コトツ

レミリアが駒を動かすと、夜見は不思議そうな顔をしてレミリアに言った。

夜見「：： そうか、そう動かすか？ 普通」

レミリア「あら？ チェスの勝負を受けた時には「勝負を受けたからには手加減はしない」って言うってたけど、はったりだったのかしら？」

そしてレミリアは夜見を挑発してクスクスと笑っていた。すると夜見はこう言って駒を動かした。

夜見「じゃあ、チェックメイトで俺の勝ちだな」

コトツ

するとレミリアは驚いて、立ち上がってチェス盤の現状を見た。

レミリア「え!? そ、そんなことがあるわけ…… あ」

レミリアがチェス盤を見てあることに気付いたと同時に、夜見は言った。

夜見「気付いたか? レミリアさんの番でどの駒をどう動かしても、俺はその次の手でキングを取れる配置になってるんだ。だから、俺の勝ちだ。ちなみに取られた駒はただの囚だ」

するとレミリアは大きなため息をついて、椅子に再び座った。

レミリア「…… はあく、負けたわ。かなりチェスには自信があつたのだけど」

そして夜見は、チェスの勝負をレミリアが持ち込んできた時から気になっていたことを聞いてみた。

夜見「それにしても、なんでチェスなんかここにあるんだよ。チェスって外の世界の物だろ?」

するとレミリアは頬杖をつきながら、夜见到チェスのことについて説明をした。

レミリア「ああ、このチェスは貴方が紅魔館に来てない間に独自のルートで手に入れたのよ。はあ、紅魔館内では一度も負けなかった私が負けるだなんて、悔しいわね」

夜見「まあ、上には上がいるもんだ。仕方ないだろ?」

レミリア「ええ、それもそうね」



レミリアがそう言った瞬間、テーブルの上にあつたチェス盤が消えたが、かわりに綺麗な白いティーカップが2つ置かれていた。そしてテーブルの横には咲夜がいつの間にか立っており、白いティーポットを手に持っていた。

咲夜「お嬢様、黑夜様 紅茶の準備が出来ましたが、お飲みになりますか？」

レミリア「そうね、ちようど喉が渴いてたところだから頂くわ」

夜見「ああ、俺も貰おうかな」

そう2人が言うのと、咲夜は2つのティーカップに紅茶を注ぎ、「失礼しました」と言つて消えてしまった。そして夜見とレミリアは紅茶を一口飲むと、夜見が窓の外を眺めながらレミリアに話しかけた。

夜見「……まだ終わらないのか」

レミリア「ええ、そのようね」

外では1人の少女は白黒の服を着て箒に乗つて空を飛んでおり、その少女を2人の赤い服とメイド服を着た小さな少女が追いかけていた。

フランドール「キャハハ 待て待てー！」

咲希「そうだー！待てー！」

魔理沙「あー！もう！本を借りに来ただけなのに、なんで追いかけれなきやいけな  
いんだよ！」

魔理沙は箒に乗りながら全速力でフランドールと咲希から逃げていた。しかし魔理沙はフランドールと咲希との距離はまったく離れていなかった。

すると夜見はその光景を見ながら、レミリアに聞いた。

夜見「……また懲りずに本を？」

レミリア「言つてたことから察するに、そうでしょうね」

夜見「止めないのか？」

レミリア「フランと咲希が楽しそうにしてるから、別にいいじゃない」

夜見「……まあ、それもそうか」

そしてしばらくその様子を見ていると、何やら魔理沙がこっちに飛んで来ている気がした。

夜見「……いや、まさかねえ？」

レミリア「多分、貴方の思っていることが起こるわ」

レミリアがそう言った次の瞬間、魔理沙はベランダのガラスの戸を突き破って部屋に入ってきた。

そして魔理沙は夜見の姿を見た瞬間驚いた顔をしていたが、魔理沙はそのまま廊下に出ていった。その後、フランドールと咲希も部屋に入ってきたが魔理沙と同様に、廊下へ出ていった。

夜見「随分と騒がしいな」

レミリア「黒夜、わかつてるでしょ？」

すると夜見はため息をついて呆れながら立ち上がった。

夜見「……はいはい、本を守ればいいんだろ？」

レミリア「頼んだわよ」

すると夜見は仮面を取り出して被り、黒いマントのフードを深く被って部屋を出た。

魔理沙はフランドールと咲希に追いかけてられている為、相当時間はかかるはず。な

で夜見は一足先に図書館へ向かった。

そして夜見が図書館に着くと、周りはとても静かだったので魔理沙はまだ来ていない様子だった。すると夜見は1冊の魔道書を本棚から取り出して読み始め、魔理沙がやってくるのを待つことにした。

夜見（さてと、そろそろかな？）

夜見がしばらく魔道書を読んでいると、図書館の扉が勢いよく開かれた。

するとそこには肩で息をしている魔理沙がいた。その様子だと、相当2人を撒くのに頑張ったようだ。

夜見「遅かったな」

夜見は魔道書を見ながら魔理沙に声をかけると、魔理沙は夜見のことを見て、驚いた

様子で問いかけた。

魔理沙「なっ?!なんで夜影がここにいるんだよ!さつき姉の吸血鬼といただろ!」

夜見「ああ、だからなんだ?それより、また本を盗みに来たのか?」

すると魔理沙はむっとした様子で夜見に言った。

魔理沙「盗みだなんて人間きが悪いぜ!私はただ死ぬまで本を借りるだけだ!」

夜見「それを一般的に盗みと言うんだ」

魔理沙「私は借りてるだけだ!邪魔をするなら私は容赦しないぜ?」

そして魔理沙は帽子から八角形の道具を取り出すと、それを片手でこちらに向けてきた。  
た。

夜見「…その様子だと、勝負を持ち込んでるって言いたいのか?」

そして夜見が魔道書を戻すと、魔理沙はニヤリと笑って空いている片手でスペルカードを取り出した。

魔理沙「先手必勝だぜ!」恋符 マスタースパーク!」

魔理沙がスペルカードを発動させると、八角形の道具から虹色のビームが放たれた。すると夜見は片手をビームに向けてると、血を操作して強固な血の壁を作った。

そしてビームが過ぎ去る頃には、血の壁一面にひびが入っていた。

魔理沙「やつぱり、この程度じゃその壁は壊せないか!」

すると血の壁が空气中に分解されると、夜見は魔理沙にあることを聞いた。

夜見「それにしても、相変わらずの高火力だな。それと、スペルカードを使うのにその道具を使う意味はあるのか？」

夜見は魔理沙の持っている八角形の道具を指差すと、魔理沙はその道具を片手で持ちながらこう言った。

魔理沙「ああ、これか？これはミニ八卦<sup>はっけろ</sup>焔<sup>えん</sup>って言ってな、霖之助がくれたんだぜ」

夜見「霖之助？…ああ、あの香霖堂の店主のことか。そういや名前なんか聞いてなかったな」

魔理沙「そんなことより夜影、油断は禁物だぜ？」

すると夜見の後ろから急に小さな魔方陣が現れて、そこから弾幕が放たれた。しかし夜見は後ろも確認せずに血の壁を作り出して弾幕を防いだ。

夜見「わざわざ忠告をするだなんて、随分と優しいな」

魔理沙「言っておくが、ここからは一切忠告はしないぜ！」

すると魔理沙は手に持っていた箒に股がって、宙に飛んで弾幕を放ってきた。そして夜見はその場でゆっくりと刀を片手で引き抜いて弾幕を次々と斬り落としていった。

魔理沙「どうしたんだ、夜影！いつまでも防ぐだけじゃ勝てないぜ？」

夜見「魔理沙さん、前にそんなこと言って負けたの覚えてないのか？」

魔理沙「残念だが、今回は夜影の負けたフリに引っ掛かるつもりはないぜ！」

夜見「俺もさすがに同じ手は使う気は無い　さてと、そろそろ来るかな？」

魔理沙「ん？誰かと待ち合わせでもしてるのか？」

魔理沙がそう言った直後、図書館の扉が壊れるような勢いで開かれた。そしてそこには2人の少女がいた。

フランドール「あー！やっと思つて見つけたー！」

咲希「やった！フランお姉ちゃんの言つた通りだね！」

魔理沙「げ!?またこいつらかよ！」

そして魔理沙はその2人を見ると、一目散に図書館の奥へ逃げていった。するとフランドールと咲希は魔理沙の後を追つて図書館の奥へと飛んでいった。

夜見（ああ、奥に逃げちゃうか　図書館から出てくれれば良かったのに）

すると夜見は血の翼を作り出して、図書館の奥へ魔理沙を捜しに向かった。

しばらく夜見は図書館の中を飛んで探索していたが、一向に魔理沙が見つかる気配は無かった。

夜見（仕方ない　血を抜げて捜すしかないか）

そして夜見が血を抜げようとした次の瞬間、あることが起きた。

ドオオオオオオン

なんと、図書館の奥の方で大きな爆発が起きたのだ。そして爆発の衝撃により、図書館の本棚から魔道書がバラバラと落ちた。

そして夜見は爆発が起きた瞬間にあるものを目撃していた。

夜見（さっきの炎、あれは確かフランドールさんのレーヴァテインの炎だよな…）

そして夜見は急いで先程の爆発が起きた場所へ向かうとフランドールはレーヴァテインを振り回し、魔理沙はレーヴァテインに当たらないように飛行していた。そしてその様子を咲希はレーヴァテインの射程圏外で見ていた。

魔理沙「お、おい！待ってって！魔道書が破れたり燃えたりしたら怒られるぞ!」

フランドール「きゃハハ、大丈夫だよ！図書館の中はパチュリーが魔力結界で物は壊れないようになってるから!」

咲希「あはは、行けー！フランお姉ちゃん!」

フランドール「任せて！おりやああ!」

ドオオオオオオオ

魔理沙「あ、危ねえ！もう少しで箒に火が燃え移ってたぞ!」

フランドールはレーヴァテインを振り回す度に本棚などに当たっていたが、本棚や魔道書が燃えたり破れたりしている様子は無かった。

そしてその様子を見ていた咲希が夜見に気付くと声をかけて近付いた。

咲希「あ！黑夜、どうしてここにいるの？」

夜見「いや、こつちが質問したい。なんでこんな状況になってるんだよ」

そして夜見は魔理沙とフランドールが弾幕ごっこをしている様子を指差すと、咲希はこう答えた。

咲希「フランお姉ちゃんと白黒の魔法使いさんのこと？あれは弾幕ごっこだよ？知らない？」

夜見「弾幕ごっこをしているのは見ればわかる。俺が聞いているのはなんで弾幕ごっこをしているかって話だ」

咲希「ああ、そつちか。それはね、フランお姉ちゃんが鬼ごっこは飽きたからって弾幕ごっこを始めたんだよ」

すると夜見はあることが心配になってポツリと呟いた。

夜見「…大丈夫なのか？」

咲希「大丈夫だよ。フランお姉ちゃんは強いもん」

夜見「いや、俺が心配してるのはそつちじゃない」

咲希「え？じゃあ、何が心配なの？」

夜見「確か、フランドールさんの能力って…」

夜見がそう言った瞬間、本棚の周りの空間にヒビが入り始めた。夜見が心配していた



のは、フランドールの能力の「ありとあらゆるものを破壊する」能力でパチュリーの魔力結界が壊れることだった。

そして今、心配していたことが起こってしまった。

夜見（このままじゃまずいな……）

夜見は視線を魔理沙とフランドールに向けると、魔理沙とフランドールは20m程距離を空けて向かい合っていた。そして魔理沙はスペルカードを持って今にも発動させようとしていた。

魔理沙「いくぜ、妹の吸血鬼！「彗星 ブレイジングスター」！」

魔理沙はスペルカードを発動させると自分の後ろに八卦炉を向けて水色をビームを放つと、魔理沙はフランドールに向かってかなりの速さで突っ込んでいった。

フランドール「あはは♪斬り落としてやる♪」

そしてフランドールは物騒なことを言いながらレーヴァティンを真っ直ぐに上に掲げて、魔理沙を斬り落とそうとしていた。

夜見はどちらのスペルカードが勝ったとしても、直撃した衝撃波によって本棚や魔道書が大変になってしまうのは目に見えてわかっていった。

夜見（やばい！止めるしかねえ！）

夜見が全力でフランドールと魔理沙の間に向かうが、間に入る直前には魔理沙とフラ

ンドールの距離は2 mも無かった。そして夜見はフランドールと魔理沙の間に入った瞬間に刀を右手で引き抜き、逆手持ちにした。

夜見「やめろ！2人とも！」

すると夜見は刀の横で魔理沙の箒の先端を受け止めた。そしてもう一方のフランドールのレーヴァテインはというと、なんと夜見は素手でレーヴァテインの刃を掴んで受け止めていた。

魔理沙「なっ!?!夜影!?!」

フランドール「えっ!?!嘘っ!?!」

フランドールと魔理沙はレーヴァテインの刃を夜見が素手で受け止めていたことに心配していたが、夜見はそんなことをまったく気にする様子は無く、2人に向かってこう言った。

夜見「2人とも、弾幕ごっこなら外でやってこい…よ!?!」

そして夜見は次の瞬間、魔理沙の頭を刀の柄の先にある柄頭つかがしらで殴って気絶させ、フランドールの持っていたレーヴァテインを無理矢理握り潰した。

夜見「わかったか?2人とも…って片方は気絶させちまったか…!?!」

夜見は少しやり過ぎたと思いつつながら刀を鞘に戻し、ゆっくりと地面に降り立った。

するとフランドールは震えた声で夜見に話しかけた。

フランドール「く、黑夜、そんなことより、手、手が」

夜見「あ？手がどうした？」

そして夜見は左手を見ると手のひらは皮膚どころか肉まで焼き爛れており、見ているだけで痛そうな様子になっていた。

しかし夜見はなんともないような様子でフランドールに言った。

夜見「ああ、気にするな　こんなのすぐに治るだろ」

フランドール「な、何言ってるの!?! そうだ、パチュリーなら治してくれる!」

そう言っただけでフランドールはパチュリーがいる方向に全力で飛んでいった。そしてその光景を見ていた咲希が夜見にゆっくりと近付いてきた。

咲希「うわあ、すごく痛そうだね」

夜見「まあ、見た目はな　ところで、魔理沙さんはどこだ？」

咲希「あの白黒の魔法使いならあそこだよ」

そして咲希が指を差した方向を見ると、魔理沙は床に倒れて気絶していた。夜見はかなりの強さで頭を刀の柄頭で殴った為、起きるには相当の時間がかかりそうだった。

夜見「…起きる様子はないし、どうすれば…」

咲希「うーん、それならメイド長に聞いてみる？」

夜見「メイド長って咲夜さんのことでもいいんだよね？」

咲夜「呼びましたか？」

夜見「… 毎度毎度いいタイミングで来るな、咲夜さん」

夜見が振り向くと、そこには咲夜が立っていた。すると咲夜は焼け爛れた夜見の手に気付き、少し心配そうに夜見に話しかけた。

咲夜「黒夜様、手が大変焼け爛れておりますが痛くないのですか？」

夜見「ん？ああ、これが、これは気にしなくていい そんなことより、魔理沙さんはどうかしてくれないか？」

咲夜「わかりました それと咲希、貴女は遊んでばっかいないで、ちゃんと仕事をしなさい お嬢様がせっかく雇ってくださったんですよ？」

すると咲希はめんどくさそうに言った。

咲希「えく？そんなの妖精メイドに任せればいいじゃん なんて私もやらなきゃいけないの？」

咲夜「…： そうですね では、約束通りおやつはお預けと言うことでいいんですね？」  
咲希「えっ!?!ちよ、ちよっと！おやつは関係無いでしょ！」

咲夜「いえ、お嬢様がそうおっしゃってましたので…。」

咲希「あー、なんだろうーなー 急にお仕事がしたくなってきたなー メイド長、何かお仕事無いかなー」

咲夜「それなら、確かお昼ご飯の準備が必要だったわね」

咲希「じゃ、じゃあ！私が準備してくる！」

そう言つて咲希は縮地を使つて図書館から出ていった。そしてその様子をずっと見ていた夜見は咲夜に話しかけた。

夜見「なんというか、咲希さんつてちよろいな」

咲夜「おかげで助かつていますがね、それでは、私はこれで」

そう言つて咲夜は夜見に頭を下げると、魔理沙と共にどこかへ消えてしまった。夜見は咲夜が魔理沙を一体どこに持つていったかが少し気になったが、特に気にすることでも無いなど思つて考えるのはやめることにした。

しばらくその場で待つていると、フランドールはパチュリーと共に現れた。

フランドール「黑夜、パチュリーを連れてきたから、早く手を出して！」

夜見「本当に連れてきたのか、別に気にすることでもないだろ？」

するとフランドールは夜見の左手を掴んできた。

フランドール「気にならない怪我じゃないでしょ！こんなに焼け爛れて…あれ？」

そしてフランドールは夜見の左手を見てみると何か違和感を感じたが、その違和感の正体にすぐ気付いた。それは、夜見の左手がさつき見た時より全然焼け爛れていないように見えたのだ。

フランドール「あ、あれ!? さっきはひどく焼け爛れてたはずなのに!!」  
夜見「ほらな、言っただろ? 気にするなつて」

パチュリー「フランドール、貴女随分慌ててたから見間違えただけじゃないの?」

フランドール「そ、そんなこと無いよ、ちゃんと私見たもん! 黑夜の手がひどく焼け爛れたのを!」

パチュリー「まあ、実際そんなに焼け爛れてる訳でもないけど、念のために軽く手当程度はしておいた方が良くないんじゃない?」

夜見はパチュリーの提案を聞いて、確かにこのまま放置するのは危ないと思ったため、軽い手当程度なら受けることにした。

夜見「そうだな、それなら少し悪いけどまた咲夜さんを「呼びましたか?」:・: 本当にすぐ来るな」

咲夜の声が背後から聞こえた為、振り返るとそこには手に救急箱を持った咲夜が立っていた。

夜見「しかも、ご丁寧に救急箱まで持ってきて」

咲夜「いいえ、呼ばれたらすぐに駆け付けるのもメイドの嗜みたしなですので」

夜見「嗜みねえ まあ、そんなことより手当て出来るか?」

咲夜「おまかせください」

すると咲夜は救急箱から包帯や軟膏を取り出して、手際よく夜見の左手を手当てした。左手全体が包帯で巻かれる頃には10分もかかっておらず、わずか5分程度で手当ては終わった。

咲夜「はい、終わりました」

夜見「ああ、ありがとう すまないな、何度も呼んで」

咲夜「いいいえ、こちらこそお嬢様や妹様のお相手をしてくださりありがとうございます  
ます それに、用があつて呼ばれることなんていつものことで慣れてるので大丈夫ですよ」

夜見「そうか、ありがとう さてと、俺はレミリアさんのところに戻るかな それじゃあ」

そして夜見は図書館から出て、レミリアの部屋へと向かった。夜見はレミリアの部屋の前に着くと扉を軽くノックした。

コンコン

レミリア「いいわよ、入って」

レミリアに許可を得た夜見はレミリアの部屋に入ると、レミリアは先ほどチェスで遊んでいたテーブルの椅子に座って優雅に紅茶を飲んでいた。

レミリア「お疲れ様、黒夜」

夜見「ああ、今回も派手に暴れてくれたよ まったく」

そして夜見はレミリアの向かいの椅子に座り仮面を外すと、レミリアは夜見の左手に巻いてある包帯に気が付いた。

レミリア「あら？その包帯は一体どういうことかしら？」

夜見「ん？ああ、これか 魔理沙さんとフランドールさんが弾幕ごっこしてたんだが、本が大変になりそうになったから止めた結果だ」

レミリア「その包帯の巻き方からして、火傷ね フランのレーヴァテインにでも巻き込まれたのかしら？」

夜見「巻き込まれたというよりは、レーヴァテインに自ら向かったって言った方が正しいな」

レミリア「あら、そう でも、大丈夫なんでしょう？この前に言っていた体質のお陰で」

夜見「まあな 便利なのかもしれないが、逆に本当に大丈夫なのか心配にもなるもんだがな」

そう言つて夜見は左手に巻かれていた包帯を取ると、左手に焼け爛れた跡が手のひらの中央だけに少しだけ残っている程度までに回復していた。その様子を見てレミリアは夜見に問いかけた。



レミリア「本当に見たわけじゃないから信用しがたいけれど、本当に話したとおりに回復が早いのかしら？」

夜見「ああ 最初は手の全体が焼け爛れてたんだが、そろそろ治るな」

レミリア「あら？ 焼け爛れるような怪我をしていたのね だったら最初から怪我の回復速度を見てみたかったわね」

夜見「… そんなの見て、何が楽しいんだ？」

レミリア「人間が妖怪以上の早さで怪我が治るだなんて珍しいじゃない この前言った骨折もたった1週間で治しただなんて、人間じゃ普通考えられないわよ？」

夜見「そんな話、よく覚えてたな」

実は夜見は外出・仕事を禁止された日からわずか1週間で骨折が治っていたのだ。しかし夜見はさとりには信用されなれないと思っただので骨折が治っても3週間程は黙っていて、結局1ヵ月程は仕事には行かなかつたのだ。

するとレミリアは夜見にある質問をしてきた。

レミリア「それにしても貴方、本当に人間なのかしら？」

夜見「さあな、幻想郷は普通じや考えられないようなこともあったりするもんだから もしかしたら、その一部が原因なのかもな」

レミリア「まあ、そうね 貴方はもともと外の人間だし、幻想郷の影響を受けてそん

な体質になつてもおかしくはないわね」

すると夜見は席を立ち、レミリアに帰ることを告げた。

夜見「さてと、俺はそろそろ帰るかな」

レミリア「あら、もう帰るかしら？もつとゆっくりしていきなさい」

レミリアは夜見にまだ紅魔館にいるように伝えたが、夜見は断ることにした。

夜見「残念だが、何も用が無いのに長居する理由はないだろ？それに、何も用が無いのに長居するとちよつと拗ねるかもしれない家族が1人いるからな」

するとレミリアは納得したように頷いた。

レミリア「そう、それなら仕方ないわね」

夜見「じゃあな、レミリアさん 今度来る時には何か手土産でも持つてくるよ」

レミリア「ふふ、期待してるわよ それと、もし暇だったら夜の8時頃に人里に来な

さい」

夜見「夜の8時に人里？何かあるのか？」

レミリア「行つてみればわかるわ 貴方でも少しは楽しめるかもしれないわよ？」

夜見「ああ、わかった それじゃあ、また8時頃な」

そして夜見は紅魔館を出て、地底に帰るために森へと入っていった。

## 第23話 3人の姉妹とライブの約束

夜見は森の奥へ進んでいたが、昼前だというのに薄暗かった。それは木の上に積もった雪のせいなのだが、今日はやけに薄暗いように見えた。

夜見（妙に薄暗いな まあ、気にすることも無いな）

夜見は薄暗さを気にすることなく地底への穴に向かってしていると妙な音に気が付いた。

♪♪♪♪♪

夜見（ん？この音… 一体どこから？）

音の根源が遠いからか、うっすらとしか聞こえないが何やら楽器の音色が聴こえてきた。夜見は音からして弦楽器の部類だとわかった。

そして夜見は足を止めると目を瞑って、楽器の音色に耳を済ました。

夜見（右からだな 一体誰が演奏なんかしてるんだ？）

そして夜見は音色が聴こえる方向を確認すると、その方向へ足を進めた。音の方向に進むに連れて楽器の音がどんどん鮮明に聴こえてくると、夜見はこの音色はヴァイオリンが奏でていることに気が付いた。

そして夜見は前にこいし達とかくれんぼをして遊んだ開けた場所に出ると、その中央

にヴァイオリンを演奏している少女が見えた。

その少女は金髪のリョートヘアーで、頭には円錐形をした返しある黒い帽子を乗せており頂には赤い三日月の飾りが付いている。服装は白いシャツの上に黒い服、黒いスカートを着ていた。

その少女は夜見に背中を向けて演奏をしているからか、まったく夜见到気付く気配は無かった。そして夜見は少女には悪いがもう少し演奏を聴いていようと木に背中を預けるようにもたれかかってヴァイオリンの音色を聴いていた。

しばらく少女はヴァイオリンを演奏していたが、2分ほどで演奏が終わってしまった。すると少女はポツリと独り言を呟いた。

？「これなら、本番も大丈夫ね」

しかし夜見はその独り言は聞こえておらず、夜見は少女に向かって拍手をした。

そして少女は拍手の音にびっくりして振り返ると、驚いた様子だった。

？「ひやつ!?だ、誰!？」

夜見「ああ、驚かせてすまない、綺麗な音色だったから、つい拍手を」

？「に、人間!?あ、あなた大丈夫なの!？」

夜見「ん?大丈夫ってどういうことだ?」

？「...え?な、なんともないの?」

夜見「ああ、大丈夫だが？」

？「ど、どのくらい聴いてたの？」

夜見「ん、2分くらいだな」

？「ど、どういうこと……」

すると夜見はこのままだと話がなかなか進まないと思い、とりあえず仮面を外して自己紹介をすることにした。

夜見「俺は黑夜夜見っていうんだが、貴女の名前はなんていうんだ？」

？「あ、えっと、私はルナサ・プリズムリバー」

夜見「ルナサさんだな、よろしくな」

そして夜見は手を差し出すとルナサも手を出して握手をした。しかし夜見はその時にルナサから生気や体温が感じられなかった。

すると夜見はルナサにあることを聞いた。

夜見「……もしかしてルナサさんって人間じゃないのか？」

ルナサ「ええ 私は騒霊だから」

ルナサは自分が霊であることを明かしたが、特に夜見は気にしていない様子だった。

夜見「へえ、騒霊ねえ 霊には実体が無いか触れないとかよく聞くけど、案外触れるもんなんだな」

ルナサ「そうね」

夜見は話した時からルナサのテンションの低いなと感じていたが、別に話したくない訳でもなさそうなので本題を切り出した。

夜見「まあそんなことより、さっきの大丈夫かって聞いてきたのはルナサさんの能力か何かが関係してるのか？」

ルナサ「うん、そう 私は「鬱うつの音を演奏する」能力を持つてるから、貴方が鬱うつになっていないかが心配だったの」

夜見「鬱うつの音ねえ……別に綺麗な音色だったし、鬱うつになるだなんて信じられないけどな」

ルナサ「そう それと、そんなに私の演奏上手だった？」

夜見「ああ、上手だった ヴァイオリン1つだけで、あんな綺麗な音色が奏でられるんだな」

ルナサ「そっか、ありがとう」

ルナサは表情にはあまり出していなかったが、とても嬉しそうにしている様子だった。すると夜見の背後から2人の声が聞こえてきた。

？「あ、やっぱりここにいた 姉さん」

？「本当だ！メルラン姉さんの言う通りだったね！」

夜見は声が聞こえた方向を向くと、森の奥から2人の少女が現れた。

1人は薄い水色のショートヘアで頭にはルナサと同じ形の薄いピンクの帽子を被っており、頂には太陽を連想させるような形の青い飾りが付いていた。服装は薄いピンク色をしたルナサと同じ服装だった。

もう1人は茶髪のショートヘアで頭にはルナサと同じ形の赤色の帽子を被っており、頂には緑色の流れ星の飾りが付いていた。服装の上は赤色のルナサと同じ服だったが、下は赤色のキュロットを履いていた。

格好や言っていた言葉から察するに、おそらく姉妹なのだろう。すると薄いピンク色の格好をした少女はルナサに話しかけた。

「もー、姉さん 1人で練習するなら何か一言声をかけてから出掛けてよね」  
しかしルナサはその少女が言っていたことに疑問を持つている様子だった。

ルナサ「え？ 私は朝起きたときにリリカに出掛けるように言っただけで、聞いてないの？」

ルナサがそう言うと、その少女はキョトンとした。

「え？ でも私はリリカから何も聞いてないよ？」

「あれ？ 私、ルナサ姉さんにそんなこと言われたっけ？」

ルナサ「……リリカ、人の話はちゃんと聞きなさい まったく」

ルナサは赤色の格好をした少女に呆れていると、その赤色の格好をした少女は夜見に話しかけてきた。

？「ねえ、ところで貴方は一体誰？ルナサ姉さんと何か話してた様子だったけど？」

夜見「ああ、俺は「もしかして、ルナサ姉さんの彼氏さん？」

赤色の格好をした少女が夜見の声を遮ってそういうと、ルナサは顔を真つ赤にしてその少女に怒鳴った。

ルナサ「な、何言ってるの!? そんなわけ無いでしょ!？」

？「あれ、違うの？でもルナサ姉さん、顔が真つ赤だよ？」

？「え、嘘　姉さん、まさか私達に黙ってたの？」

ルナサ「だから、違うって！」

しかしルナサは顔を真つ赤にして反抗しているため、その赤色の格好をした少女は夜見にこんなことを聞き始めた。

？「ねえ、彼氏さん　ルナサ姉さんとキスとかしたの？」

するとルナサは更に顔は赤く染まった。

ルナサ「ちよつと！リリカ!？」

夜見「いや、だから俺は「いや、やつばいいや！言わずらいよね」…はあ」

？「ね、姉さん？もうそんなに深い関係なの？」



ルナサ「だ、だから違うって言ってるでしょ！人の話を聞きなさい！」

？「あはは、でもルナサ姉さんが顔を真っ赤にしたってことはキスはしたんだね」

ルナサ「ち、違うって言ってるでしょ！」

するとルナサは赤い格好をした少女に殴りかかる勢いで襲いかかろうとしたので、夜見は両手で肩を掴んで止めた。

夜見「ルナサさん、落ち着いて」

ルナサ「リリカ！いい加減にしなさい！」

？「ルナサ姉さん、彼氏さんが落ち着いてって言ってるんだから落ち着いてあげなよ」  
夜見「ああ、あとちなみに2人も落ち着いてくれないか？話が進まない」

？「そ、そうね リリカ、まずは話を聞きましょう」

？「はいはい、わかったよ 彼氏さん♪」

ルナサ「リリカ！いい加減に」ルナサさん、だから落ち着いてって」

しばらく夜見はルナサを押さえていると落ち着き始めたので、手を離して2人に自己紹介をした。

夜見「俺は黑夜夜見 念のため言うけど、ルナサさんとはさつき知り合ったばかりだから彼氏でもなんでもない」

夜見は軽く自己紹介をすると、次に薄いピンク色の格好をした少女が自己紹介をし

た。

？「私はメルラン・プリズムリバー 姉妹の中の次女です」

？「はいはい！私はリリカ・プリズムリバー！姉妹の中の三女です！」

夜見「えつと、メルランさんにリリカさんか よろしく」

リリカ「黑夜ー！よろしくねー！」

するとリリカは夜見の手を両手で掴んでブンブン上下に振り始めた。おそらくリリカはとても元気で活発な子なのだろう。

メルラン「リリカ、黑夜さんが困ってるよ」

リリカ「えー？そんなことないよ！ね？黑夜」

するとリリカは手を振るのを止めて笑顔をこちらに向けてきた。正直夜見は困つてもいないので、とりあえず頷いた。

夜見「まあ、別に困ってないよ リリカさんはずいぶん元気なんだな」

リリカ「元気なのが何よりー番だよ！」

夜見「そうかもな とりあえず、手はいつ放すつもりだ？」

するとリリカはルナサの方をチラリと見ると、リリカは笑顔でこう言つて手を放した。

リリカ「そうだね、ずっと手を掴んでたらルナサ姉さんが妬いちやうからね♪」

ルナサ「リリカ！いい加減にしなさい！」

リリカ「わく、怒った怒った♪につげろ♪」

するとリリカは振り返って森の中へ走って入っていくと、ルナサも走って森の中へ入っていった。

そして残されたメルランは夜見に話しかけてきた。

メルラン「そういえば、黒夜さん ルナサ姉さんと一体なんの話をしてたんですか？」

夜見「ん？ああ、演奏が上手だなって話をしてたんだ ヴァイオリンだけであんな演奏が出来るんだな」

するとメルランは心配そうな様子で聞いてきた。

メルラン「え？つまり黒夜さんはルナサ姉さんの演奏を聴いたってこと？」

夜見「まあ、そうなるな」

メルラン「大丈夫？気分が下がったりとかしてない？」

夜見「ああ、能力の話か？それに関しては特に影響は何も無かったが？」

夜見がそう言うと、メルランは少し疑問に思っている様子だったが安心したように言った。

メルラン「そうなんだ なら良かった」

すると夜見はふと、あることが気になったのでメルランに聞いてみることにした。

夜見「そういえば、メルランさんとリリカさんはルナサさんと姉妹なんだよな？」

メルラン「うん、そうだよ。それがどうかしたの？」

夜見「姉妹って言うことは、何か似たような能力を持ったりしてるのか？」

メルラン「うん、持ってるよ。私の能力は「躁そくの音を演奏する」能力。リリカは「幻想の音を演奏する」能力なんだ」

夜見「躁の音に幻想の音か。姉妹揃って全員、音楽に関する能力を持ってるんだな」  
夜見は正直な感想を言うと、メルランはある提案をしてきた。

メルラン「そうだ！もし良かったら、私の演奏も聴いてくれないかな？1人で練習したり、みんなで合わせて練習はしてるんだけど、聴いてる側の意見って取り入れる機会が少ないから。ね？お願い！」

メルランはそう言って夜見に向かって手を合わせてお願いをしてきた。1人の演奏は聴いて他の人の演奏を聴かないというわけにもいかないのです、夜見はそのお願いを受け入れることにした。

夜見「まあ、別に構わないが……」

メルラン「よかった！じゃあ、ちゃんと聞いててね？」

するとメルランはどこからともなくトランペットを取り出して演奏をし始めた。メルランのトランペットの音は、ルナサのヴァイオリンとは一味違う心地よい音色を奏で

ていた。

♪♪♪♪♪ ♪♪♪♪

夜見はトランペットの音を静かに目を瞑りながら聴いていたが、あつという間に時間は過ぎてしまい、5分程で演奏は終わってしまった。

そして夜見は目を開けると目の前には何故か不安そうなメルランがいた。

メルラン「ど、どうだったかな？何か変なところあった？」

不安そうなメルランに対して夜見は拍手をしてこう言った。

夜見「いや、変なところは一つも無かった。むしろ、とてもいい演奏だった」

メルラン「え!?!ホント!?!良かった。私、この曲少し苦手だったんだよね」

夜見「さっきの曲、苦手なのか？そうとは思えないほどいい演奏だった？」

メルラン「そ、そんなに褒めないでよ、恥ずかしいよ」

メルランはそんなことを言っていたが、とても嬉しそうな様子だった。

そして夜見の後ろから足音が聞こえたので夜見は振り返って見ると、そこにはリリカの首根っこ辺りの襟を掴んで引き摺ずっているルナサがいた。リリカは結局ルナサに捕まったようだ。

リリカ「ちよつと、ルナサ姉さん！私が悪かったから引き摺らないで！」

ルナサ「はあ、はあ やつと捕まえた」

夜見「ルナサさん、大丈夫か？」

ルナサ「だ、大丈夫 これくらい」

夜見はルナサを心配していると、リリカは夜見に助けを求めてきた。

リリカ「ちよつと黑夜!?!私の心配はしてくれないの!?!」

夜見「追いかけられる理由は自業自得だろ 心配も何もないだろう?」

するとリリカは次にメルランに助けを求めてきた。

リリカ「そんな!メルラン姉さんも何か言つてよ!」

メルラン「え?えつと... 私は黑夜さんの言う通りだと思ふよ」

リリカ「メルラン姉さんまで!?!」

するとリリカは希望が絶たれ、絶望したような雰囲気を出していたので、とりあえず

夜見はルナサにリリカを放すように促した。

夜見「ルナサさん、リリカさんも反省しているようだし放してあげたらどうだ?」

するとルナサはリリカの様子を見て少し考え込むと、リリカに向かつてこう言った。

ルナサ「...リリカ、黑夜さんに感謝しなさいよ」

ルナサはそう言うとおつさりと手を放してリリカを解放した。ルナサの発言から察するに、今回は夜見がいるから許してあげたのだろう。

するとリリカは夜見の前に立って頭を下げてきた。

リリカ「ありがとう、黑夜」

夜見「いや、いいんだ別に　とりあえずリリカさんはからかうのも大概にな？」

リリカ「うん、ありがとう」

すると今度はルナサが夜見の前に来て話しかけてきた。

ルナサ「そういえば黑夜さん、私がリリカを追いかけてる間、もしかしてメルランの演奏を聴きましたか？」

夜見「ああ、聴いたぞ　メルランさんも演奏が上手なんだな」

メルラン「そうそう　それで黑夜さん、演奏が上手って褒めてくれたんだよ？」

ルナサ「まあ、メルランが褒められたのはどうでもいいとして「ちよっと!?姉さん!」それより、黑夜さん　何か気持ちが高ぶったりしてませんか？」

すると夜見は何故ルナサがそんなことを聞いてきたか疑問に思ったが、ルナサの最後の発言の方で理解した。

夜見「いや、別に?そんなことは無いがなんでそんな…　ああ、能力のことか」

ルナサ「やつぱり、黑夜さんには影響しなかったんですか」

メルラン「でも、ルナサ姉さんの能力だって黑夜さんに影響は無かったんだから、不思議じゃ無いんじゃないの？」

ルナサ「メルラン、私の鬱の音と貴女の躁の音は、直接精神に作用するの　なのに黒

夜さんに一切影響が出てないのは逆に不思議なのよ？」

メルラン「いや、確かにそうだけど……」

夜見「……まあ、別にいいだろ。結果的には影響は無かった、たつたそれだけだ」

するとルナサは夜見に向かって真剣な様子でこう言った。

ルナサ「黑夜さん、そんな適当に済ませていい問題じゃないんです。もし万が一のことがあったらどうするんですか」

すると夜見は疲れたようにため息をついた。

夜見「ルナサさんはちよつと真面目すぎじゃないか？結果的には影響無かった、たつたそれだけのことだ。何に対しても真面目に向き合つてたらきりがないだろ？だからたまには適当でいいんだ、適当で」

するとメルランは夜見の発言に賛成した。

メルラン「確かに、黑夜さんの言う通りだよ。ルナサ姉さんは真面目すぎだよ？たまには気楽に事を流したっていいじゃん♪」

しかしルナサは引き下がることは無かった。

ルナサ「駄目です、黑夜さん。万が一が危険なことに繋がる可能性だつてあるんですよ？」

夜見「ルナサさん、ここは幻想郷だ。別に能力が効かない人間がいたつて不思議じゃ



ないだろ？実際に人間全員に効くか試した訳でもないだろうし」

ルナサ「た、確かにそうですけど……」

そして夜見はルナサに向かって優しくこう言った。

夜見「だから、たまには気楽に事を流したっていいんだ そんなに気を張ってたら、疲れてばっかりだろ？」

するとルナサは少し黙っていたが、夜見に笑顔を向けてこう言った。

ルナサ「……確かに黒夜さんの言う通りかもしれませんが 私には少し、気を張りすぎたのかもしれない なんだか、いつもの疲れが取れたような気がします」

夜見「そうか、それなら良かった でも、ルナサさんのその真面目な性格は良い所だから、それだけは大切にな？」

ルナサ「はい、そうですね」

ルナサは笑顔でお礼を言うと、メルランはルナサにあることを提案した。

メルラン「そうだ！姉さん 良かったら黒夜さんに、今日のライブで演奏する曲を聴いてもらったらどう？」

するとその提案にリリカも乗り始めた。

リリカ「確かに！メルラン姉さんの言う通りだよ！」

ルナサ「た、確かに良い案かもしれないけど、黒夜さんは大丈夫ですか？」

するとルナサの質問に少し考え込んだが、夜見はルナサ達の練習にもなるんじゃないかと思つた。

夜見「まあ、ルナサさん達の練習になるっていうなら、別に構わないが？」

メルラン「じゃあ、決まりだね！」

リリカ「やった！よくし、いつも以上に張り切つてやるぞ〜！」

夜見「まあ、本番に影響の無い範囲でな？」

するとルナサの手元にヴァイオリン、リリカの手元には両端に白い羽の生えたキーボードが現れた。そして彼女達の手元に楽器があるのをメルランが確認すると、メルランは少し前に出てルナサとリリカに確認を取つた。

メルラン「準備は良い？ルナサ姉さん！リリカ！」

ルナサ「大丈夫よ」

リリカ「準備バツチリ！いつでもいいよ！」

メルラン「それじゃあ！最初の曲、いっくよ〜！」

メルランが合図を出すと、リリカがキーボードで音色を奏でた。そして後に続くようにルナサとメルランも、それぞれの楽器で音色を奏でていった。

3人の組み合わせさせた音色はどんな楽器の音色より、どんな曲よりも心地よい音を奏でていた。

そして彼女達の心地よい音色は15曲程続いた。実際は1時間以上の長い時間が過ぎ去った筈なのに、彼女達の演奏はあつという間に終わってしまった気がした。

メルラン「最後までありがとう！どうだった？黒夜さん」

すると夜見は拍手をして、彼女達に静かにこう言った。

夜見「とても綺麗な音色で素敵なお演奏だった。いままで聴いた演奏の中で一番素敵なお演奏だ」

夜見がそう言うと、彼女達はとても喜んでる様子だった。

リリカ「やったね！ルナサ姉さん、メルラン姉さん！大成功！」

メルラン「リリカの演奏と姉さんの演奏がとても良かったからだよ！」

ルナサ「いえ、メルランの演奏もとても良かったわよ」

彼女達はお互いに良かった所を褒め合っていたが、夜見はゆっくりと空を見上げた。日は森に入る前より高く昇っており、そろそろ帰らないと昼食に遅れてしまう気がした。

夜見（さて、そろそろ帰ろうかな）

そして夜見は地霊殿に帰るために森の中に入ろうとしたが、そこでリリカに呼び止められた。

リリカ「あ！ちよつと、黒夜！どこに行くの!？」

夜見「いや、そろそろ帰ろうと思ったんだが……」

リリカ「え、他にもいろんな曲を聴かせてあげるからもうちょっといてよ」

ルナサ「リリカ、我が儘ま言まわないの。また会った時にでも聴いてもらったらいいじゃない」

するとメルランはリリカにある案を言い出した。

メルラン「そうだ！それなら、今日のライブに来てもらったらいいんじゃない？」

リリカ「それだ！メルラン姉さん、ナイスアイデア！」

夜見「ライブか。それなら行けるかもしれないが、一体どこで、いつからライブをやるんだ？」

リリカ「場所は人里、時間は夜の8時だよ！」

しかしリリカの言った場所と時間はレミリアに聞いた内容と合致していた。

夜見（人里で夜の8時？その時間って確かレミリアさんが言ってた時間と同じだなもし別件だとしても、暇ならって言ってたし大丈夫か）

夜見「ああ、その時間なら大丈夫だ」

リリカ「本当!?じゃあ、これを渡しておかないとね！」

するとリリカはこちらに近付いて紙を一枚差し出してきた。それを受け取るとその紙には今日のライブの日程が記載されていた。

夜見「これってライブの予定表か？」

するとリリカは首を横に振った。

リリカ「ううん、違うよ。それは予定表兼入場券。それが無いとライブは見る事が出来ないんだ」

夜見「・・・まあ、それはありがたいんだが。あいにく今は金を持ち合わせていないんだ」

リリカ「え、そうなの!？」

そしてリリカはしょんぼりとしていたが、ルナサが意外な事を言い出した。

ルナサ「じゃあ、それは練習の演奏を聴いてくれたお礼としてあげるわ。それなら解  
決じゃない？」

ルナサはそう言ったが、夜見はそれだけの理由で貰うのはなんだか気が引けてきた。

夜見「お礼って、別に俺はただ演奏を聴いてただけだが？」

ルナサ「言ったじゃない、練習の演奏を聴くのに付き合ってくれたお礼。聴く人がい  
るなかで練習するだなんてなかなかない機会なのよ」

そう言われて夜見はもう一度貰うのを拒否しようとしたが何故か、言っても同じ事の  
繰り返し起きるような気がしたので素直に受け取っておくことにした。

夜見「・・・じゃあ、貰っておくか」

そして夜見はその紙を綺麗に2つ折りにしてポケットに入れると、夜見は森の奥へ向かって行った。

メルラン「じゃあ、黒夜さん またライブの時に会おうね〜 バイバイ」  
リリカ「バイバイ！また夜にねー！」

ルナサ「またね、黒夜さん」

夜見「ああ、またな」

後ろでは彼女達が手を振っていたので、夜見は振り返って軽く手を振り返して地底へと目指していった。そして夜見は地底へ続く穴に着くと、そのまま地底に入って地霊殿を目指して歩いていった。

そして夜見はしばらく地底を歩いていると、目の前に見覚えのある人物が見えてきた。そしてその人物はこちらに気が付くと、あちらから声をかけてきた。

ヤマメ「あ、黒夜 今日帰ってくるの早かったね」

夜見「ああ、今日は特に仕事は無かったんだ」

ヤマメ「へえ、そうなんだ でも、疲れないで済むからいいんじゃない？」

夜見「最近の仕事が少ないから、むしろ金銭的には困るんだけどな」

ヤマメ「そっか、じゃあいいことばかりって訳じゃないんだね」

夜見「まあ、そういうことだな」

すると夜見は腰に差ししてある刀を鞘ごと引き抜くと、自分の頭の上を防ぐように構えた。するとすぐに

ガキーン!

落ちてきたものを刀で防いだ。そして夜見はある人物の名前を呼んだ。

夜見「はい、これで通算50回目だな キスメさん」

すると落ちてきたものがふわふわと浮かぶと夜見の目の前に降りてきた。それは地底に初めて入ったときに上から落ちてきた桶に入って白い着物を着た緑色の髪をした少女だった。

ヤマメ「あらら、今回も失敗だね キスメ」

ヤマメはその桶に入った少女をキスメと呼んで話しかけると、キスメは小さく頷いた。

夜見「ふう、今回は話で気を逸らしてる隙につてところだな」

ヤマメ「なーんだ、ばれてたみたいだね キスメ」

キスメ「・・・でも、楽しかった」

キスメは小さく呟くと、夜見は少し驚いた様子だった。

夜見「やつと俺の前で話してくれたな キスメさん」

ヤマメ「おお、キスメ もう黑夜の前での人見知りは大丈夫なの?」

キスメ「…うん、少しだけ」

ヤマメ「そっか 良かったね、黑夜」

夜見「ここ最近、こつちから話しかけても何も話してくれなかったから嫌われてるのかと思つてたけどな」

夜見がそう言うのと、キスメは首を横に振つた。

キスメ「ううん、そんなことない」

夜見「そうか、ありがとう」

キスメ「どう、いたしまして それより…それ、何？」

そう言つてキスメはある物を指差した。それは夜見のポケットからはみ出ていたライブの入場券だった。

すると夜見はそのライブの入場券をキスメに手渡すと、ヤマメも覗き込んで2人でその入場券を見始めた。

ヤマメ「へえ、人里でライブなんかやるんだね」

キスメ「面白いのかな？」

ヤマメ「さあね ところで黑夜はこのライブ、一体誰と行くつもりなんだい？」

夜見「え？誰と行くつて、別に1人で行くつもりだが？」

ヤマメ「え？でも、ここにこう書いてあるけど？」



そして夜見の方に入場券を向けてヤマメの指差した所を見ると、そこにはこう書かれていた。

「これは2人用の入場券です。必ず2人でお越しく下さい。」

夜見（：：リリカさん、わざとこの入場券を俺に渡したな）

すると夜見はため息をつきながらその入場券を返してもらった。するとキスメは夜見に優しく声をかけてきた。

キスメ「：：大丈夫？」

夜見「ああ、大丈夫、一緒に行く人だつたら当てがあるからな　じゃあな、ヤマメさん、キスメさん」

ヤマメ「じゃあね、黒夜」

キスメ「バイバイ、黒夜」

そして夜見はヤマメとキスメと別れて再び地霊殿へ向かっていると、夜見はあることを思った。

夜見（まあ、さとりさん達にこれを見せたら、絶対こいしさんが付いていくつて言うんだろうな）

しばらく夜見は地底を歩いていると地霊殿に着いたので、夜見はゆつくりと玄関を開けた。

## 第24話 誰とライブに行こう？

夜見は地霊殿の玄関を開けたが、エントランスには誰もいなかった。その光景に夜見は違和感を感じた。

夜見（あれ？今日はこいしさん待ってないのか……）

ここ最近、夜見が地霊殿に帰るとこいしが玄関で待っていてよく抱き付いてきていたのだが、今日は珍しくこいしがエントランスにいなかったのだ。

夜見（なんでだ？……まあ、今日はそういう気分じゃなかったんだろうな）

そして夜見は仮面を外して自分の部屋に向かい、部屋に入ろうとした瞬間にある音が聞こえた。

チリチリチリチリン

夜見（ん？なんだ？）

その音はベルが連続で鳴るような音だった。しかもその音は夜見の背後から聞こえたため、おそらくこいしの部屋からその音はなったのだろう。

そして夜見は気になってこいしの部屋の扉をノックした。

コンコン

しかし少し待っても返事などは返って来なかった。すると、またこいしの部屋からベ  
ルの音が聞こえてきた。

チリチリチリチリン

夜見（なんなんだ一体？）

そして夜見はゆつくりと扉を開けると、そこにはベッドに起き上がって汗をかいてい  
るこいしがいた。

こいし「ふえ？お兄ちゃん？」

夜見「・・・何してるんだ？こいしさん」

すると夜見はこいしに近付こうとしたが、こいしは何故か慌てている様子だった。

こいし「だ、駄目だよ！お兄ちゃん、近付いたら！」

夜見「駄目って・・・どうして？」

こいし「なんでって、ケホツケホツ」

夜見「こいしさん？」

するとこいしは急に渴いた咳をした。よく見るとこいしの枕元には先ほどの音の元  
であろうベルと氷嚢ひょうのうが置いてあり、こいしの顔は少し赤くなっていた。その様子を見た  
夜見はすぐに状況を理解した。

夜見「ああ、風邪で熱が出たのか」

すると夜見はそのまま咳をしているこいしに近付いて行った。

こいし「ケホツケホツ　だから駄目だつてケホツ　お兄ちゃん」

そしてこいしのすぐそばまで来た夜見はこいしの額にゆつくりと手を当てた。

こいし「お、お兄ちゃん？　聞いている？」

夜見「ああ、ずいぶん熱があるな　寝てないと、こいしさん」

そして夜見は上体を起こしているこいしをゆつくりと寝かせて、布団をかけた。そしてこいしの額に枕元にあつた氷嚢をゆつくりと乗せた。

こいし「あ、ありがとう、お兄ちゃん」

夜見「どういたしまして　ところでこいしさん、何か持ってきてほしい物とかあるか？」

こいし「え？　じゃ、じゃあ、お水を持ってきてほしいな」

夜見「わかった　持つてくるよ」

そして夜見はこいしの部屋を出てキッチンに入ると、そこでは昼食の準備をしているさとりがいた。しかしさとりは昼食の準備に意識を集中させているのか、こちらに気付く素振りはまったくなかった。

そして夜見は食器棚からコップを一つ取り出すと、そこでようやくさとりは夜見がいることに気が付いた。

さとり「黑夜さん、帰ってたんですか 帰ってきたのなら一言ぐらい声をかけてください」

夜見「ああ、ただいま 準備の邪魔をしちゃいけないと思って黙ってたんですけど……すまないな」

さとり「それより、黑夜さん コップなんか取り出してどうしたんですか？」

夜見「こいしさんが喉が渴いたらしいから、水を持っていくんだよ」  
するとさとりは驚いた様子だった。

さとり「え!? こいしの部屋に入ったんですか!？」

夜見「ああ、入ったけど……何をそんな驚いてるんだ？」

するとさとりは夜見に向かって怒鳴り始めた。

さとり「な、何をしてるんですか! こいしはただの風邪じゃないんですよ!」

夜見「ただの風邪じゃないのか? だったら何の病気なんだ？」

さとり「こいしが今罹<sup>かか</sup>っている病気は、妖怪にしか罹らない感染力の高い病気なんですよ!」

さとの話に対して夜見は自分の言っていることを理解しているのか? と少し疑問に思ったが、とりあえず夜見はその病気に罹るとどんな症状が出るのかを聞くことにした。

夜見「そうだったのか それで、その病気に罹るとどうなるんだ？」

さとり「一般的には風邪とほとんど変わりはないんですが、異常に高い熱が出るのが特徴です！1日で治るからいいものの、あの病気に罹ったらとても辛いんですよ！」

夜見「へえ、そんな病気だったのか ところでさとりさん、何をそんなに怒ってるんだ？」

さとり「あの病気が黒夜さんに罹らないか心配してるんですよ！万が一あの病気に罹ってたらどうするんですか！」

すると夜見は少し申し訳なさそうに、さとりにあることを言った。

夜見「そうだったのか さとりさん、心配してくれてるのはありがたいんだけどさ……俺、妖怪じゃないぞ？」

夜見がそう言うときとりはハツとして頭を下げ謝ってきた。

さとり「ご、ごめんなさい、黒夜さん 私てつきり家族全員に感染しちゃうと思って」

夜見「いや、そんな頭を下げ謝らなくていいよ さとりさんはずっと妖怪のみんなと暮らしてたんだから勘違いするのも仕方ないよ」

さとり「そ、そうですか？」

夜見「慣れとか癖って直すのは難しいしな ゆっくり慣れていけばいいんだよ」

さとり「そうですか、ありがとうございます」

夜見「さてと、俺は早くこいしさんに水を持っていかないとな」

そして夜見は冷蔵庫の中から水の入ったピッチャーを取り出してコップに水を注ぐと、夜見はキツチンを出てこいしの部屋へ入っていった。

夜見「こいしさん、水を持ってきたよ」

こいし「ケホッ、ありがとう、お兄ちゃん」

夜見「大丈夫か？少し手伝うか？」

こいし「大丈夫だよ、お兄ちゃん、水を飲むくらい」

するとこいしは上体を起こして夜見の持ってきた水の入ったコップを受け取ると、こいしはコップに入っている水をゆっくりと飲み始めた。そしてこいしがコップの水を飲み干すと、夜見はそのコップをこいしから受け取った。

するとこいしは笑顔で夜見に話しかけてきた。

こいし「ありがとう、お兄ちゃん、少し楽になった気がする♪」

夜見「どういたしまして、こいしさん、ほら、布団をかけてちゃんと寝ないよ」

そして夜見は再びこいしを寝かせて布団をかけて氷嚢を額に乗せると、こいしは夜見に今日の出来事を聞いてきた。

こいし「ねえ、お兄ちゃんは今日はどんなお仕事をしてきたの？また紅魔館に行つて

きたの？」

すると夜見はこいしの部屋にある椅子をこいしの寝ているベッドの近くまで持つてくると、その椅子に座つてこいしの質問に答えた。

夜見「ああ、そうだよ　まあ、仕事が無かつたからちよつと聞きたいことを聞いてきただけなんだけどな」

こいし「へえ、そつか　そうなんだ……　楽しかつた？」

夜見「ん、まあ、楽しかつたかな？」

夜見がそう言つた途端、こいしは何故か少し寂しそうな顔をした。すると夜見はこいしの手のひらに優しく自分の手を乗せて、そつと握つた。

夜見「どうしたんだ、こいしさん？　そんな寂しそうな顔をして　何か嫌なことでもあつたか？」

こいし「……　ねえ、お兄ちゃん　その紅魔館の人達のこと、好きなの？」

夜見「ん？　そうだな……　いつももてなしてくるからありがたいつて気持ちはあるけど、好きつて気持ちとはまた違う感じかな」

夜見が正直に思つたことを言うと、何故かこいしは少し元気になつた。

こいし「そつか、そうなんだ　……　良かつた」

夜見「ん？　こいしさん、なんか言つたか？」



こいし「え!? な、何も言っていないよ!」

こいしは明らかに慌てた様子だったので何かを言ったのだろうが、夜見はとりあえず気にしないでおくことにした。

夜見「… まあ、いいけどさ」

こいし「そういえば、お兄ちゃん さつきからポケットからはみ出してるその紙ってなんなの?」

そう言つてこいしは夜見のポケットからはみ出してるライブの入場券をじつと見ていた。すると夜見はライブの入場券を取り出してこいしに見えるように広げて見せた。

こいし「… 人里でライブ? いつやるの?」

夜見「二応、今日やるらしいんだけど…」

こいし「そ、そうなの? だ、だったら一緒に行こうよ、お兄ちゃん」

夜見「こいしさん、駄目だよ こいしさんは体調が悪いんだから、ちゃんと寝てないと」

こいし「やだやだ、お兄ちゃんと行きたい! お兄ちゃんと一緒にライブ見たい!」

夜見「こいしさん、そもそもすごい熱も出てるんだから出歩くことも出来ないだろ?」

こいし「で、出歩けるもん!」

こいしはそう言うのとベッドから下りて夜見の目の前で立って見せたが、こいしの体は

フラフラと揺れていて今にも倒れてしまいそうだった。

こいし「ほ、ほらね？だ、大丈夫だよ？」

夜見「……こいしさん、そんなにフラフラしてて出歩けるわけないだろ 今日大人しく寝ておいたほうがいいぞ」

こいし「だ、大丈夫……夫 うう」

するとこいしは急に容態が悪化して夜見の方に向かって倒れてきた。そして夜見は倒れてきたこいしをそっと抱きしめるように受け止めた。

夜見「こいしさん、わかっただろ？こんな状態じゃ出歩けないんだから、大人しく寝ておくんだけ」

こいし「うう……やだ、嫌だ お兄ちゃんと、ライブ見に行きたいの……」

夜見「……はあ、なんでそんなにライブを見に行きたいんだか」

すると夜見はこいしをお姫様だっこで持ち上げると、ベッドに下ろして布団をかけた。そしてこいしの氷嚢を額に乗せると、夜見は椅子に座った。

こいし「お兄ちゃんと……ライブ、見に行くの 一緒にライブ行きたい……」

夜見「こいしさん、あまり無茶して心配させないでくれ」

するとこいしの部屋の扉から、コンコンつとノックの音が聞こえてきた。しかし何故か夜見が返事をした。

夜見「なんだ？さとりさんか？」

燐「ち、違うよ、あたいだよ。て言うか黒夜さんがなんで中にいるの？」

夜見「ああ、さとりさんが言ってたんだが、この病気は妖怪だけに罹るらしい。だから俺がそばにいてあげようと思ってるな」

燐「そうなんだ。それより、こいし様の昼食を持ってきたから早く開けてくれないかい？」

夜見「少し待っててくれ、すぐ開ける」

そう言つて夜見は立ち上がり扉を開けると燐はおぼんを持っていて、その上にはお粥が入っている小さな鍋とれんげ、水の入ったコップがあつた。

そして夜見は燐からおぼんを受け取ると、夜見は燐にお礼を言つた。

夜見「すまないな、わざわざ運んできてもらつて」

燐「いいんだよ。それより、こいし様の様子は？」

夜見「それが実は今日の夜に人里でライブがあつて、そのライブに行く約束をしてるんだけど、こいしさんが行きたいって言ってるんだ」

燐「ああ、確かにこいし様なら行きたいって思うだろうね。でも、こいし様は体調が悪いんだし1人で行けばいいんじゃない？」

夜見「確かにそうしたいんだけど、あいにく2人用の入場券を受け取つたもんだから

2人で行かないといけないんだ」

燐「ああ、それは困ったね 誰か誘える人に心当たりは無いのかい？」

夜見「残念ながら、まったく心当たりが無いんだ」

すると燐は少し考え込むと、夜見にこう言ってきた。

燐「そうだね…。それなら、あたいがさとり様と何か良い案がないか考えてみるよ」

夜見「そうか、期待してるぞ」

そして夜見はこいしの元に戻ろうとすると、燐がある質問をしてきた。

燐「そういえば、黒夜さんは昼食はいつ食べるつもりなんだい？一応さとり様は何か作ろうとしてるけど？」

夜見「ああ、別に用意はしなくていい 自分で何か作って食べるから」

燐「わかったよ じゃあ、先に食べてるからね」

そう言って燐はいつもご飯を食べている部屋へ入っていった。そして夜見はおぼんを持ってこいしの元に戻った。

夜見「こいしさん、昼食だけど…。食欲は大丈夫か？」

こいし「お兄ちゃん、一緒にライブ行きたいよ 一緒に行こうよ…。」

夜見「…。こいしさん、いつまで言ってるんだ 燐さんがお粥持ってきてくれたから、体を起こして」

「こいし「…ん？ご飯？」

夜見「ああ、そうだ だから体を起こして、じやないと食べられないだろ？」

するとこいしはゆっくりと動いて上体を起こしたが、こいしは先ほどより少しブーツとしていた様子だった。

その様子を見て夜見はこいしの額に手を当てると、先ほど触れた時よりも熱がある様子だった。

夜見（異常に高い熱が出るとはさとりさんは言ってたけど、まさかここまで出るなんて…）

こいし「…お兄ちゃん？ご飯じゃないの？」

夜見「ん？ああ、そうだったな 自分で食べられそうか？」

こいし「…ふえ？何か言った？」

夜見「…いや、なんでもない」

どうやらこいしは少し意識がぼやけているようで、容態は明らかに悪化している様子だった。

とりあえず何かしら食べないと容態は悪くなる一方なので、夜見は自分でれんげでお粥を掬<sup>すく</sup>ってこいしに食べさせることにした。

夜見「ほら、こいしさん 口を開けて」

こいし「ん？お兄ちゃん、あーん？」

夜見「ああ、そうだ。だから口を開けて」

そしてこいしは素直に口を開けたので、夜見はお粥を口の中に入れた。するとこいしはゆつくりとお粥を噛んで飲み込んだ。

夜見「ほら、もう一回」

こいし「ん、あーん」

そして夜見はしばらくこいしにお粥を食べさせていると、こいしはお粥を全部食べ終えた。そして最後にこいしが水を飲み干すと、夜見は鍋などが乗ったおぼんを一旦椅子の上に置いてこいしをベッドに寝かせた。

夜見（少しは顔色も良くなったかな。後は氷嚢の中もそろそろ取り替えた方がいいだろうな）

そして夜見はおぼんに氷嚢も乗せてこいしの部屋を出てキッチンへ入っていった。するとキッチンでは空が鼻歌を歌いながら流し台で食器を洗っていた。

空「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

そして夜見は空の隣に来ておぼんを置くと、そこで空は夜見がいることに気付いた。

空「うにゅ？いたんだ、黒夜さん」

夜見「ああ、食器を洗いにな。ちよつとだけ横にずれてくれないか？」

すると空は少し右側にずれてくれたので夜見は流し台の左側で空と肩を並べて食器を洗っていると、空が夜见到話しかけてきた。

空「こいし様の様子はどうだった？元気になった？」

夜見「いや、まだ少し体調は悪い様子だったから大人しく寝かせてる」

空「ふくん、そうなんだ 早く良くなるといいね」

夜見「ああ、そうだな」

すると空は食事中にある話をしていたことを話してきた。

空「そういえばさ、ご飯を食べてる時にさと子様とお隣がライブがどうのこうの言ってたんだけど、黒夜さんは何か知ってる？」

その話に関しては、夜見が1番良く知っているので簡単に説明した。

夜見「ああ 実は今日の夜に人里でライブがあるんだ だけど2人用の入場券を貰ったから誰か1人誘わないといけないんだ」

空「へえ、そうなんだ それで、誰を誘うの？」

夜見「それが、誘える人に心当たりが無いんだ」

夜見がそう言うのと、空が意外なことを言い出した。

空「そうなんだ それなら、私と一緒に行くか？」

夜見「え？でも、仕事とかがあるんじゃないのか？」

空「うーん まあ、大丈夫じゃない？たまにはさとり様も許してくれるよ、きつと」  
夜見「：：まあ、詳しいことはさとりさんと話し合ってくれ 俺の判断で決めるわけにはいかないからな」

そして夜見は食器を洗い終わると氷嚢の中にある水を流し台に少し捨て、冷蔵庫から水を何個か取り出して氷嚢の中に入れた。

そして夜見はこいしの部屋に戻ると、こいしは静かに寝息を立てて寝ていた。そして夜見はこいしの額にそつと氷嚢の乗せてこいしの部屋を出て再びキッチンへ戻ると、空はまだ流し台で食器を洗っていた。

空「あれ？こいし様はどうしたの？」

夜見「こいしさんなら静かに寝てたよ さてと、俺も昼食を食べないと」

そして夜見は冷蔵庫を開けると、いろんな食材が入っていた。すると夜見は空にあることを聞いた。

夜見「なあ、空さん この中に入ってる食材って好きに使っていいのか？」

空「ああ：：ええつと？確かさとり様はどれを使ってもいいって言ってたような：：言つてなかったような：：」

夜見「：：覚えてないのか？」

空「うん：：覚えてないや」



夜見「はあ、仕方ない さとりさんに聞きに行くか」

空「そうだ、ついでに私もライブに行つていいか聞いていこうつと」

そして夜見と空はキツチンを出ると、2人はさとりの仕事部屋へと向かった。2人は仕事部屋の前に着くと、夜見が部屋の扉を軽くノックした。

コンコン

さとり「入つていいですよ」

さとりから入室の許可を得られたので夜見が扉を開けると、さとりは椅子に座つて書類に何か書き込んでいた。

さとり「どうしたんですか？ 黒夜さん それにお空まで」

夜見「ああ、少し聞きたいことがあつてな 昼食を食べようとしたんだけど、冷蔵庫の中にある食材はどれでも使つていいのか？」

さとり「ああ、それならどれを使つても構いませんよ というか、その話はお空に言つておいた筈なんですけど…… お空、また忘れたのね」

空「えへへ 私、忘れぼつくて」

さとり「お空、褒めてないわよ それで、なんでお空まで来たの？」

空「そうだった、ええつと？ なんだつけ？ 黒夜さん」

夜見「空さん、ライブの件だろ？」

さとり「ライブの件、ですか？」

空「そうそう、それでさとり様、今日のライブに私が行ってもいいかな？」

空がそう言うときとりは少し考え込み始めた。しばらく待っていると、さとりは夜見にあることを聞いてきた。

さとり「黒夜さん、ちゃんとお空の面倒を見れますか？」

すると夜見は、さとりにそう言われて軽くシヨックを受けた。

夜見「面倒を見るかって・・・そんなに俺って信用無いか？」

するとさとりは慌てて訳を説明した。

さとり「い、いえ、そういう訳じゃなくて、お空が目を離れた隙にどっかにいかないか心配で・・・」

空「大丈夫だよ、さとり様　とりあえず、ずっと黒夜さんと一緒にいればいいんでしょ？」

さとり「お空、そんなこと言ってすぐ忘れちゃうから心配してるの」  
すると夜見はさとりに確認を取った。

夜見「・・・ええつと要するに、俺が空さんの面倒を見ておけばライブに行ってもいいってことか」

さとり「はい、そういうことです」

夜見「ああ、そういうことか。でも、空さんの仕事とかは大丈夫なのか？」

さとり「大丈夫ですよ。ある程度はお燐と協力して頑張りますから」

夜見「そうか、なんかすまないな」

さとり「いえいえ、気にしないでください」

すると空は何故か喜んでる様子だった。

空「やったね、黑夜さん。これで問題が解決したよ」

夜見「ああ、そうだな。さとと、俺は昼食を作って食べるとするか。仕事の邪魔をし

てすまなかった、さとりさん」

さとり「大丈夫ですよ、少し息抜きしたかったところだったので」

夜見「そうか、それは良かった。じゃあな、さとりさん」

そして夜見と空は仕事部屋を出ると、夜見はキッチンへと入っていった。すると夜見

は冷蔵庫の中の食材を見て何を作ろうか考え始めた。

夜見（さとと、何を作ろう。まあ、簡単に野菜炒めでも作るか）

そして夜見は野菜炒めを作るために食材を必要な分だけ取り出してその食材をまな板の上で切っていた。そうしているとキッチンの扉が開いて燐が入ってきた。

燐「あ、黑夜さん。何を作ってるの？」

夜見「燐さんか。まあ、簡単に野菜炒めでも作ろうと思ってな。ところで燐さんは何

しに来たんだ？」

燐「あたいは水切りし終わったお皿を片付けに来ただけ」

そう言つて燐は水切りかごに置いてあつた乾いた皿を重ねて次々に食器棚に戻してしたが、燐は皿を片付けている途中に夜見が料理している様子をチラチラ見ていた。

夜見「・・・なんだよ 俺が料理してるのがそんなに不思議か？」

燐「え？ いやあ、黑夜さんつてなんでそんなに料理が上手なのかなあつて思つてね」  
夜見「そんなに上手なんてもんじゃないだろ これくらい普通だ」

燐「それが普通つて、あたかも数十年料理してるけどそんなに上手に作れないよ？」  
夜見「別に長い間料理してた方が上手に出来るつて訳でもないだろ」

燐「まあ、そりやそうだろうけど・・・ところで黑夜さんはいつから料理とか作るようになったんだい？」

夜見「そうだな・・・いつ頃だったけかなあ？」

そして夜見は食材をフライパンの中に入れて炒めながら、一番古い料理をした記憶を掘り起こした。その記憶は夜見がとても小さい頃の記憶だった。

夜見「確か・・・3歳頃だったな」

夜見がそう言うと、燐は驚きを隠せなかった。

燐「え!? さ、3歳から!」

夜見「ん？何かおかしいか？」

燐「そ、そんなに小さい頃から料理なんか作ってたのかい!? 一体どうして!？」

夜見「どうしてって言われても… 1番昔の覚えてる記憶だと俺は施設にいたからな」

燐「え？し、施設？」

燐は夜見の施設という言葉に疑問を感じていたので、夜見はその時の事情を説明をした。

夜見「俺の両親は俺が小さい頃に死んで、親戚は世話が面倒だからって身寄りの無い子供の世話をする施設に入れたらしい その施設の人が教えてくれたよ」

燐「そ、そんな… そんなのあんまりじゃないか!? そんなに幼い子供を、世話が面倒だから施設に入れるってそんな酷いこと…」

夜見「まあ、なんだかんた施設の大人は親切だったから小さい頃の俺には気にならなかったけどな ただ、小さい頃からいろんな体験をさせるって理由でいろんな事はやらされたけどな 料理もその内の1つだった」

燐「ま、まさかとは思うけど、その施設の人は料理の様子はそば見てたんだよね!？」

夜見「当たり前前だろ 子供だけで料理させる大人が施設で子供の世話なんか出来るわけないだろ」

燐「そ、そうだよね、ならいいんだけど……それにしても、黒夜さんにはそんな辛い過去があつたんだね」

燐は夜見に同情していたが、夜見は同情については特に気にする様子も無かった。

夜見「どんなに辛かろうが所詮過去は過去、今更何をしても過去は変えられない。それに、そんな過去なんかよりもっと辛い過去があるからな」

燐「そ、それより辛い過去？」

すると夜見は少し顔をしかめてこう言った。

夜見「……少し喋り過ぎたな。すまないが、さっきの話は忘れてくれ。それと醤油取ってくれないか？もう少しで出来るから」

燐「え？わ、わかったよ」

そして燐は夜見の言う通りに棚から醤油を探し始めた。

燐「えくとつ……あつた。はい、黒夜さん」

夜見「ああ、ありがとう」

そして夜見は燐から醤油を受け取ると、フライパンの中に醤油を入れて再び炒め始めた。しかし燐は夜見の言った言葉にさつきから疑問を感じていた。

燐（両親が死んで施設に入れられるより辛い過去って、黒夜さんは一体どんなに酷い生活を送って……）

夜見「……言っておくが、俺の過去の事は考えるなよ。もし過去が知られるようなことがあったら、俺はここを出ていくからな」

燐「え!? そ、そんなことないよ! 知られたくない過去なんてあたいにも山ほどあるしね!」

夜見「……まあ、知られることなんてそうそう無いだろうけどな。さてと」

すると夜見は水切りかごに置いてあった手頃な大きさの皿を取ると、炒め終わった野菜炒めを盛り付けた。そして夜見はフライパンを置くとその皿と自分の箸を持って隣の部屋に移動するが、何故か燐も続いて隣の部屋に移動してきた。

そして夜見が皿を置いて椅子に座ると、燐は夜見の正面に座り始めた。

夜見「燐さん、なんで付いてきた?」

燐「え?! いや、なんとなく……」

夜見「……まあ、別にいいか。いただきます」

そして夜見は自分で作った野菜炒めを食べ始めた。一方燐は夜見が野菜炒めを食べている様子をじつと見ていた。

夜見「……燐さん、食べにくいんだが」

燐「ああ、ごめんごめん。そういえば、さつきお空から聞いたよ。一緒にライブに行くんだってね」

夜見「ああ、まさかさとりさんが許可を出してくれるとは思っていなかったがな」

燐「さとり様はきつと、お空に気分転換して欲しかったんだと思うよ？お空つて全然地上に出ることなんてないからさ」

夜見「そうか、じゃあ空さんは楽しみにしてるんだらうな」

燐「そうだらうね」

夜見「ごちそうさま さてと、片付けるか」

そんな会話をしている内に夜見は野菜炒めをすぐに食べ終えてしまった。そして夜見が立ち上がると、燐が皿と箸を持ち始めた。

燐「これはあたいが片付けておくから、黑夜さんはこいし様の様子を見ておいてくれないかな？こいし様のこと心配だからさ」

夜見「そうか？すまないな じゃあ、こいしさんの様子を見てくるよ」

そう言つて夜見は部屋を出てこいしの部屋に入ると、こいしはまだ寝ている様子だった。そして夜見はベッドの近くにある椅子に座ると、こいしは何か言っている様子だった。

こいし「んん… お兄ちゃん… どこ行くの？」

どうやらこいしは夜見の夢を見ている様子だったが、急にこいしの目から涙が流れ始めた。



こいし「お兄ちゃん、行かないで 嫌だよ、行かないでよ」

すると夜見が寝ているこいしの手を優しく握ると、こいしは手を握り返して、目から流れていた涙がスツと止まった。

こいし「ん、お兄ちゃん、ありがとう 好き、大好き」

夜見はその様子を見ているとゆっくりと目を瞑り始めた。そして夜見はしばらくしてから目を開けると顔色が随分良くなったこいしが起きていて、夜見の顔を覗き込んでいた。

こいし「あ、お兄ちゃん、やつと起きた こんばんは」

夜見「ん？こいしさん、起きたのか」

こいし「ビックリしちゃった、お兄ちゃん だって私が目を覚ましたら、お兄ちゃんが私の手を握って眠ってるんだもん」

夜見「え？俺、寝てたのか？」

こいし「うん、幸せそうな顔しながらね♪」

どうやら夜見は目を少し瞑ってた気が、いつの間にかそのまま眠ってしまったらしい。すると扉の方から声が聞こえてきた。

さとり「黑夜さん、そろそろ時間ですよ！早く出てきてください！」

夜見「なんだ、時間？とりあえず、行ってみるか」

部屋の外からさとりが呼んでいたので夜見は立ち上がろうとしたが、こいしは手を放そうとしなかった。するとこいしは夜見にこう言ってきた。

こいし「ふふ、お兄ちゃん 寝顔可愛かったよ」

こいしはそう言つて夜見の手を放したので夜見はこいしにこう言った。

夜見「何言つてるんだ、こいしさんの寝顔の方が可愛いだろ」

そう言うときいしは顔を真っ赤にして布団で顔を半分隠した。

こいし「も、もう！お兄ちゃんったら……あ、ありがとう」

夜見「どういたしましたよ、それじゃ、行つてくるよ」

こいし「行つてらっしゃい、お兄ちゃん」

そして夜見がこいしの部屋から出て扉を閉めると、さとりが話しかけてきた。

さとり「何をしてたんですか、黒夜さん？」

夜見「ああ、どうやらいつの間にか少し寝てたらしい」

さとり「とりあえず、もうお空は待つてるんで早く出発してください 一応お金は渡

しておきますので」

そう言つてさとりはお金を渡してきたが、夜見はさっぱり状況が理解できていなかった。

夜見「え？なんでお金なんか？」

さとり「黒夜さん、もう6時半頃ですよ？そろそろ出発しないと駄目なんじゃないですか？」

夜見「ああ、そんなに寝てたのか？じゃあそろそろ出発しないとな」

さとり「お空は玄関で待ってますから、早く行ってあげてください」

夜見「そうか、じゃあ行ってくるよ さとりさん」

さとり「行ってらっしゃい、黒夜さん」

そして夜見は仮面を取り出して被り、玄関に着くと準備万端の空がいた。

空「黒夜さん、早く早く！ライブが始まっちゃうよ！」

夜見「わかったから落ち着け 歩いてても間に合うから」

そして夜見と空はライブが始まる人里へと向かって行った。

## 第25話 ライブ前の人里

ライブに向かうために夜見と空は旧地獄街道と森を抜けて、今現在は夜の人里の中を2人で歩いてきた。今日の人里はライブがあるせいかな、いつも以上に賑わっていた。

空「わあ、人間がいっぱいいる。ここが人里？」

空は初めての人里に興奮して、夜見の周りをうろちよろしながらいろんな所を見ていた。

夜見「ああ、そうだな。それはそうと空さん、さとりさんから言われたこと覚えてるのか？」

空「えつと：：何か言われたっけ？」

夜見「俺から離れるな。この人混みの中ではぐれたら面倒だ」

そう言つて夜見は空の手首辺りを掴んで無理矢理自分の隣を歩かせた。

空「わあ!?!ちよつと黒夜さん、さとり様はそんなこと言つてないよ。さとり様は楽しんできてつて言つたんだよ」

夜見「さとりさんはそんなこと言つてない。本当に空さんは忘れっぽいんだな」

空「えへへ、そうかなあ？」

夜見「……はあ、さとりさんや燐さんが苦勞するのも無理ないな」

夜見は空の忘れっぽさに呆れていると、空は夜見にあることを聞いてきた。

空「そういえば黑夜さん 夕飯食べてないけど、どうするの？今日は夕飯無し？」

夜見「ん？空さん、腹でも減ったか？」

空「うん、そろそろ何か食べたいな…… そうだ！黑夜さんが前にお土産を買ったうどん屋で夕飯を食べようよ！」

空がそう言うのと夜見は前にこいし達とうどん屋に行った時の事を思い出した。

夜見「ああ、あのうどん屋ねえ…… あそこはちよつとなあ……」

空「うにゆ？もしかして黑夜さんは、そのうどん屋飽きたの？」

夜見「いや、飽きた訳じゃないが…… ほら、折角人里に來たんだから何か人里でしか味わえないようなのを食べないか？今回を逃したら次は無いかもしれないだし」

空「そつか、それもそうだね 人里でしか味わえないような食べ物かあ」

実は夜見と空はさつき話に出ていたうどん屋の前をとくに通っていたのだが、そのうどん屋は随分前から閉店していた。原因はやはり店長が変わってしまった事らしいのだが、夜見はあの日以来そのうどん屋には行っていないので原因が本当に店長なのかどうかは夜見にはわからなかった。

そして空が周りを見ながら夕飯を食べる店を探していると、空は1件のとある店を指

差した。

空「あれなんてどうかかな？」

夜見「ん、どれだ？」

そして夜見は空が指差した方向を見てみると、そこは小さな焼き鳥屋があつた。すると夜見は空の方をチラリと見た。

夜見（鴉の妖怪が焼き鳥を食べるってどうなんだ？そもそも地霊殿じゃ、鶏肉は食卓に一切出なかつたな）

そんなことを夜見は考えていたが、空は夜見に質問をしてきた。

空「ねえ、ところで焼き鳥って何？そもそも鳥って食べられるの？」

すると夜見は簡単に焼き鳥について説明を始めた。

夜見「焼き鳥ってのは串に一口大の鶏肉が何個か串に刺さってる料理だ　まあ、幻想郷と外の世界の焼き鳥が一緒なのかどうかは知らないが……」

空「へえ、美味しそう！私、焼き鳥が食べたい！」

夜見（……なんか空さんが鶏肉食べてるって考えると、なんだか食べにくいな　何か別の店はないか？）

そして夜見は他の店はないか辺りを見渡していると、後ろの方から自分のことを呼ぶ声が聞こえた気がした。夜見はその声に反応して振り返ったが人里の人間が歩いてい

る光景しか見えなかった。

夜見「……空さん、さっき俺のこと呼んだか？」

空「え、呼んでないよ？どうしたの急に？」

夜見「……いや、気のせいか」

夜見（そもそも呼ばれたのは偽名の方だったしな）

空「そんなことより黑夜さん、早く焼き鳥を食べようよ！」

空は早く焼き鳥を食べたがっていたが空が鶏肉を食べるのはなんとなく駄目な気がしたので、夜見は空にこう言ってみた。

夜見「いや、一応他の場所も見てみないか？もしかしたら他に食べたくないような店もあるかもしれないぞ」

空「うん……そうだね♪確かに他にも色々なお店もあるから見てみようっと」

そして夜見と空は他の店を見て回ろうとすると人混みの中から急に腕が伸びてきて、空の方を掴んでいないもう片方の夜見の腕を掴んだ。しかし夜見は気にせずに腕を掴んでいる人物を引き摺りながら人混みの中を進んでいった。

夜見「ところで空さんはどんなのが食べたいんだ？」

空「んー、お腹いっぱいになれる料理！」

？「いやいや、待て待て！私を無視するな！」

空「ん？何か聞こえなかった？」

夜見「ああ、多分俺の腕を掴んでるやつじゃないか？」

すると2人は立ち止まって夜見は腕を掴んでる手を引っ張ってみると、人混みの中から魔理沙が出てきた。そして夜見は魔理沙に話しかけた。

夜見「なんだよ？今から夕飯に何を食べようか決めてるところなんだが？」

魔理沙「いやいやいや！人のこと引き摺っておいて何を呑気なこと言ってるんだよ！」

夜見「魔理沙さんと関わって良い結果になるのは稀だからな」

魔理沙「なっ!?そんなことないだろ!？」

そして夜見はとりあえず魔理沙がなんの用で自分の腕を掴んできたのかを聞いてみることにした。

夜見「まあ、それはどうでもいいとして、一体なんの用だ？まさか1人寂しくライブに来たから付き合えとか言うんじゃないだろうな？」

魔理沙「誰が1人寂しくだ！私はアリスを誘って一緒に来たんだぜ！」

そして魔理沙は何故か自信満々に胸を張って答えたが肝心のアリスの姿はなかったので、アリスがどこにいるのかを聞いてみることにした。

夜見「へえ？それで、アリスさんはどこに？」



魔理沙「何言ってるんだ？アリスならここに……あれ？」

すると魔理沙は焦った様子で周りをキョロキョロし始めた。そして魔理沙は苦笑いをする、夜見に向かってこう言った。

魔理沙「は、はぐれちやつたぜ」

夜見「何してんだ この人混みの中でどうやって探すつもりだよ」

魔理沙「い、いや、でも、私はアリスの腕をちゃんと掴んでただぜ!」

夜見「はぐれたら関係ないだろ、まったく……どこら辺ではぐれたかわかるか？」

魔理沙「お、おお、捜してくれるのか!」

夜見がアリスを捜すのを手伝うことがわかると魔理沙は目を輝かせたが、夜見は魔理沙にこう言った。

夜見「ああ、魔理沙さんにライブに誘われたはいいものの、1人にされるのはかわいそうだからな」

魔理沙「わ、私への心配は一切無しかよ!て言うか最初に会った時以外、私への対応酷くないか!」

夜見「魔理沙さんが紅魔館の本を盗んだりしなかつたりすればこんな対応にはならなかつただろうな ほら、行くぞ」

魔理沙「ま、待ってくれて!」

そして3人は先程通ってきた道を引き返しながらアリスを探していたが、何故か魔理沙はこちらの方をチラチラと見ていた。

すると夜見はため息をついて魔理沙に注意した。

夜見「魔理沙さん、アリスさんを捜す気あるのか？こつち見てないでちゃんと捜せ」

魔理沙「い、いや、捜す気はちゃんとあるぜ？だけど、そいつ一体誰なんだよ？」

魔理沙はそう言って、空のことを指差した。すると空は魔理沙に向かってこう言った。

空「人に名前を聞く時は、まず自分からだよ？魔法使いさん」

魔理沙「え？ああ、そうだよな　私は霧雨魔理沙、見ての通り普通の魔法使いだぜ」

空「私は霊鳥路空、鴉の妖怪だよ　よろしくね」

2人は自己紹介をしている間、夜見は周りを見渡しているところある物が見えた。すると夜見はそのある物が見えた方向へ向かった。

空「うにゆ？そつちにいた？」

魔理沙「え!?!いたのか!?!」

そして夜見の向かった方向に空と魔理沙も行ってみたが、夜見が見つけたのはアリスではなくアリスの近くにいつもいた人形だった。その人形はふわふわと宙に浮いていたが、こちらに気付くと手を振って夜見の顔の高さまで下りてきた。

夜見「シヤンハイさん、ここにいたのか。ご主人はどうしたんだ？」

夜見がそう言うのとシヤンハイは手足を一生懸命に動かして何かを伝えようとしていたが、その光景を見ていた魔理沙がこう言い出した。

魔理沙「一体何を伝えたいんだ？さっぱりだぜ」

空「でも、手足をパタパタさせてるのちよつと可愛いかも」

そしてシヤンハイが手足の動きを止めると夜見はシヤンハイを優しく掴んで肩に乗せ、2人にある方向を指差して言った。

夜見「あつちらしい、行くぞ」

魔理沙「え？おいおい、どういうことだ？」

魔理沙は何がなんだかさっぱりわからない様子だったので、夜見は軽く説明をした。

夜見「シヤンハイさんがあつちだつて教えてくれたんだ。おそらくアリスさんはシヤンハイさんに、魔理沙さんか魔理沙さんと面識のある人を見かけたら自分の居場所を教えるように命令したんだろ」

夜見がそう説明すると、空はあることに気付いた。

空「え？つまりはお人形が何を伝えたかったのか、わかったの？」

夜見「ああ、少し前にアリスさんから習ったんだ。人形での物や場所の表現の仕方」

魔理沙「へえ、よくそんなの習う気になったな」

夜見「別に習う気があった訳じゃない　アリスさんがちよいちよい話に挟んできただけだ」

魔理沙「逆にすごいな　私だったら真面目に聞かないと覚えてられないぜ」

魔理沙がそう言うのと夜見は前にアリスと、ある話をしたことを思い出した。

夜見「そういえばアリスさんが言ってたな　「魔理沙が覚えるなら最悪2年はかかる」ってな」

魔理沙「いやいや！私だって覚えようと思っただけに覚える方だけだぜ!」

夜見「言っておくが人形の表現できる数は軽く4桁は越えてるが　それをすぐに覚えられるのか？」

すると魔理沙は人形が4桁以上の表現を出来ることに驚いたが、それよりも驚いたのは人形の表現の仕方が4桁以上あるのに、夜見がその中の人形の表現を理解していたことだった。

魔理沙「嘘だろ!?!まさか全部覚えてるのか!?!」

夜見「全部とはいかないが9割は確実に覚えてる」

夜見がそう言うのと魔理沙は少し震えた声で夜見に質問をした。

魔理沙「お、おい、まさかそれを1週間とかで覚えたとか言い出さないよな？」

夜見「そんなこと言うわけないだろ」

魔理沙「だ、だよな！1週間じゃ覚えられないよな」

魔理沙がそう言ったが、夜見は不思議に思った様子で魔理沙に言った。

夜見「魔理沙さん、何言ってるんだ？俺は2時間ぐらいで覚えただが……」

魔理沙「は、はあ!?!おかしいだろ！慧音先生のそろばんの時も思ったけど、やっぱりお前化け物なんじゃないか!?!」

夜見「馬鹿なこと言うな ほら、そろそろシャンハイさんが言ってた場所に着くぞ」

そして3人はシャンハイが伝えた場所に着いて辺りを見渡してみたが、アリスの姿は見えなかった。すると夜見の肩に乗っていたシャンハイが夜見のフードの横を引っ張った。

夜見「ん、なんだよ、シャンハイさん どうした？」

夜見はシャンハイに話しかけるが、シャンハイは夜見のフードを引っ張ってばかりだった。すると空が後ろから夜見の肩を叩いてこう言った。

空「ねえ、あそこで女の人が囲まれてるよ？」

夜見「ん、本当か？どこだ？」

空「ほら、あそこ」

そして空が指差した方向を見ると、アリスが店の壁に背中から寄りかかって腕を組んでいた。そしてそのアリスの周りには3人の男性がいた。男性達はなにやらアリスに

話しかけていたが、アリスはうんざりしながら無視をしていた。

魔理沙「おい、アリスはいたか？」

すると魔理沙がこちらに近付いてきたので夜見はアリスのいる方向を指差した。

夜見「ああ、いたことにはいたんだが……」

魔理沙「ん、なんだありや？まさかアリス、ナンパされてないか？」

夜見「ああ、だろうな」

すると空は魔理沙に向かってあることを聞いた。

空「ねえ、霧雨さん ナンパって何？」

魔理沙「え、知らないのか えっと、ナンパってのは…… ああ、なんて言えばいいかな……」

魔理沙は空にナンパについてどう説明をしようか迷っていたが、夜見少しため息をついて魔理沙と空にこう言った。

夜見「2人も、少しここで待っていてくれ すぐ戻る」

そう言うのと夜見は少しめんどくさそうにアリスの元へと歩いていった。するとアリスに絡んでいる男性の声が聞こえてきた。

男性1「なあ、可愛い子ちゃん 少しくらい俺らと飲んだっていいだろ？」

男性2「そうだよ 友達を待つてるって言ってたけど全然来ないじゃないか」

男性3「そうだ！実は俺、今日のライブの入場券持つてるんだ　一緒に見に行かないか？」

するとアリスは大きなため息をついて、絡んできている男性達に向かって睨みながら言った。

アリス「いい加減にしてくれない？友達を待つてるのよ」

するとアリスに絡んでいる男性達は怯むような様子はなく、へらへらしていた。

男性1「おいおい、そんなに睨むなよ　せつかくの可愛い顔がもつたいないぜ？」

アリス「大体、10代後半そこらになってナンパするとか馬鹿なんじゃない？正直不快よ」

男性2「口が悪いな、可愛い子ちゃん　そんなお口じや、俺達みたいなカッコいい男しか相手にしてくれないぜ？」

アリス（まったく、何してるのよ魔理沙は!?!早く迎えに来なさいよ!）

アリスがそう思っていると夜見は、男性達の間をスツと抜けてアリスの目の前に出てきた。

夜見「こんなところにいたのか、アリスさん」

アリス「え？夜影、なんで貴方がここに？」

夜見「ほら、さっさと行くぞ」

そして夜見はアリスの手を握って魔理沙と空のところへ戻ろうとしたが、そうはさせまいと前に男性3人が立ち塞がってきた。

男性1 「おいおい、なんだお前？ その子連れでどこに行こうってんだ？ ああ!!」

男性2 「てめえが、この子の待ってた友達か？ 仮面なんか被ってダッセエな」

男性3 「てめえなんかじゃ、その子と釣り合わねえよ さつさとその子置いてさつさとどっか行つてろ」

男性達は夜見に威圧的にアリスを置いていくように言っていたが、夜見はそんなことは気にも止めず、まったく別のことを思っていた。

夜見（うわあ、退かないで絡んでくるのかよ 本当に友達が来たってさらつと退いてくれれば良かったのに：： どうしよう？）

夜見はこの男性達をどうしようか迷っていると、アリスが急に夜見の腕にしがみついてこちらに寄り添ってきた。するとアリスは夜見にこう言ってきた。

アリス 「さあ、こんなつまらない人なんか無視して行きましよ！ 夜影、今日のライブ楽しみね♪」

そう言つてアリスは夜見に笑顔を向けてきたが、夜見は急にアリスが何故こんなことをしてきたのかまったく理解できなかった。しかし夜見はすぐにアリスの意図を読み取つて話を合わせ始めた。



夜見「ああ、そうだな 混むだろうから早めに行っておこうか」

アリス「ええ、そうね♪」

そして夜見とアリスはその場を離れようとすると、男性達は急に動揺し始めた。

男性1「は、はあ!?! どういうことだよ! 友達じゃねえのかよ!」

アリス「あら、ごめんなさい あなた達を出来るだけ傷付けないように友達って言うてただけど、本当は彼氏を待ってたのよ」

男性2「こ、こんな仮面を被った奴のどこが良いんだよ!?! 意味わかんねえ!」

アリス「残念だけどあなた達より彼氏の方がすごく優しいから、一緒にいてとつても楽しいのよ まあ、そもそもあなた達が優しかったとしても、まったく引かれることはなかったでしょうけどね」

男性3「そ、そんな優しいだけが取り柄の奴なんかどうせすぐに飽きるぜ? 俺だったら、<sup>ぶよう</sup>舞踊とか出来るぜ?」

アリス「舞踊? あいにく私は舞踊は興味無いのよ 夜影の方がもつとすごい特技持ってるもんね♪」

そう言ってアリスは夜見の腕に頬擦りをしてきた。すると男性の1人が悔しそうに見ていたと思つたら、夜見に指を差してきた。

男性1「おい、てめえ! 俺と彼女を賭けて勝負しやがれ!」

すると夜見はこの男はどうせ喧嘩で勝負を挑んでくるだろうという気がしたので適当にあしらった。

夜見「はあ？そんなのするわけないだろ どうせ殴れば解決とか、くだらない幼稚な考えしてんだろ？」

夜見がそう言うのと男性は一瞬顔をしかめたので、どうやら凶星だったようだ。すると男性は別の案を考え始めた。

男性1「だったら！さっき彼女が言ってた特技ってのを見せてみるや！本当にすごい特技だったら諦めてやるよ」

男性がそう言った瞬間、腕にしがみついていたアリスが慌てた様子で夜見に話しかけてきた。

アリス「よ、夜影！こんな奴に貴方の特技を見せる価値なんて無いわ！ほら、さつきと行きましょ！」

男性1「おいおい、まさか逃げるのか？もしかして、特技があるってのは嘘かあ？それとも、この関係自体も嘘だったりしてなあ」

男性がニヤニヤしながらそう言うのと、他2人の男性もこちらを見てニヤニヤした。どうやら男性達はアリスの慌てた様子を見て若干この関係が嘘だと感じ取ったのだろう。

すると夜見は男性にあることを聞いた。

夜見「……特技を見せれば、お前らは退くのか？」

アリス「よ、夜影!？」

男性1「ああ、もちろんだ。特技が見せられればの話だけだな？」

すると夜見はため息をついて少し咳払いをすると、夜見は口を開いた。

夜見「見せることはできないけど、聞くことは出来るんじゃないかしら？」

そして夜見が口を開いた瞬間、周りにいた男性達だけでなくアリスまで驚いた様子で固まってしまった。その原因は夜見の声にあった。

夜見「あら、どうしたの？もしかして、こんなのに驚いてるのかしら？ただ私は彼女の声を真似してるだけよ？」

実は夜見が口を開いたと思った瞬間、夜見の声はアリスと同じ声になっていたのだ。夜見自身は声真似してるだけなのだが、その声はアリス本人の声との違いがわからないほどのレベルだった。

そして夜見は男性達に声をかけたが返事が返ってこないなのでアリスを連れて空と魔理沙の元へ戻ることにした。

夜見「それじゃ、私達はこの辺で失礼」

そして夜見はアリスを連れて空と魔理沙の元へと戻ると、魔理沙はアリスを冷やかすために声をかけた。

魔理沙「おいおい、何をしたらそんなラブラブの状態になって帰ってくるんだ？」  
アリス「…」

しかしアリスはまったく反応しなかったので、魔理沙は少し心配になって優しく声をかけ始めた。

魔理沙「…あれ？おーい、アリス？」

夜見「おい、アリスさん　しっかりしろ」

そして夜見がアリスの肩を軽く叩くとアリスはハツとして我にかえった。

アリス「え？あ、あれ？あいつらは？」

夜見「アリスさん、何言ってるんだ？もう終わっただろ」

アリス「あ、ああ、そうだったわね」

魔理沙「ところでアリス、いつまで腕に抱きついてる状態にいるつもりなんだ？」

魔理沙がそう言うのとアリスは顔を真っ赤にして夜見から離れた。そしてアリスは夜見に向かって頭を下げてきた。

アリス「ご、ごめんなさい！私あの時、あの方法しか思い付かなかったから」

夜見「いや、別に謝ることじゃないだろ　とりあえず、アリスさんが無事で良かった」

夜見がそう言うのとアリスは頭を上げ、夜見の肩に乗っていたシャンハイがアリスの周りにふわふわと浮かび始めた。

アリス「本当にありがとう、おかげで助かったわ」

夜見「どういたしまして さてと、アリスさんを助けたことだし 空さん、夕飯をどこで食べるか決めるか決めるか行くか」

空「うん、そうだね バイバイ、霧雨さん」

そして夜見と空はまた夕飯をどこで食べるか決めに戻ろうとすると、アリスが呼び止めた。

アリス「あ！ちよつと待って！それなら、私達も付いてっていいかしら？私達もまだ夕飯は食べてないし、さっきのお礼として奢ってあげるわ」

そして夜見と空は振り返るとアリスに向かって夜見は言った。

夜見「いや、別に一緒に食べるのは構わないが奢りはしなくていい ちゃんと金は持つてる」

アリス「いえ、それじゃ私が納得いかないわ！奢らせてちようだい！」

夜見「……わりまえかんじょう割前勘定（割り勘）は駄目か？」

アリス「嫌よ！私が納得出来ないわ！」

すると魔理沙は夜见到近付いてきて耳打ちをした。

魔理沙「夜影、諦めた方がいいぜ？アリスは変なところで頑固だから、絶対に夜影には金は払わせない だから今回はアリスの奢りにした方が早いぜ？」

どうやらアリスに一切退く気はないらしく、このままだと夕飯を食べる前にライブが始まってしまいそうだったので、今回は夜見が退くことにした。

夜見「……はあ、わかったよ すまないな、今回は奢ってもらうことにするよ」

アリス「決まりね それで、みんなはどこで夕飯を食べたいのかしら？」

そしてアリスがみんなに何を食べたいか聞くと、3人はそれぞれ答え始めた。

夜見「別に俺はどこでもいい」

空「私も、お腹いっぱいになればどこでもいいよ」

魔理沙「それじゃあ、私はお好み焼きがいいぜ」

3人はそれぞれ自分の意見を言うと、アリスが確認を取った。

アリス「魔理沙はお好み焼きがいいって言うてるけど、2人はそれでいいかしら？」

夜見「ああ、俺は構わない」

空「ねえ、お好み焼きって何？どんな料理なの？」

アリス「お好み焼きってのはね、水で溶かした小麦粉の生地の中いろんな具を入れた料理よ」

アリスが軽くお好み焼きについて説明をすると、アリスは空の前に出た。

アリス「そういえば、自己紹介をしなきゃね 私はアリス・マーガトロイド、魔法使

いよ」

空「私は霊鳥路空、鴉の妖怪だよ よろしくね、アリスさん」

そしてアリスと空が自己紹介を終えると、魔理沙が夜見に小声で話しかけてきた。

魔理沙「なあ、夜影 そういやーっ思ったんだけど、空ってお前と一体どんな関係なんだ？」

夜見「… 魔理沙さんに話す必要なんかあるのか？」

魔理沙「いや、妖怪と一緒にいたってことは、なにかしらの関係はあるだろう？」

夜見「… あいにく、話す気は無い そもそも俺が身元を明かすような真似をするのも思ふか？」

魔理沙「別に気になったから聞いただけで、話したくないなら無理に話す必要はないぜ」

夜見「そりゃ、どうも」

するとアリスは夜見と魔理沙が小声で会話をしていることに気付いた。

アリス「魔理沙？何を2人でここそと会話してるの？」

魔理沙「別に、ただお好み焼きの具は何かいいか聞いてただけだぜ」

アリス「そんなのお店に行つて聞けばいいでしょ そんなことより、早く行きましよう」

そう言つてアリスは人里の奥へ進んでいくので、夜見達はアリスの後に続いて人里の

奥へと進んだ。そして魔理沙とアリスが会話をしている隙に夜見は空に小声で声をかけた。

夜見「空さん、ちよつといいか？」

空「ん、どうしたの？」

夜見「悪いが魔理沙さんとアリスさんがいる前では、俺のことを黒月って呼んでくれないか？」

空「え？どうして？」

夜見「ちよつとした事情があつてな　ちなみに2人は俺のことを夜影って呼ぶ、わかつたか？」

空「黒月さんだね、わかつたよ」

アリス「夜影、空さん　着いたわよ」

夜見と空がちよつと話し終わったタイミングで、夜見達は1件のお好み焼き屋の前に着いた。そして夜見達はお好み焼き屋へと入っていった。

そして店内の様子は机が6個あり、1個につき椅子が4個置かれていた。さらに店の奥から店員がお好み焼きを焼いているのか、お好み焼きを焼く音が聞こえ、ソースの匂いが漂ってきた。そして店の1番奥の机がちよつと空いていた。

アリス「あら、今日は運がいいわね　いつもは満席なのに」



魔理沙「おお、やったぜ さくてと、何を頼もうかな〜」

そして夜見達は奥の机の椅子に座ってお品書きを眺めて何を頼もうか決め始めた。ちなみに空は夜見の横、魔理沙は夜見の正面、アリスは魔理沙の横に座った。

夜見「さてと、何を頼もうかな」と言ってもアリスさんが奢るから、なるべく高くないものにするか」

そしてお品書きを見て2分ほど経つと、アリスがみんなに注文が決まったかを確認し始めた。

アリス「さて、みんなは何を頼むか決まったかしら？」

魔理沙「私はこの野菜多めのやつがいいぜ」

夜見「俺は普通のやつでいい」

空「・・・うくん、ちよつと待ってて」

アリス「空さんはまだ決まってるのかしら？」

空「ねえ、黒・・・月さん、これなんて読むの？」

夜見「ん？どれだ？」

空はそう言ってお品書きをこちらに寄せてきたので、夜見はそれを覗き込むふりをし、空に話しかけた。

夜見「おい、空さん 名前呼び間違えかけただろ」

空「あ、うん 急に呼ぶ名前が変わると言いずらくて」

夜見は空が忘れっぽいいため名前を呼ばれるのが少し心配だったが、そもそもいつも呼んでいた名前を変えさせたのはこちらなので空に非はなかった。

夜見「まあ、仕方無いか それで、どれを頼もうとしたんだ？」

空「あ、えつとね…これ」

夜見「ああ、これか… 魔理沙さんと同じやつだな」

アリス「空さんは魔理沙と同じのね、わかったわ」

そしてアリスが立ち上がると厨房のある方向へ向かっていったので、おそらく注文を頼みに行ったのだろう。するとアリスがいない間に魔理沙は夜見にあることを聞いてきた。

魔理沙「そういえば夜影、アリスを助けた時にナンパしてた奴らが固まってたけど一体何をしたんだ？」

夜見「ああ、少し驚かせただけだ」

魔理沙「驚かせたって、一体どういうことだ？」

魔理沙が夜見にそう聞いた瞬間、注文をしに行ったアリスがちょうど戻ってきた。

アリス「注文してきたわよ すぐに出来るらしいわ」

魔理沙「お！アリス、ナイスタイミングで戻ってきてくれたぜ」

アリス「何よ急に 一体どうしたの？」

アリスは不思議に思いながら椅子に座ると、魔理沙はアリスに質問をした。

魔理沙「アリス、夜影はどうやってナンパしてた奴らをどうやって驚かせたんだ？」

アリス「ああ、あれは私も驚いたわよ なんだつたら夜影にやつてもらつたらいいんじゃない？」

魔理沙「お？夜影、今でも出来るのか？」

すると夜見は少し面倒くさそうに答えた。

夜見「まあ、出来ないことはない……ただ、やり過ぎると疲れるんだ」

魔理沙「へえ、じゃあ少しでいいからやつてみてくれよ」

夜見「はあ、わかったよ」

そして夜見は少し咳払いをすると、夜見は口を開いた。

夜見「ほら、こんな感じだ どうだ？魔理沙さん」

魔理沙「なっ!？」

夜見が口を開いた瞬間、魔理沙は驚いて固まった様子になり、横にいた空も目を丸くして驚いていた。しかしアリスは夜見が声真似をすることはわかりきっていたので驚く様子はなかった。

空「え？その声って……」

魔理沙「わ、私の声じゃないか!？」

夜見「ああ、そうだぜ　ちなみに…ん、ん!こんな声も出せるわよ?」

そう言つて夜見が咳払いをして声を出すと、今度は霊夢の声真似を始めた。

魔理沙「れ、霊夢の声まで真似出来るのか!？」

夜見「ええ、そうよ　ただこの声真似の欠点は、女性の声真似しか出来ないことかしら」

空「へへ、面白いことが出来るんだね」

空は夜見の声真似を面白そうに聞いていたが、魔理沙とアリスは声真似に対して同じことが気になった。

魔理沙「…いや、確かに面白いけど、その、なんていうか…」

アリス「なんで口調まで真似をするのかしら?」

アリスがなんの躊躇ちゆうちゆうもなく魔理沙の聞こうとした質問をすると、夜見は霊夢の声真似をしたまま答え始めた。

夜見「ああ、口調まで真似するのは私の癖なのよ　それに、いつもの口調で喋っちゃうとその人のイメージも崩れちゃうしね」

魔理沙「へ、へへへ、そりゃ急に女性の声真似をし始めたら誰でも驚くぜ　ちなみに、

ナンパしてた奴らの前では誰の声真似をしたんだ?」

夜見「アリスさんの声よ アリスさんの声の真似をした方が相手は驚くでしょうしね」

アリス「もう、あの時は何が起きたかさっぱりわからなかったわよ でもまさか、声真似が出来るだなんて思ってもみなかったわ」

魔理沙「それにしても似てるっていうか、もう同じ声だよな 面白い特技だぜ」

夜見「面白い特技といわれても、別にただ疲れるだけだ 得することはない」

魔理沙「ちえ、なんだ もう終わりなのか」

夜見「やり過ぎると疲れるって言っただろ それに少し喉が痛くなるしな」

そして夜見が声真似をやめると厨房の方から2つの皿を持った女性の店員がこちらに向かってきた。そして皿の上には美味しそうな好み焼きが乗っていた。

店員「野菜たっぷりお好み焼きを2つお持ちしました」

空・魔理沙「あ、私のだ(ぜ)」

2人揃ってお好み焼きを受け取ると店員は「ごゆっくり、どうぞ」と言って厨房の方へ戻っていった。そして2人は机の端にあった割り箸を手に取り、魔理沙は早速お好み焼きを食べ始めた。

空「ねえ、黒月さん もう先に食べていい？」

夜見「ああ、別にいいぞ 冷めると勿体無いからな」

空「やった、いただきまーす」

そして空も割り箸でお好み焼きを一口サイズに分けて食べ始めた。

空「わあ、黒月さん！とっても美味しいよ！」

夜見「そうか、良かったな」

アリス「空さんのお口に合うか少し心配だったけど、ここを選んで良かったわ」

すると再び女性の店員が2つの皿にお好み焼きを乗せてやって来た。2つのお好み焼きはどちらも同じ見た目なのでおそらくアリスは夜見と同じものを注文したのだろう。

店員「通常のお好み焼きを2つお持ちしました」

店員はそう言って夜見とアリスの前にお好み焼きを置くとメモのようなものを取り出して注文を再確認した。

店員「野菜たっぷりお好み焼きが2つ、通常のお好み焼きが2つでよろしかったでしょうか？」

アリス「ええ、大丈夫よ」

店員「では、ごゆっくり、どうぞ」

そして店員は厨房へと戻り、夜見とアリスは割り箸を手を取っていたいただきますと言ってお好み焼きを食べ始めた。お好み焼きにはソースがしっかりと付いていて、中のキャ

ベツの食感がしつかりと感じられた。

夜見「おお、美味しいな」

アリス「前には他のを頼んでみたけど、やっぱりどれも美味しいわね」

そして夜見達の手の動きは止まること無く、お好み焼きをあつという間に食べ終えてしまった。そして食べ終えた夜見達はごちそうさまと言ってお好み焼き屋を出た。

魔理沙「いやあ、食べた食べた お腹いっぱいだぜ」

空「あく美味しかった♪また食べに来たいね、黒月さん」

夜見「ああ、そうだな アリスさん、奢ってくれてありがとう」

夜見はアリスにお礼を言うと、アリスは笑顔でこう言った。

アリス「気にしなくていいのよ、お礼なんだから」

するとお腹いっぱいになって満足そうな空は夜見にある質問をしてきた。

空「そういえば黒月さん、私達ってなんのために人里に来たんだけ？」

夜見「何言ってるんだ、ライブを見に来たんだけ」

空「あ、そうだったね じゃあ、早く行った方がいいんじゃない？」

アリス「別にそんなに急がなくても、ライブまで時間には余裕があるわよ？もう少しゆつくりしてもいいんじゃない？」

夜影「いや、俺達は先にライブ会場に行くことにする 時間に余裕をもつことに越し

たことはないからな 行くぞ、空さん」

空「うん、わかった じゃあね、霧雨さん、アリスさん」

魔理沙「おう！またな、夜影、空 ライブ会場でまた会おうぜ！」

アリス「またね、夜影、空さん またライブ会場でね」

そして夕食を済ませた夜見と空は、魔理沙とアリスと別れてライブ会場へと向かっていった。



## 第26話 ライブにイベントは付き物

夜見と空はアリスと魔理沙と別れて人里をしばらく歩いていると、道の脇の方に人が少し並んでいるのが見えた。そしてその列の最後尾には男性がこう書かれた看板を持っていた。

「プリズムリバーライブ最後尾」

そして夜見は空の肩を叩いて、列の最後尾を指差した。

夜見「空さん、どうやらあの列に並ばないといけならしいから並ぶぞ」

空「うん、わかった」

そして夜見と空は列の最後尾に並ぶと看板を持った男性は自分達の後ろに立ち始めた。その後に夜見と空の後ろに人が並び始めると看板を持った男性はどんどん後ろへと行った。

しばらく並んで待っていると列が少しずつ前に進み始めたので、夜見と空も少しずつ前に進んだ。そしてしばらく進んでいるとライブ会場が見えてきた。

空「ねえ、黑夜さん あれがライブ会場かな？」

夜見「ああ、多分そうだろうな」

ライブ会場は十字路の1つの道が高さ5 mほどの板で塞がれており、その板の下の中央辺りに少し広めの扇形のステージがあった。

そしてそのステージから2 m離れた辺りから椅子が扇形にずらりと並べてあったので、そこが観客席なのだろう。そして観客席の1番後ろから15 m離れた辺りからはロープでこの先へ進めなくなっていたため、入場券が無いとライブは見えないようだった。

前方を見ると列の1番前の人が観客席の入り口にいる女性にライブの入場券を見せると次々へと観客席へと座っていった。

しばらくして夜見と空の目の前まで入り口が来ると、入り口にいた女性に話しかけられた。

女性「入場券を見せてください」

そして夜見はリリカから貰った入場券を見せると女性は道を譲ってこう言った。

女性「特別席の入場券ですね この席へどうぞ」

そう言つて女性は夜見に紙を渡してきたのでその紙を見てると1-15・1-16と書かれていたので、おそらくそこが自分達の座る席なのだろう。そして夜見と空はライブ会場に入ると自分達の座る席を探し始めた。

夜見「……どこだ、俺達の座る席は？」

空「数字は何か意味があるのかな？」

空がそう言うのと夜見は近くにある席を見てみた。

夜見「数字か：。この席は前から5番目、左から11番目にあるから51111って小さく彫つてあるな」ということは俺達の席は1番前か」

そして夜見と空は通路を通つて1番前に行つて左から15番目と16番目の椅子を見つけたが：。

夜見「：。ここつてステージが正面じゃねえか」

空「やった！黒夜さん、特等席だね」

夜見「ああ、そうだな まあ、俺は別に見ればどこでも良かったんだけどな」

そんなことを言いながら夜見は1115、空は1116の椅子に座つた。そして夜見と空はライブが始まるまで待つていると、観客席に観客がどんどん座つて席が8割ほど埋まつた。するとそこで夜見は空が横で少し震えていることに気付いた。

夜見「どうした？空さん」

空「ちよ、ちよつと寒くて」

そう言つて空は寒そうに自分の腕を擦り始めた。すると夜見は自分のマントを脱いで空にマントを羽織らせた。

夜見「こんな真冬の夜に半袖で来るからだろ とりあえず俺のマントを羽織つとけ」

空「あ、ありがとう、黑夜さん でも、黑夜さんは寒くないの？」

空はそう言いながらマントの前を閉じてあからさまに寒そうにしていた。

夜見「別に？」

空「そうなんだ… 暖かいね、このマント」

夜見「そうか？ 特に気にしたことはないな」

空「きつと、黑夜さんの温もりがあるからかな？」

夜見「別にそんな優しさのある行動でもなかっただろ」

空「… 違うよ？ 体温的な話」

夜見「そつちかよ、紛らわしいな」

そんなことをしていると観客席もほとんど満席になってきており、席は空いてる席がちらほら見える程度になってきた。すると夜見の隣の席に、ある少女がこう言つて席に座った。

？「隣、失礼するわよ」

夜見「… なんだ、レミリアさんか」

夜見は隣を見ると隣にはレミリアが座っており、レミリアの左側にはフランドールが座っていた。

レミリア「まさか、貴方がもう既に会場に入つてるとは思わなかったわ」

フランドール「こんばんは、黑夜」

夜見「今日はフランドールさんも一緒か レミリアさんのことだから咲夜さんでも連れてくると思ったんだが、今日はいないのか？」

フランドール「いるよ、後ろの方に」

そしてフランドールが後ろを向いて指を指したのでその方向を見ると、かなり後ろの方に咲夜が座っていた。そして咲夜はフランドールが見ているのに気付くと笑顔でそつと手を振った。

夜見「あんな後ろにいさせて大丈夫か？」

レミリア「私が呼べばすぐに来るわよ そもそも、あの席は本当は貴方の席になるはずだったのよ」

レミリアがそう言うのと夜見は、今日レミリアに人里に来るように言われた理由を理解した。

夜見「ということは、今日俺を人里に8時に来るように言ったのはこのライブのためか」

レミリア「そうよ 貴方だったら15分前にでも来るかと思つて列の近くで待つてたのに来なかつたから、急遽あの入場券は咲夜のものにしたわ」

夜見「そうか……なんか悪いことしたな」

レミリア「別にいいわ 咲夜にも楽しんでもらえらるって思えばね」

すると夜見はある人物を思い出したので、今何をしているか聞いてみることにした。

夜見「そういえば、咲希さんはどうした？紅魔館で留守番か？」

レミリア「ええ、そうよ まだ運命は変わっていないようだから、メイドの嗜みたじなを美鈴から学ばせると称して留守番させておいたわ」

夜見「へえ、そうか また菓子で釣ったのか？」

レミリア「当たり前じゃない あの子、おやつに目がないから」

するとレミリアの隣にいたフランドールは夜見にあることを聞いてきた。

フランドール「ねえねえ、黑夜の隣に座ってるのは一体誰？もしかして、黑夜の家族？」

すると夜見はフランドールの質問に対してあることを思った。

夜見（空さんのことか 空さんと家族って言ってもさとりさんとかがばれることはないだろうし、紹介するか）

そして夜見は空のことを紹介しようとする空にフランドールの聞いてきたことが聞こえたらしく、空はフランドールにこう言った。

空「人のことを聞くときは、まずは自分のことを話すんだよ？」

するとレミリアは空の言ったことに対して同じ考えを持っていたようだ。

レミリア「そうよ、フラン まずは自己紹介をしなさい」

すると空とフランドールはそれぞれ自己紹介をした。

フランドール「私はフランドール・スカーレット 吸血鬼だよ」

空「私は霊鳥路空、鴉の妖怪だよ それで、さつき黒夜さんと話してたあなたは誰？」  
するとレミリアは席の立って空の前まで来ると、スカートの横を両方つまんで少し持ち上げて頭を下げながら上品に自己紹介をした。

レミリア「私はレミリア・スカーレット、紅魔館の主よ」

空「レミリアさんだね、よろしく」

レミリア「ちなみに、フランは私の5つ下だから私が姉、フランは妹よ」

空「へえ、そうなんだ それってさと「空さん、ちよつと」わわっ!?!く、黒夜さん!?!」

すると夜見はいきなり空の手を取ってレミリアとフランドールから離れて空に小声で話し始めた。

夜見「いいか、空さん さとりさんやこいしさんの素性は絶対に他人に言っちゃ駄目だ いいな?」

空「え?でも、あつちも姉妹なんだし、もしかしたらさとこいし様と仲良くなるかもしれないよ?」

夜見「空さん、さとりさんとこいしさんがどうして地底で暮らすようになったかわかってない訳じゃないだろ？これはさとりさんとこいしさんの為だ、わかったな？」

空「……うん、そうだね さとり様とこいし様に辛い思いはしてほしくないもんね」  
空が納得して話が終わると、夜見と空は再びの席へと戻っていった。

夜見「いや、すまない ちよつとな」

レミリア「……別にいいわ 私もフランも根掘り葉掘り聞く気はないから安心してちようだい」

夜見「……すまないな」

レミリア「知られたくないことが無いなんてあり得ないもの もちろん私にだって知られたくないことはあるわよ？」

夜見「……妖怪も、いろいろと大変なものだな」

レミリア「種族が違うだけで、生きていることに変わりはないもの」

夜見「……そうだな」

そして夜見とレミリアがしんみりとしていると、後ろの方から2人に声をかけられた。  
た。

？「お、夜影に空！案外席が近かったな」

？「あら、まさか特等席を取ってただなんて思わなかったわ」



夜見「俺達の真後ろなのか、魔理沙さんにアリスさん」

そして夜見が後ろを向くと夜見の後ろに魔理沙が、空の後ろにアリスが座っていた。するとレミリアは何かフランに耳打ちをしていたが、レミリアが何かを話し終わると魔理沙に向かって言った。

レミリア「あら、貴女もライブに来ていたのね」

魔理沙「なんだ、吸血鬼姉妹も来てたのか 妹の方はわかるけど、まさか姉まで来るとはな」

レミリア「別にいいじゃない、私だってたまには羽を伸ばしたいのよ」  
すると、その会話を聞いていたアリスが魔理沙に質問をした。

アリス「… ねえ、魔理沙 この妖怪と知り合いなの？」

魔理沙「ああ、前に言ってた異変の犯人だ 異変が終わった後もよく遊びに行ってるんだぜ」

夜見・レミリア「主に本を盗みに、な(ね)」

そして夜見とレミリアの声がたまたま揃って同じことを言うと、アリスはジト目になって魔理沙を見た。

アリス「… 魔理沙、私の家では飽き足らずまさか他の所で本を盗んではね」

魔理沙「いやいや、違うぞ!? 私はあくまでも本を一生借りてるだけだぜ!」

アリス「それを盗みつけていうんでしょ？はあく、貴女の盗み癖には呆れるわ」  
アリスは魔理沙の盗み癖に呆れ、魔理沙は屁理屈な理論で言い訳をしているとレミリアは夜見にあることを聞いた。

レミリア「黒月、1つ頼み事をいいかしら？」

夜見はレミリアに呼ばれると一瞬不思議に思ったが、夜見は返事をした。

夜見「頼み事？なんだ一体」

レミリア「期限は設けないけど出来るだけ早めに、この泥棒の家から本を取り戻してくれないかしら？ついでに、この人形使いの本も」

レミリアがそう言うのと夜見はある疑問を感じた。

夜見「…別に構わないが、後者の方はレミリアさんに何も関係ないはずだが？」

レミリア「言ったでしょ？ついでって特に意味は無いわ」

夜見「…まあ、別にいいか じゃあ、明日から少しづつで構わないか？」

レミリア「ええ、頼んだわよ」

そして話が終わったが、夜見は小声でレミリアに不思議に思ったことを尋ねた。

夜見「なあ、レミリアさん なんで俺の偽名の呼び方を知ってるんだ？レミリアさんの前で一言も偽名自体すら言っていなかったはずなんだが…」

レミリア「それは前に美鈴が異変の時に貴方がそう呼ばれてたって聞いたのよ フラ

ンにもさつき耳打ちして伝えたから大丈夫よ」

夜見「さつき耳打ちしてたのはそういうことか 随分と抜かり無いな」

レミリア「私達には本名を言ったってことは私達を信用してるということでしょう？信用してくれる人を裏切るのは、私のプライドが許さないわ」

夜見「そうか、ありがとう」

レミリア「どういたしまして」

そして夜見とレミリアが話し終わると同時に、いきなり観客席の人達が歓声を上げ始めた。何事かと思つてステージの方を見てみると、見覚えのある3人が観客席の人達に向かつて手を振つてステージに上がった。

ルナサ「・・・相変わらず、すごいお客さんの数ね」

メルラン「みんななく！こんばんわく！」

リリカ「イエーイ！みんなー！盛り上がってるかー!？」

そう言つてリリカは拳を握つて片手を上に突き出すと観客席から大きな歓声が上がった。

ワアアアアアアア!!!

するとリリカはもつと大きい歓声が欲しいと思つたのか、こんなことを言い出した。

リリカ「みんなー！全然元気無いよー!?!盛り上がってるかー!?!」

ワアアアアアアア!!

すると今度はさらに大きな歓声が上がって会場は盛り上がっていたのだが、最前列のある2人は盛り上がる様子は無かった。

夜見「……さすがに耳に来るな 痛え」

レミリア「同感ね しかも、最前列だから一番うるさいわよ?」

すると空とフランドールが夜見とレミリアが盛り上がっていないことに気付いて声をかけてきた。

空「どうしたの、黒月さん?ライブ始まったんだから、楽しまないと!」

フランドール「空の言う通りだよ!ほら、お姉様も楽しもう?」

夜見「……どうする?」

レミリア「……知らないわよ」

夜見「……はあ、困ったな」

するとステージにいるメルランはルナサとリリカにこう言った。

メルラン「みんな、いい感じに盛り上がってるよー!」

ルナサ「じゃあ、そろそろ始めましょうか」

リリカ「よくし!盛り上がったところで最初の曲、行ってみよー!」

そしてリリカが合図をした瞬間に、プリズムリバー3姉妹の手元にそれぞれの楽器が

現れてライブがいよいよ開催された。ライブの演奏は昼間に聴いた時とは別の心地よさを感じ、1曲1曲が終わる度に観客から盛大な拍手と歓声がプリズムリバー姉妹に送られていた。

そしてライブが始まってから12曲ほど演奏し終わりライブももう後半になると、夜見は少し眠気を感じ始めてきた。

夜見（なんか、眠気がさしてきたな 空さんは大丈夫か？）

そして夜見は空の方を見ると空がこちらに寄りかかるように倒れて来て、夜見の肩に空の頭が乗った。さらに空は寝息をたててそのまま寝始めてしまった。

夜見（起こすのも可哀想な気がするし、このまま寝かしといてやるか）

しかし空が夜見の肩に頭を預けて寝ている様子は、傍から見たら完全にカップルにか見えないのだが、夜見は気にすることなくライブをそのまま聴くことにした。

そしてライブの最後の演奏も終わりが近づいてきて、そろそろ終わりそうな頃になると夜見は空の肩を叩いて起こし始めた。

夜見「空さん、そろそろ起きろ もう少しで終わるぞ」

空「……うん？あれ？私、もしかして寝てた？」

夜見「ああ、ぐっすりとな」

すると空はまだ眠気が取れないのか体を伸ばしてあくびをした。

空「ふわく、少し曲聴き逃しちゃったな　なんで起こしてくれなかったの？」

夜見「いや、随分とぐっすり寝てるから起こすのは少し可哀想な気がしてな」

空「ふくん？まあ、いいや」

そして最後の演奏が終わると観客から一段と大きな拍手と歓声がプリズムリバー姉妹に送られた。ライブが終わると魔理沙とアリスは夜見達に別れを言って、さっさと会場を出たので夜見も帰るために立ち上がるうとする。レミリアに腕を掴まれて止められた。

夜見「どうした？レミリアさん」

レミリア「待ちなさい、ライブのついでにもう一つ用事があったわ」

夜見「用事？なんだよ一体」

レミリア「少し待ってればわかるわ」

レミリアに待つように言われた夜見はおとなしく席に座っていると、ルナサとメルランがステージから下りてどこかへ行ってしまった。そして少し経ってルナサとメルランが2人で大きな箱を持ってくると、それをステージの中央に下ろした。するとリリカがこんなことを言い始めた。

リリカ「それじゃあ、今年もライブ終了後のゲーム！始めたいと思いまーす！」

急にリリカがゲームを始めると言うと、観客から歓声が上がった。しかし夜見は何が

なんだかさっぱりわからなかった。

夜見「……ゲーム？何するんだよ？」

レミリア「今から説明するでしょうから、聞けばわかるわよ」

夜見「そもそも、ゲームをするだなんて入場券の予定に書いてあったか？」

レミリア「書いてないわよ、ライブ自体は終わったもの」

するとステージ上にいるリリカがゲームのルールを説明し始めた。

リリカ「じゃあ、ルール説明！まずは友達や家族と来た人は代表者を決めてください！その後に私と一齐にじゃん拳をして勝った人だけが残り、最後の5人になってもらうまで続けます！そして残った代表者5名にはこの豪華景品をプレゼントしまーす！」

そしてリリカは箱からある物を3つ取り出した。それはプリズムリバー姉妹が着ている服と同じ服だった。するとリリカは観客にあることを尋ね始めた。

リリカ「みんなー！この服欲しいよねー!？」

すると観客から盛大な歓声が上がりが始めたが、その歓声に対して夜見は疑問を感じた。何故なら小さな子供や女性ならまだしも、男性まで歓声を上げていたからだ。

すると隣にいたレミリアが夜見に話しかけてきた。

レミリア「貴方が思ってること当ててあげるわ どうしてあの服を男性も欲しがってるか、でしょ？」

夜見「… ああ、そうだ」

するとレミリアは男性が欲しがらちよつとした理由を説明し始めた。

レミリア「男性は主にあの服を家の中に飾ったりすることが多いそうよ　まあ、女装が趣味の場合は別でしょうけど」

夜見「…なるほどな　要するに外の世界で言うアイドルのポスターみたいなものか…ん？じゃあ、だとしたら…」

するとそこで夜見はあることに気付いてレミリアに質問をした。

夜見「レミリアさん、まさかあの服が欲しいのか？」

レミリア「馬鹿言わないでちょうだい　フランが毎年あの服を欲しがってるだけよ」

レミリアはそう言っていたが夜見が質問をした瞬間にレミリアの羽が少しビクツとしたので、平然を装っているだけで実際はレミリアもあの服が欲しいようだった。

すると今度はレミリアが夜見に質問をしてきた。

レミリア「それで、貴方はどうするのかしら？　貴方はあの服はいらぬのかしら？」

夜見「俺は別にい「ねえ、黒夜さん　私はあの服欲しいな」

夜見はいらぬいと否定しようとした瞬間、横から空がああ服が欲しいと言いだした。すると夜見は空にこう言った。

夜見「勝手にやっつといてくれ　俺はいらぬからな」



すると空は不思議に思った様子で夜見に言った。

空「うにゆ？ 黒夜さんが代表者をするんだよ？」

夜見「…… は？なんで俺が？」

空「だって私、じゃん拳のルールよく知らないもん」

夜見（…… 嘘？じゃん拳のルールすら知らないって物忘れが激しいってレベルじゃないだろ）

すると空は夜見に耳打ちをしてあることを言ってきた。

空「それに、こいし様がこの場にいたら絶対に欲しいって言ってたと思うよ」

夜見（…… 確かにこいしさんがこの場にいたら絶対に欲しがっただろうな それに、もしさとりさんと隣さんのどちらかがいたとしても空さんと同じことを言っただろうな）

どうやら夜見は諦めるしか道は無いため、ため息をついて空に言った。

夜見「わかった やればいいんだろ？」

空「うん、頼んだよ」

すると隣のレミリアは夜見に対してクスクスと笑っていた。

レミリア「ふふ、結局やるのね」

夜見「仕方ないだろ？やらざるを得ない状況になったんだから」

レミリア「それもそうね それと黑夜、私の右腕を掴んでちょうだい」  
するとレミリアが突然腕を掴むように言ってきたが夜見は不思議に思いながらも、とりあえずレミリアの腕を軽く左手で掴んだ。

夜見「……はあ？ どうか？」

レミリア「それでいいわ それで、貴方がグーを出す場合には親指、チョキを出す場合には小指、パーを出す場合には全部の指に、あのステージにいる騒霊が手を出す直前に力を込めなさい」

要するにレミリアは夜見と同じ手を出すためにそのように言ってきたのだろうが、夜見はその考えに納得がいかなかった。

夜見「……同じ手を出せば手に入れられる確率が低くなるだろう なんてこんなことをするんだ？」

レミリア「だって貴方このじゃん拳、1つも負ける気は無いんでしょ？」  
すると夜見はレミリアに向かって質問をした。

夜見「……いつ気付いた？」

レミリア「最初からよ もっと詳しく言えば異変の時に少し違和感があったけど、ここ数ヶ月で確信したって言えばいいかしら？」

夜見「まあ、どうせばれてもいいようなことだしな 集中切らすとまずいから握り過

ぎるかもしれないけど、そこら辺はまさか許してくれるよな？」

レミリア「ええ、もちろん」

そしてステージにいるリリカは右手を挙げてじゃん拳を始めようとしていた。

リリカ「代表者は決まったかなー!? それじゃあ、代表者は手を挙げてね！」

リリカがそう言うのと夜見は右手、レミリアは左手を上にも伸ばした。周りを見ると代表者が軽く100人以上はいたが、夜見は負ける気が全くしなかった。

そしてリリカは合図をした。

リリカ「それじゃあいくよー! じゃーんけーん、ほい! ほい、グーの勝ち!」

リリカはそう言っただけで手の形をチョキにして腕を挙げていた。そして周りの何人かが手を下げている中、夜見とレミリアはグーを出していた。

空「わあ、やったね黒夜さん!」

フランドール「すごい、お姉様!」

レミリア「さて、ちゃんと見えたかしら?」

夜見「ああ、問題なかった」

レミリア「それなら、心配する必要は無いわね」

するとリリカは手の形をグーに戻して再び手を出そうとしていた。

リリカ「2回戦いくよー! じゃーんけーん、ほい! ほい、またまたグーの勝ちだよ!」

そして周りの手を挙げている人数が最初の半分以下になっていく中、夜見とレミリアはグーを出していたため手を下げることがなかった。

その後もリリカはいろんな手を出していたが、夜見とレミリアが負けることはなかった。そして周りを見てみると、どうやら夜見とレミリア以外が全員丁度負けたようで見とレミリア以外は手を挙げていなかった。

リリカ「あ、あれ!?この2人以外みんな負けちゃったの!?じゃあ、その2人は早速景品を取りに来てください!」

そしてリリカは夜見とレミリアを呼んだため2人はステージ上上がった。そこで夜見は観客に見えないように仮面を外すと、プリズムリバー姉妹はそこで夜見に気付いたようだった。

ルナサ「あら、黒夜さんじゃない」

メルラン「え?あ、本当だ」

リリカ「あ、黒夜だったんだ 全然気付かなかったよ」

夜見「1番前の席に座ってたのに気付かなかったのかよ」

メルラン「いや、仮面してる不思議な人がいるなーとは思ってたけど」

リリカ「まさか黒夜だとは思わなかったよ」

夜見「ああ、そうか メルランさんとリリカさんは仮面を被ってた時の格好を見てな

かったな」

夜見はプリズムリバー姉妹と軽く会話をすると左から視線を感じたので左を向くと、レミリアがこちらを睨み付けていた。

レミリア「… 貴方、この騒霊達の知り合いなの？」

夜見「ああ、そうだが… 何故俺を睨む？ 何か不満でもあるのか？」

レミリア「別に、ただ少し気になっただけよ」

夜見「そうか？ ならいいんだが…」

するとその様子を見ていたリリカがニヤニヤしながら夜見を冷やかしてきた。

リリカ「駄目だよ、黒夜 彼女がヤキモチ焼いてるんだから構ってあげないと」

リリカが冷やかすと夜見はめんどくさそうにため息をついて否定しようとする、何故かレミリアがリリカに否定をし始めた。

レミリア「何言ってるのよ この私がこんな人間と付き合うわけ無いでしょう？」

リリカ「え、でも結構お似合いのカップルだと思うよ？」

リリカがそう言うとは何故かレミリアは顔を真っ赤にして怒鳴り始めた。

レミリア「なっ!?! ばっ!?! な、何馬鹿なことを言ってるのよ!?! わ、私がお似合いのカップルですって!?! ふぎけないでちょうだい！」

リリカ「うわ、顔真っ赤だ、何？もしかして、お似合いのカップルって言われて

嬉しかったとか？」

するとレミリアは顔を真つ赤にしたまま鋭い爪を立て始めた。

レミリア「そんなことあるわけ無いでしょ！八つ裂きにされたいの!？」

その様子を見た夜見はレミリアに暴れられると会場が混乱するのが目に見えていたので、とりあえず夜見はレミリアを宥め始めた。

夜見「レミリアさん、一旦落ち着いてレミリアさんはそんな冷やかしに乗るような気品の無い吸血鬼じゃないだろ？」

リリカ「ほらほら、彼氏さんに言われちゃってるよ、早く落ち着かないと」

レミリア「本当に八つ裂きにされたいようね！望み通りにしてあげるわ！」

するとレミリアはリリカに飛びかかったので夜見は急いでレミリアに羽交い締めをするが、レミリアは暴れて羽交い締めを振りほどこうとしていた。

レミリア「黒夜、放しなさい！」

リリカ「黒夜、放しちゃ駄目だよ？放したら私八つ裂きにされちゃうもん」

そして夜見はレミリアに羽交い締めをしながらため息をつく、夜見はあることを言った。

夜見「2人とも周りの目を見てみる、どんな風に見られてると思ってる？」

夜見がそう言うのとレミリアを放した。そしてリリカとレミリアは周りを見ると、観客

はおろかるナサとメルランからも冷たい視線が送られていた。

それに気付いた2人は申し訳なきように俯いてしまった。

夜見「… まあ、自業自得だな とりあえずリリカさん、さっさと景品を渡してくれ」

リリカ「あ、うん、そうだね…」

するとリリカは少し俯いたまま箱から服を取り出してそれを袋に入れて夜見とレミアに手渡した。景品とは言っても一応もらった物なので夜見はお礼を言った。

夜見「ありがとう、リリカさん それとレミアさん、俺は帰るからな それじゃあ」

そして夜見は仮面を被ってステージを下りると空に向かって帰ることを伝えた。

夜見「空さん、帰るぞ」

空「うん、わかった じゃあね、フランさん」

そして空は席を立ってフランドールに向かって手を振るとフランドールも空に向かって手を振り返した。

フランドール「うん またねー、空」

そして夜見と空は会場を後にして地霊殿へと向かったのだが、空は人里の中を歩いている途中で足を止めてこんなことを言い出した。

空「黑夜さーん、私歩くの疲れたー」

夜見「疲れたって、そこまで歩いてないだろ？」

空「うー、疲れたー」

そして空は本当に疲れたのかその場でしゃがみ込んでしまった。夜見はそんな小さな子供のような行動に呆れたが、空が歩いてくれるまでには時間がかかりそうだったので夜見は空の前で背中を向けてしゃがみ込んだ。

夜見「ほら」

空「・・・え？何？」

夜見「おぶってやるから乗れ」

空「本当!? やった!」

すると空は立ち上がって夜见到近付いて背中に凭れ掛かって腕を首に回すと、夜見は空の膝裏に腕を回して空をおんぶして歩き始めた。

しばらく歩いてみると空は夜见到こんなことを聞き始めた。

空「ねえ、大丈夫？ 私、重くない？」

夜見「大丈夫だ 寧ろ軽い」

空「そっか・・・今日のライブ、面白かったね」

夜見「ああ、そうだな」

そして夜見と空は人里を出て森の中に入ってしばらく歩いていると、夜見は空に対してふとあることを思った。



夜見（そういえば空さんと一緒にいたり、会話したりすることなんてあまり無かったな……）

すると夜見は空と何か話でもしようと思つて話しかけてみた。

夜見「なあ、空さん」

空「……」

夜見「……空さん？」

夜見は空から返事が無いのもう一度呼んでみたが、それでも返事が無かった。すると空はもぞもぞと体を動かしたが、すぐに動きを止めて静かに呼吸をしていた。どうやら空はいつの間にか寝てしまったようだ。

夜見（寝たのか……まあ、ライブで随分はしゃいでいたから疲れたんだろうな）

夜見がそう思っていると再び空がもぞもぞと動いた。すると今度は空の<sup>まぶた</sup>瞼がゆつくりと開いて、眠そうに目を擦った。

空「んん、ん？あれ？私、また寝ちやつてた？」

夜見「起きたか、空さん 今日随分と寝るんだな」

空「だって、こんな時間まで起きてたこと無いもん 黒夜さんは眠くないの？」

夜見「全然眠くない ちなみに地霊殿に着くまでまだ時間はかかるからもう少し寝ていいぞ？」

空「ううん、起きてるよ」

夜見「そうか、帰ったら風呂に入ってさっさと寝ないとな」

空「うん、そうだね」

すると空はライブ後のじゃん拳で少し気になったことがあったので夜見に質問をした。

空「そういうえば黒夜さんってじゃん拳に全部勝ってたけど、黒夜さんって相手が何を  
出すか知ってたの？」

そして夜見は自分が勝ち続けたタネを明かした。

夜見「ああ、あれはただ相手の出す手の指を見て、出す直前に勝つ手を出したただけだ」

空「へえ、黒夜さんって目がいいんだね えっと、グーがチョキに勝つんだっけ？」

夜見「ああ、そうだ。そしてチョキはパーに勝って、パーはグーに勝つんだ」

夜見がじゃん拳の勝ち負けの条件を言い終わると、空は手を夜見の目の前に出してきた。

空「じゃーんけーん「グー」

そして空は急に夜見にじゃん拳をしてきた。しかし夜見は空をおぶっているから手が出せないため、口で自分の出す手を言った。しかし空は不思議に思った。

空「あれ？勝っちゃった」

空が出した手はパー、そして夜見が出した手はグーなので空がじゃん拳に勝った。すると空はもう一度夜見とじゃん拳をした。

空「じゃーんけーん「チョキ」… また勝った」

今度は空はグーを出したのだが、夜見はチョキを出したため空が勝った。すると空は何故夜見が負けたか聞いてみた。

空「黒夜さん、相手の出す手が直前でわかるんだよね？なんで負けたの？」

夜見「なんでって、空さんに勝って欲しかっただけだ」

夜見は正直に自分の思っていたことを言うと、空は夜見にこう言い始めた。

空「そっか… 優しいんだね、黒夜さんは 私はそういう黒夜さんの優しい所、大好き もちろんさとり様とこいし様、それにお隣も黒夜さんのこと、大好きだよ」

夜見「… 知ってるよ ありがとうな、いつも」

空「どういたしまして」

すると空は夜見の首に回っていた腕に少し力を込めて体を押し付けてきた。そして夜見は空をおぶったまま歩いていると地底への穴を見つけたので、夜見と空は地底へと入っていった。

## 第27話 寂しがり屋な妖怪

夜見と空は地底を進んでいき旧地獄街道を歩いていたが夜遅いからか周りには誰もおらず、宙に怨霊がふわふわと浮いているだけだった。

そして夜見は少し暇だったので空に話しかけた。

夜見「空さん、少し聞いていいか？」

空「ん？いいよ、どうしたの？」

夜見「まあ、言いたくなければ言わなくていいんだけど、空さんはどうして地底に住んでるんだ？空さんが地上で嫌われる要素なんて1つも無い気がするんだが。」

すると空は少し悩んだような様子で答えた。

空「ん、どうしてって言われても、別に私はここで生まれてずっと育ってきたからここにいただけだよ？」

夜見「そうなのか、ちなみにここに住んで何年くらい経つんだ？」

空「ん、それは覚えてないけど、悪いことを沢山した魂がなんかいろいろされてたのは生まれたときからお隣とずっと見てたよ」

夜見「そうか、結構前から住んでるんだな」

空の話から察するにおそらく空と燐は、ここがまだ地獄として使われていた時代に生まれたのだろう。その事を夜見は理解すると空はこんなことを言い始めた。

空「そういえばあの時は私もお燐もまだ動物の姿のままだったなく」

すると夜見は空の言った言葉に興味を示した。

夜見「……え、どういことだ？空さん」

空「ん？何が？」

夜見「さっきの動物の姿だったって話」

夜見がそう言うとき空は思い出したようにその時のことを説明した。

空「ああ、その話ね 私とお燐は生まれたときは動物の姿だったんだよ 私は鴉、お

燐は猫だったんだけど、さとり様とこいし様が来て一緒に住んでたらしいの間にか、こんな人間に近い姿になったんだ」

夜見「へえ、そんなこともあるんだな ちなみに動物の姿に戻れたりとかはしないのか？」

空「私はこの姿になってからは戻ってないからわかんないや でも確かお燐なら出来た筈だよ」

夜見「燐さんが猫の姿ねえ 確かに燐さんは猫みたいな耳と尾が生えてるけどあんまり猫の姿とか想像出来ないな」

夜見がそう言うとき空は夜見にあることを聞いてきた。

空「そういう黑夜さんは昔はどうだったの？外の世界にいたときはどんな暮らしをしてたの？」

空が聞いた瞬間、夜見は少し俯いて急に黙ってしまった。空はその様子を不思議に思っていたが、しばらくするとハツとして謝り始めた。

空「あ、ご、ごめんね 黑夜さんは昔のことは話したくなかったんだよね 私、すっかり忘れちゃって…」

夜見「…いや、大丈夫だ 空さんは何も悪くない」

空「そ、そろそろ自分で歩くよ ありがとうね、ここまで運んでくれて」

夜見「そうか？じゃあ、降ろすぞ」

すると夜見はしゃがむと空は夜見の背中からゆっくりと降りた。そして夜見が歩くと空は隣に並んで歩き始めたが、さっきのことを気にしているのか申し訳なさそうな様子だった。

夜見「…」

空「…ね、ねえ、黑夜さん、怒ってる？」

空が怒っているか聞いてみると夜見は素っ気ない様子で返事をした。

夜見「…別に？」

空「……本当に怒ってない？」

夜見「……ああ、怒ってない」

空「……い、いいんだよ？怒ってるなら、正直に言って」

夜見「……怒ってないって」

空「……やっぱり、本当は「だから怒ってないって」……うん」

夜見は空がしつこく怒ってるか聞いてくるので空が話してる途中に割り込むと、空は返事をしてそのまま黙ってしまった。

そして夜見がため息をつくとき足を止めて空の方を向き、貸したマントのフードを下げて空の頭を軽く撫で始めた。

空「ひゃ!? く、黒夜さん!？」

空は急に頭を撫でられると小さな悲鳴を出したが、夜見は気にすることなくそのまま空の頭を撫で続けた。すると空は夜見に話しかけてきた。

空「く、黒夜さん？」

夜見「ん、どうした？」

空「な、なんで私の頭を撫でるの？」

夜見「なんでって、空さんが落ち込んでるから少しでも元氣が出ればって思ったんだが……嫌ならやめるか？」

空「い、いや、別に嫌じゃないけど、急に撫でてきたからビックリして…」

夜見「そうか」

そして夜見はしばらく空を撫でていると、空は誰にも見られてはいないが、恥ずかしいの顔が少しずつ赤くなっていった。すると夜見は空に話しかけた。

夜見「もう大丈夫か？」

空「う、うん、大丈夫… ありがとう」

夜見「どういたしまして ほら、帰るぞ」

空「うん、そうだね♪」

夜見は空を撫でるのをやめると、2人は地霊殿へと向かった。そして夜見と空は地霊殿に着き、夜見が玄関を開けて地霊殿に入るとエントランスではピンクのパジャマを着たさとりが待っていた。

夜見「ただいま、さとりさん」

空「ただいま、さとり様」

さとり「黑夜さん、お空、お帰りなさい お風呂が沸いてるからお空は入ってきなさい」

空「はい」

そして空は夜見にマントを返すとさとりの言う通りにお風呂へと向かって行った。



するとさとりは夜見に話しかけてきた。

さとり「どうでしたかライブは？楽しめましたか？」

夜見「ああ、楽しめたよ それに空さんもとても楽しんだしな」

さとり「そのようですね お空から楽しかったという心の声が沢山聞こえてきましたから」

夜見「そうか、なら良かった」

そして夜見はあることを思い出すと、さとりに聞いてみた。

夜見「そういえば、こいしさんの様子はどうか？悪化とかはしてないよな？」

さとり「ええ、大丈夫ですよ 夕飯の時には咳もしなくなって熱も下がっていたので、きつと治ってますよ」

夜見「でも、一応今日中にはこいしさんにあまり近付かないようにな？治ったと思って近付いたら自分が罹かかったなんてことがあったら面倒だからな」

さとり「わかっていますよ ところで黒夜さん、その袋は一体なんですか？」

するとさとりは夜見の持っていた袋を指差したので、夜見はその袋を開けて中身をさとりに見せた。

夜見「ああ、なんかライブのイベントで貰ったんだ ……あれ？これって同じ服入ってないか？」

さとり「え？本当ですか？」

そして夜見とさとりが袋の中身を取り出ししてみると、中からルナサ、メルラン、リリカの服がそれぞれ着も出てきた。しかしその服はそれぞれサイズが違っていた。

さとり「へえ、こんなに沢山貰ったんですか」

夜見「これって間違えて入れたりとかしてないよな？もし間違えて入れてたとしたら困るぞ？」

さとり「まあ、もしそうだったとしても洗って返しましょう。それならきつと大丈夫でしようし」

夜見「まあ、そうだな。ところでさとりさん、どれか着るか？」

夜見がそう言うときとりは服を手にとつてどの服を貰おうか選び始めた。

さとり「そうですね。それじゃあ、私はこの薄いピンク色のを貰いますね」

そう言つてさとりは小さいサイズのメルランと同じ服を手にとつた。するとさとりは夜見に逆に聞いてきた。

さとり「それで、黒夜さんはどれを着たいんですか？」

さとりがそう聞いた瞬間、夜見は一瞬固まった。しかし夜見はすぐに手を横に振つた。

夜見「え？いやいや、俺は着ないぞ？」

するとさとりは口に手を当ててクスクスと笑い始めた。

「さとり「ふふ、冗談ですよ。でも黒夜さんの顔はきれいですし、ウィッグでも被れば似合うんじゃないんですか？」

夜見「ウィッグとかそういう問題じゃない。ていうか着ないってさつき言っただろ」  
さとり「わかつてますよ。それじゃあ、片付けましょうか」

そして夜見とさとりは袋から取り出した服を1つ1つ丁寧に畳んで袋の中に入れてと、さとりはその袋を持って自分の部屋へと持っていった。すると夜見もマントと仮面を置いてくるために自分の部屋へと向かった。

夜見（今日はいろいろと疲れたな。さつきとベッドに横になって休憩でもするか）

夜見は自分の部屋の前まで着くと扉を開けて入っていった。そして夜見はベッドへと横になろうとしたが、横になることが出来なかった。その理由はベッドの上にあつた。

こいし「ん、んん…」

夜見（…何故こいしさんがここにいるんだ？）

なんと夜見のベッドの中央には黄色のパジャマを着たサードアイを閉ざしたこいしが横になってぐっすり寝ていた。そして夜見は仮面とマントを机の上に置くとこいしを起こさないようにゆっくりと近付いた。

そして夜見はベッドに座ると、こいしの顔付近の所が異様に濡れているところに気がついた。

夜見（なんでこんなに濡れてるんだ？こいしさんが俺の部屋に間違えて入って水でもこぼしたか？）

こいし「ん、んん…うえ、ひつぐ」

夜見はこいしを見ているとこいしは何故か急に涙を流して泣き始めた。こいしの目からは涙が止まらず、布団がどんどん涙によつて濡れていった。

夜見（ああ、布団が濡れてるのはそういうことか。でもなんでこいしさんは泣いてるんだ？）

そして夜見はこいしの手を握るとこいしも手を握り返してきたが涙が止まる様子はなく、まだこいしの目から涙がぼろぼろと流れていた。

こいし「うぐっ ひつぐ お兄ちゃん… お兄ちゃん…」

夜見はこいしに呼ばれると小声でこいしに向かつて声をかけた。

夜見「…どうしたんだよ、こいしさん」

そして夜見はこいしを持ち上げて抱き締めると、こいしの頭を撫で始めた。しかしそれでもこいしは泣き止まないでずっと涙を流していた。

そしてこいしは夜見に抱き締められたまま何度も夜見のことを呼んでいた。

こいし「お兄ちゃん… お兄ちゃん… お兄ちゃん… お兄ちゃん…」  
すると夜見は再び小声でこいしに声をかけた。

夜見「どうしたんだよ、こいしさん なんて泣いてるんだ？ 泣かないでくれ、こいしさん」

こいし「お兄ちゃん… お兄ちゃん… お兄ちゃん… お兄ちゃん…」

夜見「こいしさん、俺はここにいるぞ」

こいし「お兄ちゃん… お兄ちゃん… お兄ちゃん… お兄ちゃん…」

夜見（泣き止んでくれないな… どうすればいいんだ？）

すると夜見はこいしを抱き締めたまま立ち上がると、自分の部屋を出て廊下に出た。そして夜見は地霊殿内をひたすらぐるぐると歩き回ったのだが、その間こいしはずっと泣いているままだった。

夜見（本当にどうしたんだよ、こいしさん 何が心配なんだ？ 何が不安なんだよ？）

そして夜見がこいしを抱き締めたままエントランスに行くと、ちょうど風呂から上がった黒いパジャマを着た空とばったりと合った。すると空は不思議そうに今の状況を夜見に聞いてきた。

空「何をしてるの、黒夜さん？」

夜見「ああ、なんかこいしさんがずっと泣いたままで中々泣き止んでくれないんだ」

空「そうなんだ こいし様、どうしたの？なんで泣いてるの？」

空はこいしに近付いて小声でこいしに泣いている理由を聞くと、こいしは急に手足をバタバタとさせて暴れ始めた。すると夜見はこいしの振り回している手が空に当たらないように距離を取るが、夜見には何回か手と足が体に当たっていた。

こいし「嫌、嫌！嫌だ！」

夜見「痛っ 痛いつて、こいしさん」

こいし「やだやだ、やだ！やだ！」

こいしの振り回している手と足が夜見に何回も当たってる様子を見て空は心配そうに声をかけてきた。

空「あ、えつと… 黑夜さん、大丈夫？」

夜見「ああ、大丈夫、痛っ だ、大丈夫大丈夫」

空「ど、どうする？さとり様を呼んできた方がいいかな？」

夜見「なんとか落ち着かせるから呼ばなくていい こいしさん、俺はそばにいるから、な？」

そして夜見は自分の部屋に戻るとこいしは疲れたのか手と足の動きを止めて、再び夜見のことを呼びながら泣き続けた。すると夜見はこいしを自分のベッドの上に降ろすといいしの頭を撫でて小声で声をかけた。

夜見「こいしさん、俺はお風呂に行つてくるから大人しく待つてくれ」

こいし「お兄ちゃん……お兄ちゃん……お兄ちゃん……お兄ちゃん……」

夜見「すぐに戻つてくるからな」

そして夜見は自分の部屋を出て脱衣場へ入り服を脱ぐと奥の部屋にある風呂に入った。夜見は風呂に入りながらこいしが泣いている理由をいろいろと考え始めた。

夜見（こいしさんはなんで泣いてるんだ？ライブを一緒に行きたいって言つてたけど結局はいつてらつしやいって言つてくれたし、別にこいしさんのことを無視したただなんてことも特になかったはず……わからないな）

そして夜見は風呂を出て脱衣場にあつた紺色のパジャマを着ると風呂を掃除して自分の部屋へと戻つていった。夜見は自分の部屋の扉を開けるとベッドの上のこいしは起きていて、座りながらこちらの方をじつと見ていた。

すると夜見はこいしに近付いてベッドに座るとこいしに声をかけた。

夜見「こいしさん、起きたのか こいしさんは何故かずと俺のことを呼びながら泣いてたんだが…… なんか嫌な夢でも見たか？」

こいし「……お兄ちゃん」

夜見「どうした？」

こいし「ん」

するとこいしは夜見の首に腕を回して抱きついてきた。そして夜見は抱きついてきたこいしを抱き締めて頭を撫でていたが、こいしは何故か夜見のことを押すように何度も体を押し付けてきた。しかし夜見はこいしが何故自分のことを押しているかが全く理解することが出来なかった。

夜見「こいしさん、どうしたんだよ？」

こいし「ん、ん、ん」

夜見「…」

すると夜見はこいしを抱き締めたまま体を移動させてベッドに自分が仰向けになるように倒れ込んだ。しかしこいしは夜見に抱きついたままだったが、自分の体を押し付けるようにはしてこなくなった。

するとこいしは夜見の顔の横で話しかけてきた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん 今日のリブ、楽しかった？」

そして夜見は正直にリブの感想を述べた。

夜見「ああ、楽しかった」

こいし「…誰かに行ったの？」

夜見「空さんで行った 空さん随分とはしゃいでたから相当楽しかったんだろうな」

こいし「…人里で誰かと会ったりとか、した？」



夜見「そうだな…前に依頼をして知り合った人、それに紅魔館の主人とその妹にも会ったな みんなもライブに来てて、席も近かったから色々話もしたな」

夜見がそう言うときいしは少し暗い雰囲気になり始めた。

こいし「へえ、そう…なんだ…」

夜見「…こいしさん？」

夜見はその様子を不思議に思いこいしのことを心配したが、こいしは夜見にこんなことを言った。

こいし「ねえ、お兄ちゃん 目、瞑って」

夜見「ん、目を瞑ればいいのか？」

こいし「うん、そうだよ だから、早く」

夜見「わかったよ、これでいいか？」

そして夜見はこいしの言う通りに目を瞑った。するとこいしは次は、こう言ってきた。

こいし「お兄ちゃん、私がいいよって言うまで目を開けちゃ駄目だよ わかった？」

夜見「ああ、わかったよ」

こいし「何があつても絶対に目を開けちゃ駄目だからね？」

夜見「ああ、こいしさんがいいよって言うまで絶対に目を開けない」

するとこいしは頭を少し上げると夜見の顔の少し横の方に自分の顔を近付けた。そして次の瞬間……

チュツ

夜見（え?! なっ?! は?! こ、こいしさん!）

こいしは夜見の頬にキスをしてきた。しかし夜見はこいしにキスをされたことに驚いたが、こいしの言う通りに目ははずつと瞑っていた。

するとこいしはいいよとは言わずに夜見の顔の横の方に何度も自分の顔を近付けた。

チュツ チュツ チュツチュツ チュツ

そしてこいしは夜見の頬に何度もキスをしてきた。しかし夜見はこいしの言う通りにいいよと言われていないので抵抗をせずにずっとキスをされ続けた。

夜見「こ、こいしさん? 急にどうした?」

こいし「.:.」 チュツ チュツ

夜見「こ、こいしさん?」

こいしは夜見の声が聞こえていないのか、ずっと何も喋らずに頬にキスをしてくる。そしてこいしは夜見にキスをしてくるたびに何故か少しずつ過呼吸になっていくので、夜見は心配になってもう一度声をかけた。

こいし「はあ、はあ、はあ、はあ」 チュツチュツ チュツ

夜見「: : こいしさん、大丈夫か？少し落ち着いた方が「何言ってるのお兄ちゃん、私は落ち着いてるよ？」」

しかしこいしは夜見が心配して声をかけたのだが、それを遮ってキスをし続けてきた。するとこいしがキスをやっつとやめてきたと思ったら、こいしは微かに聞こえる声でこんなことを言った。

こいし「はあ、はあ もう我慢できない、お兄ちゃんならきつと許してくれるよね？」  
こいしがそう言った後、夜見は自分の顔にある感触を感じたのでその瞬間に夜見はこいしの顔の位置を予測して両手でそつと頬に触れた。するとこいしは夜見にこう言うてきた。

こいし「お兄ちゃん、なんで約束守ってくれないの？」

夜見「何言ってるんだ？目はちゃんと瞑ってるだろ」

こいし「: : 嘘でしょ？だったらなんで私の顔を止められるの？」

夜見「誰だつて顔に吐息がかかってきたらどこに顔があるかなんてわかるだろ」

そう、こいしは自分の顔を夜見の顔に重ねるように近付けて来ていたのだ。そして夜見が両手でこいしの顔に触れていなかったら今頃は確実にお互いの唇が触れ合っていただろう。

するとこいしは少し悲しげな声で夜見に言った。

こいし「… いいよ、目、開けて」

夜見「… いいのか？本当に」

こいし「うん、大丈夫だから 目、開けていいよ」

夜見「…」

夜見が目をゆっくり開けるとこいしの顔はお互いの鼻先が触れるか触れないかの距離まで近づいており、こいしの吐息が夜見の口に何度も当たっていた。すると夜見はこいしの頭に手を回し、こいしの頭が自分の横に来るように抱き締めて頭を撫でた。そして夜見はこいしにどうしてこんなことをしてきたか質問をした。

夜見「こいしさん、なんで急にあんなことをしたんだ？やっぱり嫌な夢でも見たか？」  
するとこいしは首を横に小さく振った。

こいし「… 見てない」

夜見「… さとりさんに何か怒られたからか？」  
するとこいしは再び首を横に小さく振った。

こいし「… 怒られてない たまに様子を見て来て大丈夫？って言ってくれた」

夜見「そうか… 甘えたかったのか？」

こいし「… よくわかんない」

夜見「… そっか、わかんないなら仕方ないな」

夜見はそう言っただけでこいしの頭を撫でながら少し強く抱き締めると、こいしも少し強く抱き締めてきた。そして夜見の視界の端にこいしのサードアイがチラリと見えたので、なんとなく見てみるとサードアイが開き始めた。

しかしその瞳は濁っているのはいつもと変わらないのだが、今の瞳は白目の部分がほとんど真っ赤に染まって充血していた。だが夜見はそのサードアイにそつと触れ始めた。

夜見「こいしさん、大丈夫か？この目、痛くないのか？」

こいし「はあ、はあ、はあ」

夜見「・・・こいしさん？」

するとこいしが再び過呼吸になり始めたので夜見は心配して頭を撫でていたのだが、こいしの過呼吸の間隔は短くなる一方で胸が苦しいのか胸を押さえ始めた。そこで夜見はただ事ではないと察して急いでこいしを起き上がらせ、自分も起き上がるとこいしの背中を擦りながら落ち着かせようとした。

夜見「こ、こいしさん!?大丈夫か!？」

こいし「寒い・・・痛い・・・苦しいよ・・・お兄ちゃん・・・」

夜見「なっ?!ちよつと待ってろ!今さとりさんを連れてくる!」

そして夜見はベッドから立ち上がるようにしたが、その前に何故か苦しんでいるこいし

が夜見の首に腕を回して抱きついてきた。

夜見「は!?!何してるんだ、こいしさん!?!」

こいし「嫌だ、行かないで…。お兄ちゃん、苦しいの」

夜見「苦しいからさとりさんと呼んでこようとしてるんだろ!?!なのに行かないでつておかしいだろ!」

こいし「お兄ちゃんとかうしてた方が苦しいのが和らぐの　お兄ちゃんが癒してくれるの」

夜見「だから何を言っ「チュツ」なっ!?!何してるんだ!」

するとこいしは再び夜見の頬にキスをしてきた。そしてこいしは夜見にこんなことを言ってきた。

こいし「足りない…。お兄ちゃん、足りないの」

夜見「何を言っ「チュツ」…。こいしさん?」

こいし「ぐすつ　足りない　ひぐつ　足りない、お兄ちゃん」

するとこいしは急に涙を流し始め、そのまま夜見の頬に何度もキスをしてきた。そして夜見はこいしの体が震えていることに気が付いた。

こいし「ぐすつ　ひぐつ　足りない、お兄ちゃん　ぐすつ　足りないよ、お兄ちゃん」

夜見（そうか、こいしさん…）

そして夜見はこいしが苦しんでいる原因を理解すると、夜見はそつとこいしのことを抱き締めた。

夜見「こいしさん、寂しかったんだな 時間があればいつも一緒にいたのに、今日は急に空さんと人里に行っちゃったから一緒にいる時間が少なくて寂しかったんだな」

こいし「うん、寂しかった ずつとお兄ちゃんに会いたいって、お話ししたいって思ってた でも、今日お兄ちゃんは私を残してお空と… お空と… お出掛け… して…」  
こいしは再び過呼吸になり始めたと同時にボタンツと部屋の扉が開かれた。するとそこには何故か怒りの表情をしたさとりがいた。

夜見「…さとりさん、どうした？」

さとり「こいし…あなた…」

こいし「…お姉ちゃん」

するとさとりは夜見とこいしに近付いていくと、こいしの腕を掴んで夜見から無理矢理引き剥がそうとしてどこかへ連れていこうとした。

さとり「こいし！来なさい！」

夜見「お、おい？さとりさん？」

しかしこいしは両腕で夜見をしつかり抱き締めて抵抗した。

こいし「嫌だ！お兄ちゃんといたい！」

さとり「ふぎけないで！早く来なさい！」

夜見「おい、さとりさん？急にどうしたんだよ？」

さとり「黑夜さんには関係ありません　こいし！きつさと来なさい！」

そしてさとりが力を込めてこいしの腕を引っ張ると夜見から引き剥がされて、こいしはさとりに連れていかれようとしていた。しかしこいしは抵抗して夜見に助けを求めて片腕を伸ばしていた。

こいし「やだ！お兄ちゃん！」

夜見「さとりさん、待ってくれ」

そして夜見はベッドから降りるとさとりが扉を開けた瞬間に肩を掴んで止めた。するとこいしは一瞬の間隙をついてさとりの掴んでいた手を振りほどくと夜見に抱き付いてきた。

そしてさとりが振り返ると真剣な顔で夜見に向かってこう質問をしてきた。

さとり「こいしが今どんな状態かわかってるんですか？」

夜見「わかってる　わかってるから止めてるんだ」

夜見がそう言うときさとりはこんなことを聞いてきた。

さとり「…じゃあ聞きますが、こいしは今どんな状態なのですか？」

夜見「そんなの、寂しかったから俺に甘えてきてるんだろ？」



するとさとりは何故か呆れたようにため息をついた。

さとり「やっぱり、わかってないんですね。前々からそうだとは思っていましたが」  
そして夜見は呆れているさとりに質問をした。

夜見「・・・じゃあ、何が違うんだよ」

さとり「じゃあ逆に聞きますが、何故黒夜さんに甘えてきてるんですか？」

夜見「そんなの・・・決まっ

すると夜見はそこであることに気が付いた。

夜見（・・・あれ？なんで俺なんだ？寂しかったなら別にさとりさんに甘えたつていいはず・・・なのに、なんで俺じゃないと駄目なんだ？）

するとさとりは夜見が気付いたことを察してこう言ってきた。

さとり「わかりましたか？こいしの気持ちは黒夜さんの思っている感情じゃないんで

す。そして私はそのこいしの気持치를和らげようとしてるんです」

しかしさとりがそう言っても夜見は食い下がった。

夜見「・・・だとしても、こいしさんは嫌がってただろ。こいしさんが嫌がるなら、俺は他の方法でこいしさんの気持치를和らげてやりたい」

さとり「・・・何か考えがあつて言ってるんですよね？」

夜見「ああ、考え無しに俺がそんなことを言うとも思うか？」

さとり「ちなみに、それはどんな考えなんですか？」

さとりが夜見の言っている考えを聞いてみることにすると、夜見は少し目を反らして動揺していた。

夜見「え、あゝ、それはちよつと……こいしさん、ちよつとベッドで待つててな」

すると夜見はこいしを抱き上げるとこいしをベッドの上に座らせ、さとりの方へ近付くとさとりに耳打ちをして自分の考えを話すとさとりは夜見にこう言ってきた。

さとり「…わかりました、その方法は今回だけ許しましょう。でも、間違えてでも変なことをした場合…わかってますよね？」

夜見「わかっているよ。ていうかそもそも俺がそんなことをする人じゃないことは知ってるだろう？」

さとり「一応ですよ。それじゃあ、私は寝ますのであまり夜更かししないでくださいよ」

そう言つてさとりは扉を閉めて自分の部屋へと戻つていった。そして夜見は振り返つてベッドに入ると、少し横に寄つて人が1人余裕で入れそうなスペースを作るとこいしにこう言つた。

夜見「ほら、こいしさん。今日は一緒に寝よう」

こいし「え…本当？」

夜見「本当だ ほら、早く入って」

こいし「……うん」

そしてこいしは夜見の布団に入ると夜見に抱き付いてきたので夜見もこいしのことを軽く抱き締めた。しかしこいしの体はまだ震えているので、夜見はこいしの頭をゆつくりと撫でるとこいしが話しかけてきた。

こいし「……ねえ、お兄ちゃん」

夜見「どうした？こいしさん」

こいし「大好き」

そう言ってこいしは急に顔を近付けてきたが夜見は再び、鼻先が触れるか触れないかのギリギリの距離でこいしの頬に手を添えて止めた。

夜見「おっと こいしさん、駄目だろ？そんなことしたら」

夜見がそう注意してこいしの顔を少し下げさせると、こいしは目に少し涙を浮かべとても悲しそうな顔をして夜見にこう言った。

こいし「……お兄ちゃんは嫌なの？私とキスするの」

すると夜見は首を横に振った。

夜見「……違う、嫌とかそういうのじゃなくて、そういうのは大切な人が出来たときに取りっておくもんだ そんなやたらめったらにしたら駄目だ、わかったか？」

こいし「……でも！私にとってはお兄ちゃんは大切で、大好きな人だよ！」

夜見「……そうか、ありがとうな」

すると夜見は頬に触れていた片手を動かしてそつとこいしの目を覆った。そして夜見はこいしにこう言った。

夜見「じゃあ、今回だけ特別にいいことをしてやる」

こいし「え……お兄ちゃん？何も見えないよ？」

夜見「じつとして」

こいし「う、うん」

そしてこいしは夜見に目を覆われていたが目を瞑ってしばらく待つと、こいしの唇に何かに触れた。すると夜見はこいしの目を覆った手をどかしたのでこいしが目を開けると、こいしが目にしたのは自分の唇に手の甲を当てている夜見だった。

こいし「ぷはっ……お兄ちゃん、これがいいこと？」

夜見「ああ、そうだが……不満か？」

こいし「……これの、何がいいことなの？」

夜見「ああ、実は俺、こいしさんに触れさせる前に自分の口で触れたんだ。これでわかるだろ？何をしたか」

夜見がそう言ったがこいしは一瞬何がなんだかわからなかった。しかしこいしは自

分の指で唇に触れると夜見の言っていることを理解した。

こいし「間接……キス？」

夜見「ああ、俺はこれぐらいしかしてやれないけどな」

するとこいしは満面の笑みを浮かべて嬉しそうな様子だった。

こいし「え、えへへ♪お兄ちゃんの間接、キス えへへ」

するとこいしは夜見の手を両手で掴んで再び、唇が触れていた場所に自分の唇を当て始めた。

こいし「ん、ぷはっ はあ、はあ……ん！」

そしてこいしは何回か夜見の手の甲に自分の唇を当てていると、満足そうな表情を浮かべて夜見の手を放して話しかけてきた。

こいし「ぷはっ えへ、えへへ♪お兄ちゃんの間接キス、美味しかった」

すると夜見はこいしの目を真っ直ぐ見て優しい笑みを浮かべ、こいしの頭を撫でながらこう言った。

夜見「それじゃあこいしさん、夜遅い時間だから早く寝ようか」

こいし「うん！ねえねえ、お兄ちゃん 手、こうして繋いだままでいい？」

こいしはそう言つて夜見の手を繋いできたが、その繋ぎ方はよくカップルなどができる恋人繋ぎだった。そして夜見はこいしの繋いできた手をぎゅっと握るとこいしに向

かってこう言った。

夜見「ああ、いいぞ おやすみ、こいしさん」

こいし「うん、おやすみ、お兄ちゃん」

すると夜見はもう片腕をこいしの背に回して抱き寄せると、こいしは空いてる片手で夜見の胸元辺りをしっかりと掴んで目を瞑った。

しばらくするとこいしはゆっくりと寝息をたて始めて、完全に寝てしまった。そしてその様子を見ていた夜見はこいしの頭を軽く撫でた。

夜見（よし、ちゃんと寝たな さてと俺もそろそろ寝るかな）

そして夜見も眠ろうとするとこいしのサードアイが視界に入ってきた。しかしそのサードアイの充血は直っており、元の濁ったサードアイになっていた。

その様子を見て夜見は良かったと思うと同時に、夜見はずっと疑問に感じて考えていたことがあった。

夜見（それにしても、どうしてこいしさんは俺に甘えたがるんだ？それにさとりさんは思ってる感情とは違うとも言ってたし……一体なんなんだ？）

そんなことを夜見はずっと考えていたが、夜遅い時間だからか眠気が来てしまい夜見はそのまま眠りについてしまった。

## 第28話 未だに終わらぬ冬

こいしと一緒に寝たあの日から何日かが経ち、夜見は今日も地上に出ていつものように依頼をこなしてお金を稼いでいた。

そして夜見は今、博麗神社にて依頼をこなしている最中だった。とは言ってもただ夜見は賽銭箱の周りを箒で掃いているだけである。

夜見（さてと、こんなもんかな？）

そして夜見は手に持っていた箒を襖の近くに立て掛けて襖を開くと、そこには大きめの赤い丹前どてらを着て炬燵こたつに入った霊夢がいた。そして霊夢は炬燵の上にある湯飲みで温かいお茶を飲み、木の器にある煎餅せんべいを食べていた。

夜見「霊夢さん、掃除終わったぞ」

霊夢「あつそ、ついでに裏の方も頼むわ ていうか寒いから早く閉めてくれない？」

夜見「…」

そして夜見は無言で襖を閉めると立て掛けた箒を手にとつて裏へ回り廊下を箒で掃き始めた。しばらく夜見が掃除をしていると遠くから誰かがこちらへ飛んできたのが見えてきた。

それは何故か目を回したチルノの首根っこを掴みながら箒に乗っている魔理沙だった。

魔理沙「よお！夜影 霊夢はいるか？」

夜見「ああ、中にいる」

魔理沙「そうか、サンキュー」

そして魔理沙は箒から降りると箒を近くに立て掛けてチルノの首根っこを掴んだまま襖を勢いよく開けた。するとそこでは霊夢は煎餅をバリバリと食べていた。

魔理沙「霊夢ー、そこらで氷の妖精を捕まえてきたぜ」

しかし霊夢は魔理沙の方を向きもせずにごう言った。

霊夢「何よ魔理沙 とりあえず寒いから閉めてくれない？」

霊夢がそう言うのと魔理沙はその様子にワナワナと震えていた。すると魔理沙はチルノを後ろに放り投げたが、夜見が首根っこを掴んでキャッチすると魔理沙は霊夢に怒鳴った。

魔理沙「霊夢、いい加減にしろよ！もう5月だったのにまだ雪が降ってるなんて完全に異常だろ！」

そう、実はもう5月に入っていると言うのに地上ではいつもの冬より雪が降っており、雪がかなり積もっていた。



すると魔理沙は夜見の方を振り向いてこう言ってきた。

魔理沙「夜影もおかしいと思うだろ、もう5月だぜ!」

すると夜見は魔理沙にこう答えた。

夜見「そうか?俺が霊夢さんに聞いたら幻想郷の春は来るのが遅いからこれが普通って言ってたんだが…」

夜見がそう言うのと魔理沙は明らかに怒った様子で霊夢の名前を呼びながら霊夢の方をゆつくりと向いた。

魔理沙「…れ〜い〜む〜?」

霊夢「…な、何よ?別に1回や2回くらい春が来るのが遅くたっていいじゃない」

魔理沙「ふざけるな!そもそも異変を解決するのが霊夢の仕事だろ!?!なのに何を呑気にお茶を飲みながら煎餅なんか食ってるんだ!」

霊夢「うるさいわね、別に春が1回くらい来なくたっていいじゃない 大体、幻想郷だったら別に不思議じゃないでしょ?」

そう霊夢が言うのと魔理沙は霊夢に再び怒鳴ってこう言った。

魔理沙「あー!もう!だったたら霊夢がいなくなっちゃって私達が解決してやるぜ!」

そう言つて魔理沙は襖を力任せに閉めると、夜見の腕を掴んで引つ張った。

魔理沙「夜影、あんな奴ほつといてさつさと異変を解決しに行こうぜ?あいつなんか

を異変解決に誘った私が馬鹿だったぜ」

夜見「いや、ちよつと待ってくれ」

魔理沙「なんだよ、なんか準備が必要か？それくらいだったら私は少し待っぜ」

夜見「いや、掃除がまだ終わってない」

魔理沙「…は？」

すると魔理沙は一瞬呆然としたので夜見は腕を振りほどくと、チルノをとりあえずそこら辺に寝かせて夜見は箒で廊下を再び掃き始めた。そして魔理沙がハツとすると夜見に向かつてこう言ってきた。

魔理沙「いやいや夜影!今は掃除なんかしてる場合じゃないだろ!さっきの会話聞いてたか!異変だぞ異変!」

夜見「こっちは生活のために依頼を受けてるんだ 終わって報酬を貰ったらすぐに行く」

そして夜見が廊下をせっせと掃除している様子を見て、魔理沙は再びワナワナと震えると夜見に怒鳴って箒に股がった。

魔理沙「どいつもこいつも、もういいぜ!それだったら私が一人で異変を解決してやる!」

そう言つて魔理沙は怒りながらどこかへ飛んでいってしまった。そして夜見は引き

続き掃除をし続けながらこんなことを思っていた。

夜見「そもそも俺は依頼でお金を稼いでるだけで何でもかんでもやる便利屋ってわけじゃないんだが、魔理沙さんは少し勘違いしてないか？」

夜見がしばらく掃除をしていたら、表の方で襖が開く音がしたかと思うと霊夢が誰かと喋っているような声が聞こえてきた。そして霊夢と誰かの話し声が聞こえなくなつた瞬間、夜見の目の前にある人物が突然現れた。

咲夜「あの巫女、随分と適当なんですね」

夜見「ああ、そうだな　ちよつとそこ掃くから退いてくれないか？」

咲夜「あ、申し訳ございません　すぐに退きますね」

夜見「ああ、すまないな」

それは赤いマフラーを巻いた紅魔館の主の従者である咲夜であった。そして夜見は咲夜が何故ここに来たかを聞き始めた。

夜見「それで、急にどうしたんだ？俺に何か用か？」

咲夜「いえ、私はただ博麗の巫女が異変の解決に向かっているかどうかの確認をお嬢様に任されたのみに来てただけです」

夜見「そうか、ご苦労様」

夜見がそう言うとき咲夜は笑顔で返答をすると夜見に質問をしてきた。

咲夜「いえいえ それより、今回のこの異変に関してはどうするつもりなのですか？」  
 夜見「ああ、そうだな とりあえずは止めようとは思う ついさつき魔理沙さんが  
 怒って一人で解決しに向かったからな」

咲夜「そうですね それでは、私もこの異変を止めるのにご一緒してもよろしいで  
 しょうか？」

すると咲夜が夜見に付いていくと言いだしたので、夜見は何故咲夜と一緒に付いてこ  
 ようとしているのか聞いてみた。

夜見「ああ、別に構わないが……何故一緒に来るんだ？」

咲夜「実はお嬢様にこの異変を解決するようにも言われてるんです 冬に飽きたから  
 と」

夜見「そういうことか、色々大変だな」

咲夜「いえ、慣れてますので大丈夫ですよ それより、私もお掃除手伝いましょうか  
 ?」

夜見「いや大丈夫だ 今終わった」

咲夜「そうですね」

そして夜見は掃除を終えて箒を近くに立て掛けて襖を開けると霊夢に掃除を終えた  
 こことを報告した。

夜見「おい、霊夢さん 掃除は終わったぞ」

霊夢「あら、お疲れ」

そう言つて霊夢は煎餅を手に取つて煎餅を食べ始めたが、夜見はその場に立つて待つていた。すると霊夢はこんなことを言い始めた。

霊夢「・・・何？他の場所の掃除でもしてくれるの？」

夜見「違う 報酬は？」

霊夢「は？報酬？」

夜見「依頼状に書いただろ？報酬を」

すると夜見は依頼状と取り出して炬燵の上に依頼状を霊夢に見えるように置いた。

そして依頼状の報酬の所にはこう書いてあった。

報酬：「何かしら」

夜見「とりあえず、何か納得のいく報酬を貰えるまで引かない こつちはサービスでやつてる訳じゃ無いからな」

霊夢「そうねえ・・・ とりあえず煎餅で良いかしら？」

そう言つて霊夢は煎餅を一枚こちらに差し出してきたが、当然夜見が受け取らなかつた。

夜見「ふざけるな、労力に合わないだろ ちゃんとまともな報酬を出せ」

霊夢「はいはい、わかったわよ　出せばいいんでしょ出せば」

そう言って霊夢はめんどくさそうに立ち上がると部屋の中にあるダンスの一番下の引き出しを開けて中を探り始めた。

霊夢「えっと……確かここに、あつた」

そして霊夢はダンスの中にあつた何かを取り出すとそれを夜見に差し出した。それは5枚の白紙のスペルカードだった。

霊夢「はい、これならいいでしょ？」

夜見「……スペルカードか」

そして夜見はそれを受け取るとそのスペルカードをポケットの中に入れた。

霊夢「私の作ったスペルカードだからありがたいと思いなさい」

夜見「……はあ、ありがとう　それじゃ、俺らは異変を止めに行くからな」

そう言って夜見は襖を閉めると咲夜に準備が整っているかどうかを確認した。

夜見「咲夜さん、俺は準備出来ているが咲夜さんは大丈夫か？」

咲夜「ええ、問題ありません　それでは行きましょうか」

夜見「それじゃ、行くか」

そして夜見は血の翼を作り咲夜と神社の裏から空に飛んで異変の犯人を探しに向かった。しばらく飛んでいると咲夜は夜見にあることを聞いた。

咲夜「ところで黑夜様、一体どうやって異変の犯人を探すのですか？」

夜見「そうだな…。まずは情報を集めないとな。とりあえず紅魔館の図書館で何か有力な情報でも探すか」

夜見がそう言うのと咲夜はある提案をしてきた。

咲夜「それでは私は紅魔館の図書館で情報を集めますので、黑夜様は他を当たって頂きますか？」

夜見「まあ、手分けして探した方がいいかもな。じゃあ紅魔館での情報収集は頼んだ」

咲夜「わかりました、それではまた」

そして咲夜と夜見は手分けして情報を集めることにすると、咲夜は突然消えたが紅魔館へと戻っていったのだらう。一方残った夜見は別の場所で情報を集めるために魔法の森へと向かっていった。

夜見（まあ、とりあえず俺はアリスさんにも話を聞いてみるか）

そして夜見は魔法の森の手前で降りて血の翼を分解すると徒歩で魔法の森の中を歩いていった。

しばらく森の中を歩いていると夜見は地面に何か落ちていたのを見つけた。それを夜見は拾い上げてみると、それは目を凝らさないと見えないような薄い小さな桜の花びらが1枚入っている小さな小瓶だった。

夜見（桜の花びらか、なんでこんなものがここに？）

すると横の草むらの方からガサガサと音がしたので音の聞こえた方を向くと、奥から小さな少女が現れた。

その少女は金髪のロングヘアで頭に赤いリボンとラインの入ったとんがり帽子を被っていた。服装は帽子と同じ赤いラインの入ったワンピースを着ており、背中からは白い羽が4枚生えていた。

するとその少女は自分の持っている桜の花びらの入った小瓶を指差してこんなことを言い出した。

？「あ、春だ〜」

夜見（・・・何言ってるんだ、こいつ？）

そしてその少女がこちらに近付いてくると夜見から小瓶を取ろうとしたので夜見は小瓶を高いところ上げると、その少女は自分の周りをピョンピョンと跳んで小瓶に手を伸ばして取ろうとしていた。

？「あゝ、春ゝ 春ゝ」

夜見（春？これが何か知ってるのか？）

すると夜見は小瓶を上上げたままその少女にまずは名前を聞くことにした。

夜見「おい、名前は？」



? 「春く、春く」

しかし少女は夜見の言ったことを無視しながらひたすら跳んで小瓶を取ろうとしたので、夜見はこう言い換えて名前を聞いてみた。

夜見「…名前を言えばこれをやるから、名前を言え」

夜見がそう言うとその少女は跳ぶのを止めると夜見に向かって目を輝かせてこう聞いてきた。

? 「え!?! 本当!?!」

夜見「ああ、だから名前を言え」

するとその少女は自己紹介を始めた。

? 「私はリリーホワイト、春の妖精なの」

リリーホワイトが自己紹介をすると夜見は季節によって妖精なんているのか疑問に思ったが、リリーホワイトは夜見の目の前でこう言いながら跳び始めた。

リリーホワイト「ねえ、お名前言ったから春頂戴 春く」

夜見「いや、もう1ついいか?」

リリーホワイト「何? て言うか早く春頂戴よー、嘘ついたのー?」

リリーホワイトにそう言われ、夜見は約束通りに彼女に小瓶を手渡すと彼女は笑顔で大切そうに小瓶を両手で持った。そして夜見はリリーホワイトにあることを聞いた。

夜見「リリーホワイトさんが春の妖精ってことは、どこに春が来ているかわかるの？」

リリーホワイト「うん、そうだよ？それがどうかしたの？」

夜見「じゃあ、春がどこに行ったか知らないか？」

リリーホワイト「うん、知ってるよ」

なんと夜見は偶然か必然か、春の行き先を知れる手掛かりを早速見つけ出した。そして夜見はリリーホワイトにある頼み事を言った。

夜見「良かったら、俺にその春の行き先を教えてくださいませんか？」

リリーホワイト「別にいいけど、なんであなたは春を探してるの？」

リリーホワイトにそう聞かれた夜見は、リリーホワイトが納得しそうな答えを言った。

夜見「なんですって、幻想郷に春を戻すためなんだが……そんな理由じゃ駄目か？」

するとリリーホワイトは再び目を輝かせて夜見に聞いてきた。

リリーホワイト「え!?!春を戻してくれるの!?!」

夜見「ああ、そろそろ春の暖かさを感じたいからな」

リリーホワイト「やったー!ありがたいがとう!えつと名前は……」

夜見「黒夜夜見だ」

リリーホワイト「じゃあ、早速案内するね！付いてきて、黑夜」

そう言つてリリーホワイトは空を飛び始めたので、夜見は血の翼を再び作り出して空へ飛びリリーホワイトに付いていった。しばらく空を飛んでいると夜見とリリーホワイトの前にある少女が現れた。

その少女は薄紫色のショートボブで頭に白いターバンのような物を巻いた。服装は白い長袖のシャツの上に袖の無い青い上着とロングスカートを着ており、ロングスカートには白いエプロンのような物を、左胸辺りにY字の真ん中が突き抜けたようなブローチを付けていた。

そしてその少女は夜見とリリーホワイトの前に来ると声をかけてきた。

？「ねえ、少し良いかしら？」

リリーホワイト「・・・知り合い？」

リリーホワイトはこちらを向いて知り合いかどうか確認してきたが、残念ながら自分の知り合いではないため首を横に振った。するとその少女は質問をしてきた。

？「あなた達は一体何をしてるのかしら？」

リリーホワイト「何って・・・私達は春を戻そうとしてるんだよ」

？「あら、そうなの？でも生憎そうさせるわけにはいかないわね」

リリーホワイト「え？それってどういうこと？」

少女の言葉からすると、どうやらこの異変になんらかに関係しているような言い方だった。すると夜見はその少女の前に出ると夜見は刀を右手で引き抜いて先端を少女に向けて質問をした。

夜見「……お前が、異変を？」

？「ええ、いかにも私がこの異変の黒幕よ」

夜見「……さつさと戻すなら、手荒な事はしない」

？「あら？そう簡単に異変をやめるとでも思うのかしら？」

少女がそう言うのと夜見は刀を下から上に振るって斬撃の弾幕を飛ばすが少女はさらにと躲すと同時にこちらに弾幕を放ってきたが夜見はその弾幕を上から斬り落とした。

？「へえ、なかなか楽しめそうね」

夜見「……」

？「まあ、まず戦う前に自己紹介をしましょう 私はレティ・ホワイトロツク、この異変を起こした黒幕よ」

夜見「……黒夜夜見だ」

そしてお互いに自己紹介を終えるとレティは笑顔になってこう言った。

レティ「さあ、いくわよ！」

夜見「リリーホワイトさん、下がってろ」

リリーホワイト「う、うん わかった」

そしてレティは夜見と距離を離すと弾幕を広範囲に放ってきた。しかし夜見は軽い身のこなしで弾幕を避けながらレティに突っ込んでいき、刀で斬ろうとするがレティはそれをヒラリと躲わしてしまう。

レティ「当たらなかつたわね♪」

夜見「…」

レティ「さて、どんどんいくわよ！」「寒符 リンガリングコールド」！」

そしてレティは夜見に距離を取りながらスペルカードを発動させると夜見を狙ったゆつくりな大きい弾幕、その周りに速い小さな弾幕が放たれ、他にはランダムに弾幕が放たれた。

すると夜見は自分狙いの弾幕を横に躲わすとランダムに飛んできている弾幕を避けながらレティに近付いて弾幕を放つが、レティはそれも軽々と避けてしまう。

レティ「あらあら、全然当たらないわね」

夜見「…」

レティ「どうしたの？ さつきから黙っちゃって、まさか戦意喪失しちゃったかしら？」

夜見（… おかしい）

レティは夜見に軽く挑発をしていたが夜見は戦意喪失したわけではなく、ある違和感

を感じていた。

夜見（この規模の異変は本当にレテイさんが起こしたものなのか？レミリアさんが起こしたあの異変と同等な規模なのに、レテイさん一人の力量で起こせるのか？）

夜見「「降符 ブラックレイン」」

そして夜見はスペルカードを取り出して発動させるとレテイの上から小さな弾幕が大量に降り注いだ。それをレテイは避けていくが何発か頭や肩に直撃した。

レテイ「くっ?! きゃっ?!」

夜見「「斬弾 弐斬撃」」

そして夜見は立て続けにスペルカードを発動させると、レテイに刀が当たる範囲で刀を横に振るうとレテイは後ろに避けるが刀から放たれた斬撃が直撃した。

続いて夜見は横に振った刀を上へ構えて両手で振り下ろすと先程よりも威力の強い斬撃が放たれレテイに直撃したがレテイはまだ倒れる様子はなかった。

レテイ「くっ?! なかなかやるわね、今度は私の番よ!」  
「白符 アンデュレイションレ  
イ」

そしてレテイがスペルカードを発動すると今度はレテイを中心に弧を描くように無数の弾幕が放たれ夜見は一旦距離を取った。すると夜見は違和感に対して確信を得た。

夜見（やっぱりこの異変をを起こしたのは別の人物、レテイさんの力量でこんな規模の

異変を起こせる筈がない。だが、どんな理由があるとしてもレティさんを倒さなきゃ先には進めねえ。だから……)

すると夜見は能力を使って左手で血で作ったコルト・パイソンを握り銃口をレティに向けてると、夜見はこう言った。

夜見「この勝負、さっさと終わらせる。「爆符 宙へ舞え」」

そして夜見はスペルカードを発動させるとレティに向かって容赦なく発砲をするが、レティのスペルカードの弾幕に当たってしまった。だが……

ドオオオオオオン

レティ「きゃあ!? な、何!?!」

夜見の弾幕が爆発して周りの弾幕を消し去った。そして夜見は立て続けに発砲をすると何度もレティの弾幕に当たり、周りの弾幕をどんどん消し去っていった。

そして夜見は弾幕を消し去った場所を經由してレティへと近付いていった。

レティ「くっ! この!」

レティは夜見に向かって弾幕を放つが夜見は自分の正面に来た弾幕は刀で斬り落とし、レティに近付きにくくなったら弾幕を撃つて道を作ってレティへとどんどん近付いていく。

そして夜見とレティとの距離が3mもなくなるとレティは弾幕を夜見に向けて放つ

だが夜見はその弾幕を刀で斬り落とし、夜見はレティの眉間に銃口を突き付けるところを言った。

夜見「1回だけのチャンスだ 降参か敗北を選べ」

するとレティは少しびびりながら夜見に言った。

レティ「…… 何よそれ、どっちも変わらないじゃない」

夜見「このまま終わるか、無様にやられるかを選べと言ってるんだ」

そしてレティはどうしようか考えている様子だったが、しばらくすると諦めたようにため息をついてこう言った。

レティ「…… はあ 降参、負けたわ」

するとレティは両手を上げて降伏したため、この弾幕ごっこは夜見の勝利となった。そして夜見は血で作ったコルト・パイソンを分解し、刀を鞘に納めるとレティに質問をした。

夜見「レティさん、何故黒幕と嘘をついた？」

するとレティは何も悪気がないように答えた。

レティ「何故って、ちよっと暇だったから冗談で言ったのよ」

そして夜見はレティの答えが暇潰しのためだと知って呆れると同時にあることを思った。



夜見「いや、暇だからって 魔理沙さんに会ってたらひどい目に遭ってたぞ……」

レティ「まあ、私はこの異変に干渉したりするつもりは無いから安心してちょうだい  
じゃあ私はもうすぐ終わる冬を満喫してくるから、じゃあね」

そう言つてレティはどこかへと飛んでいつてしまった。そして夜見は辺りを見渡して  
弾幕ごつこを遠くで見ているリリーホワイトを見つけ手招きをするとリリーホワイ  
トが近づいてきた。

リリーホワイト「大丈夫？ 黒夜」

夜見「ああ、大丈夫だ それより、春の行き先はどこだ？」

リリーホワイト「えくとねえ…… あつちだよ 付いてきて」

そしてリリーホワイトは夜見の前を飛んで春の行き先へと目指していったが、しばらく  
くするとリリーホワイトが止まって辺りを見渡し始めた。

リリーホワイト「あれ？ えくと…… あれ？」

夜見「ん？ どうかしたのか？」

そして夜見はリリーホワイトが少し慌てている様子だったので声をかけてみるとリ  
リーホワイトは夜見の方を見てこう言つてきた。

リリーホワイト「えつとね、実はここから春が上に上がってるんだけど…… 上を見ても何も無いの」

夜見「上？そんなこと言っても上空には雲しかないだろ？」

そして夜見は一応少しだけ下を見たが森しか見えないため上を見上げてみると夜見は何かを見つけた。夜見は目を凝らしてみると桜の花びらが螺旋状に上へ舞い上がって空にある直径1m程の穴に吸い込まれていくのが見えた。

夜見「あれか」

夜見は空を見上げながらそう言うのとリリーホワイトは目を凝らしてみたが、首を傾げて疑問を持っている様子だった。

リリーホワイト「え、上に何かあるの？何も見えないよ？」

夜見「ああ、かなり遠くにあるからな それに雪も降ってるから余計に見辛いな」

リリーホワイト「そうなんだ じゃあ上に行こうよ」

リリーホワイトが上に行こうと提案したが夜見はリリーホワイトにこう言った。

夜見「いや、この先は危険かもしれないから俺1人で行く ありがとう、ここまで案内してくれて」

リリーホワイト「え？ど、どういたしまして」

夜見「ああ、後は春が戻るのを待っててくれ」

夜見はそう言うのと翼を羽ばたかせて上空へと向かっていったが、しばらく夜見が上空に上がっていると穴の近くに誰かがいることに気付いた。そして夜見はさらに上昇し

て穴に近付くとそこには自分の知っている者がいた。

リリカ「あれ？黒夜 どうしたのこんなところで？」

夜見「リリカさんか、俺は少しこの穴の先に用事があるんだ リリカさんこそ何をしてるんだ？」

リリカ「私は演奏の練習をしてたんだ、ここら辺が何故か暖かいからね て言うか黒夜、冥界に用事なんて一体どんな用事なの？」

すると夜見はリリカの言った冥界という言葉に疑問を感じた。そして夜見はリリカに冥界とはどういうことか聞いてみた。

夜見「冥界ってどういうことだ？」

リリカ「え？この穴の先って冥界なんだけど……まさか知らなかったの？」

夜見「ああ、知らなかった」

するとリリカは少し呆れた様子だったが、夜見の言っている用事について聞いてきた。

リリカ「……知らない場所に用事なんて本当なの？」

夜見「それは本当だ どうやらこの先に春が来ない異変の犯人がいるらしいからな」

リリカ「へー、そうだったんだ だから冬が全然終わらなかったんだね」

夜見「ああ、だから異変を止めてくれるように説得しに行くんだ」

リリカ「1人で？」

リリカがそう言うのと夜見は異変を一緒に止めようと言っていた咲夜のことを思い出した。

夜見（咲夜さんがまだ来てないが……そもそも咲夜さんを危険な目に合わせるわけにもいかないし、1人で行った方がいいな）

夜見「ああ、1人で行く。別に説得するのに大勢で行っても相手が困るだろう？」

夜見はそう言ったがリリカは少し心配そうな様子でこんなことを言い始めた。

リリカ「でも、もし相手が断ったら？襲い掛かってきたらどうするつもりなの？」

そう言われると夜見は以前のレミアが起こした異変のことを思い出した。夜見は以前の異変では弾幕ごっこで負けた方が勝った方の要求を呑むというルールで異変を解決したため今回もそのようなことが起こるかもしれない。しかし夜見はそれはそれで仕方の無いことだと思った。

夜見「その時は手荒い方法で解決するしかないが……仕方無いだろう」

リリカ「て言うかそもそも、黒夜が行く意味ってあるの？別に黒夜が行かなくてもいいんじゃない？」

すると夜見はさつきからある違和感を感じた。いつもなら「頑張つてね」と言つて見送るようなリリカが自分のことを異常に心配しているのだ。

夜見「……さつきからどうしたんだ？何故そんなに俺を引き止めようとしている？」

リリカ「え？い、いや別に、そんなことはないよ？」

リリカはそう言っていたが目が泳いでいるため何かを隠していることは明らかだったが、こんなところで時間をかけるわけにもいかないので夜見はさつきと先に進むことにした。

夜見「……まあ、いいか それより俺はもう行くからな、それじゃ」

夜見はそう言つて冥界へ続く穴に向かって入つていくとリリカは手を伸ばして夜見を引き留めようとしたが、夜見は穴の中に入つてしまった。するとリリカはその場で独り言をポツリと呟いた。

リリカ「止められなかった……絶対、帰つてきてよね、黑夜」

リリカはそう言つて拳を握り、夜見を止められなかったことを悔やんだ様子でその穴から離れていった。

そして夜見が穴に入つてしばらくすると、ある少女が一人でその穴を覗いたり周りをつろつろとしていた。しばらくそんなことをしているとその少女は意を決したのか穴の中へと入つていった。

## 第29話 半人半霊の少女剣士

夜見（ここが冥界……ねえ）

夜見は異変の犯人がいるとされる空に浮いていた穴の中に入ると地面に降り立った。そして周りを見渡すと空は夜空のように綺麗な光景、目の前には数えたらきりが無い石階段と等間隔に石階段の両脇に置かれている灯籠あった。

そして夜見は血の翼を空中に分解すると目の前にある石階段を徒歩で上り始めた。夜見は血の翼を使えば徒歩より速く上れることはちゃんと理解しているのだが、夜見は出来る限りなら能力の使用は避けたいため階段は徒歩で上っていった。

夜見（さてと、明らかに1000段は上ったが……先はまだまだあるな……）

しばらく夜見は徒歩で階段を上って明らかに1000段以上は上ったはずなのだが、目の前にはそれの倍以上の階段が続いていた。

すると夜見はその場で軽く屈伸をして少し腰を落としたかと思うと、階段を全力で走って上り始めた。そして夜見が階段を走って上り始めて5分程経ったが、夜見のスピードは一切落ちている様子はなかった。

夜見（たまには運動もしないとな、それにしても、まだまだ体力も衰えてないもんだ

な)

そして夜見は階段を走り始めてから15分程経つと息が切れることなく階段の終わりを迎えた。すると夜見の目の前には1本の石畳の道、両脇に等間隔に置かれた灯籠と桜の木という光景が広がっていた。

桜の木はどれも満開で桜吹雪が舞っており、夜見はその光景に一瞬魅了されてしまった。

夜見（ああ、見惚れてる場合じゃない さつさと先に進んで異変の犯人を説得させないとな）

そして夜見は石畳の道をゆっくりと進んで周りを見渡しながら今回の異変に関して考え始めた。

夜見（今回の異変、犯人は幻想郷の春を冥界に集めてたらしいが一体何のために？春を集めて何をしたいんだ？）

そして夜見は石畳の道の方を見ると、うっすらと何かが見えてきた。遠くからは夜空に紛れて確認することが出来なかったが、それは近くにある桜の木と比べ物にならないほどの大きな木があり、周りに白い何かがふわふわと漂っていた。

その木をよく見てみると幻想郷から流れてきた桜の花びらがその木に集まっています。桜の蕾つぼみをつけていた。おそらく今回の異変の犯人はあの大きな木に桜の花を咲かせ

たくて異変を起こしたのだろう。

夜見（なるほどね、あれを咲かせるために異変をつてところか 確かに桜が咲いたら綺麗になるんだろうが、こっちの事情を考えて欲しいもんだな）

そんなことを夜見は思っていると自分の背後からカチャつという音がすると同時に声が聞こえてきた。

？「人間、ここは冥界だ 人間の立ち入る場所では無い さっさと立ち去れ」

そして夜見は立ち止まり、ゆつくりと振り向くとそこには刀身が長い刀をこちらに向けた一人の少女がいた。

その少女は白髪のリボンを付けた頭に黒いリボンをつけていた。服装は白いシャツの上に緑色のベストに緑色のスカートを着ており胸元には黒い蝶ネクタイを、ベストの左胸の方には白い魂のようなマークが入っていた。

そしてその少女は柄に桜の模様が描かれ柄頭に白い房がついている刀身が白い刀をこちらに向けており、腰の後ろにはもう一本の持ち手が黒い短刀と一輪の花が先端に挿してある鞘を身に付けていた。おそらく鞘だけの方は今、少女が持っている刀の鞘なのだろう。

しかしそんな刀より目に真っ先に入るのはその少女の周りを飛んでいる白い魂のような物だった。



夜見（人間：… じゃないな 冥界だから魂：… って訳でもなさそうだ）

？「何をしている？さっさと立ち去れ」

そして夜見は腰に挿してある刀を右手を添えると同時にその少女は向けていた刀を両手で持って1歩踏み込んで縦に刀を振ってきた。しかし夜見は後ろへ跳んで刀を躲すと同時に刀を引き抜くと、少女は一瞬眉を細めた。

？「その刀：… いや、ただの偽物か」

夜見（刀が偽物？何を言ってるんだ？）

夜見は少女の言葉に疑問を感じているとその少女はこちらに走ってきて刀を上から振り下ろして来たので夜見は刀の峰に左手を添えて刀で防いだが：…

ガキイン

夜見（なっ!?重い!）

その少女の振り下ろしてきた刀の威力はその少女の腕の細さでは出せるとは思えない重さだったのだ。そして少女は更に力を込めてくるが夜見は左手で刀の峰を押して無理矢理少女を後ろに押し戻して距離を離すが、少女はすぐに距離を詰めてきて刀で再び上から斬りかかってきた。

ガキイン

そして夜見は再び左手を刀の峰に添えて防ぐとその少女は夜見にこんなことを言っ

てきた。

？「その刀、偽物の割には中々斬れないんだな」

夜見（なんなんだよ、偽物って どういうことだ？）

すると少女は持っている刀の刃を夜見の持つている刀の上で滑らせて刀を振り下ろしきるとすぐさま刀を下から振り上げてきた。それを夜見はバグ転で回避をしたが、刀が仮面に掠つてしまい当たった部分がポロリと少し欠けてしまった。

その仮面が欠ける様子を見て夜見はあることに気付き少女に問いかけた。

夜見「お前、俺を本気で斬り捨てるつもりだったな？」

？「ああ、そうだ」

少女は素っ気なく返答をすると夜見は更に問いかけた。

夜見「… 弾幕ごつこのルールを知らないのか？」

？「そんなもの、知っているに決まってるだろう！」

すると少女は返答をすると同時に距離を詰めて刀で斬りかかってきた。そして夜見は少女の振る刀を身を反らしたり、刀で受け流して攻撃に当たらないようにしながら少女にあることを言った。

夜見「じゃあわかつているはずだ 武器で殺傷能力があるまま攻撃するのはルール違反だと」

？「それがどうした！」

そして少女は刀で突きを放つてくると夜見は刀の刃の側面で受け止めた。しかし衝撃が強すぎたせいか夜見は後ろに5 m程ずり下がり刀の刃の側面が欠けてしまったが、その少女は欠けた刀を見て驚いた表情をしていた。

夜見は不思議に思つて刀の欠けた部分を見てみるとあり得ないことが起きていた。

夜見（刀が：・ 勝手に修復されている？）

夜見は刀の欠けた部分を見てみると刀の刃が勝手に修復され始めていたのだ。そして刀は10秒もしない内に元の状態に戻った。

夜見（この刀、前の異変の時にフランドールさんが折れないことを不思議に思つてたけど、まさかこんな刀だったとはな）

夜見はその刀に対して不思議には思っていると、少女は驚いた様子でこんなことを言つてきた。

？「な、何故!? 何故お前が本物の「夜刀 闇夜」を持っているんだ!？」

夜見（夜刀? 闇夜? この刀のことか?）

夜見は少女の言っていることに不思議に思っていると、少女は続けてこんなことを言い始めた。

？「その刀は強大な邪よしまな心を持っていないと刀を引き抜けないはず! お前は本当に人

間なのか!？」

夜見（邪な心、ねえ…）

夜見には邪な心ということに対して思い当たる節があったが、それより先は考えないようにすると夜見はゆつくりと口を開いた。

夜見「俺は黑夜夜見、れっきとした人間だ お前は？」

夜見は自己紹介をして少女に名前を聞くと少女はすぐに冷静になり、自己紹介を始めた。

？「私は魂魄妖夢<sup>こんぱくようむ</sup>、半人半霊の剣士だ」

夜見「妖夢さんだな」

そしてお互いに自己紹介が済んだところで夜見は刀を鞘に納めて敵意が無いことを形で表しながら妖夢にある話を持ちかけた。

夜見「妖夢さん、さつそくで悪いが1つ言っておきたいことがあるんだ」

妖夢「なんだ？」

夜見「俺は別に争い事をしたくてここにやって来た訳じゃないんだ 俺はただ異変を止めてくれないか説得しに来たんだ」

夜見がそう言うのと妖夢は突然笑い出したかと思うと妖夢はこんなことを言ってきた。

妖夢「説得？随分と甘い考えをしてきたな 異変を止めて欲しいのなら力づくで止め

てみたらどうだ？」

夜見（やつぱり、争い事は避けられないのか）

夜見は争い事を避けられないことに対してため息をつくくと、真つ直ぐ妖夢の方を見て刀の柄を右手で握つて腰を落として居合の構えを取つた。

妖夢「居合か さつきからどんなものかと思つて見ていたが、刀の持ち方もまともに出来ない素人が果たしてどこまで出来るかな！」

そして夜見と妖夢が同時に走り出してお互いが刀で斬れる距離に入った瞬間、妖夢は刀を両手で左から斜めに振り下ろしてきた。それに対して夜見は居合で妖夢の刀に夜刀を当てると高い金属音がしてお互いの刀が止まつた。

妖夢「剣術としては成り立つてはいないが、中々やるな」

夜見「あいにく、型に合わせるのには性に合わないんだ」

妖夢「なるほど、我流の剣術というわけか」

夜見「まあ、そうだな」

そして夜見は夜刀を妖夢の刀の刃を滑らせながら後ろに跳ぶと空中で夜刀を両手で縦に降つて斬撃の弾幕を放つたが、妖夢は刀を片手で右から水平に振つて軽々と斬撃の弾幕を消した。

妖夢「弱い斬撃だな 斬撃というのはこういうものだ！」

そして妖夢は刀を腰の近くまで持っていくと居合のように構え、刀を一気に振り抜き夜見に向かって斬撃を飛ばしてきた。しかしその斬撃を夜見は避けようとせず、その場に立っていた。

そしてその斬撃は夜見の仮面の頬辺りを少し掠めたのだが、その掠めた部分はとても鋭利なもので切り裂かれたような傷がついていた。すると妖夢は夜見が斬撃を避けなかった行動に感心していた。

妖夢「ほう？わざと外したが、それをわかってて避けなかったな」

夜見「ああ、俺を狙ってたなら俺に真っ直ぐ目が向いてるはずだからな」

妖夢「そこまで見抜いていたとは……素人と思つて少し侮つていたが、随分と楽しめそうだな！」

そして妖夢は夜見との距離を詰めると勢いに乗った突きを放ってきたが夜見はそれを少し左に跳びながら体を回転させて躲すと、その回転を利用して夜刀で妖夢に斬りかかった。すると夜刀は妖夢の脇腹に入り衣服は斬れずとも体には斬られたような痛みを感じて少し怯んだ。

その一瞬の隙を夜見は見逃さず夜刀の斬り上げで追撃をする瞬間に妖夢はこちらの方を向いて刀で防ごうとしたが防御が間に合わず、夜見の追撃をまともに正面から受けてしまった。

妖夢「ぐっ!？」

すると夜見はそのまま流れるように両手で夜刀を振り下ろすと妖夢はそれを後ろに跳んで躲すが、夜見は躲されることを予測していたので斬撃の弾幕を飛ばしていた。そして妖夢は飛んできた斬撃の弾幕を刀で斬り落としたが、夜見が斬撃の弾幕の陰から飛び出てきて妖夢に突きを放った。

妖夢「なめるな！」

すると妖夢は夜見の突きを刀の刃を上を滑らせて軌道を逸らし夜見の腹に蹴りを入れると、夜見の体はくの字に曲がってしまった。そこに追撃で妖夢は夜見の下がった頭に回し蹴りを入れて、夜見が仰向けに地面に倒れ込むと妖夢は刀を夜見の首に突き刺すように刀を両手で逆手持ちにして振り下ろした。

しかし夜見は間一髪のところまで横に転がって躲わして距離を取ると妖夢の刀は石畳に突き刺さっていた。

夜見「あ、危なかった。少しでも遅かったら死んでたぞ」

そして妖夢は刀を引き抜くと夜見に刀の先端を向けてこう言った。

妖夢「…次は外さない」

すると夜見は刀の峰を肩に乗せてやれやれといった様子で妖夢にこう返した。

夜見「そうか… まあ、次があるといいな」

妖夢「なめるな！」

そして妖夢は夜見との距離を詰めて斬りかかるが容易くに躲わされ流れるように刀を振るって反撃の隙を与えないようににはするが、夜見は反撃をしないだけで妖夢の振るっている刀をすべて躲していたので妖夢は若干焦りを感じていた。

妖夢（くっ！何故だ！何故当たらない!?）

夜見「どうした？余裕が無いように見えるが、もう限界か？」

妖夢「そんな訳ないだろう！ここからだ！」

そして夜見がしばらく妖夢の刀を避けていると今度は夜刀で妖夢の刀を受け流し始めた。妖夢は必死に夜見を斬るために刀を振るうが、何故か夜見の夜刀で全て受け流されてしまった。

妖夢（何故！何故当たらないんだ!?こいつ…一体何を!?!）

夜見「…表情から察するに、なんで当たらないか疑問に思ってるようだな」

妖夢「くっ！黙れ！」

夜見「そんなんじゃないつまで経っても終わんないぞ？」

妖夢（何故当たらない!?動きがすべて読まれてる?いや、そんなことをただの人間が出来るわけがない!）

そして妖夢は渾身の突きを放ったが夜見はそれを姿勢を低くして躲わすと妖夢のみ



ぞおちに肘打ちをした。

妖夢「かはっ!？」

そして妖夢は反射的にみぞおちを両手で押さえて完全なる隙を作ったところに夜見は妖夢が手を重ねて押さえているみぞおちに目掛けて蹴りを入れた。しかし妖夢のみぞおちに蹴りの衝撃は入らなかったものの妖夢は後ろに3m程飛ばされた。

妖夢「ぐあっ?!?ぐっ?!?うう…」

そしてしばらくすると妖夢はみぞおちの痛みが引いたのか手で押さえるのを止めてゆつくりと立ち上がると夜見は妖夢にこんなことを言った。

夜見「挑発に随分軽く乗ったが、少しは冷静になつたか？」

すると妖夢は歯を食いしばりながら夜見の言ったことについて考え始めた。

妖夢（…悔しいが、確かにあいつの言う通りだ。私は挑発に乗った上に攻撃が当たらなくて焦つたんだ）

そして妖夢は夜見の方を真っ直ぐ見て刀を構えてこう返した。

妖夢「ああ、お陰でな」

夜見「そうか。それじゃあ、今度はこっちから行かせてもらう」

すると夜見は妖夢に向かって走り出して距離を詰めて妖夢との距離が1m辺りの所で跳ぶと、夜刀を持った右手を全力で振りかぶって妖夢に斬りつけた。

妖夢「あまい！」

夜見「くっ！」

しかし妖夢は下から一閃して夜見の夜刀を上空へ弾き飛ばした。そして弾かれた夜刀は妖夢の後ろの方へ飛んでいき石畳に突き刺さった。

妖夢「隙あり！」

そして妖夢は宙にいる夜見に突きを放つが、夜見は刀の峰に手を置いて腕の力で無理矢理、妖夢の上から後ろへ回ると急いで石畳に突き刺さった夜刀を回収した。

そして夜見は振り向き様に夜刀で斬撃を放つと妖夢は斬撃を斬り下ろした。

夜見（埒が空かないな……さて、どうしたものか）

妖夢（あいつ、腕力で無理矢理後ろに回った!?!しかし、何故攻撃はあんなに軽いんだ？）

すると夜見は刀を鞘にしまうと再び居合の構えを取ると刀を引き抜いて斬撃を飛ばした。そして妖夢は斬撃を斬り払おうとしたが妖夢の刀は斬撃の間から火花を散らしていた。

妖夢「なっ!?!お、重い!?!」

その斬撃は夜見が最初に放った斬撃とは段違いの威力で、その威力は妖夢の放った斬撃と同等、もしくはそれ以上の威力だった。そして妖夢は刀に力を込めると斬撃を斬り

払えたが妖夢は疲れたように息切れをしていた。

妖夢「はあ はあ な、なんて威力……お前まさか、手加減していたのか？」

夜見「手加減？まあ……そう言えばそうなる、違うと言えば違う」

妖夢「……どの道一筋縄ではいかないということか ならば！私も手加減はしないぞ！」

すると妖夢は刀を何度も振るって無数の斬撃を放ってきたので夜見はその斬撃を身のこなしで躲したり刀で受け流していたが、妖夢は夜見がやったように斬撃の陰から突然現れて顔に斬りかかってきた。

それを夜見は後ろへ跳んで避けたが、間に合わなかったのか夜見のフードと仮面に切り傷が出来てしまった。

妖夢「まだまだ！」

そして妖夢は夜見との距離を息つく暇もなく詰めると何回も夜見を斬ろうと刀を振った。しかし妖夢の刀を振るう速度は先程と比べると段違いに速く、身のこなしでは躲せないと判断した夜見は妖夢の刀をすべて夜刀で受け止めていた。

妖夢（くっ！全て防がれる、ならば！）

そして妖夢が攻撃を止めて後ろへ跳んで一旦離れたかと思うと懐からスベルカードを取り出した。

妖夢「幽鬼剣 妖童餓鬼の断食！」

妖夢がスペルカードを発動させると夜見に当たらない距離にも関わらず刀を何度も高速で振るいながら左に5 m程の距離を一瞬で移動をした。夜見はそのスペルカードに対して疑問を浮かべていたが一応身構えていると、妖夢が通ったであろう場所からいきなり無数の斬撃が弧を描いて放たれた。

夜見「くっ?!? まない！」

そして夜見はその無数の斬撃を見て刀で斬撃を受け流し始めるが一撃一撃の斬撃が重く、しかも斬撃と斬撃の間は人が通れる程の隙間は一切無く避けることも出来ない。で夜見にそのスペルカードを被弾しないで攻略するのは不可能だった。

夜見「ぐっ?!? がはっ！」

そして結局斬撃が通り過ぎる頃には防いだ斬撃は数えられる程度の数だけで、夜見の格好は切り傷だらけで腕を伝って血がポタポタの流れていた。

すると妖夢は再び刀を高速で振って今度は右に5 m程の距離を一瞬で移動をして、先程と同じように無数の斬撃が放たれた。

夜見（これ以上受けたらまない！）

そう思った夜見は空気中にある血を集めると夜見を囲むように壁を作って妖夢の斬撃を全て防いだ。そして斬撃が過ぎ去ったところで血を空気中に分解すると妖夢は不

思議そうな顔をしていた。

妖夢「能力持ち？それに、傷もすべて塞がっている…。」

夜見（よ、良かった この訳のわからない体質のお陰で浅い傷程度ならすぐに塞がる）

妖夢「じゃあ、こっちの方が効率的だな 「魂符 幽明の苦輪」

そして妖夢が次のスペルカードを取り出して発動させると妖夢の近くにいた白い魂のような物が形を変えたかと思うと、その物体は妖夢と瓜二つの姿になった。

そして妖夢はその妖夢となった物体に腰に挿してあつた短刀を渡すと2人で刀をこちらに構えた。

妖夢「さあ、行くぞ！」

妖夢がそう言うのと2人は同時に夜見に向かってきた。すると先に長い刀を持った方の妖夢が横に斬りかかって来たので夜見はそれを防いだが、その隙を狙って短刀を持った妖夢が夜見の脇腹に斬りかかろうとしていたので夜見は短刀の刃の側面を足で蹴り上げ軌道をずらすと夜見は後ろに跳んで距離を取った。

しかし夜見が後ろに跳ぶと長い刀を持った妖夢は刀をそのまま振りきって斬撃を飛ばしてきたので夜見は刀を斬撃に押し当てて腕で力で自分の体を飛ばし、更に距離を取った。

夜見（なるほど、スペルカードは弾幕だけじゃないのか 自立行動は少し難しいだろ

うけど、せめてこれくらいは出来るな)

そして夜見はポケットから霊夢から貰った白紙のスペルカードを取り出して気を送り込むと新たなスペルカードを作り出した。

夜見「けつさく血作 けつじゆにん血呪人」

夜見はスペルカードを発動させると夜見の隣に空気中の血が集まって夜見と同じ形をした赤黒い血の塊、血呪人が出来上がった。そしてその血呪人は腕や足、首をガクガクと不安定に動いてたかをしていたかと思うと、その血呪人の右手から刀が出てきて血の刀が握られた。

夜見「さて、これで2対2だ」

妖夢「随分と面白いことを考えるな！」

そう言つて妖夢達が向かつてくるが短刀を持った妖夢の方に夜見の作った血呪人があり得ないスピードで体当たりで突っ込んでいった。

ドカツ　ズサア

妖夢「なっ?!?なんて早さ！」

そして短刀を持った妖夢が5 m程後ろまで飛ばされて仰向けに倒れると、血呪人が上に乗つて血の刀を振り下ろすと短刀で防ぐが、血呪人は狂つたように立て続けに何度も何度も反撃の隙を与えないように刀を振り下ろし続けた。

妖夢（くそ！あのままだといつかは体力が無くなってやられてしまう！）

夜見「よそ見をしている余裕なんてあるのか」

妖夢「なっ!?!くそ！」

妖夢が振り返るとそこには今にも妖夢を斬り上げようとしている夜見がいたので妖夢は咄嗟に刀を横に構えて防ぐが、妖夢の手から刀は離れなかったものの刀が弾かれてしまい妖夢はそのまま斬り飛ばされてしまった。

妖夢「ぐあっ！」

夜見「斬撃 弐斬撃」

そして夜見はスペルカードを発動させて斬り飛ばされた妖夢に向かって斬撃を2発飛ばすとその斬撃は2発とも命中して妖夢は更に飛ばされた。

ドカッ

妖夢「ぐっ!?!な、なんだ？」

そして妖夢は飛ばされると何かが背中当たったので何が当たったのかを確認するために後ろを振り向くとそこには夜見が作った血呪人がうつ伏せに倒れていてピクリとも動いていなかった。

妖夢（今がチャンス！）

すると妖夢は急いで立ち上がって血呪人の所に走って血呪人の背中を片足で踏みつ

けると、妖夢は刀を両手で逆手持ちにして思いっきり血呪人の首に突き刺すと頭がポロリと取れた。

妖夢（よし、これで再び2対1！相手が不利な状態だ！）

そして妖夢は振り返って夜見の方に走っていくと何故か短刀を持った妖夢が立ち上がる。妖夢の背中の方へ飛び込んだ。

妖夢「は!?何をして

ズシヤア

妖夢「なっ!?馬鹿な!？」

妖夢が振り返るとそこには頭の無い血呪人が短刀を持った妖夢を肩から腰にかけて血の刀で斬っている光景があった。

そして斬られた短刀を持った妖夢はスペルカードの効果が切れたのか元の白い魂のような姿に戻ってしまった。

妖夢「まだ動くのか!この!」

妖夢は頭の無い血呪人を斬ろうとしたが次の瞬間に血呪人は液体の血となって地面にバシヤツと音を立てて崩れ、血は空中に分解された。そして妖夢は短刀を拾い上げて鞘に納めると後ろで夜見はこんなことを言い出した。

夜見「ああ、もう少し動かせると思ったんだがやっぱ無理だったか」



妖夢「なんなんだ、さっきのスペルカードは!? どういうことだ!」

そして妖夢は振り返りながらさっきの血呪人のスペルカードについて聞くと夜見は説明し始めた。

夜見「あれはただの血の人形だ 妖夢さんのスペルカードみたいに自立行動は出来ないから動きを自分でイメージしないといけないが、利点はどこかが壊されたとしても少しだけ動かせる」

妖夢（つまりは私が油断したところを狙って人形を動かして倒そうとしていたのか!? しかもあいつ、私の動きと人形の動き、2つの動きを考えながら自分でも動いて…）  
妖夢は夜見の行動力について色々考えていたが、夜見は妖夢に向かってこんなことを言った。

夜見「さて、これでまた1対1だ それに刀を2本持つてるところを見ると、妖夢さんは2刀流なんだろう? 出し惜しみをしている暇なんて無いが… どうする?」

夜見がそう言うのと妖夢は右手でゆっくりと短刀を引き抜くと妖夢は目を瞑って大きく深呼吸を1回すると目を見開いて夜見を正面からしっかりと見て構えると夜見にこう言った。

妖夢「私の本当の剣術を見せてやる 死んでも後悔するんじゃないぞ?」

妖夢がそう言うのと夜見は夜刀を右手で構えると妖夢に対してこう言った。

夜見「あいにく俺には死ねない理由があるんだ。だから勝たせてもらう」

そして夜見と妖夢は互いにしつかりと見合つて相手が出ると同時にしようとしていると、妖夢は何かに気付いたかと思うと妖夢は刀を振つて妖夢に飛んできたものを斬り落とした。

キイン カランカラン

妖夢「……これは？」

夜見「……ナイフ？」

妖夢が斬り落とした物を見てみるとそこには20cm程のナイフが2本落ちていた。そして夜見の後ろから聞き覚えのある声でこう聞こえてきた。

？「[空虚 インフレーションスクウエア]」

すると妖夢の周りに青いナイフの弾幕がまんべんなく飛び、妖夢を中心に赤いナイフの弾幕が迫つてくると妖夢は2本の刀で弾き落とし始めた。

？「大丈夫ですか？ 黒夜様」

夜見「…… 咲夜さんか」

夜見が振り返るとそこには咲夜が立っておりナイフを構えながら夜見にこんなことを言ってきた。

咲夜「手伝いますよ、 黒夜様」

夜見「……いや、いい 俺1人でやる」

そう言つて夜見は妖夢の方を向くが、咲夜は笑顔でこう言つた。

咲夜「いえいえ、手伝いますよ」

そう言つて咲夜がナイフを妖夢に向かつて投げたが、夜見は夜刀を振つて斬撃を飛ばすと、咲夜の投げたナイフはおろか、妖夢の周りに飛び回っているナイフも何十本か弾き落とした。

咲夜「……どういふつもりですか？ 黒夜様」

夜見「言つただろ 俺1人でやるつて」

咲夜「でも、2人の方が手際よく」「カチャ」

すると夜見は咲夜に夜刀の刃先を向けると、夜見はドスの利いた声でこう言つた。

夜見「俺1人でやるつて言つてるんだ 邪魔すんじゃねえよ」

ゾクッ

すると咲夜は夜見の様子に殺気を感じ、冷や汗をかいて指先すらまともに動かさない状況になつた。

咲夜（な、何、この尋常ではない殺気は!?）

そして咲夜が動けない状況でいる内に妖夢はすべてのナイフの弾幕を弾き落とすと、夜見に向かつてあることを言つてきた。

妖夢「すまないな、弾き落とすのを手伝ってもらって」

夜見「ああ、礼ならいい それと、少し待っててくれ」

妖夢は夜見にお礼を言うと言夜見は軽い返事をして殺気を鎮めて刀を下ろした。すると咲夜は腰を抜かして膝から崩れ落ちると同時に階段の方から2人の人物が姿を現した。

霊夢「何!? さっきの尋常じゃない殺気は!？」

魔理沙「大丈夫か!? って、あれ? 夜影?」

夜見「… 霊夢さんと魔理沙さんか」

そして霊夢と魔理沙が夜見の方へ近付いてくると霊夢は咲夜の様子を不思議に思つて夜見に質問をした。

霊夢「このメイド… 随分冷や汗をかいてるけど、あの剣士がさっきの殺気を出したの?」

そして夜見は霊夢の質問に対して首を横に振ると霊夢は少し不思議そうに首を傾げたが、今度は魔理沙が質問をしてきた。

魔理沙「なあ、夜影 あの剣士が今回の異変の犯人ってことでいいの?」

夜見「… いや、あいつは違う あの奥の木が見えるか?」

そして夜見は奥に見えていた大きな木を刀で指して霊夢と魔理沙はその木を見ると

霊夢は頷いてあることを言った。

霊夢「なるほど、あの木の近くに親玉がいるって訳ね」

夜見「ああ、そうだ。だからそいつは霊夢さん、魔理沙さん、咲夜さんに任せる」

魔理沙「え？じゃあ夜影はあの剣士と戦うのか？1人より私達も戦った方が早く終わるだろ」

夜見「いや、俺1人で十分だ。それより、早く親玉を早く倒した方がいいだろ？」

夜見がそう言うのと霊夢は納得したように頷くと魔理沙に向かってこう言った。

霊夢「それもそうね。行くわよ、魔理沙」

魔理沙「あ！ちよつと待ってくれよ、霊夢！」

そして霊夢と魔理沙が飛んで奥の大きな木の方へ向かっていくと、夜見は咲夜にさっきの声とは打って変わって優しい声でこう言った。

夜見「ほら、咲夜さんも早く向かってくれ。頼んだぞ」

咲夜「え？あ、ええ、わかりました。そ、それでは」

そう言つて咲夜は立ち上がるのと空を飛んで霊夢と魔理沙の後を追つて行つた。すると妖夢が夜見に対してあることを言つてきた。

妖夢「よくあそこに、この異変の本当の犯人がいると気付いたな」

夜見「ああ、妖夢さんが1人で出来るような規模の異変じゃないからな。もつと別の

人物が起こしたって考えるのが自然だ」

妖夢「……それもそうか」

夜見「まあ、そんなことより……わかってるだろ？」

妖夢「ああ、もちろん」

そして再び2人は向かい合って刀を構えると片方の足を後ろに下げて力を込めた。

妖夢「……いざ」

夜見「……尋常に」

夜見・妖夢「……勝負！」

そう言って夜見と妖夢は互いに刀で決着を付けるために走り出した。

## 第30話 刃が交わりし決着

夜見と妖夢が走り出してまず最初に先手を取ったのは妖夢の方だった。妖夢はまず左手に持っている刀を振り下ろしてきた。

妖夢「はあ！」

キーン

そして夜見が夜刀で妖夢の刀を防ぐと高い金属音が鳴って刀が止まった。だがしかし、今の妖夢は先程とは違い刀をもう一本持っているのだ。

妖夢「せい！」

すると妖夢は左手の刀はそのままに右手に持っている短刀を夜見の顔に目掛けて横に振ってきた。しかし夜見は顔を少し後ろに下げて避けると夜見は急に刀で防いでいる力を抜いた。

ダアン

妖夢「なっ!?嘘っ!?!」

すると妖夢が力を入れていた左手の刀は振り下ろされて石畳にヒビが入り、一方夜見は妖夢が刀に入れていた力を利用して目の前で前方に1回転すると夜刀を上から振り

下ろしてきた。  
ダアン

しかし妖夢は身を反らして横に躲わした後に後ろに跳んで距離を取った。そして夜見の夜刀が当たった石畳には妖夢が入れたヒビより更に大きいヒビが入り、夜見は妖夢の方を見て右手で夜刀を構えると妖夢にこう言った。

夜見「不意を突いたつもりだったが……それを躲すか」

妖夢「いや、確かに不意は突かれた 随分と面白い奇策を使うな」

夜見「それはどうも」

夜見が素っ気なく返事をする。妖夢は何故か構えを解くと夜見に話しかけてきた。

妖夢「……それはそうと、少しいいか？」

すると妖夢は何か夜見に聞きたいことがある様子だったので夜見も構えを解いて話を聞くことにした。

夜見「……なんだ？」

妖夢「何故お前はさっきの仲間と戦うことを拒んで一人で戦うことにした？何か理由でもあるのか？」

夜見「ああ、その事か」

そして夜見は夜刀の峰を肩に置くように刀を持つと妖夢の質問に対して答えを言っ



た。

夜見「俺はただ妖夢さんと1対1でちゃん勝負をしたかっただけだ」

妖夢「…それが、仲間と戦うことを拒む事となんの関係が？」

夜見「俺は複数人で1人を倒して喜ぶような奴じゃないってことだ それに、途中でから手を出されたら自分の強さを確認出来ないからな」

妖夢「…そうか 成る程な」

そして妖夢が夜見の考えに納得していると夜見は再び夜刀を右手に構えると妖夢に質問をした。

夜見「それで？まだ続けるんだろ？」

妖夢「ああ！もちろんだ！」

そして妖夢が夜見との距離を詰めてくると2本の刀を流れるように振り夜見に何度も斬りつけてきたが、夜見が妖夢の刀を夜刀で何度も防ぐ度に高い金属音が鳴らされた。

妖夢「よく見切れるな！普通の人間なら見切れないような太刀筋の筈なのに！」

夜見「昔から目は随分と良くてな、ある程度なら見切れるんだよ！」

そして夜見は妖夢の僅かな一瞬の隙を突いて突きを放つと、それを妖夢は短刀で軌道を逸らしたが妖夢の脇腹を少し掠めた。

妖夢「ぐっ!？」

そして夜見は妖夢の怯んだ隙を狙って回し蹴りをするが妖夢は歯を食いしばって痛みに耐え後ろに跳んで躲すものの、夜見は休む暇を与えないように距離を詰めて夜刀を振ると妖夢は刀を交差させて受け止めた。

妖夢（くっ！重い！だが、この程度の重さなら！）

キーン

すると妖夢は2本の刀で夜見の夜刀を押し返し、夜見が後ろに跳んで軽やかに着地をした瞬間に妖夢は再び距離を詰めて斬りかかってきたが夜見も再び夜刀で防ぎ始めた。

妖夢「ふっ！せい！やあ！」

夜見（くっ!?!振りは見えるが、2本ほぼ同時はさすがに防ぎにくい!）

そして夜見は妖夢の刀を防いでいたが妖夢1つの突きが夜見の脇腹に浅く掠めた。その瞬間に夜見は僅かな隙を作ってしまった、妖夢はその瞬間を見逃さずに刀で夜見に斬りかかり夜見は腹部を斬られた。

ザクッ

夜見「がふっ!？」

妖夢「まだまだ！」

そして妖夢は更に追撃をしようと大きく刀を振りかぶって斬りつけようとするが夜

見はその刀を弾いて後ろに跳んで距離を取った。しかし夜見の腹部からは血がポタポタと流れ出ていた。

夜見（まずいな この深さの傷は流石にすぐには治らないな）

そして夜見は能力を使って腹部の出血を止めると妖夢はあることに気が付いた。

妖夢「止血？… 成る程、お前の能力はどうやら血を操る能力のようだな」

妖夢が夜見の持つている能力を見破ると、夜見は諦めたように自分の能力を言うと同じ時にあることを言った。

夜見「… ああ、そうだ 俺の能力は血を操る能力だ そして妖夢さんの能力は見た限りだと差し詰め刀を扱う能力ってところか？」

妖夢「いや、正確に言うると私の能力は「剣術を扱う」能力だ」

夜見「そうか… 道理で、刀の扱いがそんなに上手な訳だ」

妖夢「… それともう一つ」

すると妖夢は左手の刀の刃先を夜見の左手に向けて妖夢は夜見にあることを聞いた。

妖夢「左手が空いているということは、お前も私と同じ2刀流なんじゃないか？ 仮に刀ではなくとも、何かは持っていたのだろう？」

夜見「ああ、いつもは銃を持っているんだが…」

そして夜見は夜刀を左手に持ち変えると右手に空気中の血を集め、夜刀より40cm程の長い刀を作り出すとその刀の刃先を妖夢に向けてこう言った。

夜見「今回は妖夢さんに合わせて2刀流で戦ってやる」

妖夢「私に合わせて・・・か、後悔しないといいな！」

そして妖夢は走り出して2本の刀で斬りかかってくるが夜見はそれを夜刀で受け止めると血の刀で切り上げると同時に夜刀を引いて2本の刀を上弾くとそのまま血の刀で斬り下ろして妖夢に攻撃をした。

妖夢「ぐふっ!？」

そして夜見は斬り下ろした血の刀を素早く逆手持ちにして妖夢の腹に突きを繰り出すと妖夢は間一髪のところまで2本の刀で防ぐがガチガチと刀の間で音が鳴り始めた。

妖夢「くっ!お、重い・・・」

夜見「基本、人は逆手持ちの方が力の強さは大きいからな」

妖夢「ぐぐっ!・・・せい!」

そして妖夢が無理矢理押し勝って夜見の血の刀を弾くと妖夢は刀を大きく振りかぶって2本の刀で横に斬りつけようとしてきたが、夜見は1本目の短刀は夜刀で受け流し2本目の刀は逆手持ちにしたままの血の刀で受け止め高い金属音が鳴る。

妖夢「まだだ!」

すると妖夢は素早く短刀で夜見に突きを放つと今度は夜見の脇腹に10cm程突き刺さってしまった。

夜見「ぶっ!?がはっ!」

すると夜見は吐血をして仮面の間から血が流れ出てきたがそんな夜見に妖夢は短刀に更に力を込めると、夜見は妖夢の腹に蹴りを入れて蹴り飛ばした。

妖夢「ぐはっ!くっ!.. どうだ?流石にこれは効いただろう?」

夜見「ぐ、げほっ!がはっ!.. はあ、はあ ああ、それは流石に辛いな」

そして夜見は再び血を操り止血をすると痛みには耐えながらも懸命に妖夢に斬りかかりに行った。しかし妖夢の「剣術を扱う」能力により、妖夢は夜見の攻撃をすべて防いでいた。

妖夢「あまい!」

キーン

夜見「くっ!?!」

そして妖夢は夜見の刀を弾いて夜見を上から一刀両断しようとする。夜見は刀を横から蹴って弾いたが今度は短刀で妖夢が突きを放ってきた。しかし夜見はその突きを放ってきた短刀の上に足を乗せると短刀を踏み台として妖夢の上に跳ぶと夜刀と血の刀を同時に振り下ろした。

妖夢は夜見のその行動に驚きを隠せなかったが夜見の刀を2本とも2本の刀で受け止めるが、夜見の刀の威力が強すぎて受け止めきれずに妖夢は斬られてしまった。

妖夢「ぐわっ！」

そして夜見は間髪入れずに血の刀で斬り上げて妖夢を斬り飛ばすと、血の刀を振り下ろして斬撃を飛ばすと斬撃は石畳をも斬りながら進み妖夢に直撃した。

妖夢「ぐあ！が、ぐう……まさか刀を踏み台にして上に跳ぶとは、中々出来ない芸当だぞ？」

そう言つて妖夢は立ち上がると夜見は返答しようとするが……

夜見「しかし妖夢さんも随分「ズキッ」ぐっ!？」

夜見が急に妖夢の突きが刺さった所を夜刀を持ったまま押さえて片膝を突いてしまった。どうやら夜見に突きが刺さった所の傷は見た目以上に深い様子だった。

夜見（まずいな、想像以上に傷が深いのか……あまり時間に余裕は無いようだな）

そして夜見は痛みには耐えながら立ち上がるものの痛みのせいで刀を構えようにも中々思うように構えられなかった。しかし妖夢はそんな様子の夜見に慈悲を与えるはずもなくこの絶好のチャンスが無駄にしまいと夜見に向かつてきた。

妖夢「ふ！せい！は！」

夜見「ぐっ!?!くっ!うっ!」

しかし痛みには耐えながら戦っている夜見には妖夢の刀を防ぐ事さえ困難なのに今の状況では困難を通り過ぎて寧ろ妖夢の刀を防ぐのは不可能に変わる…… 筈なのだが  
キインキイン キイン

妖夢（防ぎ方のキレが戻った!? さっきまで痛みを耐えていたのに一体何が!?)

夜見（……何が起きてるんだ? 何故痛みが無くなっていくんだ?）

何故か夜見の腹部の痛みがいきなり無くなり夜見は妖夢の刀を防ぎきっていた。そして妖夢は後ろに跳びながら2本の刀を振るって斬撃を飛ばすが夜見が刀を斬撃に優しく当ててから一気に刀を振ると軌道を変えてどこかへ飛んでいってしまった。

妖夢（さっきまで痛がっていたのは演技? いや、わざわざそんなことをする意味は無い筈……）

夜見（痛みが引いた? そういえば勇儀さんにあばらを折られた後も確か……）

夜見が前に勇儀にあばら骨を折られた後のことを思い出していたがいつの間にか妖夢が目の前までできていて刀を振り下ろす直前だったが、夜見は咄嗟に夜刀と血の刀を交差させて受け止めた。

ガキーン

夜見（くっ! 考えてる暇は無いか!）

そして妖夢は刀の刃を夜見の血の刀に滑らせて振り下ろしきると妖夢はそのまま体

を回転させて短刀から刀を2連続で斬りかかってきたが、夜見は2発とも攻撃を防いだものの2発目の攻撃の威力が強かったため後ろに3 m程にずり下がった。

すると妖夢は更に追撃として腕を交差させて刀を2本同時に振り下ろしてV字の斬撃を飛ばしてきたが夜見は宙返りをして避けると着地する寸前に空中で夜見は刀を2本振るって斬撃を2発飛ばした。そして妖夢は1つ目の斬撃は刀を縦に振って斬り捨て2発目の斬撃は横に躲したかと思うと斬撃の後ろに刀の刃を乗せて回るとあろうことか、斬撃に殺傷能力を付与してこちらに飛ばし返してきた。

夜見（…ん？そういえば…）

そして夜見は少しだけ身を反らして避けるとその斬撃はどこかへ飛んでいったと同時に夜見はあることに疑問を抱いた。

夜見（…妖夢さんを倒す事ばかり考えてたから気付かなかったが、確か妖夢さんは刀に殺傷能力があるまま俺に斬りかかってきてるんだよな？）

妖夢「くっ！あれを避けるか！」

そう言っただけ妖夢は夜見に斬りかかってくるが夜見は回り蹴りをして妖夢の刀を蹴り飛ばすと刀は石畳の脇にある灯籠に突き刺さった。すると妖夢は一旦距離を取って短刀を構えて警戒しながら移動をして刀が突き刺さった灯籠に着くと刀を軽々と引き抜いたと同時にこちらに走り出した。



夜見（殺傷能力があるまま斬りかかって来るってことは俺を倒すんじゃない、俺を殺すために殺傷能力があるまま斬るんだ）

そして妖夢は2本の刀を振るってくるが夜見は2本とも夜刀で弾くと血の刀で力強い突きを腹に放ち妖夢は軽々と3m程宙を舞って飛んでいき、地面を転がって10mほど離れた。

妖夢「がっ!? く、けほっけほっ」

夜見（だつたら最初からおかしい、何故妖夢さんから俺を殺す気がまったく感じられないんだ?）

妖夢「くっ! 次こ「なあ、1ついいか?」…何だ?」

そして妖夢は立ち上がって刀を構えていたが夜見は刀を構えずに妖夢にある質問をした。

夜見「妖夢さんは俺を殺すために勝負してるんだろ? だつたら何故致命傷になる所をあまり狙わず、俺がギリギリ避けられる速度で刀を振ったり斬撃を飛ばしたりするんだ?」

すると妖夢は一瞬驚いた顔をして夜見に言った。

妖夢「っ! 何を言っているんだ!」

夜見「…まあ大体予想は付くが異変の本当の犯人に俺を殺すように言われ「黙れ!

たたつ斬るぞ！」：はあ」

そして夜見はため息をつくど血の刀の峰を肩に置いてこう言った。

夜見「じゃあ、そうしたらどうだ？ほら、斬撃でもなんでもいいから斬つてこい 俺は一切避けたりしないから」

そう言つて夜見は妖夢に挑発をすると妖夢は刀を何度も振つて斬撃を無数に飛ばしてきた。明らかにこの斬撃の嵐を受けたら人は細切れになつて死んでしまうのだが、何故かどの斬撃も直撃はしないでせめて掠る程度だった。

そして夜見はその場で体の至る所から血を流していたがすぐに掠り傷は塞がり始めた。

夜見「ほらな、妖夢さん やつぱり妖夢さんは俺を殺すことを避けてるんだ」

夜見がそう言うど妖夢は激しく首を横に振つてこう言った。

妖夢「断じて違う！私はお前を必ず殺すんだ！」

夜見「妖夢さんは人を斬るどころか人を殺したことがない、そもそも妖夢さん自身は人を殺したくない：： 違うか？」

妖夢「黙れ！黙れ！黙れ！私はお前を殺すんだ！絶対に！」

そして妖夢が更に否定をし続けると夜見はあることを思い、その思いを口に出し始めた。

夜見「……わかった　妖夢さんは本当の気持ちを押し殺してでもそう言い続けるんだったら……」

そして夜見は左手に持っている夜刀を逆手持ちにし、右手の血の刀を手放して空気中へ分解すると腰を落として新たに右手にあるものを作り出しながらこう言った。

夜見「俺は妖夢さんが人を殺したという罪を負わないように、妖夢さんの本当の気持ちを守るために、俺はここで妖夢さんを倒す」

そう言つて夜見が右手に作り出しだして肩に担いだのは、赤黒い色をした全長180cmを超える大きな両刃の剣だった。そしてその剣にはかなりの重さがあるのか、夜見はその剣の重量によつて強制的に更に腰を落としていた。

妖夢「……ふざけているのか？」

すると妖夢は夜見のその構えに怒りで無意識に手を震えさせながらこう言つて怒鳴つてきた。

妖夢「なんなんだ！その構えは!？」

夜見「……そうだな、この構えは「狼ろうの型かた」とでも言つておこうか」

そして夜見は両足にゆっくりと力を入れると妖夢に向かってこう言った。

夜見「今から妖夢さんを救うために編み出した型だ！」

すると夜見はその巨大な血の剣を担いだままとは思えない速さで妖夢に向かって

走っていくと夜見は前方に跳んで夜刀で上から刺すように振るものの、妖夢は後ろに跳んで躲わすと夜見の夜刀は石畳に突き刺さった。

妖夢「そんなまる見えの攻撃に誰が当たるか！」

しかし夜見の狙いは妖夢に夜刀で突き刺して攻撃することではなかった。夜見は夜刀が石畳に突き刺さると姿勢を低くしながら夜刀を軸に反時計回りに石畳の上に足を滑らせながら巨大な血の剣を横に振ってきた。

妖夢「しまっ…」

そして妖夢はその夜見の巨大な血の剣に当たったと思ったときには既に後ろに10m以上の距離を宙を舞って飛ばされていた。さらに地面を20m程転がされるとやつと勢いが収まり妖夢はその場に止まった。

妖夢「が、あがつ…ぐっ」

そして妖夢は地面に仰向けに転がされたが、数秒は何が起きたかまったく理解が出来なかった。そして妖夢は呼吸を即座に整え、なかなか力が入らない状態で腕に力を入れてなんとか立ち上がると夜見は先程の位置で最初の構えで立っていた。

妖夢「ば、馬鹿な 何故… そんな動きが出来る？」

夜見「妖夢さんを救うため、ただそれだけだ！」

そして夜見が再び走り出して妖夢に向かっていくと妖夢は斬撃何発か放つが夜見は

軽い身のこなしで斬撃を全て避けた。

妖夢「馬鹿な!? 何故あれを持ったままあんな動きが!？」

そして夜見が妖夢の目の前まで来ると夜刀を逆手持ちのまま左から斬りかかってきたので妖夢はそれを防ぐが、夜見は再び夜刀を軸として時計回りに回転して妖夢の後ろに回り込むと回転の勢いを利用して再び妖夢を血の剣で斬り飛ばした。

妖夢「がっ!？」

そして妖夢は再び斬り飛ばされると今度はうつ伏せになって倒れてしまった。しかし妖夢は諦めずに再び立ち上がって振り返ると既に夜見は目の前まで迫ってきていた。

妖夢「くっ!?! この!？」

そして妖夢は目の前まで来ている夜見に2本の刀を振り下ろすが夜刀に防がれてしまい鏢迫り合いになった。すると夜見は鏢迫り合いをしたまま妖夢に話しかけた。

夜見「妖夢さん、まだ認める気にならないのか? 誰かの命令だからって妖夢さんが人を殺さなきゃいけない理由にはならないが?」

妖夢「うるさい! いい加減にしろ!」

すると妖夢がそう言った瞬間、夜見は何故か夜刀を引き戻した。そして妖夢の刀はそのままの勢いで夜見の体を斬りつけた。

妖夢「えっ?」

そして妖夢は今現在の状況にわからないままではいると、夜見は夜刀を持った左手でもいつきり妖夢を顔の頬を殴った。

妖夢「うぐっ!?!な、何を…!」

そして妖夢はよろけて少し後ろに下がると夜見が急に妖夢に怒鳴った。

夜見「妖夢さんがいい加減にしろ!」

すると妖夢は夜見の気迫に押されて何も言えないしていると夜見は妖夢にこう言い続けた。

夜見「自分の気持ちを押して殺しても俺を殺そうとして、人を殺したという罪の恐怖にそんなに手が震えているのにまだ認めないのか!」

妖夢はそう言われて夜見の血が付いた自分の刀を握っている手をゆっくりと見てみると本当に手が震えていた。

夜見「妖夢さんはそんな自分の現状を見てでも、まだ俺を殺すって言うのか!」

夜見がそう言うのと妖夢は更に震える自分の手にギュツと力を込めるとこう言い出した。

妖夢「私はお前を、黑夜を殺したくはない!この手で黑夜を殺めてしまうのが怖い!本当は人なんか殺めたくはないんだ!」

そして妖夢は自分の押し殺していた本当の気持ちを言い出したのだ。その様子を見

た夜見は妖夢に向かって優しくこう言った。

夜見「それが本当の気持ちだだって言うんなら妖夢さんはどうしたいんだ？」

妖夢「… 私は」

そう一言妖夢が呟いて戸惑っているとき夜見は突然こう言い出した。

夜見「俺は異変を止めて貰いたいからここに来たが、妖夢さんは異変を解決されるのを防ぐように言われた。この状況では何をするか知っているだろ？」

夜見がそう言うとき妖夢は夜見を真っ直ぐ見てこう言った。

妖夢「… そうだったな、こういう場合は弾幕ごっこだな」

夜見「それじゃあ、仕切り直しだな」

そう言うとお互いに少し距離を取って構えると急に妖夢がこんなことを言い出した。

妖夢「ありがとう、黒夜 さっきの勝負で私を倒して勝ってくれて」

夜見「ああ、別に気にするな それより、ちゃんと気を引き締めるよ？」

妖夢「言われなくても、わかっている」

そしてお互いに後ろに引いた足に力を入れてジリツと音が鳴ると2人はこう言い出す。

妖夢「… いぎ、再び」

夜見「… 尋常に」

夜見・妖夢「…勝負！」

そして2人はお互いに距離を詰めると妖夢は2本の刀で斬りかかろうとする一歩手前で夜見は夜刀を地面刺すとそれを軸として反時計回りに回って血の剣で斬りかかった。

妖夢「ぐっ?!」

そして妖夢は咄嗟に刀で防ぐものの威力が強く30mは後ろに下がってしまう。すると妖夢はスペルカードを取り出した。

妖夢「[獄神剣 業風神閃斬]！」

妖夢がスペルカードを発動させると妖夢の近くに浮かんでいた白い魂のようなものが弧を描くように大きな弾幕を左右に往復させて飛ばしてきた。すると夜見は弾幕の隙間を掻い潜って妖夢に近付いていくが妖夢は何故か周囲に飛んでいる弾幕をよく見ている。

夜見（何かあるのか？だったらその前に！）

夜見がそう思った瞬間に妖夢は何故か急に周りに飛んでいる弾幕を一気に2本の刀で斬り始めた。すると斬った弾幕は無数の細かい弾幕となって夜見に襲い掛かってきた。

夜見「くっ！それなら！」



すると夜見は担いでいた血の剣をおもいつき横に振ると、とてつもない大きさの斬撃を放って細かい弾幕を一掃し、妖夢へ向かう道を作り出した夜見は血の剣を引き摺りながら向かっていった。

妖夢「くっ！これならどうだ！」

そして妖夢は夜見に向かって斬撃の弾幕を飛ばすが夜見はその弾幕を夜刀で弾き返しながらどんどん距離を詰めていき、妖夢のまであと1mの所で血の剣に力を込めた。

夜見「くっ……おらあ！」

そして夜見は血の剣を左に振るが妖夢はその刀身に手を置いてその上を転がって躲した。しかし夜見は血の剣の勢いを使ってその場で回転をして逆手持ちの夜刀で右から刺すように攻撃を仕掛けるが妖夢は刀の刃の上を滑らせて軌道を変えて躲すと左手の刀で斬ってきた。

妖夢「隙あり！」

夜見「ぐあっ!？」

そして妖夢は夜見を刀で斬りつけるとその後も立て続けに両手の刀を使って斬りつけてきた。斬られている間に夜見は何とか夜刀で受け止めようとしたがすぐに弾かれてしまい血の剣は重くて防御には使えなかった。

妖夢「これで終わりです！」

夜見「ごはっ！」

そして妖夢は最後に夜見の腹に突きを放つと夜見は5 m程後ろに飛んで仰向けに倒れてしまった。しかし夜見はすぐに立ち上がると血の剣を肩に担いで構えた。

妖夢「まだ立ち上がりですか　なかなかしぶといんですね」

夜見「まだまだこれからだ！」

そして夜見は走り出して血の剣に力を込め、妖夢の前で時計回りに回ったかと思うと振り向きざまに血の剣で下から上に斬り上げた。

妖夢「ぐっ!!」

そして妖夢は2本の刀でそれを防ぐが刀は弾かれ、妖夢は20 m以上の宙に打ち上げられてしまった。すると夜見はすぐさまスペルカードを取り出した。

夜見「爆符　宙に舞え！」

夜見はスペルカードを発動させるとその場で上に飛んで真下に向かって夜刀で斬撃の弾幕を飛ばすとその弾幕は爆発を起こした。そしてその爆風で夜見は妖夢の元へ向かうと夜刀で2回妖夢を斬りつけた。

妖夢「ぐっ!!?かはっ!!」

夜見「よい!..　しよお！」

そして夜見は夜刀で2回斬りつけた後に血の剣を全力で斬り下ろすが、妖夢はそれを

2本の刀を交差されて防ぎ地面に着地した。すると夜見は夜刀で再び真下に斬撃を飛ばして爆発を起こすと爆風で落下速度を落として着地した。

妖夢「やはりその剣、重量がある分攻撃の威力も強いですね」

夜見「ああ、軽く20キロは超えてるだろうな」

そして夜見が走り出そうとすると妖夢はある質問をしてきた。

妖夢「1つ聞きますが、何故黒夜はその構えを狼の型と名付けたのですか？」

夜見「名付けた理由か、それは狼の狩りの方法に因よんで名付けたんだ」

妖夢「狼の狩りの方法……ですか？」

妖夢がそう言うのと夜見は説明を始めた。

夜見「狼が行う基本の狩りの方法は追跡、だから1撃目が当たらなくても2発目で追撃（追跡）をして相手を仕留める。それがこの型の名前の由来だ」

そして妖夢は夜見の説明を聞いていると軽く頷いていた。

妖夢「なるほど。随分と物知りなことで」

夜見「さて、雑談はここまでだ。行くぞ！」

そして夜見が走りだすと同時に妖夢も走り出してお互いに距離を詰めた。そして夜見が血の剣を振り下ろしてくるが妖夢はそれを避けて夜見に突きを放つ。すると夜見はそれを夜刀で受け止めて血の剣の刃先を軸にして回り、妖夢の後ろの方に回り込むと

血の剣を浮かせて振り向きざまに血の剣を横に振った。

しかし妖夢はそれをしゃがみ込んで躲すと振り向きながら立ち上がると同時に2本の刀で斬撃の弾幕を飛ばしてきた。そして夜見はその弾幕を血の剣を無理矢理引き寄せて防ぐと上に弾かれ、そのまま夜見は血の剣を担いだ。

妖夢「まだまだ行きますよ！」

そして妖夢が走り出して距離を詰めて斬りかかって来るが夜見は夜刀で防ぐと妖夢の腹に蹴りを入れて妖夢を軽く蹴り飛ばした。

妖夢「がっ!？」

そして夜見は前方に跳ぶと夜刀を上から突き刺すように振り下ろすが妖夢には当たらずに石畳に突き刺さった。

妖夢（この感じ：： 軸にして回って斬りかかってくる!）

そして妖夢が2本の刀で攻撃を防ぐために警戒していたその時だった：：

ドガアアアアアアア

妖夢「なっ!?! 一体何が!？」

妖夢の後ろからいきなりものすごい爆発音が聞こえてきたのだ。そして妖夢が後ろを振り向くと、どうやらとても大ききさの木の所で爆発が起きたようだった。

妖夢「まさか! ゆゆこさ」よそ見をしている暇は無いはずだ」しまっ：：

そして妖夢は後ろから夜見の声が聞こえてきたと思つて後ろを振り返つた時には既に手遅れだった。

ダアアアアン

夜見は夜刀を地面に刺した後、夜刀を軸にして体を横にして回転すると血の剣を上から振り下ろしてきたのだ。そして妖夢は血の剣の下敷きとなつて地面にうつ伏せになつて倒れ、夜見が血の剣を空气中に分解したが妖夢はどうやら気絶している様子だった。

そしてこの弾幕ごつこの結果は夜見の勝利となつた。

夜見（終わったか さてと、霊夢さん達の方も終わった様だからさつきと向かうか）

そして夜見は夜刀を鞘に納めると倒れている妖夢の刀を拾い上げて鞘にそつと納めると、夜見は妖夢に向かってこう言った。

夜見「じゃあな、妖夢さん 楽しかったぞ」

そして夜見は妖夢そつとお礼の言葉を述べるとその場を後にして霊夢達のいる場所へと歩いていった。

## 第31話 幻想郷での自分の存在とは

夜見は霊夢達のいる場所へ向かおうと石畳の道をしばらく進んでいると目の前に建物が見えてきた。

その建物は正面に木の門があり、周りは3m程の瓦が上にある白色のいかにも和風な壁に囲まれていた。壁の外側から少しだけ瓦の屋根が見えることから壁の内側にある建物も同じような雰囲気なのだろう。

そしてこの建物の壁に沿って歩いていくと霊夢達のいる場所までかなり時間がかかりそうだったので夜見は血の翼を作り出して空を飛んで向かうことにした。

そしてしばらく空を飛んでいると大きな木の近くに霊夢、魔理沙、咲夜がいるのが見えたので、夜見は霊夢達の近くに着地をして血の翼を空气中に分解すると魔理沙が声をかけてきた。

魔理沙「お、夜影！遅かったじゃないか！」

夜見「そう言う魔理沙さん達も、3人もいたのに手間取ってたんだろ？」

霊夢「仕方無いじゃない、相手が思った以上に強かったんだから そんなことより、あなたそんなにボロボロになってる様子を見た限り、随分と苦戦したようね」

夜見「刀をまともに使ったことの無い素人が、普段から刀を使ってる奴に無傷で勝てる訳ないだろ」

咲夜「まあともかく、異変は解決出来たので一件落着ですな」

夜見「まあ、そうだな」

そうは言っていたが夜見は自分の服装を見て、またさとり達に心配をかけさせるだろうなと思った。そして木の方をチラリと見ると木には背中を預けて座るように気絶している少女がいた。

その少女はピンク色のミディアムヘアで頭に幽霊を連想させるような白い三角形の布がついた水色の布のように柔らかそうな帽子を被り、帽子の側面から反対側にかけて白い布が内側に付いていた。服装は水色と白色を基調とした着物を着ており腰には青い帯を巻いていた。

しかし夜見は異変はもう解決したため、この少女とは関わることも無いと思ったのでそつとしておくことにした。そして夜見達は帰ろうと来た道を引き返していると夜見は1つ気になることがあったので霊夢に声をかけた。

夜見「そういうえば霊夢さんは最初は異変を解決する気が無かった様子だったが、何故急に異変の解決に来たんだ？」

霊夢「ああ、実は頼まれたのよ」

夜見「頼まれた？ 一体誰に？」

？「私よ♪」

すると急に後ろから急に声が聞こえてきたので夜見達は後ろを振り向くとそこには白い大きな日傘を持った1人の少女が立っていた。

その女性は金髪のロングヘアで毛先をいくつか束にして赤いリボンで結んでおり、頭には赤い紐状の赤いリボンが着いた白い帽子を被っていた。服装は紫色のドレスを着ていて、指先から肘までかけた白いロンググローブを着けていた。

そして霊夢はその少女を指差すと夜見にこう言った。

霊夢「こいつよ、私に異変解決を頼んだのは」

その少女は霊夢にそう言われると夜見に優しい笑顔を向けて自己紹介をしてきた。

？「初めまして、私は八雲紫やくもゆかり 私はこの幻想郷を創った1人よ」

その紫という少女は自己紹介のついでといった様子で軽々しくこの世界、幻想郷を創った1人だと言ってきた。紫の口調と態度からして嘘を言っているとは思えないので相当な力を持つ者なのだろうと夜見は察した。

そして夜見は自分の自己紹介を始めたが……

夜見「……俺は「黒夜夜見、でしょう？」なっ!?」

紫は夜見の自己紹介を遮って自分の名前を言い当ててきたのだ。そして夜見が驚く



と同時にまずいと思っていると、霊夢と魔理沙が何やら不思議に思っている様子だった。

霊夢「え、紫は何を言ってるの？確か名前は黒月夜影よね？」

魔理沙「ああ、その筈なんだが……人違いか？」

すると紫はフツツと笑うと霊夢と魔理沙に向かつてこう言った。

紫「2人とも騙されてたのよ 自分の素性を隠すためにね」

そして魔理沙は少し驚いたような様子だったが、よく考えると思い当たる節があった。

魔理沙「素性って……そういえば、夜影……じゃなくて夜見は異様に顔を見られるのを嫌がったり自分のことはあまり話したりしなかったな」

霊夢「そう言われればそうね 何か隠している気はしてたけど、まさか名前まで隠していたとはね」

そして霊夢も魔理沙の言っていたことに共感をしていると夜見は静かに紫に問いかけた。

夜見「……結局、何がしたいんだ？」

紫「そうそう、実はあなたに話があつてきたのよ」

夜見「……話？」

そして紫は右手の2本の指を立てると夜見に選択肢を提示してきた。

紫「大事な話と今回の異変の話の2つがあるのだけれど、まずどつちから聞きたいかしら？」

そう言われると夜見は大事な話は後に取っておきたいのと、今回の異変の目的が知れたかったのでまずは今回の異変にの話を先に聞くことにした。

夜見「… 異変の話から聞こうか」

紫「そう、わかったわ まずはあの子について話しましょうか」

そう言って紫は木の所で気絶している少女を指差した。

紫「あの子の名前は西行寺幽々子さいぎょうじ ゆうこ、私の昔からの友人で白玉楼のお嬢様なの ちなみにあなたが戦った妖夢っていう子は幽々子の従者よ」

夜見「… ああ、それで？」

紫「実は幽々子ゆうけいこはあの木、西行妖さいぎょうあやかしという木はある人物によつて封印されているんだけれど、幽々子はこの西行妖に花を咲かせればその人物が復活すると思つて今回の異変を起こしたのよ」

そして紫が異変を起こした目的を話したのだが夜見はとあることが気になった。

夜見「… その西行妖とやらの封印を解いたら、そんなにまずいのか？」

夜見がそう聞くと紫は少し真剣な顔になって話し始めた。

紫「まずいだなんてものではないわ 西行妖の力は私が手出しできないほど強く、そして多くの人間の精気を奪い取る妖怪なのよ だから私はこの異変を解決してもらうために霊夢に頼んだのよ」

夜見「幻想郷を創った紫さんが手出しできないほど強い妖怪か……確かにそんな妖怪の復活が解かれたらまずいだだろうが……」

そして夜見はその話を聞いて不思議に思ったことがあったのでそれについて質問をした。

夜見「だったら何故、幽々子さんの友人である紫さんが説得をして異変をやめさせなかったんだ？ 西行妖の封印が解かれたらまずいのはわかってたんだろ？」

すると紫はこう答え始めた。

紫「それは霊夢の力を信用していたのが1つ としてもう1つは私の目的として、あなたをここへ誘き寄せるためよ」

夜見「俺を誘き寄せる？……どう言うことだ？」

夜見がそう聞くと紫は説明を始めた。

紫「外来人であるあなたがこの幻想郷に来たのは私は即座に気付いて、あなたを探すためにいろんな場所を探したのだけれど何故かどうしても見つからなかったわ

そんな時に紅魔館の吸血鬼が異変を起こし、異変が解決して少しした所で紅魔館を訪

問したのよ。そして吸血鬼の話聞いたら全身黒い服装をした人間が異変を止めたと  
言ったから、それがあなただと思つて名前は聞けたのだけれど何処に住んでいるかはわ  
からないと言つたわ」

夜見「…それで再度異変が起きたら俺が出てくると思つて異変の解決が信用できる  
霊夢さん呼び、俺をここまで誘き寄せたつてことか」

紫「ええ、その通りよ。話が早くて助かるわ」

そう言つて紫は少し満足した様子で右手の指を一本立ててこう言つた。

紫「さて、最後に大事な話ね。この話に関しては霊夢達にも一応聞いておいてほしい  
わ」

霊夢「はいはい、早く帰りたいからさっさと話しなさい」

紫「そうね、待たせるのも悪いしね。それで早速で悪いんだけど、あなたを外の世界  
へ帰らせるわ」

夜見「…は？」

紫の言葉を聞いた瞬間、一瞬間の中が真っ白になった。紫さんはさつきなんて？外の  
世界へ帰らせる？そんな言葉だけが頭の中をグルグル回っていると紫はこの話の経緯  
を説明をした。

紫「あなたが今ここにいる世界である幻想郷は本来、外の世界で忘れ去られたものが

流れ着く場所　つまりあなたはこの世界には本来存在するべきではないのよ　そのあなただけが幻想郷にいることでどんな影響を及ぼすかわかるかしら？」

夜見は紫の言葉を一つずつ聞いて今、この世界で自分がどんな存在かを考えると一つの答えが出てきた。

夜見「……本来起こらないはずのことが起こってしまうということか」

紫「ええ、そうよ　つまりあなたはこの幻想郷に存在してはいけない、いてほしくない存在ということになるわ」

夜見「……そうか」

そして夜見は紫に言われたこの世界での現実を受け止めていると、急に後ろから肩を叩かれた。そして振り返るとそこには少し悲しそうな顔をした魔理沙がいた。

魔理沙「なあ、夜見　外の世界に帰っちまうのか？」

夜見「……仕方ないだろ、俺がこの世界にいたら幻想郷の法則が乱れるんだからな」

紫「……それで、夜見は外の世界へ帰るといこといいのかしら？」

夜見「……ああ、頼む」

夜見がそう言うと言分の目の前の空間に裂け目が出来た。その裂け目の両端には赤いボンが付いており、その裂け目の奥には無数の目が広がる黒い空間があった。

そして夜見はその裂け目に一歩近付くと後ろを振り向かず、に霊夢達に別れの言葉を

告げた。

夜見「いろいろと世話になった　ありがとう」

霊夢「ええ、短い間になんだかんだ少しあつたけど楽しかったわ　さようなら」

魔理沙「私は死ぬまで夜見のことを忘れないからな！　元気でな！」

咲夜「もう会えないと考えると悲しいですが、それが黑夜様の選択です　お嬢様も

きつと、理解してくれるでしょう」

夜見「・・・じゃあな」

そして夜見はその裂け目に入ろうとした瞬間、どこからともなくある声が聞こえてきた。

？『行か、ないで』

その声には少しノイズが入っていて鮮明には聞こえなかったが夜見はその声に反応して足を止めると、紫は不思議に思っている様子で夜見に声を掛けた。

紫「何をしているの？　早く入りなさい」

夜見（・・・さっきの声、俺だけが聞こえていたのか？）

夜見はノイズの入ったある声は自分にはしか聞こえていないのかと不思議に思っていると再び聞こえてきた。

？『待、つて、お、願ひ』

夜見（誰だ？なんで俺を止めるんだ？）

？『お別れな、んで、嫌だ 待って、よ』

夜見（この聞き慣れた声……この気持ちは？）

？『1人にしないで』

そしてその言葉だけが鮮明に聞こえた。その瞬間に夜見はあることを思い出した。

夜見（そうだ、俺には……）

？『嫌、もう1、人ぼっち、は嫌、なの』

夜見（この世界にたった1つしかない……）

？『もう、嫌われ、たくない、の！』

夜見（俺の帰りをずっと待っていてくれる場所がある！）

？『私のことずっとずっと愛して、お兄ちゃん』

そして夜見はゆっくりと夜刀を右手で引き抜き、裂け目に端にある赤いリボンを斬り裂くとその裂け目はゆっくりと消滅した。するとその光景を見ていた霊夢、魔理沙、咲夜は驚いているようすだったが、紫はこちらを睨みながら問いかけてきた。

紫「どういいうつもりかしら？自分が一体何をしたのかわかっているの？」

夜見「……帰るわけにはいかねえんだ」

夜見がそう言うとき紫は夜見が一体何を言っているのか理解できなかつた。

紫「何を言っているのかしら？あなたがこの幻想郷にいたら、どんなことが起こるかわかっているのでしょ？」

すると夜見は紫の方を向くと、夜見はこう言った。

夜見「たとえこの世界にいらなと思われていたとしても、必要とされていなかったとしても俺には、いてほしいと思ってくれる大切な家族がいる　だから俺は帰るわけにはいかねえんだ！」

夜見がそう言うのと紫はため息をついた。そして紫は霊夢の方を向くとあることを聞いた。

紫「博麗の巫女としてはどうかしら？もしかしたら、この幻想郷が壊れてしまう可能性だつて考えられるけど？」

そして霊夢は目を瞑って少し考えると、ため息をつけて目を開くとこう言った。

霊夢「私の仕事は幻想郷を管理をするために異変解決をしたり、妖怪退治をする事人の意見にとやかく言う権利なんて無いわ」

霊夢がそう言うのと魔理沙も続いてこう言った。

魔理沙「霊夢の言う通りだ！そもそも夜見が異変を起こしたり、何か問題を起こすだなんて考えられないぜ！」

紫「…その吸血鬼の従者さんはどうかしら？」



紫は霊夢と魔理沙の回答に納得出来ない様子そのまま咲夜にも聞くと咲夜はこう回答した。

咲夜「私はお嬢様の命令に従い、遂行をするのが仕事です。それに博麗の巫女の言う通り黒夜様の意見を否定する権利は、たとえお嬢様だとしてもありません」

そして霊夢、魔理沙、咲夜の意見を聞いた紫はゆっくり夜見の方へ向き直ると淡々とこう言ってきた。

紫「そうとなると最悪の場合の手筈通り、夜見は殺して処分するしか方法は無いわね」  
紫はそう言った瞬間、周囲に殺気を一気に放った。その殺気は常人であればいとも容易く気絶するような殺気で霊夢は平然としていたが、魔理沙と咲夜は気絶しないように意識を保つのがやっとだった。

霊夢（紫のやつ……本気で夜見を殺す気ね）

魔理沙（うっ!? なんなんだ、この異常な殺気は!?!）

咲夜（この殺気はさっきの黒夜様が放った殺気とは明らかに違う……この殺気は純粹な強者としての殺気!）

そして正面から真っ向に殺気を受けている夜見はというと……

夜見（……へえ、ここまでの殺気だとは……相当強いな）

なんと夜見は平然とした様子で、ましてや紫の殺気の強さに感心を受けていた。そし

てその様子を見た紫は不思議に思つて夜見に質問をした。

紫「あなた、どうしてここまでの殺気を受けて平然としていられるのかしら？」

夜見「・・・こんな殺気、アイツに比べたらなあ」

紫（アイツ？）

紫は夜見の言つたアイツという言葉に疑問をもつたが、夜見はそのままの様子で紫にこう言つた。

夜見「とりあえずその殺気、魔理沙さんと咲夜さんにかなり影響するからさつさと沈めてくれないか？」

紫「・・・そうね、対象はあなただけだものね」

そう言つて紫は殺気を沈めると魔理沙と咲夜は緊張が解けたようにその場にへたり込んでしまつた。

そして紫は自分の背後の股関節辺りの高さに裂け目を作つてその裂け目に座り、裂け目が移動して紫は宙へ浮かんでいくと夜見に向かつてこう言つてきた。

紫「さあ、ここからは1対1の勝負といきましょうか この勝負はあなたの生死を賭けた、ただの弾幕ごっこではない、れつきとした弾幕勝負よ あなたが私を戦闘不能にさせればここに残れる、私はあなたを殺しにかかるというルールだけれど、どうかしら？」

夜見「… ああ、いいだろう」

そして夜見は能力を使って血の翼とコルト・パイソンを作り出すと夜刀とコルト・パイソンを構えた。すると霊夢はその光景を見て魔理沙と咲夜にこう言った。

霊夢「さて、私達は帰りましょう 勝負の邪魔をしたら悪いわ」

そう言つて霊夢が飛んで帰っていくと魔理沙と咲夜はなんとか立ち上がつて夜見に向かつてこう言つてきた。

魔理沙「夜見、負けるんじゃないぞ！絶対だからな！」

咲夜「黒夜様、十分お気をつけて… それでは」

そう言つて魔理沙は箒に股がつて飛んでいき、咲夜は一瞬にして姿を消していった。するとその瞬間、紫はスペルカードを3枚取り出した。

紫「結界 夢と現の呪」「結界 光と闇の網目」「廃線 ぶらり廃駅下車の旅」

そして紫はその3枚のスペルカードを同時に発動させると夜見の周囲に所狭しと弾幕とレーザーが展開され、夜見の逃げられる隙間など何処にもなかった。

すると夜見は冷静に周囲を見渡して状況を確認すると、自分に向かつてくる弾幕だけを夜刀の斬撃とコルト・パイソンから放つ弾幕で相殺を図つた。しかし何故か周囲の弾幕は夜見の弾幕を打ち破り次から次へと弾幕が迫つてきた。

夜見「なっ!? くう！」

すると夜見はコルト・パイソンを空気中に分解すると背中にある血の翼で弾幕を弾き、夜刀で弾幕を斬り落とし始めたが、しばらくすると血の翼からピキツという音が聞こえると共にヒビが入り始めた。

夜見（まずいな……早く打開策を見つけねえと！）

そんなことを考えながら夜見は血の翼からなる音を耳にしながら弾幕を排除していると、急に後ろから幻想郷では絶対に聞かないはずの音が聞こえてきた。

プアーーン

その音を耳にした夜見は後ろを振り返るとそこには、空間に出来た裂け目からこちらに真っ直ぐ向かってくる電車の姿が見えた。

夜見「なっ!?嘘だろ!」

すると夜見は素早く上に飛んでその電車を避けようとしたのだが、電車は進行方向を急に変更して宙に飛んでいる夜見へと真っ直ぐ向かってきたのだ。

夜見「ちっ!やっぱり来るか!」

そして夜見はその電車を横に避けようとしたのだが横から迫ってきていた弾幕に被弾してしまい、夜見は再び電車の正面へと戻されてしまった。

夜見「ぐあっ!くっ!」

すると電車の正面に戻されてしまった夜見は夜刀の峰に左手を添えて横に構えると

夜見は両手に絶大な痛みを感じながら、夜見はそのまま電車に押されていき背後から迫ってくる弾幕は背中中の血の翼で防いでいた。

夜見「があああ!?!がつ!ぐううう!... おらあ!」

すると夜見は夜刀に添えていた左手を離して電車の正面を全力で押すと、無理矢理体を横に回転させながら移動をして電車から離れると電車は再び空間に現れた裂け目に入っていた。

しかし夜見は電車から離れた瞬間に仮面の左側面が当たったので左目の部分が欠けて仮面は吹き飛び、夜見の体も横に何回も回転しながら吹っ飛ばされた。

グキツ

夜見(くっ?!あ、危ねえ... 回転しながら移動したから威力を和らげられたもの、もう少し当たった所が大きかったら首の骨がやられるところだった)

そして空中で何回も回転しながら吹っ飛ばされた夜見はなんとか体勢を立て直すとスペルカードを取り出した。

夜見「爆符 宙に舞え!」

夜見はスペルカードを発動させると夜刀を納めて両手に血のコルト・パイソンを作り出し、弾幕を周囲にひたすら乱射させると爆発を起こし周囲の弾幕を消し去っていった。

そして夜見の周囲に爆発が何度も起きている状況を見ていた紫は夜見に対して感心していた。

紫（へえ、このスペルカードじゃ死なないのね　なら、これはどうかしらね？）

紫はそう言って座っていた裂け目にそのままスリと入ると裂け目が消えてしまった。しかし弾幕の排除を優先していた夜見は紫が姿を消したことに全く気が付かなかった。

夜見（あれで最後！）

ドオオオオオオン

そして夜見はスペルカードで周囲の弾幕を全て排除して周りを見渡したところで、ようやく紫の姿が消えたことに気付いた。

夜見（…紫さんの姿が消えた？）

夜見は紫の姿を消したので周りを警戒しながら両手のコルト・パイソンを空気中に分解した瞬間に後ろから声が聞こえた。

紫「こつちよ」

そして夜見が後ろに振り返ると裂け目に座って浮いている紫が今度はスペルカードを5枚手にしていた。

紫「結果　動と静の均衡」「罔両　ストレートとカーブの夢郷」「罔両　八雲紫の神隠

し」「罔両 禅寺に棲む妖蝶」「魍魎 二重黒死蝶」

紫がスペルカードを発動させると3枚発動させた時とは比べ物にならない量の無数の弾幕が夜見の周りに放たれた。すると夜見も対抗して再びスペルカードを取り出した。

夜見 「賭符 JACKPOT！」

夜見がスペルカードを発動させると周囲に大量の様々な銃が夜見を中心に展開されたが、前に発動させた時と比べて銃の量は明らかに少なかった。

夜見（翼に血を使ってるせいで7×7×7の343丁しか作れない！でも、仕方がない！）

夜見 「くっ！発射！」

そして夜見が発射の合図を出すと銃口から血の弾丸が発射され、周りの弾幕を次々と破壊するものの一方向に弾幕を全て破壊しきれる気がしなかった。

そして夜見は紫の方を見ると紫は口に手を当ててクスクスと笑っていた。

夜見 「何がおかしい！」

紫 「いえいえ、お気になさらず続けなさい」

夜見（舐めやがって！）

すると夜見は夜刀を引き抜いて血の銃の隙間から斬撃を飛ばすが紫のスペルカード

の弾幕に当たってしまい、紫には夜見の斬撃は届かなかった。

紫「あらあら、何がしたかったのかしら？」

夜見（くそっ！斬撃でも弾幕でも、何か1撃でも当たればきつと勝機が見いだせるはず！）

そして夜見は紫の方をじつと見ながらこの状況を打開し、紫に勝つ方法を考えていると紫は急にこんなことを言った。

紫「さてと、もうそろそろ終わりにしましょうか」

紫がそう言った瞬間に突然周りに飛んでいた弾幕が急に消え去り、夜見はこの最大のチャンス逃さまいと紫に向かおうとした次の瞬間……

夜見（今しかチャンスは「はくい、わかったわく」

すると夜見の後ろから知らない声が聞こえてきた。そして夜見は後ろを振り向こうとした瞬間に、何者かに背中を触られた次の瞬間……

ドクンッ

夜見「ぶっ!?!ごはっ!?!」

夜見は視界が一気にぼやけ、口から大量の血を吐いたのだ。そして夜見の体に力が入らなくなり、意識も遠のいて能力もちゃんと使うことが出来ず地面に向かって真逆さまに落ちていった。



ドサツ

夜見（な、何、が……起き……て……）

夜見は仰向けになってゆっくりと口から血を吐きながら、どんどんぼやける視界で紫の方を見ると隣に誰かが飛んでいるのが見えた。

紫「ちゃんと手筈通りね、幽々子」

幽々子「紫？ 私が目を覚ましたら紫の隙間の中入って話だったのに、目を覚ましたらいきなり隙間の中だったんだから驚いたのよ？」

紫「それは悪かったと思ってるわ でも、こうでもないし幽々子が触れなかったじゃない」

幽々子「まあ、確かにそうかもしれないわね」

夜見（な、何を……話して……る……？）

そして夜見は手を伸ばすがその手はもちろん紫に届く筈もなく、どんどんと心臓の動きが鈍くなり深海に沈んでいくような感覚を感じた。

夜見（ああ、俺……死ぬ……のか ごめんな、みんな……もう……会えない、みたいだ……）

そして夜見が意識を手放してゆっくりと目を閉じようとした瞬間に、ある少女が夜見の元に駆け寄ってきた。するとその少女は夜見の手を両手で握りしめ、夜見に話しかけ

てきた。

？「嫌！待って！死んじややだよ！お兄ちゃん！」

夜見「・・・え？こいし・・・さん・・・？」

すると夜見のぼやけた視界に見えたのは涙を流しているこいしだった。そして紫と幽々子も夜見のそばにこいしがいることに気付いた。

幽々子「あら？あの子は・・・」

紫「覚妖怪？なんでこんなところに？」

紫と幽々子は夜見のそばに何故覚妖怪がいて、何故その覚妖怪が涙を流しながら夜見の手を両手で握りしめて話しかけているのが理解できなかった。

そしてこいしは夜見に向かって話しかけ続けるが、夜見にはこいしの声が聞こえていない様子だった。

こいし「死んじや駄目！お兄ちゃん！しっかりしてよ、お兄ちゃん！」

夜見（こいし・・・さん・・・？・・・泣いてるんだよ・・・いつもみたいに・・・笑っていてくれよ・・・）

こいし「お兄ちゃん、約束したじやん！私のことを、ずっと愛してくれるって！あれは私を満足させるための嘘だったの!?ねえ、答えてよ！お兄ちゃん！」

夜見（こいし・・・さん・・・？・・・ああ、そっか 約束・・・したんだった・・・）

そして夜見は少し意識がはつきりすると、握られていない方の手に今も自分が吐き続けている血を集めて、とある物を作った。それは、ほとんどが黒色をした一輪の薔薇の髪飾りだった。

こいし「お、お兄ちゃん？それって……」

夜見「……ほら、こいし……さん プレゼントだ」

そして夜見はその髪飾りを器用に片手でこいしの左側の前髪の方に着けると、夜見は笑顔でこいしに向けてこう言った。

夜見「はは……似合ってるな…… こいし……さん……」

するとこいしは手を震えさせながら片手で薔薇の髪飾りに触れた。こいしは黒い薔薇の花言葉を前に夜見の口から聞いたことがあった。そしてこいしは夜見に向かってこう言った。

こいし「な、なんで？黒い薔薇の花言葉って確か憎しみと恨みだよな？どうして!?なんでこんな物がプレゼントなの!?お兄ちゃんは私のことを恨んでるの!?憎んでるの!?嫌いなもの!?ねえ!?!」

夜見「……よく、その花言葉を……知ってたな でも、な……こいしさん、送る花言葉は……その2つの意味、じゃない……」

こいし「え……?どういう……こと……?」

そして夜見は空いている手でゆっくりと優しくこいしの頬に触れると夜見は満面の笑みで、優しい声でこう言った。

夜見「決して……滅びることのない、愛　それが……俺の送る花言葉と、約束を守る証だ」

こいし「……お兄……ちゃん」

そしてこいしの涙が夜見の頬に一滴落ちた瞬間、夜見の手がこいしの頬からゆっくりと離れていき地面に落ちた。

こいし「……お兄ちゃん？」

するとこいしは夜見のことを呼ぶが夜見は応答せず、指をピクリとも動かさなかった。こいしは目の前で何が起きたのかは、ちゃんと気付いていたのだがこいしは笑いながらこんなことを言い始めた。

こいし「……あ、はは、あはは、あは　駄目だよ、お兄ちゃん　こんなところで寝たら風邪ひいちゃうよ？」

そしてこいしは壊れたように笑いながら両手で夜見の体を揺らしながら言い続けた。

こいし「お兄ちゃん、もう疲れて寝ちゃったのかな？　だったら私も一緒に寝ちゃおうかな　あはは、あは、あはははは、はは……は」

ドサッ

するとこいしは急に糸が切れた操り人形のようにプツンと動かなくなり、夜見の隣に倒れてしまった。そしてその光景を少し遠い所で見ていた紫と幽々子は不思議に思っていた。

幽々子「……なんだったのかしら、一体？」

紫「さあ？でも、あの覺妖怪と外来人がどんな関係だろうが私の知ったことではないわ さあ、せめて外来人は火葬でもしてあげて埋めましようか」

幽々子「……ええ、そうね」

そして紫と幽々子はゆっくりと地面に降りると、夜見とこいしにへとゆっくりと近付いてくるが夜見は一切動かなかった。いや、正確には動くはずがなかった。

何故なら夜見はこいしの目の前で死んだのだから。

## 第32話 副産物

夜見（…あれ？確か俺は…）

夜見は宙にフワフワと浮かぶ感触を感じながら目を閉じた真つ暗な視界で、自分の身に何が起きたのかを考えていた。そしてしばらく考えていると夜見はようやく何が起きたのかを思い出した。

夜見（…ああ、そうだった俺はこいしさんの目の前で死んだんだっけな…はは、情けねえな またこうやって目の前で消えていくんだな）

夜見は自分の心の中で後悔をしながら過去のことを思い出していると、急に背中が地面に着いた感触がした。そして夜見は不思議に思つて目を開けてみると目の前には白い天井が見えた。

夜見（…白い天井 …ここは？）

そして夜見は体を起こして立ち上がると周囲を見渡すと、そこは一辺が30m程ある正方形の形をした白い部屋だった。その部屋は明かりが見当たらないのに何故かとても明るかった。

そして夜見は自分の体を見てみるとあることに気が付いた。

夜見（あれ？服が1つも傷付いてない？）

夜見の服装は何故か腰に挿していた夜刀の鞘と被っていたマントは無かったものの、着ていた制服は何故か無傷の状態だったのだ。そして夜見は妖夢に斬られた筈の制服のことを考えていたが、ある音を耳にした。

ジャラ

夜見（…なんだ？）

夜見は鎖が揺れるような音を耳にして、音のした正面の壁の方を見るとそこには腕を組ながら壁に背中を預けて立っている人物のような者がいた。

「人物のような」と言う訳は、その人物が不可思議な姿をしていたからだ。

その人物は全身が光を呑み込むような真っ黒な色をしていて、その体は壊れかけのテレビに映っているように不安定にぶれており、いくつもの鉄の鎖が巻かれて端は垂れ下がっていたのだ。そしてその人物には顔は無く、ただ口の部分は白く見えていた。

夜見（なっ!?!何故あいつが!?!）

そして夜見はその黒い人物の目の前まで走って行って目の前まで来ると、黒い人物はこちらの方を見るように頭を上げて白い口を三日月のような形にしてニヤリと笑った。

夜見「何故お前の封印が少し外れているんだ！答えろ！」

「…さあな？でもココロアたりはあるんじゃないかなあ、クロヨルヤミ…い





られた方がまだ助かる見込みがあるんじゃないかと思わせるような威力だったのだが、壁がへこむこともなければ欠けることもなく夜見は背中と腹に強烈な痛みを感じた。

夜見「な、にが……？」

ドサツ

そして夜見は全身に力が入らず地面に座り込むように倒れてしまい、夜見は何度も咳き込んだが血が出ることもなければ、あんな威力で吹き飛ばされたのにも関わらず意識はちゃんとはずきりとしていた。そして夜見は黒い人物の方を見ると黒い人物は右手に付いた埃を払うように右手を振っていた。

「あゝあ、やつぱりこれしかチカラはデねえかあ やつぱこのクサリのせいしかあ？」  
夜見（これしか……だと？）

その黒い人物の行動と言葉から察するに黒い人物は夜見の腹を右手で殴って吹き飛ばしたものの、本来の力が体に巻かれた鎖によつて出せないことに少し不満に思っているようだ。しかしそれなら鎖を外して殴ればいいのだが、その黒い人物は鎖を掴んで外そうとするが何故か体から外れることはなかった。

「ちっ！ やつぱりハズれねえか」

そして夜見は腕に力を入れてなんとか項垂れたようになりながらも立ち上がって黒い人物を睨み付けると、その黒い人物は歩いてきながらヘラヘラしてこう言ってきた。

？「ことごとくオレのことがキラいみたいだなあ？それならよお……」

そう言つて黒い人物は右手を右に伸ばすどこからともなく刀が現れて右手でその刀を握つた。そして黒い人物は刀を鞘から引き抜くと鞘を放り捨てて刀を夜見の方に向かつて投げると、その刀は夜見の頬を浅く掠めて壁に当たると乾いた音を立てて地面に落ちた。

？「ほら、カタナはアツカえるんだろ？だつたらそれでオレを止めて、またカンゼンにフウインしてみたらどうだ？」

そう言つて黒い人物は挑発をすると夜見はその刀を拾つて右手で構えるとその黒い人物に向かつて走り出した。

そして夜見は黒い人物に向かつて刀を振るが軽々と躲されてしまった。

？「おいおいどうしたんだあ？そんなハヤसानてメをトじてたつてカワせるぜえ」

夜見「ちっ！黙れ！」

そして夜見は何度も黒い人物に向かつて刀を振るが黒い人物は夜見の刀を全て身を少しだけ反らして躲していた。

？「ほらほら、こんなもんかあ？よくこんなでイきてこられたもんだなあ？」

夜見「くっ！うるせえ！」

そして夜見は黒い人物に突きを放とうとした瞬間に再び視界がぶれ、黒い人物が遠ざ

かかっていった。何故なら黒い人物は夜見が突きを放つのと同時に一瞬で懐に入って掌底で夜見を突き飛ばしたからだ。

夜見「ぐあっ!?!がっ!ぐっ… かは!」

そして夜見は地面を2、3回バウンドして地面を転がると壁に体が当たって止まったものの、夜見は胸に強烈な痛みが走っていた。

?「あつはつはつは、やっぱりヨワイねえ そんなじやあ、ナンネンタつても才わらないぜえ?」

夜見「ぐっ!うう… 黙… れ…」

そう言つて夜見はなんとか立ち上がるが黒い人物は夜見に向かってこう言った。

?「まあ、セイゼイガンバリな? ナンドやつてもオナジだけどな」

夜見「ちっ! 黙りやがれ!」

そして夜見は再び黒い人物との距離を詰めて両手で刀を黒い人物の頭に向けて振り下ろすと、黒い人物は何故か呆れた様子で避けるような仕草をしなかった。すると夜見の刀が黒い人物の頭に当たると同時に何故か刀の動きが止まった。

夜見「なっ!?!」

?「はあ、つまんねえなあ」

夜見の振り下ろした刀の刃の所を見ると、なんと黒い人物が刀の刃を右手の親指

と人差し指で摘まんで止めていたのだ。そして黒い人物が指に力を少しだけ込めると刀の刀身にヒビが入り、刀身を軽々と折られてしまった。

すると夜見は後ろに跳んで下がりながら折れた刀を黒い人物に投げつけるが、黒い人物はその折れた刀を手にとった。

？「いいか？カタナつてのはこうやってツカうんだよ」

そして黒い人物が折れた刀をこちらに向けたかと思うと一瞬にして黒い人物が姿を消した。

夜見「なっ!?何処

すると次の瞬間に何故か急に声が出なくなつたかと思うと夜見の頭がゴロンと背後に落ちて夜見の体は膝から崩れ落ちるように倒れたのだが、夜見の頭と体からは何故か血が出てこなかつた。そして黒い人物はいつの間にか夜見の背後の方に立っており、その黒い人物が指をパチンツと鳴らすと落ちた夜見の頭が消え、夜見の体から頭が生えてきた。

夜見「ぶはあ!?!はあ、はあ」

すると夜見は水中から水面に上がってやつと息が出来たかのように息を荒くしながら立ち上がると黒い人物は笑いながら夜見にこう言ってきた。

？「ヨかつたなあ、ここがセイシンテキクウカンじゃなかつたらイマゴロおマエはシ

んでたぜ？」

夜見「ちっ！黙れ！お前には絶対に負けねえ！」

？「へえ？オレよりもヨワイフクサンブツがどうやって？」

夜見「こうするんだよ！」

そして夜見は自分の両手にハンドガンを出現させると黒い人物に向けて容赦なく乱射をした。すると黒い人物は折れた刀で弾丸を弾きながら夜見にこう言った。

？「へえ、やつぱりおマエもモノをダせるんだな」

夜見「この精神的空間は自分のイメージする物が実現する！つまりはお前も俺も思った物が出るってことなんだよ！」

そして夜見はハンドガンの弾を全て撃ち尽くすとハンドガン捨て、刀をイメージして取り出すと両手で構えて黒い人物に斬りかかった。しかし黒い人物は折れた刀を保持った刀で軽々と防いだ。

？「ザンネンだったなあ、フクサンブツ」

夜見「黙れクソ野郎が！」

そして夜見は無理やり押しきって黒い人物を後退させると斬撃を放つが、黒い人物は刀を持っていない手を斬撃に向けると斬撃を握り潰し、折れた刀を振って夜見よりも大きい斬撃を放った。

夜見「くっ!? クツソがああああ!」

そして夜見は黒い人物の放った斬撃に下から斬り上げようとするが刀と斬撃の間で火花が散って夜見の刀が止まった。しかし、しばらく夜見はなんとか斬撃を斬り上げようと力を込めているとやつとの思いで斬撃を斬り上げた。

チユドオオオオオオン

そして斬撃は夜見の背後の壁に当たると斬撃は爆発して煙を舞い上がらせた。その光景を見ていた黒い人物はその夜見の行動に感心していた。

? 「まさかフクサンブツがここまでやるとはなあ、チカラのツヨさはいまだにケンザイしてるんだな」

夜見「うるせえ、ゴミ野郎!」

そう言って夜見は刀を左手に持って逆手持ちにして新たに右手に全長180cmを越える両刃の剣を肩に担いで狼の型で構えると黒い人物に向かって走り出した。

? 「ロウのカタだったかあ、そのカマえはあ、タシかにカタナのツカイカタによつてツイゲキやアイテのイヒヨウをツいてコウゲキできるがあ…」

夜見「ぶっ潰れる!」

そして夜見が右手の剣で黒い人物を上から潰すように振り下ろしたが、黒い人物は目の前から消えたかと思うと夜見の目の前に一瞬で移動してきた。

? 「カタナとカラダのアイダにハイっちまったらイミはナイよなあ? フクサンブツ」  
夜見 「なっ!？」

そして夜見は目の前に黒い人物の不敵な笑みが見えたかと思うと、夜見は黒い人物に顔を鷲掴みにされて地面に叩き付けられた。そして黒い人物は倒れた夜見の顔を鷲掴みしたまま手に力を込めると夜見の頭はバラバラに碎け散った。

? 「2カイメだ、フクサンブツ」

そして黒い人物は夜見と距離を取って再び指をパチンツと鳴らすと夜見の碎け散った頭の破片は消えて夜見の体から頭が生えてきて、夜見は即座に立ち上がると右手の剣を捨てて左手の刀を両手で構えた。

夜見 「がはあ! はあ、はあ… くそつたれが!」

? 「イつただろう? ナンドやってもオナジだと だからそこで、1つトリヒキをしな  
いか?」

黒い人物がそう言うのと夜見はその黒い人物の言った取引について聞くことにした。

夜見 「… 取引だと?」

? 「ああ、そうだあ でもまずはイマのジョウキヨウをセツメイしてやる」

そして黒い人物はそう言うのと今の状況について話し始めた。

? 「まず、このセイシンテキクウカンにいるジョウタイだと、ジツサイのセカイのジ

カンはゆっくりススんでいるんだ。そしてジツは、まだおマエのニクタイからタマシイはまだ抜けきつてねえで、まだニクタイとツナがつているジヨウタイなんだよ」

夜見「……だが、この精神的空間から出たとしてもすぐに魂が抜けきるだけだ。それと取引に何の関係がある？」

黒い人物の説明を聞いてそう言った夜見は黒い人物にそう聞き返すと黒い人物はこんなことを言った。

？「もし、タスかるホウホウをオレがシっているすれば？」

夜見「なっ!？」

夜見は驚きのあまりに声を漏らすと黒い人物は話を続けた。

？「オレもここでクちハてるのはゴメンだからな。そこでオレがタスけてやってもいいが、ジヨウケンがある」

夜見「……条件？」

夜見がそう聞き返すと黒い人物は自分に巻き付いていて鎖の垂れ下がっている部分を手に取つてこう言った。

？「オレをここからカイホウしてオレをジユウにすることだ、そうしねえとオレはおマエのイシキとウツリカわることがデキねえからなあ。そうすればオレがおマエのダイジにしている、あのオンナのガキだけはタスけてやるよ」



夜見「…なら断る」

その条件を出された瞬間に夜見はその条件をすぐに拒否した。

仮にこの黒い人物の言っている話は本当だったとしてもこいしだけが助かってさとりや燐に空、他のみんなは助からないと言うことになる。そしてなにより、夜見はこの黒い人物を解放するのは自分が過去に心に決めたことに反しているのだ。

？「ほう？まさかミズカからジブンがタスかるシユダンをキリスてるとはなあ　つまりおマエはここでクちハてるのがノゾみなのか？」

夜見「いや、俺はお前を完全に封印し…」

夜見は完全に言い切らないで言葉に詰まり、あることに気付いた。そして黒い人物は夜見が気付いたことを把握していた。

？「キヅいたようだな？どうしてオレのフウインがスコシトかれているのか、そしてオレをフタタびフウインしたらどうなるのか」

黒い人物がそう夜見に聞くと夜見は片手で頭を抱えて混乱していた。

夜見「まさか…いや、そんなことがある筈が…」

？「ジツサイにイマオキているんだよお、おマエがオレのフウインをトいたというジツがなあ」

黒い人物が夜見の思っていたことを口にすると、更に黒い人物は口を開き続けた。

？「いやあ、ホントウにありがたえなあ　まさかフウインがスコしでもトけるヒがくるなんてなあ」

黒い人物がそう言うのと夜見は少し冷静になって、黒い人物の封印が緩んだ理由と再び封印したらどうなるのかを考え始めた。

夜見（まさか、こいしさんと一緒にいる時たまに心開いたときにあいつの封印が少し解けた？そしてまた完全に封印をしてしまったら俺は…）

？「ああ、おマエの思っているトオリだ　おマエがココロをヒラいたシユンカンにオレのフウインがスコシトかれたんだよ、おカゲでオレはこうしてクサリにカンゼンにシバラれずにウゴけるんだ」

夜見（くそ！油断した！まさかこんなことになるだなんて！しかもこのまま完全に封印が解けたら！）

？「まあ、そのままフウインがトけたらヨかったんだけどなあ　そしたらまたムカシみたい…」

黒い人物が何かを言いかけたその瞬間に、夜見は体が勝手に動いたと思ったら夜見は黒い人物に向かって走り出して刀を振り下ろしていた。しかし黒い人物はその刀を軽々と躲した。

夜見「それ以上言うな！」

? 「は? どうしたんだよキユウに? まさか、あの「それ以上言うな」と言ってるだろう!」  
黒い人物が再び何かを言いかけると夜見は黒い人物を刀で斬ろうとするが、再び軽々と黒い人物が刀を躲すと夜見は叫んだ。

夜見「そもそも、お前は自分が起こした許されない罪を忘れた訳じゃないだろうなあ!」

? 「いや、あれはおマエのオカしたツミだろう?」

黒い人物がそう言うのと夜見の動きが一瞬止まってしまった。すると、その隙を狙って黒い人物は夜見の首を掴んで壁まで跳ぶと夜見を壁に押し付けながら首を締め始めた。  
ドオオオオオオン

夜見「がっ!?! かっ!?!」

いきなり背中が壁に衝突して肺の空気が一気に出されて驚いた夜見は、一瞬だけ呼吸が出来なくなると黒い人物は夜見にこう言った。

? 「おマエ、ジブンがどうしてトまったかわかるか? それは、おマエエンジンがジブンでオカしたツミだつてミトめてるからなんだよ」

夜見「ぐっ! があつ! ち、違う! あれは俺じゃない! あれはお前がやったことだ!」  
夜見がそう言うのと黒い人物はニヤリと笑うと腕に更に力を込めた。すると夜見は呼吸が出来なくなり黒い人物の首を絞めている腕を掴んで苦しみだした。

夜見「ぐっ!?かはっ!かっ!」

?「おいおい、さつきまでのイセイはイツタイなんだったんだあ?」

夜見「くっ!か…はっ…」

そして夜見の視界がぼやけ始めて黒い人物の笑っている顔を最後に視界が暗くなるうとしたそのときだった。

バチツ

?「なっ!」

何か電気が走るような音が聞こえたと思った瞬間、黒い人物がいきなり吹き飛ばされたのだ。そして黒い人物が地面を転がり、壁に背がついてようやく止まって立ち上がる。と夜見向かって黒い人物はこんなことを言い出した。

?「ぐっ!てめえ、イマナニをしやがった!」

夜見「かはっ!げほっ!はあ、はあ 一体…何が?」

黒い人物がそう言うが、肝心の夜見も何があつて何故黒い人物が吹き飛ばされたのがわからずに立ち上がると、黒い人物は立ち上がって舌打ちをするところ言った。

?「ちっ、なめやがってえ ぶっツブしてやる!」

そして黒い人物が消えたかと思うと夜見の後ろに一瞬で回り込み夜見の頭に拳を振るうと夜見の体は吹き飛ばされて仰向けに倒れ、頭が碎け散った。

？「まだまだ！おマエがカナわないとジユウブンにわかって、ココロがぶつつづれるまでコロしてやるよお！」

そして黒い人物は指をパチンツと鳴らすと再び夜見の砕けた頭の破片は消えて、夜見の体から頭が生えてきた。

夜見「くっ！がはっ！」

？「ヤスむヒマなんかねえぞ？」

すると黒い人物は夜見の元に一瞬で来ると黒い人物は夜見の背中を踏みつけて夜見の手首を掴んだかと思うと、黒い人物は夜見の腕を肩から引きちぎった。

夜見「がっ!?アッアッアッアッアッアッ!!!」

夜見は腕を引きちぎられ今まで感じたことのない激痛によって叫び、ちぎられた腕を部分を反対の片手で塞いで今にも転がってもがき苦しもうにも黒い人物が背中を踏みつけているため反対の手で塞ぐことすら出来なかった。

？「そんなにサケぶほどクルしいなら、ラクにしてやるよお！」

黒い人物がそう言うのと夜見の背中を踏みつけていた足で夜見の頭を踏み潰した。そして黒い人物が足を退けると再び指をパチンツと鳴らして夜見の頭を再生させた。その後はただの地獄絵図だった。

黒い人物は夜見の頭を再生させると、ある時は足の付け根を踏み抜いて無理矢理足を

取り、ある時は刀で目を抉り出し、ある時は下顎を手で引きちぎったりとする度に夜見は叫び声を上げ、黒い人物はその度に頭を潰して殺して夜見の体を再生させた。

そんなことが何十回、何百回も続けられると夜見の心は既に限界を越えていた。すると黒い人物は肩に刀の峰を置くように担ぎながら倒れている夜見に問いかけた。

？「いいカゲンにやめてホシいんじやねえかあ？フクサンブツ イマならカンガエナオして、オレをカイホウしてやるならヤめてやるよお」

そして夜見は震える腕に力を入れてゆつくりと立ち上がると項垂れた状態で夜見は黒い人物を睨んでこう言った。

夜見「断るに決まってるだろ、ゴミが」

夜見がそう言うのと黒い人物は一瞬で夜見に近付いて刀を腹に刺すと夜見の首を持つたまま壁に叩き付けた。

ドオオオオオオン

夜見「がはっ！ごふっ！」

？「てめえはナニをオモってコバンでるんだ？ナニがおマエをそこまでさせる！」

そう言つて黒い人物は夜見の首を掴んでいる手に力を込めながらそう聞くと、夜見は苦しみながらもこう答えた。

夜見「ぐっ！があっ！そ、そんなの決まってるだろ？俺は……お前を封印して、二

度と…… あんな…… 惨劇は、起こさせない そう心に、決めた…… からだ！」  
？「……」

もうこの時点で黒い人物はとつくに気付いていた。夜見に何度も敵わないことを証明しても、どんなに苦痛を与えたとしても夜見は決して自分には屈しないことに。

しかし黒い人物はもう1回だけ殺せば屈するかもしれない、そのような望みを掛けて夜見の喉を握り潰して刀を引き抜くと夜見の体は壁に背中を着けて座り込むような格好になった。そして少し後退して指をパチンツと鳴らして夜見の体を再生させると、夜見は頭を上げてこう言った。

夜見「何度やっただって無駄だ、俺はどんなに苦痛を与えられようが、どんなに敵わないことを証明されようが！俺は決して屈しない！」

夜見がそう言うのと黒い人物はため息をついて刀を後ろに放り投げて座り込むところ言い始めた。

？「…… めんどくせえ、ナンドおマエをコロしてもクツしないならやってもムイミだ ほら、さっさとオレをカンゼンにフウインしろよ」

黒い人物がそう言ういうと夜見は首を横に振ってこう返した。

夜見「いや、完全には封印はしない お前を完全に封印したら、俺は大切な物がわからなくなるだろうからな」

? 「… いいのか?」

夜見「ああ、いいんだ どうせ俺はお前には決して屈しないからな」

? 「… はあ、めんどくせえ」

そして黒い人物が立ち上がって片足を少し上げて地面を踏んだかと思うと、周りの空間が一気に歪み出した。すると夜見は何が起きたのかわからず黒い人物に問いかけた。

夜見「なっ!? お前、一体何をした!」

? 「あ? おマエをセイシンテキクウカンから出してジツサイのセカイにモドすんだよ」

夜見「お前、どういう意味だかわかってるのか?」

? 「ああ、わかってる だが、これだけはイッておいてやる」

そして夜見の視界が真っ黒になった瞬間、黒い人物の声が鮮明になってこう聞こえた。



？「お前は幸か不幸か、罪という名の呪縛から逃れる手段を1つ無くすことが出来る」  
夜見（：： どういうことだ？）

夜見は最後に聞こえた黒い人物の言った意味がまったくわからなかった。そして夜見はその黒い人物が言った意味について頭をフル回転させると、ある1つの答えが出てきた。

夜見（まさか？ いや、だとしても確かにそうとしか考えられない筈だ：：）

そして夜見は1つの答えが導き出したと同時に真つ黒な視界は、1つの小さな光によつて照らされた。

## 第33話 本当のちから

紫「それにしても、一体なんで外来人なんかが来たのかしら？」

幽々子「さあ？何故かしらね〜 いつもだったらそんなことはないんでしょ？」

紫「ええ、その筈なんだけど…… とりあえず、火葬が済んだら少し結界の様子を見て  
こようかしら」

そんな会話をしながら紫と幽々子は夜見をせめて火葬でもしようと歩いて近付いていくと、急に紫は幽々子の前に手を伸ばして歩みを止めた。そして幽々子もその場で止まり、不思議に思った幽々子は紫に話しかけた。

幽々子「紫？一体どうしたのかしら？」

すると紫は夜見の死体の方を少し睨むように見ながら幽々子にあることを聞いた。

紫「幽々子、まさかあの外来人に触れたときにちゃんと能力を使ったんでしょね？」  
幽々子「当たり前じゃないの〜 紫が言った作戦通りにちゃんと私は外来人に触って能力を使ったわよ〜」

紫（…… だったらおかしいわ 何故あの外来人の死体から霊力が溢れだしているのかしら？）

紫がそう思っていた次の瞬間、夜見の死体を中心に暖かい暴風が吹き荒れた。すると紫と幽々子は体を前のめりにして腕で顔を守るように覆ったが紫と幽々子は後ろに吹き飛ばされてしまった。

幽々子「きやあ！」

紫「うっ！一体何が!？」

そして吹き飛ばされた幽々子は宙に飛んで体勢を立て直し、紫は裂け目を作つてその裂け目に乗つて夜見の死体があつた場所を見てみると、そこにはこいしをお姫様だつこしている夜見が立っていた。

幽々子「ゆ、紫!? 一体何が起こっているのよ!？」

すると幽々子は風でなびく髪を手で抑えながら紫に何が起こっているのか聞いてみたのだが、紫に幽々子の声は届いておらず別のことを考えていた。

紫(何よ、この純粋な霊力と量は!? こんなに純粋な霊力なんて霊夢と同じ…) いや、それ以上の純粋さに加えて比にならないこの霊力の量はなんなの!? それに…

そして夜見はこいしをお姫様だつこをしながら周りを1回見渡すと、後ろに下がつてこいしを灯籠にもたれかかるように座らせた。

紫(霊力でも魔力でも無い、ましてや妖力や神力でも無い、この純粋な霊力に少しだけ混じっている神力と同等の邪悪な力はなんなの!?)

すると紫は夜見に起こっていることが不思議で仕方がなく、思わず声に出してしまっ  
た。

紫「くっ！あなた、一体どうして生きているのよ！説明しなさい！」

紫が夜見に向かってそう言うのと夜見は振り返ってゆっくりと紫と幽々子の方へ歩いていった。

夜見（そうだ……よく考えたらわかってた筈なんだ）

そして紫と幽々子は夜見が一步一步近づいてくると、いつでも弾幕を放てるように身構えた。

夜見（前の異変でレミリアさんとフランドールさんと戦ったとき、俺は明らかに致死量を軽く上回る血を流した。しかも俺はあの後に気絶して、自分の血を一切自分の中に取り込まなかったんだ）

そして夜見は自分が先程倒れていた場所に着くとそこに落ちている夜刀に視線を移した。

夜見（そしたら何故、俺は生きているんだ？その答えは俺が能力を初めて使うときには無意識に使っていたこと、次に俺の体質だと思っていた異様な治癒能力、そして俺の能力だと思っていた血を操る能力、最後に確実に死んでいた筈の状況でも俺が生きていられたということ、このパズルのピースをはめれば自然と答えは見えてくる）

すると夜見は足元に落ちている夜刀を右手でゆつくりと拾い上げた。

夜見（俺は無意識に使っていたんだ、あの過去の呪縛から解放される死というものに抗う罪を　そして、本当の俺の罪は…）

そして夜見はゆつくりと顔を上げて紫と幽々子の方に向かって言った。

夜見「「生を操る」のうりよく　罪　これが俺に与えられた本当の罪だ」

夜見がそう言った瞬間に紫と幽々子は恐怖で体が一瞬動かなくなり、体が震え始めていた。何故なら夜見がこちらを向いて自分の能力を言った瞬間、夜見の顔が一瞬だけが死神に見えたのだ。

そしてその姿を見た紫と幽々子は夜見の気迫に自分の死を一瞬見せられた。すると夜見は夜刀の刃先を向けると紫に声をかけた。

夜見「紫さん、だったっけか？」

すると紫は冷静を装って返事をした。

紫「…何よ？」

夜見「最初に勝負のルールを提示したよな　勝負は1対1で行うと言った筈だが？」

夜見がそう言うとき紫はこう返してきた。

紫「あなたはこの世において幻想郷の運命を変えてしまうような存在、そんなあなたを殺す為なら私はどんな手でも使うわ　なのにあなたは何を思つて、生きようとし続けるのかしら？」

そして紫は逆に夜見に問いかけてきたので夜見は自分の生きる理由を言った。

夜見「……それは俺の幻想を叶えるため、そして俺の大切な存在の幻想を叶えるためだ」

夜見のその答えに対して、紫は呆れた様子で夜見にこう返した。

紫「残念ながら、あなたの理想は叶わないわ　この世界はあなたが思っているほどあまいものではない、前の異変を解決出来たのもただの偶然に過ぎないのよ？」

紫がそう言ったのだが、夜見は静かにこう言い返した。

夜見「理想じゃない、幻想だ　そして叶うさ、だってここはどんな幻想でも叶う幻想郷なんだからな」

そして夜見は満面の笑みで更に続けてこう言った。

夜見「だからその幻想を叶えるために俺は幻想郷の運命を狂わせたという罪を一生負いながら、俺はこの幻想郷で生き続けよう」

夜見がそう言うとき紫は幽々子に声をかけた。

紫「幽々子、もう一度よ」

幽々子「え?で、でも、あの外来人の能力は…:

紫「いいから、もう一度よ」

幽々子「…え、ええ、わかったわ」

そう言つて幽々子は少し戸惑いながらも紫の作った裂け目の中に入ると紫は弾幕を夜見の周囲に隙間無く展開してきた。

しかし夜見は四方八方から迫り来る弾幕を全て夜刀だけで斬り落とし始めた。そしてその光景を見た紫はさつき程とは打つて変わった夜見の動きに驚いていた。

紫(さつきとは違つて一切の無駄の無い動きをしている!?あいつは私の弾幕がどこから来るか把握しているの!?)

その夜見の動きはまるで紫の弾幕がどこから来るのか全て把握をしているような動きをしていたのだ。すると夜見は何を思ったのか、夜刀を納めて自分の靈力を全方位に放つと夜見を中心に風が吹き荒れた。

夜見「邪魔だ」

そして夜見は手を上に挙げて指をパチンツと鳴らすと夜見の周りの弾幕が一瞬にして消え去つた。その光景に紫は驚きを隠せなかつた。

紫「なっ?!なんで弾幕が!?!」

紫が驚きのあまりにそう言葉を漏らすと夜見はどうやって弾幕を消したのかを説明

した。

夜見「簡単な話だ。紫さんの弾幕は妖力によって生成されている、その弾幕に俺の生を操る能力を乗せた霊力を放って妖力を崩したただけだ」

夜見がそう言うのと紫は夜見の能力で、どんなことが出来るかを把握した。

紫（と言うことはつまり、あいつは生命と繋がり深い霊力や妖力に干渉が出来るってこと!?随分と厄介な能力ね!）

そして紫は夜見を睨んで殺気を放つと夜見の意識は紫の方に向き、そして警戒をした。その時に紫は先程と同じように夜見の背後に裂け目を作った。

紫（今よ、幽々子!）

幽々子（わかったわ、紫!）

そして裂け目の中から幽々子は上半身だけを出して夜見の背中に触れようとした瞬間、夜見は後ろを見ないで軽く手で幽々子の手を払い除けた。すると夜見は後ろに振り返ることもせずに幽々子にこう言った。

夜見「2度も同じ手が通用するとも思ったのか?」

紫「くっ!幽々子、一度戻りなさい!」

幽々子「ええ、わかったわ!」

そして幽々子は裂け目の中に戻ると紫の隣に裂け目が作られ、その中から幽々子が出



てきた。すると紫は幽々子にこう言った。

紫「おそらくあいつには多くの死を与えないと効果を示さないわ　幽々子、出来るかしら？」

紫がそう言うのと幽々子は大きく頷いた。

幽々子「ええ、任せて！」

すると幽々子は両手を夜見の方へ向けると手元から大量の蝶の形をした白い弾幕が現れ、その弾幕が夜見の方へと向かっていった。しかしこれでは紫の弾幕の二の舞になる筈なのだが紫にはある考えがあった。

紫（あの外来人は幽々子の手を払い除けた、つまり生を操る能力といっても幽々子の能力を打ち消すことは出来ないということ！）

夜見（あの弾幕、死の気を感じるな…　あんな大量に食らったら流石に能力を使って復活してもまずいだろうが…）

そう思った夜見はその大量の蝶の弾幕に手のひらを向けると前方に靈力を放って風が吹き荒れた。そして夜見がその手を思いつき握ると…

パアンツ

紫「えっ!？」

幽々子「嘘でしょ!？」

なんと夜見に向けられた弾幕が一斉に破裂して全て消え去ったのだ。すると夜見は手をゆつくりと開きながらこんなことを言った。

夜見「当たる前に俺の能力で死の気を相殺すれば何も問題はない」

そう言つて夜見は何もなかったかのように手をゆつくりと下ろした。またしても夜見を殺すことが出来ずに焦つた紫は急かすように幽々子に聞いた。

紫「幽々子、他に手は無いの!？」

幽々子「そ、それなら! さつきよりも、もっと多い弾幕を全力で放てば!」

そう言つて幽々子は再び蝶の形をした弾幕を放ってきたが、その量は視界に収まりきらないほどだった。その量を見た夜見は再び靈力を放つて全ての弾幕を消すのは無理だと思つたのか、夜見は一枚のスペルカードを取り出した。

夜見「賭符 J A C K P O T」

そして夜見がスペルカードを発動させると血の銃と、夜見から溢れ出ていた靈気によつて出来た白い銃が夜見の背後に現れた。その銃の数は前回の異変の時よりも多い、777、777丁の銃だった。

すると夜見は再び蝶の形をした弾幕に手のひらを向けると一言だけ発して弾幕を放つた。

夜見「発射」

そうやって夜見の作った血の銃と霊気によって出来た白い銃から白く輝く弾幕が放たれると次々と蝶の形をした弾幕を撃ち消していった。そしてすべての銃が弾幕を撃ち切る頃には蝶の形をした弾幕は跡形も無く消えていた。

幽々子「う、嘘……」

幽々子は自分が全力で放った無数の弾幕が全て目の前で掻き消された光景を見せられ唖然としていた。しかし紫は諦めまいと再び幽々子に声をかけた。

紫「幽々子！私が時間を稼ぐから、あの手段でいくわよ！」

しかし幽々子は紫に自信無さげな声でこう言った。

幽々子「で、でも……その作戦も、もしかしたら……」

幽々子はこの時点で既に夜見にどんな作戦でも殺せないことがわかっていた。しかしそれは紫も一緒だったが次の作戦は絶対にうまくいくと自分に言い聞かせ、幽々子に向かつて言った。

紫「幽々子は幻想郷がどうなってもいいって言うの!?! 次の作戦は絶対にうまくいくわ、やるわよ！」

幽々子「……ええ、わかったわ」

そうやって幽々子はしぶしぶといった感じで自分の手のひらを合わせると手の隙間から光が溢れ出てきた。すると紫は夜見に向かつてスペルカードを発動させた。

紫「「結界 生と死の境界」！」

そして紫はスペルカードを発動させると紫を中心に弧を描くように弾幕が放たれたのだが、その弾幕は妙に密度が他のスペルカードに比べてとても低かった。それを不思議に思いながら夜見はその弾幕を避けているとどんどんと弾幕の密度が濃くなってきた。

夜見（面倒だな それなら…）

すると夜見は避けるのをやめて自分の前に靈力で壁を作るとその壁に触れた弾幕は妖力を乱されてどんどんと消されていった。そのような状況がしばらく続いていると紫は後ろを振り返って幽々子に聞いた。

紫「もういいかしら!？」

幽々子「ええ、もう大丈夫よ」

すると夜見は弾幕が邪魔で見えていなかったが幽々子の手の隙間から溢れ出ている光はいつの間にかとてつもない量になっていた。そして幽々子が手のひらをゆつくりと離すと10mは軽く越える巨大な白い蝶が現れて夜見に向かって羽ばたき始めた。

夜見（死の気を最大まで集めて作ったところか ならこのスペルカードで…）

すると夜見は靈力の壁を消すとスペルカード「斬弾 弐斬撃」を取り出したのだが、そのスペルカードは淡い白色の光を放っており夜見はこう宣言して発動させた。

夜見 「「次元斬じげんざん 無限の斬撃」」

そしてスペルカードを発動させた夜見は夜刀に右手を添えて居合の構えで刀を少し鞘から引き抜くとすぐに刀を納めた。すると次の瞬間に幽々子の放った巨大な白い蝶の弾幕の羽が斬り刻まれた。

紫 「こ、これも効かないっていうの!？」

幽々子 「そんな… どうやって…?」

あの時夜見はスペルカードを発動させると刀を目に見えないスピードで刀を振って斬撃を無数に放って蝶の羽を斬り刻んだのだ。

しかし蝶はバランスを崩して夜見に向かって墜落していったのだがその蝶の頭を夜見は回り蹴りをして蝶の体を粉々に砕き、蝶の体は白く輝く小さな粒になって空気中に散って消えた。

夜見 「どうした? もう終わりなのか?」

夜見がそう言うのと紫は拳を握って震えさせながら幽々子に向かって覚悟を決めたように言った。

紫 「幽々子、もうあの手しか方法は無いわ やるわよ」

幽々子 「紫… でも、あの手は絶対に使わないって…」

紫 「責任は、ちゃんと取るわ だからお願いよ幽々子 これで終わりだから…」

幽々子「……わかったわ、紫」

すると幽々子は手のひらを合わせて再びあの大きな蝶の弾幕を作り始めた。そして紫は幽々子が弾幕を作り終えるまでの時間稼ぎとしてスペルカードを取り出した。

紫（本当はこんな手は使ったらいけないのはわかってる。でも、こうでもしないとあいつは殺せない！）

そして紫は意を決してスペルカードを発動させた。

紫「紫奥義 弾幕結界」！

すると夜見を中心に弾幕が囲むように配置され、その弾幕のドームが何重にも作られた。そして内側の弾幕からどんどんと夜見に迫ってきた。

夜見（……また同じ手？ 一体何がしたいんだ？）

そして夜見は自分の周りを霊力の壁で囲むと迫ってきた弾幕は霊力の壁によって妖力を乱されて消えていった。しばらく夜見は周囲の弾幕が消えるまで待ち、周囲の弾幕が消えた所で霊力の壁を崩すと、どうやら幽々子は弾幕を作り終えた様子だった。

幽々子「くっ！ 紫！ 出来たわよ！」

紫「いいわよ！ やって！」

そして幽々子が手を離すと白い大きな蝶の弾幕が夜見に目掛けてとんでもない速度で突っ込んできた。しかし夜見はその蝶の弾幕を霊力で纏った拳で全力で殴り飛ばし

たのだが次の瞬間、その蝶の弾幕は分散して何百匹もの白い蝶の弾幕となり先程と同じ速さで突っ込んできた。

夜見（なるほど……だがこのスペルカードで……）

そして夜見は分散した無数の蝶の弾幕が全てこちらに向かってきたところを一網打尽にしようと思つたのだが、何故か大半の蝶の弾幕が夜見の後ろへ飛んでいった。

夜見（何処に行くんだ？）

そして夜見が後ろを振り向くとその蝶の弾幕は大きく広がって何処かへ飛んでいこうとしていた。すると夜見はそこで蝶の弾幕には目が無いことに気がついた。

夜見（ああ、目が無いから見えな……はっ！まさか！）

すると大きく広がった蝶の弾幕の中で、こいしの近くを通つた蝶の弾幕は急に方向転換してこいしに突っ込み始めた。そう、この蝶の弾幕は目が見えないせいで近くの生きている者の生気を察知して無差別に殺しにかかるのだ。

夜見「ふざけんじゃねえぞ！この害虫が！」

すると夜見はこいしの方に手のひらを向けてこいしの周りを真つ先に靈力の壁で囲み、次に自分を靈力の壁で囲んで死の気を持つている蝶の弾幕を相殺しようとしたのだが蝶の弾幕は消えずに靈力の壁を突き破ろうと頭を突っ込んで靈力の壁を破ろうとしていた。

夜見（目を失った代償として耐久力と威力、速度を底上げしたってことか!? しかもこいしさんに向かわなかったあの害虫が冥界を出たら大変なことになる!）

すると夜見は自分の周りを囲んでいる霊力の壁に更に霊力を送り込むと壁の外側が内部の圧に耐えられなくなつて爆発を起こした。

そして周りから蝶の弾幕を引き離した夜見はスペルカード「降符 ブラックレイン」を取り出すと、そのスペルカードも「斬弾 弐斬撃」と同様に淡い白色に輝いており、こう宣言して発動させた。

夜見「壁符 ブラックボックス!」

夜見がスペルカードを発動させると冥界の外に向かっている蝶の弾幕の前に黒い弾幕がまるで壁を作るかのように弾幕の雨が降つて道を阻むと、その黒い弾幕の壁は蝶の弾幕を全て囲むように四角い箱へと形を変えて蝶の弾幕を閉じ込めた。

そして夜見は走つてこいしの元に向かおうとすると、後ろから紫と幽々子が弾幕を飛ばしてくるが夜見はその弾幕を避けながら向かった。

幽々子「紫! 当たらないわよ!」

紫「いいから攻撃を続けなさい! あの蝶が1匹でも外来人に触れられる隙を作ればいいのよ!」

そして夜見がこいしの近くまで来ると蝶の弾幕は霊力の壁にかなりのヒビを入れて



いたのだが、突き破るのを諦めると夜見に向かって突っ込んできた。しかし夜見は夜刀を引き抜くと紫と幽々子の弾幕を避けながら蝶の弾幕を1匹ずつ斬り落とし始めた。

紫「幽々子、スペルカードで隙を作るわよ!」「人間と妖怪の境界!」

幽々子「わかったわ!」「桜符 完全なる黒染の桜ー開花ー!」

そして2人はスペルカードを発動させると夜見の周りには避けられる隙間のない弾幕が展開された。そんな中で夜見はこいしに危害が加わらないようにするために蝶の弾幕を斬り落とししていたのだが、夜見の背中に弾幕が直撃すると蝶の弾幕が数匹夜見の腹に頭を突っ込んで体内に入ってしまった。

ドクンッ

夜見「ぐっ!?ぶはっ!」

すると夜見は幽々子に背中を触られた時のように口から血を大量に吐いた。そして夜見の足が一瞬ふらついたが踏ん張ってなんとか立って、能力を使いなんとか死を免れ意識をしっかりと持ちながら再び蝶の弾幕を斬り落とし始めた。

夜見（これで最後の1匹!）

そして夜見はこいしの周りにいた蝶の弾幕を全て斬り落としたのだが、紫と幽々子のいる方向を見ると最初に夜見の周りにいた蝶の弾幕が再び向かってきていた。

夜見（流石にまずいな…あの害虫だけならまだしも、周りの弾幕を対処しながらな

なんて不可能だ　しかもスペルカードを発動しながら霊力の壁を維持し続けるのもそろそろ限界……　せめて、せめてあの害虫だけに集中できれば！

そして夜見は周りの弾幕に気を使わないで蝶の弾幕だけに集中するにはどうすればいいか考えていると、こいしの声が微かに聞こえた。

こいし「「サブタレイニアアンローズ」」

すると次の瞬間、夜見の周りに赤い薔薇と青い薔薇が展開されてあらゆる方向に回りだし、周りの弾幕を次々と相殺し始めた。

幽々子「なんで!?!あの薔薇は何!?!」

紫「スペルカード!?!一体誰が!?!」

紫と幽々子が驚いているなか夜見はこいしの方を見てみると、気絶しているこいしの手にはスペルカードが力強く握られていた。

夜見（……こいしさん、意識を失ってるままなのに俺を守るためにスペルカードを発動させてくれたんだな　ありがとう、お陰であの害虫だけに集中できる!）

そして夜見が夜刀を構えると薔薇の間をすり抜けて蝶の弾幕が向かってきた。しかし夜見はその蝶の弾幕を一匹ずつ確実に斬り落とし、全ての蝶の弾幕を斬り落とした頃には紫と幽々子のスペルカードは時間切れでスペルカードが解除され、こいしのスペルカードはまだ発動していた。

夜見「こいしさん、ありがとう もう大丈夫だよ」

夜見が笑顔でそう言うときいしの顔が一瞬だけ笑ったように見えた。そしてこいしのスペルカードが解除されると同時に霊力の壁は崩れ、夜見は後ろに振り返って浮かんでいる黒い箱に手のひらを向けた。

夜見「俺のせいで幻想郷の誰かが死ぬ必要なんてーつもない」

そして夜見が手を握ると黒い箱はどんどん小さくなつて中の蝶の弾幕がどんどんと潰されていき、全ての蝶の弾幕が潰れた所で夜見がスペルカードを解除すると白い粒子がサラサラと地面に落ちた。

幽々子「う、嘘でしょ？もうあの外来人を倒す手段なんて… もう何も…」

紫「何くよくよしてるのよ、幽々子！あの外来人を殺さなければ幻想郷を救えないのよ！」

幽々子「で、でも…」「でもじゃない！幻想郷を守るためにあの外来人を意地でも殺すのよ！」

そして夜見は紫と幽々子の方に向き直り血の翼を作り出してゆつくりと羽ばたいて向かうと紫と幽々子は弾幕を飛ばしてくるが夜見はそれを避けながら淡い白色の光を放つスペルカード「撃符 ファイブショット」をこう宣言して発動させた。

夜見「終撃符 シックスショット」

スperlカードを発動されると夜見の手には靈力で出来た白いコルト・パイソンが現れ、そのコルト・パイソンを夜見は幽々子に向けて5発の弾幕を放った。

紫「幽々子！私が弾幕を放つてるから今は避けて！」

幽々子「ええ！わかつたわ！」

すると幽々子は紫に言われた通りに夜見の放った5発の弾幕を避けたかと思いきや、弾幕はすぐさまUターンしてきて幽々子の背中に5発全て命中すると幽々子は前に吹き飛ばされた。

幽々子「きやあ！」

紫「まずい！幽々子、すぐに避けて！」

そして幽々子が吹き飛ばされて体勢を立て直したがそこは夜見のすぐ目の前だった。すると夜見は銃口を幽々子の眉間に向けると幽々子に一瞬の隙与えないまま、こう言いながら容赦なく引き金を引いた。

夜見「これが幽々子さんの罪の代償だ」

そして最後の6発目が幽々子の眉間に当たると幽々子はすぐに気絶して地面へと落ちていき、幽々子は地面へ仰向けになって倒れた。

紫「幽々子！しつかりして！」

すると夜見は紫が幽々子を心配して叫んでいるの尻目にコルト・パイソンを分解して

白紙のスペルカードを3枚取り出してスペルカードを作り出すと、その内の1枚を発動させた。

夜見「罪符 サブタレイニアンギルティ 集の刑」

夜見がスペルカードが発動すると球体状に茨が紫の周りをまんべんなく囲み、茨の内側の方に黒い薔薇の花が咲いたかと思うとその薔薇はすぐに散って花びらが紫に襲いかかってくる。

紫「こんな弾幕！」

すると紫は薔薇の花びらの弾幕を打ち消そうと弾幕を放って相殺をしようとしたのだが……

ドオオオオオオン

その薔薇の花びらの弾幕は紫の弾幕に触れた瞬間に爆発を起こし、紫を吹き飛ばした。

紫「なっ!？」

そして吹き飛ばされた紫はなんとか空中で体勢を立て直して宙に浮き始めようとしたのだが、背中に薔薇の花びらの弾幕が触れた瞬間に再び爆発を起こした。

ドオオオオオオン

紫「かはっ!?!くっ!？」

爆発に巻き込まれて吹き飛ばされた紫は痛みにも耐えながらも目の前の空間に裂け目を作り出して茨の中から脱出しようとしたのだが、裂け目の片方のリボンが打ち砕かれて裂け目が消えた。

紫「え!?!なんで!?!」

そして紫は体勢を立て直して再び目の前に裂け目を作り出したのだが、その裂け目も片方のリボンが打ち砕かれて消えてしまった。

紫「な、なんで…?」

夜見「無駄だ」

紫が目の前で起きていることが理解できないでいる中で夜見がそう言うのと、紫は夜見の方を向いて薔薇の花びらの弾幕を避けながら問いかけた。

紫「あなた、一体何をしたの!?!答えなさい!」

夜見「簡単な話だ。その裂け目を作るのは紫さんの能力、つまりは妖力で作り出している。そこまで言えばわかるだろ?」

紫「なっ!?!まさか私の裂け目の妖力を乱して!?!」

夜見「ああ、その通りだ。そして紫さんの逃げ場は、もうどこにも無い」

そして夜見は茨の球体に手のひらを向けてゆつくりと握り始めるとその動きに合わせて茨の球体の大きさも小さくなり始めた。紫はこの逃げられない状況を見て夜見に

こう叫んだ。

紫「こんなのはルール違反よ！弾幕ごっこでは避けられないスペルカードは使ってはいけないのよ！」

すると夜見は紫の様子を不思議に思いながらこう言った。

夜見「・・・紫さんは何を言ってるんだ？この勝負、弾幕勝負のルールを提示したのは紫さんだろ？」

夜見がそう言うところまで紫は思い出した。自分は弾幕ごっこでは無く、夜見の生死を賭けた弾幕勝負を挑んだことを。

つまり夜見が今行っている弾幕を回避出来ない状況は弾幕勝負のルール違反では無いのだ。

夜見「そもそも自分で俺が避けられない弾幕を放つたのを忘れたか？自分で提示したルールが仇となったな、紫さん」

そして紫はどんどん小さくなっていく茨の球体を見て焦りながら早口になって夜見に問いかけた。

紫「くっつ！あなたは、この幻想郷がどうなってもいいって言うの!？」

紫がそう言うのと夜見はゆっくりと口を開けた。

夜見「だから俺は、1人で罪を一生負うことにしたんだ」

紫「それってどうい」「もう終わりにしよう、紫さん」

そうやって夜見が手を握ると茨の球体は紫を中心に爆発を起こし、紫は地面に仰向けに落ちていった。

そして夜見はこいしの方を見て安全だったことを確認すると夜見は笑みを浮かべた。しかし夜見はフツと意識を失い、血の翼が消えてそのまま地面へと落ちていった。



## 第34話 幻想郷に来た理由

夜見「うっ、ん？」

夜見が意識を取り戻して目を開けるとそこには知らない天井と自分の顔を覗き込んでいる少女2人がいた。

片方は茶髪のショートカットで緑色のナイトキャップを被っており頭からは黒い猫耳、腰の辺りからは猫の黒い尻尾が2本生えていた。服装は首元に白いリボンが付いている赤と白のワンピースを着ていた。

そしてもう片方は金髪のショートボブで白い2つの尖りがあるナイトキャップを被っており腰の辺りから9本の狐の尻尾が生えていた。服装は白い袖の広いロングスカートの付いた法師のような服を着ており、その服の前には首からスカートの裾まである青い前掛けが付いていた。

夜見は目の前の少女達について疑問を持っていると猫耳の少女がもう片方の少女に向かつて話しかけた。

？「あ、らん様！起きましたよ！」

？「ああ、そうだな それじゃあここで待つて様子を見てくれ」

? 「わかりました!」

そして金髪の少女が立ち上がると同時に夜見は上体を上げて周りを見渡すとそこは襖に囲まれた畳が敷いてある和室の部屋だった。どうやら夜見はその和室の部屋の真ん中にある布団でボロボロの制服を着たまま寝ていたようで金髪の少女は襖を開けてどこかに行ってしまった。

夜見(ここは? 確か俺は紫さんと幽々子さんを倒してその後は… あっ!)

そして夜見はあることを思い出すと布団の横にいる猫耳の少女に向かって話しかけた。

夜見「こいしさんは!?!どこにいるんだ!?!」

? 「こいし? それって貴方の横で寝てる覚妖怪のこと?」

そう言つて猫耳の少女は夜見の横の方を指差したので夜見はその先をみると、そこには夜見の入っている布団の中の横で寝ているこいしの姿があった。こいしの枕元には左目の部分が欠けた仮面とマント、夜刀、こいしの帽子が置いてあった。

そして夜見はこいしの無事な姿を見てホッとすると同時にこいしの体を起こし、そのまま抱き締めた。

夜見「良かった… 無事で…」

こいし「ん、うん? あれ? ここは?」

するとこいしは目を覚まして目の前にいる夜見に抱き締められていることに気が付くとこいしは驚いた。

こいし「え!? お、お兄ちゃん!? なんで… どうして!？」

そして夜見は驚いているこいしを少しだけ力を込めて抱き締めると夜見は謝り始めた。

夜見「… こいしさん、ごめん 目の前であんなことになって本当に、ごめん」

夜見がそう言うときこいしは夜見の体を力強く抱き締めながら怒り始めた。

こいし「お兄ちゃんの馬鹿! 私てつきり、お兄ちゃんが死んじやつたかと思ったじゃん! 馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿! … ばかあ、お兄ちゃん」

夜見「… こいしさん」

夜見はこいしに対して申し訳ない気持ちでいっばいで何も言えないでいると、こいしは急に泣き出してしまった。

こいし「うぐつ ひぐつ 良かった… ぐすつ お兄ちゃん、生きてんだ…」

夜見「…」

そして夜見は黙ったままこいしをあやすように頭をゆつくりと撫でていると襖が開いて先程の金髪の少女ともう一人の少女が現れた。

紫「あら、元氣そうで何よりだわ」

それは夜見を殺そうと勝負を仕掛けてきた紫だった。そして夜見は紫の姿を見た瞬間にこいしを抱き締めたまま立ち上がると後ろに下がり、左手でこいしが落ちないように支えながら右手に血の刀を作り出して紫に向けて構えた。

こいし「お兄ちゃん、あの人って……」

こいしはそう言つて夜見の制服をぎゅつと握ると夜見は安心させるようにこいしに向けてこう言つた。

夜見「ああ、わかつてるよ」

夜見とこいしは紫の方を見て警戒をしていると紫はその2人の様子に対してため息をついた。

紫「何よ、酷いわね。そこまで警戒しなくてもいいじゃない」

夜見「……紫さんは俺を殺そうとして、実際に俺は1回殺されたんだ。そんな相手を目の前に警戒をしないとと思うか？」

紫「私は貴方を殺すためにはどんな手段でも使うつて言つたはずよ。だつたら私は貴方が寝ている間に殺してしまふと思うのだけれど？」

夜見「……殺さなかつたから、もう殺す気は無いとでも？」

紫「ええ、そうよ。まあ、信じがたいとは思ふのは仕方ないわね」

そう言つて紫が再びため息をつくとき夜見は警戒を解いて血の刀を空気中へと分解を

した。

こいし「え!?お兄ちゃん!」

紫「あら、信じてくれるのね」

夜見「: ああ、あんなチャンス逃してくれればほど甘くないのは身を持ってわかつたからな」

夜見がそう言うときいしがグイッと制服を引っ張ったのでこいしの方を見ると、こいしは心配そうな顔をしながら聞いてきた。

こいし「お、お兄ちゃん? 本当に大丈夫なの?」

夜見「ああ、大丈夫だ だからそんなに心配するな」

そう言つて夜見がこいしの頭を撫でるとこいしは安心した顔で頷いたので夜見はこいしを降ろしてその場に胡座あくらで座るとこいしは夜見にもたれ掛かるように足の上に乗つてきた。

すると紫と金髪の少女も夜見に合わせてその場に座つて紫が夜見に話しかけた。

紫「それじゃあ、まずは何から話した方がいいかしらね」

夜見「そうだな: 取り敢えずその猫耳の子と紫さんの隣に座っているのは一体誰なんだ?」

夜見がそう言うとき紫は口に手を当ててクスクスと笑うと猫耳の少女と隣の少女に向

かってこう言った。

紫「あら、あなた達、自己紹介はしなかったのかしら」

？「いや、私は紫様に起きたらすぐに呼ぶように言われたので自己紹介なんてしていませんよ」

？「私だつてらん様にここで待っているように言われたので待っていただけです」

？「いや、ちえん お前は私と紫様が来るまでの間に自己紹介をする時間はあつたらう」

紫「そんな時間がどうのこの話はどうでもいいから、自己紹介をしなさい」

？・？「は、はい、わかりました」

そしてまずは金髪の少女から自己紹介をしてきた。

？「私の名前は八雲藍やくもらん 狐の妖怪で、紫様の式なんだ そして私の能力は「式神を操る」能力だ」

そして次に猫耳の少女が自己紹介をしてきた。

？「私の名前は橙ちえん 私は藍様の式で、能力は「妖術を扱う」能力だよ」

夜見「俺は黒夜夜見、そして今俺にもたれ掛かっているのは古明地こいしだ 素性はあまり明かしたくはないから名前だけ言っておく」

紫「さて、自己紹介は終わったわね それじゃあ藍と橙は席を外してくれるかしら？」

藍「わかりました、失礼しました ほら橙、行くぞ」

橙「はい！紫様、失礼しました」

こうしてお互いの自己紹介が終わり、藍と橙が部屋を出ていくと同時に夜見はこいしのお腹辺りに腕を軽く回すと夜見はあることが気になったので紫に声をかけた。

夜見「そういえば紫さん、紫さんの能力は一体なんなんだ？」

紫「あら、わからないかしら？戦いの途中で何回か見たはずよ？」

紫がそう言うのと夜見は紫と幽々子との戦いを思い出し始めた。そして夜見は紫が戦いの中であることをしたのを思い出した。

夜見（そういえば紫さんは空間に裂け目を作ってたな　そして今まで見た色んな能力から考えると・・・）

そして夜見は今までの見てきた能力から、ある1つの答えを導き出した。

夜見「境目を操る能力か？」

紫「惜しいわね、正確には「境界を操る」能力よ　この世にはどんなこと、物に対しても境界があつて私はそれを操ることが出来るのよ」

紫が自分の能力を説明したのだが、そこで夜見はあることに気付いた。

夜見「境界を操ることが出来るんだつたら、俺の境界を消せば良かった話になるんじゃないのか？」

紫「私もそれは試したわ、だけれど貴方には何故か効かなかった　つまり貴方には論理的に証明出来ない何かが備わっているんじゃないかしら？」

夜見「論理的に証明出来ない事……か」

すると夜見の右手が無意識にぎゅつと握られた。そしてその行動を見たこいしは夜見に質問をした。

こいし「お兄ちゃん、何か心当たりがあるの？」

夜見「……ああ、ある　だけどそれを決して話すわけにはいかない」

紫「それは何故かしら？　もしかして貴方の言っていた幻想に何か関係があるのかしら？」

紫がそう夜見に聞くと夜見は真つ直ぐ紫の方を見てこう言った。

夜見「……ああ、そうだ　そしてそれは俺の罪を清算するためでもあるんだ」

紫「罪の清算？　貴方は外の世界では罪人か何かだったのかしら？」

こいし「お兄ちゃん？　お兄ちゃんは悪い人だったの？」

すると紫とこいしの質問に対して夜見は少し俯うつむいてしばらく沈黙していたが、ようやく口を開くと言った。

夜見「……いや、少し気を許して喋りすぎたな　忘れてくれ」

紫「……よっぽど話したくないようね」



夜見「ああ、そうだ」

すると紫は何かを考えるように手を口元にしばらく当てていたが紫は夜見にあることを聞いた。

紫「話したくないのならば別にいいわ その代わりとして、あることを聞いていいかしら？」

夜見「ああ、別に構わないが？」

紫「実は外の世界と幻想郷の時間の進む早さは一緒なのだけれど、貴方が外の世界で最後に過ごした日付を覚えているかしら？」

紫がそう質問すると夜見は外の世界で過ごした最後の日付を思い出し、そして紫に向けてその日付を言った。

夜見「・・・確か俺が最後に外の世界で過ごした日は9月14日だ だが、それがどうしたんだ？」

すると紫は何故か急に目を細めて夜見に疑うような視線を向け始めた。

紫「それは・・・本当かしら？」

夜見「ああ、その筈だが？」

紫「何か証明できるものはあるかしら？」

夜見「証明って言ってもそんなの「日記」・・・こいしさん？」

紫「日記？」

こいしは夜見が話している途中に急に日記と眩くと、夜見はあることを思い出した。

夜見「ああ、そういえばこいしさんは確か日記を書いていたな。それを見れば俺がこの幻想郷に来たのは9月15日だってことが証明できる」

夜見がそう言ってこいしの日記で自分が幻想郷に来た日付を証明出来ることを言うと、紫はこいしの方へ視線を変えた。

紫「こいしっていったわね、まさか庇うために誤魔化してたりなんてことはしてないでしょうね？」

こいし「庇う？なんで本当の事を言ってお兄ちゃんを庇う必要があるの？」

そう言ってこいしが不思議に思つて首をかしげた様子を見た紫は本当に夜見が幻想郷に来た日付は9月15日なのだろうと思つた。すると紫は片手を頭に当てて何かを深く考え込むと視線を夜見の方に戻して再び質問をした。

紫「もう1つ……聞くわ。貴方は異変を起こしている、もしくは関係しているかしら？」

紫にそう聞かれると夜見は何のことか聞いてみることにした。

夜見「異変？何か異変でも起きているのか？」

紫「行方不明者、その言葉を聞いたらわかる筈よ」

夜見（行方不明者…… あるいは咲希さん以外、結局まだ1人も見つからないだったな……）

夜見は未だに人里での行方不明者が咲希以外見つかってないことを思い出している  
と紫はあることを言い始めた。

紫「この幻想郷では人里の人間にどんな理由があろうとも妖怪や外来人が手を出すのは重罪なのよ。そしてその異変の犯人が外の世界から来た貴方だと私は睨んでいるのよ」

紫がそう言ったのだが夜見はこう言つて反論をした。

夜見「じゃあ逆に聞くが、俺がそんな異変を起こしてどんな得がある？」

こいし「仮にそうだったとしてもお兄ちゃんには基本的には仕事をしてすぐに帰ってくるからそんなことをする暇はないよ？」

夜見が反論をし、こいしも夜見の味方につくと紫はしばらく黙っていたがすぐに口を開いた。

紫「……確かに貴方の能力を考えたとしても何の得にもならない、そしてこいしの話からしても時間的にも無理なのね。どうやら異変の犯人はもう1人の外来人のようね」

紫がそう言つて夜見は疑問を抱くとその疑問をすぐに口に出した。

夜見「もう1人の外来人？ どういう事だ？」

紫「……確か私は貴方に言つたわよね、貴方がこの幻想郷に来たのはすぐに気付いたつて」

夜見「ああ、言つたな」

紫「実は外来人が来たのに気付いた日と、その異変が起こつた日は同じなのよ」

紫がそう言うとき紫は再び頭に片手を当てて考え込みながら更に説明を続けた。

紫「この幻想郷と外の世界を隔てる結界、博麗大結界の一部に穴が開いて外来人が1人入つてきたのよ。そしてその外来人が来た日に異変が起こつた、だから私は貴方が犯人だと思つたけれど貴方は既に幻想郷に来ている。つまりはもう1人の外来人がいる訳よ」

夜見「俺は既に幻想郷に来ていた……因みにその外来人が来た日つていうのは？」

紫「9月16日、貴方が幻想郷に来た翌日よ」

夜見（俺が幻想郷に来た翌日に、俺以外にもう1人の外来人が来た……いや、ちよつと待て）

そして夜見が1つおかしいことに気付くと夜見は紫に質問をした。

夜見「紫さん、その話はおかしくないか？だつて紫さんの話だと、もう1人の外来人が来たことには気付いて、俺が来たことには気付けなかつたことになるぞ？」

夜見が質問をすると紫は大きなため息をついてこう返答をした。

紫「ええ、その通りよ 貴方も博麗大結界を通って幻想郷に来ている筈、つまりは博麗大結界に穴が開く筈なのに何故か貴方が来た時には博麗大結界に何も無かった その理由にまったく理解が出来ないのよ」

夜見「どういう事だ？ 外の世界から幻想郷に俺が行くためには結界に穴を開けて通らなければいけない筈、なのにどうして俺はそんなことせずに幻想郷に来ることが出来たんだ？ 一体何が起こっているんだ？」

そして夜見も一体何が起こっているのかを考え始めたのだが、こいしは夜見の方を向くと夜見の頬を急につついてきた。

夜見「ん？ どうしたんだ、こいしさん？」

こいし「お兄ちゃん、私ね、お兄ちゃんと紫さんが戦う前にしてた話、私も聞いてたんだ」

夜見「そうか……それで？」

こいし「それで私思ってたんだけど、お兄ちゃんが幻想郷に来たのはお兄ちゃんの存在が忘れ去られたんじゃないかって、お兄ちゃんに関する何か忘れ去られたから来たんじゃないかなって思うんだけど……どうかな？」

夜見「そっか……こいしさんも真剣に考えてくれたんだな ありがとう」

そう言つて夜見はこいしの頭を撫でるとこいしは嬉しそうな表情を浮かべた。

こいし「えへへ♪私の考え、役に立つかな？」

紫「ええ、大いに役立つわ」

すると紫はこいしの方を見てこいしの考えは役立つと言ってきた。そしてこいしは振り返ると紫に向かってこう言った。

こいし「え？本当に!？」

紫「ええ、その考え方は盲点だったわ　もしかしたら、その方向で調べてみれば何かわかるかもしれないわね」

こいし「やったね、お兄ちゃん！もしかしたらお兄ちゃんが幻想郷に来た理由がわかるかもしれないね！」

夜見「・・・ ああ、そうだな」

そう言つて夜見はこいしの頭を撫で続けているとこいしは夜見におもいつきり抱き付いた。するとこいしは夜見に向かってこう言った。

こいし「お兄ちゃん、そろそろ帰ろう？きつとお姉ちゃん達、心配してると思うから」  
夜見「・・・ そうだな、そろそろ帰ろうか」

紫「あら、もう帰っちゃうのかしら？」

夜見「ああ、そろそろ帰らないと心配をかける相手がいるからな」

そう言つて夜見はこいしの脇に手を引っ掛けて足の上から退かすと夜見は立ち上

がつて布団の枕元にある私物のマントと夜刀を身に付けて仮面は懐にしまった。そしてこいしの帽子は夜見がこいしに優しく被せてあげると、こいしはお礼を言ってきた。

こいし「ありがとう、お兄ちゃん」

夜見「ああ、どういたしまして。さて紫さん、俺達はもう帰るから、帰り道を教えてくれないか？」

紫「いえ、その必要は無いわ」

紫はそう言つて立ち上がると自分の隣の空間に裂け目を作り出した。

紫「このスキマに入れば、あなた達の家のおすぐ目の前に出ることが出来るわよ」

こいし「やった！私が一番乗りー！」

するとこいしはそう言つて一人で裂け目の中へと入つていつてしまった。そして夜見もその裂け目に近付くが、すぐに裂け目には入らずに紫の方を見ると紫は不思議に思つた様子で夜見に言つた。

紫「私、何か迷惑なことをしちやつたかしら？」

夜見「いや、むしろありがたいんだが……何故俺達の帰る場所を知っている？」

紫「ああ、それなら藍が調べてくれたのだけれど……えつと何か、悪かつた……かしら？」

紫がそう言つて少し心配をしたが夜見は黙つて首を横に降つたので紫はそつと胸を

撫で下ろしたが、夜見はあることをもう一つ聞いた。

夜見「それと、さっきのこいしさんの考えだが……そんなことが起こるだなんてあり得るのか？」

夜見がそう聞くと紫は目を瞑って首を横に降って目を開けるとこう言った。

紫「そんなことは普通あり得ないのだけれど、調べてみる価値はあるわ 答えに辿り着くことが出来なかったとしても、もしかしたら何かヒントになるかもしれないしね」

夜見「……そうか、それじゃあ 俺も帰るとする」

紫「ええ、さようなら」

そう言つて夜見は手を振つた紫に見送られながら裂け目の中に入るとそこは地霊殿の目の前だった。そしてすぐ隣にはこいしがいて、辺りを見渡したが先程の裂け目の出口は見当たらなかった。

こいし「お兄ちゃん、少し来るの遅かったけど何かあったの？」

夜見「ああ、少し気になることがあつて聞いただけだ」

こいし「そつか、それじゃあ入ろつか」

夜見「……ああ、そうだな」

そう言つて夜見は目の前にある地霊殿の玄関の扉を開けるとエントランスには、前回の異変から帰つてきた時と同様に燐が笑顔で立っていた。



こいし「お燐、ただいまー」

燐「ええ、こいし様おかえりなさい それと、黒夜さんも」

夜見「… ああ、ただいま」

燐「こいし様、さとり様が心配してたので早く顔を見せに行ってください」

こいし「うん、わかった！」

そう言つてこいしはさとの部屋へと向かつて行つたのだが、燐が夜見に視線を移すと先程の笑顔をスツと消して話しかけてきた。

燐「黒夜さん、今日狐の妖怪が訪ねてきて全部聞いたよ 異変を止めに行つてたんだつてね」

夜見「… 心配、だったか？」

燐「当たり前だよ だつて、黒夜さんが一回死んだことも聞いたんだからね」

夜見「… そうか、すまない」

そして燐は夜見にゆっくりと歩み寄つたので夜見は前回と同じようにピンタをされると思つて目を瞑つたのだが燐は夜見の首に腕を回して抱き付いてきた。

夜見「… 燐さん、どうしたんだ？」

夜見はいつもとは違う様子の燐に動揺しながらもどうしたかと聞くと燐は急に泣きながら怒鳴つてきた。

燐「なんで黒夜さんは、そんなに無茶するんだい!? いつもいっつもあたい達のことを考えて、どうして自分を犠牲にするようなことをするんだい!? あたい達にとつて黒夜さんは、大切な家族の一員なんだよ!」

夜見「… 燐さん」

燐「もう… 無茶はしないで あたい達を心配させないでよ」

そう言つて燐は泣き声を我慢しながら腕に少し力を入れると夜見は片手で燐の頭を撫で始めた。

夜見「… そうか、ありがとう そんなに俺の事を、大切に思つてくれていたんだな」

燐「… もう、勝手にどっかに行かないで」

夜見「ああ、わかつたよ」

そう言つてしばらく夜見は燐のことを撫で続けていたのだが玄関の開く音が聞こえたかと思うと、後ろから急にある人物も夜見の首に腕を回して抱きついてきた。

空「黒夜さん、帰ってきてたんだね」

夜見「… 空さん、ただいま」

空「黒夜さん、本当に生きてたんだね 今日来た妖怪が黒夜さんが死んだつて言つたから私、すごく心配したんだよ?」

夜見「… そうか」

夜見はそう言って空の腕に空いている方の手で優しく触れると空も腕に力を込めてきた。

空「無茶しちや駄目だよ？前に言ったでしょ？みんな黒夜さんの事、大好きなんだから」

夜見「…そう、だったな　ありがとう燐さん、空さん」

そして夜見と燐と空はしばらくその状況でいたのだが、燐が泣き止んで離れると同時に空も夜見から離れた。すると燐は夜見に向かってこう言ってきた。

燐「黒夜さん、さとりに様に会ってきて　さとり様が1番、黒夜さんのことを心配してたからさ」

夜見「ああ、わかったよ」

そして夜見は階段を上がって2階のさとりの部屋の前に着くと、夜見は扉をノックした。

コンコンツ

しかししばらく待っても中から返事が無かったので夜見は扉を開けるとそこには、目に涙を浮かべながらこいしを抱き締めているさとりの姿があった。

さとり「よかった　よかった　無事だったのね、こいし」

こいし「お、お姉ちゃん、苦しいよ　あつ！お兄ちゃん」

さとり「黑夜さん!」

こいしが夜見に気付くとさとりはこいしを離して振り返って夜見を見るとさとりはその場に座り込んで泣き出してしまった。

さとり「ぐすつ 生きてた ひぐつ 本当……に 生きてた うっ」

夜見「……さとりさん、ただいま」

そう言つて夜見はさとりの目の前でしゃがんでさとりの頭を撫でると、さとりはゆっくりと腕を伸ばして夜見を全力で抱き締めた。

さとり「ばかつ、ばかあ 本当に、本当に心配したんですよ? 黑夜さんが死んだって聞いて私、黑夜さんがもう帰ってこないって考えばかり浮かんで、不安で押し潰されそうになつたんですから」

すると夜見はさとりをそつと抱き締めて頭を撫でながらさとりにこう言った。

夜見「……すまない 俺、さとりさん達に言われてようやく気付いたよ 俺はずっと自分を犠牲にするような真似をして心配をかけさせてた でも、もうそんなことはしない 俺はさとりさん達をもう心配させるようなことは絶対にしないよ」

さとり「ぐすつ ひぐつ それが当たり前ですよ、ばかつ ぐすつ」

夜見「ああ、そうだな」

そして夜見はさとりを泣き止ませるためにしばらく抱き締めながら頭を撫でている

とさとりは頭を上げてこちらを見た。

さとり「もう……大丈夫です、黑夜さん ありがとうございます」

夜見「そうか、ほら」

そう言つて夜見がさとりを放すとさとりは夜見からすんなりと離れた。そしてさが扉の方を見て急に驚いた顔をしたので夜見も立ち上がりて扉の方を見てみるとそこにはある人物がいた。

紫「終わつたかしら？ 少し言い忘れてたことがあつたから来たら、覚妖怪が随分と甘えていたから待つていたのだけれど……」

それは裂け目から出てきている紫だった。そしてその姿を見たさとりは慌てていた。

さとり「あ、あなた一体何処から!? だ、誰ですか!？」

紫「そうね、まずは自己紹介をしなきゃ 私は八雲紫、この幻想郷を創つた1人よ」

さとり「え!? 幻想郷を創つた1人なんですか!?! ああ、どうもご丁寧に 私は古明地さと、この地霊殿の主です」

紫「ふふ、そんなに他人行儀じゃなくていいわ 気楽に話していいわよ」

さとり「そ、そうですか? では、そうします」

そしてさとりと紫の自己紹介が終わつたところで夜見は紫に話しかけた。

夜見「それで紫さん、言い忘れてたつて言つてたが一体何をだ?」

紫「ああ、それは貴方が幻想郷に入ったことについてなのだけれど、貴方が博霊大結界を何もせずに通れたつてことは幻想郷に入る条件を満たしたつてことだから幻想郷に残ることは別に構わないつてことよ」

夜見「……だが、それは本来あり得ないことに変わりはないんだよな？」

紫「ええ、そうよ。だから貴方の言つた通り、幻想郷の運命を狂わせてしまう。その事だけはちゃんとわかつているのよ？」

夜見「ああ、わかつてるよ」

紫「それならいいわ、じゃあ私は帰るわね」

そう言つて紫は振り返つて空間に裂け目を作つてその裂け目に入ると紫は裂け目が閉じる前に夜見にあることを言つた。

紫「ああ、それともう1つ。明日のお昼頃に博霊神社で宴会があるそうだから、貴方も行つてみたらどうかしら？」

紫はそう言い残して裂け目は完全に閉じて消えてしまった。するとさとりは夜見にあることを聞いた。

さとり「黒夜さん、明日の宴会に行くんですか？」

夜見「え？ああ、そうだな……あまり賑やかな所は好きではないけれど、一応行くことにするかな」

こいし「お兄ちゃん、宴会に行くの!?! だったら私も「こいし、駄目よ」… え、なんで?  
? お姉ちゃん」

さとり「こいし、1日中帰ってこないで心配をさせた罰として明日は私の仕事の手伝いをしなさい いいわね?」

さとりがそう言うのと夜見はあることに気が付いた。

こいし「えろ!? なんでよ! だったらお兄ちゃんもそうしてよ!」

夜見「なあ、さとりさん、1つ聞いていいか?」

さとり「はい、なんででしょうか?」

夜見「さとりさん、さつき1日中帰ってこなかったって言ったけど、まさか俺とこいしさんは俺が仕事に出掛けた日から1日経ってるってことか?」

さとり「はい、そうですね?」

さとりは不思議そうな様子でそう返答すると夜見もこいしも驚いた。するとさとりはあることに気付いて夜見とこいしに聞いた。

さとり「… もしかして、紫さんは言っただけですか? 私はてっきり言っていたのだと思っていました?」

こいし「聞いてないよ!?! て言うことはお姉ちゃん! 今は何時なの!?!」

さとり「午後の5時くらいよ」

夜見「……まじか、そんなに俺達は寝てたのか」

さとり「それじゃあ、私はそろそろ夕飯の準備をします 黒夜さん、心配させた罰として今日の私の仕事を黒夜さんが済ませるのと、その書類の横に白紙が何枚かあるのでそれに反省文を書いてください それとこいしは明日は私の仕事を手伝いをする事」

そう言ってさとりは部屋を出て行ってキッチンへと向かっていった。するとこいしはどうか罰を無しにしてもらおうとさとりを追いかけていった。

夜見（……まあ、心配をさせたのは本当のことだから、大人しく罰を受けるか）

夜見はそんなことを思いながらさとりと隣、空に心配をかけ、罰を受けることになったが夜見とこいしは無事に地霊殿に帰ることが出来た。



## 第3章 少し変わった日々

## 第35話 異変解決祝いの宴会

夜見（：：随分と賑やかなもんだな）

夜見とこいしが地霊殿に帰ってきた翌日。夜見は今日、桜が咲き乱れる博麗神社で行われている宴会に来ていた。宴会では様々な人達が桜の木の下で酒を飲み交わしながら料理を食べていた。

夜見（レミリアさん達も来てるし、妖夢さん達も来ている：：他にも見たことのない人達もちらほらいるな）

夜見はそんなことを思いながら博麗神社の屋根の上に座って左目の部分が欠けた黒い仮面越しに宴会の様子を眺めていた。そして夜見はしばらくその様子を見ていると空気中の血を集めて耳栓を作り、それを耳に嵌めて<sup>は</sup>周りの音を遮断してマントのフードを深く被った。

夜見（：：紫さんに誘われたから来てみたものの、やっぱり賑やかだったり騒がしいのは好きじゃないな）

そして夜見は空を見上げてゆつくりと進む雲を見上げていたのだが、急に後ろから肩

を叩かれたので振り返るとそこには手に瓶を持った紫が裂け目から出てきており夜見の隣に座った。

すると夜見は血の耳栓を空気中へ分解すると紫は話しかけてきた。

紫「どうしたのかしら？こんな所に1人で 今日とは異変を解決したお祝いの宴会よ、みんなの所に行かないのかしら？」

夜見「・・・いや、別に」

紫「そう？・・・そうだ 貴方はお酒、飲まないのかしら？」

そう言うて紫は空間に裂け目を作つてその中に手を伸ばすと赤い盃を取り出し、その盃に瓶の中のお酒を注いでこちらに差し出してきたが夜見は受け取らなかつた。

夜見「いや、遠慮しておく」

紫「そう？じゃあこれは私が飲んじゃうわね」

紫はそう言うて盃に注いだお酒を飲み干すと再び盃にお酒を注ぎ始めた。そして夜見は紫にあることを聞いた。

夜見「どうなんだ？もう1人の外来人の手掛かりか何かは見つかったか？」

夜見がそう聞くと紫は盃にお酒を注ぐのを止めるとこう返してきた。

紫「いえ、未だに見つかつてないわ そして、貴方が幻想郷にこれた理由もね」

夜見「・・・そうか まあ、すぐには見つからないか」

紫「貴方は幻想郷に来れた理由に何か心当たりとかは無いかしら？どんな些細なことで構わないわ」

「そう言われて夜見は少し考えてみたが、夜見には思い当たることはなかった。

夜見「そう言われてもな……心当たりは無いな」

紫「……そう、これはかなり時間がかかりそうね」

夜見「ああ、そうだな」

そして紫は盃にお酒を注ぐのを再開させて、そのお酒を飲むと紫は目の前に裂け目を作り出した。すると紫は立ち上がって夜見にこう言い残して裂け目へと入っていた。

紫「それじゃあ、私は幽々子と飲んでくるわね、それじゃ」

そしてその裂け目が消えると夜見はその場に残されたのだが次の瞬間、夜見の隣に少女が高速で飛んで来て、その場に立った。

その少女は黒髪やまぶしのセミロングで頭には赤い山伏風の小さな帽子を被っており、その帽子の両端からは赤い紐が垂れ、背中からは黒い翼が生えていた。服装は白い半袖のシャツに黒いミニスカートを着ており、赤い靴を履いていたのだがその靴の土踏まずの部分だけは何故か底が突き出ていた。

するとその少女は夜見に声をかけてきた。

？「あの、すみません、魔理沙さんから聞いたんですけど、貴方が黒夜夜見さんで

すか？」

夜見「……誰だ？」

夜見がそう少女に聞くと、その少女は懐から小さなある紙を取り出してその紙を両手で差し出しながらこう言った。

？「私、新聞記者の射命丸文と申します」  
しゃめいまるあや

そう言われて夜見はその差し出された紙を手に取ろうと目線を上げた瞬間に夜見はその少女が肩からぶら下げているある物が目に入った。

夜見（……カメラ？なんで幻想郷の人が？）

夜見は文が肩からぶら下げている紐の付いたカメラに疑問を抱いたが、とりあえず差し出された紙を手に取るとそれは名刺でその名刺には名前が丁寧にふりがな付きで記載されていた。

夜見「……それで、何の用だ？」

文「ああ、実はですね、魔理沙さんから聞いた話だと黒夜さんは外来人で人里の依頼をこなしながらも異変を解決しているということを知りまして、興味を湧いたので是非本人に直接取材をさせてもらえないかと思ひまして……」

夜見「……取材をして、どうするんだ？」

文「それは勿論、新聞記者ですので新聞の記事にしますよ？」

文がそう言った後、しばらく沈黙が続いていたのだが夜見は口を開くところ言った。

夜見「……じゃあ、断る」

文「ええ!?! な、なんでですか!?!」

文は魔理沙から話を聞いていなかったのか、夜見は素性をあまり知られたくないことを知らなかった様子だった。すると文はこんなことを言ってきた。

文「そこをなんとかお願いできませんか? ほら、貴方の事が伝われば依頼の量が増えたりするかもしれませんよ?」

夜見「……別に、仕事を沢山したいって訳でも無い」

夜見がそう言うのと文はカメラを手に持ち、あることを聞いてきた。

文「で、では、せめて写真だけは撮らせてください」

夜見「……駄目だ」

文「そ、それも駄目なんですか!?! 一体何が嫌なんですか!?!」

夜見「……素性はあまり、明かしたくないんだ」

夜見がそう言うのと文はキョトンとした顔になった。そして夜見はその様子を不思議に思つて声をかけた。

夜見「……どうした?」

文「え? そうだったんですか? なら最初っから言つてくださいよ、私も鬼じゃあり

ませんし、明かしたくないのなら言わなくてもいいですよ♪」

夜見「…そうか」

そして夜見は宴会の様子を見ていたのだが何故か文は夜見の隣に座って夜見の方を横目に見ていた。すると夜見の正面から風が吹き、フードが下がると文はカメラをこちらに構えた。

文「隙あり♪」

カシャツ

そして文のカメラからシャッター音がすると文はカメラを操作して先程の写真をカメラに表示させたのだが、その写真を見て文は不思議そうな顔をしていた。

文「あやや？おかしいですね？」

夜見「…どうした？」

文「え？いやあ、何故か先程撮った写真が真っ黒で何も見えないんですよ。もしかして壊れちゃいましたかね？困りました」

夜見「…」

すると夜見は無言で文の方に向かって手のひらを上にして手を出した。そして文はまさかと思つてカメラを渡した。

文「もしかして、直せるんですか？」

夜見「……」

そして夜見はカメラを構えて宴会の様子を撮影すると文にカメラを返し、文が写真を確認してみると何事も無くしつかりと撮れていた。

文「あやや？ちゃんと撮れてる？」

夜見（普通、何も用が無いのに隣にいたら疑うだろ　一応血でカメラのレンズを覆つていて正解だったな）

実は文が先程夜見の写真を撮る瞬間に夜見は空気中の血でカメラのレンズを覆つて自分が撮られないようにしていたのだ。

そして文は再び夜見にカメラを向けて写真を撮つたのだが結果は先程と同じで、真っ黒な写真が撮れただけだった。

文「ん〜？何なんでしょうかねえ？…仕方無いですね　ここで時間を無駄にする訳にもいきませんし、他の人に取材をしますか」

そう言つて文は立ち上がると屋根から降りて宴会に参加している人に取材をしに回つていった。そして夜見はフードを深く被り直し、しばらくその様子を見ていたが突然隣から声が聞こえた。

？「いやあ、危なかつたね」

夜見「なっ!？」

すると夜見は驚いて声を漏らすと距離を取って夜刀をいつでも引き抜けるように構えたのだが、その人物は先程の夜見のように宴会の様子を見ながら座っていた。

その人物は夜見の被っているマントとは正反対の白いマントに身を包んでおり姿が見えなかったが、マントの端の方から白い鞆がはみ出ていた。

そして何より夜見が驚いたのはその人物から全く気配が感じられなかったことだった。その人物はまるで屋根の瓦のように元々そこにあつたかのようにいつの間にか夜見の隣にいて、姿が見えているのにその人物がそこにはいないという感覚を感じた。

するとその人物はこちらを見向きもしないで話しかけてきた。

？「まあまあ、そんなに警戒しないで 君も同じような姿をしているでしょ？」

その人物は声からして少女のように思えた。そして夜見は夜刀から手を放してその人物の隣に座ると夜見は質問をした。

夜見「……誰だ？」

？「誰って？ん、そうだなあ 俺に名乗るような名前は無いし、君が俺に名前を付けてくれない？」

夜見（……名前か 俺の着ている正反対の色のマントを着てるし……）

そして夜見はある一つの名前を言った。

夜見「白明月夜<sup>はくめいづくよ</sup>……なんてどうだ？」



？「白明月夜か…… 気に入ったよ じゃあ俺は、白明月夜って名乗ることにするよ」  
そう言っつて月夜は満足そうな声を出し、そして月夜は質問をしてきた。

月夜「それで？君の名前は？」

夜見「…… 黒夜夜見」

月夜「へえ…… いい名前だね もしかして、俺の名前っつて君の名前の逆を表したの？」

夜見「…… さあな」

月夜「まあ、いいか それと君の刀、少し見せてもらってもいいかな？」

月夜がそう言っつと夜見はベルトに挿してある夜刀を鞘ごと引き抜いて月夜にこう言  
いながら差し出した。

夜見「…… 別に構わないが、月夜さんの持つている刀も見せてくれないか？」

月夜「もちろんいいよ」

そしてお互いの刀を交換したのだが、月夜の持つていた刀は夜刀とは反対の色で柄か  
ら鞘まで全部真っ白だった。しかしその刀は夜刀よりも40cmほど長く、全長は12  
0cm程だった。

すると夜見はその刀を引き抜いて眺めていると、月夜はこちらの様子を見てこんなこ  
とを言っつた。

月夜「へえ、引き抜けるんだ その刀は「白刀<sup>はくとう</sup> 月光」っつていつて、とても善良な心

を持つていないと引き抜けないらしいよ」

夜見（善良な心：：か）

夜見はそう考えながら刀身も白い白刀をしばらく眺めた後に月夜の方を見てみると、月夜は夜刀を軽々と抜いていた。

夜見（：：確か妖夢さんの言った話だと、強大な邪な心を持つていないと引き抜けない筈：：）

そして夜見は更に警戒しながら月夜の方を見ていると月夜は夜刀を眺めながらこう言った。

月夜「だから、そんなに警戒しないでって 別に危害を与えようって訳でも無いし、この刀を盗む気もないんだから」

月夜にそう言われた夜見は警戒は解かずとも少し警戒を外すと夜見は白刀を鞘に戻して月夜に返すために差し出すと、月夜も夜刀を鞘にしまってこちらに返すために差し出した。

月夜「君の刀、随分と綺麗だね 何て言う名前なの？」

夜見「「夜刀 闇夜」だ」

月夜「へえ、君にピッタリな刀だね」

そして夜見と月夜がお互いに自分の刀を返してもらって夜見はベルトに夜刀を挿し

たが、月夜はその刀を手を持ったまま立ち上がった。

月夜「さてと、俺はそろそろ帰るかな それじゃあ、またどこかでね」

そう言つて月夜は後ろに振り返つて屋根から飛び降りて何処かへ行つてしまった。そして夜見は月夜が何故夜刀を普通に抜くことが出来たのかを考えていたのだが、夜見の下の屋根にいきなり裂け目ができたかと思うと夜見はその裂け目の中に落ちてしまった。

そして夜見は空中で体勢を整えて地面に着地をすると、そこは桜の木の所で紫、幽々子、妖夢のいる所だった。

幽々子「ありがとうね、紫」

紫「いいのよ、気にしないで」

妖夢「・・・」

紫と幽々子は酒を交わしながら楽しく談笑し、料理を食べていたが妖夢はその場で正座でただ座つていた。そして夜見は訳がわからないでいると幽々子が声をかけてきた。

幽々子「まあまあ、そこで立ってないで座つたらどうかしら？」

そう幽々子に言われた夜見は取り敢えずその場に座ると夜見は紫の方を見て質問をした。

夜見「何故、俺をこんな所に？」

そう言つて夜見は質問したのだが、何故かその質問に幽々子が答えた。

幽々子「それはね、妖夢が少しお話ししたいって言つてたから来てもらったのよ」

夜見「妖夢さんが？」

妖夢「..」

妖夢は何故か黙つていたが、夜見は体を動かして妖夢の方を向くと妖夢も体を動かして夜見の方に向いた。そして夜見は妖夢に話しかけようとした瞬間に妖夢が口を開いた。

妖夢「あの、この前は、色々と... ありましたね」

夜見「ああ、そうだったな」

妖夢「それで、その、貴方が勝つて、あの... 見事でした」

夜見「ああ、それで？」

妖夢「ああ、えつとですね、その... ですね...」

妖夢がもしもじと話していて中々話が進まないでいると幽々子がそんな妖夢の様子を見てこんなことを言つた。

幽々子「妖夢、何をそんなに緊張してるのよ」

幽々子がそう言つると妖夢は慌てているような様子で幽々子の方を向いた。

妖夢「なっ!? き、緊張なんかしていません！」

幽々子「そんな風にずっと話してたら、黒夜さんも何が言いたいのかわからないわよ  
〜?」

妖夢「ちや、ちゃんと話すので大丈夫ですよ!」

そう言つて妖夢は夜見の方に向き直り、目を閉じて大きく深呼吸を1回すると目を開いた。

妖夢「黒夜さん、貴方のあの剣術での戦い方は私の知らないとても素晴らしいものでした。それでですね、黒夜さんの剣術を学びたいのですが、どうか教えてくれないでしょうか?」

妖夢が真つ直ぐな目でこちらを見て剣術を教えて欲しいといつてきたのだが、夜見は困っている様子だった。

夜見「いや、そう言われてもなあ。俺はただ状況に合わせて躲わしたり刀を振つてたわけで、別に剣術じゃないんだよなあ…」

しかし妖夢が真つ直ぐな目で夜見の方を見ているので夜見もあの戦い方は剣術では無いとは言いいくないのだが、言わない訳にもいかなないので夜見は妖夢に正直に話すことにした。

夜見「妖夢さん、悪いが俺は剣術を扱つて戦つていなかっただ。俺はただ状況に合わせて躲わしたり、刀を振つてただけなんだ」

妖夢「そ、そうだったんですか……で、でも！黒夜さんの戦い方は素晴らしかったです。なのでどうか私に何か足りないものを教えてくれないでしょうか？」

夜見「足りないもの……か」

そして夜見はしばらく考え込んでいると夜見はある提案をした。

夜見「妖夢さん、俺が教えるっていうのは少し難しいかもしれないけれど、練習相手なら多分出来ると思う」

妖夢「ほ、本当ですか!?それだけでも十分です!」

夜見「ただ、1つだけ条件がある」

妖夢「え?条件……ですか?」

妖夢は夜見の言った条件という言葉に少し戸惑ったが夜見は条件について説明を始めた。

夜見「ああ、実は俺は刀の扱い方をよく知らないんだ。だから妖夢さんは俺に刀について教えてくれないか?」

妖夢「もちろんいいですよ!後……もし黒夜さんがよろしければ、明日にでも練習相手になってくれませんか?」

夜見「明日……か」

妖夢「な、何か用事があるなら別に断っても構いませんよ?」

夜見「：． いや、特に用事もないから大丈夫だ」

妖夢「ほ、本当ですか!?!で、では明日、白玉楼で練習相手になってください!」

夜見「ああ、わかったよ」

夜見がそう言うのと妖夢はとても嬉しそうな様子だった。そしてその妖夢の様子を見ていた紫と幽々子は微笑ましいのか、楽しそうにその様子を見ていた。

そして夜見がその場から立ち去ろうと立ち上がって後ろに振り返ると目の前に咲夜が立っていた。

夜見「ああ、咲夜さん どうかしたのか?」

咲夜「お嬢様が黒夜様にお話があると申していたので、お迎えに上がりました」

夜見「そうか それじゃあ、レミリアさんのいる場所まで案内を頼む」

咲夜「ええ、それでは付いてきてください」

そして夜見は咲夜の後を付いていくとレミリア、美鈴、フランドール、咲希が桜の木の下の影で談笑しながら料理を食べていた。するとフランドールと咲希が夜見に声をかけた。

咲希「あ、黒夜だ やっほー」

フランドール「あ、黒夜 なんか大変だったらしいね」

夜見「ああ、色々とな」

そして咲夜はレミリアの隣に座り、夜見はレミリアの正面に座るとレミリアが夜見に話しかけた。

レミリア「異変の話は隙間の妖怪から聞いたわ　なんでも、1回死んだとか聞いたわよ。」

レミリアがそう言うのと咲夜、美鈴、フランドール、咲希は驚いた様子だったが、夜見は特に気にしないでレミリアと話をした。

夜見「ああ、そうだ　まあそれは置いといて、咲夜さんから話があるって聞いたが一体何の用だ？」

レミリア「用があるのは私じゃなくて、パチエよ」

夜見「ああ、なるほど　伝言って事か」

レミリア「話が早くて助かるわ　それで伝言なのだけれど、明日にでも試したいことがあるらしいわ　だから明日、紅魔館に来てくれないかしら？」

レミリアがそう言ったのだが夜見は先程妖夢の練習相手になることを約束してしまつたので、夜見は明日は紅魔館には行けないことを話すことにした。

夜見「レミリアさん、すまないが明日は予定があるから紅魔館には行けないんだ」

レミリア「あら、そう　それなら明後日ならどうかしら？」

夜見「明後日なら予定は無いから大丈夫だ」



レミリア「そう、ならパチエには明後日に来るって伝えておくわ それと、少し聞きたいことがあるのだけれどいいかしら？」

夜見「ああ、なんだ？」

レミリア「まず1つ目ののだけれど、貴方は自分の本当の能力がわかったらしいわね？その能力は一体どんな能力なのかしら？」

レミリアがそう言うと、美鈴、フランドール、咲希が反応した。

美鈴「え？確か黒夜さんの能力って血を操る能力では？」

フランドール「へえ、違う能力だったんだね」

咲希「一体、どんな能力なの？」

それぞれが思ったことを口に出していると夜見はレミリアに自分の本当の能力を言った。

夜見「俺の本当の能力は「生を操る」能力だ それで1回殺されたが、生き返ることが出来たんだ」

レミリア「へえ、他に具体的にはどんな何が出来るのかしら？」

夜見「ああ、そうだな 例えば… ちよつと美鈴さん、すまないが腕を掴んでいいか？」

美鈴「え？ええ、構いませんよ」

そして夜見は美鈴の腕を掴むと夜見は美鈴にあることを頼んだ。

夜見「よし、それじゃあ気を操って手のひらに気を集めてみてくれ」

美鈴「ええ、わかりました」

すると美鈴は能力で手のひらに気を集めようとしたのだが美鈴は何故か困っている様子だった。そしてレミリア達は何が起こっているのかさっぱりわからないのでレミリアは美鈴に何を困っているかを聞いた。

レミリア「美鈴、一体どうしたのかしら？」

美鈴「お嬢様、実は何故か自分の気を操ることが出来ないんです」

レミリア「・・・どういふことかしら？」

レミリアはそう言っつて視線を夜見に向けると夜見は何をしたのかを答えた。

夜見「ああ、実は美鈴さんの能力を使う時に使われる微量の妖力を俺の能力で乱して能力を使えない状況にしているんだ。ほら、俺が手を放せば出来るだろ？」

そう言っつて夜見が美鈴の腕から手を放すと美鈴の手のひらに気が集まって小さな白い玉が浮かんだ。

美鈴「本当ですね、黒夜さんが手を放したらいつも通りに出来ました」

レミリア「なるほど、つまり黒夜は生命に関わりがあるものに関しては何んでも操れるってことね」

咲夜「私の能力と少し似ている部分がありますね 私の能力は空間と密接な関係にあるから空間も操ることが出来ますので…」

フランドール「へえ、面白い！じゃあ私の能力も黒夜が触れてれば使えなくなるの!？」

咲希「でも、触れてないといけないのは不便じゃないの？」

夜見「いや、そんなことはない」

そう言つて夜見は手から靈力を放つて美鈴に当てると美鈴の手のひらに浮かんでいた氣を集めた玉がフツと消えてしまった。

夜見「こんな風に靈力を伝つて能力を使えばある程度離れていても能力を防ぐことが出来る」

レミリア「中々面白い能力ね 他に出来ることはないのかしら？」

夜見「いや、まだ使い始めたばかりだから他に何が出来るかはイマイチわからないな」

そう言つて夜見は手を下ろして美鈴に靈力を当てるのを止めるとレミリアは次の質問をしてきた。

レミリア「そう、まあそれは仕方ないことね そして2つ目の質問だけれど、さつき異変の犯人達の所にいたけれど何を話していたのかしら？」

夜見「え？ああ、明日剣術の練習相手になつて欲しいって頼まれたただけだ それかどうかしたか？」

夜見がレミリアにそう聞き返すとレミリアは夜見を睨んで再確認をした。

レミリア「……そう、本当にそれだけかしら？」

夜見「ああ、そうだが？嘘をついても仕方ないだろ？」

夜見がそう言うのとレミリアは睨むのをやめて、夜見の言っていることは本当のことだと信じた様子だった。

レミリア「そう、それならいいわ」

夜見（……何をそんなに気にしてるんだ？）

夜見はそんなことを考えいたが、夜見はその場から立ち去ろうと立ち上がるとフランドールが声をかけた。

フランドール「あ、黒夜　もしかして帰るの？」

夜見「いや、少し人里で買い物してから帰るつもりだ」

咲希「えく？もう少しいたって変わらないよ　もう少しいたら？」

フランドール「そうだよ　紅魔館に来てもお姉様とお話してばかりで、あんまり遊んでくれないじゃん」

咲希とフランドールはなんとか夜見をもう少しここに居させようとしていたのだが、レミリアが咲希とフランドールに向かってこう言った。

レミリア「咲希、フラン、やめなさい　黒夜にだって色々都合があるのよ？自分の

我が儘ままで都合を無理矢理合わせてもらっては悪いわ」

フランドール「むー、そう言うお姉様だつて黒夜が紅魔館に来る度に毎回最初に自分のお部屋に呼んでるじゃん それは我が儘じゃないって言うの？」

咲希「そうだよ、いくらレミアお姉ちゃんが黒夜のがすがす「ば、馬鹿！何を言っているの！」

すると咲希が何かを言いかけた瞬間にレミアは急に怒鳴った。そして夜見は何を言いかけたのかが気になったがレミアは咲希に怒鳴り続けているので、咲希が何を言いかけたのかをフランドールに聞いてみた。

夜見「なあ、フランドールさん 咲希さんはレミアさんが俺のことを何だつて言いかけたんだ？」

フランドール「え、わからなかったの？お姉様は黒夜のことが好きなんだよ？」

フランドールがそう言うのとレミアは顔を真っ赤にして今度はフランドールに向かつて怒鳴った。

レミア「フ、フラン！何を言っているのよ！私が黒夜のことを好きになるわけ無いじゃない！」

咲希「うっそだろ だってレミアお姉ちゃん、黒夜が帰った後はしばらくため息ついてるじゃん」

レミリア「なっ！そ、そんなことしてないわよ！そもそも私がどうして黒夜のことを好きにならなきやいけないのよ!？」

そう言つて3人は色々と言ひ争いを始め、それを咲夜と美鈴がなんとか宥めようとしていたが一向に収まる気配が無かつた。すると咲夜が氣を利かせて夜見にこう言つてきた。

咲夜「黒夜様、私と中国がなんとか宥めますので黒夜様はお氣になさらず人里へお買い物へ向かつてください」

夜見「・・・そうか？すまないな」

咲夜「いえいえ、大丈夫ですよ」

そして咲夜は笑顔でそう言つて来たので夜見はその場を立ち去り、人里で買い物済ませると寄り道をせずに地底に入つて地霊殿へ帰宅した。

夜見「ふう、ただいま」

そして地霊殿に帰つてきた夜見は仮面を外すと真つ先にさどりの仕事部屋へと向かい、扉を軽くノックした。すると扉がすぐに開いたと思つたらこいしが跳んできて夜見に思いつきり抱きついてきた。

こいし「お帰り、お兄ちゃん！」

夜見「うわっ！な、なんだ、こいしさんか」

こいし「えへへ♪ぎゅー」

さとり「お帰りなさい、黒夜さん」

夜見「ああ、ただいま こいしさん、さとりさん」

そして夜見は抱きついてきたこいしを抱き上げて机で書類を書いている赤い眼鏡をかけたさとりの元へと向かうと、さとりは黒夜にあることを聞いた。

さとり「黒夜さん、ちゃんと買ってきましたか？」

夜見「ああ、買ってきたよ」

そう言つて夜見がさとりに手渡したのは白紙の束だった。そしてさとりはその束を受け取ると山積みになつている書類の脇に置いて再び書類を書き始めた。

さとり「まったく、まさか黒夜さんが300枚はあつた白紙を全部使つて1枚に400字で反省文を書いてくるとは思いませんでしたよ」

夜見「いや、あれは本当に悪かつたつて 反省文つて書くの初めてだったんだ」

さとり「書いたとしてもせめて3、4枚が限度ですよ まったく」

実は夜見は昨日の罰としてさとりの仕事の書類を書き終えた後に書類の脇に置いてあつた白紙約300枚を全て使つて反省文を書いてさとりに渡したのだ。ちなみにさとりはその反省文をまだ全て読み終えておらず、1日に10枚ずつ読むようにしている。

さとり「それよりこいし、まだ仕事は終わっていないわよ　すぐに手伝いなさい」

こいし「え、私疲れた、お兄ちゃんときゅーってしてるー」

さとり「早く手伝いなさい、そうしないとまた明日も仕事を手伝わせるわよ？」

こいし「そんなお姉ちゃんの脅しなんて効かないよ、私が能力を使えばお姉ちゃんに見つからないで外に出られるもん」

そう言つてこいしはどうしてもさとりの仕事を手伝うのを嫌がつていたので夜見はこいしに向かつてこう言つた。

夜見「こいしさん、ちゃんと手伝わないと　俺も一緒に手伝つてあげるから」

夜見がそう言うときいしは首を少し傾げて夜見に聞いてきた。

こいし「え、お兄ちゃんも手伝つてくれるの？」

夜見「ああ、そうだ」

こいし「え!?!じゃ、じゃあ、お兄ちゃん!終わつたらいつもより長くきゅーってしてくれる!?!」

夜見「ちゃんと手伝えば…　な？」

こいし「えへへ♪じゃあ手伝おうつと」

そう言つてこいしは夜見から離れると、さとりの座っている椅子の隣にある自分の部屋から持ってきた椅子に座つて書類を書き始めた。そして夜見はさとりとこいしの向



かい側で立ったまま書類を片手で書きながら山積みになつてゐる書類を片手で纏め始めた。

さとり「…随分と器用なことをしますね、黒夜さん」

夜見「そうか？いつもやることは一氣に片付けてたからな いつの間にかこれが普通になつてたよ」

さとり「…そうですか」

夜見「あ、そうだ さとりさん、明日は仕事で冥界の剣士の練習相手になることになつたから」

すると夜見がそう言つた瞬間、さとりとこいしは手を止めて夜見の方を向くと2人は夜見にこう言つた。

こいし「お兄ちゃん、わかつてるよね？」

さとり「無茶をしてはいけませんよ？絶対に」

夜見「ああ、わかつてるよ 仕事の内容は全部話す、何があつても絶対に無茶をしない それが決めた約束だもんな」

笑顔で夜見がそう言うときさとりとこいしは安心した様子だつた。

こいし「ちゃんとわかつてるなら大丈夫だね、お姉ちゃん」

さとり「ええ、そうね 黒夜さん、貴方は私達の大切な家族です それだけは決して

「忘れないでください」

夜見「忘れるわけ無いだろ？俺にとってこの世で一番大切な家族なんだから」

そして夜見、さとり、こいしは再び書類に向き直り、書類を片付けるために手を動か  
し続けた。

## 第36話 刀の扱い方は自分で

夜見（さてと、そろそろ行くか）

夜見はそんなことを思いながら自分の部屋でマントを被り、ベルトに夜刀を挿して外出の準備をしていた。今日は宴会の翌日、つまりは妖夢の練習相手になる約束の日だった。

そして夜見が部屋から出ると廊下でさとりとばったり会った。

さとり「あ、黒夜さん もう出掛けるのですか？」

夜見「ああ、行つてきます」

そして夜見はさとりの隣を通ろうとしたがさとりは夜見の腕を掴んだ。夜見はそのさとりの行動を不思議に思つてさとりの方を向いた。

夜見「・・・さとりさん？」

夜見がさとりの名前を言うとさとりは目を細めて聞いてきた。

さとり「わかつてますよね？ちゃんと」

夜見「ああ、わかつてるよ 無茶はしないよ」

夜見がそう笑顔で言うとさとりも笑顔になつて手を離してこう言った。

さとり「それならいいです 行ってらっしゃい、黒夜さん」  
夜見「ああ、夕飯までには帰るよ」

そして夜見は階段を下りてエントランスで玄関の扉を開けようとした瞬間、後ろから夜見を呼ぶ声が聞こえてきた。

こいし「お兄ちゃん！」

その声の主はサードアイが開いたこいしだった。夜見が振り返るとこいしはこちらに走ってきており、夜見との距離があと1mの辺りでこいしは夜見の胸に跳びついて腕を首に回して抱き締めてきた。

夜見「わつと！つたく どうしたんだ、こいしさん？」

そして夜見は抱き締めてきたこいしを抱き締めて頭を撫でるとこいしは満足している様子だった。

こいし「えへへ♪お兄ちゃん、大好き！」

夜見「そっか、ありがとう 俺も大好きだよ」

夜見がそう言うときいしは急に夜見の頬にキスをしてきた。

チュッ

夜見「なっ!?!こいしさん、急にどうした!?!」

夜見はこいしのできたことに戸惑っているときいしは夜見に笑顔でこう言ってきた

た。

こいし「ふふ、行つてらっしゃいのチューだよ お兄ちゃん、無理しないでね」

夜見「…… ああ、行つてきます」

そう言つて夜見はこいしを降ろして玄関の扉を開け、外側から扉を閉めようとするとこいしがこちらに手を振つてきたので夜見は手を軽く振り返してから扉を閉めた。

そして夜見は懐から仮面を取り出してそれを被つて旧地獄街道に向かおうとした瞬間に、目の前の空間に裂け目が現れその裂け目から紫が出てきた。

紫「あら、ちょうど冥界に向かおうとしたところかしら？」

夜見「ああ、そうだ紫さん どうかしたか？」

紫「いえ、ちょうど良かったわ」

紫がそう言うのと紫は自分の横の空間に裂け目を作り出したのだが、その裂け目の先は見覚えのあるとても長い階段が見えた。

紫「ほら、冥界まで繋いだわ 妖夢が随分楽しみに待っていたから、早く行つてあげなさい」

夜見「そうか、すまないな それじゃあ、行つてくる」

紫「ええ、行つてらっしゃい」

そして夜見が裂け目に入るとそこは紛れもなく冥界で夜見の出てきた裂け目は音も

無く消えていった。すると夜見はその場で軽く屈伸をすると右足を後ろに下げた。

夜見（さて、走るか）

そして夜見が階段を駆け上り始めたのだが、15分程で夜見は階段を上り終えると今度は脇に満開の桜の木と灯籠が並んでいる石畳の上を走って白玉楼へと向かっていった。

夜見（まさか紫さんが冥界まで裂け目で送ってくれるとはな）

そんなことを思って走っていると夜見はあつという間に白玉楼の門の前まで着いたのだが何故か門が開いており、そこから木造建築で屋根は瓦で出来ている白玉楼が見えていた。

とりあえず夜見は白玉楼の敷地内に入って門を閉めてから白玉楼の玄関を軽くノックをした。しばらく待つて玄関が開くとそこには幽々子がいた。

幽々子「あら、黒夜じゃない　まあ、取り敢えず上がって」

夜見「ああ、お邪魔します」

幽々子「あ、靴は持ってきてね」

夜見「ああ、わかった」

そして夜見は手に靴を持って幽々子の後に付いていくと玄関の反対側にある日本庭園のような庭が見えてきて、その庭で妖夢が長い刀の方で素振りをしていた。すると

幽々子は庭にいる妖夢に声をかけた。

幽々子「妖夢く黒夜が来たわよ〜」

妖夢「え!?! 黒夜さんが!?!」

そして妖夢が素振りをやめて刀を納めると幽々子の方を向いて夜見の姿を見ると妖夢は、夜見に対して頭を下げてきた。

妖夢「黒夜さん、今日はよろしくお願いします」

夜見「いや、俺も刀の扱いについて教わりに来たんだ。だから妖夢さんが頭を下げる必要なんて無い」

そして夜見は靴を履いて庭に入ると妖夢は頭を上げた。そして幽々子は廊下で庭の方に足を出して座ったので、どうやら夜見と妖夢が練習をする光景を見るつもりのようにだ。

夜見は幽々子が見ていることが少し気になったが妖夢はそんなことを気にする様子はなく、夜見にあることを聞いてきた。

妖夢「えっと、それじゃあ最初は何をしましょうか?」

夜見「そうだな… 面白いえば、さつき素振りの途中みたいだったがやめて大丈夫だったのか?」

妖夢「それじゃあ、まずは一緒に素振りでもしましょうか」

夜見「ああ、わかった」

そして妖夢は再び長い方の刀を引き抜くと夜見も夜刀を引き抜いて夜見と妖夢は素振り始めた。しばらく刀を素振りしていると妖夢は夜見に話しかけた。

妖夢「黒夜さん、素人とは思えない素振りですね どこで学んだんですか？」

夜見「ああ、前に剣道を習ってたんだ それで素振りのやり方は覚えた」

夜見がそう言うのと妖夢は納得したように頷き、その後にあることを聞いてきた。

妖夢「そうなんですか ところで素振りは何回やりますか？」

夜見「そうだな・・・妖夢さんはいつも何回やつてるんだ？」

夜見が逆に普段の素振りの回数を聞くと妖夢は答えた。

妖夢「私ですか？大体3000回程です」

夜見「そうか、じゃあ後2912回だな」

妖夢「話しながら数えてたんですか： それと黒夜さん、そんなに体力持ちますか？」

夜見「ああ、心配しなくていい」

妖夢「そ、そうですか： 疲れたら休んでも構いませんよ？」

そして夜見と妖夢はその後50分程素振りを続けて3000回の素振りを終え、刀を納めた。因みに妖夢は少し汗をかいていたのだが、夜見は息切れをしてないどころか汗を1つもかいていたなかった。



妖夢「え？黒夜さん、なんで1つも汗をかいていないんですか？」

その様子に気付いた妖夢は夜見にそう聞いたのだが、夜見は何故か不思議に思った様子で妖夢にこう言った。

夜見「なんでって：：別に疲れる程の回数でもないだろ？」

妖夢「：：いや、私は半人半霊ですから疲れない回数ですけど、普通の人間だったらとつくに限界を越えた回数ですよ？」

夜見「そうなのか？これが普通だとおもってたんだが：：」

夜見がそう言うのと妖夢はあまり納得は出来なかったが深く聞いても仕方ないと思つたので軽く流すことにした。

妖夢「：：まあ、そんなに深く追及したところで時間の無駄ですし、次に行きましようか ちよつと待つててください」

妖夢が夜見にそう言つて白玉楼の中に入っていくと3分程で戻り、柄と鞘が木製で出ている刀を2本手に持つてきた。

すると妖夢はその刀の片方を夜見に渡してこう言った。

妖夢「それじゃあ午前中は黒夜さんに刀について教えます そして最初に1つ聞きますが、黒夜さんは刀を扱うのに1番何が大切だと思いますか？」

妖夢がそう言うのと夜見は少し考えるとすぐに答えを出した。

夜見「……刀を大事に扱うことじゃないのか？」

妖夢「まあ、確かに刀を大事に扱うことも大切なことです。でも一番大切なのは、刀の本質を最大限に發揮させてあげることなんです」

そう言つて妖夢は持つてきた刀を引き抜くとその刀の刃はボロボロで刀としてはまともに扱えなさそうだった。しかし妖夢はその刀の鞘を地面に置き、刀を両手で構えると夜見にあることを頼んだ。

妖夢「すみませんが、適当に庭の端っこにある石を軽く私の目の前に投げてくださいませんか？」

夜見「ああ、わかった」

そう言つて夜見は庭の端っこにある手のひらサイズの石を持つてきて妖夢の目の前に軽く投げると、妖夢は両手でその刀を石に目掛けて一気に振り下ろした。すると妖夢の振り下ろした刀は石を綺麗に2つに割り、その断面はとても綺麗に斬られていた。

妖夢「まあ、こんな風にボロボロの刀でも、本質さえわかつてあげれば簡単に石を斬ることだつてできます。それじゃあ、私が石を投げるので見様見真似でもいいので斬つてみてください」

すると妖夢は刀を鞘に納めて白玉楼の廊下に置くと庭の石を拾つたので夜見は先程渡された刀を引き抜いたのだが、その刀はさっきの妖夢が使つた刀と同じように刃がボ

ロボロだった。

そして夜見は鞘を地面に置いて刀を両手で構えると妖夢が石を投げたので、夜見は見様見真似で刀を振り下ろしたのだが刀が石に当たった瞬間に乾いた音がして石が地面に叩き付けられた。

夜見「…難しいな」

妖夢「まあ、最初は私だつてそうでしたよ 師匠も最初は誰だつてこうなるのは当たり前だつて言つてました」

夜見「…師匠？」

妖夢「私の祖父ですよ 名前は魂魄妖忌こんぱくようきと言つて、今の私では足元にも及ばない剣士です 私は師匠に色々に教えられて育つていききました」

夜見「妖夢さんが足元にも及ばないのか…今は白玉楼の中の方にいるのか？」

夜見がそう聞くと妖夢は少し俯いてこう答えた。

妖夢「師匠は何百年も前に、私に白玉楼の庭師の仕事を預けて何処かに行つてしまいました 今は何処にいるかはわかりません」

夜見「…そうか、聞いてちやいけなことを聞いて…すまない」

夜見はそう言つて申し訳ない気持ちでいたのだが、妖夢は笑顔を夜見に向けて答えた。

妖夢「いえ、大丈夫です　いつかきつと会えると信じてます、師匠はそう簡単に死にませんから」

夜見「…　そうか」

妖夢「それじゃあ、早く続けましょうか」

夜見「ああ、そうだな」

そして夜見は引き続き妖夢の投げた石を刀で斬ろうとするものの、石を斬るどころか刀の刃が更にボロボロになってしまったが3時間程続けていると夜見は石に少しだけ傷を付けられるようになった。

妖夢「黑夜さん、随分と上達が早いですね　こんな短時間で傷を付けられるようになるなんて」

夜見「…　もう少し、もう少しで斬れるんだが…　何が足りないんだ？」

夜見「なあ、妖夢さん　何かコツは無いのか？」

夜見がそう聞くと妖夢は少しむっとした表情になって夜見に言った。

妖夢「黑夜さん、残念ですがコツを教えるわけにはいきません　自分で感覚を掴んで覚える、それが私の教え方です」

夜見「…　そうか、わかった　じゃあ引き続き頼む」

妖夢「はい、それじゃあ投げますよ」

そして夜見は投げられた石をちゃんと見ていると夜見は一瞬だけ刀と体が繋がっているような感覚を覚えた。その瞬間に刀を振り下ろすと刀の当たった部分から2cmほどの深さの切れ目が石に入った。

妖夢「お、何か掴めましたか？もう少して斬れそうですよ」

夜見「何か：： 刀と一体化したような感覚が起きた」

妖夢「なるほど、黒夜さんはそのような感覚を覚えたんですね それにしても黒夜さん、ずつと刀を振って疲れるでしょうし、そろそろ休みましょう」

夜見「いや、もう一度やれば出来る気がするんだ もう一度だけ頼んでもいいか？」

妖夢「そうですね？それじゃあ、これが終わったら少し休みましょう」

そして妖夢が石を投げると夜見は再び刀と体が繋がっている感覚を感じた。すると夜見はその感覚を途切れさせないように、その感覚だけに意識を集中させて刀を振り下ろした。

キーンッ

すると夜見の振り下ろした刀は目の前に投げられた石の真ん中をすり抜けたかと思うと、その石が地面に落ちた瞬間に2つに割れた。そしてその石の断面はとても滑らかで綺麗だった。

妖夢（う、嘘!?!私でも感覚を掴み始めてから数十年かかったのに、こんなにあっさ

り：：)

そして妖夢はその様子に驚いていたのだが夜見は特に気にすることなく刀を鞘に納めると妖夢に話しかけた。

夜見「ふう、やつと出来た 妖夢さん、休憩だろ？」

妖夢「え？あ、そうですね！休憩にしましょうか」

そして2人はその場で休憩しようと思つた瞬間に、幽々子は妖夢に声をかけた。

幽々子「妖夢ももう12時過ぎてるけど、ご飯はまだかしら？」

妖夢「え？もうそんな時間ですか 黑夜さん、休憩ついでに昼飯も食べちゃいましょう」

夜見「ああ、そうだな」

そして夜見と妖夢は靴を脱いで庭から白玉楼の廊下に行くと幽々子は立ち上がった。すると妖夢は廊下に置いた刀を拾い、夜見の持っていたボロボロの刀を受け取つてそそくさと何処かに向かつてしまった。

幽々子「さて、私達は妖夢がお昼ご飯を持ってくるまで部屋で待つてみましょうか」

幽々子がそう言つて廊下を歩いて行くので夜見はその後を付いていったのだが夜見は幽々子に質問をした。

夜見「……幽々子さんは作らないのか？」

幽々子「いや、それが前に紫が来たときに1人で作ってみたんだけどね。その時に調味料を間違えちゃったらしくて、先に妖夢が1口食べた瞬間に倒れちゃったのよ」

夜見「……一体何を入れたらそうなるんだよ」

夜見「まあ、苦手なら仕方ないか」

そしてしばらく幽々子に付いていくと幽々子はある部屋の襖を開けて入っていったので夜見も続いて入っていった。その部屋は中央に木の机と座布団が置いてあり壁には掛け軸が掛けられていた。

そして幽々子は座布団に女の子座りで座つたのだが、夜見は幽々子の向かい側の座布団に正座で座つて仮面を外した。

幽々子「あら？別に足を崩していいのよ？」

夜見「いや、別にこれでいい」

幽々子「あら、そう？ そんなことより、修行はどうだったかしら？」

すると幽々子は夜見に先程の修行について聞いてきたので夜見は思ったことをそのまま話した。

夜見「かなり難しかったな。そして自分がどれだけ弱かったか実感した」

幽々子「あら、そんなこと言ってる異変の時には貴方が勝ったじゃないの？」

夜見「いや、刀の扱いに関しては妖夢さんの方が遥かに上だ。それに妖怪に対して力

だけで勝つことは出来ないしな」

幽々子「でも、それは仕方のないことよ。仕方のないことで張り合つても無意味よ？」

幽々子がそう言うのと夜見は幽々子の思っている意味合いがずれていることに気付いた。

夜見「いや、そういう意味で言つたんじゃない。俺はどんな人でも誰かよりも強ければ弱いこともあるって言つたんだ」

幽々子「あら、そうだったのね」

そして夜見と幽々子が会話をしていると襖が開いて妖夢が料理を両手に持つて運んできて、次の料理を持つてくるために部屋を出ていった。すると夜見は幽々子に一言断つて妖夢を追いかけると様々な種類の料理が並べられている台所に着いた。

夜見「妖夢さん、手伝うぞ？」

妖夢「きやあ！つて、黒夜さんでしたか。大丈夫ですよ、いつもやってますから」  
夜見「一気に運んだ方が早いだろう？」

そう言つて夜見は空気中の血を操つて台所にある料理の乗った皿を宙に浮かすように持ち上げると、妖夢はその光景にポカンとしていた。

妖夢「す、すごい……」



夜見「それで？なんか量が多いけど、どれを持っていけばいいんだ？」

妖夢「え？あ、ああ、全部です」

夜見（全部？そうだとしても軽く10人以上あるぞ？）

夜見は料理の量が多いことを不思議に思いながらも妖夢の後を追って先程の部屋に料理を持っていくと妖夢は料理を置いて幽々子の隣の座布団に正座で座っていた。そして夜見が机の上に料理を置いていると妖夢が声をかけた。

妖夢「ありがとうございます、黒夜さん 運ぶのを手伝ってもらって」

夜見「料理を運んだだけだ 別にお礼を言われるようなことじゃない」

そして夜見が全ての料理を机に並べ終え幽々子の向かい側の座布団に正座で座ると、幽々子がこう言った。

幽々子「じゃあ、冷めないうちに頂きましょう」

妖夢「ええ、そうですね」

夜見・妖夢・幽々子「いただきます」

そして3人で料理を食べていると夜見は妖夢に午後のことについて聞いた。

夜見「妖夢さん、午前中は俺に刀について教えてくれたから午後は俺が練習相手になるんだろ？それで、どんな風に練習をするんだ？」

妖夢「そうですね… 実践練習をしましょうか 近接攻撃のみ使用可能の弾幕ごっこ

でいいですか？」

夜見「ああ、構わないぞ」

妖夢「ありがとうございます」

夜見（…それにしても）

そして夜見は先程から目の前の光景に疑問を持ちながら料理を食べていた。その光景とは幽々子が尋常ではない速さで料理を平らげている光景だった。

夜見（一体何人分の料理を食べてるんだ…細身だけど意外と大食いなのか？）

そんなことを思いながらも夜見は自分の分の料理を食べ終わるとほぼ同時に妖夢も料理を食べ終えた。

夜見・妖夢・幽々子「ごちそうさまでした」

そして幽々子が部屋を出ると妖夢は机の上に残った皿を重ねて片付け始めたので、夜見は仮面を被ると夜見も皿を重ね始めた。

妖夢「あ、大丈夫ですよ 先に庭で待っててください」

夜見「いや、2人で片付けた方が早く終わるだろ？」

夜見がそう言って重なった皿を持って部屋を出て、再び台所に向かうと妖夢が少し申し訳なさそうに付いてきた。

妖夢「…すみません、黒夜さんはお客様なのに手伝ってもらうだなんて」

夜見「いいんだ、刀を教えてくれたお礼として受け止めてくれ」

妖夢「そうですか：： ありがとうございます 優しいんですね、黑夜さんは」

夜見「優しい：： ね、どうだろうな？」

夜見は笑顔でそう言ったのだが妖夢はその笑顔の裏に何か悲しみがあるように感じた。しかし妖夢はその事について聞くのはやめておくことにした。

そして台所に着いて2人で皿を洗っていると夜見は妖夢にあることを聞き始めた。

夜見「そういえば、妖夢さん」

妖夢「はい、何でしょうか？」

夜見「俺の持つてる刀の名前を知っていたが、どこで聞いたんだ？」

夜見がそう聞くと妖夢はその刀の名前をどうやって知ったのかを説明し始めた。

妖夢「ああ、それは師匠から聞いたんです でも私の聞いた話ではその「夜刀 闇夜」

とは正反対の刀と一組だったと聞いてます」

夜見「そうなのか：： 因みに、その正反対の刀の名前は？」

妖夢「それは師匠も知らなかったようです でも若かった頃に1回だけ、その2本の刀を持った剣士と戦ったらしいのですが惨敗したと聞きました」

夜見「そうか：： 相当な相手だったんだろうな そういえば今更だが、妖夢さんの刀の名前聞いてなかったが何て言うんだ？」

そして2人は皿洗いが終わると近くにあったタオルで手に付いた水を拭い、妖夢は腰の後ろの方にある短刀を引き抜いた。

妖夢「こつちの短刀が「白楼剣」と言います 人の迷いを断ち、幽霊を成仏させられる刀です」

そして妖夢は白楼剣を納めると今度は長い方の刀を引き抜いた。

妖夢「そしてこの刀は「楼観剣」と言います 妖怪の鍛えた刀で、一振り幽霊を10匹倒すことが出来ます」

そして妖夢は楼観剣を鞘に納めると夜見は思ったことを口に出した。

夜見「刃はこぼ毀れも無いし、相当大切にしているんだな」

妖夢「当たり前ですよ、刀は剣士の命ですからね」

夜見「… そうだな それじゃあ、さっさと練習するか」

妖夢「はい、そうですね」

そして夜見と妖夢は歩いて庭に面した廊下に出ると脱いだ靴を履いて庭の中央辺りで5m程距離を空けた。すると夜見は夜刀を引き抜いて右手で構え、それに対して妖夢は楼観剣を引き抜くと両手で構えた。

妖夢「手加減はなしですよ じゃないと、練習になりませんからね」

妖夢がそう言って右足を後ろに下げると夜見もゆっくりと右足を後ろに下げた。

夜見「ああ、わかってるよ　．．．　いざい」

妖夢「尋常に：：」

夜見・妖夢「勝負！」

そして夜見と妖夢がお互いに走り出して先に刀を振ったのは妖夢だった。

妖夢「はあ！」

妖夢が楼観剣を上から振り下ろしたが夜見は楼観剣が当たる寸前に横に横に躲して夜刀で斬り上げようとする。しかし妖夢も刀を下から振り上げると刀がぶつかり合って2人が刀を上を持ち上げた状態になると妖夢が先に振り下ろしたが夜見は後ろに跳んで距離を取った。

妖夢「隙あり！」

だが妖夢は距離を詰めながら空中にいる夜見に突きを放ったが、夜見が夜刀の刃の側面で防ぐと後ろに飛ばされて距離を取った。

妖夢「まだまだ行きますよ！」

そして妖夢は夜見に向かって走ってきたが夜見は夜刀を鞘にゆつくりと納めると居合の構えを取った。

夜見（集中しろ：：　刀と一体になった感覚を思い出せ：：）

そして夜見は夜刀と体が一体になった感覚を感じた瞬間勢いよく抜刀をすると、高い

金属音が鳴り響いて妖夢の楼観劍が宙を舞っていた。

妖夢「しまっ…」

そして夜見は隙だらけの妖夢に向かつて縦に斬りかかったのだが、妖夢は横に跳んで避けると次は上に跳んで宙を舞っている楼観劍を左手で掴んだ。

妖夢「やっぱり黑夜さん相手に1本だけで戦うのは無理がありますね」

そう言つて妖夢は右手で白楼劍を引き抜くと妖夢は夜見の上から2本の刀で斬りかかった。そして夜見は夜刀で妖夢の攻撃は防いだものの力に負けてそのまま斬りつけられた。

夜見「ぐあっ!？」

妖夢「まだ終わりません!」

そして妖夢は流れるように白楼劍で斬りつけた後に楼観劍で突きを放つと夜見は仰向けに倒れ込んでしまった。

夜見「がっ!？」

妖夢「もう終わりですか!？」

そして妖夢は更に追い討ちをかけるように夜見の上に股がると楼観劍に左手を添えて喉に向かつて上から突き刺そうとするが、夜見は喉に当たる寸前に楼観劍の刃を左手で掴んで止めた。

夜見「まだ……終わって、ねえぞ？」

妖夢「……やっぱり粘りますか、ここからどうするんですか？」

夜見「それを素直にこうやりますって、話すわけねえだろ！」

そして夜見は左手で無理矢理楼観剣を奪い取ると夜刀で斬りつけて妖夢が怯んだ隙に抜け出し、右手の夜刀と左手の楼観剣を持ち変えると楼観剣で斬りかかるが妖夢はそれを白楼剣で受け止めた。

妖夢「うつ!?くう……奪い取ったのは流石ですが、黒夜さんが楼観剣をちゃんと扱える筈がありません 大人しく返してください」

夜見「……言ったよな、妖夢さん 刀を扱う上で大切なのは刀の本質を最大限に発揮させてあげることだって」

妖夢「ええ、言いました……まさか!？」

あることを思った瞬間、妖夢は白楼剣で防いだが衝撃によって体を斬りつけられた。そして妖夢が後ろに下がって仰け反ると夜見は妖夢に楼観剣で突きを放つが、妖夢は体を捻って躲すと楼観剣の柄を左手で掴んで楼観剣を取り戻すと横になって後ろに転がり距離を取った。

妖夢「……まさか黒夜さんが楼観剣の本質を一瞬で見抜くとは しかも、私とは別の本質を……」

夜見「自分で言ってただろ?」「そのような感覚を覚えたんですね」って、つまり妖夢さんの知っている感覚と俺の感覚は違うもの、だったら発揮される本質も変わる筈だ」妖夢「確かに刀の扱い方は使い手によって変わります。私は師匠の元で習っていたから師匠と同じような本質を引き出せますが……黒夜さん、よく気付きましたね」

夜見「気を許していると自然に口に出るもんだ。まあ、妖夢さんがあの時にコツを教えにくれていたら、同じような本質を引き出せたかもな」

そう言つて夜見は夜刀を逆手持ちにして腰を落とすと、能力を使つて右手に180cm程の両刃の剣を担ぐように作り出した。

妖夢「『狼の型』ですか……次こそは負けません!」

夜見「ああ、負けないといいな!」

そして夜見と妖夢が走り出すと妖夢の攻撃範囲に入る前に夜見は血の剣を右に振ると妖夢はそれを上に跳んで躲したのだが、夜見はそのまま勢いに乗って回ると今度は血の剣で宙にいる妖夢を斬りあげた。しかし妖夢はそれを防ぐと後ろの方に飛ばされ、夜見は血の剣をそのまま後ろに振りきると剣先を軸にして宙返りをして着地して血の剣を再び担いだ。

妖夢「……長引きそうですね」

夜見「ああ、そうだな。中々疲れそうだな」



妖夢「ですが、負けるわけにはいきません！」

夜見「それはこつちも同じだ！」

そして夜見と妖夢が戦い始めて3時間程過ぎると幽々子が団子を食べながら庭に面した廊下を歩いてきた。すると幽々子が立ち止まって最後の団子を口の中に入れた瞬間に幽々子の目の前に刀が飛んできて壁に突き刺さった。

幽々子「もう危ないじゃないの〜妖夢〜」

幽々子はそう言いながら妖夢の方を向くと夜見と妖夢はそこで幽々子がいることに気付いた。

妖夢「え、ああ、すみません幽々子様」

夜見「危なかったな、幽々子さん さてと、それで？」

妖夢「… はい、参りました」

そして夜見と妖夢の様子はというと妖夢が尻餅をついて倒れているところに夜見が妖夢の頭に向かって血の剣を振り下ろしていたのだが、幽々子が妖夢に声をかけた瞬間に夜見は妖夢の頭に当たる寸前で手を止めたのだ。

夜見「さてと、ほら 妖夢さん」

妖夢「ああ、ありがとうございます」

すると夜見は血の剣を空气中に分解して夜刀を納めると妖夢に手を差し伸べて妖夢

を立ち上がらせた。そして立ち上がった妖夢は幽々子の元に向かって歩いていき、幽々子が壁に刺さった楼観剣を両手で引き抜いて妖夢に差し出した。

幽々子「はい、妖夢」

妖夢「ありがとうございます、幽々子様」

そう言つて妖夢は2本の刀を鞘に納めると夜見の方に振り返つて頭を下げてお礼を言つた。

妖夢「黑夜さん、今日の練習に付き合つてくれてありがとうございます」

そして妖夢は夜見に頭を下げたのだが夜見は妖夢に向かってこう言つた。

夜見「いや、こちらこそ刀の扱い方を教えてくれてありがとう　お陰で刀の扱い方がわかつたよ」

夜見がそう言つたと妖夢は頭を上げて夜見を正面から真つ直ぐと見てあることを言つた。

妖夢「黑夜さん、今日教えた刀についての事はほんの一部にしか過ぎません　刀の扱い方を完全に覚えるには、まだまだ色んなことを知る必要があります」

夜見「そうか、じゃあ帰つたら色々勉強する必要があるな　今日はありがとう、妖夢さん」

そう言つて夜見は空気中の血を集めると翼を作り出して宙に浮き始めると妖夢と

幽々子はその様子を見ながらこう言った。

妖夢「刀のこと、もっと知りたくなったらまた来てくださいね」

幽々子「今度来た時は何か持ってきてね」

妖夢「ちよ、ちよつと幽々子様！」

夜見「ああ、わかったよ幽々子さん それじゃあ、今度来る時には甘いものでも持つてくる」

そう言つて夜見は来た道を血の翼で飛んで引き返し、地霊殿へと向かつて飛んでいった。

## 第37話 剣術の達人と地霊殿の家計

夜見は地霊殿に帰るために血の翼で冥界の空を飛んでいたのだが、階段が見えてきた辺りで石畳の上に降りると血の翼を空气中に分解した。

そして夜見は石畳の上を歩いていると階段から一人の年老いた男性が上がってきた。

その男性は長い白髪を全て後ろで一本に結んでおり、長い白い髭が生えていた。服装は緑色の紋付袴もんつきはかまを着て腰に2本の刀を挿し、傍には妖夢と同じように白い魂のようなのが浮かんでいた。

そして、その男性は夜見に気付くと声をかけてあることを聞いてきた。

？「ん？お主、どうやって冥界に？」

夜見「…」

しかし夜見は何も答えずにそのまま歩いていると、男性は夜見の腰に携えている夜刀を目にした瞬間に目付きが変わった。そして夜見は男性が静かに殺気を放っていることに即座に気付き足を止めると、その男性は刀をいつでも引き抜けるように構えた。

？「貴様、何故ここにいる！」

男性は鋭い目付きで夜見に問いかけたのだが、夜見はあることを考えていた。

夜見（… えっと、何処かで会ったつけ？ いや、会ってないよな… 人違いか？）

？ 「… はっ！ 貴様、まさか白玉楼に行ったんじゃないだろうな!!」

夜見（え、何で知ってるんだ？ えっと… 取り敢えずどうしようか）

夜見はいきなりの展開に少し戸惑いながらもどうすればいいかを考えていたのだが、男性が刀を引き抜くと夜見に向かって斬りかかってきた。

？ 「せいやあ！」

夜見「くっ！」

そして夜見は刀が当たる寸前に後ろに跳んでギリギリ回避をしたのだが、マントのフードの端の部分に刀が当たったらしく1c m程の切れ込みが入った。

夜見（急に何だよ!?! 普通、見ず知らずの人に刀を振るか!?!）

？ 「むっ！ せい！」

夜見（くっ！ 避けるしかない!）

夜見は男性が敵意を向けているか全くわからないまま、男性が振ってくる刀を躲かわし続けているとある事に気付いた。

夜見（あれ？ この太刀筋少し似て… いや、妖夢さんと同じ太刀筋？）

夜見は男性の刀の太刀筋が妖夢と同じ太刀筋だと気付いたのだ。そして夜見は男性の振ってくる刀を夜刀で受け止めるとその男性にあることを聞いた。

夜見「もしかして、魂魄妖忌さん？」

？「何を忘れたように言ってるんだ貴様！忘れたとは言わせんぞ！」

男性の言ったことを聞く限り、どうやら夜見に刀を振っている男性は魂魄妖忌だった。そして夜見は夜刀で刀を受け止めたまま妖忌に話しかけた。

夜見「妖忌さん、聞いてくれ 俺は妖忌さんが昔に戦った人物とは違う人だ」

妖忌「何を馬鹿なことを言っている！その刀を使っているのは貴様しかいないだろう！」

夜見「…じゃあ聞くが、もう一本の刀はどうしたと思う？」

妖忌「そんなの、私を油断させる罠だろう！」

そう言つて妖忌はもう一本の刀を引き抜いたのだが、その瞬間に夜見は夜刀に更に力を込めて無理矢理妖忌を押し強引に距離を空けた。

夜見（確か妖忌さんは妖夢さんでも足元に及ばない程強い剣士、このままじゃ勝ち目はない それに攻撃してきているのはただの誤解だから、傷付けるわけにはいかないな…）

妖忌「くっ！今回は負けるものか！」

そして妖忌が夜見に向かって走つてくるのだが、夜見は夜刀を納めると深呼吸をして神経を研ぎ澄ました。すると妖忌が夜見に向かって刀を振つたのだが、夜見はその刀を

最小限の動きで躲した。

妖忌「くっ！せい！」

攻撃を躲わされた妖忌は立て続けに夜見に刀を振り続けたが、一向に夜見に刀が当たる気配が無かった。

夜見（よく考えれば妖忌さんと妖夢さんの刀の扱い方は同じもの　それなら刀の振り方は大体予想が着く）

そして夜見はしばらく刀を躲わしていたのだが、急に妖忌が刀を振るのを止めると後ろに下がって距離を取った。

その様子を夜見が不思議に思っていると妖忌は少し口元を緩めて少し笑った。

妖忌「……ふっ、随分と腕が落ちたようだな」

夜見（……何を言ってるんだ？）

夜見は妖忌の言っている意味が理解出来なかったのだが、すぐに夜見はその意味を知ることになった。

ザシュツ

夜見「がっ!？」

夜見は何かが斬られたような音がしたかと思うと急に左腕の前腕に激痛が走った。そして夜見は激痛が走った部分を右手で押さえると生暖かい液体の感触を感じた。

夜見は妖忌の刀を全て躲わしていたと思っていたが、どうやら一撃だけ刀で斬られたようだった。

夜見（このままだと殺される、かといって傷付けるわけにもいかない……けど、今回は駄目か）

そして夜見は能力で左腕を一瞬で治すと、左手でゆっくりと夜刀を引き抜いて右手に血の刀を作り出した。すると夜見は血の刀の刃先を妖忌に向け、こう宣言した。

夜見「これから罪を犯す 幻想郷の運命を狂わす ここで妖忌さんを倒させてもらう」

夜見がそう宣言すると妖忌は再び目付きが変わり、刀を強く握って更に殺気を放った。

妖忌「幻想郷の運命を狂わすだと……そんなことをさせてたまるか！」

そして妖忌が走り出すと同時に夜見は2本の刀を振るって1つの大きな斬撃を妖忌に向かつて放った。しかし妖忌はその斬撃を軽々と斬り落とすと夜見に突きを放ったが、夜見は夜刀の刃の上で滑らせて軌道を逸らすと血の刀で斬り上げようとしたが妖忌はもう1本の刀で防いだ。

妖忌（こいつ、昔とは違う動きを！）

夜見（この様子だと、まだ妖忌さんは本気じゃないな）

そして妖忌は素早く夜見の腹に蹴りを入れて蹴り飛ばすと2本の刀で2つの斬撃を



放った。

夜見「ぐっ!？」

しかし夜見は1つ目の斬撃を地面に最初バウンドする瞬間に腕で地面を押し、上に宙返りをするように躲し、2つ目の斬撃は上から足で踏み抜いた。

妖忌「……中々変わった動きをするな、前の剣術はどうした？」

夜見「……剣術じゃねえよ、状況に合わせて動いてるだけだ」

妖忌「っ!?! 剣士が剣術を捨てるとは、随分とふざけた真似をするようになったな!」

すると今度は妖忌が斬撃を飛ばしながら夜見に近付いて来るのに対して、夜見は斬撃を全て刀の刃の上で滑らせて軌道を変えて妖忌に向かって走った。

そしてお互いの刀が届く範囲に近付くと夜見が夜刀で突きを放つが、妖忌は夜見の横に回り込むように跳んで躲して刀を振った。しかし夜見はその刀を横に転がって避け、後ろに跳んで距離を取ろうとしたが妖忌はピッタリと付いてきた。

夜見「なっ!？」

妖忌「逃がすわけないだろう!」

そして妖忌は夜見に何度も刀を振るうが夜見はそれを何度も防ぎ、金属音が鳴り響き続けた。

妖忌「どうしたんだ？防ぐだけでは私には勝てないぞ！」

夜見「それは全て防がれている妖忌さんにも言えることだがな！」

そして夜見は防いでいる途中で妖忌の刀を1本横に回って蹴り飛ばすとそのまま回って横に刀で妖忌に斬りつけようとしたが、妖忌は2本の刀を後ろにずり下がりながらも刀1本で受け止めた。

妖忌「…ふむ、剣術を捨てた分だけ柔軟に対応出来るようにしたのか それなら私は、そろそろ本気を出すとするか」

妖忌はそう言って刀を鞘に納めて居合の構えを取ると、それに対して夜見は血の刀を空气中に分解して夜刀を右手で構えた。

妖忌「腕が落ちたお前が、私に刀1本で勝てるとても？」

夜見「…さあな、どのみちこれで決着を付けるつもりなんだろ？」

妖忌「ああ、そうだ さあ、終わりにしよう」

妖忌がそう言い、夜見は目と閉じて夜刀と一体化するような感覚を感じるとゆっくりと目を開けた。すると妖忌は夜見が刀と一体化している感覚を感じていることに気付いた。

妖忌（…剣術を捨てたものの、刀の扱い方は昔より上達している 油断ならないな）

そして夜見が走り出すと妖忌は目を閉じてじっと夜見が来るのを待ち、夜見が刀を振

るう瞬間に妖忌が抜刀をした。すると高い金属音が鳴り響いて夜見の持っていた夜刀が宙を舞った。

夜見「なっ!？」

妖忌「残念だったな これ以て終わりだ!」

そして妖忌は抜刀をして上に持ち上がっている刀を両手で持つと、夜刀を飛ばされて仰け反っている夜見に向かって刀を振り下ろした。：：が、

紫「はい、ストップ」

いきなり夜見と妖忌の間に裂け目が出来て紫が出てきたのだ。そして紫は妖忌の腕を掴んで刀を止めると妖忌は驚いている様子だった。

夜見「：：紫さん?」

妖忌「なっ!?!紫さん!?!」

紫「まったく、夜見がそろそろ帰る頃だと思つて様子を見に来たら：：。一体何をしているの?とりあえず、妖忌さんは刀を仕舞いなさい」

そう言つて紫は妖忌の腕を掴んでいた手を放すと、妖忌は警戒をしながら数歩下がつて刀を鞘に納めた。すると紫は夜見の方を向いてこの状況について聞いてきた。

紫「えつと?とりあえずどういふ状況か聞いていいかしら?」

夜見「ああ、実は：：」

そして夜見が先程までの状況を発端から説明すると紫は少し呆れていた様子だった。すると紫は妖忌の方を向いて何かを説明していると妖忌は勘違いに気付いたようで、夜見に謝ってきたが夜見はお互い悪かったということにしてお互いに許しあった。

そして夜見と妖忌がお互いに自分の刀を拾って鞘に納めると紫は夜見にあることを聞いてきた。

紫「それで？夜見 帰るのでしょうか？」

紫が振り返って夜見に帰るかの確認を取ると夜見はこう返事をした。

夜見「いや、少し妖忌さんに聞きたいことがある」

妖忌「私にか？」

そして夜見は妖忌の前に行くのと妖忌に冥界に帰ってきた理由を聞いた。

夜見「妖忌さん、いきなり帰ってきてどうしたんだ？妖夢さんと幽々子さんに会いにでも行くのか？」

妖忌「いや、違う 久しぶりに西行妖を拝みに来たのだ」

しかし妖忌は白玉楼に顔を出す気は無く、ただ西行妖を拝みに来ただけだったらしい。すると夜見は妖忌さんにあることを聞いてみた。

夜見「そうか……俺も付いて行って構わないか？」

妖忌「ああ、構わないぞ よかったら、紫さんも一緒に来ますか？」

そして妖忌は紫も誘ってみると紫は笑顔で頷いた。

紫「そうね、せっかくだから私も拝んでいこうかしら」

妖忌「それじゃあ、行くとするか」

そして3人で西行妖を拝みに行くことにすると、紫は3人の足元に大きな裂け目をつ作り、その裂け目に落ちると一瞬で西行妖の前に着いた。

妖忌「…久しぶりだな、西行妖よ」

そう言つて妖忌が一步前に出て手を合わせて拝むと夜見と紫も後に続いて西行妖を拝んだ。そしてしばらく拝んでいると妖忌が夜見にあることを聞いてきた。

妖忌「黑夜殿、西行妖が何故花を咲かせないのかを知っているか？」

夜見「いや、知らないが…」

妖忌「実はだな、この西行妖の根の中心に幽々子様が封印されているのだ」

妖忌がそう言うのと夜見は異変の時に聞いた紫の話を思い出した。そして夜見が紫の方をチラリと見ると紫が説明をした。

紫「幽々子は生前、「死霊を操る」能力と「人を死に誘う」能力を持っていたわけけれど西行妖が満開になった時に幽々子は人間を1人でも多く守るためと言つて、自分自身の能力で西行妖と共に死んで封印されたのよ」

妖忌「そしてしばらくして幽々子様が幽霊として再び目の前に現れたのだが、どうや

ら生前の記憶を失ってしまったらしい」

夜見「そんなことが… 幽々子さんは自分一人を犠牲にすることで、多く人を守ったんだ。死ぬとわかってても、多くの人のために…」

そして3人が西行妖を拝み終わると、妖忌は一步下がって夜見と紫に別れを告げて何処かへ行ってしまった。その姿を夜見と紫は見送ると、紫が夜見に話しかけてきた。

紫「さて、そろそろ私達も帰りましょうか」

そう言って紫は夜見の目の前に裂け目を作ると向こう側には地霊殿が見えていた。そして夜見は紫にお礼を言った。

夜見「紫さん、ありがとう。送り迎えをしてくれて」

紫「ふふ、いいのよ。私の気まぐれだから気にしないで」

夜見「それじゃあ、先に失礼する」

紫「ええ、さようなら」

そして夜見は裂け目に入って地霊殿の前に着くと、仮面を外して地霊殿の玄関を開いた。しかしその先の光景は先程のしんみりとした気分をぶち壊すような光景だった。

夜見「…は？」

夜見はその先にあつた光景にまず最初に自分の目を疑った。何故ならいつものエンランスの光景に沢山の動物が溢れかえっていたからだ。

夜見「……いつから地霊殿は動物園になったんだよ」

そして夜見は思わず思ったことを口に出すと、右側の廊下から左側の廊下にヒョウが通ったと思つたらその後をさとりが走って追いかけていた。

さとり「こら！待ちなさい！」

夜見「……」

すると夜見はその場で落ち着いて、まずは目の前の状況を冷静に整理し始めた。しかし夜見は何度も目の前の状況を整理してもまったく理解が出来ずにいると、2階から自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

こいし「あ、お兄ちゃん！」

それはこいしの声だったのだが、こいしは何故かメスライオンの背中に乗って階段を降りてきていた。そして夜見の目の前まで来るとこいしはメスライオンの頭をポンポンと叩いた。

こいし「ほら、止まって！」

こいしがメスライオンに止まるように命令するとメスライオンは大人しくその場に座り込んで止まり、こいしがメスライオンから降りると夜見の腰辺りに抱き付いてきた。

こいし「お帰り、お兄ちゃん」

夜見「… ああ、ただいま」

こいし「お兄ちゃん、ぎゅーして」

こいしが夜見から離れると夜見に両手を伸ばしてそう言ったので、夜見がこいしを抱き上げるとこいしは夜見の首に腕を回して抱き付いた。

こいし「えへへ、お帰りなさいのチュー♪」

そしてこいしが夜見の頬にキスをしたのだが、夜見が驚かないでいるとこいしは不思議に思つて夜見に声をかけた。

こいし「お兄ちゃん、どうしたの？」

夜見「こいしさん、何故地霊殿がこんな状況に？」

こいし「ん？ ペットののこと？」

夜見「え、ペットつて… どれが？」

こいし「え、全部だけど？」

夜見「え？」

こいし「え？」

夜見とこいしがお互いに状況を理解出来ないでいると、左側の廊下からヒヨウの頭を撫でて誘導しているさとりが出てきた。そしてさとりがこちらに気付くと、夜見に声をかけてきた。



さとり「ああ、帰ってきてたんですか お帰りなさい」

夜見「ああ、ただいま さとりさん、取り敢えず状況を説明してくれないか？」

さとり「え？… あ！そういうえば黒夜さんにペットのことを説明していませんでしたね」

さとりは一瞬不思議に思ったが何かを思い出したかのような声を出すと、夜見にこの状況について説明し始めた。

さとり「実は地霊殿で色んなペットを飼っているんですが、ペット達が一斉に部屋から出てきてしまったので今集めているところなんです」

夜見「今まで何処にいたんだ？」

さとり「あっち側の部屋です」

そう言つてさとりが指を指したのは右側の廊下の方だった。実は夜見は地霊殿に住んではいたのだが特に全部の部屋の確認はしていなかったため、こんなにペットがいることは知らなかったのだ。

するとさとりは夜見にあることをお願いしてきた。

さとり「黒夜さん、帰ってきて早速で悪いんですがペット達を集めて来てくれませんか？私は1階のペット達を集めますので黒夜さんは2階をお願いします」

夜見「ああ、わかった」

そしてさとりのお願いを受けた夜見はこいしを降ろすと、こいしは夜見の手を掴んできたので夜見はこいしと手を繋いだまま2階へと上がった。すると2階の廊下にも1階と同等の数の動物がいた。

こいし「お兄ちゃん、どうするの？」

夜見「そうだな……取り敢えず最初は鳥でも集めてみるか」

そう言った夜見は能力を使って血を操って手元に小さな筒のようなものを作り出すと、こいしは夜見に筒のようなものについて聞いてきた。

こいし「お兄ちゃん、何それ？」

夜見「ああ、これは鳥笛だ。鳥の鳴き声に似た音が鳴って鳥が寄ってくるんだ」

そして夜見は鳥笛を口に咥えて吹くと、鳥笛から鳥の鳴き声に似た音が鳴り響いた。すると夜見とこいしの周りに大量の鳥が群がってきた。

こいし「わわ！な、何!？」

夜見「くっ！予想以上に多いっていうか1階の鳥まで来たな」

夜見は群がってきた鳥達を手で少し払いながら頭を抱えてしやがみ込んでいるこいしを庇うように抱き締めると、夜見は霊力を放って鳥を囲むように鳥籠を作り出して鳥を捕まえた。

夜見「こいしさん、大丈夫か？」

そう言つて夜見はこいしを放すと、こいしは顔をあげて夜見に無事だったことを伝えた。

こいし「う、うん 少しばつくりしただけ、大丈夫」

夜見「そうか、良かった」

夜見はこいしが無事だったことに安堵すると、こいしの手を取つて一緒に立ち上がった。そして夜見とこいしは捕まえた鳥の方を見ると、鳥達が霊力の鳥籠の中で暴れるようにジタバタと翼を動かしている様子にこいしは疑問を感じた。

こいし「うーん、どうしたんだろう？」

夜見「ん、どうかしたのか？」

こいし「いつも鳥さん達は大人しいんだけど、今日は随分と暴れてるからどうしたんだろううって思ったの」

夜見「あー、えっと……多分俺のせい……だな」

こいしの発言を聞いた夜見が少し申し訳なきようにそう言うと、こいしはどういうことかを夜見に聞くことにした。

こいし「お兄ちゃん、どういうこと？」

夜見「ああ、何故か知らないけど俺って動物に全然好かれなんだ 多分そのせいだと思う」

夜見は動物達には好かれないことを言ったのだが、その発言に対してこいしは疑問を  
持った。

こいし「そうなの？でも、お燐とお空はお兄ちゃんと普通にお喋りするよ？」

夜見「多分それは、燐さんと空さんは動物より妖怪に近いから関係ないんだと思う」

こいし「そっか、つまりお兄ちゃんは普通の動物さん達には嫌われてるんだね」

夜見「まあ、そうとも言えるな さてと、次に行くか」

そして夜見とこいしはその場に鳥達を残して次の動物を捕まえるために左側の廊下へと向かっていった。すると左側の廊下には沢山の犬と猫などがいたのだが、夜見の姿を見た瞬間に威嚇で吠えてきたり奥へ逃げていつてしまった。

こいし「…… お兄ちゃん、本当に嫌われてるんだね」

夜見「…… ああ、そうだな」

そして夜見は手前にいた猫の前にしゃがみ込んでゆっくりと手を下から差し出したが、猫は前足で夜見の手を軽く叩くと奥へと逃げていつてしまった。

こいし「お兄ちゃん、どうする？」

夜見「…… さあな、嫌われるものは仕方ないしなあ」

そして夜見はその場で本気でどうしようか悩んでいると、こいしは一匹の犬の目の前に座って頭を優しく撫で始めた。すると周りにいた犬と猫がこいしの周りにどんどん

と集まってきた。

こいし「よしよしよし、みんないい子いい子、みんないい子だから、お兄ちゃんとも仲良くしてあげてね？」

そしてこいしは集まってきた犬と猫の中で小さな白い子犬を抱えると、夜見に近付いてその子犬を差し出してきた。

こいし「はい、お兄ちゃん、ちゃんと触れ合ってあげれば、ちゃんと仲良くなれるよ」

夜見「……そうなのか？まあ、頑張ってみるか」

そして夜見はこいしの差し出してきた子犬の前足の下に手を入れて恐る恐る持ち上げると、その子犬は吠えずに舌を出して尻尾を小刻みに振っていた。どうやらその子犬は夜見を嫌っていない様子だった。

こいし「良かったね、お兄ちゃん、その子犬ちゃんはお兄ちゃんのこと嫌ってないみたいだね」

夜見「……こうして、よく見てみると可愛いんだな」

そして夜見は子犬をそつと降ろして座って頭を撫でていると、こいしの周りにいた犬と猫が少しだけゆっくりと夜見の元に集まってきた。すると夜見は集まってきた犬と猫の頭を順番に撫で始めた。

夜見「よしよし、いい子だな」

こいし「…」

しばらく夜見は犬と猫を撫でていたのだが、こいしはその場で膝を床に付けて四つん這いになるとこちらに近付いてきた。

夜見「ん？こいしさん、どうしたんだ？」

こいし「…にやー」

そしてこいしは猫の鳴き声を真似するとそのまま四つん這いで夜見の元に來たと思ったら、こいしは猫のように夜見に頭を擦り付けてきた。夜見はその様子に戸惑っている、こいしは再び猫の鳴き声を真似した。

こいし「にやー にやー」

夜見「えつと… こいしさん、何を？」

こいし「にやあん」

夜見「ああ、えつと… いい子いい子？」

こいし「にやー♪」

そして夜見はこいしの帽子を取って頭を撫でるとこいしは満足そうな声で猫の鳴き声を真似した。どうやらこいしは夜見に撫でられる犬と猫を見ていると自分も撫でられなくなったようだった。

夜見「さてと、こいしさん そろそろ反対側にいる動物を捕まえにいこうか」

こいし「にやあん♪」

しばらくこいしの頭を撫でていた夜見がそう言うと、こいしは夜見の首に腕を回して抱き付いてきた。すると夜見は立ち上がりながら、こいしを抱き上げて反対側の廊下に向かうと犬と猫達が付いてきていた。

そして夜見とこいしが階段の前まで来ると、犬と猫達は階段を降りていった。夜見は不思議に思つて階段の下の方を見てみると、そこには霊力で出来た鳥籠を持つたさとりが犬と猫達を誘導していた。

夜見「さとりさんは俺と違つて動物に好かれてるんだな……少し、羨ましいな」

こいし「にやあん？」

夜見がふと思つたことを声に出すと、こいしは猫の鳴き声をまだ真似しながら心配したような声を出して首をかしげた。すると夜見はこいしに笑顔を向けた。

夜見「大丈夫だ、心配しなくて」

そう言つて夜見はこいしの背中を軽くポンポンと叩くと、こいしは笑顔になつて更に力を入れて抱き締めてきた。

こいし「にやー♪」

夜見「じゃあ、早く反対側にいるペット達も捕まえに行こうか」

こいし「にゃーん♪」

そして夜見とこいしは反対側の廊下に着くと、そこには沢山のモルモットがいた。しかしモルモット達が夜見の姿を見た瞬間にモルモット達は廊下の奥へと一斉に逃げました。

夜見「……まあ、だろうな」

そして夜見はモルモットを追いかけるために廊下の奥へと行こうとした瞬間に後ろから声をかけられた。

さとり「黒夜さん、ちよつと待つてください」

後ろからさとりにそう言われた夜見は、後ろを振り向くとそこにはさとりが立っていた。するとさとりは夜見にあることを聞いてきた。

さとり「黒夜さん、もしかして動物に避けられていませんか？」

夜見「ん？確かに好かれないが、何でわかっ……ああ、動物の心を読んだのか」

さとりはどうやら夜見が動物に好かれない理由をペット達の心を読んでわかったらしく、そしてさとりはどうして夜見が動物に好かれないのかを説明した。

さとり「ええ、そうですね。そして鳥達や犬と猫達も、どうやらペット達は黒夜さんから殺気を感じたらしいです」

夜見「殺気？いや、別に殺気を出してるつもりはないんだが？」



さとりから理由を聞いた夜見は自分は殺気は出していないと返答したが、さとりは少し考えるところ言い直した。

さとり「殺気というか、雰囲気に近いんじゃないでしょうか 動物は人より雰囲気に敏感に感じますから、黑夜さんがもつと優しい雰囲気を出せばペット達も自分から寄ってくると思いますよ」

夜見（優しい雰囲気って言われてもねえ、そんなのどうやって出せばいいんだ？）

夜見はさとのりのことには納得はしていた。しかしどうやって優しい雰囲気を出そうか考えていると、こいしが急に夜見に頬擦りをしてきた。

夜見「ん、こいしさん？」

こいし「にやあん、にやー」

さとり「…こいし？何で猫の鳴き声なんかしてるの？」

さとりはこいしが猫の鳴き声を真似して夜見に甘えているのを疑問に思って口に出したのだが、こいしはそのまま夜見に甘えていた。

こいし「にやー、にやー」

夜見「よしよし、いい子いい子」

すると夜見はその場に座ってこいしの帽子を取って頭を撫でると、こいしは頬擦りを止めて満足している様子だった。

こいし「にやおん♪」

夜見「よしよし、いい子だ」

そして夜見がしばらくこいしのことを撫でていると廊下の奥にいるモルモットが顔を出したかと思うと、ゆつくりと夜見達に近づいてきた。

さとり「黑夜さん、モルモット達が近付いてきましたよ　よしよし、いい子〜」

夜見「ん、お前達もいい子だな」

モルモット達が近付いてきたところで夜見とさとりがモルモットを撫でると、こいしも体を横に傾けてモルモットを撫で始めた。そしてしばらく夜見達はモルモットを撫でていたが、夜見はあることが気になってさとり聞いた。

夜見「なあ、さとりさん　そういうえばペット達の食費つてどのくらいなんだ？あんなにいれば相当だろ？」

さとり「ええ、そうですね　大体、家計のほとんどがペット達の食費で持っていかれてますね」

夜見「…えつと？ほとんどつてことは、もしかして俺達の食費は？」

夜見はもしかして思つて一応自分達の食費について聞くと、さとりは夜見に満面の笑みを向けてこう答えた。

さとり「ギリギリ生きられる程度はあります　でも、黑夜さんが働いてくれるお陰

で前より満足な食事が出来るようになりました。いつもお仕事をしてくれて、ありがとうございます」

さとりは夜見に対して日頃のお礼も言うのと、モルモットを撫でるのを止めてモルモット達を1階へと誘導し始めた。そしてしばらくしてその場に夜見とこいしが残ると、こいしは夜見に声をかけた。

こいし「お兄ちゃん、いつもお仕事お疲れ様♪」

夜見「……ああ、どういたしまして」

夜見はさとりに分達の食費がギリギリだったことを聞いた瞬間に、仕事が出るありがたさとお金の大切さを本気で実感したという。

## 第38話 魔法の練習 ―基礎編―

夜見（さてと、今日も出掛けないとな）

夜見はマントを羽織りながらそんなことを思つて仮面を懐に仕舞い、刀を腰のベルトに差し出掛ける準備としていた。昨日は白玉楼で妖夢の練習相手をし、今日は紅魔館に行く約束をしている日である。

夜見（それにしても、パチキュリーさんが試したいことつて何なんだ？危険なことじゃなければいいんだがな：。）

夜見は少し不安な気持ちになりながらも出掛ける準備を済ませると部屋を出て、エントランスに行つて玄関に手をかけようとした瞬間に後ろから自分を呼ぶ声が聞こえた。

こいし「お兄ちゃん！」

夜見「ん、こいしさん」

夜見が振り返ると、こいしが階段を走つて下りてこちらに向かつてきていた。そしてこいしは昨日と同じように夜見の向かつて飛び付き、首に腕を回して抱き付いてきた。

夜見「おっと！つたく、どうしたんだ？こいしさん」

こいし「えへへ、ぎゅー♪」

夜見「……まったく、こいしさんは甘えん坊だな」

そして夜見はそう言つてこいしを抱き締めると、こいしは顔を上げて首を伸ばすと夜見の頬にキスをしてきた。

チュツ

こいし「えへへ、行つてらつしやいのチュウ♪今日も頑張つて来てね！」

夜見「ああ、わかつたよ 行つてくる」

そう返事をして夜見はこいしを降ろすと玄関を開けた。そして夜見は外側から玄関を閉めようと扉に手をかけると、何やらこいしは少しだけ寂しそうな顔をしながら手を振つていた。

夜見「……こいしさん、寂しいのか？」

こいし「え？ううん、そんなことないよ それじゃあ、頑張つてね♪」

そう言つてこいしは笑顔を作つたのだが、夜見はその笑顔は無理矢理作つたことを見抜いていた。すると夜見はため息をついてこいしにこう言つた。

夜見「こいしさん、大好きだ とつてもな」

そう言つて夜見は扉を閉めたのだが、夜見は扉が閉まりきる寸前にこいしが満面の笑みを浮かべたのを見逃さなかつた。そして夜見は仮面を取り出して仮面を被り、フードを深く被ると地底の道を進んでいき地上へ出た。

夜見（うっ！眩しいな… 今日快晴か）

夜見が地上に出ると、森の中に射し込んでくる光だけでも眩しいほどの快晴だった。夜見は少しずつ目を慣れさせながら森の中を進んでいくと、紅魔館の近くにある霧のかかった湖に出た。

そして夜見は湖の近くを通って紅魔館の門にたどり着くと、美鈴が声をかけてきた。

美鈴「あ、黑夜さん、おはようございます 今日良い天気ですね」

夜見「ああ、そうだな美鈴さん 今日パチュリーさんに会いに来たんだ」

美鈴「ええ、わかっていますよ」

そう言つて美鈴は笑顔を見せると門を開けて道を譲つた。そして夜見は一言「ありがとう」とお礼を言つて道を進んで紅魔館に入ると、エントランスでは咲夜が掃除をしていた。

咲夜「あ、黑夜様 おはようございます」

夜見「おはよう、咲夜さん 今日パチュリーさんに会いに来たんだが、構わないよな？」

咲夜「ええ、構いません それではお通りください」

夜見「親切にどうも、それじゃあ」

そう言つて夜見はエントランスを進んで廊下に出ると、夜見は図書館に向かって歩い

ていった。しばらく歩いて夜見は図書館の扉の前に着くと、ゆっくりと扉を開いた。

夜見（さてと、今日は何の用なんだか）

夜見は今日は何の用で呼ばれたかを考えながら図書館の扉を内側からしつかりと閉めると、パチュリーがいる場所へ向かった。そして夜見がパチュリーがいる場所に着くと、パチュリーは相変わらず椅子に座りながら机の上に置いてある魔道書を読んでいた。

夜見「よお、パチュリーさん 約束通り来たぞ」

パチュリー「ちゃんと来たのね、黑夜 それじゃあ早速だけれど何個か聞いていいかしら？」

夜見「ああ、別に構わないぞ」

そう言つて夜見は机を挟んだパチュリーの向かい側に立つと、パチュリーは魔道書を閉じて質問をした。

パチュリー「黑夜の能力は生命に関するものだったら霊力や妖力、魔力を操れるのよね？」

夜見「ああ、そうだが？それがどうしたんだ？」

夜見はパチュリーの質問の意図がわからず不思議に思いながらも返答をすると、パチュリーは「そう」と一言だけ言つてあることを聞いてきた。

パチュリィ「ねえ、黑夜はどうして魔法使いが生まれたか知ってるかしら？」  
夜見「いや？知らないな」

パチュリィ「そもそも魔法使いついていうのはね、霊力を操れない人間から生まれたのよ」

するとパチュリィは何故か魔法使いがどうやって生まれたかを話し始めた。

パチュリィ「すると霊力を操れない人間は当然、霊力を操れる人間には力で劣るわ  
そして霊力を操れない人間は霊力を魔力に変換してその魔力を使うようになった。そ  
の後は霊力も魔力も操れない人間や最初から魔力を持っている人間が生まれたけれど  
ね」

そしてパチュリィが魔法使いが生まれた経緯を話し終えると、夜見はパチュリィの質  
問の意図と何故魔法使いの生まれた話をしたのかを理解した。

夜見「要するに俺が呼ばれた理由は、俺の能力で自分の霊力を魔力に変換して魔法を  
使えるかもしれないってことだな？」

パチュリィ「そういうこと、話が早くて助かるわ。それじゃあ最初は、黑夜の霊力か  
らどれだけ魔力に変換出来るか見てみましょうか」

そう言ってパチュリィは机の下から木の台に乗った直径30cm程の水晶玉を机の  
上に置いた。するとパチュリィは机の端に置いてあった本を取り、夜見にこう言っ



た。

パチュリー「まずはこの水晶玉に靈力がある程度送り込んでみて、その後は私が魔力に変換してみるから」

夜見「ああ、わかった」

そして夜見が水晶玉に手をかざして靈力を送り込むと、水晶玉が白い光を放ち始めた。するとパチュリーはその水晶玉の放つ光をじつと見ていた。

パチュリー「随分と純粋な靈力ね、不純な物が一切感じられないわ」

パチュリーは思ったことを口に出すと魔道書を開いて片手に持ち、もう片手を水晶玉にかざした。しかし夜見はあることが気になってパチュリーに質問をした。

夜見「そういえば一つ思ったんだが、靈力を魔力に変換してする際に何かデメリットとかはあるのか？」

パチュリー「そうね……. 特には無いけれど、この靈力がどれだけ魔力に変換できるかによつて使える魔法も限られてくるでしょうね。まあ、2:1で変換できれば良い方よ」

そう言つてパチュリーが魔法の詠唱を始めると魔道書から大きな紫色の魔方阵が浮かび上がり、それと同時に水晶玉の放つていた光が少しずつ紫色へと変化していた。

そして水晶玉の光が完全に紫色になると魔道書から浮かび上がった魔方阵は魔道書の中に消え、パチュリーは魔道書を閉じた。

パチュリー「さてと、変換してみたけれど一体どのくらっ…

するとパチュリーは何故か水晶玉を見た瞬間に言葉を詰まらせてとても驚いている様子だった。夜見は訳がわからずその場で不思議に思っていると、パチュリーはゆつくりと口を動かした。

パチュリー「す、すごいわ… 1：2で変換できるだなんて しかもとても純粋な魔力、もしかしたらどんな魔法でも扱えるかもしれないわ」

そう言っパチュリーは机の下から1つの小瓶を取り出して小瓶を水晶玉に近づけると、その小瓶の中に水晶玉に入っている魔力が液体に変わって入っていった。そして全ての魔力が小瓶の中に液体として収まるとパチュリーはその小瓶を夜見に差し出した。

パチュリー「黑夜、これを飲みなさい そしたら次は魔法について教えてあげるわ」  
夜見「えっ、ああ、ありがとう？」

そして夜見は小瓶を受け取って小瓶の中の液体を一気に飲み干すと、夜見は自分の中に明らかに霊力とは違うものを感じた。

夜見（これが魔力か… 霊力とはまた違うものだな）

夜見は自分の中に入った魔力の感覚を感じていると、パチュリーは机の上のある1冊の分厚い魔道書を開いた。そしてパチュリーはその魔道書を夜見の方に向けるように

半回転させた。

パチュリー「まず魔法を使うには魔法陣が重要になるの、ちゃんと聞いておくのよ」  
そしてそこからパチュリーはしばらく魔道書を見せながら夜見に魔法について教え始めた。

パチュリーに教えてもらったことを要約すると、魔法はルーンと呼ばれる記号を使って違う属性や効果を付与すること。そして魔法陣はルーンの集合体でルーンの並び方や数によつて魔力を通す道、いわゆる回路と詠唱が複雑になるということ。最後に魔法陣は自分の魔力で作りに出すものだということだった。

そしてしばらくパチュリーが夜見に魔法について教えた後にルーンを全部覚えていくか確認したところ、夜見は全てのルーンをちゃんと把握していた。

パチュリー「…レミイから話は聞いてたけど、凄まじい記憶力ね よく1回聞いただけで覚えられたわね」

夜見「まあ、早いことに越したことはないだろ？」

パチュリー「…それもそうね」

そう言つてパチュリーは魔道書を閉じると机の端の方に置き、違う魔道書を手に取つて立ち上がった。するとパチュリーは夜見に近付いて手に持っている魔道書のあるページを開いて渡した。

パチュリー「まあ、魔法を覚えるには実際に使って見た方が早いわ　詠唱は出来るわね？」

そして夜見は魔道書の開かれたページの詠唱の部分を見ながらあることを言った。

夜見「ああ、出来ることは出来るんだが……　1つだけ聞いて良いか？」

パチュリー「あら、何かしら？」

夜見「魔法を詠唱する意味って一体何なんだ？　魔法は魔方陣が重要なのはわかったんだが、詠唱に何か意味はあるのか？」

そう言つて夜見は魔法について疑問に思ったことをパチュリーに聞くと、パチュリーは夜見の疑問に答えた。

パチュリー「高度な魔法を使うときには魔力を複雑に練り上げて、魔法に合った魔力に変換して魔法陣に送り込まなければならぬわ　そして詠唱はいわゆる自己暗示、詠唱の自己暗示で魔力を複雑に練り上げることが出来るのよ」

夜見「成る程……でも、逆に言えば魔力をちゃんと練り上げられれば詠唱をしなくても魔法を発動させられるってことだよな？」

パチュリー「ええ、それはそうだけれど……　今回使う時にはちゃんと詠唱をしなさい　まずは魔力を練り上げる練習、そもそも備わっていなかった魔力を簡単に使いこなせるわけではないでしょ」

夜見「それもそうだな、わかったよ」

そして夜見はパチュリーに魔力を練り上げる練習と言われ、魔道書に書かれている魔法の詠唱を始めた。すると夜見の前の床に小さな赤い魔法陣が現れた。

パチュリー（難度の低い魔法だけれど初めての割には、ちゃんと魔力を練り上げられるわね…）

パチュリーは初めての詠唱がちゃんと出来ている夜見に感心していると、夜見が詠唱を終えた瞬間に目の前の魔法陣が白い光を放ち始めた。そして光が消えると魔法陣があつた場所の中心には本を抱えた小悪魔がいて、不思議に思った様子で周りをキョロキョロと見ていた。

パチュリー「黒夜、成功よ 初めてなのに良くできたわね」

小悪魔「あれ？パチュリー様、何故私はここに？呼び出し魔法なんか使かわれてどうしたのですか？」

どうやら夜見が使った魔法は呼び出しをする魔法だったらしく、小悪魔はパチュリーが魔法を使ったと思つてパチュリーに質問をした。しかしパチュリーは小悪魔にこう言つた。

パチュリー「小悪魔、忙しい所悪かつたけれど黒夜の魔法の練習に付き合つてもらつただけよ もう仕事に戻っていいわ」

パチュリーがそう言うのと小悪魔は何かを思い出したらしく、その思い出したことをパチュリーに聞いた。

小悪魔「……あの、もしかして今朝言つてた黒夜さんの魔法の練習に付き合ってもらつて……わざわざ私を呼び出すことだったんですか？」

パチュリー「そう言つてるじゃない、さっさと仕事に戻りなさい」

小悪魔「え、ああ……はい」

小悪魔は少し落ち込んだような返事をし、あまり納得していない様子そのまま図書館の奥へと飛んでいった。そして夜見は小悪魔の返事を聞いた瞬間に、かなり罪悪感を抱いた。

夜見（：：ごめん、小悪魔さん 今度来たときには何か甘いものでも作つてあげよう）  
パチュリー「さて、次の魔法を練習しましょう 27ページ先の魔法を詠唱してみなさい」

夜見「……ああ、わかった」

そして夜見はパチュリーに言われたページを開いて魔法の詠唱をすると再び床に小さな赤い魔法陣が現れ、魔方陣の中から赤い炎の玉が現れた。

パチュリー「これも成功ね まあ、基本中の基本の魔法だから出来て当たり前だけどね」

夜見（この魔法の魔法陣と詠唱、前に見た魔道書の違う魔法の最初の方に書かれてたな 確か続きは：）

すると夜見は前に見た魔道書に書かれてた魔法の詠唱を唱え始め、炎の玉はいきなり青色の炎に変化した。そしてパチュリーは炎の玉の変化に驚いていると、夜見は魔法の詠唱を終えた。

パチュリー「なっ?! 黑夜、何してるの!？」

するとパチュリーは慌てた様子で夜見の魔法の詠唱のことを聞いたのだが、夜見はパチュリーの慌てている様子を不思議に思った。

夜見「え? 何か不味かったか？」

パチュリー「相当不味いわよ! 貸しなさい！」

そしてパチュリーは慌てた様子で夜見の持っていた魔道書を奪い取るように取ると、あるページを開いて急いで魔法の詠唱をした。すると青い炎の玉を囲むように透明な境界ができた瞬間に、青い炎の玉はいきなり爆発を起こした。

パチュリー「はあ、はあ 危なかったわ、なんとか間に合ったわ」

夜見「ああ、えつと… すまない 前に見た魔道書と同じ詠唱があったからその続きの詠唱を試みたんだが…」

そうやって夜見は言い訳がましいことをしていると、パチュリーはゆつくりと夜見の

方を向いた。

パチュリー「黑夜、あれはかなりの難度の高い魔法よ。難度の高い魔法は素人が使うと魔力を無駄に多く使うし暴発の可能性も高い、だから最初は難度の低い魔法から教えてたのに……はあ」

そしてパチュリーはため息をつく。と魔道書を夜見に返した。するとパチュリーは疲れた様子で椅子に座ると夜見に少し怒った口調でこう言った。

パチュリー「黑夜、その魔道書で出せる魔法が使える程の魔力も残ってないでしょう？ 魔力を補給したかったら自分の能力でなんとかしなさい」

夜見「……ああ」

そして夜見は気まづくなった雰囲気の中で返事をして黙って自分の中の霊力を魔力に変換しようとしていたのだが、何故か霊力がうまく魔力に変換出来なかった。するとパチュリーはそれを見兼ねたのか夜見にこう言った。

パチュリー「もう少し霊力を細かく分解してから魔力に変換してみたら？ そうすればちゃんと変換出来る筈よ」

夜見「え？ ああ、ありがとう」

そして夜見はまだ気まづそうにパチュリーにお礼を言ってアドバイス通りに霊力を操ると、今度はうまく魔力に変換することが出来た。するとその様子を見ていたパチュ



リーは夜見に言った。

パチュリー「怒ってないから別に気まずそうにしないでいいわよ？それとさっきの魔法、初めてにしては上出来だったわ　もう少し練習すればすぐにでも使えるようになるわ」

夜見「・・・すまないな、気を使ってもらって」

夜見がまだ気まずそうにしながらパチュリーにそう言うと、パチュリーは夜見に笑顔でこう言った。

パチュリー「気なんか使っていないわ、それに本当よ？さっきの魔法が上出来だったのは」

夜見「・・・ありがとう、パチュリーさん」

パチュリー「どういたしまして」

そして夜見は十分に魔法が使える程の魔力を補給を終えると、パチュリーは再び立ち上がって夜見に魔法書の開くページを言った。

パチュリー「さあ、154ページを開いて　次は魔力結界の練習よ」

夜見「ああ、わかった」

夜見は返事をしてパチュリーの言った魔法書のページを開いて魔法の詠唱をしようとした瞬間、夜見はあることに気が付いた。

夜見「…パチュリーさん、何か聞こえないか？」

夜見がいきなりそう言つてパチュリーに聞いたのだが、パチュリーは特に気になる音は聞いていなかった。

パチュリー「いいえ？何も聞こえないけれど、黑夜は何か聞こえるのかしら？」

夜見「気のせいかな？何か飛んできているような音が聞こえた気がしたんだが…」

パチュリー「そう？でも私は聞こえなかつたし、空耳か何かじゃないかしら？」

夜見「…まあ、いいか それより、魔法の練習をしないとな」

そして夜見は気を取り直して魔法の詠唱を行うと、夜見とパチュリーの周りを囲むようにドーム型の結界が出来た。するとパチュリーはその結界に近付き結界を手で少し押すと、結界は内側から簡単に割れて音を立てながら崩れた。

夜見「え、パチュリーさん？何故結界を壊したんだ？」

夜見はパチュリーが結界を壊した様子を不思議に思つて聞いてみると、パチュリーは夜見に向かってこう言つた。

パチュリー「この難度の魔力結界がどのくらいの強度か見てみたかただけよ、別に気にすることはないわ」

夜見「そうなのかな…ちなみにパチュリーさんは、一体どのくらいの強度の結界を出せるんだ？」

すると夜見はパチュリーは一体どのくらいの結界が出せるかが気になり、パチュリーに聞いてみるとパチュリーはこう言いながら机の方に向かった。

パチュリー「そうねえ、言葉で説明するのは難しいから実際に見てもらった方がいいわ」

そう言つてパチュリーは机の上にあつた魔道書を1冊取り出して詠唱をすると、パチュリーの周りが透明な結界で囲まれた。するとパチュリーは夜見に向かつてこう言つた。

パチュリー「その魔道書の中で何か魔法を放つてみなさい、その魔道書の難度の魔法ならびくともしないわ」

夜見「・・・そうか、わかつた」

そう言われた夜見は魔道書の最後のページを開くと、そこに書いてあつた魔法の詠唱を始めた。すると夜見の後ろに小さな黒い魔法陣が5つ出てきて黒いレーザーが放たれたが、結界にはヒビすら入らなかつた。

パチュリー「ほら、この通りよ」

夜見「・・・」

すると夜見は詠唱が終わつたにも関わらず何かの詠唱を唱え始めた。そしてパチュリーは、レーザーの放たれる音で夜見が何の詠唱をしているかは聞き取れなかつたが、

その様子を不思議に思っていた。

パチュリー（一体何の詠唱をしているのかしら？まあ、あの魔道書の魔法は初心者用みたいなものだから何をしても無駄だけどね）

そんなことを思いながらパチュリーは夜見が魔法を放つのを止めるか、夜見が魔力を使い果たすのを待とうとしていたが、そこであることが起きた。

ピシッ パキッ

パチュリー「なっ!?何で!？」

なんとパチュリーの周りを囲んでいる結界が音を立ててヒビが入り始めたのだ。パチュリーはその様子に驚きを隠せなかったが、すぐに冷静になるとパチュリーは結界に魔力を送って結界の強度を上げた。

すると結界のヒビは修復され、再び夜見の放つレーザーを防いだ。

パチュリー（あ、危なかったわ…それにしても、黒夜は一体何をしたのよ）

そしてしばらく防いでいると夜見は魔道書を閉じて魔法を放つのを止めた。それに合わせてパチュリーも結界の魔法を解くと夜見に詠唱を終えた後に何の詠唱をしたのかを聞いた。

パチュリー「黒夜、魔法の詠唱を終えた後に一体何の詠唱をしたの？」

夜見「何の詠唱って…強化ルーンを魔法陣に付与してからまた魔法の詠唱をしたん

だ」

そう言つて夜見がそう答えるとパチュリィは新たな疑問が浮かんだので、続いて新たな疑問について聞いた。

パチュリィ「強化ルーンを付与したつて、そしたら魔法の詠唱が変わるのよ？何で強化ルーンを付与した場合の詠唱を知っているのよ」

夜見「…もしかしてパチュリィさん、気付いてないのか？魔方陣のルーンの組み合わせで、詠唱は法則性に従つて変わるよ」

夜見がそう言うのとパチュリィは驚いた様子で夜見にあることを聞いた。

パチュリィ「規則性があるですつて!?!しかも黑夜は、この短時間で理解したつていうの!?!」

夜見「ああ、そうだ。なんなら少し魔道書を見ながら、どんな規則性で変わるか教えるか?」

パチュリィ「ええ！是非教えて頂戴！」

そしてパチュリィが魔道書を渡すと夜見は持つていた魔道書をパチュリィに持つてもらい、魔道書のページを一緒に色々見比べて詠唱の変わり方を夜見は教えた。しかし夜見が教えていくたびにパチュリィは混乱し始めていた。

パチュリィ「え〜と?つまりここに範囲拡大のルーンが付与されてるからここに詠唱

が加わるの？」

夜見「いや、違うな 強化ルーンの後に来てるから回路が変わって、ここに詠唱が加わるんだ」

パチュリー「え？でもそれだったらさっきの魔方陣の説明と噛み合わなくなるわよ？」

夜見「いや、そもそも魔力の性質が違うんだ だから詠唱の加わる場所も変わる」

パチュリー「…… 最初から聞いてたけど、複雑すぎてまったく理解できないわ」

そう言っパチュリーはまったく理解できないで困っていると、ため息をついて続けてこう言った。

パチュリー「私の方が魔法を長く扱ってきたのに、どうして貴方はこんなすぐに魔法のことを覚えるのよ しかも私の気付かなかった詠唱が変わる法則性まで理解して……」

パチュリーがそう言うのと夜見は少し困ったように言った。

夜見「そう言われてもな…… 俺は昔から法則性を見つけてることをしていたからな 多分その能力が今、生きたんだと思う」

パチュリー「どんな知能と観察力よ、まったく」

そう言っパチュリーは少し不機嫌そうに椅子に座ると、夜見に対してあることを聞

いた。

パチュリー「それで、どうするの？もう少しここで魔法の練習をする？それとも魔道書を借りて帰って練習をする？」

パチュリーにそう聞かれた夜見は少し考え込むと、夜見はすぐに答えを出した。

夜見「そうだな……魔法が暴発するのは困るから、もう少しここで練習をして、安定して魔法が使えるようになってから帰ることにするよ」

パチュリー「そう、それならあまり騒がしくしないでね 私はここで魔道書を読んでるから」

パチュリーはそう言うのと机の上に置いてある魔道書を手に取り、魔道書を読み始めた。そして夜見は机の上に置いてある魔道書の中で難度のあまり高くない魔道書を取って、どの魔法を練習しようか眺めているとある人物が目の前に現れた。

咲夜「パチュリー様、黑夜様、昼食の用意が出来ました」

その人物は咲夜でどうやら昼食の時間になっていたらしく、パチュリーと夜見を呼びに来たようだった。しかしパチュリーは咲夜にこう言った。

パチュリー「咲夜、私はいつも通りここで食べるから持ってきてくれないかしら？」

夜見「咲夜さん、すまないが俺もここで食べるから俺の分も頼めるか？」

咲夜「わかりました、少々お待ちください」

そして夜見もパチュリーに続けて図書館で食事をすることを言うと、咲夜が一瞬だけ姿を消した。するとパチュリーの向かい側に椅子が一つ置かれ、机の上には料理が置かれていた。

咲夜「それでは、ごゆっくり」

そう言つて咲夜が丁寧にお辞儀をすると、その場から消えてしまった。そして夜見はパチュリーの向かい側に置かれた椅子に座り、夜見とパチュリーが魔道書を机に置くと2人は食事を始めた。

夜見・パチュリー「いただきます」

そして夜見とパチュリーが食事をしていると、パチュリーが夜見にある質問をしてきた。

パチュリー「ねえ、黒夜 どうしてここで食べることにしたの？別にレミイ達と食べればよかつたじゃない」

夜見「いや、少しでも魔法の練習をしたいからな ここで食べた方が効率的だろ？」  
パチュリー「…そう」

そして夜見とパチュリーは食事を済ませ、夜見が立ち上がると同時に皿と夜見の座っていた椅子が消えた。おそらく咲夜が片付けたのだらうと思いつながら夜見は再び魔道書を手を取った瞬間、再びある音が今度は鮮明に聞こえてきた。



夜見「なあ、パチュリーさん 今度は聞こえたよな？」

パチュリー「ええ、嫌な予感しかしないわ」

パチュリーがそう言った瞬間に何処からか爆発音がして、少し揺れたかと思うと虹色のビームがこちらに向かってきていた。すると夜見は魔法書を開いて魔法結界のペー  
ジを開くと詠唱をせずに透明な結界を作り出してビームを防いだが、結界がちゃんと作  
られていないのかヒビが入り始めた。

夜見（くっ！さすがに詠唱しないで魔力を練り上げるのはまだ早いかな!?）

そして夜見は魔力をなんとか上手く練り上げようとしていると、パチュリーが手を伸  
ばして結界に魔力を送り結界を直し始めた。すると結界はどんどんと修復されていき、  
虹色のビームが途切れると同時にパチュリーが結界を解いて夜見にこう言った。

パチュリー「まだ魔法を詠唱無しで発動させるのは難しそうね もう少しゆっくり魔  
力を練り上げてみたら？」

夜見「いや、そんなことしてたら、明らかにあのビームに巻き込まれてただろ」

パチュリー「大丈夫よ、そもそも私が防ごうとした瞬間に黑夜が結界を張ったのだから  
それと、魔法結界のチョイスは中々良かったわ」

夜見「…それはどうも」

そして夜見とパチュリーが会話をしているとビームが飛んできた方向からある人物

が箒に乗ってやって来た。その人物はもちろん魔理沙で、魔理沙は夜見を見た瞬間に驚いた。

魔理沙「げ！夜見じゃないか!?何でいるんだよ！」

夜見「別に何だっついていいだろ それより魔理沙さんは何しに来たんだ？また本を盗みに来たのか？」

魔理沙「私は本を盗みに来たんじゃない 本を一生借りに来たんだぜ」

夜見「おいおい、いい加減にしてくれないか？魔理沙さんの家から本を運ぶの結構大変だったんだぞ？」

魔理沙「な!?!最近家から本が消えたかと思つたら、夜見のせいだったのか！不法侵入は犯罪なんだぞ！」

夜見「魔理沙さんに関しては不法侵入と窃盗だがな？」

夜見と魔理沙がそう言つて会話をしているとパチュリーは夜見に小声で話しかけてきた。

パチュリー「ねえ、黑夜 ちょっといいかしら？」

夜見「ん？どうしたんだ？」

そして夜見も小声で返事をしながら振り返ると、パチュリーは夜見にある提案をした。

パチュリー「あの魔法使いを追い出すついでに、魔法の実戦練習をしてみたらどうかしら？」

夜見「いや、俺はまだ詠唱をしないと魔力をちゃんと練り上げられないんだぞ？」

パチュリー「大丈夫よ、多少はカバーしてあげるから」

夜見「…そうか、じゃあ頼んだぞ」

パチュリー「ええ、任せて」

そして夜見はパチュリーとの会話が終わると魔理沙の方に向き直り、夜見は魔理沙に向かつてこう言った。

夜見「魔理沙さん、すまないが追い出させてもらうぞ」

魔理沙「私を追い出すって？それなら仕方無いな、弾幕ごっこで勝負だぜ！」

そう言つて魔理沙は帽子の中から八卦炉を取り出すと魔理沙の背後に2つの黄色の魔法陣が現れた。それに対して夜見は自分の中の霊力を魔力へと変換した。

夜見「ああ、いいだろう」

そして夜見の魔法の実戦練習もとい、魔理沙を図書館から追い出すための弾幕ごっこが始まった。

## 第39話 魔法の練習 ―実践編―と…

魔理沙「ほらほら、いつもの翼はどうしたんだ？」

夜見「魔理沙さんには関係ないだろ？」

魔理沙「まあ私にとっては、やりやすくして助かるんだけどな！」

魔理沙との弾幕ごっこが始まると夜見は今現在、地上で魔理沙の魔法陣から放たれる弾幕を回避していた。何故夜見がそのようなことをしているのかは、とても単純な理由だった。

夜見（今回の弾幕ごっこは魔力の実践練習だからな、魔力だけで戦わないと意味がない）

そして夜見は魔理沙の弾幕を回避しながら霊力を魔力に変換し続けていると、魔理沙は弾幕の密度を上げてきたが夜見はギリギリで弾幕を躲かしていた。

魔理沙「反撃はしないのか、夜見？ここまじや負けちゃうぜ？」

夜見「ああ、そうだな　そう言うなら、そろそろ反撃してやる」

そして夜見は魔理沙の方に手のひらを向けると、手のひらに黒い魔法陣が現れて弾幕が放たれた。すると魔理沙は夜見が魔法を使って弾幕を放つことに驚いたが、軽々と

魔理沙は夜見の弾幕を躲した。

魔理沙「おお、魔法も使えるようになったのか!? だけど、こんな密度じゃ私は倒せないぜ?」

夜見「ああ、だろうな」

そう言つて夜見は手のひらから弾幕を放ちながら背後に黒い魔法陣を3つ作り出すと、その魔法陣からも弾幕が放たれた。それに対抗して魔理沙は魔法陣を4つに増やして弾幕を相殺してきた。

魔理沙「中々強い魔力だな それなら私も、火力を上げてくぜ!」

魔理沙がそう言つて弾幕に魔力を更に込めると、魔理沙の弾幕は夜見の弾幕を突き破り始めた。

夜見（くっ! 押されている!）

すると夜見はこのままではまずいと思い、回れ右をして弾幕を放ちながら走つて逃げ始めたが、魔理沙は弾幕を容赦なく放ちながら追い掛けてきた。

魔理沙「あつ、こら! 待つんだぜ!」

そう言つて魔理沙は夜見のことを追い掛けるが夜見は詠唱をして魔力を練り上げると、本棚の角を曲がった瞬間に赤い魔法陣を床に仕掛けた。そして魔理沙が夜見を追つて魔法陣の上を通ろうとした瞬間に、その魔法陣が光つたかと思うと小さな弾幕が無数

に放たれた。

魔理沙「どわっ!? あ、危なかったぜ」

しかし魔理沙はすぐに気付いて間一髪で後ろに下がって弾幕を躲すと、その隙を突いて夜見は魔理沙に向けて弾幕を放つが避けられてしまった。

魔理沙「おっと! そう簡単にはやられないぜ?」

夜見「それなら、これはどうだ?」

そして夜見は再び魔力を練り上げて少し大きい白い魔法陣を作り出すと、そこから何発かに別れてレーザーが魔理沙に向かって放たれた。しかしレーザー同士の間隙は大きい空間があったので、魔理沙はほとんど動くことなくレーザーを避けた。

魔理沙「おいおい、夜見 そんな弾幕じゃ私を倒すなんて到底無理だぜ?」

夜見「ああ、わかってる だからこうしたんだ」

魔理沙「はあ? 何を言ってるんだ?」

魔理沙は夜見の言ったことに不思議に思っていると、魔理沙の背後から先程避けた筈のレーザーが飛んできて魔理沙の背中に直撃した。

魔理沙「あだっ!? な、何だ!」

魔理沙は驚いて後ろに振り向くと先程避けたレーザーの弾幕が全て迫ってきていた。

その光景を見た魔理沙は慌ててレーザーの弾幕を避けた。

魔理沙「おわっと！何で弾幕が返ってきてるんだよ!？」

そして魔理沙はなんとかレーザーの弾幕を全て回避したのだが、魔理沙はレーザーの弾幕が何故返ってきたのがわからなかった。すると魔理沙は周囲を観察してあることに気がついた。

魔理沙「なっ!?!魔力結界!？」

なんと夜見と魔理沙の周りが、いつの間にか魔力結界によって囲まれていたのだ。すると夜見は魔理沙に向かって魔力結界とレーザーの弾幕の種明かしをした。

夜見「さつき魔理沙さんの引掛かっただけは2段階構えで、弾幕を放った後に魔力結界を展開するんだ。そしてさつき俺の放った弾幕は跳弾する。ここまて言えばわかるだろう?」

魔理沙「なるほどな、レーザーの弾幕は魔力結界に当たって跳ね返ってきた訳か。それならレーザーの弾幕は、もう問題ないぜ」

魔理沙はそう言って器用に箒の上で立ち上がるとレーザーの弾幕が魔理沙に向かっていくが、魔理沙は体を軽く反らしただけで躲わした。

魔理沙「ふふん♪跳ね返ってくる弾幕は、私の得意分野なんだぜ!」

そう得意気に言って魔理沙はスケートボードに乗ったような体勢になると、こちらに向かつて高速で飛んできながら弾幕を放ち始めた。すると夜見はその弾幕を避けなが

ら黒い魔法陣を作り出して弾幕を放つが、魔理沙は夜見の周りを高速で飛び回っているため中々狙いが定まらなかった。

夜見（狙いがつけにくい……それに魔力もそろそろ尽きそうだ）

そしてしばらく夜見は弾幕を避けつつ弾幕を放っていたが、いきなり魔法陣がポロポロと崩れ落ちると周りの魔力結界も同時に崩れ落ちた。どうやら夜見の思っていた通りに魔力が尽きてしまったようだった。

魔理沙「お、魔力切れか？これはチャンスだぜー！」

すると魔理沙はこのチャンスの逃がさないように魔法陣の数を増やして弾幕を放ってくるが、魔力切れの筈の夜見の周りにいきなり魔力結界が展開されて弾幕を防ぎ始めた。

魔理沙「なっ?!魔力切れのじゃないのか!？」

夜見（この魔力結界……まさか）

そう思つて夜見は周囲を見渡すと本棚の陰で魔道書を開いているパチュリーを見た。するとパチュリーは本棚の陰から口パクで夜見にこう伝えた。

パチュリー『黒夜、今の内に魔力を補給しなさい』

夜見（ありがとう、パチュリーさん）

そしてパチュリーは本棚の陰からどこかへ行つてしまうと夜見はその場で靈力を魔



力に変換し始めるが、魔理沙は魔力結界を破ろうと更に魔力を込めた弾幕を放ってきた。しかし魔理沙は何発弾幕を放つても魔力結界はびくともしなかった。

魔理沙「だー！もう、面倒だぜ！」

そう言つて魔理沙は魔力結界がびくともしないことにイラつき始めると、スペルカードを取り出して八卦炉を構えるとスペルカードを発動させた。

魔理沙「恋符 マスタースパーク！」

そう言つて魔理沙がスペルカードを発動させると八卦炉から虹色のビームが放たれた。魔力結界はそのビームを浴び続けていると魔力が少しずつ無くなってきてきているのか、それとも魔理沙の「恋符 マスタースパーク」の威力が強いのかヒビが少し入り始めた。

しかしそうしている内に夜見は魔力の補充を終えると床に詠唱で白い魔法陣を作り出し魔力結界が壊れた瞬間に魔法陣を踏んだが、魔理沙の「恋符 マスタースパーク」が床に当たると爆発を起こして煙が立ち込めた。

魔理沙「どうだ夜見！これで倒れなくとも、大ダメージは確実だぜ！」

魔理沙は煙の中にいるであろう夜見に向かって勝利を確信しながらそう言ったのだが、夜見の声は魔理沙の背後から聞こえてきた。

夜見「ああ、当たればな 毎回凄い威力だ」

魔理沙「なっ!?!いつの間に!」

魔理沙は後ろに振り返ると、そこには腕を組んで爆発を見ていた無傷の夜見がいた。しかし魔理沙は夜見の足元に白い魔法陣があることに気付き、夜見がどうやって後ろに回り込んだかを理解した。

魔理沙「転送魔法まで使えるのか!?!これは厄介な相手かもしれないぜ……」

魔理沙は少し不味いなという顔をしてそう言ったのだが、夜見はその様子を不思議に思った様子でこう言った。

夜見「何を言ってるんだ? 寧ろ厄介な相手をしているのはこっちだ、俺はまだ魔力を使い始めて数時間しか経っていいいからな」

魔理沙「……へえ、それはいいことを聞いたぜ」

夜見「……何を企んでいるんだ?」

魔理沙はそう言つてニヤツと笑みを浮かべて箒に股がると、夜見は警戒をしながら弾幕を放つための魔法陣を展開して弾幕を放つ準備をした。すると魔理沙は急にクスクスと笑い始めた。

夜見「……何が可笑しい?」

魔理沙「おいおい、夜見 魔法陣は無闇に展開しない方がいいぜ?」

夜見「……どうということだ?」

すると魔理沙がそう言った直後、夜見は警戒をしていたのだが急に夜見の背後が爆発して前に吹き飛ばされた。

夜見「がっ!?!ぐあっ!」

予想もしていないことが起きて訳がわからないでいる夜見は宙を舞ったかと思うと、すぐに床に落ちて何mか転がった。そして夜見は止まった所でようやく立ち上がって爆発が起きた場所を見ると、そこは夜見が展開した魔法陣と同じ場所だった。

夜見「くっ! 一体何が?」

魔理沙「あっはっは! 夜見、驚いたか? だから魔法陣は無闇に展開するなって言ったんだぜ」

魔理沙は訳がわからないで混乱している夜見を見て笑っていると、夜見はすぐに冷静になって何をされたのかを考えながら魔理沙に質問をした。

夜見「... 魔理沙さん、一体何をしたんだ?」

魔理沙「さあな、そう簡単に種明かしをしたら面白くならないぜ?」

そう言つて魔理沙は弾幕を夜見に向かって放つと、夜見は魔法陣を展開するのは危ないと判断して弾幕を全て避け始めた。そしてしばらく夜見が弾幕を躲していると魔理沙は不意に青い液体が入った小瓶を何個か取り出すと、それを夜見の近くに落ちるよう軽く放り投げた。

夜見（前に博麗神社で戦った時と同じ様な物か？）

夜見はそう思うと同時に以前博麗神社で戦った時に瓶を投げられ、それを夜刀で斬ったことが原因で魔理沙に負けたことを思い出した。

すると夜見は一番近くに落ちてきた瓶だけをキャッチすると後ろに跳び、他の瓶が床に当たって瓶が砕けると中に入っていた液体は青い煙となつてその場に立ち込めた。

魔理沙「ちっ！やっぱりそう簡単には当たつてくれないか」

夜見（やっぱり煙になつて立ち込めたか… それにしても、あの煙の効果はなんなんだ？）

そう不思議に思つて瓶の中の液体を見てみると夜見はあることを思い付き、魔理沙にバレないように瓶の蓋の裏側にとても小さな魔法陣を展開させると瓶を魔理沙に向かつて投げつけた。

魔理沙「お！返してくれるのか？助かるぜ」

そう言つて魔理沙は夜見の投げた瓶を片手でキャッチした瞬間、夜見は魔力を練り上げて魔法陣に注ぎ込むと瓶が砕けて魔理沙は青い煙に囲まれた。

魔理沙「ぶあっ!?!げほっげほっ」

そして魔理沙は慌てて煙の中から飛び出て咳き込んでみると、1回だけ箒がグラツと揺れて落っこちそうになった。しかし魔理沙はすぐにバランスを整えるといつも通り

に箒に股がって宙に浮いていた。

魔理沙「くっ！まさか瓶の中に魔法陣を仕組んでただなんて気付かなかったぜ、よくもやってくれたな！」

夜見「いや、それを持ってきたのは魔理沙さんだろ？それに、俺が丁寧にそのまま瓶を返すとも思ったか？」

魔理沙「そ、それもそうだぜ……」

夜見「一応言っておくが、返ってきた物は無闇に受け取らないで警戒しておいた方がいいぞ」

魔理沙「くっ！夜見は毎回私に言い返しをするな！「魔符 ミルキーウェイ」！」

そして魔理沙はいきなりスペルカードを取り出して発動させると、魔法陣から星の形をした弾幕が大量に放たれた。すると夜見は弾幕をなんとか避けながら詠唱をして、魔力結界を張って魔理沙の弾幕を全て防ぎ始めたが魔理沙は何故か余裕そうな表情だった。

魔理沙「魔力を使い始めたばかりのくせに、私のスペルカードを防ごうだなんて100年早いぜ！」

そう言っただけで魔理沙は夜見の魔力結界なんかすぐに壊せるだろうと思っただけで弾幕を放ち続けていたが、一向に魔力結界は壊れるどころかヒビすら入らなかった。すると魔理沙

は驚いた様子のまま、明らかに動揺していた。

魔理沙「な、何で壊れないんだよ!? まさか私のスペルカードを防げるほどの結界なのか!?!」

夜見「まあ多分そうなんだろうな、実際に結界はヒビすら入ってないしな」

魔理沙「魔力使い始めたばっかの奴がそんなこと出来る筈無いだろ! 魔力を使い始めたばっかりって嘘ついたな!」

夜見「嘘はついていないが、魔力の使い方は理解してきているぞ? それと、魔理沙さんのスペルカードを防ぐのに100年もかからなくてよかった」

「どうやら夜見は魔理沙がさつき言ったことを真に受けていたらしく素直にそう言ったのだが、魔理沙にとっては調子に乗って挑発しているようにしか聞こえなかった。

魔理沙「もういい加減怒ったぜ! すぐにその余裕そうな態度をとれないようにしてやる!」

そして魔理沙は夜見が挑発していると勘違いしたのと、言い返しをされたことが相まって怒りだすと魔理沙は2枚のスペルカードを取り出し、1枚目のスペルカードを発動させた。

魔理沙「[恋心 ダブルスパーク]!」

スペルカードを発動させると魔理沙は少し距離をとって八卦炉を構えると虹色の

ビームを放ち、そのビームを魔法陣を使って放ち続けると別の方向から八卦炉で同じ虹色のビームを放ってきた。そしてその2つのビームが魔力結界に直撃し続けていると少しずつ嫌な音を立て、遂にヒビが入り始めた。

夜見（このままじゃ不味いな 一度転送魔法で逃げるか）

そして夜見は魔力結界の中で魔法陣を作り出すと夜見からはビームで見えていなかったが、魔理沙はニヤツと笑うところ言った。

魔理沙「夜見、言った筈だが忘れたか？魔法陣は無闇に展開するなって」

夜見（そういえばそんなこと言ってたな…）

夜見は魔理沙に言われたことを思い出したが特に気にもせず、魔力を魔法陣に注ぎ込もうとした瞬間に再びあることが起きた。

ドカアアアアアアア

なんと、再び魔法陣があつた場所から爆発が起きて煙が立ち込めたのだ。すると魔理沙はその煙の中に向けて今度は黄色の液体が入った瓶を何個か投げ入れると煙の中で爆発が起こり、煙が吹き飛ばされると同時に煙の中にいた夜見も吹き飛ばされて宙を舞った。

夜見「ぐっ… あ… な、何が…？」

夜見はどうやら爆発に直撃してしまつたらしく、痛みでまともに声が出せない状態で

絞り出すようにそう言ったのだが、夜見はそのまま落下して地面に叩きつけられた。

夜見「がっ!?がぁ…ぐっ…」

魔理沙「あっはっは!ちゃんと忠告しておいてあげたのに、無視するからそんなことになるんだぜ!」

夜見(一体…何が起きた!?確か魔法陣に魔力を注ぎ込もうとした瞬間に、いきなり魔法陣が爆発して…)

そして夜見はゆっくりと立ち上がりながら起きたことを思い出しながら魔理沙が一体何をしたのかを考えていると、夜見はあることが思い浮かんだ。

夜見(…まさか、そういうことか?)

すると夜見は自分の背後に魔力を込めた魔法陣を作り出したのだが、今度は何故か爆発することがなかった。そして次に夜見は自分の前に魔力を込めずに魔法陣を作り出した瞬間に、今度はその魔法陣が爆発を起こしたのだ。

しかし夜見は爆発と同時に魔力結界を作り出したため無傷で済んだ。

夜見「…なるほどな、随分と面白いことをしてくれるな」

そう言いながら夜見は自分の作り出した魔力結界を解くと、魔理沙は夜見にあることを聞いた。

魔理沙「ん?もしかして私が何をしていたのか気付いたのか?」



魔理沙がそう聞くと夜見は頷いて、魔理沙がどんなことをしていたのかを言った。

夜見「ああ、ようやくな まさか魔理沙さんが俺の魔法陣に魔力を注ぎ込んでわざと暴発させるとは思わなかった」

夜見がそう言うのと魔理沙は笑いながらこんなことを言ってきた。

魔理沙「いやあ、夜見が魔力を使い始めてから数時間しか経ってないって言うから、まさかと思って魔法陣に魔力を送ってみたらそのままかだったぜ だから私はまだ魔力が送られていない魔法陣に不適切な魔力を注ぎ込んで、わざと暴発させたって訳だ」

夜見「魔法陣の性質を逆手に取るだなんて、俺でも思い付かなかったぞ」

夜見はそう言って魔理沙のことを軽く褒めると、魔理沙は誇らしそうな様子でこんなことを言ってきた。

魔理沙「魔法陣は基本的に相手に利用されないために、あらかじめ少しだけ自分の魔力を注ぎ込んでおくのが基本だぜ？ 勉強になっただろ？」

夜見「ああ、勉強になった ありがとう」

夜見はそう言って魔理沙に向かってお礼を言ったのだが、夜見は言葉に対して全く別のことを思っていた。

夜見（良かった、これでとりあえず怒りは収まってくれた筈だ）

そう思って夜見は安心してきっていたのだが、魔理沙は笑いながら八卦炉を夜見に向け

てこんなことを言ってきた。

魔理沙「あ、少し言い忘れてたぜ 私は褒めてくれたからって言い返しと挑発への怒りを忘れる程、頭は悪くないぜ？」

夜見「……まあ、そうだよな」

魔理沙「これで終わりだぜ！」「魔砲 ファイナルマスタースパーク！」

そう言つて魔理沙は夜見に向けてスペルカードを発動させると夜見は身構えたのだが、何故か八卦炉からビームが出るどころかビームが出る気配すらしなかった。

そしてしばらくお互いの間に沈黙が流れると、夜見は魔理沙に声をかけた。

夜見「えっと、どうしたんだ？」

魔理沙「……わからないぜ 八卦炉に何故か魔力が注ぎ込められないんだ」

夜見「……どうするんだ？ 本気でこれで終わりにさせるっていう雰囲気出してたけど」

魔理沙「う、うるさい！ 今すぐ発動させてやる！」

そう言つて魔理沙は頑張つて八卦炉に魔力を注ぎ込み始めると、少しずつだが八卦炉に魔力が集まってきた。そして3分程経つ頃にはやっと1割程の魔力を注ぎ込められた。

夜見「……まだなのか？ そろそろ待つのもどうかと思つてきたんだが」

魔理沙「もう少しだけ待ってくれ！5分でいいから！」

夜見「ああ、わかった」

夜見（…）「そもそも何で俺は、律儀に魔理沙さんが攻撃できるまで待ってるんだ？」

夜見は何故自分がこんなことをしているのだろうと疑問を感じながらも、律儀に魔理沙が八卦炉に魔力を注ぎ込むのを待った。ちなみに魔理沙が八卦炉に魔力を注ぎ込み終わるのは合計で20分程経った頃だった。

魔理沙「よし、やつと準備出来たぜ！」

魔理沙がそう言うのと夜見の方に八卦炉を両手でしつかり構えて、今にも「魔砲 ファイナルマスタースパーク」を放とうとしていると、夜見はこんなことを思った。

夜見（随分と時間がかかったな、今日は調子でも悪いのか？…）「まあ、今は防ぐことだけを考えるか」

魔理沙「行くぜ、夜見！」「魔砲 ファイナルマスタースパーク！」

そして魔理沙は夜見に向かって容赦なく極太の虹色のビームを放つと、夜見は全力で今ある全部の魔力を使いきるつもりで魔力結界を張ろうとした。

しかしその瞬間に夜見の目の前にある人物が舞い降りると、その人物は手に持っている物でビームを防ぎ始めた。

魔理沙「なっ!?何でお前がここにいるんだよ！」

夜見「…レミリアさん？」

なんと、その人物とは紅魔館の主であるレミリアだった。レミリアは手に「神槍 スピア・ザ・グングニル」を持っており、その紅い槍で魔理沙のビームを防いだのだ。

レミリア「ぐっ!?!うう…ぐう!せりやあ!」

するとレミリアは紅い槍を無理矢理横に振るってビームを掻き消すと、体力を相当使ったのか肩で息をしていた。そしてレミリアはすぐに息を整えると、夜見の方に振り返って素っ気ない様子でこんなことを聞いてきた。

レミリア「黑夜、大丈夫だったかしら？」

レミリアがいきなり現れてそんなことを聞いてきたことに夜見は少し不思議に思ったが、とりあえず夜見は無事であることを伝えた。

夜見「ああ、大丈夫だ…」

レミリア「そう、それなら良かったわ」

レミリアは夜見の返事を聞くと笑顔でそう言ってきたのだが、夜見は何故レミリアが図書館に来たのが気になった。

夜見「そんなことより、どうしてレミリアさんはここに来たんだ？」

すると夜見がそう言ってレミリアが図書館に来た理由を聞くと、何故かレミリアは顔を少し赤くすると少し視線を逸らしてこう答えた。

レミリア「べ、別に！騒がしいと思ったから、気になって来ただけよ！」

夜見「…レミリアさん？」

レミリア「そ、そんなことより黒夜！今から私の部屋に行くわよ！」

レミリアは何故か少し動揺しているような様子でそう言ってスペルカードを解除し、夜見の腕を掴んで図書館から出ようとした。しかし夜見はまだ魔理沙を追い出していないのでその場に留まろうとした。

夜見「いや、ちよつと待ってくれ」

夜見はそう言ってレミリアに抵抗してその場で動かないでいると、レミリアは夜見の顔を少し睨んでこんなことを聞いてきた。

レミリア「何？私の部屋に行くのがそんなに嫌かしら？それとも、ここにまだ用事かあるとかかしら？」

夜見「後者の方だ、魔理沙さんを追い出さないといけないくてな」

そして夜見はそう言ってレミリアに腕を放してもらおうとしたのだが、レミリアは腕を放さずにこう言ってきた。

レミリア「そんなのパチエに任せればいいじゃない、さっさと行くわよ」

夜見「いやいやパチュリーさんに頼まれたんだ、それを放棄するわけにはいかないだろ？」

レミリアは魔理沙を追い出すのはパチュリーがやればいいと言ったのだが、夜見がパチュリーに魔理沙を追い出すのを頼まれたことを言うと、レミリアは夜見の腕をゆつくりと放した。

レミリア「… お人好し過ぎなのよ わかったわ、5分だけ待ってあげるわ」

夜見「ああ、すぐに終わらせる」

そう言つて夜見は振り返つたのだが魔理沙の姿は無く、どうやらレミリアと話している間にこつそりと何処かに行つてしまつたようだった。しかし夜見は床に白い魔法陣を作り出して魔力を送り込むと、夜見はそれを踏んで転送された。

そして夜見が転送された先は、ちょうど本を盗ろうとしていた魔理沙の後ろだった。

夜見「お、ラッキー」

夜見がそう言つと魔理沙は本を盗ろうとしていた手を引つ込めて、恐る恐る振り返つて夜見の姿を見ると驚いた。

魔理沙「なっ!?!何でここがわかつたんだ!?!」

夜見「いや、なんとなくここかなつて」

そう言つて夜見は黒い魔法陣を背後に作り出すと魔理沙は急いで逃げようと走り出したが、夜見は魔理沙を囲むように魔力の壁を作り出した。すると魔理沙は夜見の方を向いてこんなことを言い出した。

魔理沙「ま、待ってくれ！降参だぜ！」

夜見「降参？急にどうしたんだ？」

夜見は魔理沙がそんなことを言い出すとは思わず夜見は理由が気になったので聞いてみると、魔理沙はこう言った。

魔理沙「多分あの青い煙の影響で魔力が使えなくて戦える状況じゃないんだぜ、降参するから見逃してくれないか？」

夜見（多分って…つまりは得体の知れないのを人に向かって投げ付けてきたのかしかも見逃してくれて、虫が良すぎるだろ）

夜見は魔理沙の行動と言っていることに呆れていると、魔理沙はその様子を見て追加でこう言ってきた。

魔理沙「わ、わかった！それなら夜見の言うことを出来る範囲で1つ何でも聞いてやるぜ！それならいいだろ？」

夜見（出来る範囲で何でもか それなら…）

すると夜見は魔理沙を囲んでいる魔力の壁の中に魔法陣を作り出した。魔理沙は夜見のその行動を不思議に思っていると、夜見は魔理沙にこう言った。

夜見「実はまだ試したい魔法があるんだ、だからその練習に付き合ってくれ」

魔理沙「え？それってつまり、私は魔力が使えない状況で避けなきゃいけないってこ

とか？」

夜見「ああ、そう言うことだ」

夜見がそう返事をするに次々と容赦無く魔法を魔力の壁の中で発動し始めた。魔理沙はなんとか魔法を避けようとしていたが当然すべて避けられる筈もなく、3分程経った頃には魔理沙は気絶していた。

夜見（∴ 少しやり過ぎたか？まあ、窃盗と不法侵入の刑罰ってことにすればいいか）  
そして夜見は魔力の壁を解除すると再び床に白い魔法陣を作り出し、魔力を送り込んで魔法陣を踏むとレミリアの目の前に出た。

レミリア「早かったわね、もう追い出したのかしら？」

レミリアは魔理沙を追い出すには随分早く帰ってきたと思ったのか、夜見にそう聞いてみると夜見はこう返した。

夜見「いや、色々あつて気絶させた」

レミリア「まあそんなことだろうと思つたから、もう咲夜に外に放り出すように頼んどいたわ さあ、早く行きましょう」

レミリアはそう言うに夜見の腕を掴むと、一緒に図書館を出てレミリアの部屋に入つていった。そしてレミリアはベランダに出て白い椅子に座ると、夜見は白いテーブルを挟んだ向かい側の椅子に座った。



夜見「それで、用件はなんだ？何か用があるから呼んだんだろ？」

すると夜見はレミリアに呼ばれた理由を聞いてみると、レミリアは少し緊張している様子で返答をした。

レミリア「え、ええ、もちろんよ」

しかしレミリアは返答をしたものの、何故かもしもじとした様子で一向に話す気配がなかった。そして夜見は机に肘を置いて頬杖をついてしばらく待っていると、レミリアはようやく口を開いた。

レミリア「く、黑夜？用って言うのは、その…え、宴会の時のことなだけど…」  
しかしレミリアは何故か緊張しているような様子で喋り出した。そして夜見は頬杖を止めると、中々話が進まなさそうなので自分から聞いていくことにした。

夜見「宴会？何かあったのか？」

レミリア「あ、あった…じゃない ほ、ほら、フランと咲希の言ってた…事…」  
夜見（…えっと、フランドールさんと咲希さんと話した事って確かあまり遊んでくれないって話だったよな）

夜見は一昨日の宴会でフランドールと咲希と話した内容を思い出すと、夜見は何かを理解したかのように頷いてレミリアに言った。

夜見「ああ、フランドールさんと咲希さんと遊んでくれってことか それなら別に構

わないぞ?」

レミリア「違う!その話じゃないわよ!」

するとレミリアはいきなり怒った様子で夜見に怒鳴ってきた。その様子に夜見はビックリしていると、レミリアは少し顔を赤くして視線を少し夜見からずらした。

夜見(え、違うの?いや、でも、フランドールさんと咲希さんと話した事ってそれだけだよな……他に何か話したか?)

レミリア「と、惚けてるの!?黒夜が人里へ買い物に行こうとした時に言ったことよ!言ったこと!」

夜見「言ったこと?… ああ、レミリアさんが俺の事が好きとかって言ってた事か?」

夜見が思い出したようにそうレミリアに聞くと、レミリアは顔を耳まで染まるほど真っ赤にして俯いた。そしてレミリアはゆっくりと顔を上げると夜见到こう言った。

レミリア「そ、それで……ど、ど、どうなの……よ?」

夜見「……どうって?」

レミリア「わ、わた、私……が、そ、その……く、黒、夜のことが、す、す、好きってことに、どう思つて……いるのよ?」

夜見「……嬉しいが?」

夜見がそう一言言うとレミリアは目を見開いて立ち上がると翼を嬉しそうに振り、机

に乗りそうな勢いで机に手をつけて前のめりになって夜見に聞いた。

レミリア「ほ、本当かしら！」

夜見「ああ、別に好きって思われて嫌な気持ちにはならないだろ？」

そう言って夜見は椅子から立ち上がると、レミリアの前に手を出して握手を求めるとレミリアに向かってこう言った。

夜見「今更言うのもなんだが、よろしくな」

レミリア「え、ええ！もちろんよ！」

そう言ってレミリアはとても嬉しそうに夜見の手を両手で握ったのだが、夜見はレミアに握手した瞬間にこう言った。

夜見「友達として色々あるだろうけど、そこはお互いに協力しよう」

レミリア「ええ！もちろんって…え？」

夜見「…え？何かおかしいか？」

レミリア「い、いえ、何もおかしく…ないわ」

そう言ってレミリアは夜見の手を放すとゆっくりと椅子に座り、夜見の言葉の意味と今の状況について整理し始めた。そしてレミリアは夜見がどう思っているかに気付いた。

レミリア（もしかして好きって、友達として好きって意味合いで捕らえてたの？嘘を

ついているようにも思えないし……まさか、私が黑夜のことを異性として好きって気付いてないの?)

夜見「……レミリアさん、どうした?大丈夫か?」

夜見はレミリアが椅子に座って俯いたまま動かなくなつたので心配して声をかけると、レミリアは顔を上げるといつもの様子でこう言った。

レミリア「ええ、大丈夫よ、これからもよろしく」

夜見「……ああ、よろしくな、それじゃあ用事も済んだし、俺はそろそろ帰らせてもらおう」

夜見は空気中の血を集めて血の翼を作り出してそう言うのと、レミリアは笑顔で夜見にこう言った。

レミリア「ええ、またいつでもいらっしやい、歓迎するわ」

夜見「ああ、じゃあな」

そう言つて夜見はベランダの柵に足をかけて跳び、血の翼を羽ばたかせて地底へと帰つていった。そしてその様子を見ていたレミリアは、こう思いながら見送つていた。

レミリア(いつでも私の気持ちを伝える機会はあるわ、別に焦らなくていい、今度は、自分で思いを伝えられるようにしなきゃいけないわね)

## 第40話 甘い物と2度目の宴会

夜見「ふう、ただいま」

夜見は紅魔館を出て真つ直ぐ地底へと入り、地霊殿の正面まで来ると仮面を外し懐に仕舞うと玄関を開けた。

するとエントランスではこいしが待つており、夜見の姿を見るなり夜見に目掛けて跳び、夜見の首に腕を回して抱き付いてきた。

こいし「お兄ちゃん、お帰り！」

夜見「おっと、こいしさんか よしよし」

そして夜見は抱き付いてきたこいしを抱き締め頭を撫でてみると、こいしはとても満足している様子だった。そしてこいしはしばらく撫でられると昨日のように、夜見の頬にキスをした。

こいし「えへへ♪お帰りなさいのチュー♪」

夜見「まったく、こいしさんはすぐにそうやって… はあ、ありがとう」

夜見はこいしがすぐにキスをしてくることに少し呆れながらもありがとうと言うと、こいしは満面の笑みを浮かべて夜見にこう言った。

こいし「えへへ、嬉しかった？それじゃあ… もう1回♪」

こいしは嬉しそうにそう言ってもう一度夜見の頬にキスをして、力強く抱き締めると同時にサイドアイから伸びている管のような部分を巻き付けてきた。そして夜見はこいしの頭を撫でているとこいしに向かつてこう言った。

夜見「こいしさん、悪いが離れてくれないか？少しやることがあるんだ」

こいし「え？それって私をギューってしながら出来ない？」

夜見「少し難しいかな、もしかしたら怪我しちゃうかもしれないから」

こいし「うくん… そっか、それじゃあ仕方無いね」

そう言つてこいしはあっさりと離れたので夜見はこいしの頭を再び撫でると2階へ上がり、自分の部屋にマントと仮面、夜刀を置くとキッチンへと入つていった。

夜見（さてと、今日は小悪魔さんに少し迷惑をかけたから何か作つてあげないとなでも小悪魔さんだけにあげるわけにもいかないし、みんなにも作つてあげないと…）

そう思いながら夜見は冷蔵庫を開けて中にある物で何を作ろうかと考えていると、ふと卵と牛乳が目に入った。

夜見（卵と牛乳があればプリンが作れるな… レミリアさんとフランドールさんも多分喜んでくれるだろうし、プリンを作るか）

そして夜見は小悪魔さんに迷惑をかけたお詫びを兼ねてプリンを作ることになると、

卵を数個と牛乳を冷蔵庫から取り出して調理スペースに置くとオーブンを余熱をした。次に夜見はキッチン収納から調理器具を取り出そうとしていると、背中を誰かが指先でつついてきたので振り返るとそこにはさとりがいた。

さとり「黑夜さん、お帰りなさい」

夜見「ああ、さとりさんか ただいま」

さとり「ところで黑夜さん、一体何をしていますか？夕食の時間はまだですよ？」  
さとりはどうやら夜見が夕食を作ろうとしていると勘違いしていたので、夜見は手を横に振ってプリンを作ることを伝えた。

夜見「いやいや、別に夕食を作ろうとはしてないよ 俺はプリンを作ろうとしてるんだ」

さとり「プリン……ですか？」

そう言ってさとりは不思議に思っただけで首を傾げたので夜見は何故プリンを作ろうとしているかを説明すると、さとりは納得した様子だった。

さとり「成る程、そんなことがあったんですか それでお詫びとしてプリンを作ることにしたんですか」

夜見「ああ、そういうわけで冷蔵庫の中にあった卵と牛乳を使うけど、別に構わないよな？」

さとり「いや、駄目ですよ？」

夜見「え？そ、そうなのか…。」

さとりに卵と牛乳を使うのは駄目だと言われた夜見は、どうしようか考え込もうとした瞬間にさとりは少し笑いながらこう言ってきた。

さとり「ふふ、冗談ですよ 使つて構いません」

夜見「なんだ、冗談か からかわないでくれ」

さとり「ふふ、すみません それと、プリンを作るのなら手伝いますよ？」

夜見「え？さとりさん、プリンの作り方知ってるのか？」

夜見はさとりがプリンを作るのを手伝うと言ってきたので、さとりにプリンの作り方を知ってるのか聞いてみるとさとりはこう答えた。

さとり「いえいえ、作り方は知りませんよ 私はあくまでも、手伝いをするだけです」

夜見「そうか、わかった それじゃ早速このボウルに、そこに出した卵を入れて泡立て器で混ぜて、砂糖を加えたらまた混ぜてくれ」

さとり「はい、わかりました」

そして夜見はボウルと泡立て器をさとりに渡すと、さとりは卵を上手に割つて中身をボウルの中に入れて泡立て器で混ぜ始めた。さとりがそうしている間に夜見は調味料の収納場所から砂糖を取り出し、フライパンの中に砂糖と水を入れるとフライパンを傾



けながら焼き始めた。

夜見「それにしてもさとりさん、随分と料理が出来るようになってきたな」

夜見はフライパンを傾けたままゆっくりと焼いていると、さとりに向かって話し掛けた。するとさとりはボウルの中の卵をかき混ぜながらこう言った。

さとり「お隣に色々教わりながら頑張りましたから、今では一人で色々な料理が作れるようになりましたよ。まあ、黑夜さん程上手に作ることは出来ませんけどね」

夜見「別に上手でも何でもないだろ、ただ調理の方法に従って手を動かしてるだけだ」

さとり「いえいえ、とても上手ですよ。黑夜さんの料理は、見た目も味付けも全て完璧ですから」

夜見「そうか？俺はさとりさんのちよつと濃いめの味付けとか、隣さんのちよつと変わった味付けも美味しいと思うけどな」

さとり「美味しいと思うんですけど、とても嬉しいです」

こうして会話をしながら作業をして、さとりが卵を完全にかき混ぜ終わるとボウルに砂糖を入れて再びかき混ぜた。そして夜見は火を止めて食器棚からカップ状の容器を何個か取り出すとフライパンで作ったカラメルを容器の中に均一に入れ、今度は鍋の中に牛乳を入れて火に掛けると今度はさとりが夜見に話し掛けた。

さとり「それにしても、黑夜さんはよくプリン作り方なんて知っていましたね。誰

かに作つてあげたんですか？」

夜見「いや、ただ作つてみたことがあるだけだ 特に理由なんかは無い」

さとり「へえ、そうなんですか 他に何か作つたことはあるんですか？」

夜見「そうだな……クッキーとかケーキなんかも作つてみたな まあ、どれもこれも特に理由なんか無かつたが」

さとり「でも、今作つているプリンにはちゃんと理由がありますよ 良かつたですね」

夜見「ああ、まさか役立つとは思わなかつた」

さとり「あ、黒夜さん 全部かき混ぜましたよ」

夜見「ん、そうか ちよつと貸してくれ」

そしてさとりは卵と砂糖をかき混ぜ終えて夜見にボウルと泡立て器を手渡すと、夜見はボウルの中身に先程火に掛けていた牛乳をゆっくりと入れながら泡立て器で混ぜ始めた。

さとり「黒夜さん、危ないですよ？ 鍋の方を持ちましようか？」

さとりは夜見が片手で鍋を持ちながらボウルに牛乳を入れつつ、もう一方の片手で泡立て器でかき混ぜている様子を見て危ないと思つたのでそう言つたのだが、夜見はさとりになんかことを言つた。

夜見「いや、大丈夫だ そんなことよりバットを用意して、お湯を沸かしてくれない

か？」

さとり「はい、わかりましたけど… 気を付けてくださいよ？」

夜見「ああ、わかってるよ」

そしてさとりが棚から金属製のバットとヤカンを取り出している間に、夜見は鍋の中の牛乳を全てボウルに移し終えるとボウルを片手で押さえて泡立て器で混ぜ始めた。一方さとりはバットとヤカンを持ってきてヤカンの中に水を注いでお湯を沸かし始め、夜見の混ぜているボウルの中を覗き込むと気になったことを聞いた。

さとり「随分と量がありますけど、一体何人分作る気ですか？」

夜見「紅魔館の7人分と、さとりさん達の4人分の合計11人分だ」

夜見がそう言ったので、さとりはカップ状の容器が置いてある所を見てみると確かに11個置いてあったのだが、さとりはある疑問が浮かんだ。

さとり「え、私達の分は4個なんですか？ そうしたら誰かがプリンを食べられなくなつてしまいますよ？」

さとりは夜見が地霊殿の人達の分が4個であることに不思議に思つてそう言うと、夜見は液状のプリンを混ぜながらこう言った。

夜見「俺は食べないから4人分だ みんなに食べては欲しいが、別に俺はいらないからな」

さとり「だ、駄目ですよ！自分の分もちやんと作らないと！」

そう言つてさとりは食器棚からカップ状の容器を一個取り出すと、容器が置いてあつた場所に取り出した容器を置いた。すると夜見は混ぜるのを中断して容器を食器棚に戻すために手に取るうとすると、さとりが先に取つて容器を大事そうに抱えるところ言つた。

さとり「駄目ですよ、自分の分もちやんと作つてください　もし自分の分をどうしても作らないと言ふなら、私はプリンを食べませんからね」

そう言つてさとりは夜見のことを真剣な目で見つめてしていると夜見はさとりの意地を負けたのか、ため息をついてこう言つた。

夜見「……はあ、わかつた　俺の分も作るけど、時間的にカラメルを作るのは無理だからな？」

そう言つて夜見は再び液状のプリンをゆっくりと混ぜると、さとりは満足そうな顔で容器を置いた。そして夜見はボウルを持ち上げると、容器の中に液状のプリンを丁寧に入れ均一に入れた。

さとり「これで後は蒸すだけで出来上がりですか？」

夜見「ああ、そうだ　後はオーブンで蒸すだけだが、その前にアルミ箔で容器に蓋をしないとな」

さとり「オーブンで蒸すんですか、だからオーブンが余熱してあつたんですね」

夜見「ああ、その通りだ」

夜見はそう言いながらキッチンの収納からアルミ箔を取り出すと、1つ1つ丁寧にアルミ箔で容器に蓋をした。次に夜見はバットの上にキッチンペーパーを敷くと、その上に容器を置いてバットにお湯を注いだ。

そして夜見はオーブンの中にプリンに乗ったバットを入れると、タイマーを20分程にセットした。

夜見「よし、後は出来るまで待つだけだ」

さとり「そうですね、完成がとても楽しみです」

夜見「じゃあ、待つてる間に洗い物でもするか」

さとり「あ！そういうえば私、仕事が残ってるんですけど 黒夜さん、すみませんが洗い物を全て任せてもいいでしょうか？」

夜見「ああ、大丈夫だ」

そしてさとりは残っている仕事を済ませるためにキッチンから出ていき、夜見は流し台で使った調理器具を洗い始めた。

しばらく夜見が流し台で調理器具を洗っていると、扉の開いた音がしたかと思うと夜見の背中から誰かが腕を首に回して抱き付いてきた。しかし夜見から回された腕の袖

が見えていたので、夜見は抱きついてきた人物の名前を呼んだ。

夜見「どうしたんだ？こいしさん」

こいし「えへへ♪お兄ちゃん、もうやることは終わった？私、ずっと待ってたんだよ？」

夜見「ああ、ほとんど終わったよ」

こいし「本当!?やったあ！」

そう言つてこいしは腕に思いつきり力を込めて抱き締めてきた。そうなると勿論、こいしの腕が回されている夜見の首は絞められた。

夜見「こ、こいし……さん　く、苦しい……」

こいし「え？や、わわ！ごめんなさい、お兄ちゃん！」

夜見は絞り出すような声でこいしに苦しくなっていることを伝えると、こいしは慌てた様子で夜見から離れた。そして夜見は呼吸を整えながら後ろに振り返ると、こいしはしょんぼりとした様子で立っていた。

こいし「ご、ごめんなさい、お兄ちゃん」

夜見「……はあ、つたく」

そして夜見はこいしのその様子に呆れてこいしにゆっくりと近付くと、夜見は優しくこいしの頭を撫で始めた。

夜見「こいしさん、別に怒ってもいないから大丈夫だ　だからそんなにしょんぼりするな」

こいし「う、うん……で、でも私、お兄ちゃんの首思いつきり絞めちやつたよ？何で怒らないの？」

夜見「……はあ、じれったいなあ」

そう言つて夜見はこいしの背後に腕を回すと、夜見はこいしを撫で続けたまま抱き締めた。そして夜見は優しい口調でこいしに話し掛けた。

夜見「別に嬉しくなつて首を絞めちやつたのは、仕方の無いことだろ？それとも、わざと俺の首を絞めたつてことか？」

こいし「……ううん、違う　嬉しくてつい、やっちゃつただけなの」

そう言つてこいしも腕を夜見の後ろに回すと、今度は優しく抱き締めてきた。すると夜見はこいしの耳元でこう囁いた。

夜見「大好きだ、こいしさん」

こいし「……私もお兄ちゃんのこと、大好き」

そして夜見とこいしはしばらく抱き合っていたのだが、こいしが腕を放したので夜見も腕を放した。するとこいしは満面の笑みを夜見に向けたので夜見も笑みを返して立ち上がると同時に、オープンからチーンという終了の音が鳴った。

夜見「お、もう出来たか」

そして夜見はオーブンを開けて手に血を纏わせると熱々のバットごとプリンを取り出し、自分が食べるプリンの容器の蓋を外してみるとプリンはすっかり出来ていた。するとこいしは夜見の横でピョンピョンと跳んで容器の中を見ようとしていたので、夜見はこいしに容器のプリンを見せた。

こいし「わあ、プリンだー！もしかしてやることつて、プリンを作ることだったの？お兄ちゃん」

夜見「ああ、そうだ 後は冷ましてから、冷蔵庫に入れるだけだな」

こいし「食べるのが楽しみだね、お兄ちゃん！」

夜見「ああ、そうだな」

こうして夜見達はプリンが冷めるのを待ち、冷蔵庫にしばらく入れた後に全員でプリンを食べたのだが、さとりがどうやら砂糖を入れすぎたようでプリンを食べた瞬間に夜見以外が異常な甘さに悶絶したのはまた別の話である。

そして翌日の早朝に夜見はプリンを再び作り直してから朝食を食べ終え、仕事のために出掛ける準備を終えて手にプリンの入った袋を持ちエントランスに向かって廊下を歩いていると後ろから夜見を呼ぶ声が聞こえてきた。

こいし「お兄ちゃん、待って！」



夜見はこいしの言葉を聞いて足を止めその場で振り返ると、こいしが何か銀色の物を2個持つてこちらに走ってきていた。

夜見「こいしさん、どうしたんだ？」

すると夜見はこいしが目の前まで来た所でそう聞くと、こいしは手に持った物を差し出してこう言った。

こいし「こ、これ、おにぎり作ったの！」

夜見「おにぎり？」

夜見はこいしの持つているもの見てみると、おにぎりが包まれているだろう少し大きめの丸いアルミ箔を2個持つていた。それがどうしたんだろうと夜見が思っていると、こいしは少しオドオドとした様子でこう言った。

こいし「い、いらない……かな？お兄ちゃんの昼食につて思つて作つてみたんだけど……べ、別にいらぬなら、受け取らなくていいよ」

すると夜見はそこでようやくこいしが自分のためにおにぎりを作つてくれたことを理解して、夜見はこいしの頭を撫でながらこう言った。

夜見「ありがとう、こいしさん わざわざ俺のために作つてくれたんなら、喜んで頂くよ」

そう言つて夜見は笑みを浮かべてこいしの作ったおにぎりを受け取ると、こいしは嬉

しそうな様子でこんなことを言った。

こいし「あ、愛情込めて作ったの！帰ったら味の感想聞かせてね！」

夜見「ああ、わかったよ それじゃあ、行ってくる」

そう言つて夜見はおにぎりを血で作ったケースに入れてプリンの入った袋の中に入ると仮面を被り、玄関から地霊殿を出るとそのまま地底から地上へ出た。

そして夜見は紅魔館のみんなにプリンを渡すために森の中を歩いて湖へ出て紅魔館へ向かい、夜見は紅魔館に着いたのだが門には誰もいなかった。

夜見（あれ？いつもなら美鈴さんがいるんだが、何かあったのか？）

夜見は門に美鈴がいないことを不思議に思うと同時に入つていいのかと迷つていと、門が開かれて門の向こう側にはプリンを渡す予定のレミリア、フランドール、咲希、咲夜、美鈴、パチュリー、小悪魔がいた。

レミリア「あら、黑夜じゃない？どうしたのかしら？」

するとレミリアは夜見がいることに不思議に思いながら質問をしてきたので、夜見は逆にみんながいることを不思議に思いながらも袋を少し前に差し出して質問に答えた。

夜見「ああ、昨日実は小悪魔さんに少し迷惑をかけたから、そのお詫びも兼ねてみんなにプリンを作ったから渡しに来たんだ」

フランドール・咲希「え!?プリン!？」

しかし夜見がプリンのことをレミリアに伝えた瞬間に、フランドールと咲希が嬉しそうな様子で反応した。するとフランドールと咲希は袋を引つたくる勢いでこちらに来たが、次の瞬間には咲夜に首根っこを捕まれていた。

レミリア「へえ、そうなの わざわざ作ってくれたのはありがたいのだけれど、生憎今から博麗神社に向かうところなのよね」

夜見「博麗神社？何であそこに全員で行くんだ？」

レミリア「何でって、宴会に決まっているじゃない」

夜見「宴会？それって3日前にやらなかったか？」

夜見はそう言つてレミリアに3日前にも宴会をやったことを確認すると、レミリアは首を縦に軽く振つてこう言つた。

レミリア「ええ、やったわね けれどもまた宴会をするって話を聞いたから、今回は全員で行くことにしたのよ」

夜見「そうか… じゃあプリンはどうする？今から紅魔館の冷蔵庫の中にも置いてくるか？」

夜見がそう言うと咲夜はフランドールと咲希を放して動こうとしたのだが、その前にレミリアが夜見にこう言つた。

レミリア「わざわざそんな面倒なことはしなくていいわ、宴会の時に食べればいい

じゃない」

夜見「そうか？じゃあプリンは咲夜さんに渡しておくか」

そう言つて夜見は手に持っていた袋からおにぎりの入った血のケースを取り出したら、咲夜に渡そうとしていたのだがレミリアは夜見にこんなことを言った。

レミリア「何を言っているの？黑夜も来るんだから、そのまま持っていたらいいじゃない」

夜見「…は？俺も付いていくのか？」

レミリア「当たり前じゃない、さあ行くわよ」

そう言つてレミリアは日傘を片手で差しながらも一方の片手で夜見の腕を掴んで歩き始め、その後が続いてフランドールや咲夜達も付いてきた。そして夜見はプリンを渡してから人里で何か依頼があるか確認しようとしたのだが、半ば強制的に博麗神社へ行くことになった。

そして夜見達が博麗神社に着いた頃には宴会はまだ始まっていないのか、前回の宴会に来ていた人達がちらほらと桜の木の下で談笑をしていた。するとレミリアはそこでようやく夜見の腕を放して夜見にこう言った。

レミリア「それじゃあ私達は私達で場所取りとかしているから、黑夜も好きなようにしなさい それと、プリンを食べる時になったら咲夜を迎えに行かせるわ」

そう言つてレミリア達は何処で座ろうかと、桜の木の下を見て回りに行つた。するとその場に残つた夜見はため息をつくつと、真つ直ぐ博麗神社の裏側に回つた。

そして夜見が博麗神社の裏側に回つて血で長い梯子を作り出すと、博麗神社の屋根に梯子をかけて屋根の上に登ると腰を下ろした。

夜見（… また宴会か、賑やかな場所は好きじゃないんだよなあ）

そう思いながら夜見は屋根の上から宴会に来ている人を見てみると、いきなり後ろから声をかけられた。

紫「あら、随分と憂鬱そうな様子ね」

夜見「… 紫さんか」

それは裂け目から上半身を出しながら日傘を差している紫だった。しかし夜見は振り返らずにそう言うつと紫は裂け目から出てきて、夜見の隣に来ると腰を下ろした。

紫「どうしたの、今日は宴会よ？何か嫌なことでもあつたのかしら？」

夜見「別に… ただ賑やかな場所が好きじゃないだけだ」

紫「そういえば、そんなこと言つてたわね」

そう言つて紫はこちらを見て微笑むと裂け目を作り出してそこから酒瓶と盃を取り出し、盃に酒を注ぎ始めたのだが夜見は紫にこう言つた。

夜見「そういや、あれから何か情報は集まつたか？」

夜見が紫にそう聞くと紫の顔から微笑みが消えて盃に酒を注ぐのを止めると、紫は真剣な顔でこちらを向いてゆつくりと口を開いた。

紫「少しだけ集まったわ けれどそれは貴方が幻想郷に来れた理由じゃなくて、もう1人の外来人の情報よ」

夜見「・・・そうか それで、何がわかったんだ？」

紫「どうやら人里での行方不明者が出るのは、決まって深夜から朝方にかけてらしいわ そして人里の人間達は深夜から朝方には極力外に出ないようにしてみた所、どうやら行方不明者は出なくなったそうよ」

夜見「なるほど・・・ つまりは深夜から朝方の暗い時間帯に、何か起きているのか」

そして夜見は顎に手を添えて何が起きているのかを考え込んだのだが、情報が少なすぎるせいで何も思い付かなかった。

夜見「もう少し情報が必要だな、それだけの情報じゃ何もわからない」

紫「そうね、もう少し頑張つて情報を探してみるわ だから貴方も出来るだけ調べてくれると嬉しいわ」

夜見「ああ、わかったよ」

紫「それじゃあ、私は少し幽々子とお酒を飲んでくるわ 折角の宴会の時だけでも楽しみたいもの」

そう言つて紫は自分の座つてゐる場所に裂け目を作り出すと、そのまま裂け目の中へ落ちていき裂け目は閉じた。そして夜見は再び宴会の様子に目を向けると先程より人が増えており、より賑やかな様子になつていた。

夜見（騒がしくなつてきたな…）

すると夜見は立ち上がつて振り返ると博麗神社の裏側に降りたのだが、そこでも表の賑やかな声が聞こえてきたので夜見は血の耳栓を嵌めた。そして夜見は博麗神社の縁側に寝転がると、早朝に起きたのと春の暖かさが相まつて眠気を感じたので、夜見は咲夜に呼ばれるまで少しばかり眠ることにした。

しばらくして夜見が完全に寝ているところにある人物が夜見の元に近付くと、夜見の体を揺すりながら声をかけて起こし始めた。すると夜見はすぐに目を覚まして血の耳栓を分解して起き上がったのだが、目の前にいたのは何故か魔理沙だった。

魔理沙「よお、夜見 よく眠れたか？」

夜見「…魔理沙さんか、一体何のようだ？」

魔理沙「いや、特に用はないぜ？ただ前の宴会にはいたから、今日もいるだろうなと思つて探してたら見つけただけだぜ」

そう言つて魔理沙は夜見の隣にある袋の向かい側に座ると魔理沙は袋にゆつくりと手を伸ばしてきたので、夜見は魔理沙よりも先に袋を掴むと反対側に袋を置いた。

魔理沙「何だよ、私はただ袋の中身を見ようとしただけだぜ？それなのに私の手が届かないように反対側に置くなんでひどいぜ」

夜見「袋にゆつくりと手を伸ばす時点で中身を見る気なんか無かつただろ　そもそも中身を見たいだけなら、俺に袋の中身を見ていいか聞くのが当たり前だ」

魔理沙「うーん……それもそうだな、それは悪かつたぜ　それじゃあ夜見、その袋の中身を見せてくれないか？」

そう言つて魔理沙は夜見に袋の中身を見せてくれるように頼んだのだが、夜見は魔理沙にプリンを見せると絶対に欲しがると思つたので、夜見は袋の中からおにぎりの入つた血のケースを取り出してケースの中身を見せた。

夜見「ただ昼食のおにぎりが入つてるだけだ、ちょうどいい大きさの袋が無かつたんだ」

魔理沙「昼食のおにぎりつて……もうお昼は少し前に過ぎたぜ？」

夜見「そうなのか？それじゃあ食べるとするか」

魔理沙はもうお昼は過ぎていることを伝えると、夜見はそう言つておにぎりを食べようとアルミ箔を丁寧剥がした。すると中から出てきたのは、お世辞にも綺麗とは言えないおにぎりだつた。

魔理沙「へえ、夜見つておにぎり作るの下手なんだな　夜見のことだからついきり綺麗



麗なおにぎりかと思っただぜ」

夜見「まあ、見た目はともかく、味がよければいいだろ？」

魔理沙「まあ……確かにそうだな、見た目が悪くても意外に美味しい食べ物もあったりするもんな」

夜見「さてと、いただきます」

そして夜見は仮面を外しておにぎりを食べてたのだが、こいしはおにぎりを作るのに強く握りすぎたのか内側の米は潰れており若干固く、調味料を入れすぎたのか口の中に大量の粉が混じっている感触がした。しかし夜見はそのおにぎりを食べられないことはないので普通に食べ続けた。

魔理沙「なあ、夜見 結局味はどうなんだ？」

夜見「まあ、食べれないことはないな 普通に食べられる」

魔理沙「へえ、そうか 私も一口食べてみてもいいか？」

魔理沙は人差し指を立ててそう言うと、夜見は口を付けていない部分を少し手で取ると魔理沙に差し出した。

夜見「……別に構わないが、口から出したりするなよ？」

魔理沙「夜見は何を言っているんだ？ そんな真似を私がするわけないだろ」

そう言つて魔理沙は夜見からおにぎりの一部を受け取って口に入れたのだが、その瞬

間に魔理沙は手で口を押さえて咳き込んだのだが案の定、口からおにぎりの一部を吐き出した。

夜見「ああ、勿体ない どうしてくれるんだ」

魔理沙「げほっ ごほっ な、何だよこれ!? 何でおにぎりに砂糖が大量に入ってるんだよ!? しかも、何で夜見はそんなおにぎりを平然と食べてるんだよ!?」

なんと実はこいしが作ったおにぎりには塩ではなく、大量の砂糖が入っていたのだ。そして夜見はそのおにぎりを平然と食べながら、魔理沙の質問に答えた。

夜見「何でって・・・普通に食べられるから食べてるんだが?」

魔理沙「いやいやいやいや! こんな甘すぎるもん平然と食べれるだなんておかしいぜ!?!」

夜見「そうなのか? まあ、確かに俺も甘いと思いはするが・・・」

魔理沙「いや、もう、夜見の味覚はどうなってるんだ? 訳がわからないぜ・・・」

そして夜見は1個目の食べ終わると2個目のおにぎりを取り出して食べ始めたが、やはり2個目のおにぎりにも塩ではなく砂糖が入っていた。しかし夜見は顔色を何一つ変えずに食べ終えて仮面を被ると、その様子を見ていた魔理沙は啞然としていた。

夜見「ふう、ごちそうさま」

魔理沙「・・・」

そして夜見はアルミ箔を小さく丸めて片付けをしていると、いきなり目の前に咲夜が現れて話し掛けてきた。

咲夜「黑夜様、こんなところにいらっしやったのですか」

夜見「ああ、咲夜さん レミリアさんが呼んでるのか？」

咲夜「ええ、その通りです ご案内いたしますので付いてきてください」

夜見「ああ、わかったよ じゃあな、魔理沙さん」

夜見は袋を持つと魔理沙に向かってそう言いながら咲夜に付いていくと、魔理沙は「え？あ、じゃあな？」と我に返って咄嗟に返事をしたような反応をしていた。そしてしばらく夜見は咲夜に付いていくと、レミリア達は桜の木の下で料理を食べ終えていた様子だった。

フランドール「遅いよ黑夜ー！早くプリン食べたいのに！」

咲希「そうだそうだー！」

するとフランドールと咲希は夜見の姿を見るなり、早くプリンが食べたいと言うことを騒ぎ始めた。そして夜見は袋からプリンを取り出すと、真っ先にフランドールと咲希に渡した。

フランドール・咲希「やったー、プリンだー！いっただきまーす！」

そう言ってフランドールと咲希はプリンを受け取るとアルミ箔の蓋を外してプリン

を食べ始め、その間に夜見はプリンをレミリア達にも渡し始めた。するとレミリア達はプリンを受け取った瞬間にお礼を言ってきたのだが、夜見は素っ気ない返事を返していた。

レミリア「それにしても、黒夜がまさかプリンを作ってくるだなんて思わなかったわそれに味も食感も、全て素晴らしいわ」

レミリアはプリンを一口食べるとそう言っただけで夜見のことを褒めたのだが、夜見はこんなことを言い始めた。

夜見「そうは言っても、もともとは小悪魔さんへのお詫びだ。昨日はすまなかった、小悪魔さん」

夜見はそう言っていると小悪魔の方を向いて頭を下げたのだが、小悪魔は夜見が頭を下げてきたことに困った様子でこう言った。

小悪魔「い、いえ、大丈夫ですよ！別に仕事が沢山あったわけでもありませんし、寧ろちよつとした息抜きになったので良かったです」

パチュリー「どうかそもそも、小悪魔に気を使う必要なんてないわよ？そもそも小悪魔は使い魔なのだから、気を使ったところで無意味よ」

パチュリーがそう言っていると小悪魔は少ししよんぼりとしたのだが、夜見はパチュリーに對してこう言った。

夜見「いや、使い魔とか言う以前に小悪魔さんは小悪魔さんだ。それに本の管理や片付けを手伝ってもらっているのに、そんな言い方は無いんじゃないか？」

パチュリー「別に気を使っていないだけで、感謝はちゃんとしてるわよ？いつもありがとうね、小悪魔」

小悪魔「え？あ、はい。どういたしまして、パチュリー様」

夜見（…）何だ、ちゃんと感謝はしているのか。それなら良かった）

そして夜見は小悪魔に謝った後はレミリア達と談笑をしていたのだがフランドールと咲希がいち早くプリンを食べ終えると、レミリア達も次々とプリンを食べ終えていった。

すると夜見はみんなから容器を回収して袋の中に入れてみると、周りの宴会に来ていた人達は少しずつ帰り始めていた。その様子を見ていた夜見は自分もそろそろ帰ろうと思うと、袋を持って背中に血の翼を作り出した。

夜見「さて、そろそろ俺も帰るとするかな。じゃあな、今度暇な時にはクッキーでも作ってくる」

レミリア「別に気を使う必要はないわ、気軽に来なさい」

夜見「そうか？それじゃあ、そうしておく」

そう言って夜見は血の翼を羽ばたかせて宙に浮き始めると、夜見は昼過ぎではあるが

何か依頼がないかどうか確認するために人里へと飛んでいった。

## 第41話 起きていたもう1つの異変

夜見は2度目の宴会があつた日の翌日、そのまた翌日では人里に貼り出されている依頼をいつも通りこなしていたのだが、2度目の宴会の日から3日後の人里では依頼状が貼り出されていなかった。すると夜見は何を思ったのか博麗神社に行こうと思ひ付き、人里を出て博麗神社へ向かつて歩いた。

そして夜見は博麗神社の前に着いて石の階段を登り鳥居をくぐつて境内に入ると、霊夢が箒で境内の掃除をしていた。

霊夢「ん？夜見じゃない、どうしたのよ？妖怪退治の依頼かしら？」

霊夢は夜見がいることに気付くと箒を動かしている手を止めてそう言ってきたが、夜見は霊夢に近付いてあることを聞いた。

夜見「すまないが、何か報酬がある仕事は無いか？」

霊夢「…はあ？何よ、金が欲しいって言ってるの？」

夜見「金が欲しいと言ってる訳ではなく、金を稼ぎたいと言っているんだ」

霊夢「そんなのどっちも一緒でしょ？」

霊夢が少し呆れたような様子でそう言った後に少し考えているような素振りをする

と、夜見にこんなことを言ってきた。

靈夢「そうねえ……生憎報酬がある仕事は無いけれど、少し人手が足りないから手伝ってくれないかしら？」

夜見「……別に構わないが、何をすればいいんだ？」

靈夢「簡単よ」

そう言つて靈夢は神社の方を指差すと、靈夢は仕事の内容を説明した。

靈夢「台所に食材が用意されているから、宴会料理を作つてちょうだい それだけよ」  
そして靈夢は仕事の内容を説明すると再び箒で境内の掃除を始めたのだが、夜見は靈夢の言つたあることに對して質問をした。

夜見「いや待て、宴会だつて？ 今日もやるのか？」

夜見が靈夢に向かつて質問をすると、靈夢は箒で境内の掃除をしながら夜見の質問に答えた。

靈夢「ええ、そうよ 何か問題でもあるのかしら？」

夜見「いや、3日に1回も宴会をするつて流石にやり過ぎじゃないか？ それとも、いつもこんな風に異変の後は何回も宴会をするのか？」

靈夢「いえ、そんなことは無いわ でも何故か、誰かが宴会をやるつて言つたわけでもないのに宴会をするのよね」



夜見（誰かが宴会をやるって言つてわけでもないのに、宴会をやつていたのか？ 流石におかしいだろ…）

夜見はそう思うと同時に、これは異変なのではと考えた。しかし仮に異変だったとしても何故異変の犯人は何回も宴会をするようにしているのか、そもそも異変の犯人はどうやって宴会をさせるようにしているのかがわからなかった。

夜見は考えても埒が開かなかつたが、異変の犯人が宴会をさせるようにしているのならば宴会に紛れているのではないかと思い、今は宴会料理を作つて宴会が始まるまで待つことにした。

夜見「…まあ、取り敢えず俺は宴会料理を作ればいいんだな？」

霊夢「ええ、そうよ。て言うかさつさと作らないと、宴会に間に合わなくなるわよ？」

夜見「ああ、そうだな」

そう返事をした夜見は神社の中に入ったのだが台所の場所がわからず、しらみ潰しに部屋を回っていると台所を見つけた。台所には霊夢の言つた通りに食材が用意されており、宴会料理を作るには十分な量だった。

夜見（さて、作るとするか）

そして夜見は台所にあつた包丁を手にとると食材を1つ1つ切りながら、同時進行で食材を焼いたり揚げたりして色々な宴会料理を作り始めた。しばらくして夜見が全部

の食材を使って宴会料理を作り終えた頃には、表の方から賑やかな声が聞こえて来ていたかと思うと霊夢が台所に入ってきた。

霊夢「あら？そろそろ手伝おうと思ったのに、もう作り終えちゃったのね」

そう言つて霊夢は宴会料理を一つ摘まんで口に運ぶと、霊夢は頷いて納得している様子だった。

霊夢「見た目も味付けも完璧ね　ありがとうね、随分と助かったわ」

夜見「別に、ただ頼まれたことをやっただけだ」

霊夢「ふーん、まあ貴方がそう思うならそれでいいわ　じゃあ後は私が適当に運ぶから、貴方は紅魔館の連中といるなり魔理沙といるなり勝手にすればいいわ」

夜見「ああ、わかった」

そう返事をして夜見は宴会料理を運ぼうとしている霊夢を台所に置いて外に出ると、前回の宴会と同じように博麗神社の裏側に回ると血の梯子を作つて屋根の上に登つた。そして夜見は今日も屋根の上に座つて宴会の様子を見ていると、ある人物が日傘を差しながら右隣に飛んで来て夜見に話し掛けた。

レミリア「夜見、隣いいかしら？」

夜見「レミリアさんか　ああ、別に構わないぞ」

レミリア「そう、それじゃあ失礼するわ」

そうやってレミリアは夜見の隣に座ったのだが、夜見の方をチラリと見ると夜見との距離を少し詰めてきた。そしてレミリアは夜見にあることを聞いた。

レミリア「実は咲夜が人里へおつかいに行った時に見たらしいのだけれど、黑夜は最近人里で何か調べているらしいわね 一体何を調べているのかしら？」

夜見「… 行方不明者の事だ」

夜見はレミリアの方をチラリと見た後に一言だけ言うと、レミリアはまるで懐かしい話を聞いたような様子だった。

レミリア「そういえば、そんなことがあったわね それで、何か手掛かりは掴めたのかしら？」

夜見「… いや、特にこれといった手掛かりは無かった」

レミリア「あら、そうなの それは残念だったわね」

そしてレミリアはそう言って再び夜見の方をチラリと見ると、体を夜見に密着するまで詰め寄り頭を夜見の体に預けるように傾けた。夜見はレミリアのその行動に疑問を持ったが、取り敢えず夜見はレミリアの日傘を右手で取るとレミリアに日が当たらないように持った。

レミリア「あら、ありがとう 持っていてくれるのね」

夜見「まあ、レミリアさんが持ってたら背丈的に日傘でレミリアさんの顔が見えなく

なるからな それに俺が日傘を持ってた方がレミリアさんが何かあった時、何かと対処出来るだろ？」

夜見がレミリアに向かってそう言うのとレミリアは片腕を夜見の日傘を持っている方の腕に絡ませて、こんなことを言ってきた。

レミリア「ふふ、夜見の気遣いはいつも素晴らしいわね やつぱり紅魔館の執事として働かないかしら？」

夜見「だからそれは無理だと前から言ってるだろ 俺には帰る場所と家族がいる」

レミリア「冗談よ、冗談 だけど、もし夜見が本当に執事になってくれれば色々助かるわ」

そう言ってレミリアは絡ませている腕に少し力を込めて更に夜見に密着してきた。そこで夜見はレミリアが何故こんなにも体を密着させてくるのかを聞いた。

夜見「なあ、レミリアさんは何を思ってそんなにピッタリと密着してくるんだ？」

するとレミリアは目を瞑って落ち着いた口調でこう返してきた。

レミリア「あら、何か困るのかしら？これは友人としてのスキンシップ、特に理由なんてないわよ」

夜見「…そうか」

夜見はレミリアのスキンシップだと真に受けて納得していたのだが、しばらくすると

レミリアは急にビツクリしたように「ん」と少し息を漏らした。

夜見は不思議に思っただけでレミリアの方を見てみると夜見は無意識の内にレミリアの頭を撫でており、レミリアは夜見が見ていることに気付くと夜見に向けて笑みを浮かべた。

レミリア「急に頭を撫でてくるなんて、小さい子どもでも相手にしてるつもりなのかしら？でもまあ、悪い気はしないし寧ろ心地よいわ」

夜見「ああ、急にすまないな いつもの癖でな」

夜見はこいしが抱き付いてきた時によく頭を撫でているので、その癖でレミリアの頭を撫でてしまったと思っただけでそう言った。しかしレミリアは夜見の「いつもの癖」という言葉に疑問を持った。

レミリア「いつもの癖？どういうことかしら？」

夜見「ん？ああ、実は家族の中で甘えん坊が1人いて、その甘えん坊がいつも抱き付いてくるから抱き締めながら頭を撫でてやるんだ」

レミリア「へえ、いつも…」

そしてレミリアは独り言を呟くように言っただけで絡ませていた腕を離れたかと思うと、レミリアは立ち上がって夜見の正面に立った。

夜見は腕を伸ばして日がレミリアに当たらないように日傘を差しながら何をしてい

るのか疑問に思っていると、レミリアは少し足を前に出して夜見に少し近付くと同時にそのまま倒れるように夜見の首に腕を回して抱き付いて耳元で囁いた。

レミリア「その家族の甘えん坊さんは、こんな感じで抱き付いているのかしら？」

夜見「えつと…レミリアさん？一体な「どうなの？早く答えて頂戴」…まあ、ほとんど同じだな 実際はレミリアさんが抱き付いてるから、力加減とかは若干違うが…」

レミリア「あら、そう？」

レミリアはそう一言言うと、夜見の首に回している腕に少し力を入れて更に夜見に密着してきた。そして夜見はこの状況をどうしようか考えていると、レミリアは不思議に思った様子でこんなことを言ってきた。

レミリア「どうしたのかしら？夜見も早く抱き締めなさい」

夜見「…え？いやいや、流石に友人だとしても女性を気安く抱き締めるのは抵抗があるんだが？」

レミリアに言われたことに夜見は一瞬理解が出来ずに反応が少し遅れたが、すぐにそう言つて返すとレミリアは今度はこう言った。

レミリア「家族の甘えん坊さんには抱き締めながら頭を撫でてあげているのに、友人である私には出来ないのかしら？」

夜見「いやいや、家族にするのと友人にするのでは話が違うだろ それと最初から

少し気になっていたんだが、何故俺の呼び方が黑夜から夜見に変わってるんだ？」

夜見はレミリアに抱き締めない理由と気になっていたことを言うと、レミリアは少し機嫌を損ねたのかムツとしたような声で言った。

レミリア「いちいち五月蠅いわね、いいから夜見は私の言う通りに私のことを抱き締めなさい 貴方に拒否権なんてものは無いのよ」

レミリアはそう言って腕を放さないでいたのだが、夜見もレミリアのことを抱き締めないでいた。しかしレミリアは一向に腕を放す気配が無い様子だったので、夜見は諦めてレミリアの背中に左腕を回すと軽くレミリアのことを抱き締めた。

レミリア「…へえ、こんな感じなのね」

レミリアは落ち着いた口調でそう言ったのだが、翼をパタパタと上機嫌に動かしていたので内心はとても嬉しいのがバレバレだった。そしてしばらくその状態のままですと、レミリアは顔を上げて夜見の耳元で次はこう囁いた。

レミリア「夜見、次は膝枕をして頂戴 もちろん、貴方に拒否権は無いわよ」

夜見「…はあ ああ、ちよつと待ってろ」

夜見はレミリアの言うことを聞くために左腕で抱き抱えると、日の当たらない神社の裏手に降りて日傘を右手だけで器用に閉じた。そして夜見はその場にレミリアを降ろして夜見は神社の縁側に座ると、レミリアは縁側で横になって頭を夜見の腿ももに頭を乗せ

た。

レミリア「ふふ、膝枕は膝枕で心地よいわね」

レミリアは再び落ち着いた口調で翼を嬉しそうにパタパタさせながらそう言うと、夜見はそんなレミリアの様子を不思議に思った。

夜見「そうか？ただ足を枕にして横になるだけだろ？」

レミリア「夜見は膝枕をしている側だからそう思うのよ 膝枕をしてももう側はまた違うのよ」

夜見「そうなのか？」

レミリア「ええ、そういうものよ」

そうやってレミリアはしばらく翼をパタパタさせていたのだが、レミリアがゆっくりと目を閉じると翼を動かさなくなつた。どうやらレミリアは膝枕の心地よさと春の暖かさによつて寝てしまったようだった。

そして夜見はレミリアの頭を優しく撫でながら、ある人物に声をかけた。

夜見「何の用だ、紫さん」

夜見がそう言うのと目の前の空間に裂け目が現れて中から紫が出てきたのだが、紫は夜見とレミリアの様子を見てこんなことを言った。

紫「覚妖怪の時もだったけれど、貴方は小さい子に好かれる傾向にあるのかしら？」



夜見「さあな、ただ相手がそうだっただけじゃないか？」

紫「…まあ、そんなことはどうでもいいわ」

紫はそう言つて夜見の隣に座ると、真剣な目をして夜見の方を向いた。すると夜見は大事な話があると察したのか、レミリアを撫でつつ紫にこう聞いた。

夜見「何かわかつたのか？」

紫「ええ、人里での異変の方についてよ」

紫がそう言うのと夜見は人里の異変について話し始めるのかと思つたのだが、予想に反して紫は夜見にあることを聞いてきた。

紫「貴方は「百鬼夜行」つて知ってるかしら？」

夜見「…確か深夜に徘徊する鬼や妖怪の群れ、または行進だろ？」

夜見がそう答えると紫は「ええ、そうよ」と一言だけ言うと、次はこんなことを聞いてきた。

紫「じゃあ、次に「ぬらりひよん」は知ってるかしら？」

夜見「妖怪の総大将だろ？」

紫「ええ、わかっているのなら説明の手間が省けるわ それじゃあ、本題に移りましょう」

紫はそう言つて一呼吸すると、夜見に人里で起きている異変について話し始めた。

紫「どうやら百鬼夜行が人里の人間を連れ去っていったらしいわ　ここ数日藍が深夜に人里を少し離れた場所から見ているなら、鬼が数匹で列を作って人里に入っていくのを見たらしいわ」

夜見「…それで？ 勿論その鬼を藍さんは追い掛けたんだろ？」

紫「ええ、勘付かれないように少し距離を取って追い掛けたらしいわ　けれど不思議なことに、人里から出て少ししたら姿をいきなり消したそうよ」

夜見「いきなり消えた？」

藍が追い掛けた鬼がいきなり姿を消したと聞くと、夜見はそう言つて紫に聞き返した。すると紫はその時の状況をこう言い直した。

紫「いや、正確には妖気や気配もろとも姿を消したつて言つた方が正しいわね　それと消えたのは自然とじやなく、突然だったらしいわ」

夜見「…そんなこと、あり得るのか？」

紫「私も信じがたいけど藍が嘘を言うはずもないし、本当なのでしようね　もう少し近づくと鬼に勘付かれてしまうし、どうしようもなかったらしいわ」

紫の話を聞いた限りだと、どうやら百鬼夜行が人里の人間を連れ去つたのは間違いないが、そこから先は何もわからないようだった。それは仕方の無いことなのだが、夜見はそこである疑問を持った。

夜見「百鬼夜行が人里の人間を連れ去っているのはわかった　だが、ぬらりひよんに何の関係があるんだ？」

それは紫の話に最初に聞かれた百鬼夜行の話はあったが、ぬらりひよんの話が無かったことだった。夜見はその事に疑問を持つて紫に聞いてみると、紫はこんなことを言った。

紫「これは私の考えに過ぎないのだけれど、もしかしたら外来人はぬらりひよんとして、百鬼夜行に何か力を貸しているんじゃないかと私は考えているのよ」

夜見「……確かに、それなら鬼がいきなり消えたのにも説明が付く　だが、その外来人が幻想郷に来た日に百鬼夜行を作り上げたとは考えにくいな」

紫「……まあ、そうよね　本当に一体何が起きているのかしら？」

紫がそう言うのと夜見と紫は百鬼夜行が何故人里の人間を連れ去っているのか、百鬼夜行が何故突然姿を消したのかを考え込み始めたのだが、紫は夜見の方を見ると夜見を睨み付けてこう言った。

紫「貴方、ちゃんと考えているのかしら？」

夜見「ああ、ちゃんと考えてる」

紫「……全くそんな様子には見えないのだけれど？」

夜見はちゃんと何が起きているのか考えてはいるのだが、紫は夜見の様子を見てそう

とは思えなかった。何故なら夜見はいつの間にか空気中の血を集めて耳かきの棒を作り、レミアアの耳を掃除していたからである。

夜見「そうか？別に何かしている状態でも、頭で何かを考えることは出来るだろ？」

紫「貴方はそうかもしれないけど、私の方は気が散って仕方無いわ さっさとやめなさい」

夜見「いや、中途半端に終わらせるのは気分が悪いからちよつとだけ待ってくれ もうすぐで終わる」

夜見はそう言ってもう少しだけレミアアの耳を掃除すると耳の中を軽く覗き込み、夜見は綺麗に出来たことに納得している様子だった。そして夜見は耳かきの棒を分解しようとした瞬間に夜見はあることを思い付き、耳かきの棒をじつと見つめた。

紫「夜見？どうしたのかしら？」

紫は急に夜見が静止して耳かきの棒を見つめていることを不思議に思つて声をかけると、夜見は耳かきの棒を空气中に分解して紫にあることを聞いてきた。

夜見「なあ、紫さん その百鬼夜行は人里に每晚現れるのか？」

紫「毎晩かどうかはわからないけれど、藍が調べた数日は毎晩人里に入っていくのを見たらしいわ」

紫は夜見の先程の様子は何だったのか不思議に思いながらも夜見の質問に答えると、

夜見は少し間を空けてこんなことを言い出した。

夜見「……それじゃあ、今夜は俺が人里に行こう」

すると夜見が何故か今夜は人里に行くことを言うのと、紫はまさかと思つたことを夜見に聞いた。

紫「まさか、思い付いたつていうの？消える鬼を追い掛ける方法を」

夜見「ああ」

夜見は軽く一言で返事をして消える鬼を追い掛ける方法を思い付いたことを伝えると、紫は一体どんな方法で鬼を追い掛けるのが気になったが、そこは夜見の考えに任せて異変を解決してくれることを期待することにした。

紫「そう、それじゃあ頼んだわよ」

夜見「ああ、必ず異変を解決させる」

紫「……でもその前に、今起きている異変を解決させましょうか」

しかし紫はいきなり夜見に向かって、今起きている異変を解決させようと言つてきた。すると夜見は紫に確認を取つた。

夜見「……やっぱり、この頻繁に行われる宴会も異変か」

紫「ええ、そうよ 一見何の害も無さそうな異変だけれど、異変であることに変わりはないわ」

夜見「それで？異変の犯人に検討はついているのか？」

紫「あら、貴方は既に異変の犯人を見ているわよ？今も近くにいますけれど、ただ見えていないだけよ」

夜見（見えていない？透明になっているってことか？）

夜見はそう思うと空気中の血を周りに拡げて異変の犯人がいないか確認したが、周りに異変の犯人がいるような様子を確認することが出来なかった。すると紫はそんな夜見の様子を見て、とあることを言った。

紫「私や霊夢なら普通に感じ取れるでしょうけど、どうやら貴方は能力の影響なのか、どうやら感じ取れないようね」

夜見「・・・どうということだ？」

紫「貴方の能力は生を操るものでしょう？能力の意味をちゃんと理解すれば、答えは出てくるわよ」

夜見（能力の・・・意味？）

紫にアドバイスを貰った夜見はアドバイスを元に自分の能力について考えてみると、ある考えが思い浮かび今度は血ではなく自分の霊力を拡げ始めた。そして夜見は目を瞑って自分の霊力に神経を集中させるとあるものを感じ取った。

夜見（神社の表に複数の霊力や妖力・・・そして隣の紫さんの妖力、レミリアさんの妖

力を感じる)

それは神社の敷地内にいる人間や妖怪の霊力や妖力だった。そして夜見は1人1人の霊力や妖力が違うことや、その人間や妖怪のいる位置を把握していた。

紫「どうかしら？ 普段から私達は意識をしていなくても霊力や妖力を体から発しているのだけれど、それを感じ取ることが出来たかしら？」

夜見「… ああ」

紫「それは良かったわね それで？ 何か不審な点には気付けたかしら？」

夜見「妖力が霧のように神社一帯に広がっている、つまりこの異変の犯人は…」

そう言つて夜見は手のひらを少し上の方に向けて、霊力を伝つて辺り一帯に広がっている妖力の一部分を能力で乱した。すると辺り一帯に広がっていた妖力がどんどん集まつていき、1人の少女が姿を現して宙から落ちて尻餅をついた。

その少女は薄い茶色のロングヘアで先の方を1つにまとめており、頭には赤い大きなリボンを着けていた。服装は白のノースリーブに紫のロングスカートを着ており、左手首からは黄色の球、右手首からは赤の三角錐、腰からは青の立方体の分銅を鎖で吊し、手には紫の瓢箪を持っていた。

しかしその少女の頭には少女の身長とは不釣り合いな長い捻れた角が2本生えており、左の角には青色のリボンを着けていた。

夜見「この妖怪だ」

紫「ええ、正解よ」

？「いつてて、あれえ？一体何が起きたの？」

そして夜見が異変の犯人を見つけたことに紫が軽く拍手をしていると少女はゆつくりと立ち上がり、その少女は紫の姿を見ると紫に話し掛けた。

？「あ、紫じゃん 久しぶり」

紫「ええ、久しぶり」

？「えつと？紫の隣にいる人間は紫の友達？」

紫「ええ、そうよ」

？「へえ、随分と変わった格好をした人間だね」

どうやら会話からすると少女と紫はどうやら知り合いらしく、少女は夜見のことを紫に聞くと夜見の目の前に来て手を伸ばして自己紹介をしてきた。

？「私は鬼の伊吹萃華いぶきすいか よろしくね」

夜見「・・・黒夜夜見だ」

こうして互いに軽く自己紹介をすると、夜見も手を伸ばして萃華と握手をした。そして夜見と萃華が握手を終えると、萃華は夜見に膝枕されているレミリアの姿を見て夜見にこう聞いてきた。



萃華「この吸血鬼は夜見の友達？それとも彼女さん？」

夜見「… 友人だ」

萃華「へえ、随分と仲がいい友達だね」

夜見「… ああ、そうかもな」

そして萃華は夜見が自分に対して素っ気ない対応をすることを不思議に思っている  
と、萃華は話を盛り上げたいのか話の話題を変えた。

萃華「ところで話は変わるけどさ、さっきの私の能力を一時的に使えなくしたのって  
夜見の能力だよ？夜見が持つてる能力は一体何なの？」

夜見「… 「生を操る」能力 生命に関する霊力や妖力に干渉できる」

そして夜見は萃華の質問に答えて軽く能力の説明をすると、萃華は頷いて理解をして  
いる様子だった。

萃華「へえ、だから私の能力を使えなくできたんだ 因みに私は「密と疎を操る」能  
力、さっきは密度を下げて霧になってたんだ」

夜見「… 人を集めるのは、どうやったんだ？」

萃華「ああそれはね、みんなの意識を集めて宴会を開かせてたんだ ほら、前の異変  
のせいで春が短くなったでしょ？だから私は能力を使って3日に1回、宴会を開かせて  
たんだ」

そして萃華は自分の能力をどう使って異変を起こしていたのかを説明すると、夜見は1回頷いて返事をして萃華にあることをお願いした。

夜見「・・・そうか。でもな萃華さん、実は他にある異変が起きてるんだ。俺はその異変を早急に終わらせたいから、萃華さんは今の異変を止めてくれないか？」

萃華「え？ そうだったんだ。その異変って、紫も早く終わらせたい異変なの？」

すると萃華は紫の方を向いてその異変は早く終わらせたいのかと聞いて、紫がゆっくり頷くと萃華はとても重大な異変だと感じ取ったのか夜見と紫に向けてこう言った。

萃華「そっか、わかった。私はもう異変を終わらせるよ」

萃華はそう言っただけで異変を終らせる宣言をして、能力で集めたみんなの意識を元に戻した。すると突然目の前に咲夜が現れたかと思ったら、咲夜は手首に日傘を引っ掛けたままレミリアをお姫様抱っこをしていて夜見に一礼をすると突然姿を消して何処かへ行ってしまった。

萃華はいきなり咲夜が現れたり消えたりしていたことに驚いていた様子だったが夜見と紫は咲夜の能力を知っているため、特に驚きもせず夜見は血の翼を作り出し紫は空間に裂け目を作り出した。そして夜見が飛び立とうとした瞬間に紫は夜見を呼び止めた。

紫「夜見、ちょっと待ちなさい」

夜見「ん、どうしたんだ？紫さん」

紫に呼び止められた夜見は翼を動かすのを止めて紫の方を向くと、紫は夜見に向かってこう言った。

紫「深夜に人里へ行く前に少し話すことがあるから、深夜は玄関で少し待つてなさい  
わかったわね？」

夜見「… ああ、わかった」

夜見がそう言つて返事をすると、紫は夜見と萃華に向けて笑顔で手を振つて裂け目の中へ入つていった。そして夜見は飛び立とうとする前に仮面を外すと、萃華に向かって別れを言つた。

夜見「じゃあな、萃華さん またな」

萃華「え？あ、うん またね、夜見」

別れを言つた夜見は仮面を被ると血の翼を羽ばたかせ飛び立ち、萃華は手を振つて夜見を見送つていた。

夜見（どんな理由があろうと妖怪や外来人が、人里の人間に手を出すのは重罪だつて紫さんは言つてたな それなら異変を起こした犯人には、しっかりと刑罰を受けてもらわないとな）

## 第42話 追跡と正体

夜見は3日ごとに行われる宴会の異変を解決させると、一旦自宅である地底にある地霊殿へと戻った。そして夜見は地霊殿で深夜になるまで時間を過ごし、いつもの服装で玄関から出ると背後の空間に裂け目を作り出していた紫が立っていた。

紫「夜見、少し遅かったじゃない 何かあったの？」

夜見「・・・ いや、大丈夫だ」

紫「・・・ どうしたの？ 何か心配していることがあるのかしら？」

紫は夜見の声が少し暗い雰囲気だったのを不思議に思つて尋ねてみると、夜見は後ろにある地霊殿をチラリと見てこう言った。

夜見「深夜に異変を解決しに行くことをみんなに言つたら、食事の時も部屋にいる時はずっと心配されて・・・ な」

紫「あら、そうだったのね でも、だからと今更やめるわけにはいかないわ」

夜見「・・・ ああ、わかつてる」

夜見は地霊殿のみんなのことを思いながら返事をする、紫は夜見にあることを確認してきた。

紫「それじゃあ早速夜見を人里に行かせたいのだけれど、その前に話があるって言うてたことは覚えてるかしら？」

夜見「ああ、言っていたな。それで、内容は？」

すると夜見はそう言つて紫の話の内容を聞こうとしたが、紫はその前にこんなことを言い出した。

紫「まあ実は話じゃなくて、ちよつとした頼みなの。聞いてくれるかしら？」

夜見「ああ、構わない」

紫「それじゃあ、頼む内容だけど……」

そう言つて紫は人里での異変を解決する際の頼みを夜見に言ったのだが、その内容を聞いた夜見は紫に聞き返した。

夜見「……本当にいいのか？」

紫「ええ、大丈夫よ。貴方は何も心配しないで、異変を解決することだけに集中しなさい」

夜見「……ああ、わかった」

紫「それじゃあ頼んだわよ、夜見」

そう言つて紫は夜見が背後にある裂け目に入れるように退くと、夜見はその裂け目の中へと入つていった。

すると夜見のついた場所は満月の淡い光に照らされている人里の門だったのだが、行方不明が発生しているせいなのか門番はいなかった。

そして夜見は門番のいない人里の門をくぐって人里に入ると、自分の靈力を広げて百鬼夜行がないかどうかを調べ始めた。

夜見（……妖力の反応は無いが、微かに反応があるな）

すると夜見は妖力ではないが微かに何かの反応を感じ取ることが出来たので、夜見は走って反応があった場所へ向かっていった。しかし反応は少しずつ動いているようなので夜見は警戒しつつ出来るだけ狭い路地裏を通って近付くと、そこには一人で出歩いている赤い着物を着た少女の後ろ姿があった。

夜見（……こんな時間に何を？）

夜見はその少女を不思議に思いながらも路地裏から覗き込むように見ていると、少女が立ち止まると不意に振り返ってきたので夜見は咄嗟に身を路地裏に隠した。幸い夜見の服装が黒くて見にくいお陰か、身を隠すのが早かったのか少女は背後の夜見の存在には気付かず、その場で一回首を傾げて再び歩き始めたので夜見は身を隠しながら少女の後を追いはじめた。

夜見（……まさか、あの少女が百鬼夜行ってことは無いよな？）

夜見はそんなことを思いながらも少女のことを追い掛けていると、広げていた靈力か

ら妖力が人里の門から入ってくるのを感じ取った。しかし夜見がその妖力を感じ取った瞬間に、その妖力は1 kmの距離を1秒で駆け抜ける程の速さで一直線に近付いてきた。

夜見「なっ!？」

夜見はいきなり妖力があり得ない速さで人里の中を一直線に近付いてきたことに思わず声を漏らしてしまおうと、夜見が追い掛けていた少女は夜見の声に気付いた。するとその少女は立ち止まって振り返ると、ゆっくりと問い掛けてきた。

少女「だ、誰か、いるの？」

そう言つて少女は恐る恐る踏み出したが、その瞬間に目の前に何か大きな物体が3つ降つてきて少女は思わず小さな悲鳴を出して顔を両腕で覆つた。

そして少しすると少女はゆっくりと顔を上げ、目の前に落ちてきた物体の正体を見た瞬間に息を呑んだ。何故なら少女の目の前に降つてきた3つの大きな物体の正体は、軽く2 mを越すような大きな鬼だったのだ。

少女「え、う、嘘……で、しょ？」

少女は目の前に大きな鬼が3匹もいる光景が受け止められず後退りをしたが、目の前の鬼が今にも襲つて来そうな感覚に陥った恐怖でその場で気絶をして倒れてしまった。すると大きな鬼の3匹の内の1匹がその少女の体を片手で掴むと、3匹の鬼は振り返つ

て人里の門の方へと歩き始めた。

夜見（：： あれか？ 藍さんが見た百鬼夜行は）

一方その様子を見ていた夜見は細い路地裏に身を隠して気配を消していたのが良かったのか、どうやら鬼には存在は気付かれてはいないようだった。そして夜見は3匹の鬼が夜見のいる路地裏の横を通り過ぎると、今度は3匹の鬼の妖力を感じ取りながら路地裏を通って追い掛け始めた。

夜見（行方不明の原因が百鬼夜行なのは本当らしいな だけど本当に：： 何のために？）

夜見はそんなことを考えながら百鬼夜行を追い掛けていたのだが何も思い付かず、時間だけが過ぎていくと、百鬼夜行は門を跳び越して人里の外へと出て行って森の奥へと入っていった。すると夜見が追い掛けていた百鬼夜行が姿を消し、更に妖力や気配も突然感じ取れなくなった。

夜見（藍さんの言った通り、本当に消えたな それなら：： 今度はこっちだ）

そして夜見は霊力を広げるのをやめると、今度は百鬼夜行の内の一匹に姿や妖力が消える前に付着させていた血の位置を確認し始めた。実は夜見は今日の昼間に血で作った耳かきの棒を見て、相手のことが感じ取れなかったとしても、自分が感じ取れる物を付着させていれば追い掛けることが出来るのではないか？ と思い付いたのだ。



そして案の定、血の位置を確認できた夜見はしばらく百鬼夜行を追い掛けていたが、百鬼夜行が急に止まるのを確認すると、夜見は気配を消したまま少しずつ百鬼夜行へと近付いていった。

夜見（何故止まった？俺の存在は気付かれていない筈…）

夜見は疑問に思いながら木の陰から百鬼夜行のいる位置を覗き込んで見てみると百鬼夜行の姿は見えており、百鬼夜行は目の前にいる人里の人と同じ位の大きさの鬼と何かを話している様子だった。そしてしばらく何かを話していると3匹の百鬼夜行は少女を持ったまま森の奥へと再び進み、百鬼夜行と話していた鬼はその場に残った。

夜見（あの鬼も百鬼夜行の仲間か それじゃあ…）

すると夜見はしばらく待って百鬼夜行がこの場の様子がわからない程進んだ瞬間、夜見は能力で空気中の血を操って鬼の背後に小さな血の塊を作り出すと血の塊を落とし

ガサツ

鬼「ん？誰かいるのか？」

そして鬼は血の塊が落ちた音に気付いて振り返った瞬間に、夜見は夜刀をゆつくりと引き抜きながら鬼に近付くと夜刀の刃を鬼の首筋に添えた。

夜見「…動くな」

鬼「なっ!?だ、誰だ!」

夜見「黙れ、死にたいのか?」

夜見が鬼の首筋に夜刀を添えると鬼は驚いて大きな声を出したのだが、夜見はそう言つて脅すと鬼は首を斬られるのを恐れて両手を上げてこんなことを言つた。

鬼「くっ!お、お前は誰だ?何が目的だ?」

夜見「…そんなのはどうでもいい お前らが人を連れ去る理由を答えろ」

鬼「なっ!?まさか、にんげ「死ぬ」ことが望みか?」…し、知らねえ 俺はただ命令を受けて、ここで見張りをしているだけだ」

夜見「…命令を出しているのは?」

鬼「…大将の、ぬらりひよん様だ」

夜見（… どうやら、紫さんの予想は合っていたようだな）

夜見は鬼を脅して情報を聞き出すと鬼はどうやら紫の予想通り、ぬらりひよんを大将として百鬼夜行は動いていることを知ることができた。そして夜見はゆつくりと夜刀を鬼の首筋から離して見逃すのかと思いきや、夜見は何故か夜刀を鬼の背中に向けて突き刺した。

鬼「がっ!?ぶはっ!な、何故…」

夜見「…」

鬼は血を吐いて苦しんでいたのだが夜見は構わず無言で鬼の背中に刺した夜刀に力を込めてどんどん深く刺していくと、夜刀の刃先が貫通して鬼の胸の真ん中から出てきた。すると夜見は鬼の背中を足で力強く押して鬼に刺した夜刀を引き抜いて鞘に納めると、息をしていない鬼を見下ろしながらあることを考えていた。

夜見（いくら紫さんの頼みと言っても… 本当に、百鬼夜行を皆殺しにしているのか？）

実は夜見が人里へ行く前に紫に頼んだ内容は、ぬらりひよんを含めた百鬼夜行を皆殺しにすることだった。つまり先程鬼を殺したのは夜見の意思ではなく、紫の頼みを遂行するためだったのだ。

前に紫はどんな理由があっても妖怪や外来人が人里の人間に手を出すのは重罪とは言っていたものの、夜見は紫の頼みに納得していない様子だった。

夜見（俺は幻想郷の運命を狂わせてしまう存在だと、紫さんが一番わかっている筈…）

夜見は紫がどうしてそんな頼みをしてきたのかわからなかったが、考えても理由はわからないので今は異変を解決することを考えるようにした。

そして夜見は再び百鬼夜行の位置を確認すると、先程殺した鬼の血を空气中に分解して自分の周囲に広げ、周囲の状況を確認しながら百鬼夜行のいる場所へと向かった。

しばらくして夜見は百鬼夜行に付着させていた血を頼りにある程度の距離まで来ることができたが、周囲に広げていた血から前方に見張りであろう2匹の鬼の存在に気がいた。

夜見（前に2匹、他にはいないか それなら…）

すると夜見は2匹の鬼がいる方向に血を集めて正確な鬼の位置や大きさなどを調べると、左手で夜刀を逆手持ちで引き抜いて近くの木の自分の胸の高さ辺りに夜刀を突き刺した。そして次に能力で右手に血を集めて今回はコルト・パイソンではなくスコープの無いスナイパーライフルを作り出すと、夜刀の柄の部分にスナイパーライフルを乗せ、左手を上から押し付けて固定をすると右手の人差し指でゆっくりと引き金を引いた。

バアン

すると夜見のスナイパーライフルから大きな銃声が鳴り響くと同時に、銃口から血の弾丸が発射された。そして発射された血の弾丸は木の幹に当たって跳弾を3、4回すると、1匹の鬼の額を見事に貫いて鬼は仰向けに倒れた。

鬼「なっ!? お、おい! どうしたんだ!？」

残った鬼は銃声が聞こえたかと思つたら目の前で仲間の鬼が死んで、見えない位置からの攻撃に驚くと1回周りを見渡した後に倒れた鬼に近付いた。すると夜見は銃口の

向きを少しずらして調整をすると、再び引き金を引いて血の弾丸を発射した。  
バン

再びスナイパーライフルから大きな銃声が鳴り響き血の弾丸は木の幹に当たると、先程とは違う跳弾をして残った鬼のこめかみを貫いた。すると夜見は鬼から流れ出てくる血を空气中に分解して死んだことを確認すると、スナイパーライフルを空气中に分解して夜刀を引き抜くと鞘に納めた。

そして夜見は再び血を広げて周囲の状況を確認しながら先程倒した鬼のいる場所に辿り着くと、目の前には岩の壁と真つ暗な洞窟の入り口が見えていた。すると夜見は洞窟の前に立つて百鬼夜行に付着させていた血の位置を確認すると、どうやら百鬼夜行は目の前の洞窟の奥深くにいるようだった。

夜見（この洞窟が百鬼夜行の拠点か？…いや、おそらく本拠地はまた別の場所だろうな）

しかし夜見は本拠地にしては2匹の見張りで手薄すぎることから、この洞窟は本拠地ではなく複数ある拠点の内の一つなのだろうと思った。すると夜見は夜刀を右手で引き抜いて洞窟の中に入ろうとした瞬間、奥から2つの火の光が見えてこちらに近付いてきた。

？「おゝい、見張りの交代だ もう戻っていいぞ〜！」

そんな声が奥から響いてきて火の光の正体が松明の火だったことに気付くところまで近付いてくると、松明を持っている正体が2匹の鬼であるということにも気付いた。すると向こうも夜見の姿に気付いたが、同時に夜見の後ろに倒れている仲間の鬼の姿にも気付いた。

鬼1 「なっ!?だ、誰だお前は!」

鬼2 「侵入者か!?しかし、どうやって!」

そして2匹の鬼は手に持っていた松明を手放して夜見に向かって殴りかかってきたが、夜見は後ろに跳んで鬼の拳を躲わした。すると鬼同士が顔を見合わせてアイコンタクトをとると、片方の鬼は後ろに振り返って戻ろうとしたが、夜見は戻ろうとした鬼の背中に夜刀を投げて突き刺すと鬼は転んだ。

鬼2 「ぐあっ!」

鬼1 「くそっ!てめえ、よくもやりやがったな!」

そして片方の鬼は夜見に近付いて再び殴りかかってきたが、夜見は鬼の懐に素早く潜り込むと手元に血のナイフを作り出して鬼のみぞおちに突き刺した。

鬼1 「ぐっ?!ぶはっ!がああ、くそ…が…」

みぞおちに血のナイフを突き刺された鬼は口から血を吐き出して力尽きると、夜見は血のナイフを空気中に分解すると同時に鬼の血も空気中に分解した。そして夜見は背

中に夜刀を突き刺された鬼の元に近付くと、倒れている鬼の背中を踏みつけて夜刀を更に深く刺した。

鬼2 「ぐああああ!!ぐっ!?!な、何が目的だ!」

夜見 「…」

鬼は夜刀に突き刺された痛みにも耐えながらも夜見に目的を聞いたが、夜見は何も言わずに夜刀の柄を持って黙っていた。すると夜見はいきなり夜刀を鬼の背中から引き抜くと鬼の頭と顎に手を添え、鬼の首を回すと鬼の首から大きな音がして鬼の首の骨が折れた。

ボキッ

夜見 「…」

そして夜見は鬼の死体から血を空気中へ分解しながら足をどけて鬼の死体を横に蹴り飛ばすと、洞窟の入口付近に先程の鬼が落とした松明を1本拾い上げて中へ入っていった。

しばらくして夜見は何事もなく洞窟の1番奥に辿り着くと、そこには広い空間があり数十匹の鬼がいて奥の方には人里で見た百鬼夜行が1匹いた。

百鬼夜行 「…」 誰だお前は? どうやってここまで来た?」

そして百鬼夜行は夜見に気付くと入口で殺した鬼とは違い驚くことなく夜見に質問

をしてきたが、それに対して数十匹の鬼は夜見の方を見ると一斉にざわめき始めた。しかし夜見は何も答えずに松明を捨て、夜刀を引き抜いて刃先を百鬼夜行の方に向けると、百鬼夜行は呆れたように鬼達に命令を下した。

百鬼夜行「……自分の状況も理解できないのか　おい、お前ら！　その侵入者を抹殺しろ！」

百鬼夜行はそう命令を下すと先程までざわめいていた鬼達は夜見の周りを囲うように集まってきたが、夜見は周りを見渡して完全に囲まれている様子を見てため息をついた。すると鬼達は何の合図もなく一斉に雄叫びを上げて夜見に向かって襲い掛かって来たが、夜見はその場で横に一回転しながら夜刀を横に振るった。

ヒュン

そして夜見が夜刀を振るって風を切った音が鳴ると同時に鬼達がその場で倒れたかと思うと、鬼達の首から血が流れ出て頭がゴロンと落ち、夜見を中心に血の池が出来た。しかしその光景を見ていた百鬼夜行は驚くことはなく、何故かニヤリと笑みを浮かべた。

百鬼夜行「ただ者ではないようだな？　これは楽しませてくれそうだ」

夜見「……」

百鬼夜行はそう言つて夜見に向かってゆっくりと歩み寄つて来たのだが、そんな百鬼



夜行に対して夜見は自分の周りに広がっている血の池を操ると2本の細長い針が伸びて百鬼夜行の両足を貫いた。

百鬼夜行「ぐうっ!？」

すると百鬼夜行の顔が苦痛の顔に変わり、夜見はその瞬間に血で翼を作って百鬼夜行の顔の前まで飛ばたくと、百鬼夜行の顔に回し蹴りを食らわせた。そして夜見の回し蹴りを食らった百鬼夜行はその場に仰向けに倒れると、夜見は再び血の池を操って2本の細長い針を伸ばして今度は百鬼夜行の両手を拘束するように手のひらを貫いた。

百鬼夜行「ぐあっ!？」

すると百鬼夜行は再びの苦痛によつて声を漏らすと宙に浮いている夜見を睨み付けたのだが、夜見は百鬼夜行の頭の側に降りて翼を分解すると夜刀の刃先を百鬼夜行の首に向けて口を開いた。

夜見「…… 人里に來たもう2匹の百鬼夜行はどうした？ 連れ去った少女は何処だ？」

百鬼夜行「ぐうう、お前…… ただで済むと思うなよ！」

夜見「…… 戯れ言を言う暇があるなら質問に答えろ」

百鬼夜行は拘束されている状態でも強気な発言をすると夜見はその発言を戯れ言だとあしらひ、また血の池を操って2本の血の針を伸ばすと今度は百鬼夜行の両肩を貫いた。そして百鬼夜行は再び苦痛の声を漏らして夜見のことを睨み続けたのだが、夜見は

夜刀を構えたまま先程と同じ内容の質問をした。

夜見「もう2匹の百鬼夜行と連れ去った少女の居場所を答えろ」

百鬼夜行「……くっ！ここから少し北に進んだ場所だ！これで満足か!？」

夜見「……そうか」

すると百鬼夜行はこれ以上の苦痛を味わいたくないのか、それとも夜見に敵わないと察したのか、鬼は半ば諦めたかのような声で夜見の質問に答えた。それに対して夜見は一言だけ呟いて夜刀を上を持ち上げると下に振り下ろし、百鬼夜行の喉を斬り裂いて殺すと夜刀を鞘に納めて血の池と百鬼夜行の血を空气中に分解して洞窟を出た。

夜見（……さて、北へ向かうとするか）

そして洞窟から出た夜見は百鬼夜行を追い掛けていた時と同じように、空気中の血を周りに広げると百鬼夜行の言っていた北の方角へと歩いていった。しかし夜見は30分程真っ直ぐ北に向かって歩いていったのだが、何処かに出ることもなければ周りに広がっている血からも何も感じ取れなかった。

夜見（何も無いな……まさか、偽の情報に踊らされただけか?）

そして夜見はもしかして百鬼夜行の偽の情報にまんまと騙されたと思ったのだが、次の瞬間に夜見は何とも言えない違和感を感じた。

夜見（……何だ、この違和感は? いや、この流れ……間違いない、風の流れが自然の

ものと微妙に違う)

夜見は何とも言えない違和感の正体が森の奥から来ている風の流れだと気付き、風上の方角に向けて血を広げていくと木が生えていない開けた場所があることに気付けた。すると夜見は百鬼夜行の言っていた場所はその開けた場所なのではないかと思ひ、風上の方角にしばらく歩いていくと開けた場所に出た。

その開けた場所はこいしやチルノ達が遊んだ場所の様に円形に木が生えていなかったが、その広さは直径50mは明らかに越していた。そしてその場所の奥の方には人里で見た百鬼夜行を含めた百鬼夜行であろう大量の鬼が洞窟の比にならない程おり、その百鬼夜行は一番奥の方を見ているようだったが満月の淡い光の逆光でよく見えなかった。

そして夜見は百鬼夜行に気付かれないようにゆっくりと歩いて近付いていったのだが一番奥に誰かがいたらしく、ある声が聞こえてきた。

「あれ？確か君は……夜見くん？」

すると一番奥にいる誰かはどうかやら夜見のことを知っているらしく、不思議に思っているような声で夜見の名前を呼んだ。そこで百鬼夜行は夜見が後ろから来ていることに気付いて、一斉に夜見の方を向いたが一番奥にいる誰かはこう言った。

「ああ、待つて待つて君達 そんなに驚かないで、とりあえず道を開けてあげてく

れないかな？」

「一番奥にいる誰かは百鬼夜行にそう命令すると百鬼夜行は真ん中に一本道を開けるように横に退いたが、やはり満月の淡い光の逆光で奥にいる誰かはよく見えなかったが声には聞き覚えがあった。そして夜見は一番奥にいる誰かの姿がゆつくりと見えてくると、その人物の名前を呼んだ。」

夜見「……何故お前がいるんだ、月夜さん」

なんとその人物は夜見が初めて参加した宴会の時に会った、白いフード付きのマントを深く被った月夜だった。夜見は月夜が何故ここにいいのか不思議ではあったのだが、もう一つ不思議なことがあり月夜は正面を右側に向かせた白いバイクのクルーザーに對して横向きに乗っていたのだ。

月夜「何故ここにいて聞かれてもねえ……そう言う君はどうしてここにいて？」

夜見「質問を質問で返すな、さっさと俺の質問に答えろ」

月夜「はいはい、わかったよ 俺がここにいて理由はね、俺が百鬼夜行の大将だからだよ」

夜見（……やはりか）

月夜は質問に対してここにいて理由は百鬼夜行の大将だと言ったのだが、月夜は先程

百鬼夜行に命令を下し、百鬼夜行はその命令に従っていたので本当に月夜が百鬼夜行の大將で間違いないようだった。すると夜見の質問に答えた月夜は、当たり前かのように夜見に対して先程と同じことを聞いてきた。

月夜「それじゃあ改めて聞くけど、どうして君はここにいるの？」

夜見「……俺は、この異変を解決しに来た」

月夜「……まあ、そうだろうとは思ってたよ」

月夜はそう言つてバイクから降りて右手で引き抜いた白刀をただ横に振るうと、なんと斬撃を飛ばした訳でもないのに百鬼夜行の首が斬られて一斉に百鬼夜行が倒れると同時に頭が地面に転がった。

夜見（……斬撃を飛ばした様子はなかった 一体どうやって?）

そして夜見は目の前で起きたことを見た瞬間に夜刀をいつでも引き抜けるように警戒をしたのだが、次の瞬間に月夜は白刀を鞘に納めるとこんなことを言い出した。

月夜「さあ、ゲームを始めようか」

夜見「……ゲーム？」

月夜「ルールは簡単だよ 君は君の命と刀を賭けるのに対して、俺は人里の人達の命と俺自身の刀を賭けて殺し合いをする そして勝った方が相手の賭けたものが貰える、簡単でしょ？」

すると月夜はいきなりゲームの内容について説明をしたのだが、夜見はゲームで賭ける物に対して疑問を抱いた。

夜見「俺の刀と月夜さんの刀は釣り合っているかもしれないが、俺の命と人里の人達の命は明らかに不釣り合いじゃないか？しかも、何故月夜さんは命を賭けないんだ？」

夜見はそう言つて月夜に向かって抱いた疑問をぶつけたのだが、その疑問を聞いた月夜は呆れたような様子で答えた。

月夜「何でつて、どうせ俺は死なないだろうし、人里の人間一人の命だと君の命に対して軽いんだよ」

すると月夜は自分の考えを言ったのだが、夜見はその月夜の考えを聞いた瞬間にギリツと齒軋りをするのとドスの利いた声でこう言った。

夜見「……おい、今何て言った？」

月夜「あれ、聞こえなかつた？どうせ俺は死なないし、人里の人間一人の命の重さは君の命に比べたら軽すぎるって「バキッ」

そして月夜が再び夜見に同じことを言っていると何か折れるような音が夜見の元から聞こえ、月夜は不思議に思つて言うのを止めた。すると夜見は仮面とマントを外して放り投げると、口の中から齒軋りによって折れてしまった歯の欠片を吐き出した。

夜見「人里の人の命が俺の命より軽いだと？ふざけんじやねえぞ？」

夜見は明らかに怒っている口調でそう言いながら右手で夜刀を引き抜いて刃先を月夜に向けると、空気中の血が集まって夜見の背中に翼を作り出した。しかしその翼はいつもの赤く鳥のように美しいものではなく、初めてレミアとフランドールの前で作り出した赤黒い結晶が集まったような見た目をしていた。

夜見「命つてのはどれも同じように儂くて重く、誰かの命が軽いことなんて絶対無えんだよ」

月夜「へえ、君がそう言うってことは、命の重さを誰よりも理解してるってことみたいだね？」

夜見「ああ、理解してるさ 少なくともお前よりはな」

月夜（・・・挑発のつもりで言ってみただけど、冗談を言っているようには見えないな まあ、取り敢えずやる気を出してくれたんなら別に構わないか）

そして月夜は夜見の背中に結晶のような翼を作り出した姿を見たが怖じ気づくこともなく、白刀を右手で引き抜くと夜見と同じように刃先を夜見に向けた。

月夜「さあ、ゲームをLET'S STARTだ」

## 第43話 GAME START

しばらく夜見と月夜はお互いに自分の持っている刀の刃先を向け合っていたが、夜見は冷静に月夜に対してあることを考えていた。

夜見（最初に会った時もそうだったが……全く気配が感じられないせいなのか、本当にその場にいるのかも怪しく感じるな）

その内容は月夜の気配のことで、月夜からは気配が感じられないため、月夜という人物が見えている筈なのにそこにはいないように夜見は感じていた。そして夜見が月夜のことを把握できているのは月夜の周りに血を広げ、月夜がいる位置を把握しているからだった。

月夜「どうしたんだい？ 来ないなら俺から行こうか？」

すると月夜はそう言って白刀を下ろして白刀を構え始めたが、その瞬間に夜見は月夜の周りに広がっている百鬼夜行の血の池から無数の針を飛び出させた。だが、月夜はまるでその不意打ちが来るのを知っていたかのように針を跳んで躲すと、その内の一本の針の上にバランスよく立って白刀の峰を肩に乗せた。

月夜「おっと、危ない危ない 不意打ちなんてするんだね」



そして月夜は夜見を見下ろしながら余裕をかましていたが、次に夜見は月夜を貫こうと結晶のようになっている血の翼の先端を月夜に向けて伸ばした。しかし月夜は、まるでその動きも知っていたかのように再び跳んで躲すと、血の翼は先程月夜が立っていた血の針を粉々に打ち砕き、月夜は地面に降り立った。

月夜「いいね、その調子のまま本気で殺しにかかってきてよ、そうしてくれないと、ゲームを楽しめないからね。」

地面に降り立つと月夜は肩に白刀の峰を乗せたまま、そんなことを言いながらゆつくりと夜見の方へ歩み寄ってきた。すると夜見は再び血の池を操って月夜の後頭部に目掛けて針を一本飛び出させたが、月夜は後ろを見ていないにも関わらず頭を傾けて避けた。

月夜「さあ、次はどんな風に殺しに来てくれるのかな?」

夜見「…何故だ、一体どうやって攻撃を把握しているんだ?」

そして夜見は月夜がどうやって攻撃を把握しているのかを考えながらも、血の池を全て空气中に分解すると夜刀をゆつくりと鞘に納めて居合の構えを取った。すると夜見は居合の構えを取ったまま地面を蹴って月夜の懐に入り込んで夜刀を振るうが、月夜は後ろに跳んで避けると夜見は距離を詰めて立て続けに夜刀を振るった。

月夜「あはは、惜しい惜しい、ほらほら、もつと来なよ」

夜見（くっ!? 何故当たらないんだ!?)

しかし月夜は、ほとんどその場から動かないで身体を反らしたり身を少し引いたりして、夜見の振るう夜刀の太刀筋を全て躲していた。そして月夜はしばらく夜見の振るう夜刀を躲し続けていると、月夜は笑いながらこんなことを言った。

月夜「それじゃあ、そろそろこっちから行かせてもらおうよ?」

そして月夜はそう言った瞬間に、その場からいきなり姿を消した。しかし、それは月夜から気配が感じられないから姿を消したように見えた訳ではなく、夜見が月夜の周りに広げていた血からも月夜が感じ取れなくなっていて、完全に姿を消したのだ。

夜見（なっ!? 一体ど「ザワツ」

すると夜見は月夜が消えて周囲を見渡した瞬間に嫌な予感を背後から感じ、夜見は咄嗟にしゃがんで姿勢を低くすると白刀の刀身が先程首があつた所を横切つた。

夜見（後ろに回り込んだか!）

そして夜見は立ち上がると同時に振り返りながら夜刀を振るつたのだが、その瞬間に夜見は驚きのあまりに目を見開いた。何故なら月夜は確かに夜見の後ろに回り込んでいたのだが、月夜と夜見との距離は10mは離れていて、月夜の持っている白刀がどうやつても届かないからだ。

月夜「何をしているんだい そんなところで刀を振つても、意味はないよ?」

夜見（一体どういうことだ？確かに刀身が横切った筈 いや、そういうばあの時  
も…）

しかし夜見はこの状況を見ると月夜が百鬼夜行を殺した状況のことを思い出し、今の状況と同じなのではないかと思つた。すると夜見は血を今度は月夜の周りだけではなく、此処ら一帯に広げて月夜のことを把握するとある考えが思いついた。

夜見（これは月夜さんの能力による仕業だ。そして恐らく、その能力は咲夜さんと咲希さんと同じ、空間に関する能力の筈だ）

そして夜見はゆっくりと夜刀を右手で構えて腰を落として月夜に向かつて走り出すと、月夜は口元を少し緩めてニヤリと笑つて一瞬で夜見の目の前に来ると白刀を両手で振るつてきた。しかし夜見は咄嗟に夜刀の峰に手を添えて白刀を防ぐと、同時に周りに広げていた血からあることがわかつた。

夜見（やつぱり、月夜さんは一直線に通つてきた。つまり月夜さんの能力は空間を操ることが出来る能力だな）

だが、夜見が月夜の能力がどのような能力か予想がついたところで状況が変わる訳も無く、夜見と月夜は今も一步も引かない状況でいた。すると夜見は血の翼で月夜のことを薙ぎ払うために振るつたのだが、月夜は後ろに跳んで避けて距離を取つた。

そして夜見と距離を取つた月夜は夜見が血の池から針を飛び出させたり、今も赤黒い

血の翼を生やしている様子から、こんなことを言ってきた。

月夜「……成る程、君の持っている特別な力は「血を操る」ことが出来るってところかな」

夜見「……そうかもな　そして月夜さんの能力は恐らく、「空間を操る」ことが出来る能力だろう？」

それに対して夜見は言葉を濁して答え、逆に予想した月夜の能力を言うと言夜はこんな風に答えた。

月夜「「空間を操る」ことが出来る……ねえ　まあ確かに、そうかもしれないね」

夜見「……どういうことだ？何故濁したような言い方を？」

そして月夜も何故か夜見と同じように濁したように答えに夜見が疑問に思っているのと、月夜は先程と同じように夜見に一瞬で近付いて白刀を振るってきた。夜見はなんとか夜刀で白刀を防いだが少し仰け反ってしまい、月夜は夜見の仰け反った隙を狙って白刀を振るってきたが、夜見はそれも防ぐと再び仰け反って月夜が白刀を振るっての繰り返しが始まった。

月夜「ほらほら、このまま防いだままじゃ何も変わらないよ？」

夜見「……じゃあ、これならどうだ？」

夜見はそう言って今度は白刀の太刀筋を防がないで、夜刀の刃の上を滑らせて逸らし

た。すると月夜は驚いたのか隙が出来たので、夜見はその隙を狙って夜刀を振るうが月夜は一瞬で5m程の距離を空けた。

月夜「ふう、危な「ヒュンツ」… 本当に危ないね」

夜見（… やっぱり、躲かわされるか）

夜見は月夜が後ろに下がったと同時に血の翼を顔に目掛けて突き刺そうとしたのだが、月夜は再び首を傾けて躲した。そして夜見は翼を引くと同時に左手に血を集めてコルト・パイソンを作り出すと、銃口を月夜に向けて躊躇せずに血の弾丸を何発か放った。しかし月夜は前に円形の壁を作るように白刀を高速で回して弾丸を器用に刀身に乗せると、夜見に向かって白刀を振るって弾丸を飛ばし返した。すると夜見は返された弾丸を翼で薙ぎ払ったが、翼の陰に隠れるように月夜が一瞬で間合いを詰めて白刀を振るうと夜見は横に跳んで避けた。

月夜「おお、これを避けれるんだなんて、随分と良い動体視力だね」

夜見（… このままでと埒が空かないな さて、どうするべきだ？）

月夜「でもね、避けるだけなのは少し面白くないかな？」

月夜はそう言って再び夜見との間合いを一瞬で詰めて白刀を振るうと、夜見は夜刀で防いで左手のコルト・パイソンをナイフに変形させた。そして夜見は左手のナイフを逆手持ちにして月夜の心臓に突き刺そうとしたが、月夜は白刀に力を込めると夜見は左手

首を夜刀の峰に添えた。

月夜「ナイフで突き刺そうとしても、そうはさせないよ？」

夜見「……まあ、そうだろうな」

月夜「それで、ここからどうするつもりだい？」

夜見「……」

すると夜見は月夜の質問に答えずに黙ると左手のナイフの刃を月夜の心臓に向けて伸ばしたが、月夜は素早く後ろに下がって避けた。

月夜「まあ、そう来ると思ってたよ」

そう言つて月夜は踏み込んで夜見にもう一度斬りかかってきたが、夜見は息を少し吐いて神経を集中させると夜刀と一体になった感覚を感じた。そして夜見は一体に感じた夜刀を振るうと月夜の白刀を弾き、月夜に隙が出来た。

月夜「くっ!？」

夜見「これは予測してなかったか？」

すると夜見は隙の出来た月夜に向かつて夜刀を振るい、月夜はギリギリ白刀で防ぐが白刀はまたしても弾かれてしまった。夜見はその後も隙を狙つてナイフと夜刀を振るい続けて、今度は立場が逆の状態を防いで仰け反つてが始まった。

月夜「中々やるね、実力を隠していたんだね？」

夜見「……そんなことを言う暇はないと思うが？」

月夜「まあ、そうだね 丁度良い難易度のゲームで、中々楽しめてるよ」

夜見「……」ギリッ

そして夜見は齒軋りをすると夜刀を下から大きく振って月夜はそれも白刀の刀身で防ぐが、その威力は大きく月夜は防ぎきれなくて後ろへ大きく仰け反った。すると当然大きく仰け反った月夜には大きな隙があり、夜見にはそのチャンスを逃す理由はなかった。

夜見は月夜との距離を詰めると更にもう一步踏み込み、夜刀の刃先を月夜の心臓へと狙いを定めた。そして夜見は突きを放つと同時に月夜に向かってこう言った。

夜見「GAME OVERだ、月夜さん」

すると次の瞬間には夜見と月夜の間で、刃物が衣服と体を切り裂いて血が吹き出す音が鳴った。

ザシユッ

しかし…

夜見「ぐっ！ぶは!？」

月夜「… そうだね、君が負けてただけど♪」

その音が鳴ったのは夜見の体からだった。

夜見は確かに月夜の心臓に目掛けて夜刀で突きを放っており、確実に月夜の心臓に夜刀が突き刺さろうとしていた。しかし夜見の放った夜刀の突きが月夜に突き刺さろうとした瞬間に夜刀の突きは月夜には届かず、逆に仰け反っていた筈の月夜に白刀で肩から腰にかけて斬られていた。

夜見（一体、何が…？）

夜見は目の前で起きた不可解なことに戸惑いながら口と体から大量の血を流していると、その場で膝をついて倒れそうになったが夜刀を地面に突き刺して体を支えた。す



ると目の前に立っている月夜は夜見のことを見下ろしながらこんなことを言った。

月夜「いや、惜しかったね まさかの勝利目前でGAME OVER、君の負けになるなんてね」

夜見「げほっ！く、がは！はあ…… はあ…… まだ、負けて…… ねえ」

月夜「…… はあ、見苦しいなあ 君なら潔く負けを認めると思ったのに、まさか負け惜しみをするだなんて」

夜見「言っただろ…… まだ、負けてねえって！」

そう言つて夜見は目の前にいる月夜を血の翼で薙ぎ払おうとしたのだが、薙ぎ払った瞬間に月夜は一瞬で後ろへ下がって距離を取った。そして夜見は能力を使って斬られた傷を数秒で治すと、夜刀を地面から引き抜いてゆっくりと立ち上がった。

月夜「あれ？君、体に斬られた傷は？」

夜見「…… さあな、月夜さんが斬ったつもりだっただけかもな」

夜見「…… 何故だ？突き刺せなかったのは空間を操ればどうにでもなるが、どうして仰け反っていた筈の月夜さんが俺を斬ることが出来たんだ？」

月夜は立ち上がった夜見の姿を見て斬った筈の傷が無いことを不思議に思つて夜見に質問をしたが、夜見は自分の能力を明かさないために適当に答えるものの、夜見には斬られた時の事が疑問に残った。すると月夜は白刀の峰を肩に置いて少し考え込んだ。

月夜「ふうん……成る程　そういうことね」

月夜はそう言つて目の前からいきなり姿を消した瞬間に夜見の背後に回り込んで白刀で背中に斬りかかった。しかし夜見は周囲に血を広げていたので背後に月夜が回り込んだことを即座に認識して、血の翼で背中を防いだ筈なのだが何故か背中を斬られた。

夜見「がっ!?」

月夜「防ごうとしても無駄だよ」

そして夜見は怯みつつも背後に振り返つて更に白刀を振るつてくる月夜に対して左手のナイフで防ごうとしたのだが、何故か白刀がナイフに当たらなかつたかと思つたら再び白刀に斬られた。

夜見「ぐあっ!？」

月夜「だから言つたでしょ? 防ごうとしても無駄だつて」

月夜はそう言つて更に白刀で斬りかかつてくるので、夜見は月夜の言う通り防ごうとしても斬られると思ひ、後ろに跳んで距離を取つた。

そして夜見は表情には出してはいなかつたが、先程のことに内心は驚いていた。しかし夜見が驚いているのは防いだ筈なのに斬られたことではなく、月夜が目の前から姿を消して背後に回り込んできた時だつた。

夜見（どういうことだ!? 月夜さんは一体どうやって、どこも通らずに俺の背後に回り込んだんだ!?)

夜見は先程から月夜が距離を詰めて来た時には周囲に広がっている血から、月夜が何処を通って近付いていたのかを認識していた。しかし月夜が夜見の背後に回り込んだんだ時には何処も通っておらず、まさに瞬間移動をしたのだった。

夜見（仮に月夜さんの「空間を操る」能力が、空間を歪められる程の能力で一瞬で回り込んだとしても、広げてある血で空間が歪んだことは認識できる筈…）

そして夜見は月夜がどうやって背後に瞬間移動出来たのかを考えていると、無意識の内に能力で体の斬られた傷を数秒で治していた。すると月夜は夜見に向かって左手のひらを向けてきたので、夜見は警戒をして腰を落として身構えた。

ヒユウウウウ

夜見（…風?）

すると次の瞬間に夜見の背後からそよ風が吹いてきたのだが今まで風は一切吹いていなかったもので、明らかに不自然だった。夜見はいきなり風が吹いてきたことを不審に思いつつ月夜の出方を窺<sup>うかが</sup>っていたのだが、突然背後から吹いていたそよ風が暴風へと変わった。

夜見「なっ!? くっ!」

夜見はいきなり背中を暴風に押されて体勢を崩しそうになったが、翼を地面に突き刺して体勢を整えると再び身構えた。すると夜見は月夜の手のひらから月夜側では風がやんでいることに気付いた瞬間、月夜は夜見にこんなことを聞いてきた。

月夜「ねえ、君は空気中の一部分の質量が無くなってしまった場合、どうなるか知ってるかい？」

夜見（∴ 一体どういうことだ？何が目的なんだ？）

そして夜見は月夜がいきなりそんなことを聞いてきたことに何の意図があるのか警戒しながら、夜見は月夜の質問にゆっくりと答えた。

夜見「∴ 質量が無くなった一部分の気圧が無くなり、そこへ周囲の空気が流れ込むとして流れ込んできた空気の質量も無くなる場合は、永遠に空気が流れ込む」

月夜「その通り、正解だよ。それじゃあ、その一部分には出入口が一方向きかなくて、流れ込んできた空気の質量が急に元に戻ったら？」

夜見（∴ 本当に何が目的なんだ？空気の質量が元に戻ったら∴ まさか！）

すると夜見は月夜の謎の質問の意図に気付いた瞬間に背中から吹いてきた暴風がいきなりやみ、それと同時に夜見は横に転がるように跳んだ。そして夜見が跳んだと同時にドンツと何か飛ばされた音が鳴ったかと思うと、夜見の背後にあつた木々に直径10cm程の穴が一直線に空いていた。

月夜「まあ、流石にそこまで聞いたらばれちゃうか 正解は高密度に圧縮された空気が放たれるだけど… まあ、それに気付いたから避けたんだよね」

夜見（あ、危なかった 気付くのが後少しでも遅れてたら体に風穴が空いていた）

すると夜見は先程もう少しで自分の体に風穴が空くかもしれない状況にいたことに焦りを感じていたが、それと同時に夜見はある違和感を感じた。

夜見（… 何か、何か引つ掛かる でも、なんなんだ？この違和感は…）

そして夜見は先程の行動のどこに違和感があったのかを知るため、先程の行動の記憶を瞬時に遡ると違和感の正体に気付いた。それは、月夜の聞いてきた質問だった。

「ねえ、君は空気中の一部分の質量が無くなってしまった場合、どうなるか知ってるかい？」

夜見（月夜さんの能力は「空間を操る」能力の筈なのに、何故月夜さんは「質量が無くなってしまった場合」って言ったんだ？月夜さんの能力だったら空間を広げて、空気中の一部分の質量を小さくすることしか出来ない筈なのに…）

そして夜見は仰け反った筈の月夜がどうして白刃で斬ることが出来たのか、月夜の能力では有り得ない瞬間移動は何故起きたのか、そして最後に月夜の能力では出ない筈の「質量が無くなってしまった場合」という言葉がどうして出てきたのかを結び付けた結果、とても単純な答えを導き出すことが出来た。そもそも夜見の最初の考えが間違っ

いたのだ。

夜見（そうだったのか、だから月夜さんは濁したような答え方を…）

月夜「… どうしたんだい、急に黙りこくって？」

月夜は急に夜見が黙り込んだ様子を見て不思議に思い夜見に尋ねると、夜見は月夜のことを真つ直ぐに見て言った。

夜見「… 月夜さんの本当の能力がわかった」

月夜「… へえ」

すると月夜は夜見の言ったことに対して驚いたのか一瞬体がピクツと動いたかと思うと、口元を緩めてニヤリと笑いながらそう言った。そして夜見は夜刀をゆつくりと持ち上げて夜刀の刃先を月夜に向けると、夜見は月夜の本当の能力を言った。

夜見「無を操る」能力、それが月夜さんの能力だ」

すると夜見がそう言った瞬間に夜見は無意識の内に殺気を出していたのか、月夜は夜見の後ろにうつすらと死神のような黒い影が一瞬だけ見えて背筋に寒気を感じた。しかし月夜はその光景を見て怯えるどころか、寧ろその光景に感心して「無を操る」能力について話し始めた。

月夜「… そうだよ、俺に備わっている特別な力は「無を操る」ことが出来るんだ

例えば仰け反った出来事や俺がそこにいたということを無かったことにしたり、空間の

距離や物体の質量を無くしたりね」

そして月夜は自分の能力について話し終えると白刀の峰を肩に乗せて、不思議に思った様子で夜見に尋ねた。

月夜「それで、俺の能力がわかったところで君はどうするの？君は俺の攻撃を防ぐことは出来ないし、逆に君の攻撃が当たることもないんだよ？」

夜見「… どうだろうな もしかしたら、意外に当たるかもしれないぞ？」

月夜「いやいや、それは有り得ないよ」

夜見「…」

すると夜見は月夜に向けていた夜刀を下ろして左手のナイフを空気中へ分解すると、夜刀を鞘に納めて居合の構えを取って夜刀と一体になった感覚を感じた。そして夜見は夜刀を大きく振りきるように引き抜いて大きな斬撃を発生させると、その斬撃は真つ直ぐと月夜の方へ飛んでいった。

月夜「… はあ、何度言ったらわかるのかな？」

月夜はそう言つて能力を使って斬撃を避けようとしたのだが、月夜はあることに気付くと白刀を振るつて斬撃を斬り落とした。すると月夜が斬撃を斬り落とした時には既に夜見は月夜との距離を詰めており、月夜に斬りかかったのだが白刀で防がれて鏢<sup>つば</sup>迫り合いになった。

夜見「どうしたんだ？俺の攻撃は当たらないんじゃないか？」

そして夜見は罅迫り合いの状態で月夜にそう言って軽く挑発をしたのだが、月夜は夜見の挑発には乗らないで冷静に返答した。

月夜「くっ！知らないふりなんて…君の仕業なんですよ？急に俺の特別な力が、使えなくなったのって」

そう、実は月夜が能力を使って斬撃を避けようとした時に気付いたこととは、自分の能力が何故か使えなくなっていたことだった。夜見は月夜が能力について話していた内に霊力を広げており、霊力を伝って月夜の霊力を乱して能力を使えないようにしていた。

夜見「…さあな、俺は知らないな」

月夜「しらを切るのは無理だよ、ここには君と俺しかいないんだから」

夜見「…仮に俺じゃなかったとしても、別に俺は困らないがな」

夜見はそう言うのと夜刀に力を込めて月夜のことを押して無理矢理少し距離を空けさせると、そのまま流れるように前蹴りを月夜の腹に入れて更に距離を空けた。

月夜「ぐっ!？」

そう言うのと何気に初めて攻撃をまともに食らった月夜は大きく仰け反り、夜見は更に仰け反った月夜に畳み掛けるように翼で薙ぎ払った。そして月夜は今は能力が使えな



いので夜見の翼の薙ぎ払いに直撃し、月夜は後ろに飛ばされて仰向けで地面に倒れた。

月夜「がっ！う、うう……」

月夜は腹を蹴られた痛みと翼で薙ぎ払われた痛みで唸るような声を出していると、夜見は翼を飛ばたかせて5 m程上に飛ぶとその場に留まった。すると夜見は飛ばたかせている両翼から無数の針を作り出して月夜に向けて伸ばしたが、月夜は後転をするように立ち上がると軽い身のこなしで少し移動をしながら体を少し反らしただけで全て躲けてしまった。

月夜（な、なんとかギリギリ躲すことはできたけど、困ったな 能力が使えないとなると、実力で勝つてなければ確実に負けるな……）

夜見（…… 能力を使えなくさせた時にわかったが、月夜さんの気配が無いのは能力のせいじゃなくて元々気配を消しているのか しかし一体どうして、姿が見えているのに気配を感じ取れないんだ？）

夜見と月夜はそれぞれ別のことを考えていると夜見は伸ばした針を元に戻して地面に降り立ち、月夜は反らした体を戻して両手で白刀を構えた。そして夜見がゆっくりと一步を踏み出した瞬間に月夜は走り出すと白刀で斬りかかってきたが、夜見は踏み出した足で地面を蹴って月夜の懐に飛び込むと夜刀を振るった。

ガキーンツ

しかし互いの刀は相手の体を斬ることはなく、互いの刀がぶつかり合つて大きな金属音が響いた。そして互いに更に更に刀に力を込めて同時に振り切ると、夜見と月夜は後ろにずり下がった。

月夜「くっつ！やっぱり、そう簡単にはやられてくれないか」

夜見「当たり前だ 異変を解決するために、俺は殺されるわけにはいかない」

夜見がそう言い終えて走り出すと月夜も同じように走り出して互いに隣を通り過ぎるように刀を振るつたのだが、自分の刀は相手の刀にぶつかり金属音と火花を出しただけだった。そして夜見も月夜は互いに振り返つて再び刀を振るうのだが、どれも刀がぶつかり合つて金属音と火花を出す互角の状況が生まれただけだった。

夜見（実力はほとんど互角だな…このままだと埒が空かないな）

月夜（実力としては勝つてもいなければ劣つてもいけない…さて、どうしようかな）

夜見と月夜は互いに、この互角の状況をどうしようかと悩みながら刀を振るつていたのだが互いの刀がぶつかり合つて再び罅迫り合いになると、何故か月夜は夜見の喉へ左手を伸ばしてきた。すると夜見は月夜の伸ばしてきた左手を掴んで止めようと夜刀から左手を離れたのだが、その瞬間に夜見は月夜の袖口からあるものがチラリと見えた。

夜見（なっ!?まさか!）

夜見は月夜の袖口から見えた物で何をしてくるのかを理解すると、目の前まで来てい

る左手から離れるように後ろに跳んだ。すると夜見が後ろに跳んだと同時に月夜の袖口からは15cm程のナイフの刃が飛び出してきて、夜見が月夜の左手を掴んでいればナイフの刃が喉に突き刺さっていただろう。

月夜「ああ、これも駄目なのか 俺の十八番だったんだけどなあ」

月夜は残念そうな様子で左の袖口から飛び出しているナイフの刃を中に納めると、ゆつくりと片足を後ろに下げて白刀を持つている右手に力を入れた。

月夜（もう少し時間を掛けたかったけど……まあ、仕方ないか）

そして月夜が走り出すと同時に夜見は両翼の先端を月夜に向けて伸ばしたのだが、月夜は両方の翼の先端を紙一重で避けると夜刀の届く僅か範囲外から突きを繰り出した。夜見はその突きを夜刀の刀身の側面で受け止めようと刀身に左手を添えて構えると、白刀の先端が夜刀の刀身に当たる。…筈だったのだが、何故か白刀は夜刀の刀身の側面をすり抜けて夜見の腹部に刺さった。

夜見「うっ?!?ぶはっ!」

すると白刀が腹に刺さった夜見は何が起きたのか理解できないまま口から血を吐き出しながら怯んでいると、月夜は夜刀をすり抜けた白刀を夜見の腹からすぐに引き抜いた。そして月夜は白刀を振り上げると怯んでる夜見に向かって容赦なく刀を振り下ろした。

夜見「くっ！」

そして月夜が白刀を振り下ろすと夜見はギリギリのところまで防ぐことができたのだが、月夜は振り下ろした白刀を流れるように今度は斬り上げるように振るってきた。すると月夜の斬り上げてくる白刀に対して夜見は夜刀を振り下ろしたのだが、白刀に夜刀が弾かれると夜刀は夜見の手から放れて宙を舞い、夜見は大きな隙を晒してしまった。

夜見「しまった…」

月夜の目の前で大きな隙を晒してしまった夜見は翼をまだ引き戻しておらず白刀で斬られてしまうと思ったのだが、月夜は何故か白刀で夜見を斬らずに右足で夜見の横っ腹に蹴りを入れて横へ3m程蹴り飛ばした。

夜見「かはっ!？」

そして蹴り飛ばされた夜見は地面を転がってうつ伏せで倒れると同時に、宙を舞っていた夜刀が落ちてきて月夜の目の前の地面に突き刺さると、月夜は左手で夜刀を引き抜いた。

夜見（な、何故？隙だらけの俺を斬らなかつたんだ？）

うつ伏せで倒れた夜見は腕に力を入れ、ゆっくりと立ち上がりながら能力で腹の傷を治し始めた。そして先程隙を晒してしまった時に何故白刀で斬られなかったのかを考

えていると、月夜はこんなことを言い始めた。

月夜「光と影は常に隣り合わせである。光は闇を切り裂き影を消し去る存在だが、光は遮られると簡単に形を変え影を生み出す存在となってしまう」

夜見（：： なんだ？ 一体どういうことだ？）

夜見は月夜がいきなり意味不明なこと言い始め一体どういう意味なのかと考えていると、月夜は右手に持っている白刀の先端を夜見に向けてと更にこう言った。

月夜「光と影、双方は常に共に存在をしている。今、俺が持っている2本の刀と同じようにね」

夜見（：： なるほど、そういうことか）

すると夜見は月夜が更に言ってきたことを聞いた瞬間、ある話の1つの謎が解明できたのと同時に月夜が最初に言っていた意味を理解することができた。

夜見（つまり妖夢さんが言っていた「夜刀 闇夜」の対となる刀は、月夜さんが持っていた「白刀 月光」だった。そして、さっき刀がすり抜けたのは「白刀<sup>光</sup> 月光」が「夜刀<sup>闇</sup> 闇夜」を切り裂いたってことだったんだな）

しかし、そんなことを理解することができたところで夜見は有利になるどころか、寧ろ自分は極めて不利であることに気付かされただけだった。すると月夜は夜見に向けていた白刀の先端を下げると、夜見に向かってこんなことを言い始めた。

月夜「さて、STAGE1はこれで終わり。だから今度はSTAGE2を始めようか」  
月夜はそう言つて片足を下げて2本の刀を構えたのに対して、夜見は両手に100cm程の刀を造り出すと腰を落として構え始めた。そして月夜は夜見が構えたのを確認すると口を開いてこう言つた。

月夜「さあ、STAGE2のSTARTだ」

## 第44話 STAGE 2 START

月夜「さてと、最初から全力でいかせてもらおうよ！」

月夜はそう言って下げた足で地面を蹴って走り出して夜見に近付くと最初に白刀を振るってきたので、夜見はそれを片方の血の刀で防ぐと月夜は立て続けに夜刀を振るったが、夜見は夜刀をもう片方の血の刀で防いだ。

月夜「さあ、まだまだ終わらないよ！」

そして月夜は夜見に向けて何度も流れるように白刀と夜刀を振るっただが、夜見は月夜の太刀筋を防ぐ度に甲高い金属音が鳴り響いていた。しかし夜見は月夜の太刀筋を防いでいる中で僅かな隙を狙って血の刀を振るい、白刀と夜刀を弾き返して月夜を仰け反らせると血の刀で何度か斬りつけた。

月夜「ぐはっ!？」

夜見「悪いが、そんな2刀流の太刀筋……」

そして夜見は体を斬りつけられて鮮血を流れ出しながら怯んでいる月夜に対して、更に月夜の目の前で跳びながら体を空中で回転させると容赦なく追撃のローリングソバットをみぞおちに放った。

月夜「がっ！」

夜見「俺の知っている少女剣士に比べたら、反撃をするのは造作もないな」

すると月夜は後ろへ2 m程飛ばされて地面に仰向けに倒れたと同時に夜見は地面に着地し、月夜の方に振り返ると力強く血の翼を1回羽ばたかせて一気に月夜の方へと飛んだ。そして夜見は右手に持っている血の刀を刃が向こう側になるように倒れている月夜に突き刺そうとしたが、月夜はみぞおちの痛みを堪えながらなんとか横に転がって避けると距離を取るために立ち上がった。

しかし夜見は血の刀が地面に突き刺さった瞬間に血の翼を横に振るうと立ち上がるうとして月夜は風ぎ払われ、再び飛ばされた月夜は地面を1、2回バウンドして地面を転がって今度はうつ伏せに倒れた。

月夜「ぐっ！うう：： 君、容赦ないね」

風ぎ払われた月夜は身体中の様々な痛みを感じながら両手に力を入れて立ち上がりながらそんなことを言うのと、夜見は地面に突き刺さった血の刀を引き抜くと同時にこう返した。

夜見「異変を起こした奴に、逆に容赦しろと？」

月夜「してくれたら：： 有り難いんだけどね」

そして血の刀を地面から引き抜いた夜見は月夜の方へ向くと月夜は既に立ち上がっ



ていたが、体から流れ出ている鮮血が白いマントに鮮やかな赤色のシミを作り出し、その赤色のシミがマントの下の端まで広がる。そこからポタポタと血が滴り落ちた。普通ならそんな状態で数十分も経てば出血多量によって死んでしまう筈なのだが、夜見は月夜には何故かそんなことは起こらないような感じがした。

月夜（できれば、もう少ししてから使おうとしてただけ……出し惜しみしている暇は無いだろうな）

月夜「……ふう 少しは容赦しようかと思つてたけど、どうやら君に容赦はする気は無いようだし、俺も容赦は無くそうか」

月夜は大きなため息をついてそんなことを言うと、ゆっくりと右手に持っている白刀を鞘に納めると夜刀を持ったままの左手を沿えて居合いの構えを取った。夜見は月夜が斬撃を飛ばしてくるだろうと警戒をしていると、月夜は鞘から白刀で斬り上げるように引き抜いた。

しかし月夜が白刀を引き抜くと夜見に向かってきたのは白刀から繰り出される斬撃ではなく白刀の刀身自身だった。すると斬撃を警戒していた夜見は白刀の刀身自身から来ると思つておらずそのまま斬られてしまった。

夜見「ぐあっ!?!」

月夜「あはは！驚いたかい!？」

そして夜見は白刀に斬られたと同時に、月夜的能力を封じている筈なのに何故白刀の刀身がきたのか訳がわからず戸惑っている、月夜は白刀を振り下ろして再び夜見を白刀で斬りつけようとした。

夜見「くっっ！」

すると夜見は後ろへ跳んでなんとか白刀の刀身を避けたのだが、月夜はまだ空中にいる夜見に目掛けて白刀を再び振り下ろした。しかし夜見は血の刀を交差させて白刀を防いだのだが、白刀に打ち落とされたように地面に着地をするとそのまま後ろへと少しずり下がった。

月夜「あくあ、流石に防がれちやうか」

夜見（どういふことだ!? 確かに能力は俺の抜けている靈力で封じている筈!）

夜見はずり下がっていたのが止まると交差させていた血の刀を構え直しながら、何故月夜が白刀の刀身を届かせることができたのかを考えていた。すると月夜は夜見が血の刀を構え直し終えたのを見て夜見に向かって走り出したかと思うと、月夜は走りながら白刀を振り回して斬りつけようとしてきた。

月夜「どうしたんだい!? まさか、防ぐので精一杯な訳じゃないよね!」

夜見（何か… 何かある筈だ！ 能力を封じている筈なのにこんなことが出来る理由が！）

夜見は月夜の振り回してくる白刀を両手の血の刀で防ぎながら考えていたのだが、何一つ考えが浮かばず月夜は目の前まで来ると白刀と夜刀を振るってきた。しかし夜見はその太刀筋を何度も防ぎ一瞬の隙をついて血の刀を振るうが、月夜は後ろに跳んで避けると同時に白刀を振るうとやはり白刀は夜見に届くが夜見は血の刀で防いだ。

月夜「おっと、危ない危ない」

夜見（くっ！何かある筈だ！今、この状況には何がある!?）

そして夜見は白刀を防いでいる血の刀を振るって突き放すと月夜との距離を詰めて血の刀を振るうが、月夜は2本の刀を夜刀で受け止めると夜見を白刀で斬り上げて打ち上げると白刀を振り下ろして地面に叩き付けた。

夜見「がはっ！」

すると地面に叩き付けられた夜見は地面を何回かバウンドすると地面を転がりうつ伏せに倒れると、夜見は能力で傷を治しつつ血の刀を地面に突き刺して杖の代わりのようにしてフラフラと立ち上がった。

月夜「あっはっは！流石に君でも、このステージは早すぎたかな！」

そして月夜は夜見がフラフラと立ち上がった様子を見て笑いながら挑発気味にそう言ったが、夜見は挑発気味な言葉には耳を傾けずに血の刀を地面から引き抜いて月夜を真っ直ぐに見ていた。

夜見（… 焦るな、冷静に考えろ。今、この状況に残っているものは…）

月夜「さあ！君にはこのステージが攻略できるかな!?」

月夜はそう言つて白刀を振るうが夜見は月夜の方を真つ直ぐに見ながら姿勢を少し下げてギリギリの所で躲わすと、更に月夜は立て続けに白刀を振るつて来るが夜見は繰り返しギリギリの所で体を反らして白刀を次々と躲わした。

夜見（… 成る程、そういうことか）

そして夜見は白刀を躲わし続けている内にあることに気付き、片方の血の刀で白刀を防いで力強く振るうとその力は白刀を伝つて月夜まで伝わった。すると月夜はその力に耐えられず後ろにずり下がったので、思わず前のめりになると直ぐに止まった。

月夜「くっ！中々や…」

そして月夜は後ろにずり下がったのが止まったと同時に顔を上げると、何故か夜見は距離を全く詰めていないのに血の刀の刀身が目の前まで迫つてきていた。その光景に驚いた月夜は言い掛けていた言葉を止め、咄嗟に横に転がって回避して夜見の方を見ると、血の刀の刀身が何故目の前まで迫つてきていたのかが分かった。

月夜「… 成る程ね、特別な力を使って血の刀の刀身を伸ばしたんだね」

そこで月夜が目にしたのは、先程より長い刀身が月明かりによつて輝いている血の刀を持つていた夜見の姿だった。すると夜見は能力を使って血の刀の刀身の長さを元に

戻し、血の刀を振りかぶると夜見はこう返した。

夜見「…… ああ、そうだ 月夜さんがやったのと同じようにな！」

そして夜見は再び能力を使って血の刀の刀身を伸ばしたと同時に振るうと刀身は月夜まで届いたのだが、月夜は夜刀で血の刀の刀身を受け止めていた。

月夜「へえ、気付いたんだ 俺が何をしたのか」

夜見「ああ、月夜さんは「白刀 月光」の光の性質の力を引き出して刀身を伸ばしていたんだろ？ 光は差し込む角度が変われば光の届く長さも変わるからな」

すると夜見はもう片方の血の刀も振るうと同時に刀身を伸ばしたのだが、月夜は白刀でもう片方の血の刀も受け止めた。

月夜「正解、君の言った通り俺は白刀の力を引き出して白刀の刀身を伸ばした でも、よくその事に気付けたね」

夜見「当たり前だ、よく見たら実際に「白刀 月光」が伸びた瞬間が見えたんだからな！」

夜見はそう言うと、後に振るった血の刀の方に力を入れて無理矢理月夜を押すと先程より勢いよく月夜は後ろにずり下がったが、月夜は夜刀を素早く逆手持ちにして地面に突き刺すと夜刀が地面を少し切り裂いた所で止まった。すると月夜は顔を上げて夜見の方を見ると同時にあることを思っていた。

月夜（白刀が伸びたのが見えたって？…いや、ただの出任せか）

それは夜見が白刀の刀身が伸びた瞬間が見えたというのが出任せだということだった。実際に白刀が伸びた瞬間が見えたのであれば誰もが出任せだとは思わない筈なのだが、月夜は出任せだと思える理由があつた。

月夜（…だって、白刀は光と同じ速度で伸びるんだから絶対に見える筈がない）

そして月夜は夜刀を順手持ちに戻して地面から引き抜こうとしたのだが、月夜はその瞬間にある可能性が頭によぎつた。

月夜（…でも、あり得ない筈だけど、もし本当に白刀が伸びたのが見えていたとしたら？）

月夜は夜見の出任せだと思つた先程の言葉が何故か、出任せではないと思う感じがして頭にそんな考えがよぎると、月夜は夜刀を握る左手に力を入れた。

月夜（もしそうだったら、これは随分と不味い状況だね…）  
それなら、この手も使うしかないかな）

すると月夜は夜刀を地面から引き抜くのではなく、逆に夜刀を更に深く地面へと突き刺し始めたのだ。夜見はそんな月夜の不可解な行動に疑問を持った。

夜見（…何をやる気だ？）

月夜「影に干渉出来るのは同じ影しかない　しかし闇は影を引き寄せ、影を干渉でき

るものへと変えるだろう」

そして月夜は夜刀をゆっくりと地面から引き抜き始めたのだが、夜見はあり得ない光景を目の当たりにして自分の目を疑った。何故なら月夜の持つている夜刀に月夜の影が引き寄せられ、月夜が夜刀を引き抜き終えると月夜にあつた影が無くなった代わりに月夜の影が地面から浮き出て具現化したのだ。

その月夜の影は月夜の右手の影だった今の左手には白刀と同じ長さの影の刀を持ち、同様に月夜の左手の影だった今の右手には夜刀と同じ長さの影の刀を持っていた。そして月夜が2本の刀を構えると、月夜の影はすつと月夜の横に移動して月夜と正反対の構えを取った。

月夜「さあ、これが夜刀の奥の手！流石の君でも、これは真似できないよ！」

月夜がそう言うと同時に夜見に向かつて走り始めると月夜の影も同時に走り始め、距離を詰めた月夜が左手の白刀を振るうと月夜の影も同様に右手の影の刀を振るうて来た。それに対して夜見のは2本の血の刀で防いだが、月夜は立て続けに夜刀も振るい始めると月夜の影も同じように2本の影の刀を振るい始めた。

月夜「ほらほらほらほら！君の目が良くて、流石に2人分の攻撃を防ぐのはきついんじゃないかな!？」

夜見「ぐっ！確かに……1人分増えた分きついけど、ただそれだけだ！」

しかし夜見は血の刀を上に一閃振り上げると月夜と月夜の影の2本の刀を弾いて仰け反らせ、その隙に2本の刀を振りかぶって力強く振るうが月夜と月夜の影は同時に後ろに跳んで避けてしまった。

月夜「おっと！まさか2人分の刀を弾くとはね」

夜見「言つた筈だ　ただ1人分増えた、ただそれだけだ」と

夜見（それに…）

すると夜見はチラリと一瞬だけ月夜の影の方へ目線を向けたのだが、直ぐに月夜の方へと目線を戻した。

夜見（見た限り、あの影は本体と左右対称の動きをとっていた　つまり、所詮はただの影にすぎない　本体の動きを警戒していれば、ほとんど気にする必要は無いな）

そして夜見はそんなことを思っていたのだが、月夜は次の瞬間にこんなことを言ってきた。

月夜「…　ねえ、まさかだけど君は俺の影が俺と同じ動きしかなかったとか、思つてないよね」

夜見「なっ!?!」

なんと月夜はつい先程夜見が思っていたことを言い当ててきたのだ。すると夜見は思わず驚きの声を出してしまい、その声を聞いた月夜は口元を緩めてニヤリと笑った。



月夜「どうやら、凶星だったみたいだね！」

そして月夜が走り出したのだが月夜の影は少し遅れて走り出し、夜見との距離を詰めた月夜は白刀と夜刀を同時に振るうと夜見は血の刀で防いで鏢迫り合いとなった。しかし、月夜の後ろから月夜の影が迫ってきているので鏢迫り合いを続けるわけにもいかず、夜見は力尽くで月夜を押し離すと今度は月夜の影が刀を振るってきたので夜見は後ろに跳んで避けた。

月夜「甘いよ！」

すると月夜はそう言って空中にいる夜見に向かって白刀を伸ばして振るってきたので、夜見は咄嗟に血の翼を前で交差させたのだが白刀は血の翼を突き破ってきた。だが、夜見は念のために血の刀で防ぐ構えをとっていたので斬られずに済み、白刀の威力によって更に後ろに飛ばされて地面に着地した。

そして夜見が地面に着地した頃には月夜と月夜の影は夜見に向かって走り出しており、夜見は血の刀を横に振るうと同時に刀身を伸ばした。しかし月夜はそれをスライディングで躲かし、月夜の影は走り高跳びの背面跳びのように跳ぶと身体を捻りながら躲わしてしまった。

月夜「君の実力はそんなものなのかい!？」

夜見（くっ！それなら！）

すると夜見は今度は両方の血の刀を逆手持ちにして地面に突き刺し、それを見た月夜と月夜の影は何かあると思つて足を止めた。そして次の瞬間には月夜と月夜の影の目の前には長くて細く、鋭い血の針が何十本も地面から飛び出してきた。

月夜「おっと！そのまま走つてたら、危うく串刺しになつてたね」

夜見「まだだ！」

そう言つて夜見は更に血の刀を地面に深く差し込むと月夜と月夜の影の真下から血の針が次々に飛び出して来るが、月夜と月夜の影は跳んだり血の針を蹴つたりと様々な動きで躲わした。

月夜「あはは！まさか、こんな攻撃に当たるとでも思っているのかい!？」

そう言つて月夜と月夜の影は血の針を躲わし続けていたのだが血の針が飛び出してくるのが止むと、月夜と月夜の影は血の針の上に降り立って下の方にいる夜見を見ると白刀で突き破つた血の翼が直つていた。

月夜（なるほどね 翼を直すための時間稼ぎつて訳か）

すると夜見が血の刀を引き抜くと同時に血の針が引つ込んでいくので月夜と月夜の影は地面に降り立ち、夜見は血の刀を引き抜き終えると血の刀を順手に持ち直した。

そしてしばらくの沈黙の後に夜見と月夜が走り出すと少し遅れて月夜の影が走り出し、夜見と月夜が同時に2本の刀を振るつた。だが夜見は月夜の2刀流の攻撃の僅かな

隙を狙って反撃をただけのことはあり、2刀流の實力は夜見の方が上で月夜を押ししていた。

しかしそこに月夜の影が入って2本の刀を振るってくるので夜見は片方の血の刀で防ぐのだが、月夜は片方の血の刀で防いだ隙を狙って刀を振るってきた。

夜見「くっ！不味い！」

すると夜見は月夜と月夜の影の刀を防ぎきれずに斬られてしまったのだが夜見は怯まずなんとか血の刀で防ごうするが、先程とは違いバラバラの動きで刀を振るってくるので片方の刀を防いだ瞬間の隙に斬られてしまっていた。

月夜「まさかとは思うけど、ここでGAME OVERかい？」

夜見「ぐわっ！くっ、そんな訳ねえだろ！」

月夜「あはは！その割には、随分と苦しそうだね！」

夜見（流星に、2人を相手に分が悪い！…なら、

そして夜見は月夜の刀を血の翼で受け止めると月夜の影の振るってくる2本の刀を血の刀で弾き、姿勢を下げて足払いで月夜の体勢を崩した。すると夜見は更に体勢を崩した月夜の腹に向けて、血の翼の翼角よかどと呼ばれる翼の節のような部分を月夜の腹に叩き込んだ。

月夜「ぐはっ！」

夜見（まずは、邪魔な分身を片付ける！）

そして夜見は月夜をそのまま翼角で殴り飛ばすと月夜の影に向けて血の刀を振るうが、月夜の影はギリギリの所で刀で防いだ。しかし月夜の影はギリギリの所で防いだせないのか刀は弾かれてしまい、夜見はその隙を見逃さずに月夜の影を2本の血の刀で斬りつけた。

すると月夜の影が斬りつけられた部分はただ揺らめくだけで、揺らめいた影の部分はすぐに元に戻ってしまった。更には月夜の影には痛覚が無いのか怯む様子は無く、月夜の影は刀を振るってきたので夜見は血の刀で防いだ。

夜見（くっ！効かないのか!?)

夜見は月夜の影に攻撃が全く効いていない様子に少し驚きながらも、月夜の影の刀を力づくで押し放して血の刀を振るった。所詮月夜の影は月夜の分身なので2刀流の実力は夜見の方が上であり、月夜の影は刀を振るっても夜見の血の刀を防ごうとしても全て弾かれて為す術もなく斬りつけられていた。

夜見（いや：．．．実体があるなら、何か倒す術は必ずある筈！）

そして夜見は何度も月夜の影の刀を弾きながら斬りつけたのだが結果は変わらず、更には血の刀を突き刺したりもしたのだが結果が変わることは無かった。すると夜見は何度も月夜の影を斬りつけている途中で何を思ったのか、いきなり月夜の影の腹に蹴り

を入れて蹴り飛ばして距離を離れた。

夜見（… おかしい、何故だ？）

それは夜見が月夜の影を斬りつけている途中で、ふと思ったおかしな事が原因だった。

夜見（何故、月夜さんは何もしてこない？）

そう、それは殴り飛ばされた筈の月夜が何もしてこないことだった。仮に月夜が月夜の影が倒すことはできないと知っていたとしても月夜には何もメリツトはなく、寧ろ月夜はもう起き上がってこちらに向かって来る筈なのだ。

夜見（一体、月夜さんは何を？）

そして夜見は月夜を殴り飛ばした方向を見てみると、月夜はうなだれているように少し前屈みになりながら腕はダランとさせ、更に身体からは血をポタポタと落としながら月夜は少し肩で息をしているようだった。しばらくして月夜は息を整えたのか肩で息をするのをやめて、ゆっくりと体を起こすと月夜の体には何故か斬りつけられたような傷が増えていた。

月夜「はあ、はあ、本っ当に… 容赦ないね…」

すると月夜は苦しそうな言い方で夜見にそんなことを言ったので、どうやら月夜の体が増えていく斬りつけられたような傷は夜見が増やしたらしい。しかし夜見にはまっ

たく身に覚えはなく、仮に能力を使ったのならば月夜の影を斬りつけている途中に月夜が何もしないことを不思議には思わない筈である。

夜見（…何が起きている？何故斬りつけられたような傷が…）

そして夜見は何故月夜に斬りつけられたような傷が増えているのかを考えようと月夜の増えた傷を見た瞬間、夜見はあることに気付くと同時に新たな疑問が生まれた。

夜見（…何故、月夜さんの分身に斬りつけた所に傷が？）

その夜見に新たに生まれた疑問というのは、月夜の影を斬りつけた所がそのまま月夜の身体に傷として付いていることだった。すると夜見はその疑問が生まれると先程月夜の影を蹴り飛ばしたことを思い出して、月夜の影を蹴り飛ばした方向を見てみると、月夜の影は既に目の前まで来て刀を振り下ろす寸前だった。

夜見「くっ！」

しかし夜見は月夜の影が刀を振り下ろす寸前だったのにも関わらず血の刀で振り下ろされる刀を弾き、月夜の影に再び血の刀を振るって月夜の影の身体を斬りつけた。

月夜「がっ！」

夜見（…まさか？）

すると何故か月夜の影を斬りつけた瞬間に月夜がまるで攻撃を受けたような声を出し、夜見はまさかかと思いつつ再び月夜の影を蹴り飛ばすと月夜は先程と同じような声を

出した。そして夜見は月夜の方を見てみると思った通り、月夜の身体には先程月夜の影を斬りつけた傷が付いていた。

夜見（成る程な 月夜さんの分身は結局、月夜さんの影だ。そして月夜さんの影の形が変われば、本体である月夜さんにも同じ影響が及ぶ。月夜さんの影が斬りつけられても元に戻ったのは、月夜さんから映し出される影の形は変わらないからだ）

こうして夜見は何故月夜に月夜の影の斬りつけられた傷が付いていたのかと、月夜の影が本体である月夜にどんな影響を及ぼすかを理解をした。そして夜見は蹴り飛ばした月夜の影の方を見たのだが、月夜の影は立ち上がった瞬間に地面に沈むように液体のようになつて崩れた。

月夜「さ、流星にこれ以上やられたら、堪たまったもんじゃないよ」

するとそう言った月夜は再び地面に夜刀を突き刺しており、月夜の影は月夜自身が光を遮つて出来る普通の影にへと戻つていった。そして夜見はかなり深手を負っているだろう月夜に向けて、こんなことを言った。

夜見「2人掛かりで斬りかかってきた威勢はどうした？もう無いのか？」

月夜「…君、中々キツイこと言うね。こんな状況の人に普通、そんなことを言うかい？」

すると月夜は夜見が言ってきたことにそのような返答をしたのだが、今度はこんなこ

とを夜見は言った。

夜見「逆に、そんな状況でよく普通に話せる余裕があるな」

月夜「……確かに、それもそうだね」

そして月夜は地面に突き刺した夜刀を引き抜いて順手持ちに戻し、一呼吸だけするとこんな事を言った。

月夜「でもこの状況は、あと数分も経てば逆転するよ」

夜見「……どうした？ 遂にそんなバレバレな嘘しか付けないようにでもなったか？」

月夜「至って真面目だよ。まあ、あと数分経てばわかるよ」

夜見「その数分後に、月夜さんが生きていればの話だけだな！」

そう言つて夜見はいきなり血の刀を振るうと同時に刀身を伸ばしたのだが、それと同じに月夜も同様に白刀を振るうと、夜見と月夜との間の真ん中辺りで金属音が鳴り響いた。すると夜見と月夜は更に2、3回刀を振るつたのだが、先程と同じように金属音が鳴り響くと夜見と月夜は同時に走り出して距離を詰めた。

そして距離を詰めると最初に月夜が白刀と夜刀を振るつてきたのだが、夜見は2本とも1本の血の刀で弾き返した。すると夜見は月夜が仰け反つた隙にもう片方の血の刀を振るうが、月夜は弾かれた白刀を逆手持ちにして刀身を伸ばして防ぐと後ろにずり下がった。



月夜「… やっぱり、2刀流は俺の性に合わないか」

月夜はずり下がるのが止まると独り言をポツリと呟いて白刀を鞘に納めると、左手に持っていた夜刀を右手に持ち変えて構えた。そして月夜は地面を蹴って夜見との距離を詰めて夜刀を振るうが、その速さは2刀流や最初に白刀を振るっていたのが手加減していたと思わせるような速さだった。

夜見（さつきより速い!?くっ！だが、この程度の速さなら！）

しかし夜見は月夜の振るう夜刀の太刀筋を血の刀で防いだり受け流したりしていたのだが、月夜の太刀筋は速くて重く、何より隙が無いので下手に反撃ができない状況だった。そしてこうして夜見が月夜の太刀筋を防いだりしている時でも、時間はだんだんと過ぎていった。

月夜（さてと… あと、もう少しだけだな）

すると月夜は言っていた数分経つことが待ちきれずに口元を緩めてニヤリと笑ったのだが、そのせいなのか月夜は攻撃の手を少しだけ緩めて隙を作ってしまった。夜見は当然その隙を見逃す筈もなく、月夜の振るう夜刀を弾いて月夜が大きく仰け反った所に力強い突きを放った。

月夜「うっ!?!ぶはっ！」

そして夜見の放った突きは月夜のみぞおちの少し下を貫いており、背中の方から突き

出た血の刀の刀身の先端は月夜の血が滴っていた。すると月夜は大量の血を吐き出したが夜見は容赦せずに腹に蹴りを入れて蹴り飛ばし、血の刀を引き抜くと横に振るって月夜の血を落とした。

夜見「どうやら月夜さんの言っていた数分は、残念ながら経つことは無かったようだな」

そして夜見は仰向けに倒れている月夜を見ながらそう言うと、月夜は血の刀が貫いた所を左手で押さえながらフラフラとしながらも何とか立ち上がった。しかし月夜は今にも死にそうな状況なのにも関わらず、血が垂れている口元は笑っていた。

月夜「・・・いや、俺の言った数分は・・・たった今、過ぎた　ここからだよ」

月夜はそう言つて夜刀を血塗れの左手に持ち変え、右手では鞘から白刀を引き抜くと1回深呼吸をした。そして月夜が顔を少し上げ、フードで隠れていた目が鋭くなつたかと思うと次の瞬間にあることが起こった。

ズシャア！

夜見「うっ!?!がはっ!?!」

なんと月夜が目の前から姿を消したかと思うと同時に、夜見は身体をX字状に深く斬られたのだ。夜見は一瞬何が起きているのか理解できないでいると、夜見の背後から月夜の声が聞こえた。

月夜「ほら、言ったでしょ？数分経てば逆転するって」

そして夜見は背後から聞こえた月夜の声で反射的に振り返ると、そこには確かに月夜がいた。しかし月夜には先程までであった傷は全て無くなっており、白いマントにあった血の染みすら消えていた。

夜見（な、何が起きている!?! 一体、月夜さんは何をした!?!）

すると夜見は立て続けに起きている有り得ないことに顔には出していないが、内心はとてども動揺をしていた。だが夜見はすぐに冷静さを取り戻し、まずはX字状に斬られた傷を治そうと能力を使おうとしたのだが、能力を使おうとした瞬間に更にあることが起きた。

夜見（ぐっ!?! な、何だ? いきなり… 視界が…）

なんと、夜見の視界がいきなり歪み始めたと同時に体から力が抜けてしまったのだ。すると体から力が抜けた夜見は前に倒れる寸前に片方の血の刀を地面に突き刺すと、倒れずには済んだが片膝を付いた状態になってしまった。

夜見（な、何が起きているんだ?）

そして夜見は体に力が入らず片膝を付いた状態になってしまったものの意識ははっきりとしており、今自分は片膝を付いた状態になっていることはちゃんと把握していた。すると月夜は夜見が片膝を付いた光景を見て、白刀の峰を肩に置くように担ぐと残

念がっつるような声でこんなことを言い出した。

月夜「あゝあ、エネルギーが遂に尽きかけになっちゃったか 君なら少し耐えてくれると思っただけど、やっぱりこうなっちゃうんだね」

夜見（エネルギー？ 尽きかけ？ 一体、何のことだ？）

夜見は月夜の言ったエネルギーが尽きかけているという言葉に疑問を持って一体何のことを考えようとした瞬間、夜見の背中から生えていた翼がポタポタと溶けるようにどんどんと壊れ始めたかと思うと血の刀も同じように壊れ始めた。更には空気中の血を操った月夜の位置の把握もだんだんと鈍くなり始めたのだが、夜見はそこで月夜の言った言葉の意味を理解した。

夜見（そういうことか、月夜さんの言っているエネルギーは霊力のこと つまり俺の使っていた霊力が遂に無くなる寸前になって、まさに不味い状態になってるって訳かよ）

なんと、夜見の視界が歪み、更に体に力が入らなくなったのは夜見の霊力が尽きかけになったのが原因だったのだ。よくよく考えれば夜見は月夜の位置を把握するために空気中の血を操り、更には血の刀と血の翼を作り出した状態で周囲に霊力を広げていたので霊力が尽きかけるのも無理はなかった。そして月夜は夜見の霊力が周囲に広げられなくなった所を狙い、能力で今まで受けた傷をなかつたことにしたのだ。

すると月夜はゆっくりと膝を付いている夜見に歩み寄り、夜見の前で足を止めると白刀を振り下ろすために大きく振りかぶると夜見に向かつてこう言った。

月夜「死ぬまでのLAST TIME、満喫できるといいね とはいっても、時間は1秒もないけどね」

そして白刀を振りかぶった月夜は夜見に何の容赦もなく、白刀を振り下ろした。

## 第45話 LAST TIME

そして夜見は月夜によって振り下ろされた白刀にトドメを刺される筈だったのだが、月夜の振り下ろした白刀は夜見に当たることはなく、いきなり現れた刀の刀身によって防がれた。

月夜「なっ!？」

すると月夜は振り下ろした白刀がいきなり現れた刀の刀身によって防がれたことに驚きの声を出した瞬間に、霊力が尽きかけて動けない筈の夜見は勢いよく立ち上がると同時に月夜の顎に目掛けて拳を放った。

しかし月夜は夜見の拳が顎に当たる寸前に能力を使って一瞬で後ろへ下がって距離を取ると、夜見の拳はむなしく空を切った。

月夜「…君、一体何をしたんだい？ エネルギーはもう尽きかけている筈だったよね？」

夜見「…」

月夜（…本当に、一体何をしたんだ？）

月夜はそう思つてチラリと白刀を防いだ刀の方に目を向けると、その刀は夜見の近く

に突然現れた黒い魔方阵から出てきていた。

実は夜見は自分の霊力が尽きかけていることを理解した瞬間、残りの霊力を全て2倍にできる魔力に変換したことにより再び動けるようになったのだ。

そして夜見は月夜の問いかけに対して何も答えることなく黒い魔方阵から出てきている刀の柄を右手で掴み、残りの柄の部分まで引き抜くと黒い魔方阵は霧のように消えた。

すると夜見はその引き抜いた刀の刃先を月夜の方に向け、月夜のことを鋭い目付きで睨みながら口を開いた。

夜見「LAST TIME、延長だ」

そう一言だけ夜見は言つて刀を下ろし、その言葉を聞いた月夜は嬉しそうに口元をニヤリとさせた。

月夜「… いいねえ、そう来なくちゃ！」

すると月夜は能力で夜刀を持ち変えて白刀を右手で引き抜いた事を無かつたことにし、右手に夜刀を構えて走り出した瞬間に能力を使って一瞬で夜見の目の前まで近付いた。

そして月夜は夜刀を振るうと夜見は刀で受け止めようとしたが、やはり月夜は能力を使って夜刀が受け止められたことを無かつたことにして夜見は斬りつけられた。

夜見「くっ！」

月夜「さあ、延長をしたところで一体どうするつもりかな！」

月夜はそう言いながら既に夜刀を振るってきていたので夜見は後ろに跳んで避けようとするが、月夜は夜見との距離を無くすことによつて夜刀の刀身を届かせた。

しかし夜見は空中にいるのにも関わらず身体を捻つて器用に1回転すると、夜刀の刀身は夜見の身体のスレスレを通過し、夜見は軽やかに着地した。

月夜「よく躲せたね。でも、次は避けられるかな？」

夜見が着地をしたと同時に月夜はそう言つて左手の親指と人差し指を立てると、銃口を向けるように人差し指で夜見を指した。

すると夜見の背後から強風が吹き荒れて月夜の指先に集まり始まり、しばらくして強風が止むと月夜が口を開けたと同時に夜見は横に跳んだ。

ドンッ

そして月夜の声が掻き消して大きな音が鳴つたかと思うと、先程夜見がいた場所の地面には直径約1cmの穴が空いていた。

そう、それは月夜がSTAGE1で使つてきた高密度に圧縮された空気を放つ砲撃だった。

月夜「さてと……次」



月夜はそう言って再び夜見の方に人差し指を向けて先程と同じように口を開いたの  
で、夜見もその瞬間に先程のように横に跳んだ。

すると月夜は夜見が避ける度に次々と高密度に圧縮された空気の砲撃を放ち、それを  
夜見はひたすら横へ後ろへと跳んで避けた。

そして月夜は計10発の砲撃を放ち終わると圧縮させた空気が尽きたのか右手の夜  
刀を逆手持ちになると、能力を使つて後ろに跳んで空中にいる夜見との距離を一瞬で詰  
めた。

だが、夜見はいきなり月夜が距離を一瞬で詰めてきたことに一切驚くことはなく、冷  
静に月夜が振ってくるだろう夜刀を躲す為に夜刀をじつと見ていた。

夜見（焦る必要はない、ただ躲すだけだ）

しかし月夜は夜見の予想に反して夜刀を夜見に向かって振るわずに夜刀を勢いよく  
振り下ろして地面に突き刺した。

すると月夜が夜刀を地面に突き刺した瞬間に夜見は左足に激しい痛みを感じた。

夜見「がっ!？」

夜見は左足にいきなり感じた激しい痛みで着地の瞬間に足に力が入らずそのまま後  
ろに倒れた。

そして夜見は何が起こったのかを確認する為に頭を上げて自身の左足を見ると脛の

真ん中に縦に細長い穴が空いており、しかもその穴は貫通しているのか左足の下から血が広がり始めた。

月夜「どうだい？流石にこの状態なら身動きは取れないでしょ？」

月夜はそう言って地面に突き刺した夜刀から手を離して夜見に近付くと倒れている夜見を見下ろした。

夜見「ぐ……うう　な、何を……した？」

夜見は月夜に見下されながら左足の痛みに耐えつつ、月夜に何をしたのかを聞くと月夜はあっさりと話した。

月夜「夜刀は影に干渉する性質を持っている　その性質を使えば影を斬って本体を斬ることができるし、相手の影に突き刺せば相手をその場に縛り付けることもできるってわけ」

月夜はそう言いながら左手を銃の形にして夜見の頭を人差し指で指すと先端付近の空気の質量が無くなり、空気はひたすら質量が無くなった空間へ吸い込まれて砲撃の準備が始まった。

夜見（くっ、まずい！このままだと確実に殺される！）

すると夜見はどうかにかこの状況を打破できないかと色々な考えを浮かばせるが、左足を動かせる状況でないかどうかどうすることもできなかつた。

「仮に右手に持っている刀で夜刀をなんとか引き抜くことができたとしても、月夜はそれを黙って見過ごすような真似はしないだろう。」

夜見「くそ！ どうしようもできない」「さて、もう終わりにしようか」

そして夜見があれこれと考えているうちに無情にも時間は経っており、どうやら月夜は砲撃の準備を終えたようだった。

しかし何故か月夜は今すぐ砲撃を放つことはなく夜見の頭の近くまで来てこう言った。

月夜「……でもこのまま殺されるのも未練が残るだろうから、せめて遺言だけは聞いてあげるよ」

夜見「……随分と、優しいじゃねえか」

夜見は死ぬ一歩手前で急に与えられて慈悲に少し苛立ちを感じながらそう言う。月夜はこう返した。

月夜「まあ、元々これはGAMEだしね。それ位の慈悲はあげてもいいかと思っただけ」

夜見「……そうかよ」

そして夜見は素っ気無い返事を返してしばらく考え込んでいると、夜見は月夜にこんなことを言った。

夜見「そうだな、お礼でも言おうか」

月夜「お礼？」

月夜は死ぬ一歩手前の夜見がお礼を言ってくることに驚いて思わず聞き返してしまつたが、夜見はそんなことは気にせずにお礼を言つた。

夜見「本つ当に、ありがとうな 月夜さんが慈悲として少し時間をくれたお陰で、まだ遺言を言い残す必要は無いようだ」

月夜「…それってどうい

月夜は夜見のお礼の意味がわからずに聞き返そうとしたのだが、月夜はある光景を見て夜見のお礼の意味がわかつた。

月夜は完全に勝ちを確信して油断をしていたせいで、夜見が力づくで縛り付けられている左足を無理矢理上げていることに気付けなかつた。

夜刀が影に干渉できて相手の影に突き刺すことで動きを縛ることができるといふことは、影が何らかの理由で動けば夜刀も移動するといふこと。

つまり、縛り付けられている箇所を無理矢理にでも上げてしまえば夜刀が干渉している箇所も上がるので夜刀も地面から抜けていくのだ。

月夜「くっ！」

すると月夜は急いで砲撃を放つが、夜見が左足を無理矢理上げて夜刀を地面から引き抜くのが一足早かつた。

夜刀が地面から抜けて夜見が地面を転がった直後、夜見がいた場所には大きな音とともに地面に穴が空いていた。

夜見「俺は確かに言った筈だ」

そして夜見はすぐに立ち上がると宙を舞っている夜刀に向かって跳んで左手で掴み、空中で体を回転させて月夜の方を向いて着地をすると夜刀と刀を構えた。

夜見「遺言ではなく、「お礼でも言おうか」とな」

しかし月夜は夜見の方を見ることなく穴の空いた地面を見ていると左手で身に付けている白いマンントの首元の部分を掴んでこう言った。

月夜「俺とGAMEをして、こんなに生き延びたのは君が初めてだよ」

そう言うって月夜は左手で身に付けていた白いマンントを後ろに脱ぎ捨てると夜見の方に顔を向けた。

初めて見せた月夜の姿は白色のパーカーと白色のズボンを着て全体的に白色を基調とした服装をしており、髪は白色で少し伸びており右眼は綺麗な碧色だったが左眼は一瞬だけ眼が無いように見せるほど全体が真っ黒になっていた。

そして月夜は右手で白刀を鞘から引き抜くと白刀の鑢つばに左手で翳かざして口を開いた。

月夜「光は深く差し込めば遠くを照らし、永遠に伸びるだろう。しかし光は翳されるだけで簡単に消え、形を変えてしまう」

そう言つて月夜は白刀に翳していた左手をゆっくりと刀身の方へと移動させると刀身は2m程の棒となり、その先には大きな刃をつけて白刀は白い鎌に姿を変えた。

すると月夜はその大きな白い鎌を両手で持つて構えると夜見に向けて言つた。

月夜「さあ、GAMEのLASTを始めようか！」

そして月夜は跳ぶと同時に夜見との距離を無くして間合いを一瞬で詰めて鎌を大きく回すように振るゝ、夜見は後ろに跳んで避けようとしたが月夜に後ろへ跳んだことを無かつたことにされて身体を大きく斬られた。

夜見「ぐわっ！」

月夜「さあ、まだまだあ！」

すると月夜は上に大きく振りかぶつた鎌を勢いよく振り下ろしたが夜見は右手の刀を上から迫る鎌に向けて構えながら再び後ろに跳ぶと、また月夜に後ろへ跳んだことを無かつたことにされたが夜見が上に構えていた刀は鎌を受け止めていた。

月夜「ちっ！」

そして鎌を受け止められて月夜は舌打ちをすると後ろへ複数回にわけて能力を使つて下がつて距離を取つたかと思うと、月夜は鎌を後ろに下げたと同時に夜見との距離を再び詰めて鎌を大きく振つた。

しかし夜見は月夜の鎌斬られることはなく右手の刀に左腕を添えて受け止めると、刀

と鎌の間からガチガチと金属同士が擦れ合う音が鳴り始めた。

月夜「くっ！くっ！うう！」

夜見「どうした？余裕が無いように見えるが？」

月夜「ちっ！うるせえ！」

夜見が少し小馬鹿にしたような挑発をすると月夜は叫びながら鎌を無理矢理振り切ると夜見は前のめりになりながらも後ろへ大きくずり下がった。

そして夜見は止まった瞬間にすぐに顔を上げると月夜は空中で既に鎌を振るってきっていたが大きく後ろへ身体を反らすと、刀を振るって上に軌道を逸らしてそのまま後ろにバク転して夜刀と刀を構え直した。

月夜「うおおおおおおお！」

すると月夜は雄叫びを上げながら夜見に向けてひたすら鎌を振り回すが夜見に全て刀で軌道を逸され、時には弾き返されて挙げ句の果てには僅かな隙を突かれて夜見の蹴りを腹に食らった。

月夜「がはっ！」

腹に蹴り入れられた月夜は思わず怯んで隙を晒してしまうと夜見は追撃として刀を振るっただが月夜は能力を使い、夜見の振るった刀に斬られることを無くすと刀は月夜に届かず斬られることは無かった。

そして月夜は刀を振り切った夜見に向けて鎌を振るつたのだが夜見は夜刀で鎌を弾いて軌道を逸すと鎌は夜見の頭上を通り、鎌を弾かれた月夜は舌打ちをしながら能力を使つて後ろへ数m下がった。

月夜「クソが！ふざけんじやねえぞおお！」

月夜はもはや冷静さを失っているのか叫びながら再び夜見との距離を一瞬で詰めて乱暴に鎌を何度も振るうが、夜見は先程と同じように今度は夜刀と刀で鎌の軌道を全て逸して時には弾き返した。

月夜「ガアアアアア！いい加減にしやがれえ!!!」

しかし月夜は鎌をしばらく振り回していると突然叫んで鎌を大きく横に薙ぎ払うように振るつたのだが、夜見はその鎌を刀で受け止めようとした。

すると鎌が迫ってくる方に刀を構えた夜見は何故か自ら鎌を避けるように後ろに跳び、自ら後ろに跳んだ夜見は驚きの声を出した。

夜見「なっ!？」

月夜「はっ！掛かったなあ！」

そして月夜は鎌が本来夜見の刀で受け止められる筈だった所まで鎌を振つた瞬間に、能力で夜見との距離を無くして鎌を屈かせると夜見は身体を横に深く斬られて怯んだ。

更に月夜は夜見との距離を能力で無くしたままにして一瞬で夜見との距離を詰める



と、まだ地面に足を付けずに怯んでいる夜見にお返しと言わんばかりの蹴りを腹に入れた。

夜見「かはっ！」

すると月夜の蹴りを腹に受けた夜見は地面に足がつかないまま後ろに数m飛ばされて仰向けに倒れそうになったが、夜見は右手を地面に付けると鮮血を宙に撒きながらバク転をするように地面に着地した。

夜見「うっ げほっ！」

しかし夜見は身体に深く斬られたせいから口から血を吐くと身体から血が飛び散り、苦しそうな顔をしながら左腕で斬られた傷を押さえた。

すると月夜は鎌を右手で担ぎながら苦しそうな様子の夜見を見て急に笑い出した。

月夜「アハハハハ！まさか俺が、毎度毎度テメエが避けようとしてるのを特別な力で無くすとも思ったか!？」

そう、実は夜見が先程まで月夜の鎌の軌道を逸したり弾いたりしていたのは月夜の鎌が刀に当たる瞬間に避けようとしていたからだだったのだ。

つまり月夜は距離を離されるのを阻止する為に、夜見が避けるのを無かったことにしていたのだ。

だが、それなら刀が当たること無かったことにすればいいだろうと誰もが思いつく

ことができるだろう。

しかし、これまで月夜が能力で無かったことにしていたのはいつも1つだけだったのだ。

そして先程も1つしか無かったことにしていたことを考えれば……

夜見「いや、流石にそれは無い　だが、お陰で月夜さんの能力で無くせる対象は1つだけなのは確定した」

月夜「……ああ、確かに俺の能力で無かったことにできるのは1つだけだ　だが、それがわかった所で一体テメエは何ができる？」

夜見「残念だが、それは教えることはできないな　これから何が起こるかわかってるGAMEなんて、流石につまらないだろ？」

月夜「……ふっ、確かにそうだな　どっちがGAMEに勝つかは、目に見えているけどなあ！」

すると月夜はそう叫んで夜見との距離を一瞬で詰めると右手にもっている鎌を振り下ろしたのだが、その鎌は血塗れになった夜見の左腕の先にある夜刀によって上へ弾き返された。

そこに夜見は流れるような動きで右手の刀で月夜を斬り上げようとしたのだが、月夜は刀で斬られる寸前に能力を使って後ろに下がった。

月夜「おいおい、左腕で傷口を押さえてねえと血が流れ出てきちゃうんじゃないかねえか？  
それとも、最後の足掻きとして腹を括くくったか？」

夜見「いや、残念だが月夜さんにさつき斬られた傷は無かったことにした」

月夜「…はあ？血を流しすぎて遂には気でも狂ったか？」

月夜は夜見が振るった刀を避けると夜見を煽り始めたのだが夜見は何故か冷静な様子で返答をし、月夜は何故夜見が冷静なのかかわからなかった。

しかし月夜は先程の夜見の動きであることが起こらなかつたことに気付いた。

月夜（そういや、何故アイツから血が飛び散らなかつた？血を吐いただけでも血が飛び散るのに、あんな大きな動きをしたらいくらなんでも…）

そして月夜は夜見に深く斬りつけた筈の傷へ無意識に視線を向けると確かに夜見の斬られた箇所は血塗れになっていた。

そう、ただ斬られた箇所が血塗れになっていただけで斬られた箇所からは血が流れ出ていなかったのだ。

月夜（なつ、どういう事だ!?確かにアイツはエネルギーを使い果たして特別な力は使えない筈！）

月夜は夜見が能力を使えない筈なのに傷が治っているのを見て他の手があるのかと思ったのか、月夜は鎌を両手で構えて下手に手を出さないように警戒をした。

そんな月夜の様子を見ていた夜見は月夜の行動に対応できるように夜刀と刀を構えていたのだが、その様子とは裏腹に内心はかなりの不安で満ちていた。

夜見（魔法は奥の手として残しておきたかったが、まさか傷を治すのに使う羽目になるとはな　あと一回は使えるだろうが、おそらく使ったら魔力切れで動けなくなるな……）

そして両者はお互いに中々動き出さずに睨み合っている状況がしばらく続いたが、月夜が終止符を打った。

月夜は両手に力を入れると同時に夜見の目の前に現れて鎌を振るってきたのだが、夜見が今度は躲しながら刀で防ごうとした瞬間に月夜は目の前から姿を消した。

夜見（くっ！後ろか!?!）

すると夜見は勘でなんとなく後ろに回り込まれた気がして振り返りながら刀を振るうと甲高い金属音が鳴り響き、夜見と月夜の武器はお互いに軌道が逸れて両者が斬られることはなかった。

夜見「くっ！」

月夜「チツ！」

そして夜見と月夜はお互いにまた武器を振るうと再び金属音が鳴り響き、先程と同じように武器の軌道は逸らされるとそこからは激しい攻防が始まった。

夜見は2本の刀と2つの行動を、月夜は鎌と能力を巧みに扱うが両者は一步も譲る事はなく、ただそこでは両者の間で刃が交わる度に金属音を何度も鳴り響かせているだけだった。

そんな激しい攻防の中で月夜はあることで一瞬だけ顔をしかめたのだが、その一瞬の行動を夜見は見逃さなかった。

そして夜見は月夜が振るってきた鎌を刀で受け止めると刀に力を入れ、思いつきり刀を振るうと月夜は思わず後ろへずり下がった。

月夜「くっ!?」

すると月夜はずり下がっている途中で鎌の柄の下を背後の地面に突き刺すと鎌の柄が壁となり、月夜は鎌の柄に背中を強くぶつけて止まるという無理矢理な止まり方をした。

しかし月夜の目の前には空中で刀を大きく振りかぶっている夜見が迫ってきており、月夜は再び一瞬間をしかめると背後の鎌の柄を掴んで能力で数m後ろへと下がると夜見の刀は空を切ったのだが…

夜見「これで、俺の勝ちだ!」

なんと、夜見は勝ちを確信して空を切った刀をもう一度振る瞬間に魔法で真っ赤な炎を刀に纏わせたのだ。

そんなことをしてしまえば夜見は魔力が切れて動けなくなるのだが魔力切れの身体に鞭打ち、刀を大きく振りきって炎の斬撃を放つとそのまま前へ姿勢を崩して倒れた。

月夜「くっ！」

そして月夜は炎の斬撃が避けられないと思ったのか迫ってきている炎の斬撃に左手を翳し、口を開いたと同時に能力を使った。

月夜「この斬撃を、無に！」

夜見（なっ?!）

すると炎の斬撃は月夜に届くことはなく消え去って後は月夜が動けない夜見を殺してGAMEが終わる…。筈だったのだが、月夜は能力を使った瞬間に足がふらつくと夜見と同じようにそのまま倒れた。

月夜（エネルギー、切れかよ…。でも…。はは、ザマアねえぜ）

どうやら月夜が倒れたのは月夜の霊力が切れ、身体が動かなくなったのが原因だったようだ。

夜見（まじ、か…。まさか…。魔法を、無くされるとは…。）

そして夜見が勝ちを確信して魔法を使ったのは月夜の霊力がもうすぐ切れるのがわかったのと、炎の斬撃を放つたことを無かった事にされることよって魔力を取り戻そうとしていたのが理由だった。

だが月夜は敢えて炎の斬撃が放たれたのを無くすのではなく、炎の斬撃を無くすことによつて自分が霊力切れになりながらも夜見を再び動けるようになるのを阻止したのだ。

夜見（…だが、そんなのは関係ねえ）

しかし夜見は魔力が尽きて動かせる筈のない身体に力を入れると地面を両手でそつと触れる程度の非力な力で押しした。

夜見（たとえ、霊力が… 尽きても 魔力が、尽きても）

すると非力な力で地面を両手で押ししているのにも関わらず何故か夜見の身体はゆっくりと持ち上がった。

夜見（俺が月夜さんに… 負けたことには、ならねえ！）

そして夜見は腕を伸ばしきるまで身体を持ち上げると両足にも力を入れ、フラフラとうなだれるようになりながらも立ち上がると足元の夜刀を右手で拾った。

月夜（もう、エネルギーは残ってないはずなのに…）

一方、倒れている月夜は目だけ動かして夜見が立ち上がった姿を見て少し口元を緩めると、ゆっくりと少しずつ両手に力を入れた。

月夜（… ははっ そんな姿を見せられちゃあ、答えない訳にはいかねえよな！）

夜見の姿に感化された月夜は夜見と同じように身体を持ち上げるとふらつきながら

も立ち上がり、足元に落ちてゐる鎌を右手に持つと元の白刀へと姿を戻した。

夜見・月夜（これが：・ 本当のLASTになるだろうな）

そして夜見と月夜は力の入らない身体でゆっくりと一歩ずつ足を前へと進めると両者の距離は短くなり、遂にお互いの距離が1mを切った所で両者は動いた。

夜見・月夜「うおおおおおおお!!!」

2人は揃つて雄叫びを上げると夜見は夜刀を上から下へ振り下ろしたが、月夜は逆に白刀を下から上へ振り上げるとお互いの刀は弾れた。

白刀は地面に突き刺さったのに対して夜刀は宙を舞つたが両者はお互いに目の前にいる相手しか見ておらず、雄叫びを上げ続けながら今度は拳を放ち始めた。

しかし両者はお互いに動かない筈の身体を無理矢理動かしているので身体は思うように動かず、拳を放つ度に振り切るような形になって隙を晒してしまっていた。

そして両者は隙を晒している間に相手を殴つて隙を晒し、隙を晒している間に殴られてを何度も繰り返していた。

だが夜見はそんな中で何度殴られたか覚えていない頬を殴られたのだが、夜見は殴られた衝撃を利用してその場で回転すると強力な裏拳を月夜の顔へ放った。

すると月夜は裏拳がそんなに強力だったのか後ろに大きく仰け反ると、少しして後ろに倒れて仰向けに大の字になった。



月夜「ぐはっ！ がっ！ぐう…」

夜見「くっ！はあ、はあ…」

そして夜見は倒れている月夜へとゆっくりと歩み寄って月夜の腹付近をを跨ぐまたようにして足を止めると、夜見は月夜の腹に座るようにマウントポジションを取った。

すると夜見はすぐ近くの地面に突き刺さっている白刀に右手を伸ばそうとしたのだが…

月夜「…ははっ」

月夜は何故かマウントポジションを取られて不利な状況にいるのにも関わらず、夜見の顔をじつくりと見ながら笑ったのだ。

夜見「…何が、おかしい？」

月夜「さあ、なんでだろうな？もしかしたら、俺が左手に持っている物が関係あるかも知れねえな」

夜見（左手？）

夜見は月夜の言葉を聞いて月夜の左手の方に視線を向けてみると、月夜の左手はいつの間にかナイフを握っていた。

だが夜見は月夜が左手にナイフを握っていたことは気にせず視線をゆっくりと戻した。

夜見「仕込みナイフか　だが月夜さんには、左腕を動かす力すら残ってない筈だ」

月夜「ああ、確かに：．　そうだな」

そして月夜はそう言いながらも左腕の肘から先を動かすと、ナイフの先端を夜見の方へと向けた。

夜見（一体、何をしたいんだ？）

夜見は月夜の行動に疑問を持ちながらも白刀に右手を伸ばそうとした時、無意識に月夜の握っているナイフをチラリと見てしまった。

しかし夜見はその瞬間に月夜の持っているナイフのハンドル（柄）に小さなボタンが付いており、月夜の親指がそのボタンを押そうとしているのを偶然見てしまった。

夜見（まさか！しまっ「あばよ、GAME OVERだ」

そして月夜がそう言っただけでボタンを押すと、ナイフの刀身が夜見の喉に目掛けて射出された。

月夜が持っていたのはただのナイフではなく、スペツナスナイフと言われる刀身が射出できるナイフだったのだ。

月夜はこの土壇場で逆転勝ちすることが出来る必殺の奥の手を、最後の最後まで隠し持っていたのだ。

そしてその必殺の奥の手であるナイフの刀身は夜見の喉に真っ直ぐ進んで行くと、そ

のナイフの刀身は…

何かが地面に突き刺さる音が鳴ると夜見の喉に刺さる寸前に空中で止まった。

月夜「なっ!？」

月夜は目の前で起きた光景が信じられずに思わず驚きの声を出し、一体何が起きたのかを知るために先程地面に何か突き刺さる音が鳴った方向を向いた。

するとそこには夜刀が突き刺さっており、そしてその夜刀はナイフの刀身の影に突き刺さっていた。

夜刀が持っている性質は影に干渉することができる力。

夜刀が影を切れば本体が切れ、突き刺せばその場に縛り付ける。

月夜「まさか…こうなることを読んで、夜刀を弾かせたのかよ!？」

月夜はこんな奇跡が起こる理由は夜見が何かをしたのが理由だと思つて夜見に向かつて叫んだが、夜見はゆっくりと白刀ではなく夜刀に右手を伸ばしながら言った。

夜見「：． いや、違う 俺は昔からこうなんだ」

月夜「昔から？ どういうことだ!？」

夜見「そのままの意味だ」

夜見はそう言いながら夜刀の柄を逆手持ちになるように掴んで夜刀を地面から引き抜くとナイフの刀身が落ちた。

夜見「俺は、昔から運が良いんだ 俺の運だけはな」

そして夜見は夜刀を逆手持ちのまま上に持ち上げた。

するとその瞬間、月夜には夜見の顔が死神の顔に見えた。

月夜（ああ、やっぱりな お前は：．

夜見「GAME OVERだ 月夜さん」

そして夜見は上に持ち上げた夜刀を勢いよく突き刺した。

## 第46話 重罪の償いを

夜見「……ふう」

夜見は月夜をやつと倒した達成感と戦闘での疲労が混ざったため息をつき、魔力切れの身体を無理矢理動かして夜刀を引き抜いて立ち上がった。

そして夜見は夜刀を横に振って汚れを払って鞘に収めると月夜の腰に差ししてある白刀の鞘を引き抜き、地面に突き刺さった白刀を引き抜くと鞘に収めて腰に差した。

夜見（マントと仮面は…… あった）

次に夜見は周りを見回して自分の仮面とマントを見つけるとフラフラと歩いて近付き、マントと仮面を拾い上げると仮面を被ってマントを羽織った。

夜見（さて…… と、早く帰らないとな）

そして帰る準備を終えた夜見はフラフラと歩きながら月夜のすぐ側を通って森に入ろうとしたのだが、夜見は後ろから声をかけられた。

月夜「…… 何でだい？」

それはなんと、倒れたままの月夜からだった。

しかし夜見は驚く事はなくその場に立ち止まったのだが、身体がグラッと揺れると近

くの木に手を置いて身体を支えた。

夜見「…何がだ？」

そして夜見は振り返らずに月夜に質問が一体何のことを聞いているのかを聞き返すと、月夜は微笑んで質問の意味を答えた。

月夜「惚とぼけないですよ 何で、俺を殺さなかつたのかを聞いてるんだよ」

そう言つて月夜は顔を左に向けるとそこには、夜刀が突き刺さつて出来た細長い穴が地面に出来ていた。

実は夜見が夜刀で突き刺したのは月夜ではなく月夜の頭のすぐ横の地面であり、夜見が夜刀を振つて落とした汚れは月夜の血ではなく地面に突き刺した時に付いた土だったのだ。

そして夜見は月夜の質問の意味を理解するとしばらく黙つていたのだが、ようやく口を開いたかと思うとこんな答えを出した。

夜見「…さあな？」

月夜「さあな？つて、自分の行動なのにわからないの？」

夜見「…ああ、そうだ」

月夜「…そう、わかつたよ」

こうして夜見と月夜の会話が終わると夜見は足を動かさそうとしたのだが、その瞬間に

月夜は思い出したように夜見にあることを言った。

月夜「あとと言いつれる所だった GAMEは君の勝ちだから約束通り、俺の賭けた攫った人達は明日には特別な力で無かった事にして返しておくよ」

夜見「・・・そうか」

そして今度こそ夜見と月夜の会話が終わると夜見は森の中へ一歩足を踏み入れたのだが、その瞬間に月夜は更にもう1度夜見に声を掛けた。

月夜「何度も呼び止めて悪いけど あと1つだけ、聞いてもいいかな？」

夜見「・・・ああ」

すると夜見も再び足を止めて返事をしたのだが、月夜はこんな意味不明な質問をした。

月夜「君は、こっち側だよな？」

夜見「・・・ああ」

しかし夜見は月夜の質問の意味がわかったのかすぐ返事をしたのだが、更に夜見は言葉を続けてこんなことを言った。

夜見「ただ、月夜さんの思っているようなそっち側とは少し違う もしかしたら俺はその向こう側か、はたまた別なのかもしれない」

そして夜見はそう言い終えるや否や、足を動かすと手を木に置いて身体を支えながら

ゆつくりと森の奥へと進んでいった。

しかし夜見は森の奥へと進んでいくにつれて意識がだんだんと薄れていき、更には身体の痛みが鈍くなると同時に力がどんどんと入らなくなっていく。

夜見（不味い……な　早く帰って……　少しでもさとりさん達を、安心させなきゃ……いけねえのに）

そして夜見は地霊殿にいるさとり達の事を思いながら森の奥へとゆつくりながらも進んでいたのだが、遂には身体に力が完全に入らなくなってしまう。

夜見（まじ……か……）

すると夜見は身体を支えるために置いていた手が木から離れて前に倒れてうつ伏せになる筈だったのだが、夜見の身体はそのまま前に回って仰向けに倒れた。

夜見「ぐっ！」

夜見は身体に痛みは感じなかったのだが仰向けに倒れたことに驚いて思わず声を出す、夜見の視界には見覚えのある天井と裂け目が映った。

夜見（ああ、そうか）

そして夜見は何故仰向けに倒れたのかを理解すると裂け目がゆつくりと閉じていき、裂け目が閉じきるとある人物が夜見の顔を覗き込んだ。

紫「お疲れ様……って、貴方に言おうと思っていたわ」



それは勿論、「境界を操る」能力を持つ八雲紫だった。

そして紫はその場に正座で座ると夜見の姿を見て真剣な口調とは裏腹に呑気なことを言った。

紫「随分と派手にやられたわね、あの覺妖怪達が心配するんじゃないかしら？」

夜見「あ……あ、そうだ……な」

紫「……まあ、正直貴方の心配なんて何一つしていないわ 私が呼んだ理由は、貴方が異変を解決しに行く前に頼んだことについてよ」

しかし紫は夜見の状態に関しては本当は何も思っておらず、ただ夜見に話があつて裂け目に落としたのが本当の理由だった。

そして紫は本当に夜見の状態を気にも留めないで話を進めた。

紫「私は貴方が異変を解決しに行く前に、確か私はこう言った筈よ 「重罪を犯した百鬼夜行は皆殺しにしなさい、百鬼夜行の大将のぬらりひよんも含めて」 って」

夜見「確か……に、そう……言ったな」

紫「私が下手に直接外の世界の人間に手を下す訳にはいかないから、同じ外の世界の人間である貴方にぬらりひよんの殺害を頼んだ それなのに、貴方はどうしてぬらりひよんを殺さなかったのかしら？」

どうやら紫は夜見が百鬼夜行の大将であるぬらりひよん、すなわち月夜を殺していない

いことを何故か知っている様子だった。

そして夜見は月夜を殺さなかった理由をこう答えた。

夜見「俺は……罪を、重ねすぎた」

紫「……意味がわからないわ　ちゃんとわかるように説明してちょうだい」

すると紫は夜見の意味不明な理由をちゃんと理解できるように説明を求めたが、夜見は理由と言えるかどうか怪しいことを言い始めた。

夜見「その……ままの、意味だ　俺……は罪を重ね、すぎてるんだ　これ以上、罪を……重ねる訳には、いか……ない」

紫「……その罪を重ねすぎたっていうのは、貴方が前に言ってた罪の清算と何か関係があるのかしら？」

夜見「……ああ」

そして紫は夜見の言っている意味が夜見の過去に関係しているという予想を言い当てる。そして、紫は詳しい理由を聞くのは無理だと悟った。

すると紫は立ち上がって夜見を見下ろすと軽く殺気を放ちながら夜見に言った。

紫「これ以上の詮索はしないであげるわ　でもその代わり、ぬらりひよんの後始末は最後までしっかりとしなさい」

夜見「……ああ、わかった　すまないな」

紫「別に構わないわ」

紫はそう言つて夜見のいる場所に裂け目を作り出すと夜見はその中に落ちていき、夜見が今度ほうつ伏せになつて着いた場所は地霊殿の目の前だった。

しかし夜見は身体を動かせない状況でどうやって地霊殿に入ろうかと中々働かない頭で考えていると、地霊殿の玄関と扉が開いたかと思うとそこには燐が立っていた。

燐「… おかえり、黒夜さん」

夜見「ああ、ただ… いま」

燐が夜見に「おかえり」と言つたと夜見はいつも通り帰つた時と同じように「ただいま」と返したのだが、燐は夜見のポロポロな姿を見下すように睨みながら腕を組んでいて明らかに怒っている様子だった。

そして燐は夜見の姿をしばらく見ていたのだが、心配の声を掛けることはなかった。

燐「何してるの？ そんな所に這い蹲はつくばつてないで、さっさと中に入ったら？」

夜見「そうしたいのは… 山々だが、生憎あいにく身体が… 動かないんだ」

燐「へえ、そうなんだ じゃあ聞くけど、さとり様とこいし様との約束は？」

夜見「それは…」

すると夜見は燐に痛いところを突かれて何も言えないでいると、燐は大きなため息をついて微笑むと夜見を起き上がらせて肩を貸した。

燐「……わかつてる、無茶しなきやいけなかつたんでしょ？まったく、黒夜さんは何  
度言われても聞かないんだから」

夜見「すま……ないな」

燐「いいんだよ、今日はゆっくり休んでね さとり様には、あたいから言つてあげる  
から」

夜見「……わかつた、ありがとう」

そして夜見は燐に肩を貸してもらいながら地霊殿の中へ入つて自分の部屋に着くと、  
燐は夜見をベッドに横にさせて仮面やマント、刀を外すと机の上にそれらを置いた。

燐「じゃあね、黒夜さん おやすみ」

夜見「……ああ、おやすみ」

そう言つて燐は夜見の部屋を出て静かに扉を閉じると、夜見は燐には聞こえなかつた  
だろうが「おやすみ」と返してゆっくりと目を閉じた。

そして夜見が寝てから数時間が経つた頃、夜見の部屋にある人物が静かに扉を開けて  
部屋に入るとゆっくりとベッドまで歩み寄つた。

すると夜見の部屋に入った人物は夜見の身体でも揺すつて起こすのかと思いきや、そ  
の場で上に跳ぶとそのまま夜見の腹に落ちてきた。

？「どーん！」

夜見「ぶはっ!? な、なんだ!」

夜見は突然の腹への衝撃に驚いて目を覚まして上体を起こすと、夜見の腹に落ちてきた人物は夜見の上からすぐに降りてベッドのすぐ側に立つと夜見にあいさつをした。

こいし「おはよう、お兄ちゃん♪」

夜見「な、なんだ、こいしさんか 起こすなら普通に起こしてくれ」

こいし「えへへ、ごめんなさ〜い」

夜見「はあ、まったく」

夜見はこいしの豪快な起こし方に呆れながらもこいしの頭に手を伸ばして頭を撫でると、こいしはとても嬉しそうな様子だった。

こいし「えへへ♪ありがとう、お兄ちゃん」

夜見「ああ、どういたしまして」

そして夜見はこいしの頭を撫でていた手をゆつくりと離すとこいしは少し後ろに下がったので、夜見はベッドから降りて立ち上がった。

するとこいしは夜見の姿を見た瞬間にこんなことを言った。

こいし「あ、お兄ちゃん 服がボロボロだよ」

夜見「ん? ああ、そうだな このまま着ている訳にもいかないから、早く着替えないとな」

夜見はそう言って自分が着ているボロボロの制服の腕やズボンを見ているとこいしは夜見の部屋から出て扉を閉じたのだが、扉の向こう側からこいしの声が聞こえた。

こいし「着替え終わったら出てきてね、お兄ちゃん！」

夜見「ああ、わかったよ」

そして夜見は返事をしながらクローゼットの中から黒い服を取り出すと一旦ベッドの上に置き、ボロボロの制服を脱ぎ始めると扉の向こう側から再びこいしの声が聞こえてきた。

こいし「お兄ちゃん、まだ〜？」

夜見「まだだ、もう少し待っててくれ」

こいし「は〜い」

すると夜見はこいしを少しでも待たせないように少し急いで制服を脱いだのだが、そこで夜見は月夜とのGAMEで負った傷がもう治っていることに気が付いた。

夜見（もう、治っていたのか 起きてから身体はちゃんと動くし、靈力は回復しているんだろうな）

夜見はそんなことを思いながら黒い服に着替え終わると、ボロボロの制服を片腕に干すように持って部屋の扉を開けた。

するとこいしは夜見の姿が見えた瞬間に腰辺りに腕を回して抱きついてきた。

こいし「もう！遅いよ、お兄ちゃん」

夜見「すまないな、こいしさん これでも急いで着替えたんだ」

こいし「あ！私、服持って行ってあげる！」

そしてこいしはそう言うのと夜見から離れて夜見の制服を手に取ると走って一階へと降りていった。

するとこいしの姿が見えなくなった瞬間に夜見の後ろから扉が開いた音が聞こえたので夜見は振り返ってみると、ちょうど真正面に見える扉の前にさとりの姿が見えた。

さとり「黒夜さん、やっと起きたんですか もうお昼過ぎですよ？」

夜見「え、そうなのか？それはすまないな」

さとり「でも、ちようど良かったです さつき黒夜さんのご飯が出来たばかりですから、冷めない内に食べてください」

夜見「ああ、わかったよ いつもありがとう」

そう言いながら夜見はさとりの目の前まで歩くと、さとりが夜見の為に扉を開けたので夜見はそのまま部屋の中へ入った。

そしてさとりの言った通り夜見の席には食事が置かれており、夜見は自分の席に着くと目の前の席にさとりが座った。

夜見「いただきます」

夜見は手を合わせて食事のあいさつをすると箸を手に取って目の前の料理を食べ始めたのだが、さとりは夜見が料理を食べている様子を黙ったままジツと見ていた。

夜見（…何でそんなに見てくるんだ？少し食べにくいな）

さとり「…美味しい、ですか？」

夜見「ん？ああ、美味しいよ」

さとり「それは良かったです」

先程黙っていたさとりが口を開いたかと思っただけに夜見に料理の感想を聞いただけで、夜見が正直に料理の感想を言うときとりは一言だけ言つてまた黙ってしまった。

しかし、しばらくするとさとりは再び口を開いた。

さとり「お隣から黒夜さんが帰ってきた時の話を聞きました 酷い怪我をしていたそうじゃないですか」

夜見「…」

さとりが夜見が帰ってきた時のことを喋ると夜見は料理に伸ばしていた箸をピタリと止め、すぐに箸を置いてさとりに頭を下げた。

夜見「無茶をしないという約束を破つて、すまなかつた」

さとり「… 黒夜さん、頭を上げてください」

さとりがそう言うのと、夜見はさとりが怒っているのではないかと恐る恐る頭を上げ



た。

そして頭を上げた夜見はさとりを見てみると何故かさとりは笑みを浮かべていた。

さとり「別に、怒ってはいません 黒夜さんは何かをする為に自分を犠牲にするような人だというのは、みんなわかっていますから」

夜見「・・・そう、か」

さとり「・・・それに、お燐がこう言ってたんですよ? 「黒夜さんは異変を止める為にどうしても今回は無茶をしなくちゃいけなかったから、どうか黒夜さんを怒るのはやめてください」って」

夜見（そうか、燐さんが・・・ 後で、ちゃんとお礼を言わないとな）

夜見は心の中が燐への感謝の気持ちでいっぱいになっていると、さとりは箸を止めた夜見に向かって言った。

さとり「さあ、もうこの話は終わりにしましょう 料理が冷めてしまつては、勿体無いですから」

夜見「・・・ ああ、そうだな」

そして夜見は再び箸を手にとると先程より少し速く料理をどんどんと自分の口へと運んでいき、さとりはそんな光景を満足そうに見ていた。

すると夜見の目の前にあつた料理はみるみるうちに無くなつていき、最終的には料理

が乗っていた皿が残って夜見は手を合わせていた。

夜見「ごちそうさま」

さとり「ふふ そんなに自分が作った料理が美味しそうに食べられると、料理を作ったこちらはとても気持ちがいいですね」

さとりはそう言いながら夜見の目の前にある皿を片付けようと立ち上がったのだが、さとりが回り込む間に夜見は皿を重ねてキッチンに持つていこうとした。

しかしさとりは夜見の服の裾を掴んで夜見を止めると、夜見は振り返ってさとりの方を見た。

さとり「黑夜さん、私が片付けるから大丈夫ですよ？」

夜見「いや、俺が片付けておくよ いつもお世話になってるからな」

さとり「何を言っているんですか、お世話になってるのはこちらの方ですよ お皿は私が片付けておくので、黑夜さんはゆっくりしててください」

夜見「いやいや、さとりさんは後で書類の整理とかしなきゃいけないだろ？それなのに俺がゆっくりしているわけにはいかないよ」

さとり「今日の分の書類は少ないので大丈夫です だから私が…」

こうして夜見とさとりはお互いに自分が皿を片付けると言い合っていたのだが、最終的には2人で片付けるという話になってキッチンで肩を並べて皿を洗っていた。

そしてさとりはあることが気になると、その事について夜見に聞いた。

さとり「そういえば、黒夜さんは今日も出掛けるつもりでいるんですか？」

夜見「ん？ああ、そうだな。少し用事があるから出掛けなくちやいけない」

すると夜見は今日も外へ出掛けることをさとりに言ったのだが、さとりは少し俯うつむくと心配そうな声で言った。

さとり「……危ない、ことですか？」

夜見「……危なくない、とは言い切れないな。でも、今度こそ無茶をするつもりは無いから大丈夫だ」

さとり「……今度こそ、約束……守ってくださいよ？」

夜見「ああ、わかったよ」

そして夜見がそう言ったと同時に皿洗いを終わると手に付いている水をタオルで拭き、安心させるようにさとりの頭を優しく撫でた。

すると頭を優しく撫でられたさとりは撫でてくれている手を両手で包むように掴むと、少し力を入れて手を放さないようにギュツと握って夜見に笑顔を向けた。

さとり「行つてらっしゃい、黒夜さん。私、信じてますから」

夜見「……ああ、行つてくる。なるべく早く帰るようにするよ」

夜見がそう言つて笑顔を返すとさとりは夜見の手を放したので、夜見はキッチンを出

ると一旦自分の部屋に戻った。

すると夜見は自分の部屋で夜刀と白刀を腰のベルトに差し、マントを被って仮面を手に持つとエントランスへと向かった。

そして夜見はエントランスに着くと外に出るために玄関に手を掛けたのだが、まるでその時を待っていたかのようにいつもの声が後ろから聞こえてきた。

こいし「お兄ちゃん！」

夜見「ああ、こいしさっ!？」

夜見はこいしの声が聞こえると後ろに振り返ったのだが、こいしは夜見が振り返ったのと同時に首に手を回すように飛びついた。

しかし夜見はこいしを受け止める準備をしていなかったなので後ろに仰け反ってしまい、夜見の後頭部が玄関の扉にぶつかってしまった。

夜見「あだっ！」

こいし「お兄ちゃん、だ〜い好き♪」

そしてこいしは夜見に早く甘えたかったのか、夜見が頭を扉にぶつけたことには気付いていない様子だった。

すると夜見はこいしがいきなり飛びついてきたことを軽く怒ろうとしたのだが、こいしのとても嬉しそうな顔を見ると怒る気にはなれなかった。

夜見「… まったく、よしよし 俺も大好きだ、こいしさん」

夜見はそう言いながらこいしを抱きしめ返して頭を撫でていると、こいしはより一層嬉しそうな顔をして夜見の頬にキスをした。

チュツ

こいし「えへへ♪行つてらっしやい、お兄ちゃん」

夜見「ああ、行つてくるよ」

そう言つて夜見はこいしを下ろすと手に持っていた仮面を被り、玄関の扉を開けて外に出ると旧地獄街道を通つてそのまま地上へと向かつた。

そして夜見は用事の事を考えながら歩いているといつの間にか地上に出たのだが、何故か夜見は特に目的地を定めなくて考え事をしたまま森の中へ歩いていった。

夜見（一体、どうすれば…）

しばらく夜見は森の中を歩いていたのだが、ふと微かに聞こえる何かの音が耳に入るとその音に意識が向いた。

すると夜見は考え事を一旦やめて微かに聞こえる音の方へと歩いていったのだが、音が徐々に鮮明に聞こえてくるとその音は幻想郷では聞くことは無い筈の音だということに気付いた。

夜見（… そこにいるのか）

夜見は音が聞こえる方へ歩いていると前にチルノ達と遊んだ開けた場所が見えてきたのだが、それと同時にその場所の中心にある人物が何かに座っている後ろ姿も見えてきた。

そして夜見が開けた場所に出た瞬間に中心にいる人物は夜見に気付いたようで、後ろを振り向くと夜見に話しかけた。

月夜「やあ、昨日の怪我は全部治ったんだね」

夜見「・・・ああ、そう言う月夜さんもな」

それは昨日の夜中に会った時と同じようにバイクに乗っているマントを身に着けた月夜であり、更には能力で直したのか服は元通りになって傷も治っていた。

すると月夜は先程から音を鳴らしているバイクのエンジンを切ってバイクから降りたかと思うと、何故かゆつくりと夜見に近付き始めたので夜見は警戒をした。

夜見「それで、月夜さんは何故こんなところに？」

月夜「いや、特に意味は無いよ それに、そういう君もどうなんだい？バイクのエンジン音が聞こえたから来たんだろうし、俺に何か用があるんでしょ？」

夜見「・・・ああ」

月夜「やっぱりね」

そして月夜はそう言った直後には左腕の袖に仕込んでいたナイフを左手に持ってい

たので、夜見は白刀の柄を右手で持っていていつでも引き抜けるように構えた。

すると月夜はその場で足を止めて左手でナイフを玩もてあそびながら笑った。

月夜「アハハハハ！冗談だよ、冗談！君に敵わないのは昨日でのGAMEで十分理解してるよ」

月夜はそう言うのと左手に持っているナイフを左腕の袖に収めたのだが、夜見は警戒は緩めずに右手で掴んでいた白刀の柄をゆっくりと放した。

そして月夜は夜見が白刀から手を放したのを見ると、自分に一体何の用があるのかを聞いた。

月夜「それで？俺に用があるらしいけど、それは一体どんな用なんだい？」

夜見「・・・単刀直入に言う、月夜さんはこれから人里の人に手を出したという重罪を償ってもらおう」

どうやら夜見の月夜への用とは、人里の人に手を出したという重罪を犯した月夜に罪の償いをさせることだったようだ。

しかし、月夜は罪を償うという話を聞くと夜見に聞き返した。

月夜「罪を償う：：ねえ？つまり俺は檻の中に入って、反省でもするってこと？」

夜見「いや、月夜さんが反省したところで重罪を犯したことは無かったことにならないだから月夜さんには重罪の分、何か人の役に立つてもらおう」

月夜「要するに、人の役に立つ仕事をしろってことね　それで、俺は一体何の仕事をするればいいんだい？」

夜見「別に難しい仕事ではない　案内する」

夜見はそう言って月夜のすぐ側を通って森に入ろうとしたのだが、月夜は夜見の肩に手を置いて夜見を止めるとバイクを指差して言った。

月夜「道案内するんでしょ？　だったら、一緒にバイクに乗ってよ」

夜見「・・・確かに、その方が早いかな」

夜見は月夜の提案に乗ると方向転換してバイクに近付くと何故か月夜が乗る前にハンドルを握って乗ったのだが、月夜は夜見の後ろに乗ったところで質問をした。

月夜「運転できるの？」

夜見「ああ、一応な　しつかり掴まってるよ」

夜見はそう言うのとバイクのエンジンを入れ始めたので月夜は夜見の腰に腕を回すように掴まると、夜見はハンドルを捻ってバイクを発進させて森の中へと入っていった。

すると夜見は森の中でバイクの速度をどんどん上げていくと気付いた頃には時速は3桁を出していたのだが、木には一切当たらないことはなく森の中を縦横無尽に走っていた。

月夜「よくこのスピードで走れるね、本当はかなり乗り込んでたんじゃないのかい？」



夜見「……あまり喋ると、舌噛むぞ」

そしてしばらく夜見と月夜は森の中を走っていると森を抜けて霧がかかった湖に出たのだが、夜見はバイクの速度を緩めないでそのまま真っ直ぐ湖に向かっていった。

月夜「ねえ、そのまま走っていると湖に落ちるよ?」

夜見「ああ、わかってる」

すると夜見はバイクが湖まであと約3mという辺りで目の前に血の坂を作り出し、すぐに血の坂を登りきると夜見と月夜を乗せたバイクは宙に飛んで湖の上を通り過ぎた。

そして夜見と月夜は湖の向かい側に着地したのだが、夜見はバイクの速度を更に上げて走っていると紅魔館が徐々に見えてきた。

美鈴「……ん?何か来る」

一方、紅魔館の門の門番をしている美鈴は前からどんどん近付いてくる気配を察知すると構えを取ったのだが、近付いてくる気配である夜見の姿が見えると構えを解いた。

すると夜見は門まであと数mになるとバイクのハンドドルを思いつき横に切りながらブレーキをかけると、バイクは大きな音を鳴らして美鈴の前で止まった。

美鈴「こんにちは黒夜さん、ええつと……そちらの方は?」

そして美鈴は「気を使う」能力で月夜の気でも感じ取ったのか月夜の姿がちゃんと見えている様子であり、夜見と月夜はバイクを降りると夜見がバイクを停めながら紅魔館

に來た理由を話した。

夜見「こんにちは美鈴さん、実はこいつの事でレミリアさんに話があつてな　2人で入るけど大丈夫か？」

美鈴「ええ、大丈夫ですよ　どうぞ」

夜見「ありがとう、美鈴さん」

すると美鈴が紅魔館の門を開けたので夜見は美鈴にお礼を言つて門を通ると、月夜は美鈴に会釈をして夜見に続いて紅魔館の中へ入つていった。

そして夜見と月夜は紅魔館の廊下を歩いていてレミリアの部屋に向かつていたのだが、月夜は真つ赤な廊下をしぼらく見回すと夜見にこんなことを聞いた。

月夜「ねえ、この屋敷ちよつと悪趣味じゃないかい？こんな真つ赤な廊下なんて」

夜見「別に内装なんて住んでる人次第だろ　月夜さんがとやかく言う権利は無い」

月夜「いや、確かにそうだけど……明らかに目に優しくないでしょ」

夜見「見慣れれば問題ないだろ　つと、もう着いたか」

こうして夜見は月夜と話しながら歩いていくとすぐにレミリアの部屋の前に着いたように、夜見が扉の前で足を止めると月夜も足を止めた。

しかし夜見はすぐにレミリアの部屋の扉をノックをせずに、振り返つて月夜の方を向くとレミリアの部屋に入る時の事を話し始めた。

夜見「先に少し話をするから、月夜さんは一旦部屋の外で待つてくれ。それと、部屋に入る時にはできるだけ気配を感じ取れるようにして欲しいんだが……できるか？」

月夜「まあ、別にできないことはないよ。ほら、早く話をしてきたらどうだい？」

夜見「ああ、そうだな」

すると月夜は扉のすぐ横の壁に背中を向けてもたれかかり、夜見は扉を軽くノックをすると扉の向こうからレミリアの声が聞こえてきた。

レミリア「いいわよ、入りなさい」

そしてレミリアに入室許可を貰った夜見は扉を開けるとレミリアは部屋の中央にある紅い椅子に足を組んで座っており、レミリアは夜見の姿が見えた瞬間に顔に微笑みを浮かべた。

レミリア「あら、夜見だったのね。今日はどうしたのかしら？」

夜見「レミリアさん、俺に異変の後や宴会の時に紅魔館の執事にならないかって話をしただろ？」

すると夜見はいきなりレミリアが前に言っていた紅魔館の執事の件のことを話し始め、その件の話を出された瞬間にレミリアは顔を少し赤く染めて夜見から視線を逸らすと頬杖をついた。

レミリア「ええ……言ったわね。それが、どうしたっていうの？」

夜見「レミリアさんはメイド長の咲夜さん以外にも執事がいて欲しいのかと思って、今日は執事として雇って欲しい人を連れてきたんだ」

レミリア「え？ああ…… そうなのね それなら連れてきなさい」

夜見（ん？何を落ち込んでいるんだ？）

そして夜見はレミリアがいきなり落ち込んだような様子になった事に疑問を持ったが特に気にすることはなく、振り返って扉の方に向かうと廊下に顔を出して月夜を呼んだ。

夜見「月夜さん、入ってこい」

月夜「ん？思ったより早かったんだね」

月夜はそう言いながら壁にもたれかかりながら左手で左腕に仕込んであるナイフを玩んでいたが、月夜は夜見に部屋に入るように言われるとすぐにナイフを左腕の袖に収めてレミリアの部屋に入った。

レミリア「夜見、その人間が今日から私に付き従うというのかしら？」

しかしレミリアは月夜の姿を見るなり月夜の事を怪しんだのか夜見にそんなことを聞いてきたのだが、逆に夜見はレミリアに聞き返した。

夜見「ああ、不満か？」

レミリア「……いえ、そういう訳ではないわ」

するとレミリアはそう言つて視線を夜見から月夜へ向けると、レミリアは月夜とお互いに自己紹介を始めた。

レミリア「はじめまして 私の名前はレミリア・スカーレット、この紅魔館の主をしているわ」

月夜「これはご丁寧にどうも、俺の名前は白明月夜 とりあえずさっきの夜見くんとレミリアちゃんの会話から察するところ、俺はレミリアちゃんの下で働くつてことではないのかな？」

レミリア「ええ、そうよ わかっているなら、私の呼び方には注意することね」

レミリアは先程月夜に「レミリアちゃん」と呼ばれたのが癪に障つたのか少し殺気を放ちながらそう言つと、月夜はレミリアの殺気を感じて改めてレミリアを呼び直した。

月夜「わかつたよ、お嬢 これでいいだろ？」

レミリア「…まあ、いいわ」

レミリアは月夜からの態度に不満があるのか少し不機嫌そうな様子だったが、とりあえず納得をして殺気を放つのを止めて指を鳴らすと正面に咲夜が現れた。

咲夜「お嬢様、どのようなご用件でしょうか？」

レミリア「咲夜、その白い格好をした人間が今日から私の執事となつたわ だからあの人間を連れてつて執事服を用意してあげなさい」

咲夜「承知しました」

月夜「え？ちよつと待

すると月夜は何かを言おうとしていたが咲夜の姿が消えると同時に、月夜も咲夜に連れて行かれたのか姿が消えてしまった。

そして夜見は昨日紫に言われた通りに月夜の処理を終わらせると、帰るために振り返ってレミリアの部屋を出ようとしたのだがレミリアに呼び止められた。

レミリア「待ちなさい、夜見」

夜見「ん？どうしたんだ、何か依頼でもあるのか？」

夜見はレミリアに呼び止められると何か依頼を頼まれるのかと思ひ、振り返りながらそう言ったのだがレミリアは夜見が振り返った瞬間にこう言った。

レミリア「：： いえ、やっぱりなんでもないわ」

夜見「ん、そうか？別に遠慮しなくてもいいぞ」

レミリア「いえ、大丈夫よ 帰って構わないわ」

夜見「：： そうか じゃあな、レミリアさん」

レミリア「ええ、さようなら」

そして夜見はレミリアの部屋を出ると真つ直ぐ地霊殿へと戻って行ったのだが、レミリアはしばらくある事を考えていた。

レミリア（あの人間は恐らく…  
だったら、なんであの子は？）

## 第4章 夜空に感じるもの

### 第47話 不思議とを感じる懐かしさ

夜見（さてと、どうしようか…）

夜見は紅魔館から地霊殿へ帰つてくると既に時間は6時を過ぎており、夜見が帰ってきたところでみんな夕飯を食べた後は各自の順番で風呂に入った。

そして夜見は今、自分の部屋でベットに座りながら何をしようか考えていた。

夜見（特に眠気は無いし…よし）

すると、夜見は何かを思いついてベットから立ち上がると、マントで身を包んでフードを深く被り、仮面を被ると自分の部屋から出た。

そして夜見は廊下を通つて階段を降り、エントランスに着くと地霊殿を出てそのまま歩き続けて地上へ出た。

こうして夜見は地上に出て近くに腰掛けるのにちょうど良さそうな岩を見つけて腰を掛けると、淡く輝く月に照らされながら夜空を眺めた。

そして夜見は夜空を吸い込まれるように眺めていたのだが、不意に夜空を眺めるのどこか懐かしさを感じ始めた。



しかし、その懐かしさには謎の違和感があり、夜見は夜空を眺めるのをやめて立ち上がる。と今度は夜の散歩を始めた。

夜見（……何だったんだ？さっきの違和感は）

だが、夜見は夜空を眺めていた時に感じた懐かしさと違和感が忘れられずに頭の中を渦巻いていたのだが、木材が軋むような音がそれを遮った。

夜見（……こんな夜中に、誰かいるのか？）

夜見はこんな夜中に誰かがいるのかと気になると音が鳴った方へ進んでいき、しばらくすると人里へ続く少し整備された道が現れた。

そして、その道端には先程の木材が軋む音を鳴った原因だと思われる、木製のリアカー屋台が八目鰻と文字が書かれた赤提灯に照らされていた。

すると、夜見はそのリアカー屋台の八目鰻と書かれた青い暖簾のれんをくぐると、向かい側で少女が椅子に座りながら両手で頬杖をつけて目を閉じながら鼻歌を歌っていた。

その少女はピンク色の髪で背中には変わった形の翼を生やし、本来耳がある部分には小さな翼に似た形の物が生えていた。

服装は茶色の和服を青い帯で締めて捲った袖はたすき掛けで固定しており、青いバンダナと帆前掛けを巻いていた。

しかし、その少女は夜見に一切気付くことなく気持ち良さそうに鼻歌を歌い続け、

夜見は目の前にある木製の長椅子に座ると少し軋んだ。

そして、少女は長椅子の軋む音でようやく自分以外の人物がいることに気付き、少女は驚きの声を上げながら飛び跳ねるように少し後ろに下がった。

？「ふえ!?お、お客さん!?え、えつと!ご注文は!」

すると、少女は客が来たのかと思つて反射的に注文を聞くと、もちろん夜見は注文をしなかったが逆に口を開くこともなかった。

？「…え?あ、あのーお客さん?ご注文は?」

夜見「…」

？「あれ?も、もしもーし?聞こえていますかー?」

夜見「… ああ、聞こえてる」

少女は途中で自分の声が相手には聞こえていないのか思い、自分の声が聞こえているかを聞いたところで夜見はようやく口を開いた。

すると少女は一切注文をしてこないことを疑問に思い始めると、夜見に向かって一体何をしに来たのかを聞いた。

？「えつと…何しに来たの?」

夜見「…別に、ただ寄つただけだ」

？「冷やかし?それなら…あれ?」

夜見「……どうした？」

そして少女は少し怒った様子で夜見に向かって何かを言いかけたが、急に言葉を詰まらせて疑問の声を出すと、夜見の事をジッと見つめ始めた。

夜見は急に見つめてきた少女に向かってどうしたのかを聞くと、少女は口元に手を当てて考え込みながら答えた。

？「貴方のその格好、誰かから聞いた気がするんだよね 確かあれは……えっと、誰がなんて言ってたんだっけ？」

夜見（誰かが俺のことを言いふらしてるのか？可能性としては魔理沙さん辺りか？いや、そんなことは「あ！思い出した！」

少女の答えを聞いた夜見は、誰が自分の事言いふらしているのかと考え始めたのだが、少女はすぐに思い出したらしく夜見に向かって確認をした。

？「お兄さん、黒夜さんでしょ！確かどんな依頼も受けてくれる人だって！」

夜見「……誰がそんなことを？」

しかし夜見は少女の聞いてきたことには返事をせず、逆に誰が自分のことを話していたのかを聞くと、少女は夜見のよく知る人物の名前を出した。

？「え、こいしちゃんだよ？黒夜さんのことをお兄ちゃんって呼んでるらしいから、知らない筈はないと思うんだけど……」

なんと、夜見のことを少女に話していたのは一番身近な人物であるこいしだったよう  
だ。

しかし夜見はこいしの名前を聞くと自分の事を話されたことより真つ先に気になっ  
たことがあり、その気になったことを少女に尋ねた。

夜見「もしかして、こいしさんの友人なのか？」

そして少女は夜見の尋ねてきた内容に首を縦に振ると、その少女は自己紹介を始め  
た。

？「うん、そうだよ 私の名前はミスティア・ローレライ それで、お兄さんの名前  
は黒夜夜見でいいんだよね？」

夜見「… ああ、そうだ」

ミスティア「よろしくね、黒夜さん」

夜見「… よろしく」

するとミスティアは握手を求めて手を伸ばしてきたので、夜見も手を伸ばしてミス  
ティアと握手をした。

そして握手を終えるとミスティアは椅子に座り、再び両手で頼杖をつきながら夜見に  
再び何をしているのかを聞いた。

ミスティア「ねえ、黒夜さんはこんな夜中に一体何をしてるの？」

夜見「：： 別に、ただの暇潰しだ」

ミスティア「：： ふうん、そうなんだ」

しかし夜見はミスティアに話題を振られても先程から素っ気無い返事しかないの  
で話が続かず、ミスティアは少しつまらなそうな様子だった。

そして夜見はミスティアのそんな様子に気付くことはなく、ミスティアに先程聞かれ  
た内容をそのまま返した。

夜見「：： 逆に、ミスティアさんは何を？」

ミスティア「私？私はいつも人里でと店を開いてるんだけど、たまにこうして人里の  
外でお店を開いて回ってるの まあ、人里の外だと売上は無いに等しいんだけどね」

夜見「：： 別に、人里の外で開かなければいいだろ」

ミスティア「売上を考えればそうなんだだろうけど、たまには外で開いて常連さん以外  
と話すのも楽しいんだよ」

夜見「：： そうか」

ミスティア（：： 駄目だ、全っ然話が続き気がしない どうしよう：：）

するとミスティアは、なんとか話を続けようとしてみるのだが、夜見の素っ気無い返  
事ですぐ話が終わってしまうことに頭を悩ませ始めていた。

しかしミスティアは大事な事をふと思ひ出すと、その内容を依頼として夜見に話

してみることにした。

ミスティア「ねえ、黒夜さん　少し依頼したいことがあるんだけど……いいかな？」

夜見「……明日でいいなら」

ミスティア「うん、明日でいいよ　実は内で仕入れている八目鰻の在庫がそろそろ無くなりそうだから、川から八目鰻を獲ってきて欲しいの」

夜見「……川は何処に？」

ミスティア「人里から少し山の方に進んだ所、浅い川がある筈だよ」

夜見「……そうか、わかった」

そして、話が終わってしまおうとミスティアは新たな話を考え始めるのだが、夜見は急に会話が終わった直後に椅子から立ち上がった。

ミスティア「あれ？黒夜さん、どうしたの？」

夜見「……帰る」

ミスティア「そう？それじゃあ気を付けて帰ってね　あ、それと明日は人里で看板に八目鰻って書いてあるお店にいるからね」

夜見「……ああ、わかった」

夜見は最後まで素つ気無い返事をして振り返ると青い暖簾を再びぐり、ミスティアの店を出て地霊殿へ帰る為に地底の入口へ向かって行った。

因みにミステイアは夜見が見えなくなるまで手を振って見送っていたのだが、夜見が見えなくなつた瞬間に疲れがドツと出て大きなため息をついた。

そして夜見は地底の入口を目指してゆつくりと歩いてきたのだが、急に足を止めて仮面を懐に仕舞うと夜空を見上げた。

すると夜見は夜空を見上げながら旧地獄街道を歩いている時から、ずっと後ろを付いて来ていた人物に話し掛けた。

夜見「……何で付いて来たんだ？寝てたんじやなかつたのか」

？「だって……お兄ちゃんが黙つたまま外に出ていくから、また私達に黙つて無茶しに行つたかと思つたんだもん」

夜見「……心配を掛けてたのか すまないな、こいしさん」

夜見はそう言いながら振り返ると、そこには黄色のパジャマを着てサードアイを開けたこいしが心配そうな顔をしながら立っていた。

すると夜見が片膝をついて腕を広げるとこいしはゆつくりと近付き、夜見の首に腕を回して抱きつくと夜見はこいしを抱きしめ返した。

こいし「……ねえ、お兄ちゃん」

夜見「どうした？こいしさん」

こいし「……好き、大好き」

夜見「…… どうか、ありがとう」

夜見はそう言いながらこいしの頭を撫でていると、こいしは更に腕に力を込めた。

こいし「…… 愛してる、お兄ちゃん」

夜見「俺も愛してる、こいしさん」

こいし「…… お兄ちゃん、好き」

こいしはそう言つて夜見の頬にキスをするとサードアイから伸びている管のような部分を動かし、互いの身体が離れなくなるように夜見の体に巻きつけた。

しかし夜見は体が巻き付けられている事に特に困る様子は無く、こいしを抱き上げる  
と地底の入口に向かって再び歩き始めた。

しばらくして夜見はこいしを抱き上げたまま地底の入口がある場所に着くと、こいし  
は夜見のパジャマを摘んでチョンチョンと引つ張つた。

こいし「…… ねえ、お兄ちゃん」

夜見「ん、どうした？」

こいし「…… お月様、綺麗だね」

夜見「…… ああ、そうだな」

夜見はそう返事をしながら地上に出た時と同じ石に腰を掛けると、こいしは夜見の首  
に回していた腕を離したので夜見も同様に腕を離した。



するとこいしは身体の向きを変えて夜見に凭れ掛かかのように夜見の膝に座ると、夜見とこいしはほぼ同時に夜空を見上げた。

夜見（：： やっぱり、何か懐かしさを感じるな）

そして夜見は再び何処からともなく湧き出てくる懐かしさを感じていると、こいしは夜空を見上げながら夜見に話し掛けた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん 1つだけ聞いていい？」

夜見「ああ、いいぞ」

すると夜見はそう言っつて視線を落としてこいしを見ると、こいしは振り向いて夜見にこんなことを聞いてきた。

こいし「お兄ちゃん、前に私に会ったことある？」

夜見「：： どういうことだ？」

しかし夜見はこいしが聞いてきた内容の意味が理解できず、思わず夜見はこいしに聞き返してしまった。

するとこいしは前を向いて再び夜空を見上げたところで、夜見にこんなことを話した。

こいし「こうやってお兄ちゃんと一緒に夜空を見てるとね、懐かしさを感じるの。まるで、ずっとこうしてお兄ちゃんと一緒にいたみたいに」

夜見「…… どうか、奇遇だな 実は、俺もなんだ」

どうやらこいしも夜空を見てると懐かしさを感じているようで、それを知った夜見は思つたことを口に出すとこいしは驚いたように振り向いた。

こいし「お兄ちゃんも、懐かしいって感じるの？」

夜見「ああ、ただ少しこいしさんと、は……」

そして夜見はこいしの新たな質問に答えていると急に声を詰まらせて難しい顔をすると、こいしはそんな様子の夜見が心配になつて声を掛けた。

こいし「お兄ちゃん、どうしたの？大丈夫？」

夜見「ん？ああ、大丈夫だ すまないな、何度も心配させて」

夜見はこいしの心配そうな声を聞くと、すぐに考え込むのをやめるとこいしの頭を撫でながら微笑んだ。

しかし、こいしは夜見の顔をジツと見つめながらも一度心配そうに問い掛けた。

こいし「…… 本当に、大丈夫？」

夜見「…… ああ、大丈夫だ こいしさんの感じてる懐かしさと少し違う気がしたんだが、やっぱり気のせいだった」

こいし「…… なーんだ、気のせいだったんだ もく、急に考え込むから本当に心配したんだよ！」

すると、こいしはそう言いながら腕を夜見の首に回すと同時に身体の向きを夜見の方へ向けた。

夜見はこいしが何度も抱きついてくるのに呆れながらも、微笑みながらこいしを抱きしめて頭を撫で続けた。

夜見「まったく、こいしさんは心配性だな」

こいし「当たり前だよ！だって私は、お兄ちゃんのこと大好きなんだから♪」

夜見「そうか、大好きなら仕方ないな」

そう言つて夜見はこいしをゆっくりと抱き上げて立ち上がると楽しく話しながら、地底の入口に入つて地霊殿へと戻つて行つた。

こいしは旧地獄街道を歩いている時には既に夜見の腕の中で寝息立てており、夜見はこいしの寝顔を見て笑みを零している幸せそうな光景だった。

夜見（…確かに、あの時）

しかし、夜見は笑みを零しながら頭の中では、こいしと地上で会話をしていた中で声が詰まった時に気付いたことについて考え始めていた。

夜見（俺が最初に夜空を眺めていた時に感じた、あの違和感が何故か無くなつていたいや、無くなつたというより…まるで、穴を何かで埋めたかのような…）

夜見は歩きながら様々な考えを巡らせていたのだが気付けば既に地霊殿に着いてお

り、夜見は考えを巡らせるのを一旦やめると玄関を開けた。

夜見が地霊殿の中に入ると目の前にはさとりが少し不機嫌な様子で立っており、さとりは夜見とこいしが帰ってくるや否や夜見に問い掛けた。

さとり「黑夜さん、こんな時間に何も言わないで一体何処に行つてたんですか？それに、まさかとは思いますが、こいしを連れて行つた訳じゃないですよね？」

夜見「別に、眠くなくて少し夜の散歩をしていただけだ それにこいしさんは、いつの間にか後ろから付いて来ていただけで俺は誘つてない」

すると、夜見はさとりの問い掛けに嘘偽りのない答えを返したのだが、さとりはいつも無茶をする夜見が信用できないのか夜見の顔をジツと見つめていた。

そして、さとりがしばらく夜見の顔を見つめて沈黙の時間が1、2分過ぎると、ようやくさとりは夜見の顔を見つめるのをやめて口を開いた。

さとり「……私は黑夜さんの心が今は読めないのです、黑夜さんの言つたことが全部本当かどうかはわかりません でも私は、黑夜さんが嘘をついていないと信じます」

夜見「……ありがとう、さとりさん 信じてくれて」

さとり「家族を信じてあげるのは、当然のことですよ でも、次から夜に出掛ける際には私に言うか、私の部屋に書き置きでもしておいてくださいね」

夜見「わかった、約束する」

こうして、夜見とさとりは新たに約束を交わしたのだが、さとりは口元に手を当てる  
と小さなあくびをして、少しウトウトしながら夜見に言った。

さとり「それじゃあ、私はもう寝るので黑夜さんも早めに寝てくださいね おやすみ  
なさい」

夜見「ああ、おやすみ」

そして、夜見とこいし、さとりは2階に上がると、さとりは自分の部屋に入つていき、  
夜見はこいしをベッドで寝かせる為にこいしの部屋に入った。

だが、夜見はこいしをベッドに寝かせる前に、夜見から離れる状態ではないこいしを  
どうにかする必要があるがあつた。

夜見（仕方ない、1回起きてもらうか）

すると、夜見はこいしから離れてもらう為に1番簡単であろう方法の起きてもらう選  
択をし、子どもをあやすようにこいしを上下に揺すつた。

こいし「ん、ん？もくあしやく？」

こいしは揺すられた衝撃を受けるとすぐに起きたのだが、まだ頭は寝ているのか顔を  
上げて夜見と目が合うと半目のままボーツと見つめ始めた。

そして、夜見は見つめてくるこいしに笑みを浮かべると、早速こいしに腕などを離す  
ように頼んだ。

夜見「こいしさん、少し離してくれないか？」

こいし「…うん、いいよ」

こいしはいつもなら離すのを嫌がるのだが、今回は頭が起きていないからなのか言う通りにすんなりと夜見を離れた。

そして、夜見はこいしをベッドへ横に寝かせると、優しくこいしの手を握りながら寝るように諭した。

夜見「こいしさん、もう少し寝ていようか」

こいし「うん、寝りゆく」

こいしは夜見の言う通りに寝ると僅か数秒で眠りにつき、夜見はこいしが眠ったのを確認すると自分の部屋に戻って自分も寝ることにした。

しかし眠りについてみると体感的には朝はすぐに訪れて、夜見は起きるとさとり達といつも通りの朝の時間を過ごし終えた。

そして夜見は昨日受けた依頼をこなす為に自室で地上での姿になり、エントランスから地霊殿を出ようとするといつもの声が夜見を呼んだ。

こいし「お兄ちゃん！」

夜見「ん、こいしさん？」

夜見はこいしの声に反応して振り返ってみると、こいしは階段を急ぐように走って降

りていた。

しかし、こいしは夜見の下にすぐに行きたくて堪らないのか、階段を半分降りた辺りで一気に夜見に目掛けて跳び込んだ。

夜見「なっ!?ぐっ!」

そして、こいしは夜見の首に腕を回すように抱き付いたのだが、夜見にとっては妖怪が跳び込んでくる衝撃は異常な強さだった。

だが、夜見はこいしがそんな衝撃で跳び込んできたのにも拘らず、なんとか衝撃に耐えてこいしをしつかり受け止めていた。

夜見「あ、危なかったあ」

こいし「えへへ、お兄ちゃん♪」

夜見「…はあ、まったく」

夜見はいい加減こいしが抱き付いてくることに慣れてしまい、いつものようにこいしの頭を撫で始めた。

すると、こいしはお返しのつもりなのか夜見のマントのフードを下げ、頭を撫で返しながら、夜見に今日も出掛けるのかを尋ねた。

こいし「ねえねえ、お兄ちゃん 今日もお仕事なの?」

夜見「ああ、そうだ 実はミステリアさんに依頼を頼まれてな」

こいし「え、ミスチーちゃんがお兄ちゃんに？」

夜見「ああ、どうやら店で使う物の在庫が少ないらしい」

こいし「そう……なんだ、ミスチーちゃんが」

夜見「……こいしさん？」

こいしは夜見がミスティアに依頼を頼まれたことを聞くと何故か俯うつむいてしまい、夜見が心配して名前を呼ぶとこいしはハツと顔を上げた。

こいし「あ！ううん、何でもないよ 行ってらっしゃい、お兄ちゃん」

こいしは、そう言いながら人差し指を夜見の顔と仮面の間差し込み、仮面を引張って夜見の頬にキスをする人と人差し指をゆっくりと離れた。

そして、こいしは夜見に満面の笑みを見せると、すぐに夜見から離れて2階へ走って上がってしまった。

夜見はこいしに何か心配しているのかを聞こうとしていたのだが、こいしの「何でもないよ」という言葉を信じてフードを被り地霊殿を出た。

夜見（さてと、昨日聞いた話だと……）

夜見は地上に出ると昨日ミスティアから聞いた話の内容を思い出しながら、血の翼を作り出して空を飛ぶと周りを見渡し始めた。

夜見（……多分、あれだな）



すると夜見は人里から一番近いであろう山を見つけて人里の近くまで飛ぶと地上に降りて、そこからは山の方に向かって歩いて川を探し始めた。

しばらく夜見は歩いていると徐々に水が流れる音が聞こえてきて、音が聞こえる方に進んでいくと山から流れている川を見つけた。

夜見は川を見つけるとそのまま歩いて、川に入る一歩手前で止まると裸足になつて更にマントも外した。

そして、夜見はズボンの裾を両方捲くつて川の中に入ると、素肌に川の冷たさを感じながら空気中の血の一部を川の中の至る所に拈げた。

夜見（何処にいる？）

夜見は一旦辺りを見回してから深呼吸をすると目を閉じ、川の中に拈げた血に神経を集中させて八目鰻を探し始めた。

しばらく探していると夜見は川の中には数十匹の魚がいることがわかり、その中に八目鰻が何匹か交ざっていることに気付いた。

夜見（：：一匹だけ近いな）

そして、夜見は一番近くにいた八目鰻に逃げられないようにゆっくり近付き、慎重に狙いを定めると八目鰻の頭を掴んで捕まえた。

夜見（さて、あと数匹捕まえるか）

すると、夜見は空気中の血を集めて作った大きめの竹水筒のような筒の中に川の水と八目鰻を入れ、そこから夜見は次々と八目鰻を捕まえ始めた。

しばらくして八目鰻の数が十分に集まると、夜見は八目鰻を捕まえるのを切り上げ、川の近くに置いた靴とマントを身に着けて人里へ向かった。

そして、夜見は人里に着くと昨日ミスティアが言っていた店を探す為に、とある日の記憶を掘り返しながら人里を歩いた。

夜見（確か、冬に空さんと来た時に……）

なんと、夜見が掘り返していた記憶とは以前の冬、空と一緒にプリズムリバー三姉妹のライブの為に人里に来ていた記憶だった。

実はあの日、夕飯を食べるために空と色々な店を見た際に、夜見は八目鰻と書かれた看板を見た記憶があったのだ。

夜見（この辺りに……あった）

するとどうやら、夜見の記憶は正確だったようでミスティアが言っていた、看板に八目鰻と書かれた店を見つけることができた。

しかし、今はまだ開店時間ではないのか店は開いていなかったのだが、夜見は出入口をノックすると扉を開けて店の中へと入った。

ミスティア「あれ？また開店時間じゃ……あ、黑夜さん」

夜見が店の中に入るとミスティアは昨日と同じ格好で店内の掃除をしていたが、ミスティアは夜見の姿を見ると掃除を中断して夜見に近付いた。

ミスティア「思ったより早く来てくれたんだね。それで、八目鰻はどのくらい捕つてきてくれたの？」

夜見「この中に入っている」

すると夜見は手に持っていた八目鰻を入れた筒をミスティアに渡し、ミスティアは渡された筒の中を覗き込むと満足げな顔で頷いた。

ミスティア「結構捕つてきたんだね。ありがとう、黑夜さん」

夜見「別に、ただ依頼をこなしただけだ」

ミスティア「いやいや、本当に助かったよ。あ、ちよつと待つててね」

そしてミスティアは夜見に待つように頼んで店の奥へ姿を消すと、5、6分ほど経つてから手に小さな袋と筒を手を持って戻ってきた。

ミスティア「はい、依頼の報酬だよ」

ミスティアはそう言つて依頼の報酬が入った小さな袋と筒を夜見に差し出すと、夜見は小さな袋は受け取つて筒の方は空气中に分解した。

するとミスティアは筒が目の前で空气中に分解されるのを見て小さな悲鳴を上げたが、夜見は振り返つて店の出入口の扉を開けた。

夜見「じゃあな、ミステリアさん これからも、こいしさんと仲良くしてくれ」

ミステリア「え？あ、う、うん わかり… ました？」

どうやら、ミステリアはこいしから夜見の能力は聞いていなかったようだが、夜見は特に話す必要は無いと判断して店から出た。

そして夜見はちゃんと扉を閉めると、少しずつ活気が溢れてきた人里の中を依頼状が貼られる掲示板を目指して歩き始めた。

しばらくして夜見は人里の掲示板の前に着いたのだが、今日は運が悪いのか掲示板には依頼状が貼られていなかった。

しかし無いものは仕方がないので夜見は今日は帰ろうと人里の門に向かうと、前から見たことのある人物が来て夜見に声を掛けた。

月夜「やあ、夜見くん 昨日ぶりだね」

夜見「ああ、そうだな 月夜さん」

## 第48話 確かに言った

今から帰ろうとしている夜見の前に現れた月夜は白いマントを身に着けた姿では無く、白い執事服を着こなしして手提げ袋を持っていた。

月夜「それで、君は一体何をしているんだい？」

夜見「依頼を終わらせて、帰ろうとしている最中だ」

夜見が月夜の質問に答えると月夜は口元を緩めてニヤリと笑い、夜見にある提案した。

月夜「それじゃあ、少し付き合ってくれないかな　メイド長に買い出しを頼まれたんだけど、あいにく店の場所がわからなくてね」

夜見「……ああ、別に構わないぞ」

月夜「良かった、助かるよ　それじゃあ早速、八百屋に案内してくれないかな」

夜見「ああ、わかった」

夜見は地霊殿に帰っても特にやることも無いので、月夜が出した御使いに付き合うという提案に乗ることにした。

そして夜見は振り返って再び人里の奥に向かって歩き出すと、月夜は夜見の横に並ん

で歩き始めた。

月夜「いやあ、偶然とはいえ君に会えて良かったよ　あのメイド長、まさか店の場所を言わないなんてね」

しばらく歩いてみると月夜は買い出しを頼んだ咲夜の愚痴をこぼし、夜見は咲夜が何故そんなことをしたのかを予想して言った。

夜見「おそらく咲夜さんは、何処に何があるかを把握させたかったんじゃないか？」

月夜「あゝ、なるほどね　これからも買い出しをさせるなら、何処に何があるか覚えさせた方がいいもんね」

夜見「それで、ちゃんと覚えているのか？」

月夜「まあ、軽くは覚えてるよ　お、八百屋発見」

夜見と月夜は話していると思ったらより早く八百屋の前に着き、月夜は八百屋の店頭にいる男性に近付いて声を掛けて何か話し始めた。

そして月夜は男性にお金を渡して店頭で並ぶ野菜を手提げ袋の中に入れて、上機嫌な様子で夜見のもとへ戻った。

月夜「いやあ、中々いい品揃えだね　こんなに良い野菜は久々に見たよ」

夜見「そうか、それは良かったな　それで、他には何を？」

月夜「いや、頼まれたのはもう買い終えたよ　野菜の少し不足してた分を買うように

頼まれただけだから」

夜見「そうか、じゃあ帰らせてもらおうぞ」

どうやら月夜の御使いはすぐに終わるようなものだったらしく、買い物に付き合い終えた夜見は踵きびすを返すと月夜に肩を掴まれた。

夜見「…なんだ？ 買い物には付き合い終えたぞ」

月夜「いやいや、何を言ってるの？」

月夜は夜見の言ったことを不思議に思った様子で首を傾げ、夜見の肩から手を離すと夜見に向けてこう言った。

月夜「付き合ってもらったのは頼まれた買い出しだよ？ つまりは御使いなんだから、君に付き合ってもらうのは「家に帰るまで」だよ」

夜見「… つまり、最初から帰るまでの話し相手になつてもらおうと？」

月夜「アハハ、察しいいいね その通りだよ」

夜見は月夜の言っていることは少し無理矢理な気がするが、月夜が確かに言ったのは御使いの事で、しぶしぶといった様子で月夜に言った。

夜見「… わかった、約束は約束だからな」

月夜「良かった、納得してくれて じゃあ帰ろうかって言いたい所だけど、何処に何があるかを把握するために、少し歩き回ろうか」

夜見「ああ、今後も月夜さんは御使いを頼まれるだろうしな」

そして夜見と月夜は人里の中を歩き回り、ある程度回り終えて紅魔館に戻ろうとする  
と、夜見は月夜にあることを聞いた。

夜見「月夜さん、紅魔館での初日はどうだった？」

月夜「ん、初日かい？初日は最初から結構大変だったよ　まず執事服に着替えると何  
百枚もの窓拭き　その後はお嬢の好みの紅茶の作り方、お嬢妹の遊び相手、仕事をサ  
ボった子どもメイドの搜索とか　最初は普通、見学させるもんでしょ」

夜見「まあ、習うより慣れろってことだろう　紅魔館での仕事量は多いだろうからな」

月夜「いやいや、多量って量じゃないよ　てか何でメイド長は…」

すると月夜は口から紅魔館での初日の生活の愚痴を大量に出し始め、夜見は月夜から  
出続ける愚痴をしつかりと聞いて相槌を打っていた。

そして月夜は愚痴をひたすら出し続けている中で、ある愚痴が夜見を反応させた。

月夜「しかも何故か男装させられるし、妖精メイドは使えないどころか邪魔をする方  
が多いし…」

夜見「…ん？月夜さん、さっき何て言った？」

月夜「え？だから、妖精メイドが仕事の邪魔を…」

夜見「違う、その1つ前　男装って言わなかったか？」



月夜「ん？いや、執事服なんだから男装になるでしょ」

月夜は当たり前かのように執事服を着ていることを男装と言ひ、それを聞いた夜見はまさかと思つて月夜にある確認をした。

夜見「まさか、月夜さんは女性なのか？」

月夜「・・・いや、今更何を言つてるの？どう見たつて女でしょ」

夜見（いや、どう見たつて・・・）

そして夜見は月夜をよく見てみると月夜の睫毛まつげは少し長く、指は男性と違つて細く綺麗で女性によく当てはまるような特徴が見られた。

月夜「・・・まさかとは思うけど、俺のことを男だと思つてた？」

どうやら月夜は普通に女性として見られていたと思つていたらしく、夜見に男性として見ていたのかどうかを少女の声で聞いた。

そして夜見は女性かと聞いてしまった以上、嘘をついてもばれてしまうので首を縦に振つて正直に答えた。

夜見「すまない、正直男性だと思つていた」

月夜「・・・ぷつ、アハハ！やつぱり!?いつも男みたいな言動してるし、勘違いするのは仕方ないよ！」

だが月夜は別に男性と勘違いされたことを気にしている様子は無く、寧ろ笑いながら

勘違いをするのは仕方がないと言いだめた。

しかし夜見の方は勘違いをしたことを気にしているようで、誠意を込めた謝罪の言葉を月夜に送った。

夜見「……本当に、すまない」

月夜「いやいや、別にいいって 俺も勘違いさせちゃってたし、お詫びとして女つて証拠を見せてあげようか？」

月夜はニヤニヤと笑いながらそう言うのとネクタイを緩めて襟元を指で引つ張り、胸元に空間を作ると反対の手でその空間を指差した。

すると夜見は月夜のそんな行動に呆れ、ため息をついて立ち止まると月夜も同様に立ち止まった。

夜見「……公衆の面前でそんなことをするな、恥ずかしくないのか？」

月夜「君の前だったら、別に？」

夜見「……はあ、何を馬鹿なことを」

夜見は月夜の返答にも呆れてしまつて再びため息をつき、月夜へ手を伸ばすと月夜の手を掴んで襟元を引つ張っている指を外した。

更に夜見は丁寧にも月夜が緩めたネクタイを締め直してあげると、月夜は一瞬驚いた顔をするがニヤニヤと笑い直した。

月夜「ふふっ、いいのかな？折角のチャンスだったのに」

夜見「何がチャンスだ、そもそも興味なんか無い」

月夜「ふくん、紳士なんだね」

夜見「別に、それでも無い」

そして夜見は素っ気無い返事をする。と門の方向へ向き直って歩を進め、月夜も一瞬遅れて夜見と同じように歩き出す。と夜見の横に並んだ。

しばらくして夜見と月夜が門に着いて人里から出ると、夜見は紅魔館がある方向へ進もうとしたのだが月夜に腕を掴まれた。

夜見「紅魔館に戻るんじゃないのか？」

夜見は腕を掴まされると振り向いて月夜に確認を取ったのだが、月夜は紅魔館がある方向とは違う方向に指を差しながら言った。

月夜「そこにバイク置いたんだ、一緒に乗ろうよ」

夜見「… あったのか」

夜見は月夜が指差した方向を見てみると本当に月夜のバイクが置いてあり、夜見は歩く方向を月夜のバイクに変えると月夜は腕を放した。

すると月夜は夜見より先にバイクの元へ向かって鍵でエンジンを掛け、バイクから少し離れると夜見にバイクに乗るように促した。

月夜「さあ、どうぞ」

夜見「…… ああ」

そして夜見は月夜に促されるままバイクに乗ると月夜は後ろに乗り、夜見は月夜が身体に腕を回してきた所でバイクを発進させた。

それからしばらく経つと夜見と月夜は既に湖を通り過ぎており、あと少しで紅魔館の門に着く所まで来ていた。

そこで夜見は、紅魔館の門の前で美鈴以外にもう一人ある人物がいることに気付いた。

夜見（あれは…… 咲夜さん？）

その人物とは紅魔館のメイド長を務めている咲夜であり、手に懐中時計を持って時間を確認しているようだった。

そして美鈴はバイクに乗っている人が夜見と月夜だということに気付くと、懐中時計を見ている咲夜に声をかけた。

美鈴「咲夜さん、帰ってきましたよ」

咲夜「ええ、わかってるわ」

美鈴「でも、何故か黒夜さんも一緒なんですよ」

咲夜「黒夜様が？」

すると咲夜は顔を上げたがバイクは既に数m辺りまで来ており、夜見がブレーキをかけるその後ろに乗っていた月夜が降りた。

月夜「やあ、メイド長　ちゃんと買ってきたよ」

そして月夜はそう言いながら咲夜に手提げ袋を差し出したのだが、咲夜がその手提げ袋を受け取った瞬間に何かを叩く音が鳴った。

すると咲夜の手には手提げ袋ではなく金属製の丸いおぼんを持っており、月夜はその場でうずくまって手で頭を抑えていた。

月夜「いつ！　つつ……　なんで、いきなり叩くんさい？」

咲夜「叩かれる理由は、貴方が一番わかっているでしょう？」

月夜「え、理由？……　夜見くんを連れて来るのは駄目だったとか？」

月夜はそう言いながら頭からゆっくり手を離して立ち上がったのだが、また何かを叩く音が鳴ると再びうずくまって頭を抑えた。

そして咲夜は月夜を怒りの眼差しで見下ろしながら、月夜の頭を叩いた理由を言った。

咲夜「正解は、黒夜様に苦勞をかせかせたからよ」

月夜「……　え？　いやいや、別に苦勞ってほどじゃないでしょ」

月夜がそう言って顔を上げると咲夜は能力で時を止めておぼんを振り下ろすが、おぼ

んは月夜に当たる寸前に夜見に腕を掴まれて止まった。

咲夜「なっ!?!く、黒夜様!?!」

夜見「咲夜さん、流石に「な、何故!?!どうして黒夜様が動いているのですか!?!」

咲夜は時が止まっている中で黒夜が動いていることに驚くと、思わず夜見の言葉を遮ってどうやって動いているのかを聞いた。

すると夜見は咲夜に言葉を遮られたことに対してため息をついたが、咲夜の腕を放すと何故動いているのかを簡潔に言った。

夜見「俺の能力だ」

咲夜「の、能力ですか?でも確か黒夜様の能力は……まさか!?!」

夜見「ああ、前の宴会で見せた能力の無効化だ。霊力で自身を覆って咲夜さんの拵げた霊力を乱せば、咲夜さんの能力の影響を受けない」

咲夜「なるほど、そういうことだったのですか」

そして咲夜は夜見が止めた時の中で動ける理由に納得して頷いていると、夜見は先程咲夜に遮られてしまった言葉を言った。

夜見「それに咲夜さん、流石に何度も叩くのはやりすぎだと思う」

咲夜「いえ、苦勞をかけさせたのは事実です。それも、お嬢様の友人である黒夜様にですし……これくらいは当然です」

しかし生真面目な性格の咲夜は先程のことを当然だと言い、夜見は咲夜を納得させるために人里のことを簡潔に話した。

夜見「別に俺自身苦勞は感じてない、そもそも御使いは自分の意思で付き合ってたんだ」

咲夜「……え、ご自身の意思ですか？」

夜見「ああ、そうだ」

すると夜見は御使いは自分の意思で付き合つたと言つたのだが、もちろん咲夜は御使いに付き合つた経緯などは知らない。

なので夜見と咲夜の自分の意思で付き合つたの捉え方が合う訳が無く、夜見と咲夜の思っていることがズレてしまった。

夜見（御使いに付き合つてと言われて、俺は「自分の意思」で了解したからな）

咲夜（まさか黒夜様が「自分の意思」で御使いを手伝つてくださるなんて…… まったく、咲希は見習って欲しいわ）

こうして夜見の思つた通りでは無いが咲夜は夜見の言葉に納得すると、能力を解除して止めていた時の流れを元に戻した。

すると月夜と美鈴は夜見が一瞬で移動したように見えて驚いていたが、咲夜は月夜の前に再び立つと月夜を見下ろしながら言った。

咲夜「今回は黒夜様の厚意に免じて許してあげるわ、次はないわよ」

そして咲夜は姿を消したが月夜と美鈴は一体何の事かよくわからず、そもそも夜見が一瞬で移動した理由も気になっていた。

けれど月夜と美鈴はなんとなく夜見が何かをしてくれたのだろうと察し、月夜は立ち上がると夜見にお礼を言った。

月夜「えつと……君が何かしてくれたんでしょ？ありがとうございます」

夜見「別に、大したことはしてない それと長居は無用だから、そろそろ帰らせてもらうぞ」

美鈴「あつ！ちよつと待つてくださいい！」

夜見「ん、どうした？」

夜見は帰ろうとしたのだが美鈴に声を掛けられて引き止められると、美鈴はとある人物から預かっていた伝言の内容を話し始めた。

美鈴「実はお嬢様から伝言を預かっていまして、「紅魔館に来たら私の部屋に来るように」と」

夜見「ああ、わかったが……何故帰り際に言うんだ？別にバイクを止めている時に言えたと思うんだが？」

夜見はそう言つて門の近くに止めたバイクの方をチラリと見ると、美鈴は少し申し訳なさそうな様子で答えた。



美鈴「あはは、じ、実は、咲夜さんの怒っている様子に釘付けになってしまつて、つい……す、すみません」

夜見「……まあ、別に伝われば構わないがな」

すると夜見は美鈴に近付いて美鈴の帽子を取ると頭を撫で始め、美鈴は突然撫でられたことに驚いて小さな悲鳴を上げた。

美鈴「きゃ！く、黒夜さん!? 一体何を……」

夜見「ん、嫌だったか？」

美鈴「い、いえ、別に嫌ではないですけど」

夜見「そうか」

そして夜見は美鈴をしばらく撫でた後に取った帽子を被せると、美鈴は俯うついて顔を耳まで赤くなるほど真つ赤にしていた。

夜見「じゃあ、そろそろレミアさんに会つてくるよ」

美鈴「あ……は、はい、行つてらっしゃい、黒夜さん」

しかし夜見はその事に何故か気付かないで門を開けると、紅魔館の中に入りレミアアの部屋へと真つ直ぐに向かった。

ちなみに月夜は美鈴が夜見に声を掛けた時には姿を消しており、恐らくは紅魔館の中へ能力を使って戻つていったのだろう。

しばらくして夜見はレミリアの部屋に着くと扉をノックしようとした瞬間、扉の向こうから何やら誰かの騒がしい声が聞こえてきた。

だが、その騒がしい声は何か楽しんでいるような声であり、夜見は不思議に思いながら扉をノックしてから扉を開けた。

夜見「レミリアさ」やった〜！また私の勝ち〜♪」

レミリア「：：： おかしいわね、なんで全然勝てないのかしら」

パチュリー「レミイは昔から、こういうのには運が無いわね」

どうやら騒がしい声の正体はフランドールだったらしく、レミリア、パチュリー、フランドールは白いテーブルを囲う様に座っていた。

そして3人はどうやら夜見が来ている事には気付いていないようで、夜見は仮面を外すと3人の元に近づいて声を掛けた。

夜見「：：： 何やってるんだ？」

レミリア「えっ!?!や、夜見!?!」

フランドール「あ、黒夜だ！遊びに来たの？」

パチュリー「あら、来ていたのね」

すると3人は一斉に夜見の方を向いて各々反応をしていたが、夜見はテーブルの上に見覚えのあるカードが置かれていた。

夜見「トランプか……」

フランドール「あ、黑夜も一緒にやる？ 楽しいよ？」

フランドールはそう言うのとテーブルに置かれたカードを集め始めたが、夜見は首を横に振って断つてここに来た理由を言った。

夜見「いや、俺はレミリアさんに会いに来ただけだ」

フランドール「もく！ いつもお姉様の事ばかり！」

パチュリー「レミイ、邪魔なら席を外すわよ？」

レミリア「わ、私に…… 会いに!？」

するとフランドールは少し怒ってふくれっ面で文句を言い、パチュリーは気を使ってレミリアに席を外すかどうかを聞いた。

しかし美鈴に伝言を預けていた筈のレミリアは驚いており、その様子を夜見は不思議に思つてレミリアに聞いた。

夜見「レミリアさん、美鈴さんに伝言を預けただろ？」

レミリア「…… え、美鈴に？ そんなことした覚えは無いわよ？」

夜見「『紅魔館に来たら私の部屋に来るように』と、伝言を預かったらしいが？」

レミリア「えっ？」

そしてレミリアは夜見の聞いた伝言の内容を聞くと顔を徐々に赤くして、夜見に対し

て素早く背を向けると両手で顔を覆った。

レミリア（夜見が私に会いたいと思ったから来たって、勘違いしちゃったじゃないの！は、恥ずかしいわ！しかも、なんで私が今日言った内容をそのまま伝えてるのよー！）

夜見（…急にどうしたんだ？）

夜見は不思議に思いながらフランドールとパチュリーの方を見たのだが、2人も同じことを思っているらしく3人は顔を見合わせて首を傾げた。

レミリア（と、とりあえず、落ち着かないと！このままだと勘違いしてたって、バレル可能性があるわ！）

しばらくするとレミリアは勘違いがバレるのを恐れ、顔を上げて深呼吸をすると赤くなった顔は少しずつ戻り始めた。

そしてレミリアは完全に顔が元に戻ると再度深呼吸をして夜見の方を向き、伝言についてパツと思い付いた嘘で答えた。

レミリア「え、ええ、確かに言ったわね　でも、言ったのは随分前だったから忘れてたわ」

夜見（随分前？昨日も来たの？…いや、来る時には毎度用があったから言わなかっただけか）

すると夜見は伝言のことを自己解釈するとレミリアの嘘をあつさり信じ、レミリア

は夜見を騙す事に成功することは出来た。

夜見「そうか、そうだったんだな。それで、何の用で俺を呼んだんだ？」

しかし夜見には一体何の用で呼ばれたのかという疑問は残り、それについて訊かれたレミリアはしどろもどろになりながら答えた。

レミリア「えっ!? あ、用は、ああ、えっと……その……あ、そう！ たまには遊びまじょうって思ってたのよ！」

夜見「遊び? ……ああ、だからトランプで遊んでたのか」

レミリア「そ、そうよ、夜見が来る前に練習をしたのよ」

フランドール「え? いや、私が遊ぼって誘「フラン! 夜見も入れてトランプで遊びましょうか。あ、それなら椅子が必要ね」

フランドールは遊びについて何か言いかけたのだが、レミリアはそれを早口で遮るといつもより高い音で指を鳴らした。

するとレミリアの横にすぐ咲夜は現れず、少し遅れてから面倒くさそうに立っている月夜が現れた。

月夜「お嬢、一体何の用だい?」

レミリア「月夜、夜見用に椅子をもう一つ用意しなさい」

月夜「え、あれ? 帰ってなかったんだ?」

月夜は夜見の姿を見ると不思議に思ったようにそう言ったかと思うと、テーブルの空いている所に月夜と椅子が2つ現れて片方に月夜が座った。

月夜「まあ、いいか さあ、どうぞ」

夜見「ああ、すまないな」

そして夜見は月夜が用意してくれたもう片方の椅子へ回っていると、月夜は手の甲に顔を乗せるように頬杖をつけてレミリアに尋ねた。

月夜「あ、お嬢 仕事終わってるから、俺もGAMEに参加していいよね？」

レミリア「ええ、構わないわ」

夜見「それで、一体何をするんだ？」

すると椅子に座った夜見はレミリアに一体何を遊ぶのかを聞いたのだが、トランプを持つているフランドールが手を挙げた。

フランドール「はいはい、ババぬきがやりたーい！それかジジぬき！」

パチュリー「フラン、ババぬきはさつきやつたじゃない 私は神経衰弱か七並べがいいわ」

フランドール「えー！頭使うのはやりたくない」

パチュリー「ババぬきかジジぬきは簡単すぎるわ もっと難しいのでいいじゃない」

レミリア「……夜見と月夜は、何かやりたいのはあるかしら？」

レミリアはフランドールとパチュリーが言い合っているのをよそに、夜見と月夜にやりたい遊びを尋ねるとそれぞれこう答えた。

夜見「特には無い 何でも構わないぞ」

月夜「うん、俺はP O K E Rがやりたいかな」

夜見は特にやりたいものは無く、月夜はポーカーがやりたいと言ったのだが、夜見以外の3人はポーカーという言葉に反応した。

レミリア「…ポーカー？」

パチュリー「知らない遊びね」

フランドール「ぼーかー？ 楽しいの？」

月夜「…え、知らないの？」

レミリア「ええ、知らないわね 一体どんな遊びなのかしら？」

どうやらレミリア達はポーカーという遊びを知らないらしく、レミリアが月夜に説明を求めると月夜はフランドールに手を差し出した。

月夜「お嬢妹、ちよつとトランプを貸してくれないかな」

フランドール「うん、いいよ」

月夜「ありがとう、お嬢妹 それじゃあ、ルールは…」

そして月夜は実際にトランプを使ってポーカーのルールを説明すると、レミリア達は

ポーカーの大体のルールや流れを理解した。

レミリア「なるほど、中々面白そうな遊びじゃない。パチエとフランはどうかしら？」  
パチユリー「そうね、ルールが単純でやりやすそうだわ。やったことのない遊びだし、ポーカーでいいんじゃないかしら」

フラン「私もポーカーがいい！あんまり頭を使わなくていいし！」

レミリア「夜見はどう？ポーカーで構わないかしら？」

夜見「ああ、別に構わない。それに、多数決的に考えてポーカーになるだろうしな」

月夜「じゃあ、やるのはPOKERで決まりだね。POKERは種類ごとにルールがあるけど、今日は俺の考えた簡単なルールでやろうか」

こうしてトランプでの遊びはポーカーに決まり、ルールは月夜の考えたオリジナルのルールになった。

そして月夜の考えたオリジナルのルールは

1, 全員にカードが5枚配られるので各自、他の人に見られないように手札を確認する。

2, 手札から要らないカードを選んで裏向きに捨てて、中央に置かれた山札から捨てた枚数分カードを引く。なお、捨てられたカードは次の人の番になると山札に混ぜられる。



3, 手札を確認して要らないカードがあれば、もう一度先程と同じ手順でカードを交換することが可能。

4, 手札を全員で公開し、役が1番強い者が勝ち。先に5回勝った者が優勝。といった実に単純なルールとなった。

月夜「それじゃあ、カードを配るよ」

そして月夜は全員に5枚ずつカードを配ると残りのカードを中央に置き、夜見達は配られた5枚の手札を確認すると月夜が口を開いた。

月夜「じゃあ、手札を捨てる順番はお嬢、お嬢妹、図書館長、俺、夜見くんが進めようか」

レミリア「私からね まあ、普通に考えたらこうかしら」

するとレミリアから順番に1人ずつ手札を交換していき、全員が2回目の交換を終えると月夜が手札を明かす合図を出した。

月夜「それじゃあ、全員手札を公開しようか せーのっ」

月夜の合図で全員が手札を公開すると各自の役は

レミリア：ツーパー

フランドール：スリーカード

パチュリー：ワンペア

月夜：フラッシュ

夜見：ハイカード

という結果になっており、第1ゲームの結果は月夜の勝ちとなった。

フランドール「あく、勝ったと思っただのに」

パチュリィ「…月夜、随分と運が良いわね」

月夜「ふふ、GAMEの運はいいんだ」

夜見「…」

レミリア「夜見、大丈夫かしら？」

夜見は第1ゲームが終わると怪訝な顔で自分の手札を見ており、その様子をレミリア

は心配して声を掛けると夜見は顔を上げた。

夜見「ん？別に大丈夫だが、どうしたんだ？」

レミリア「随分と怪訝そうにしてたから、少し気になって…」

夜見「ああ、そうだったのか すまないな、心配をかけて」

月夜「よし、それじゃあ第2 GAMEを始めようか」

そしてポーカーは順調に続いたのだが、月夜があと1回勝てば優勝という所で全員の

勝利回数は

レミリア：3回

フランドール：3回

パチュリー：2回

月夜：4回

夜見：0回

上記の通り、夜見が全く勝っていない状況になっていた。

夜見「：。」

フランドール「：。ねえ、黒夜？」

パチュリー「黒夜？えつと：。」

レミリア「：。夜見、本当に大丈夫？」

月夜「いや、流星にここまで連続でハイカードって：。運悪過ぎない？」

レミリア達は夜見の異常な連敗を可哀想に思つて各々声をかけたのだが、夜見はこんな不利な状況で月夜にある提案をした。

夜見「月夜さん、1つルールを追加していいか？」

月夜「え？う、うん、いいよ」

夜見「じゃあ、ルール追加だ」

そして夜見の出した追加ルールとは

5、優勝者は最下位の者に、何か1つ命令できる権利を得る。

というものだった。

レミリア・フランドール・パチュリー・月夜「…え？」

夜見「…何か問題か？」

するとレミリア達はこのルール追加にはもちろん目を点にしていたが、何故か夜見はこの不利な状況に対して平然としていた。

月夜「いや、問題っていうか…」

フランドール「黒夜、今の状況わかってるよね？」

パチュリー「黒夜、自分で自分の首を締めているようなものよ？」

レミリア「夜見、全然勝ってないけどいいの？」

そしてレミリア達は心配そうに本当にいいのか夜見に聞いたのだが、夜見は一拍置いてからレミリア達にこう言った。

夜見「別に勝ってないだけで、勝てないわけじゃない さあ、始めよう」

夜見がそう言うのとレミリア達は夜見の言う通りにポーカーを再開したが、レミリア達は一切手加減をするつもりはなかった。

しかし夜見は先程の連敗を巻き返すかのような勢いで、いきなり3連勝を果たし始めた。

レミリア「さ、3連勝!？」

フランドール「す、凄く凄く！もうお姉様と私に追いついたよ！」

パチュリール「本当に凄いわね、まるでさっきまでの負けが嘘みたいだわ」

月夜（この手札って……いや、そういうえば最初に…… ああ、そういうことだったのか）

そしてレミリア達が驚いている中、月夜だけがある事に気付くと椅子を後ろに傾け、2本の脚でバランスを保ちながらこう言った。

月夜「これは勝てる気がしないや 悪いけど、俺はGAMEを降りさせてもらうよ」  
フランドール「え、やめちゃうの？」

パチュリール「あと一歩なのに、棄権？」

レミリア「あら、棄権するのね その場合貴女はどうなるのかしら？」

月夜「え？ああ……じゃあ俺は最下位でいいよ あと待ってても暇だから、俺が  
デューラーになるよ」

月夜は急に勝てる気がしないと言うとゲームを降り、自ら最下位になる代わりに  
デューラーとして参加し始めた。

すると月夜は山札を手にして4人に手札を配っている途中で、配られた手札を見てい  
る夜見に声を掛けられた。

夜見「……本当に降りて良かったのか？」

月夜「いやいや、君がいる時点で勝つのは無理なんだよ さあ、始めるよ」

そして月夜が手札を配り終えて4人は順番に手札交換を済ませると、この回も夜見は当たり前であるかのように勝利した。

フランドール「凄ーい！あと1回で優勝だね、黒夜！」

夜見「ああ、そうだな」

パチュリー「……ねえ、レミイ」

レミア「……ええ、流石にこれは可笑しいわ でも夜見は、イカサマなんて真似はしないわ」

パチュリー「ええ、それは私もわかってるわ だから不思議なのよ」

夜見が4連勝をするとフランドールは興奮してはしゃいでいたが、レミアとパチュリーは流石に可笑しいと感じていた。

しかし夜見の真面目な性格からイカサマをしてとは思えず、連勝をする夜見がただ不思議で仕方がなかった。

夜見「よし、次が最後だろうな」

フランドール「黒夜、このまま連勝で勝たせないよ！次は私が勝つんだから！」

レミア・パチュリー（この調子だと、夜見（黒夜）が勝つんでしょね）

月夜「それじゃあ、さっさと終わらせませるか」

夜見が次が最後だと言うのに対してフランドールは絶対に勝たせないと意気込むが、レミリアとパチュリーは結果が予想できていた。

そして結果は読者様もわかっているだろうが、もちろん夜見が勝つて5連勝を果たすと同時に優勝者となった。

夜見「残念だったな、フランドールさん」

フランドール「うう、負けたく！」

フランドールは負けると机に突つ伏して悔しがっていたのだが、突つ伏したまま顔を上げると夜見にある事を聞いた。

フランドール「ねえ、なんでいきなり運が良くなったの？」

ある事とは夜見がいきなり5連勝をし始めた事で、それはレミリアとパチュリーも気になっていた事だった。

パチュリー「まあ、普通はあり得ないわよね」

レミリア「明らかに不自然だわ 夜見、一体何をしたの？」

夜見「ああ、それは「簡単な話だよ、元々夜見くんは勝ててたんだよ」

レミリア「……. どういうことかしら？」

すると夜見は急に勝ち始めた理由を聞かれた説明をしようとしたが、その瞬間に月夜が口を開いて割り込んできた。

そしてレミリアは月夜にどういふことかと聞くと、月夜は説明を続けた。

月夜「そもそも夜見くんは、運が良すぎるんだよ。だから最初から誰にも負けない役が揃ってたけど、そのままだと直ぐにGAMEが終わっちゃうでしょ？だからあえて役を崩してたんだよ」

レミリア「……夜見、月夜の言う通りなのかしら？」

レミリアはただ運が良かっただけという信憑性の無い説明を受けると、夜見にその信憑性の無い説明が本当かどうかを聞いた。

夜見「……ああ、全部月夜さんの言う通りだ。それに、確かに言った筈だ「別に勝ってないだけで、勝てないわけじゃない」って」

レミリア「……確かにそうね、そうでなければそんなことは言えないわ」

パチュリィ「思い返してみれば、これがあのカードだったら負けてたって組み合わせのハイカードばかりだったわね」

フランドール「じゃあ、それに気付いたから月夜は途中でやめたの？」

月夜「そうだよ、続けても意味が無いって思ったんだ」

月夜はそう言いながら手元ではトランプで玩もてあそんでいたのだが、フランドールは身体を起こすと月夜に言った。

フランドール「でも、途中で抜けちゃったから最下位だよな？だったら、黑夜の命令



を一つ聞かなくちゃいけないね」

パチュリー「：。そういえば、そんなルールを追加してたわね 黒夜の5連勝の事で、すっかり忘れていたわ」

レミリア「夜見、何か命令は思い付いたかしら？」

夜見「ああ、もう決まっている まあ、誰が最下位でも同じ命令をしようとはしていいだけだな」

月夜「それで？俺に一体どんな命令を下すんだい？」

そして月夜はトランプを遊びながら一体どんな命令をさせるのかを聞くと、夜見はベランダへ出るガラスの扉を指差した。

夜見「あれを開けてくれるだけでいい」

月夜「え、それだけ？」

夜見「ああ、それだけだ」

レミリア達は夜見のそんな簡単な命令を疑問に思ったが月夜は言われた通り、椅子から立ち上がるとガラスの扉を開けた。

月夜「これでいいの？」

夜見「すまないな、月夜さん」

すると夜見は立ち上がってベランダに出ると手すりに手を掛けて、今にもベランダか

ら飛び降りようとしているように見えた。

月夜「えつと：．夜見くん？ 一体何をしようとしてるんだい？」

夜見「ああ、そろそろいいかなくなって思ってたな」

夜見はそう言つて振り返ると空気中に散らばっている血を集めて、背中に真つ赤で大きな血の翼を作り出した。

レミリア「え？まさか：．」

夜見「じゃあな、とても楽しかったよ」

レミリア「え!?!ちよつと待：．」

そしてレミリアは夜見を呼び止めようと立ち上がったのだが、それと同時に夜見は手すりを乗り越えて翼を羽ばたかせ帰ってしまった。

しかしフランドールは立ち上がったままのレミリアに向かって、こんなことを言い出した。

フランドール「あく残念だったね、お姉様 だーい好きな黒夜が帰っちゃって」

レミリア「ちよつ!?!フ、フラン!?!貴女何を言つて!?!」

月夜「え？お嬢つて夜見くんのが好きなの？」

レミリア「なつ!?!そんな訳「そうだよ！黒夜が帰っちゃうと、お姉様はしばらくため息ばっかりついているの！」フ、フラン！」

パチュリー「確かにそうね よく黒夜が飛んでいった空を見てるわ」  
レミリア「パチエ!? 貴女まで何を言ってる…」

夜見（そーいや、地霊殿に帰っても特にやることないな… まあ、こいしさんに手  
伝って貰って動物と触れ合う練習でもするか）

## 第49話 あの時と同じ気持ち

夜見「ただいま… あれ？」

地霊殿に着いた夜見は玄関を開けて中へ入ると、誰もいないエントランスを見て首を傾げた。

いつも出迎えてくれるこいしが、今日は珍しくいなかったのだ。

夜見（まあ、今日は帰るのが早かったから仕方ないな）

しかし、夜見は特に気にせずに自分の部屋に戻るとマントと仮面、夜刀と白刀を机の上に置いて部屋を出た。

そして夜見は目の前のこいしの部屋の扉をノックしたのだが、部屋の中から返事は返ってこなかった。

夜見（あれ、いないのか？）

すると夜見は再度扉をノックをして部屋を覗いたが、夜見の予想通り部屋の中には誰もいなかった。

夜見（部屋にいない… 仕事部屋で手伝いか？）

そして夜見は次にこいしがいそうな仕事部屋へ向かい扉をノックすると、扉の向こう

側からはさどりの声が聞こえてきた。

さどり「入っていいですよ」

夜見「ああ、仕事中にすまない」

夜見が扉を開けて部屋に入るとさどりは眼鏡をかけて書類を書いており、夜見は部屋を見渡したがこいしの姿は見当たらなかった。

さどり「おかえりなさい、黑夜さん 今日早かったですね」

夜見「ああ、たがいま さどりさん、すまないがこいしさんを知らないか？」

さどり「こいし……ですか？ちよつと待っててください」

さどりは夜見にこいしの居場所を聞かれると、ペンを机の上に置いて目を閉じた。

そしてさどりはサードアイを両手で優しく掴み、何かブツブツと呟き始めた。

さどり「これは……違う、これも違う これは……いや、お隣の声ね この声は

?…… あ、これかしら？」

しばらくして、さどりはこいしの居場所がわかったのかサードアイから手を離すと目を開いた。

さどり「黑夜さん、こいしは今5番のペットの部屋にいます」

夜見「心の声でわかるのか、すごいな」

さどり「いえいえ、大したことじゃありませんよ それより早く行かないと、こいし

が別の場所に移動してしまうかもしれませんよ?」

夜見「ああ、そうだな　ありがとう、さとりさん」

さとり「ええ、どういたしまして」

そして夜見は部屋を出ると1階へ降りてペットの部屋の方へ向かい、扉に5と書かれた部屋の前に着くと扉をノックをした。

しかし、扉の向こうからは返答は無かったのだが、夜見は再度ノックをして扉の向こうへ声をかけた。

夜見「こいしさん、いるだろ? 能力でこいしさんの妖力を感じ取ってるからわかるぞ」  
そう言つて夜見は扉の向こうから返答を待ったが一切返つてくる様子は無く、夜見はため息をつくどドアノブに手を掛けた。

夜見「入るぞ、こいしさん」

そして夜見が扉を開けると部屋の中にはライオンが数頭おり、こいしは中央で寝そべっているライオンに凭もたれかかるように座っていた。

すると、こいしは夜見に気付くと頭をゆっくり動かし夜見の方を見たのだが、夜見を映している目は覇気が無かった。

夜見「こいしさん、どうしたんだ?」

こいし「...」

夜見「調子でも悪いのか？」

こいし「……」

夜見は周りにいるライオンに臆することなくこいしに声を掛けるが、こいしは反応することなくただ夜見をジツと見つめていた。

夜見（……本当にどうしたんだ？）

すると夜見は元気が無いように見えるこいしが心配になつてきて、こいしに近付こうとするとライオンが一斉に夜見を睨みつけた。

そして、中央以外のライオンは唸り声を上げ始め、姿勢を低くして夜見に向けて威嚇を始めた。

夜見（なんだよ、うるさいなあ）

しかし夜見はライオンの威嚇を無視して1歩踏み出すと、夜見に1番近かったライオンが飛び掛かって床に押し倒した。

だが、ライオンは夜見を床に押し倒すと前脚で押さえつけるだけで、特に噛み付いてくる様子は無く唸り声を上げ続けていた。

ライオン「グルルルル」

夜見「……本っ当、うるさい」

こんな状況で夜見は未だにライオンの唸り声がうるさいと思っており、目を閉じて息

を吐くと目の前のライオンを睨みつけた。

夜見「うるせえんだよ、クソ猫が」

すると夜見は殺気がこいしに当たらないように放ち始め、夜見をpushさえていたライオンは唸り声を小さくして後ろへ退いた。

そして夜見は立ち上がって他のライオンも殺気で退かせると、殺気を収めてこいしに近付いて話し掛けた。

夜見「ただいま、こいしさん」

こいし「…」

夜見「とりあえず、一緒にこいしさんの部屋に行こうか」

こいし「…」

そう言つて夜見はこいしを抱き上げたがこいしは何一つ反応せず、されるがままに抱き上げられている状態だった。

そして夜見はこいしを抱き上げたまま部屋を出ると、こいしに話し掛けながらこいしの部屋へ向かった。

夜見「こいしさん、今日はあまり仕事が無かったんだ」

こいし「…」

夜見「それで早く帰れたから、後で動物に触れる練習に付き合ってくれないか？」



こいし「…」

夜見（やつぱり反応は無いか… 一体どうしたんだ？）

夜見はこいしに色々話しかけてみたのだが反応は貰えず、こいしが無反応の状態のまま部屋の前まで来てしまった。

すると夜見は部屋に入ってベッドにこいしを座らせると、こいしの正面に椅子を置いて座った。

夜見「こいしさん、なんで何も喋ってくれないんだ？」

こいし「…」

夜見「何か嫌な事でもあったのか？それとも、喋れない理由でもあるのか？」

こいし「…」

夜見「… こいしさん、お願いだから何か返事をしてくれないか？」

こいし「…」

夜見はこいしに喋らない理由を聞いてみたが何も反応してくれず、返事をして欲しいとお願いをしても何も反応してくれなかった。

そして夜見はどうすればこいしが反応してくれるのかを考えていると、部屋の扉が開いて向こう側からさとりが顔を出した。

さとり「黒夜さん、少しいいですか？」

夜見「ん？ああ、構わないぞ こいしさん、少し待っててくれ」

夜見はさとりと呼ばれると椅子から立ち上がり、こいしの頭を撫でて部屋から出るとさとりが部屋の扉を閉めた。

さとり「すみません、一応こいしには聞こえないように場所を移しましょう」

夜見「ああ、わかった」

さとりはそう言いながら歩き出したので夜見は後に付いていくと、さとりは仕事部屋に中へ入ったので夜見も続けて入った。

するとさとりは部屋に入ると一瞬だけ顔をしかめるが、さとりは何事もなかったかのように話し始めた。

さとり「ありがとうございます、黑夜さん それで話があるんですが、実は先程からこいしの心の声がうるさいんです」

夜見「こいしさんの心の声がうるさい？」

そしてさとりの話の内容は心の声のことだったので夜見は思わず聞き返すと、さとりは少し申し訳なさそうな様子で俯うつむいた。

さとり「はい、そうなんです… つと言つても困りますよね すみません、さつきの話は忘れて下さい」

どうやらさとりは話をしてみたものの、夜見にとって心の話の言われても困るよ

うな話だったと思っっているようだった。

そして夜見は聞かされた内容を忘れて欲しいと言われたが、すぐに忘れられるはずもなく少し困った顔をしながらさとりに言った。

夜見「いや、忘れろって言われても……そういう訳にもいかないだろ」

さとり「……まあ、そうですね。ついさつき話した事を忘れて下さいだなん「いや、そういう事じゃなくてな」……え？ひゃあ!？」

すると夜見はさとりの言葉を急に遮って俯いているさとりの頭を撫で始め、そのまましゃがんでさとりと目線の高さを合わせた。

夜見「さとりさんが困ってるのに放っておけるわけないだろ、一緒にどうにかできないか考えよう」

さとり「い、いや、でも……私が我慢すればいいだけの話なんですよ？それに黒夜さんは心が読めないのに、心の声の話をしても絶対に困るに決まっています」

夜見「ああ、確かに俺は他人の心を読むことはできない。でも、話に困るかどうかは別だろ？」

さとり「た、確かにそうですけど！私は黒夜さ「それに……」

そして夜見は再びさとりの言葉を遮ると今度は両手でさとりの両肩を掴み、さとりの目をジッと見つめながら言った。



夜見「ん？さとりさん、さつき何か言ったか？」

さとり「紛らわしいですよって言ったんです！」

夜見「…え？」

するとさとりはいきなり大声を出したかと思うと肩で息をしていたのだが、夜見がいきなりの大声に呆然としている様子を見て我に返った。

さとり「あ！す、すみません！いきなり大きな声を出してしまつて 大丈夫ですか？耳が痛くなつたりしてませんか？」

夜見「え？あ、ああ、大丈夫 少し驚いたただけだ」

さとり「ほ、本当ですか？別に気を使わなくていいんですよ？」

夜見「本当に大丈夫だ、気を使つてもいない」

さとり「そ、そうですか ふう、良かった」

さとりはそう言つて胸を撫で下ろして落ち着くと、先程勘違いしていたと知つた時にわかつた夜見の言葉の意味を確認した。

さとり「要するに黒夜さんの言つていた私が目を持つているというのは、私が聞いたこいしの心の声を黒夜さんに伝えればいいつてことですよね？」

夜見「ん？ああ、そうだ そうすれば俺が心を読む能力がなくてもこいしさんの心の声がわかるつて話なんだが… さつき、さとりさんは一体何を勘違いしたんだ？」

さとり「なっ!? そ、そんなのはどうでもいいじゃないですか! 今は、こいしの事を最優先に考えましょう!」

すると夜見は先程のさとりの勘違いが気になったのだが、さとりが慌てながらも話を強引に逸らすと夜見はさとりの言葉に頷いた。

夜見「……確かに、それもそうだな。それで、今こいしさんの心の声は聞き取れるか?」

さとり「はい、大丈夫ですよ。今のこいしさんの心の声はペット達のと比べて、一際大きいですから」

そしてさとりはいししの居場所を特定した時のように再び両手でサードアイを掴むと、目を閉じてこいしさんの心の声を聞き始めた。

しばらくすると、さとりはいしさんの心に対して頷き始めたのだが、さとりは急に苦しそうに頭を抱え始めた。

さとり「あっ!? う! ああ!」

夜見「さ、さとりさん!? おい、大丈夫か!」

急に苦しみ始めたさとりは夜見に心配の声を掛けられるが、それどころではないのか頭を抱えたまま苦しそうにしていた。

すると夜見は何を思ったのかさとりを抱き寄せたが、さとりは意外に苦しみが和らい

でいるのか苦しそうな声が減った。

さとり「はあ、はあ、あ!うう…」

夜見「さとりさん、もういい!無理にこいしさんの心の声を聞くな!」

さとり「うう… はあ、はあ、はあ、うっ、はあ、はあ」

夜見「さとりさん、大丈夫か!?まだ苦しいか!」

さとり「うっ、はあ、はあ、だ、大丈夫です 少し、このままでいさせてください」

夜見「ああ、わかった ゆっくり休んでくれ」

そしてさとりは夜見に抱き締められたまま休んでいると呼吸は少しずつ落ち着き、しばらく経つとさとりの呼吸は元に戻っていた。

さとり「… 黑夜さん、もう大丈夫です 離していいですよ」

夜見「本当に大丈夫か?まだ、このままいてもいいんだぞ」

さとり「大丈夫ですよ、何も問題ありません」

夜見「… そうか、わかった 離すぞ」

夜見はそう言ってさとりを離して立ち上がったが、夜見は未だにさとりの容体を心配をしていた。

すると夜見が心配していることに気付いたさとりは、夜見に向けて満面の笑みを見せた。

さとり「黑夜さん、本当に大丈夫ですよ。寧ろ、黑夜さんのお陰で助かりました」

夜見「助かったって……そもそも俺がさとりさんに頼まなければ、さとりさんは苦しむことも無かつただろ」

そして夜見はさとりに助かったとお礼を言われたのだが、今度は視線を下に逸らしてさとりに対して申し訳なさそうにしていた。

するとさとりはそんな夜見の様子を見て、あることを聞いた。

さとり「黑夜さん、もしかして、私に迷惑をかけたとか思ってますか？」

夜見「……思ってるに決まってるだろ。実際に迷惑をかけたんだからな」

さとり「やっぱり、そうでしたか」

どうやらさとりは夜見の思っていたことを察していたらしく、ため息をつくとき夜見にあることを伝えた。

さとり「黑夜さん、私達は家族なんですよ？家族に迷惑をかけるのは当たり前前的事なんですから、目一杯迷惑をかけて下さい」

夜見「いや、俺は迷惑をかけ過ぎてる。異変で1週間帰らなかつた事があつたし、最悪の場合死んだこともあつたんだぞ？」

さとりは夜見に家族なのだから迷惑をかけてもいいと伝えたのだが、夜見は流石に迷惑をかけ過ぎていると返した。



すると、さとりは確かに夜見の言う通りだと思いながらも、首を少し傾げて夜見に聞いた。

さとり「ええ、ありましたね だから何ですか？」

夜見「・・・は？さとりさん、何を言っているんだ？」

さとり「何を言ってるって・・・そのままの意味ですよ」

夜見はさとりの答えに一瞬だけ啞然としたが、すぐに聞き返すとさとりは笑顔で答えた。

さとり「確かに黑夜さんは、私達の中で一番迷惑をかけているかもしれませんが、でも、ただそれだけじゃないですか」

さとりはそう言って夜見の手を両手で包むように優しく握ると、優しい眼差しで夜見の顔をジッと見つめた。

さとり「それに私達だって、黑夜さんに迷惑をかけているのでお相子ですよ 実際、私は黑夜さんによく仕事を手伝ってもらっちゃっていますしね」

夜見「・・・そんな考え方でいいの？いつか、後悔するかもしれないぞ？」

さとり「大丈夫ですよ、黑夜さんを信じていますから」

そしてさとりは無意識に夜見の手を優しく包んでいる両手に少し力を入れると、夜見は視線を上げて一瞬だけ笑みを浮かべた。

夜見「：… こんな俺を、信じてくれるのか ありがとう、さとりさん」

さとり「ええ、どういたしまして」

するとさとりは惜しむようにゆっくりと手を放すと、「さてと」と言つて優しい表情をすぐに真剣な顔に変えた。

さとり「それじゃあ、話を戻しましょうか」

夜見「：… ああ、そうだな」

夜見はさとりの表情が真剣な顔に変わるのを見ると気持ちを一新して、こいしのことについての話に思考を切り替えた。

さとり「それじゃあ、私が聞いたこいしの心の声の結果から言いましょうか」

夜見「ああ、わかった」

そしてさとりは早速こいしの心の声を聞いた結果を言ったのだが、その結果は夜見にとって予想外の答えだった。

さとり「それで、結果なんですけど：… 正直、こいしの心の声を全く聞き取れませんでした」

夜見「：… え、聞き取れなかった？ じゃあさとりさんは、こいしさんの心の声に苦しんだ訳じゃないのか？」

夜見は予想外の答えに驚くと思わずさとりに疑問を投げかけたのだが、さとりは首を

横に振って先程の答えに少し説明を加えた。

さとり「いえ、私が苦しんだのはこいしの心の声を聞いたからですよ。こいしの心の声が聞き取れなかったのは、巨大な心の声が複数あつてそれが混ざりあつていたからなんです」

夜見「心の声が複数？つまり、こいしさんは何か思っていることが複数あつたって事か？」

すると夜見は何かを複数思うことができるのかと疑問を抱いたが、そこでさとりは簡単に例を挙げた。

さとり「はい、そうです。例えるなら、不安や緊張した時に色々と考えてしまったり思ってしまう状態に近いですね」

夜見「なるほど、確かにそれなら思っていることが複数あつてもおかしくないな」

そして夜見はさとりが例を挙げてくれたおかげで疑問を解消できたのだが、それと同時に新たに知る必要があるものが出来た。

夜見「だとしたら、こいしさんの感情を知る必要があるな」

さとり「そうですね、こいしの感情さえわかればいいのですが……感情、ですか」

それは今のこいしの感情だったのだが、今のこいしの感情を知るのは至難の業だった。

何故なら、今のこいしは何に対しても無反応状態。要するに、感情を知る手掛かりは極めて少なすぎるのだ。

夜見「心の声が複数あったということは、負の感情に近いものなんだろうが……困ったな」

さとり「そうですね、手掛かりがほとんどありません。こいしの心の声を集中して聞く訳にもいきませんし、どうすれば……」

さとりはそう言うと、どうやって感情を知ろうか悩み始めたのだが、夜見はさとりの先程の言葉を聞いてある事を思い出した。

夜見「そういえば、さとりさん。こいしさんの心の声を聞き始めた時、確か最初の方は聞き取れていたよな？」

さとり「ん？ええ、確かに最初の方は少し聞き取れていましたけど、それがどうしたんですか？」

夜見「その時に聞いた心の声が、一体何を言っていたか教えて欲しいんだ」

どうやら夜見はさとりが聞き取れた最初の方の心の声に、何かこいしの感情を知るヒントがあると思っっているようだった。

そしてさとりは困ったような顔をしたかと思うと、こんな事を言い出した。

さとり「え、いや、別に教えても構わないですけど……すみませんが、実は内容をあ

「まり覚えていないんですよ」

夜見「ん、そうなのか？それなら、覚えている内容だけで構わないぞ」

さとり「そ、そうですか？それじゃあ言いますけど、その…変に思わないで下さいよ？」

夜見（ん、変に？一体どういうことだ？）

すると夜見はさとりがあまり内容を覚えていない事は気にしなかったが、さとりの最後の言葉は少し気になり疑問を抱いた。

だが、さとりが覚えている内容を話し始めると、夜見の疑問はすぐに解消された。

さとり「おに… ちゃ、す、で… お… ご、に、い… ちゃ… し、きよ、み、ちゃ… のと、ろ… におし… に、た わた… きつ、てく… のに、ぱり、の… と、か じゃ…」

夜見「… えつと？こいしさんの心の声を聞き取ったんだよな？」

さとり「ええ、そうですよ でも、心の声はノイズがかかっていたので、聞き取れた断片が間違っている可能性もあります」

しかし夜見の間かされた内容はバラバラのパズルのようなもので、しかもさとりは間違っている可能性があると言ってきた。

夜見（… いやいや、どうすればいいんだよ？唯一の手掛かりだと思った内容は断片

しかないし、かと言っても他に知れることは何も無いし……)

そして夜見は最終的にこいしの感情を知る事ができないのではと思ってしまうが、さとりはブツブツと何かを呟きながら懸命にこいしの感情を知ろうと頑張っていた。

夜見(……いや、何を思ってるんだ俺は さとりさんはあんなに頑張ってるっていうのに)

すると夜見は一瞬でもそんな事を思ってしまった自分に少し苛立ち、頭をガシガシと掻くと振り返って扉へ向かって歩いた。

さとり「ん？ 黒夜さん、何処に行くんですか？」

夜見「…… さとりさん、少し一人で考えてくる」

夜見はそう言ってさとりを残して部屋を出ると、自分の部屋に戻ってベッドに腰掛けた。

そして夜見はゆっくりと深呼吸をして気持ちを落ち着かせると、すぐに冷静になることができた。

夜見(さあ、考えろ さとりさんの聞いた断片だらけの心の声がわかれば、こいしさんの感情を理解できる筈なんだ)

すると夜見は再度深呼吸をして両手で耳を塞ぎ、更には目を閉じて五感の内の2つの情報を遮断した。

夜見はこうして余計な情報を出来るだけ取り除くと、頭を1度真っ白にしてからさとの言葉を文章に起こした。

そして起こした文章から「、」と「；」を取り除くと、文章に出来た空白に文字を五十音順に1文字ずつ入れ始めた。

つまりは総当たり、言い方を換えれば虱潰ししらみという1番非効率的な方法を何故か夜見は取った。

しかも、さとりは聞き取れた断片は間違っている可能性があり、総当たりで文字を入れても文章が成り立たない可能性もあるのだ。

そんな事は少し考えればすぐにわかる話で、もちろん夜見もそんな事はとつくにわかっていた。

しかし、夜見はそれをわかったうえで空白に文字を入れ、文章が成り立たなければ次の文字を入れた。

文字を全て入れても成り立たなければ前後の断片が違うか、はたまた2文字以上入る

のかもしれないので再び1から入れ直す。

文字を全て入れ、再び入れ直すまでの間にかかった時間は…

僅か0.1秒。

そして再び文字を入れ終わると、数力所当てはまったが偶然の可能性を考慮しつつ文字を入れ直す。

文字を入れ、再び入れ直すまでの時間… 僅か0.1秒。

そして次に入れ終わった時間も0.1秒。

その次も0.1秒。

そのまた次も0.1秒…

そして文章は完成して、夜見はこいしの心の声が何を言っていたかを知ることができた。



計0・5秒での解析、圧倒的な速度だった。

夜見が方法として総当たりを取った理由、それは他の方法に比べて総当たりの方が夜見にとっては効率が良い方法だったからである。

こうしてこいしの感情を理解した夜見は両手を耳から離して目を開くと、ある事を思いながら立ち上がってこいしの部屋へ向かった。

夜見「こいしさん、入るぞ」

そして夜見は扉をノックをしてこいしの部屋に入ると、こいしは座った位置から1歩も動かずにベッドに倒れて天井を眺めていた。

夜見「・・・こいしさん、まただな」

こいし「・・・」

夜見「確か、前は冬・・・だったよな」

すると夜見はこいしに声をかけながら近付き、こいしの上体を起こしてあげると椅子に座った。

夜見「すまないな、こいしさん また同じ気持ちにさせて」

こいし「・・・」

夜見「・・・まったく、何で俺は学習しないんだろうな」

夜見は少し落ち込んだような様子でそう言った後にため息をつくが、顔を上げると笑

顔でこいしに向けて両手を広げた。

夜見「ほら、こいしさん 抱きしめてあげるぞ」

こいし「…」

夜見「さあ、おいで」

そして夜見は椅子から少し身を乗り出してこいしを抱きしめると、いつものように頭を優しくゆつくりと撫で始めた。

しかし、こいしは何も反応を示すことは無かった。

夜見（… ああ、やっぱり駄目だよな）

すると夜見は両腕に力を込めて、こいしを全力で抱きしめた。

夜見「… なあ、こいしさん」

こいし「…」

夜見「俺は本当にこいしさんのことが好きだし、本気でこいしさんのことを愛してる」

こいし「…」

夜見「こいしさんは、いつも証明してくれてるよな」

こいし「…」

夜見「それに対して俺は、こんな事しかしてないよな…」

こいし「…」

夜見はそう言って腕の力を緩めてこいしの顔を正面から見つめたが、こいしの覇気の無い目は夜見を見ている気がしなかった。

しかし…

夜見「俺だけこんな事なのは、不平等だよな　だから、俺もこいしさんと同じように証明するよ」

こいし「…お、兄…ちゃん？」

続けられた夜見の言葉は、こいしの目の焦点を合わせて夜見を見させていた。

夜見「本当に好きで、本気で愛してるぞ　こいしさん」

そして夜見はこいしの顔に自分の顔を近付けると、夜見の唇はこいしの頬にそつと触れた。

すると、こいしの目は徐々に光を取り戻し、その光はいつものこいしを呼び覚ました。

こいし「お、お兄…ちゃん？」

夜見（…そういうえば、後のこと何も考えてなかったな　この方法って多分、さとりさん的にはアウトな気が…）

こいし「ね、ねえ！お兄ちゃん！」

夜見「ん、こいしさん　どうした？」

夜見はいつものこいしを呼び覚ますと考え事を始めたが、こいしに呼ばれると夜見は

考え事をやめた。

そして夜見はこいしを見てみると、こいしは夜見の唇が触れた頬を震えた指で触っていた。

こいし「え、あ……そ、その、さ、さ……」

夜見「……さ？」

こいし「さ、さつき、な……何で？何でキス、したの？」

夜見「え？何でって、証明するって言っただろ？」

こいし「証……明？」

こいしは先程の夜見の話を聞いていなかったのか、訳がわからないといった状態でポカンとしていた。

すると、その様子を見た夜見は何か勘違いでもしたのか、恐る恐るこいしの機嫌を伺うように問い掛けた。

夜見「あ、えつと……嫌だったか？もつと、別の方法で証明した方が良かったか？」

こいし「え、あ！ううん、そんな事ない！とつても、とつても嬉しかったよ！」

夜見「そ、そうか？それなら良かった」

どうやら、夜見はこいしが嫌がっていたか心配をしていたようだが、こいしの反応を見る限り心配をする必要は無かったようだ。

こいし（え… へへ、えへへ♪初めて、お兄ちゃんがキスしてくれた♪）  
すると、こいしは頬を少し赤くしながら夜見の首に両腕を回して、夜見に向けて満面の笑みを浮かべた。

夜見「ん、どうしたんだ？」

そして、夜見はこいしの頭を優しく撫でながら何かあるのか尋ねたが、こいしは笑みを向けたまま何も答えなかった。

夜見「…ん？こいしさん、聞こえてるよな？」

こいし（えへへ♪も、もう、いいよね？お兄ちゃんがキスをしてくれたんだから、いいんだよね？）

しかし、しばらくするとこいしは突然腕に力を込めて、一気に自分の顔を夜見の顔へ近づけ始めた。

夜見（なっ!?待…）

こいし（やった、やっと…）

：少し前、さとりの方では。

さとり（：ん？こいしの心の声が、急に静かに？）

さとりはこいしの感情を理解しようとしている中、急にこいしの一際大きかった心の声が静かになったことに気が付いた。

そして、さとりは慎重にこいしの心の声を聞こうとしてみると、近くでもう一人の心の声が聞こえてきた。

さとり（これは、黒夜さんの心の声？）

それは勿論、こいしの感情を理解することができた夜見の心の声だった。

その時、さとりは夜見がこいしの感情を理解したことに気が付いたのだが、同時にある事にも気が付いてしまった。

さとり（そう、ですか：　　黒夜さんはわかったんですね、こいしの感情が　私より、こいしの姉である私よりも、早く：）

すると、さとりはため息をついたのだが、そのため息には安堵が霞んでしまうほどの大きな寂しさが混ざっていた。

しかし、さとりはある心の声を聞きとった瞬間、先程のため息にあつた寂しさは吹き飛んでしまった。

さとり（駄目、絶対に駄目！そんな事、許される訳がない！許される事はない！そんな事……絶対にあるわけがない）

## 第50話 奥底にあるもの

こいし「んっ！んむ…うん」

こいしは夜見に顔を近付けて目を閉じると唇に感触が伝わった瞬間、腕に力を込めて更に夜見の顔を引き寄せた。

しかし夜見はこいしの行動に対して何か抵抗するかと思いきや、何故か抵抗する様子が全くなかった。

こいし（ああ…お兄ちゃん、今とっても幸せだよ お兄ちゃんも、きつと幸せだよね？だって、キスしてくれたんだから…私の事が好きって事なんだから…）

夜見「…」

そしてこいしがキスを始めてから2〜3分程経った頃、夜見は退屈そうなため息をついてこいしの頭を優しく撫でた。

夜見「こいしさん、もう満足したか？」

こいし「んくん！ん、まだ、まだ…する、ん！」

夜見「…そうか、わかった」

こいし（お兄ちゃんも、幸せでしょ？それなら、まだキスしたまま…あれ？）



その瞬間、こいしはあり得ない事が起きていることに気が付いた。

こいし（ええ…あれ？なんで、キスしてるのにため息ができたの？なんで、普通に喋れるの？）

異変に気が付いたこいしは目を開けて、ゆっくりと夜見から顔を離すと何が起きているかを見ることができた。

それは、2本の指を唇を隠すように口元に当てている夜見だった。

夜見「ん？思ったより早くやめたな まだ続くと思っただがな」

そう、夜見はこいしの不意打ちのキスを受ける寸前に、2本の指を間に挟んで防いだのだ。

そして夜見は口元から指を離すとその手をこいしの背中に回し、こいしを優しく抱き締めた。

夜見「こいしさん、それは前にも駄目だって言っただろ？それに、不意打ちだったから結構危なかったぞ」

こいし「…」

夜見「こいしさん、聞いてるか？」

こいし「…ぐすつ」

夜見「えっ？こ、こいしさん？」

するとこいしが涙をボロボロと流して夜見が心配した瞬間、こいしは急に大声を上げながら泣き出し始めた。

こいし「うえつ、う、うわあああああああん！あ、うつつあ！う、ああああああああああ！」

夜見「なつ?!こ、こいしさん!？」

こいし「あああああ！うつ！ひぐつ、あ！うう…ああああああああん！」

また、こいしに泣き声は尋常ではない大きさであり、すぐ近くの夜見は耳に大きなダメージを受けていた。

夜見（うっ！あ、ああ…み、耳が！は、早…く、泣き止ませ…ねえと…）

そして夜見は耳を塞ぎたくなる程の大きな泣き声を聞きながら、こいしを泣き止ませる為に色々な方法を試してみた。

しかし、頭を撫でたり、手を握ったり、更には頬にキスを試みたのだが泣き止む事はなかった。

こいし「ひつぐ！あ…あああああ！う…うえ、うああああああん！」

夜見（う、ああ…ど、どうしたらいいんだ？このままだと、本当に耳が…壊れる！）

夜見は耳を痛めながらも、どうにかこいしを泣き止ませようと考えてみるが、考えられる手は既に尽きてしまっていた。

結局、夜見はこいしを泣き止ませることはできず、こいしが泣き疲れて眠るまで泣き声を聞き続ける事になった。

こいし「…すう、んん」

夜見（あ…ああ、やつと…終わった み、耳が痛え）

夜見は耳を痛めながらもこいしが泣き疲れて眠った事に安堵していると、部屋の扉がゆつくりと開いて廊下からさとりが顔を覗かせた。

さとり「…黒夜さん、大丈夫ですか？」

夜見「ん？ああ、さとりさん 何とか大丈夫だが…まさか、仕事部屋の方まで聞こえたのか？」

さとり「ええ、そのまさかですよ」

さとりはそう言いながら部屋に入ると、夜見に抱き付きながら寝ているこいしをしばらく見た後で夜見に尋ねた。

さとり「それで、一体何があつたんですか？こいしに何かしたとは思えません…」

夜見「ああ、実は…」

そして夜見はこいしの感情がわかった後にした事や、起きた事を包み隠さずに全て話し始めた。

するとさとりは夜見の話を聞き続けている内に険しい表情になり、夜見の話の何かに

対して静かに怒っていた。

さとり「…そうですね」

夜見「さとりさん、わかるか？こいしさんが泣いた理由」

さとり「…ええ、わかりますよ 当たり前じゃないですか」

夜見「そうか、流石こいしさんの姉だな それで、一体理由は何なんだ？」

さとり「…っ！」

しかし、夜見はさとりが怒っていることには気付いていないらしく、いつもの様子でさとりにこいしが泣いた理由を聞いた。

するとさとりは我慢の限界なのか歯を食いしばり、拳を握ってワナワナと体を震わせ、遂に…

さとり「いい加減に…してください！」

さとりは怒りをあらわにして、夜見に本気で怒鳴り始めた。

さとり「いつまで…いつまで！しらばつくれるつもりなんですか！とつくに気付いてるんでしよう!?!それなのに黒夜さんは、いつまで気付いてない振りをずっと続けて…もう、嘘をつかないでくださいよ！」

夜見「…え？いや、さとりさ」もう、嫌なんです！嘘をつかないでください！もう…心にも思っていない事を言わないでください！」

そして夜見の言葉を遮ったさとりは目には涙を浮かべながら、乱暴に扉を開けると何処かへ走り去ってしまった。

夜見は突然の事に唾然としながら開いている扉の方を見ていると、廊下から燐が現れてさとりが走り去った方向をチラツと見た。

燐「黑夜さん、一体何があったんだい？こいし様の泣き声が聞こえたかと思つたら、今度はさとり様が泣きながら走つていったんだけど」

夜見「燐さん いや、それが両方ともサツパリ訳がわからないんだ」

燐「わからない？えつと…取り敢えず何があったか教えてくれないかい？」

夜見「すまない、燐さん まず、こいしさんの方なんだが…」

夜見は燐に何があったのかを聞かれると、帰つてからさとりが先程部屋を出ていったまでの事を全て話した。

燐は話を聞いてる間は何かを考えていた様子だったが、話が終わると少し頷いてから夜見にある質問をした。

燐「ねえ、黑夜さん 黑夜さんは人の考えている事を汲み取る事つて、苦手かい？」

夜見「え、いや？別に苦手ではないと思うが…」

燐「ふくん、そうかい それじゃあ、人の思っている事はどうだい？」

夜見「…なあ、燐さん 何故そんな事を聞「い・い・か・ら、答えて？」」

すると夜見は燐に何故質問をしてくるのかを聞こうとしたのだが、燐は笑顔のまま夜の言葉を遮って質問の回答を求めた。

そこで夜見は、燐の声に怒りのような感情が込められているのを感じ取ったので、大人しく燐の質問に回答をすることにした。

夜見「そうだな…人の思っている事を汲み取る方は苦手、だと思う」

燐「ん、少し歯切れが悪かったね？それに思うって曖昧な言い方だけど、何かあるのかい？」

そして燐は、夜見の回答が少し歯切れが悪かったことと「思う」と言ったことが引っかけたようで、その事について夜見に追及することにした。

すると夜見は一瞬動揺したような様子を見せるとすぐに俯うつむき、暗い雰囲気かを醸し出しながら答え始めた。

夜見「別に…何も無い。ただ、わからないだろ？思っている事なんて、覚妖怪でもなければ本人にしかわからない。予測はできるけど、それが当たっているなんてのはわからない。本人がそう思っているって言ったとしても、それが本当に思っている事なのかは本人にしか…」

そのまま夜見は無意識にこいしを抱き締めている腕にギュツと力を込め始め、その様子を見た燐は夜見が言いたくない事を追及してしまったのではと察した。

燐「え!? あ、ご、ごめん! い、言いたくないことを追及するような事をして… 言いたくない事なら、別に言わなくてもいいんだよ! そ、それに… 正直に言いたくないって言ってくれば、追及したりなんかはしないし…」

夜見「…いや、お互い様だ 馬鹿正直に言い始めた俺にも落ち度はあつた 家族なんだから、遠慮する必要はないのにな」

燐「え? あ…そ、そうだね! アハハ…ハハ…」

すると夜見は顔を上げて笑顔で燐に「お互い様」と言ったのだが、未だにこいしを抱き締めている腕に力は込められていた。

そして燐は夜見の腕に力が込められていたのを見逃しておらず、夜見に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになっていた。

夜見「…なあ、燐さん」

燐「え? あ…えつと…な、なんだい?」

夜見「ちよつと、こつちに来てくれ」

燐「あ…う、うん、わかつたよ」

だが、夜見は燐のそんな気持ちには気付いていないのか、普段通りの様子で燐に自分の元に来るように声を掛けた。

そして燐は夜見の言う通りに目の前まで来て足を止めたのだが、夜見は燐に更に近く

に来るように声を掛けた。

夜見「すまないが、もう少し近くに来てくれ」

燐「え？えつと…こ、この位でいいかい？」

夜見「もう少し近くに来れないか？」

燐「えつと…い、行けるけど」

最終的に燐はスカートが夜見の足に触れてしまう所まで近付いており、夜見は見上げてジツと燐のを見つめていた。

燐（うっ！な、何でジツと見つめてくるんだい!?!）

すると燐は気まずさと恥ずかしさから反射的に目をそらしてしまったのだが、夜見は燐に目をそらされても燐のことをまだ見つめていた。

しばらく夜見は燐のを見つめていると、視線を一度落としてから再び見上げて燐のを見つめた。

夜見「ん〜つと、それじゃあ悪いけど…そこで膝立ちしてくれないか？」

燐「…え？ひ、膝立ちをするのかい？」

夜見「ああ、両膝をついてくれれば丁度良い筈だ」

燐「よ、よくわからないけど…よいしょつと これでもいいかい？」

夜見「やっぱりな、丁度良かった ありがとう、燐さん」



燐は訳がわからないまま夜見の言う通りに膝立ちをすると、夜見は燐に軽くお礼を言つて少し嬉しそうな様子だった。

そして燐は今度は俯くようにして視線をそらしたのだが、その頭の上に夜見は手を置いてそのまま撫で始めた。

燐「きやつ！う、え…い、いきなり何をしだすんだい？」

夜見「え？何をつて、頭を撫でてるだけだが？」

燐「い、いや、それはわかつてるよ… あたいが聞いているのは、何で頭を撫でてくるんだい？つてことだよ」

夜見「何でつて…燐さんが俺に対して、申し訳ない気持ちでいたからに決まつてるだろ」

夜見がそう言いながら燐の頭を撫でていると燐は頭をゆっくり上げたのだが、夜見と目が合うと顔を赤らめて頭を下げて視線をそらした。

しかし、燐はまた頭を上げて上目遣いで夜見のことを見始めると、ある事を尋ねた。

燐「よ、よくわかつたね あたいが申し訳なく思つてるつて…」

夜見「別に不思議な事じゃないだろ？俺が家族になつてから、随分経つたんだからな」

燐「あ、えつと…そ、そうだよね アハハ…」

夜見（…はあ、まつたく もう氣にしてないから別に申し訳なく思うことなんてない

のに、どうすれば…)

夜見は燐を撫でながら何をすればいいかを考えていると、いきなり燐が夜見に撫でられた時と同じように小さな悲鳴をあげた。

燐「ひやうっ！」

夜見「燐さん!?急にどうし…ああ、そういうことか」

燐「うう…こ、こいし様?な、何でこいし様も撫でるんですか?」

こいし「…」

そこで夜見が見たのは、いつの間にか起きていたこいしが身を乗り出して自分と同じように燐の頭を撫でている姿だった。

するとこいしは燐の頭を撫でながら、夜見の腕にゆっくりとサードアイから伸びている管のような部分を巻き付け始めた。

夜見「ん?こいしさん、どうしたんだ?」

こいし「…ねえ、お燐」

しかし、こいしは夜見に声を掛けられても反応することはなく、燐の方を見て頭を撫でながら話し掛けた。

そして燐はてつきりこいしは夜見に話し掛けると思っていたのか、自分が話し掛けられた事に驚きながら顔を上げた。

燐「えっ!? あ、えっと…何でしょうか?」

こいし「もう、申し訳ないって思わなくても大丈夫だよ お兄ちゃんは、もう気にしてないから」

燐「…えっ? な、何故こいし様がそのような事をわかるのですか? それに、あたいが申し訳なく思っていることも何故知って…」

こいし「何でって、私がお兄ちゃんのことを読んでみたら『燐さんがまだ申し訳ないって思ってる 俺は別に気にしてないのに…』って思ってたからだよ?」

こいしはそう言つて首をかしげて不思議そうな顔をしていると、サードアイは濁つた瞳で夜見をジツと見つめていた。

すると、そこで夜見はこいしのサードアイがジツと自分を見つめている事に気付き、サードアイに笑顔を向けていると燐が声を掛けた。

燐「…ね、ねえ、黒夜さん こいし様の言つたことは本当かい?」

夜見「…いや本当も何も、俺はお互い様だつて言つただろ? もうその時には、何も気にしてないぞ」

燐「そ、そうだったんだ…ご、ごめんね? あたい、気にし過ぎちゃつて…」

夜見「別に謝ることじゃないだろ 燐さんが心配性なのは、燐さんの個性の1つなんだからな」

燐「え？あ、ありが…とう」

夜見「ああ、どういたしまして」

夜見がそう言つて燐の頭を撫でるのをやめて手を引くと、こいしも撫でるのをやめて夜見の方へ向き直つて夜見に抱き付いた。

そして夜見がこいしを抱き締めて頭を撫でていると、燐は立ち上がつてスカートに付いた埃を払い終えてから夜見に話し掛けた。

燐「ねえ、黒夜さん 話を戻したいんだけど…いいかな？」

夜見「ん？ああ、そうだな 確か燐さんに、相手の考えている事と思つている事について聞かれたんだよな」

燐「うん、そうだね」

夜見「それで、何かわかつたことはあるか？」

燐「そうだね、あたいが考えた限りだと多分つ…」

夜見（…ん？）

すると、燐は何故か自分の考えを話そうとした所で一瞬だけ言葉を詰まらせた。

燐「…多分さとり様は、黒夜さんの事を少し疑つてるんだと思う」

夜見「…燐さん？こい「ほ、ほら！さとり様にとつて黒夜さんは信用したい家族だから、信用したいからこそ逆に疑つちやうんだと思うよ！」

夜見（…急にどうしたんだ？俺はただ、こいしさんの方の答えも聞こうとしただけなのに…）それに、考えを言おうとした時に言葉を詰まらせて…）

そして夜見は燐の妙な行動や言葉の遮りに対して疑問を抱いていると、燐はこいしの方へ数回チラッと視線をズラした。

それに気付いた夜見は、先程の燐の不自然な行動に対しての疑問が晴れた。

夜見（なるほど、こいしさんに聞かれたら何か不味いのか…）それなら、今は聞けないか…）

夜見「そうか…疑われてるのか？俺は」

燐「うん、多分…だけどね）でも、いつも心配させないように嘘をついてたら、信じたくても信じられないよ？」

夜見「…ああ、そうだよな」

夜見は燐の考えに少しショックを感じながらも納得をしていると、こいしが夜見の服を力強く掴んでグイグイと引っ張った。

夜見が視線を落とすとこいしは夜見のことを見上げており、夜見は笑顔を作つてこいしにどうしたのかを聞いた。

夜見「こいしさん…どうしたんだ？」

こいし「…お兄ちゃん、お姉ちゃんと喧嘩したの？」

夜見「いや、喧嘩じゃないよ。俺がさとりさんを少し怒らせたから、燐さんに相談に乗ってもらってただけだ」

こいし「…そうなんだ」

するとこいしは何か考えているのかゆっくりと返事をしてから少しの間俯いたのだが、再び顔を上げると夜見に向かってある事を話し始めた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん。お姉ちゃんはね、すごく寂しがり屋さんなの」

夜見「…そうなのか？」

こいし「うん、そうだよ。お姉ちゃんは私と同じ覚妖怪だから、お姉ちゃんも私と同じように嫌われてたの。そして、私が心を閉ざした時には、お姉ちゃんはずっと一人ぼっちで…ずっと寂しい思いをしてたの」

夜見「…」

こいし「だけど、お兄ちゃんだけが嫌われる理由を個性として受け止めてくれた…お兄ちゃんが初めてだったの。だからね、お兄ちゃんが嘘をついたら本当は違うんだって思ってた寂しくなっちゃうの」

そしてこいしはさとりが今までどんな思いでいたのかを説明すると、夜見の胸の奥から罪悪感がどんとどんと溢れ出てきた。

夜見「でも、俺はあの時。嘘をついたつもりは…」

こいし「うん、わかってるよ お兄ちゃんは嘘なんかついてないって…」

しかし、こいしが夜見の頬にそっと手を添えると罪悪感こそ無くなりはしないが、それ以上罪悪感が溢れ出してくることはなかった。

更に、こいしがもう片方の手も夜見の頬に添えて顔を包み込むと、温かい何かが夜見の胸の奥をどんと満たし始めた。

こいし「だから、お姉ちゃんにちゃんと話そう？嘘なんかついてないって、嘘をついてるように思わせちゃってごめんなさいって…ね？」

夜見「こいし…さん」

こいし「大丈夫だよ、お兄ちゃん それでも、まだ不安なら私も一緒に行つてあげるよ？」

夜見「…いや、いい 大丈夫だ」

すると夜見はこいしを抱き締めたまま立ち上がり、こいしを椅子に座らせると頭を優しく撫でた。

夜見「ありがとう、こいしさん こいしさんのお陰で、何をすればいいかわかったよ」

こいし「んっ、えへへ♪どういたしまして」

夜見「燐さんも、ありがとうな 俺の相談に乗ってくれて」

燐「えっ?! い、いや、あたいは別に…ど、どういたしまして」

そして夜見はこいしの頭から手を離して部屋を出るとさとりの元へ向かったのだが、こいしは部屋の扉が閉じた瞬間に燐に話し掛けた。

こいし「お燐、ありがとうね 言わないでくれて」

燐「はい、さとり様にも言われていたので」

こいし「やつぱり、駄目って？」

燐「はい、そうですね」

こいし「でもね、お燐 私はいつか言うつもりだよ」

燐「そんな事をしたら、前と同じように長々とさとり様に言われますよ？」

こいし「別にいいよ 約束って言ったけど、私は元々守るつもりはないし」

燐「…そう、ですか」

こいし「…お燐、どうしたの？」

燐「えっ?! い、いや、何でもありませんよ! あ、あたいは仕事があるので、もう行き  
ますね」

ガチャツ、バタン

こいし（…私は、この気持ちに嘘をつきたくない だって、この気持ちが私の心を…）



夜見「さとりさん、入るぞ」

夜見はさとりの部屋の前に着くと扉のノブに手を掛けると、一言断りを入れてから扉を開けた。

すると、さとりはベッドの上で背を向けて膝を抱えながら俯いていた。

夜見「さとりさん、少しいいか？」

さとり「…なんですか？出て行ってくださいよ」

夜見「すまないが、ベッドに座らせてもらおうぞ」

さとり「…聞いていました？出て行ってください」

夜見「ああ、聞いてるよ、だけど、出ていく気はないからな」

そして夜見はさとりに近付き真横で腰をかけると、さとりは夜見に背を向けるように向きを変えた。

夜見「なあ、さとりさん、こっち向いてくれないか？」

さとり「…」

夜見「…まあ、別にいいか」

しかし、夜見はさとりのその行動に対して特にシヨックを受けることもなく、夜見は一呼吸空けてからさとりに謝り始めた。

夜見「さとりさん、すまなかつた 俺が悪かつたよ」

さとり「…」

夜見「正直、さとりさんがなんで怒つたのかはわからない けど、さとりさんを怒らせて寂しい思いをさせたのは事実だ」

さとり「…」ギリッ

夜見「だから、寂しい思いをさせて本当にすまなかつた でも、あの時俺は「ドンッ」…は？」

すると突然、さとりは振り向くと同時に夜見を両手で押し、夜見をベッドから突き落とした。

夜見は突然の事に頭が真っ白になり天井を見ていると、さとりは夜見に馬乗りになって夜見の首を両手を掛けた。

さとり「はい！これで満足ですか!? 貴方のお望み通りに向いてあげましたよ!?!」

夜見「…さ、さとりさん？」

さとり「いい加減に、してくださいよ… この期に及んで、なんで嘘をつき続けるんですか!?!」

夜見「…さととり、さん」

さととり「答えてください！答えないと、首を締めますよ！」

さととりはそう言つて両手にゆつくりと力を込めると、夜見の首を苦しくならない程度に締め付けて脅した。

だが、夜見の答えはさとりに押されて言い切れなかつた言葉だつた。

夜見「あの時俺は嘘をついていない」

するとさととりは夜見の答えに一瞬だけ動揺したが、さとりは夜見の首を手を掛けたまま再度問いただした。

さととり「…ふつ、ふざけないでください！正直に答えてください！」

夜見「…あの時俺は嘘をついていない、本当だ」

しかし、夜見は答えを変える必要はないので問ひ掛けに対して同じ答えを言うが、さとりは首を横に振つて夜見を睨みつけた。

さととり「なんで…なんで嘘をつくんですか!?嘘を、嘘をつかないでください！本当の…事を、真実を話してくださいよ！」

夜見「何度聞いても同じだ、あの時俺は嘘をついてない」

さととり「嘘、本当な訳がない！なんで、なんで真実を話してくれられないんですか!?」  
夜見が嘘をついてないと何度答えてもさとりは全然信用せず、夜見はこの不毛な一問

一答に呆れたのか逆にある質問をした。

夜見「…逆に聞くが、何故さとりさんはそこまで俺が嘘をついてると思う？俺のことを家族だと、信じてくれると言っただろう？」

さとり「そんなの決まっています！黒夜さんが知らないふりをして嘘をついているからですよ！」

夜見「じゃあもう一つ聞くが、俺が何に対して知らないふりをしてるんだ？」

さとり「っ！そ、それは…」

そしてさとりは夜見のもう一つの質問の回答で言葉を詰まらせていると、さとりは滅茶苦茶な事を始めた。

さとり「じゃあ、聞きますけど！黒夜さんが前に言った、あんな事って一体何なんですか!?話せる時って、いつなったら来るんですか!?」

それは、夜見の質問に答えずに全く関係ない話を持ち出してくることだった。

そしてその全く関係ない話の内容とは、「[第16話 トラウマと嘘]での」あんな事とは何なのか、話せる時というのはいつなのかという事だった。

さとり「嘘をついていないって言うのなら、言ってみてくださいよ！どうせ嘘なんでしょう!?どうせ死ぬまで話さないつもりなんですよ!?」

夜見「…そういうえば、そんな事言ったな それについての答えは既に言っただろ、も

し話せる時が来たら話すって」

だが、夜見は滅茶苦茶な事に対しては気にも留めることなく質問に答えると、さとりは関係のない話について質問攻めを始めた。

さとり「そんなの、全然答えになっていません！ちゃんと答えてくださいよ！」

夜見「だから：既に答えは出てるだろ？もし話せる時が来たらって、まだ話せない」

さとり「だから、そんなのは答えじゃありません！あんな事が何なのか、話せる時がいつなのかを聞いてるんですよ！」

夜見「さとりさん、さつき言っただろ まだ話せないって」

さとり「なんですか、まだって!? どうせ、話さないための口実でしょう!?」

夜見「：だから、言ってるだろ？話せないって」

さとり「一体何が嫌なんですか!?今でも後でも、内容は変わらないでしょう!?」

夜見「何度も言うが、まだ話せないんだ 話さないわけじゃない」

さとり「そんなのどちらも一緒ですよ! どうせ内容は変わらないんですから、今ここで話してくださいよ! さあ! さあ!」

夜見「：はあ、何度も言ってるだろ まだ話せないって」

さとり「いい加減に：話さないと」だって、記憶が無いんだから」：え?」

すると、夜見はいきなりとんでもない事をカミングアウトをして、これには流石にさ

とりも唾然としてしまった。

そして、さとりの手が両手が緩んだ隙に夜見は上体を起こすと、さとりが後ろに倒れそうになったが両手でさとりを支えた。

さとり「えっ、えっ？う、嘘…き、記憶喪失…なんですか？」

夜見「えつと…記憶喪失っていうより「記憶の欠落」って言った方が正しいかな？」

さとり「記憶の…欠落？」

夜見「ああ、実は昔の記憶の一部が何故か抜け落ちているんだ。外傷的な事がなければ、トラウマによるシヨックも関係はない。つまり、記憶が抜け落ちた理由は自分でもわからないんだ」

さとりはあまりの衝撃的な内容に本当に夜見は記憶がなくなっているのか疑う気持ちもあつたが、夜見が頑なに過去を話したがない理由としては一理あるのではと思つた。

さとり「じゃ、じゃあ私は、黒夜さんに対して無理な事を強要して…」

夜見「いや、さとりさんは何も悪くない。大元を辿れば、俺がさとりさんに勘違いをさせなければ良かった話なんだから」

さとり「わ、私の勘違い…ですか？」

夜見「さつきから言おうとしてたけど、さとりさんが中々信用してくれなかったから

な あの時俺は嘘をついていない……」

夜見はそのまま言葉が続けながらさとりを引き寄せて優しく抱き締め、ゆつくりと頭を撫でながら謝罪の続きを話した。

夜見「でも、俺が人の思ってる事を汲み取るのが苦手なせいで紛らわしい真似をしてしまった 勘違いをさせた俺をどうか許してくれ、さとりさん」

さとり「黒、夜さん……」

すると、夜見の謝罪の続きを聞いたさとりは静かに涙を流しながら夜見の胸に顔を埋めた。

さとり（ズルい、黒夜さんはズルいですよ 黒夜さんにはそういう所があるって知ってたのに、本当は私が謝るべきなのに、黒夜さんは自分自身が悪者になるようにして……そんな優しい人、好きになるに決まってるじゃないですか）

夜見「……ああ、そういうえば」

しばらくして夜見は何かを思い出したのか声を出すと、さとりは涙を拭って顔を上げた。

さとり「ど、どうしたんですか？」

夜見「記憶の欠落」のせいで昔の事は話せないけど、少しなら見せることができるんだが……見るか？」

そして夜見は過去の事は見せることはできると意味不明な事を言い出し、さとりは訳がわからない様子で夜見に尋ねた。

さとり「え？見るって、どういうことですか？ていうか、見る事ができるんですか？」

夜見「ああ、少しだけなら……な？」

さとり「ぜつ、是非見たいです！見せてください！」

するとさとりは夜見の話に物凄く食い付き、夜見の過去の事を見ることを望んだ。

夜見「……そうか、わかった。でも、少しだけだからな？」

夜見は自分から言い出したのに一瞬だけ言うのを躊躇したような様子を見せたが、すぐに微笑むとさとの頭を固定するように頬に両手を添えた。

さとり「え？黒夜さん、一体何を？」

夜見「それじゃあ、見せるからちゃんと見てくれ」

夜見はそう言うのと左目を閉じて右目を見開き、さとの目をジッと覗き込んだ。

さとりは夜見の見開かれた目に威圧感を感じて一瞬怯んだが、夜見の過去の事を知りたい一心で夜見の右目を見ると何かに気付いた。



さとり（…ん？目の奥底に何かがある？）

その何かは目の奥底にあるように見えるのだが、その何かはよく見ようとすると更に奥底へ沈んでいった。

だが、さとりはその沈んでいく何かを見ていると、訳のわからない感覚を感じた。

さとり（…いや、違う 何かがある？）

確かに奥底へ沈んでいく何かは物である筈なのだが、さとりは何故かその物から者のような気配のようなものを感じた。

しかし、次の瞬間に夜見は左目を開いて右目を離してしまったため、さとりはその謎の感覚の正体を知ることができなかつた。

夜見「どうだ、見えたか？」

さとり「…はい、見えました」

そう言って夜見は手をさとりから離すと再度さとりの頭を撫で始めたのだが、さとりは謎の感覚の余韻がまだ残っており夜見に尋ねた。

さとり「黒夜さん、黒夜さんは一体…何者なんですか？」

夜見「…さあな、一体何者なんだろうな？」

## 第51話 夜散歩

夜見はさとりで過去を少し見せた後、さとりとこいしに協力を仰いで動物に触れ合う練習をしていた。

だが、結局夜見は動物に警戒され続けてまともに触れ合う事はできずに時が過ぎていった。

夜見（今夜は少し肌寒いな）

そして、今は誰もが寝静まる深夜の時間、そんな時間に夜見は仮面を被り身体をマンクトに包み込みこんで月明かりに照らされた地上を散歩していた。

夜見（やっぱり、懐かしく感じるな）

しばらく歩いた夜見はその場で立ち止まると、夜空に浮かんでいる月を眺めながら懐かしさを感じていた。

その懐かしさはミステリアと出会った夜に感じたもの同じであり、やはり謎の違和感も同時に感じていた。

夜見（何故、懐かしいんだ？俺の記憶に、こんな夜空なんかは…）

夜見は夜空を見上げたまま何度も記憶を辿ってみるが、外の世界で窓から夜空をチ

ラツと見たような記憶くらいしか思い出せなかった。

夜見（やつぱり、思い出せる記憶には無いか だとしたら、懐かしさを感じるのは…）  
そして、夜見が懐かしさを感じる原因に察しがついた瞬間、夜見の背後から微かに物音がした。

だが、夜見は特に驚きもせず後ろに振り向いて最初から付いて来ていた人物の名前を呼んだ。

夜見「何をしてるんだ、こいしさん？ちゃんと寝なきや駄目だろ」

こいし「お兄ちゃんだって…こんな時間に何をしてるの？」

その人物とは以前の夜にも付いて来ていたこいしであり、今度は何故かパジャマではなく普段着を身に着けていた。

夜見「別に、ただ散歩をしてただけだ」

こいし「…だったら、私も付いて行く」

夜見「何でだ？」

こいし「…お兄ちゃんと同じ理由」

夜見「そうか、なら勝手にしてくれ」

すると、夜見はこいしを雑にあしらってから歩き出し始めて、その後をこいしは距離を保ちながら付いて行った。

しばらくして、こいしは距離を少しずつ縮めると夜見の隣で夜見を見上げていたが、夜見はこいしの方を見ることなく口を開いた。

夜見「…なんだ？」

こいし「えっ?!いや、別に…なんでも、ない…」

こいしは急に声を掛けられたことに驚き反射的にそう答えたが、夜見のマントを掴んでクイツと引つ張ると夜見は立ち止まった。

夜見「…どうした？」

こいし「手…繋いでも、いい？」

夜見「…別に、勝手にすればいい」

夜見はそう言つてマントを背中に回して手をこいしの方へ伸ばすと、こいしは夜見の人差し指だけを握つて手を繋いだ。

そして、夜見が歩き出すとこいしは一瞬だけ遅れて歩き始めた。

夜見「…」

こいし「…」

しばらく2人は何も喋らずに歩いていたのだが、こいしは夜見の無愛想な態度と気まぐずい雰囲気やだんだんと苦痛に感じていた。

こいし「…うう」

そして、こいしは俯うつむいて無意識に苦痛の声を漏らすと、急に夜見がこいしの掴んでい  
る手を払い除けた。

こいし「きやあ！お、お兄…ちゃん？」

夜見「…」

急な事にこいしは訳がわからず啞然として夜見を見ていると、夜見はこいしに冷たい  
目線に向けて口を開いた。

夜見「…嫌なら、付いて来るな」

こいし「えっ？な、何で？私、嫌なんかじゃ…」

夜見「じゃあ何故、嫌そうな声を出した？」

こいし「な、何でって…」

こいしはそこで初めて苦痛の声を漏らしていたことに気付いたが、流石に原因は自分  
ではないと感じて不満を口に出した。

こいし「お兄ちゃんが…無愛想な態度をしてるのが悪いんじゃない！私は何も悪くない  
もん！」

夜見「…無愛想？」

こいし「本当に何なの、お兄ちゃんが帰ってきた時にとつた私の態度に対する仕返し  
!?確かにあれは私が悪かったかもしれないけど、だからってお兄ちゃんが無愛想な態度

をとらなくなつていいじゃん！」

こいしは怒りに任せて思った事を全て口に出したのだが、こいしは怒りがまだ収まつておらずイライラしていると、夜見はため息をついた。

夜見「…ああ、そういうことか」

すると、夜見は腰に挿していた夜刀を引き抜いて逆手持ちになると、左腕に思いつきり持つている夜刀を突き刺した。

夜見「ぐっ！ああ…！」

こいし「えっ？お、お兄ちゃん…？」

こいしは夜見の突然の行動に驚き固まっていたのだが、夜見は突き刺した夜刀を引き抜くと能力を使って即座に傷口を塞いだ。

夜見「…ふう、目が冴えた」

こいし「お兄ちゃん、大丈夫!?急にどうしちゃったの!？」

そして、夜見は夜刀を納めながら呑気な事を言っていたが、流石にイライラしていたこいしも突然の自傷行為には心配の声を掛けた。

だが、夜見は何事もなかったかのように普段の様子に戻ると、屈んでこいしと目線の高さを合わせた。

夜見「どうしたんだ？こいしさん」

こいし「大丈夫!? 刺したとこ、痛くない!」

夜見「別に大丈夫だ それより、無愛想な態度をとつてすまなかつたな」

すると、夜見はこいしの頭を撫で始めたのだが、こいしはまだ心配している様子で恐る恐る夜見に尋ねた。

こいし「ほ、本当に…大丈夫?」

夜見「ああ、大丈夫だ ほら、ちゃんと動くだろ?」

そう言った夜見は左腕を適当に動かして見せると、こいしは本当に大丈夫であると信じていることができた。

こいし「よ、良かった 本当に、大丈夫なんだね」

夜見（もつと別の方法にしたほうが良かったか? 余計な心配をかけたな…）

こいしは胸を撫で下ろすと夜見の首に腕を回して抱き付き、夜見は抱き締め返しながら心配をかけたことに反省をしていた。

しばらくして、こいしは満足したのか腕を離したので夜見は立ち上がったのだが、今度は夜見の手をこいしは握った。

不思議に思つて夜見はこいしを見てみると、こいしは恥ずかしそうにしながら尋ねた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん まだ、お散歩…する?」



夜見「こいしさんは、どうしたいんだ？」

こいし「わ、私？私はまだ、お散歩したい…かな」

夜見「…そうか それじゃあ、もう少しだけ散歩するか」

そして、夜見はこいしの手を引いて歩き出すと、こいしは静かに夜見の隣を共に歩き始めた。

だが、夜見は隣にいるこいしがいつも元気なのに対し、今現在は大人しくして静かに付いて来ていることを疑問に感じていた。

夜見（どうしたんだ？やっぱり、別の方法で目を冴えさせたほうが…）

こいし「…ねえ、お兄ちゃん？」

夜見「ん、何だ？」

夜見は考え事をしていたのだが、こいしに声を掛けられて咄嗟に返事をする、こいしは先程の事を尋ねた。

こいし「さっき、何で急に自分の腕を刺すような真似をしたの？」

夜見「何でって、ただ目を冴えさせたかったからだ」

こいし「…本当？無愛想な態度の事は関係ない？」

夜見「こいしさん、もしかして怒ってるのか？」

すると、夜見はこいしが無愛想な態度に対してまだ怒ってるのかと思いついたのだ

が、こいしは首を横に振って否定した。

こいし「ううん、怒ってないよ。ただ…何で無愛想な態度だったんだろうなって、少し気になったんだけど聞きにくくて…ごめんね？」

夜見「理由…聞くか？」

こいしは無愛想な態度の理由が気になると言うので、夜見は若干躊躇ちゆうちよしながら理由を聞きたいか尋ねると、こいしは首を縦に振った。

こいし「えっ？う、うん、聞きたい」

夜見「…そうか、わかった」

そして、夜見はこいしに無愛想な態度をとった理由を話し始めた。

夜見「俺が無愛想な態度をとったのは、ただ本当に少し眠かったのが1つだ」

こいし「じゃあ、腕を刺したのは本当に目を冴えさせるため？」

夜見「ああ、そして主な理由はさとりさんに俺の過去を見せた事が気掛かりだったからだ」

こいし「…過去を見せた？お姉ちゃんに？」

こいしは「過去を見せた」という言葉に訳がわからず首を傾げたが、夜見が過去を見せた時の詳細を話すとこいしは少し俯うつむきつつも納得はしていたようだった。

こいし「そっか、お姉ちゃんはお兄ちゃんの過去を見たんだ…」

しかし、こいしは夜見が過去の記憶が一部欠けていることは特に気にしておらず、何か過去を見せた事の方を気に留めており夜見は不思議に思った。

夜見「あれ？記憶が欠けていることを心配されると思ったが…」

夜見は不思議に思ったものの、これは逆に過去の詮索等をされる心配は無い事に繋がっており少しだけ安堵もしていた。

夜見（唯一心を読めるこいしさんが詮索しないなら、俺の過去を知られる可能性はかなり低くなるな…）

こいし「お兄ちゃん、私には見せてくれないの？」

夜見「…え？」

だが、夜見が安堵できたのも束の間で、こいしは自分には見せてくれないのかを聞いてきた。

夜見「い、いや、見せられないことはないが、今は少し都合が悪くてな…」

こいし「…都合が悪いの？本当に？」

こいしは少し動揺している夜見の様子を不審に思つて本当か聞きつつ、サードアイから伸びる管のような部分を夜見の腕に絡ませた。

そして、こいしは夜見の心を読んで先程の発言が嘘だと知つてジツと夜見を見つめて言った。

こいし「…嘘つき」

夜見「す、すまない…」

すると、こいしは握っていた手を離してそっぽを向き、頬を膨らませて怒ってしまった。

こいし「もう、見せたくないなら見せたくないって言うてくれればいいのに！お兄ちゃんが過去を知られたくないのは知ってるよ！」

夜見「…ああ、そうだよな 本当に悪かった」

こいし「…許して欲しい？」

夜見「できるのなら、許して欲しい」

こいし「わかった、それじゃあ…」

そう言うてこいしは仕方ないといった様子で夜見の方を向くと、目を閉じて軽く唇を突き出した。

こいし「…ん」

夜見「…えつと？こいしさん、一体何を？」

こいし「…キス」

夜見「は？」

こいし「キスしてくれたら、許してあげる」

なんと、こいしは夜見の立場が悪いことを利用して唇にキスを要求してきたのだ。しかし、夜見は素直にキスをする訳にもいかないのです、こいしの機嫌を損ねない様言葉を選んで妥協を求めることにした。

夜見「こいしさん、流石に口にはできないから…頬で許してくれないか？」

こいし「…わかった、今回は頬で許してあげる どうせ嫌だって言っても、してくれないんですよ？」

夜見「本当にすまない こいしさん、ありがとう」

こいし「…早くしてよ」

こいしはとても不満そうだったがなんとか妥協してくれて夜見へ頬を向けたので、夜見は片膝を突いて仮面をズラすとこいしの頬に優しくキスをした。

すると、こいしは再び夜見の手を繋いでまだ不満そうにはしているが、頬は少し赤みを帯びていて嬉しい気持ちが表示されていた。

こいし「ほら！早く散歩の続きをするよ！」

夜見「うわっ!? こ、こいしさん!？」

そして、こいしは夜見の手を引いて突然歩き始めると、夜見はよろけて危うく転けそうになったが持ち直してこいしの後に続いた。

しばらく歩いていると2人は森の中を進んでおり、奥へ行けば行くほど辺りは暗く

なつて黒色に染まっていた。

夜見「こいしさん、そろそろ帰らないか？あまり長時間出歩くと寝る時間が無くなるぞ？。」

こいし「ヤダ、まだお散歩するの！」

夜見「さとりさんにバレたら怒られるぞ、それでもいいの？」

こいし「お姉ちゃんに言わなければいいじゃん、そうすればバレないもん！」

夜見「いや、そういう問「きやあ！」おっと!？」

こいしは夜見の手を引っ張つて前を歩いてたが何かに驚き、夜見へ向かつて急に抱き付き始めた。

夜見は急に抱き付いてきたこいしに一瞬戸惑つたが少し震えていることに気付くと、背中に腕を回してそのまま屈んで抱き寄せた。

夜見「こいしさん、どうしたんだ？」

こいし「な、何かが：目の前に飛んで来た」

夜見「飛んで来た？」

夜見はこいしの言葉を不思議に思つて周りをグルツと見渡してみたが、暗いとはいえず特に何か飛んでいる様子も音も無かつた。

夜見「こいしさん、周りには何もいないぞ？」

こいし「い、いたよ！すごく小さい、虫みたいなのが…」

夜見「虫？虫、か…」

再度、夜見は周りを見渡してみると確かに小さな虫が大量に飛んでいたが、その虫達は何度も暗闇に姿を現したり隠したりしていた。

夜見（周りが暗いから見にくい、確かに虫がいるな… だが、何故こんなにもここに虫が集まるんだ？）

夜見「こいしさん、そろそろ帰ろう 散歩はもういいだろ？」

こいし「う、うん、早くここから離れ…ひっ!？」

夜見「多いな…しっしっ! 離れろ」

夜見は周囲に虫が来たら手で払い除けつつこいしの手をとって立ち上がると、何故か周囲から更に虫が湧き出てきた。

夜見「くっ! 何で湧いてくるんだよ こいしさん、さっさと出るぞ!」

こいし「えっ? きやっ!？」

夜見「よし、しっかり捕まってるよ」

すると、夜見はこいしを抱き上げて道を引き返そうと踵を返したのだが、前方から急に大量の虫の塊が迫ってきた。

夜見（うっ! 何だよ!）

虫を避けるために夜見は横へ跳んで避けたのだが、避けた先でも虫の塊が迫ってきた。

夜見（クソ！どうなってやがる!?!）

夜見は再び虫の塊を跳んで避けるが、その後も何回も虫の塊が迫ってくるので避け続け足止めを食らっていた。

夜見（明らかにおかしい 妖精：いや、妖怪か何かの仕業か?）

虫が出てくる暖かい季節と言えど流石におかしいと感じた夜見は妖精か妖怪の仕業かと考えていると、大量の虫は夜見とこいしの周囲を囲うように飛び回り始めた。

こいし「お、お兄ちゃん？何が起きてるの?」

夜見「大丈夫だ、こいしさん 虫を蹴散らす方法を思いついた」

そう言って夜見はまた虫の塊が迫ってきたても防げるようにドーム状の霊力の壁を作ると、夜見は手のひらに霊力を集めてそれを圧縮し続けた。

夜見「こいしさん、俺が合図をしたら少しの間だけ耳を塞いでおいてくれ」

こいし「耳？何をするつもりなの?」

夜見「心配するな、別に危険な事じゃないから」

こいし「…うん、わかった」

そして夜見は手のひらに高密度に圧縮された霊力の塊を作り出すと、霊力のドームを



消すと同時に合図を出した。

夜見「こいしさん、今だ！」

夜見が合図を出すとこいしは言われた通りに耳を塞ぎ、夜見は靈力の塊を上を飛ばそうとしたのだが、その瞬間に誰かの声が聞こえた。

？「何者だ！私達の遊び場に入ったのは！」

夜見「なっ!?誰だ!…あ」

？「へ？」

誰かの声が聞こえた瞬間に夜見は反射的に声が聞こえた方向に弾幕を放ったのだが、その放った弾幕は先程上に飛ばそうとした高密度の弾幕だった。

すると、その弾幕は声を出した何者かに直撃したと同時に、その弾幕は爆発を巻き起こして周囲の虫を蹴散らした。

夜見「しまった!お、おい!大丈夫か!」

夜見は爆風が通り過ぎると急いで声が出た方向へ安否を確認するために向かったのだが、その弾幕に直撃した誰かはその場で倒れて気絶していた。

夜見（よかった、気絶しているだけか　でもこの格好、人間じゃないよな…）

その何者かは緑色のショートヘアからは2本の虫の触角のようなものを生やしていた。

服装は白のシャツに紺の長いキュロットパンツを着ており、表が黒で裏が赤の燕つばめの尾のように分かれた燕尾えんびじょう状のマントを身に着けていた。

夜見「おい、しつかりしろ！大丈夫か！」

そして、夜見は虫が迫ってきた原因の有無に関わらず心配して声をかけながら身体を揺するが、気絶している者は起きる気配がなかった。

夜見（一体どうすれば、特に外傷は見当たらないから治療は…）

こいし「…お兄ちゃん、まだ塞いでなきや駄目？」

夜見「ん？ああ、すまない もう塞がなくても大丈夫だ」

こいし「うん、わかった 離すよ？」

すると、こいしは耳から手を離して周りを見渡そうとして、気絶している者を見た瞬間に口を開いた。

こいし「あれ、リグちゃん？」

夜見「えっ…こいしさん、知り合いか？」

こいし「うん、私のお友達 リグちゃん、こんな所で寝てたら風邪ひいちゃうよ？」

こいしは夜見の腕から抜け出すとリグちゃん？を揺すっていると、小さなうめき声を出しながら目をゆっくり開いた。

こいし「あ、起きた！」

？「う…ん、こいしちゃん？何でここに？」

こいし「リグちゃんこそ、何でこんな所で寝てるの？」

？「あれ？確か私、誰かが近付いてきたのを…」

リグちゃん？はうまく働かない頭を動かしながら身体を起こして夜見を見た瞬間、驚きの声を上げて後退りをして指を指した。

？「だ、誰だ!?この、怪しい奴め！」

こいし「ちよつと、リグちゃん！お兄ちゃんは怪しい人じゃないよ！」

？「…え、お兄ちゃん？こいしちゃんがいつも話してる、あの？」

こいし「うん、いつも話してる私のお兄ちゃん」

？「えっ!?でもこいしちゃんは妖怪なのに人間が兄…？一体どうなって…あれ？」

どうやら、こいしが詳しく関係を話していなかったようでリグちゃん？は混乱しており、夜見はため息をつきながら仮面を外してこいしとの関係を話した。

夜見「俺はこいしさんの兄ではない、こいしさんがそう呼んでるだけだ」

？「え、でも家族って言って…」

夜見「居候している俺をそう呼んでくれているだけだ」

こうして夜見はこいしとの関係を話して手を伸ばすと手を握ったリグちゃん？を立ち上げさせ、こいしから聞いている筈だが念の為自己紹介をすることにした。

夜見「こいしさんから聞いてるだろうが、俺の名前は黑夜夜見 覚妖怪とは関係ないただの人間だ」

？「あ：ありがとう、黑夜さん 私の名前はリグル・ナイトバグ、こう見えても女の子だからね？」

夜見「ああ、わかってるよ 一人称が俺って言う奴よりは立派な女の子に見える」

リグル「えつと：誰のことを言ってるの？」

夜見「いや、別に気にしなくていい ただの独り言だと思ってくれ」

夜見は一人称が俺である月夜の事を愚痴のように吐き出したのだが、もちろんこいしとリグルは知らないの顔を合わせて一緒に首を傾げていた。

だが、夜見はそんな事はお構いなしにリグルにある事について尋ねた。

夜見「それで？リグルさんはどうして、虫を操って俺達を襲ったんだ？」

リグル「えつ!? 襲ったって、もしかしてあの2人ってこいしちゃんと黑夜さんだったの!?!」

夜見「：知らなかったのか？」

リグル「知らないも何も、私は虫達が怪しい奴が近付いてきたって聞いただけで……、ごめんなさい！」

どうやら虫を操って夜見とこいしを襲っていたのはリグルだったようで、更にリグル

は2人だとは知らずに虫で襲っていたようだった。

しかし、夜見は特に怒っている様子はなく、こいしも怒らずにリグルの頭を撫で始めた。

こいし「大丈夫だよ、誰にだって間違いはあるから」

リグル「で、でも…私、毒を持つてる虫も使ってたんだよ!?!死んじやうかもしれなかつたんだよ!?!」

夜見「死ぬも何も、そもそも殺す気はなかつただろ」

リグル「えっ…?き、気付いてたの?」

夜見の言葉にリグルは驚いて夜見のことを見上げてみると、夜見ではなく何故かこいしが話し始めた。

こいし「だって『毒虫を使ってるなら避けられるような襲い方はしない筈』って思ってたもんね、お兄ちゃん?」

夜見「ああ、その通りだ どうせ妖怪の怖さを思い知らせてやるとかいった、そんなこと思ってたんだろ?」

リグル「そ、そこまで知ってたの?」

夜見「知ってたというか、前にも同じような状況に巻き込まれたことがあつたからな」  
夜見はそう言って初めてチルノと会ったときの事を思い出すと、リグルの背後の方か

ら3人の人物が姿を見せた。

チルノ「おくい、リグル 何か大きな音がしたけど、大丈夫か？」

大妖精「あ！こいしちゃんに黒夜さん、こんばんは」

ルーミア「こんばんはなのダー」

こいし「チルノちゃんに大妖精ちゃん、ルーミアちゃんも！みんなでどうしたの？」  
すると、こいしは3人の元へ行つて色々な事を話し始めて盛り上がっており、夜見は屈んで視線の高さをリグルに合わせた。

夜見「まあ、そんな事をする為に毒虫を使ったのは感心しないが：別にリグルさんは謝る必要は無いぞ？」

リグル「えっ？謝る必要が無いって、私は黒夜さんとこいしちゃんに「ドカーン」：え？」

リグルは夜見のいきなり「ドカーン」と言つて額に銃を撃つジェスチャーに戸惑つてみると、夜見は手を下ろして先程のジェスチャーの意図を話した。

夜見「覚えてないか？俺がリグルさんに弾幕を放つて、その弾幕が爆発したこと」

リグル「：ああ！そういえば確かに、弾幕を私に向けて放つてきた！あの時はわからなかつたけど、気絶した原因つて：」

夜見「そう、虫を追い払おうと爆発させるつもりで弾幕をリグルさんに誤つて放つた

からだ リグルさんは別に害を与えるつもりは無かったんだから、謝るなら俺の方だ」

リグル「い、いやいや！そもそも俺の発端は私なんだからお互い様だよ！」

そしてリグルは両手を横に振って悪かったのはお互い様だと伝えると、夜見はリグルの頭に優しく手を置いてゆつくりと撫で始めた。

夜見「そうか、悪かったのは俺なんだが：リグルさんは優しいんだな」

リグル「べ、別に優しくないよ 黒夜さんが悪くないとは言っていないだし：」

夜見「まあ、それは俺も同じだ お互い様：だからな」

夜見はそう言つて立ち上がると、その場で3人と楽しそうに話をしているこいしに声を掛けた。

夜見「こいしさん、もう帰るぞ！」

こいし「うん、わかったよお兄ちゃん！みんなじゃあね、また遊ぼうね♪」

すると、こいしは返事をしてチルノ達に別れの挨拶を言い夜見の下へ向かうと、チルノ達も別れの挨拶をしながら手を振って夜見とこいしを見送った。

そして、夜見とこいしは手を繋ぎながらしばらく歩いてみると、こいしが夜見にある事を探ねた。

こいし「ねえ、お兄ちゃん 私がチルノちゃん達と話し合ってた時、リグちゃんとの話をしてたの？」

夜見「別に、ただ毒虫は危ないぞって話をしてただけだ」

こいし「本当に：それだけ？」

夜見「こいしさん？」

こいしは夜見の返答を聞くと寂しそうな声で聞き返し、夜見はこいしの寂しそうな雰  
囲気を察し足を止めた。

夜見「どうした？何か気になることでもあったか？」

こいし「：お兄ちゃん、リグちゃんの頭撫でてなかつた？」

夜見「ん？ああ、確かに撫でたけど：それがどうした？」

こいし「：ううん、やっぱりなんでもない」

夜見はこいしにどうしたのかと聞いてみるが、こいしは視線を下げて首を横に振ると  
サードアイをゆつくりと閉ざそうとしていた。

だが、その瞬間に夜見は片膝についてこいしの頬に両手を添えると顔を上げさせた。

こいし「何、お兄ちゃん？」

夜見「はあ：いい加減に学習しろよ、いつになったら覚えるんだ？」

こいし「：お兄ちゃん？」

夜見「ん？ああ、気にしないでくれ」

こいしは夜見の言葉に不思議そうな顔を浮かべていたが、夜見はそれに気付くと微笑



んでこいしを優しく抱き締めた。

そして、しばらくすると夜見は顔を上げていたこいしの頬にそつとキスをした。

こいし「んっ、お兄ちゃん」

夜見「こいしさん、俺はこいしさん以外にこんなことはしないぞ？」

こいし「…私も、お兄ちゃんにしかしない」

すると、こいしは腕を伸ばして夜見の首に回して抱き付き、こいしも夜見の頬にキスをする。とサードアイが開き始めた。

こいし「ふふっ お兄ちゃん、だーい好きだよ」

夜見「俺も好きだ、こいしさん」

夜見がそう言うときこいしは嬉しそうに再度キスをし、サードアイから伸びる管のような部分を夜見に巻き付けながら言った。

こいし「お兄ちゃん、早く帰ろう？」

夜見「ああ、そうだな」

そして、夜見はこいしを抱きかかえて立ち上がると、少し明るくなっている遠くの空を見ながら地霊殿へと向かった。

夜見（そーいや、何か忘れてるような… まあ、気のせいかな）

さととり「黑夜さん、こいし？朝なのに姿が見当たらないなと思つたら、2人はどうして先程玄関から入つて来たんですか？」

夜見・こいし「…ご、ごめんなさい」

すると、地霊殿では明らかに怒つた様子のがさととりが満面の笑みを浮かべながら待つており、2人はさととりの前で正座をしながら説教を受けるが、それはまた別の話である。

## 第5 2話 明けない夜は本当に無いのか？

夜見（今は夏だつていうのに、夜中は寒く感じるな やつぱり、幻想郷には海が無いからか？）

夜見はこいしと一緒にさとりから怒られたあの日から、夜中の散歩は1時間だけと決めて懲りずに続けていた。

そんなことをしばらく続けていると季節は夏へ移り変わり、地上では草木が前より生い茂っていた。

夜見「それで？今日はどうするんだ、こいしさん？」

こいし「んゝつと、今日はお月様を眺めてたいな」

夜見「好きだな、月を眺めるの」

こいし「だって、今日は満月だよ ほら！」

そして、こいしも懲りずに夜見に付いて来ており、夜見とさとりは半ば付いて来るのを止めるのは諦めていた。

夜見「それじゃあ、今日は月でも眺めるか」

こいし「えへへ、やったあ♪」

夜見はこいしの指差した月を眺めながらそう言うと、その場に血でアウトドアチェアを作り出して寝つ転がるように座った。

すると、こいしは夜見の上に乗って夜見と重なるように寝つ転がった。

こいし「綺麗だね、お兄ちゃん お星様もキラキラしてる」

夜見「ああ、そうだな 本当に：綺麗だ」

夜見は夜空を眺めながら眩きこいしを優しく抱き締めると、こいしはサードアイから伸びる管のような部分を夜見に巻き付けた。

しばらく2人は夜空を眺めていたのだが、時間はあつという間に過ぎていくもので、地上に出てから1時間が経とうとしていた。

夜見「こいしさん、そろそろ帰るぞ」

こいし「えう？まだ寝たくなーい」

夜見「駄目だ、さとりに怒られるぞ？」

こいし「：わかった でも、その代わりにあのお話聞かせてよ」

夜見「またか？ここ最近毎日聞いてるだろ」

こいしの言っている「お話」つというのは、夜見が昔に聞いたことがあるという、あの少年の話のことである。

こいしはここ最近、寝る前や夜中の散歩の際にそのお話を毎日聞くようになったの

だ。

こいし「いいから聞かせて じゃないと、私寝ないから」

夜見「…わかったよ 今より少し前、ある所に…」

そして、夜見がお話を話し終えるとこいしは夜見を放して上から退いたので、夜見はゆつくりと立ち上がって血を空気中に分解した。

その直後、こいしは夜見の方に手を差し出して満面の笑みを浮かべた。

こいし「お兄ちゃん、手繋ごうよ♪」

夜見「ああ、わかったよ」

夜見は差し出されたこいしの手を握り、2人は地霊殿へ帰るために地底に続く穴の方へ向かうと、その穴はすぐに見つかった。

こいし「ねえ、お兄ちゃん 次の夜は湖の方まで行こうよ」

夜見「別に構わないが、歩くと湖に着いてすぐに帰るようになるぞ？」

こいし「そっか…あ！それなら、空を飛んで行こうよ！空のお散歩はまだしてないよ」

夜見「空の散歩か…それもいいかもな」

2人は楽しく次の散歩の話をしながら穴へ入ろうとしたのだが、夜見は穴に入る直前に振り向いて夜空に浮かぶ月を見ると足を止めた。

こいしは急に立ち止まった夜見を不思議に思って見上げると、夜見は夜空に浮かぶ月

を睨んでいた。

こいし「お兄ちゃん、どうしたの？」

夜見「ん？ああ、なんでもない さあ、早く帰るぞ」

こいしが声を掛けると夜見は月を睨むのをやめ、こいしの手を引いて足早に地霊殿に帰った。

そして、2人は地霊殿に着くと互いにおやすみの挨拶を交わし、それぞれ自分の部屋へ入った。

夜見（バレてない…よな？さてと…）

すると、夜見は寝る準備をせずに夜刀と白刀をベルトに挿し、仮面とマントをしつかりと被って静かに部屋を出た。

夜見（みんな…すまないな だが、あれを見過ご「…ねえ」

だが、夜見が部屋を出て廊下を少し歩くと後ろから声が聞こえ、後ろを振り返るとそこにはこいしが立っていた。

夜見「っ！こいしさん…」

こいし「ねえ、寝るんじゃないの？」

夜見「…仕事が残ってたって言ったら、信じるか？」

こいし「信じたいけど…また月を見た時に心を読んだの」

夜見「そうか…」

夜見はこいしに心を読まれていたことを知らされると黙り込んだが、こいしは夜見に心を読んだ時のことが本当か聞き始めた。

こいし「異変を解決しに行くんでしょ？無茶するかもしれないから、私達に黙って」

夜見「…ああ」

こいし「約束したよね？無茶は絶対にしないって」

夜見「…ああ、約束した」

こいし「駄目だよ、約束を破っちゃ」

夜見「…本当に、すまないと思ってる」

そこまで聞くとこいしはゆっくりと夜見に近付いて、夜見の目の前まで行くと夜見の腰に腕を回して抱き付いた。

てつきり怒られると思っていた夜見はこいしの行動に困惑していると、こいしはこんなことを言い出した。

こいし「お兄ちゃんが異変を解決しに行くなら、私も付いて行く」

夜見「…何を言ってるんだ、駄目に決まってるだろ」

こいし「嫌だ、絶対に付いて行く お兄ちゃんが無茶しないように、私が見張らないと」

夜見「俺は大切な家族を危ない目に合わせたくないんだ、わかってくれ」

夜見はどうかこいしを付いて来させないように説得しようとするが、こいしは頑なに説得に応じようとしなかった。

こいし「私だつて家族が傷付くのは嫌だ、だから今回は私も付いて行く」

夜見「…本当に危ない目に合うぞ、それでもいいのか？」

すると、夜見はこいしは絶対に折れないと悟つたのかこいしに確認を取ると、こいしは顔を上げて真剣な表情で答えた。

こいし「うん、それでもいいよ お兄ちゃんが傷付くのは、もう見たくないもん」

夜見「…わかった、今回は一緒に行こう ただし、危ない時は必ず引くつて約束してくれ」

こいし「うん、約束する 危ない時は必ず引く、お兄ちゃんもだからね」

そう言つてこいしは夜見に向かって小指を出すと、夜見も小指を出してこいしの小指に絡ませた。

夜見「ああ、わかった 今回こそ、絶対に守るよ」

こうして、夜見とこいしは指切りをすると念の為にさどりの部屋に置き手紙を残し、2人は異変を解決するために地上へ出た。

そして、地上に出るとこいしは夜見にまずはどうするのかを尋ねた。



こいし「それで、まずはどうするの？」

夜見「そうだな、最初は人里の安否を確認しよう 犯人を探すのはその後だ」

こいし「そっか、それじゃあ早く行こう！」

夜見「ああ、そうだな」

まず最初に、夜見とこいしは人里の安否を確かめることにすると、夜見は血の翼を背中に作り出して2人は手を繋いで空を飛び始めた。

だが、2人は人里がある方へ向かった筈なのに人里が見える気配がしなかった。

こいし「あれ？お兄ちゃん、人里が見当たらないよ？」

夜見「おかしい、いつもならもう見えてくる筈なんだが……」

こいし「ん？お兄ちゃん、あれじゃない？」

夜見「見つけたか？」

こいしは人里を見つけたのか声を出してある場所を指差したので、夜見はこいしの指差した場所を見てみるとそこには更地が広がっていた。

夜見「おかしいな……人里の近くにあんな場所なんてあったか？」

こいし「お兄ちゃん、一体どこを見てるの？ほら、あそこに人里があるじゃん」

夜見「こいしさんこそ、一体どこを見ているんだ？人里なんて見当たらないぞ」

こいし「……え？お兄ちゃん、冗談だよね？」

夜見「いや、真面目に言ってるぞ？」

夜見は一体どこを見ているんだと不思議に思っているのに対し、こいしは自分が見ている人里は何なのかと混乱し始めていた。

しかし、夜見にはこいしが嘘を言っている様子には見えないので、再度こいしが指差した更地をよく見てみるとある人物が目に入った。

夜見（あれは…慧音さん？あんな所で何をしているんだ？）

その人物とは、いつもは寺子屋で子供たちに勉強を教えている慧音だった。

そして、慧音はこんな夜中に更地で何をしていたかというところ、まるで何かを守るかのように警戒した様子で周りを見渡していた。

夜見（もしかして、これも異変の影響なのか？取り敢えず、慧音さんに話を聞いてみるか）

すると、夜見はすぐに更地には降りずに未だに困惑している様子でこいしに声を掛け、とある頼み事をお願いした。

夜見「こいしさん、無意識の方の能力で姿を隠しておいてくれないか？」

こいし「…え？う、うん…いいよ」

こいしは一瞬だけ反応が遅れたがサードアイを閉ざすと無意識の能力を使い他人に認識されないようになるが、相変わらず何故か夜見には効果が無かった。

そして、夜見はこいしの手を引いて慧音の目の前に降り立つと、慧音は特に驚かずに何故ここに夜見がいるのか不思議に思っている様子だった。

慧音「ん？ 黒夜じゃないか、こんな夜中にどうしたんだ？」

夜見「そういう慧音さんこそ、こんな場所で一体何をしてるんだ？」

夜見は慧音の質問に対して質問を返したのだが、慧音は少しムツとした表情になって夜見に軽く叱った。

慧音「こら、質問に質問で返すな！ 先に聞きたいことがあるのかもしれないが、質問をされたらまずは答えるのが先じゃないのか？」

すると、夜見は急に叱られたことに少し呆気を取られたが、少し考え込んでから口を開いた。

夜見「確かにそうだな、それはすまなかった それじゃあ慧音さんの質問に答えるが、俺は今回の異変で人里が大丈夫かどうか見に来たんだ」

慧音「そうか、それはご苦労だ だが少し残念だな、既に私が人里を守っているから黒夜が心配する必要はないぞ」

夜見「…えっと？ それじゃあ、何故こんな更地にいるんだ？」

慧音「ん、更地？…ああ、そういうことか」

夜見は慧音の言っていることと違う行動に疑問を抱いたのだが、慧音はその疑問を解

決させてくれる答えがわかっていた。

慧音「黒夜、人里はちゃんとここに存在してるぞ。ただ今は、私の「歴史を食べる」能力で隠しているがな」

夜見「そうか、慧音さんが人里を隠して守っていたのか。道理で人里が見当たらないわけだ」

そして、夜見の抱いた疑問は慧音のお陰で解消されたのだが、夜見はイマイチ慧音の能力の言葉の意味が理解できないでいた。

夜見「それにしても「歴史を食べる」能力か、よくわからない能力だな」

慧音「確かに名前だけ聞けばそう思うだろうな。私の「歴史を食べる」能力とはすなわち、出来事を無かったことにする能力なんだ」

すると、慧音は自身の能力について補足を入れてくれたので夜見は理解できたのだが、イマイチ理解できていない人物が1人いた。

それは、先程からずっと夜見の隣にいるこいしで、夜見が慧音の能力で人里が見えなくなっているのは理解できていた。

だが、慧音が能力で人里が見えなくしているのに、自分は何故見えているのかが理解できていなかったのだ。

夜見「つまり、慧音さんが人里が出来たという事実を無かったことにしたから、俺は

人里が見えなくなった。だけど、慧音さんみたいな人里が出来る前から生きている人は、人里が出来たという事実を知っているから能力の影響を受けずに見えているってことだな？」

すると、夜見は慧音の能力を急に説明口調で言い始め、慧音は夜見の行動に少し困惑していた。

慧音「あ、ああ、その通りだが…急にどうしたんだ？まるで、誰かに説明しているようにな…」

夜見「そうか？俺はただ、ちゃんと慧音さんの能力が理解できているのかを確かめたかっただけだが？」

慧音「そ、そうなのか？まあ、別に構わないが…」

慧音は少しおかしいとは思ったのだが納得できる内容だったので、夜見の急な説明口調のことは気にしないことにした。

夜見「さてと、それじゃあ人里が安全なのはわかったし、そろそろ異変の犯人を探しに行くか。じゃあな慧音さん、人里は任せたぞ」

そして、人里の安否を確認できた夜見は慧音に別れの挨拶をして翼を羽ばたかせるのと、慧音は宙に飛んだ夜見に向かって軽く手を振りながら見送った。

慧音「ああ、人里は任せろ。黒夜も気を付けるんだぞ」

夜見「わかつてる、今回は特にな」

最後に夜見はそう言い残してこいしと一緒に空へ飛んでいき、人里からある程度離れた所でこいしが夜見に声を掛けた。

こいし「…ねえ、お兄ちゃん」

夜見「ん？なんだ、こいしさん？」

こいし「さっきの慧音さんって人の能力を説明口調で言ったの、あれってわざとだよね？」

夜見「仮にそうだとして、こいしさんは俺をどうしたいんだ？」

こいし「…わざとだったんだね、何でそんなことしたの？」

こいしはいつの間にか開けていたサードアイを夜見の手に絡ませて、夜見の心の声を読みながら問い掛けた。

心を読んでいるこいしは既に答えを知っている筈なのだが、何故か答えを夜見の口から聞きたがっていた。

夜見「何でって、こいしさんがあまり理解できてなさそうだったからだ」

こいし「…そっか ありがとう、お兄ちゃん♪」

夜見「どういたしまして」

こいしは夜見の答えを聞くと少し間を空けてからお礼を言い、それに対して夜見は仮

面の中で微笑みながら返した。

その直後、こいしは思い出したかのように異変についてあることを問い掛けた。

こいし「あ！お兄ちゃん、そういうえば異変の犯人を探すって言うってたけど……見当はついているの？」

夜見「ああ、最初からついてる。これだけ大規模な異変だ、至る所からある人の妖力が漂つてる」

こいし「そうなんだ、それで犯人は一体誰なの？」

夜見「今回の異変の犯人はな……」

そして、夜見が今回の異変の犯人の名前を言おうとした瞬間、遠くで大きな音と共に虹色のビームが空に放たれたのが見えた。

こいし「お兄ちゃん、さっきのは何？」

夜見「……まずいな」

こいしは先程の虹色のビームは一体何なのか夜見に尋ねるが、夜見はそのビームには見覚えがあり顔をしかめていた。

こいし「お兄ちゃん、まずいつて？」

夜見「こいしさん、しつかり掴まれ！」

こいし「きやつ！お、お兄ちゃん!？」

すると、夜見は急にこいしを抱き寄せて翼の数を4枚に増やし、先程ビームが放たれた場所へ急いで向かった。

だが、ビームが放たれた場所へ向かっていると弾幕がちらほらと飛んできて、進むに連れて飛んでくる弾幕の数は徐々に増えていた。

こいし「お、お兄ちゃん、危ないよ！約束したでしょ!?!」

夜見「大丈夫だ、こいしさん！この弾幕はただの流れ弾、別に俺達を狙って飛んできている訳じゃない！」

こいし「そ、そうなの？でも危ないよ！お願いだから引いてよ、お兄ちゃん！」

夜見「チツ、流石に多いか？こいしさんが心配するだろうが…危ねえんだよ！」

夜見は舌打ちをすると手のひらに靈力を溜めて横に振るうと同時に溜めた靈力を放つと、前方の弾幕は夜見の能力によって一瞬にして掻き消された。

夜見「こいしさん、これなら大丈夫だろ？」

こいし「いや…駄目だよ、お兄ちゃん！また弾幕が飛んできて、これじゃあ何回消しても意味が無いよ！」

夜見「確かにそうだな、だったら…」

すると今度は、前方にドーム型の靈力の壁を作り出し、それを盾にして弾幕を消しながら突き進んだ。



夜見「ほら、こいしさん これなら危なくないし、安全だろ？」

こいし「う、うん、確かにこれなら安全だけど…」

夜見「こいしさん、心配か？」

こいし「えっ!? ううん、別に…大丈夫だよ！ ほら、早く行ないと駄目なんですよ？」

夜見「…ああ、急がないとな」

こいしは何か心配でもしているのか元気がない様子を一瞬見せたのだが、すぐに元気な様子に戻ったので夜見はこいしの大丈夫という言葉を信じることにした。

そして、しばらく進んでいくと弾幕の数は視界に収まらない程の数になっていたが、それと同時に弾幕の隙間を飛び交う4人の姿を捉えることができた。

夜見（やつぱり、魔理沙さんと…あれ、アリスさん？ 紫さんもいるのはわかっていたが…何故霊夢さんが一緒に？）

どうやら、夜見は魔理沙と紫がいることはわかっていたらしいが、その場に霊夢とアリスがいることは予想外だったようだ。

夜見（まあ、別にそれはどうでもいい 今最優先するべきなのは…）

すると、夜見は急にその場で止まって視線をこいしに向け、その視線に気付いたこいしは不思議に思い夜見に声を掛けた。

こいし「ん？ どうしたの、お兄ちゃん？」

夜見「すまないがこいしさん、もう一度無意識の方の能力で姿を隠してくれないか？」  
こいし「うん、いいよ」

夜見「それと、念の為にこれも被っておいてくれ」

こいし「えっ、それってお兄ちゃんのマントだよな？私が被るの？」

夜見「ああ、大きいけど我慢してくれ」

夜見はこいしに頼んで再度無意識の方の能力を使ってもらうと、更に自分が被っていたマントをこいしに被ってもらった。

こうして、こいしの姿がすっかりと見えないような状態にさせると、霊夢達がいる場所へ再び向かい始めた。

夜見（よく見たらアリスさんは魔理沙さんと、霊夢さんは紫さんと共闘しているのか  
てつきり紫さんが3人を相手にしてると思っていたが、流石に霊夢さんは気付いてる  
か）

霊夢「紫、貴女いつまで遊んでいる気？さっさと終わらせるわよ」

紫「そうね、そろそろ決着をつけましょうか このままじゃ、時間を無駄にするだけ  
だわ」

魔理沙「終わらせるだって？それはこっちの台詞だ！アリス、早く準備をするんだぜ  
！」

アリス「貴女に言われなくなつて、とつくに準備してゐるわよ！」

夜見（…なんて、呑気に思つてゐる場合じゃないか）

そして、4人はほぼ同時にスペルカードを取り出して宣言をしたのだが、4人のスペルカードは発動せず少しの間だけ沈黙が流れた。

魔理沙「あ、あれ？何で発動しないんだ？アリス、ちゃんと私は宣言したよな？」

アリス「え、ええ、確かにしたはずよ 私もちやんと宣言したはずなのに、どうして…」

霊夢「紫、これって…」

紫「そうね、予想より早く来たわ」

魔理沙とアリスはスペルカードが発動しないことに訳がわからないという様子だったが、それに対して霊夢と紫は冷静でスペルカードが発動しなかった理由を察していた。

夜見「魔理沙さんとアリスさん、すまないな 人の勝負にあまり水を差したくはないんだが、こうでもしないと話し合えないと思つてな」

魔理沙「なつ、夜見!?!お前…どういうつもりだ！」

アリス「水を差したくはないって…まさかこれは貴方が？」

夜見「ああ、俺の仕業だ 霊夢さんと紫さんはすぐに気付いたみたいだけどな」

夜見はそう言つて霊夢と紫の方を見たのだが、魔理沙は夜見の目の前に行くと言つて夜見の胸倉を片手で掴んで自分の方に視線を向かせた。

魔理沙「夜見、一体何のつもりだ？お前も霊夢みたいに、異変に加担する気なのか!？」

夜見「…別に、異変に加担する気は無いが？」

魔理沙「じゃあ何で邪魔をしたんだよ!？夜見ならもう気付いてるだろ!この「夜が終わらない異変」は、あのスキマ妖怪が起こしてることぐらい!」

夜見「邪魔をした理由はさっき言っただろ、話し合いのためだ。そして、紫さんが夜の時間を止めたことは知ってる」

そして、夜見が魔理沙の怒鳴りながらの質問に淡々と答えていると、魔理沙の胸倉を掴んでいる手は怒りでプルプルと震えていた。

魔理沙「夜見、ふざけるのもいい加減に…」

すると、魔理沙の怒りが限界に達したのか拳を握つて夜見を殴ろうとしたのだが、拳が振り下ろされる寸前にアリスが魔理沙を羽交い締めにした。

アリス「ちよつと落ち着きなさい、魔理沙!きつと何か考えがあるのよ、ここは黒夜の言う通り話し合つてみましょう!」

魔理沙「離せ、アリス!どうせ話し合つても異変を起こしたスキマ妖怪と、そいつに協力している霊夢をぶつ飛ばすだけだ!」

夜見「あのなあ、魔理沙さ「黙れ、夜見！お前もぶっ飛ばしてやるからな！」…はあ」  
夜見は何とか話し合って魔理沙の怒りを鎮めようとしたのだが、魔理沙は聞く耳を持たず話し合える状態じゃなかった。

夜見はどうか話し合える方法がないか色々と考えてみた結果、ある方法を思い付き紫と霊夢の元へ向かった。

紫「あら、どうしたのかしら？あの白黒の魔法使いと話し合うつもりじゃなかったの？」

霊夢「何をしてるのよ、さつきと話し合って解決してきてくれないかしら？」

夜見「無茶を言うな、さつきの様子を見てなかったのか？あんな状態じゃ話し合いたくても話し合えないだろ」

夜見が紫と霊夢の元に着くと2人は夜見を皮肉の言葉で迎え入れ、夜見は再度ため息をつきたくなっていた。

紫「冗談はさておき、貴方は白黒の魔法使いを一旦置いて、一体私達に何の用かしら？」

夜見「ああ、まず紫さんに念の為確認しておきたいんだが、境界を歪ませて夜の時間を止めた理由はあれで間違いはないな？」

夜見はそう言いながらあれを指差しながら問い掛けると、紫は夜見が指差したあれを

見て答えた。

紫「ええ、間違いないわ よく気付けたわね、褒めてあげるわ」

霊夢「本当によく気付けたわね、私には全く変わってないように見えるわよ？」

紫は夜見が夜の時間を止めた理由に気付いた事を褒めていると、霊夢も軽く便乗したのだが夜見はその後の霊夢の言葉に疑問を抱いた。

夜見「ん？霊夢さんは、あれがおかしいことに気付いたから紫さんに協力していたんじゃないのか？」

霊夢「はあ？そんなわけ無いでしょ 私は寝てた所をコイツに叩き起こされたのよ」

紫「人聞きが悪いわね、私は貴女に異変が起きることを教えただけじゃない」

霊夢「だからって文字通りに叩いて起こすとか、馬鹿なんじゃないの？」

紫「それは、貴女が私の話を聞いた上で2度寝しようとしたからじゃない 異変が起きてることを教えられて寝ようとする方が、よっぽど馬鹿だと思うのだけけど？」

夜見が疑問を抱いただけなのに話が進むと2人の間には険悪な雰囲気の流れ始めて、今度はこちらで弾幕ごっこが始まりそうになっていた。

夜見「おい、今は仲間割れしてる場合じゃないだろ そもそも2人は、異変を解決するために協力してるんだろ？」

紫「…それもそうね 今は協力関係にあるわけだし、無駄な争いは止めましょうか」

霊夢「確かにそうね、さっさと話を進めましょう 紫の話聞いたから、次は私の番かしら？」

夜見「ああ、話が早くて助かる」

しかし、すぐに夜見が間に入ると2人はあっさりと和解して話の続きをすることにした。

夜見「それで霊夢さんの方なんだが：実は話じゃなくて、あるお願いがあるんだ」

霊夢「ふうん、お願いねえ？ 言っておくけど、私にも出来ないことはあるわよ？」

夜見「別に無理難題を要求するつもりはない、魔理沙さんに紫さんと協力している理由を話して欲しいだけだ」

夜見は未だに羽交い締めになされている魔理沙を指差して霊夢にお願いをすると、霊夢は呆れて少しだけ間を空けてから夜見に問い掛けた。

霊夢「：はあ？ 何で私が魔理沙にそんなことを言わなきゃいけないのよ、アンタが魔理沙と話し合いをするって話だったんじゃないの？」

夜見「話し合いをするとは言ったが、別に俺が魔理沙さんと話し合いをするとは一言も言っていないぞ？」

霊夢の問い掛けに夜見はそう答えると紫はクスクスと笑い出し、紫も霊夢に魔理沙と話し合いをするように促し始めた。

紫「確かに夜見が弾幕ごっこに割って入った理由は、「話し合いのため」だったものね  
霊夢、貴女は夜見がせっかく作ってくれた話し合いの機会を無下にするのかしら？」  
すると、霊夢は大きなため息をついて面倒くさいといった様子だったが、紫が促した  
ことも相まってか夜見のお願いを聞き入れた。

霊夢「：わかったわよ、話し合つて来ればいいんでしょ？まあどうせ、話し合いなんてできないと思うけど」

夜見「その点については大丈夫だ、俺が話を聞いてくれるようにさせる」

霊夢「そう？まあ、邪魔しなければ何でもいいわ」

夜見「それじゃあ、行くか」

夜見がそう言うのと霊夢は魔理沙の元へ向かい、夜見も霊夢の後に続くように向かった。

魔理沙「クソツ、いい加減離せアリス！私はあの3人をぶつ飛ばさなきゃいけないだ！」

アリス「いい加減について、それはこっちの台詞よ！何で貴女はすぐにそうやって怒つて、人の話を聞こうとしないのよ！」

霊夢「ねえ、魔理「アリス、さっさと離せ！敵は今、目の前にいるんだぞー」」  
「アンタ、この状態を一体どうやって…」



そして、霊夢が魔理沙の元へ着くと魔理沙に話し掛けようとするが、魔理沙はまだ話し合いができるような状態ではなかった。

こんな状態からどうやって魔理沙と話せるようにするのか、霊夢が振り返って夜見に聞こうとした瞬間、先程まで聞こえていた魔理沙の声がピタリと止まった。

アリス「ま、魔理沙？急に黙ってどうしたのよ？」

魔理沙「…」

霊夢「…アンタ、魔理沙に一体何をしたのよ？話を聞ける状態どころか、冷や汗をかいているんだけど？」

しかし、先程まで威勢が良かった魔理沙が急に黙って何も言わなくなると、流石に霊夢とアリスは魔理沙の心配をして様子を見始めた。

すると、魔理沙は何かを喋ろうと口をパクパクとさせながら、冷や汗をダラダラとかいていた。

夜見「何をしたって、話を聞いてくれるようにさせるって言っただろ まあ、流石に少しやり過ぎたとは思うが」

霊夢「やり過ぎたって、こんな状態じゃ話を聞いているかどうかとも怪しいじゃない」

夜見「それもそうだな…おい、魔理沙さん？聞こえてるか？」

夜見は流石にやり過ぎたと反省をしながら魔理沙を心配して目の前で手を何回か振

ると、魔理沙はハツとしてアリスの羽交い締めから抜け出して後ろへ下がった。

魔理沙「はあ、はあ さ、さっきのは…なんだったんだぜ？」

霊夢「大丈夫…なのかしら？夜見、こんな状態だけど？」

夜見「大丈夫、この状態なら話を聞いてくれるはずだ 後は任せだが、くれぐれも弾幕ごっこにならないようにな」

霊夢「はいはい、わかつてるわよ ったく…」

霊夢は夜見に魔理沙と話すように促されると、面倒くさそうに魔理沙の前に行って声を掛けた。

霊夢「魔理沙、少しいいかしら？」

魔理沙「な、なんだよ？」

そして、声を掛けられた魔理沙はまだ少し怯えている様子で返事をする、霊夢は幣の先端で夜空に浮かぶ月を指した。

霊夢「あの月、見えるかしら？」

魔理沙「ああ、見えるぜ？月が一体どうしたんだ？」

霊夢「どうやら、あの月は偽物らしいのよ 紫がそう教えてくれたわ」

魔理沙「月が偽物…なのか？私には何の変哲もない満月に見えるぜ？」

霊夢「そうね、私もただの満月に見えるわ でも、紫がわざわざそんな嘘をつくと思

う？アイツは誰よりも幻想郷を大事に思っているのよ？」

魔理沙は霊夢にそう言われると確かに紫は幻想郷を大事に思っており、月が偽物だと嘘について夜が終わらない異変を起こす意味はないかと納得した。

魔理沙「じゃあ、霊夢があのおスキマ妖怪と協力してる理由って……」

霊夢「そう、「月が偽物と入れ替わった異変」を夜の内に解決するためよ。だから弾幕ごっこを仕掛けてきた時に言ったじゃない、ただ異変を起こしている訳じゃないって」

こうして、霊夢が魔理沙に紫と協力している理由を話し終えると、アリスが魔理沙の頭を後ろから軽く叩いた。

アリス「ほら魔理沙、だから言ったじゃない！何か理由があるみたいよって、それなのに貴女は人の話を聞かないで……」

魔理沙「何だ、私だけのせいにするのかアリス!?アリスだって弾幕ごっこを始めたなら、すぐに相手を倒すことしか考えてなかっただろ！」

アリス「何を言ってるのよ！私は貴女が2対1で負けそうだったなら助けてあげたんじゃない！」

夜見（…はあ、今度はこっちかよ）

夜見は今度は魔理沙とアリスが言い争い始めたことにため息をつきたくなくなっていると、いつの間にか近くに来ていた紫に声を掛けられた。

紫「話せたみたいね、霊夢が私に協力している理由」

夜見「ああ、一応な」

霊夢「それで、次はどうするのよ？魔理沙とアリスは異変解決に協力はしてくれそうだけど？」

紫「さあ？どうしようかしらね、夜見？」

夜見「そうだな、取りあえず…」

すると、夜見は魔理沙とアリスの間に入って手で距離を離して言い争いを制止させ、この場にいる全員に向けてある提案を出した。

夜見「異変を解決するために、作戦会議でもしようか」